

---

# Akashic Vision

MCFL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A k a s h i c V i s i o n

### 【Nコード】

N 5 5 5 6 0

### 【作者名】

M C F L

### 【あらすじ】

魔女との壮絶な闘いがあった。

未来を夢で見る力、Innocent Visionを持つ半場陸は勝利の代償にいつ目覚めるとも知れない眠りにつき、仲間達もソルシエールの力を失った。

ソルシエールの消滅により争いの火種もまた消失したかに思われた。だが、人の造り出せし魔剣ジュエルをもってヴァルキリーが再び恒久平和の理想を掲げて活動を開始する。

さらに時を同じくして新たな黒き異形の闇が姿を現した。

叶をリーダーに据えた” Innocent Vision” に迫る  
ヴァルキリーと未知の敵の脅威。

” Innocent Vision” は陸や仲間との絆を信じて戦  
いに身を投じていく。

第1話 新たなる始まり(前書き)

Innocent Visionの続編です。

## 第1話 新たなる始まり

暗い闇の中を漂っている。

上も下も左も右も前も後ろも時間の感覚さえ分からず、そもそも自分がここにいるのかすらわからない絶対の闇。

ここは終わった世界。

嘆くべき過去はなく

求めるべき未来はない。

ただ一つの記憶は黒い悪魔の跋扈する赤い世界。

怖い

怖い

こわい

コワイ

何もない世界で恐怖の感覚だけが意識を追い詰める。  
体を自覚できないのに闇がまとわりついてくる。

叫ぼうにも声が出ているのかもわからない。

そして意識さえも闇に吞まれて消え行く直前、光を見た気がした。

春は出会いと別れの季節。

3月末に別れを過ごした学生たちは4月の出会いの時期を迎えていた。

「3組か。」

「あ、俺もだ。」

「ざんねーん。」

そんな些細な一言一憂の音がクラス分けの貼られた掲示板の前で行われていた。

そこに登校してきた叶たちの姿があった。

「クラス分けか。みんな一緒だといいいけど。」

裕子を先頭に掲示板の前に移動して自分の名前を探していく。

叶も人を避けながら前に出ると

「ん、作倉か。」

「羽佐間先輩。」

同じく掲示板を見ていた由良と出くわした。

叶の顔が微妙な感じになる。

由良は出席日数や成績の関係で留年したからだ。

その張本人は叶のその表情の意味に気づいて笑む。

「気にするな。自業自得だからな。それに今日からは先輩じゃない。

」

「は、はい。羽佐間、さん？」

由良は特に何も言わず自分の名前を探しに行ってしまった。

それを見送っていた叶は

「あ、叶、4組で一緒だよ。」

「にやはは、まなちゃんもね。」

「なかなか高確率だね。」

喜ぶ裕子たちに呼ばれた。

戸惑っていた表情も笑顔に変わる。

「よかった。あ、でも八重花ちゃんは…」

「あつたわよ。明夜と同じ1組に。あと羽佐間由良もね。」

突然背後からの声に驚いて飛び上がりそうになった叶が振り返ると

大して興味も無さそうに八重花が立っていた。

「八重花ちゃん。」

叶が悲しそうな顔を見ると八重花はフツと笑った。

「そんな顔をする必要はないわ。クラス3つくらい会おうと思えば

いつでも会えるじゃない。」

「…うん。」

八重花は叶の肩を叩くとみんなとは離れていってしまった。

隣に並んだ真奈美も心配そうにその姿を見送る。

「八重花は元気ないね。」

「うん。」

2人はもう一度掲示板の名前を見る。

その中に半場陸の名前はなかった。

「叶、やっぱりまだ半場くんはよくならないの？」

クラスに向かいながら裕子が尋ねる。

陸は今、杏葉総合病院にいた。

一応家族が看病しているらしいがそれ以外では一番叶が通っていた。ここ最近毎日のように顔を出していたため病院の看護師の間ではすっかり彼女扱いされている。

「外傷はないから眠っている状態なんだって。でもいつ覚めるのかわからないって。」

ファブレを倒したあの日以来、陸はいつ覚めるともしれない眠りの中にいた。

何日も何カ月も、夢の中にいる。

「りくりくの病気、悪化しちゃったのかな？」

久美の意見は正しかった。

陸は Innocent Vision の力を限界まで引き出した代償として夢と現実の狭間に取り込まれてしまったからだ。

普通の眠りとは違い、いつ目覚めるかもわからない長い夢。

「早く良くなるといいね。」

だけど叶と真奈美は真実を語れない。

世界を救った英雄を化け物扱いさせたり、その万能とも言える力を心無い人間に利用させるわけにはいかないから。

「そうだね。」

だから今は同意する以外、何もできなかった。

「やっと来たのか、お前たち。」

教室に入るといきなり不敵な笑みを浮かべて仁王立ちした男が出迎

えた。

「あ、同じクラスだったんだ、雅人くん。」

一応恋人である裕子が真つ先に反応したが中身は結構素っ気ない。

「リアクション薄いな。俺は早く来ないか待ってたっていうのに。」

「友達、いないの?」

「うるせー!」

裕子と芳賀の漫才のような掛け合いに叶たちも顔を綻ばせた。

「しっかし東條以外は1年の時と同じだな。あとは陸がいれば言うことなかったんだが。」

「にはは、目が覚めてもりくりくは1年生だよ。」

そして出席日数不足で陸は進級できていなかったりする。

微妙な空気を払うように芳賀が手を叩いた。

「とにかく、今年もよろしくな。」

「ほらー、席につけ。」

ちょうど担任が入ってきたため指定された座席に散っていく面々。  
こうして2年4組が始まった。

「…。」

「…。」

「…。」

「…。」

2年1組は静寂に包まれていた。

隣のクラスからは多少なりと騒がしい声が聞こえてくるのに1組は音を立てるのが罪悪のような雰囲気だった。

クラスの生徒の大半は何かに怯えた様子で俯いていて担任すら泣きそうな顔をしている。

その元凶は由良の存在だが八重花と明夜もこの状況を作り出した原因の一端を担っていた。

「東條八重花よ。狙ってる男がいるから他の男子は極力構わないで。」



八重花が自己紹介でクラスメイトの度肝を抜き

「羽佐間由良だ。よろしく。」

由良が無意味にクラスを震撼させ

「… 柚木明夜。」

明夜が短い単語によくわからない存在感を滲ませたことですっかりクラスのスリートップにされてしまったのだ。

「…。」

「…。」

「…。」

恐る恐る進行させる担任の話を3人はまるで聞いていない。

つまらなそうにしている3人が考えていたのは陸のことだった。

入学式と始業式が午前中で終わった放課後。

吉葉高校の一室、花鳳撫子が在学中に作り上げた乙女の乙女による乙女のための集い、乙女会の会室には5人の乙女たちが集まっていた。

テーブルの中央には現乙女会会長の等々力良子、その右隣には実質的な業務を行う裏ボス海原葵衣が座っていて、その向かいには海原緑里、神峰美保、下沢悠莉が座っていた。

葵衣の淹れた紅茶で一服すると皆の視線が良子に集まった。

「新学年になったわけですが、ヴァルキリーの方針はどんな感じなんでしょうか、良子会長？」

美保が冗談めかして尋ねると案の定何も考えていなかった良子は固まった。

「あー、それは…ええと…」

その視線が隣の葵衣に向く。

「お嬢様から乙女会の活動方針が送られてきていますので報告させていただきます。まずはじめに…」

当然のように進行する会議。

これを見れば誰だろうと良子が張りばて会長であるとわかるはずだ。良子も含めた全員が撫子からの活動方針に耳を傾ける。

「乙女会はあくまで校内の女子の模範となるよう心掛けて下さい。

…最後に、第二次ジュエル計画についてです。」

「!?!」

葵衣が最後に上げた案件で皆の態度が硬化した。

第二次ジュエル計画。

それは全くの初耳だった。

「ジュエルも力を失ったんじゃないの？」

「いえ。ヴァルキリーとしての活動が休止していたため”ヴァルキリーのために”の条件が適合しなかっただけでジュエルの力は失われていないことを確認しています。」

いろいろな意味で驚きを隠せない面々は気持ちを整理しているのか無言だった。

ジュエル…人造ソルシエルは魔女ファブレからもたらされたものではなく撫子がソルシエルの力を解析して造り上げたものである。一時期は壱葉を中心に100を越えるジュエルを従え、さらにはジュエルのコアとなるジュエリアの全国販売により100万の軍勢を成す直前まで行ったが、クリスマスパーティーでの”Innocent Vision”への敗退とジェムのジュエリア襲撃によって配備人員の大半と未来の人員を失い頓挫したかに見えた。

「花鳳様は強かな方ですね。裏で再量産化を進めていたと。」

悠莉の皮肉なのか褒め言葉なのか分かりづらい言葉を褒め言葉として受け取って葵衣は頷く。

「はい。前回の反省点を生かし、安定供給が望めるようになるまでジュエリアとしての公表を控えるようになります。」

撫子が花鳳グループのアクセサリー部門を本格的にプロデュースし始めたことでWVeの売れ行きは着実に増加している。

そこにジュエリアだと明かさずに商品の装飾の1つとして仕込み、売っていくことでジュエリアを展開していく計画になっていた。

「でもさ、あたしたちのソルシエールが無くなったから今までみたいにはいかないんじゃないかな？」

お飾りの良子会長がもつともらしい意見を出した。

確かにこれまではジュエルの上位に位置するソルシエールを持つヴアルキリーが隊長として指示を出していたが力の無くなった現状では不満を抱くものも出てくるだろう。

「それに関しましては検討中ですが暫くは皆様にもジュエルを使って指揮をしていただくことになります。」

葵衣は一度席を立つと部屋の角に置かれていた桐の箱を持って戻ってきた。

テーブルの真ん中で蓋を開ければ中には無色の正八面体の宝石が5個入っていた。

「先行生産分です。量産品よりも性能を上げてありますので扱いは難しいでしょうが皆様なら問題ありません。」

色のない宝石なのに良子たちには力を誘う妖しくも魅惑的な色に輝いて見えた。

4人が知らず口許に笑みを浮かべながらジュエルを手取る。

「葵衣先輩。これはスマラグドと同じようなグラマリー使えます？」

「類似した系統をご用意しましたが…それは直接確かめていただいた方がよろしいでしょう。」

すでに言葉は必要ないと皆の表情から判断した葵衣が最後に残った宝石を手を取った。

全員が頷き合い

「ジュエル。」

ヴアルハラが久方ぶりに朱色の輝きに染まった。

叶と八重花は放課後の商店街を並んで歩いていた。

裕子発案で急遽「新学期記念パーティー」をやることになり2人は買い出しの当番になったのだ。

「お菓子とジュースは買ったね。あとは…」

「じゃんけんに負けたから仕方がないけど、割りと重労働よね。」  
因みに負け組2人が買い出しで3位は場所の提供ということで会場は真奈美の家となっている。

明夜と由良も誘おうとしたが捕まらず、芳賀は裕子が連絡したのかどうか不明である。

「…あの2人の関係がよくわからないわ。裕子は釣った魚に餌をやらないタイプかしら？」

少なくとも学校で彼氏彼女らしい姿を見たことはない。

むしろ裕子と久美の仲の良さがちよつと異常で時々ヤバイんじゃないかと思うこともあった。

「…。」

あの赤い世界でデーモンと化した久美の願いを知る叶としては何も言えない。

みんな忘れていようだが心の奥底ではあの時の気持ちを知っているのかもしれない。

「大丈夫だよ。みんな仲よしだし。」

ジュエルやソルシエルが無くなって誰かと争う機会がなくなつて数カ月、町も人も元通りと言えるほどにまで回復していた。

これからもこの平和が続けばいいと願う。

「…そうね。」

八重花は無理矢理納得したように頷いて話を切り上げた。

その後買い出しを終えて真奈美の家に到着すると何故かすでに裕子が出来上がったように騒いでいた。

八重花がそのままドアを閉めて帰ろうとするのを叶がどうにか押し留め、近所迷惑に発展するレベルまで裕子主体の狂乱の宴は日暮れまで続いたのだった。

そして帰り道、暴走した裕子はガス欠を起こしたみたいグツタリ

としたまま久美に寄生しながら帰っていった。

「年度始めからいきなり今年が不安になったわ。」

「あはは…」

叶も弁解する言葉は持っていないらしく苦笑いを浮かべるだけだった。

赤く染まる町、そして空の向こうからやって来る闇はあの日を連想させる光景だった。

「これが私たちの勝ち取った平和。…りくだけを置き去りにして。」

「…」

八重花も叶も、そればかりではなく”Innocent Vision”の面々、ヴァルキリーのソーサリスでさえあの時もつと力があればこんな結末を迎えることは無かったと悔やんでいた。

だが今はその力すらも失って行き場のない感情をもて余している。

「大丈夫、陸君は目を覚ますよ。」

「叶は変わらないわね。」

叶の信じる姿に苦笑して八重花は顔を前に向け、訝るように歪めて足を止めた。

「どうしたの？」

「人氣が、無くなってるわ。」

「え？」

周囲を見回すと夕飯の買い物時だと言うのに買い物客がいなかった。それどころか店主の姿もない。

「さつきまで人がいっぱいいたのに…何かイベントでもあったのかな？」

「何を暢気な事を言ってるの。…でもまあ、私たちにとってはイベントみたいね。良くない意味でのね。」

ピリピリと肌を刺すような感覚に八重花は覚えがあった。

だがそれは3ヶ月前のことだし何よりあり得ないと表面上は平静を保ちながら内心困惑していた。

「なんか怖い。早く帰ろう？」

「…その方がいいわね。」

八重花は原因の究明よりも安全を取った。  
帰路に続く道を早足で歩く。

「あ…」

叶に続き、八重花の足も止まる。

「そんな、…ジエム？」

東に続く道の先、夜の闇が訪れる方角に闇色の影が立っていた。

## 第2話 そんなバカな

道の先に立つ人型の闇。

空の向こうから迫る夜の色とは混ざり合わない漆黒の色をした存在は道を塞ぐように佇んでいた。

叶と八重花は身を寄せて小声で話す。

「どうしてジエムがここにいるのかな？ 魔女はもう倒したのに。」

「倒したのは間違いないわ。でも私たちの目の前に”非日常”の存在が現れたことは事実よ。」

八重花の冷静さを見習うべく叶は深呼吸をする。

葉が落ち着いたのを見計らって八重花が話を進めた。

「選択肢としては2つ。私が戦力にならない以上気付かれないように逃げるか、葉が戦うか……」

「逃げよう、八重花ちゃん。」

即答だった。

強くなったと思っていた認識を改めさせられる行いに八重花が呆れた目を向け、葉が涙目になる。

「叶……」

「だってえ、オリピンは戦い向きじゃないもん。」

葉は純粹な癒しの加護を持つセイントであり、そのシンボル・オリピンは治癒や蘇生の奇蹟を扱える。

ただし葉の優しい性格を反映しているため魔を絶つ力はあっても戦闘には向かないのである。

「真奈美に応援を頼もうかしら？ スピネルは戦闘型よね。」

一方葉の力をジュエルを器として宿すことで聖なる剣となったスピネルはジュエル・アルミナの影響を受けて補助ではなく戦闘特化型だった。

こと戦闘に関して言えば叶より頼りになる。

（尤も、隔絶された現状で外部と連絡が取れるのかわからないけど。

「でもソルシエールが消えてからスピネルが重くなっただけで言うてたよ。」

内心の否定要素に加えて真奈美の戦力減退のお知らせ。

義足を刃に持つ真奈美は蹴りがメインとなるため必然的にアクロバティックな動きが要求される。

これまではジュエルの身体能力向上でとんでもない脚力を誇っていたが不具合が出たらしい。

もしくは戦闘から離れたせいで順応性と真奈美の基礎体力が落ちただけか。

「仕方がないわね。興味はあるけど好奇心で猫みたいに死ぬわけにはいかないもの。」

「猫？シユレディンガー？」

「…。」

好奇心は猫をも殺すに思い至らなかつたらしいが猫からシユレディンガーを連想するのはいかなものかと八重花は思う。

尤も悪いのは叶ではなく作倉家の飼い猫にその名前を付けた作倉父だ。

あまり面識はないがちよつと歪んだ人物なんじゃなかるうかと八重花は疑っている。

「まあ、いいから。逃げるわよ。」

「うん。」

2人は看板に隠れるように路地裏に歩み出た。

普段は通らない道ではあるが地元なので少し裏に入っただけくらいでは迷わない。

飲み屋などが並ぶ通りにも人の姿はなく夜を告げるカラスの鳴き声もないため町は死んだように静まりかえっていた。

「…これは、普通じゃないわね。」

叶の手を引くようにして歩いていった八重花が小さく舌打ちした。



さつき見た人型の影が見間違いで町のみんまもイベントで出払って  
いて留守だったなどと間抜けな楽観はしていなかったが相手の狙い  
はあくまで不特定な誰かであり、自分達は気付かれないまま範囲外  
に逃げられればいいと願ってはいた。

だが実際は叶と八重花以外の人影が無く、この裏路地にしたって八  
重花の脳内地図では50メートル程度で次の十字路に到着するはず  
だった。

それが無限に続いてるように見える。

「八重花ちゃん？」

「どうやらイベント戦闘に逃げるコマンドは使えないみたいね。よ  
くよく考えれば結構歩いてるけど一向に空の色が変わってないわ。

前にデーモンが使っていた結界のようね。」

「それじゃあ、戦うしかないの？」

叶の表情が曇る。

今、八重花はソルシールを失っていて戦えるのは叶だけ。

逃げ道を塞がれた以上八重花を守るために戦えるのは叶だけだった。

「シンボルは魔女の力にアドバンテージがある。うまく戦えば勝機  
はあるはずよ。りくほどじゃないけど私が指示を出すわ。」

八重花も逃げるのではなく一緒に戦ってくれと聞いて叶の表情も  
少し和らいだ。

「わかったよ。八重花ちゃんを守るために戦うね。」

繋いだ手をもう一度強く握り合って2人は人型の闇が待つ商店街に  
戻っていった。

人型の闇は初めて見たときと同じように道の中央に佇んでいた。

瞳を閉ざしているのか顔は能面のようにのっぺりしていてどんな感  
情も読み取れない。

そもそも感情があるのかもわからない。

「どのくらいの距離でエンカウントするかわからないわ。武器を準  
備して。」

「うん、うん。オリビン、お願い。」

葉が祈るように胸の前で両手を握ると手の間から灯火の光が盛れ出し、それが短剣の姿を形作った。

葉が右手にオリビンを握った瞬間、それまで真っ黒だった人型の顔にカツと紅色の目が開いた。

「ヒッ！」

ソルシエールよりも禍々しく赤い紅色に葉が小さく悲鳴をあげた。

(ジエムでも、デーモンでもない?)

ファブレからソルシエールを与えられ、ジエムやデーモンと戦ってきた八重花は目の前の存在がそのどちらとも違う存在のように感じた。

具体的にどこが違うかと聞かれると目の色としか言えないが漠然とした雰囲気違和感を覚えていた。

「オーツ！」

「喋った!?!」

「雄叫びくらいジエムもあげたわ。オリビンはリーチが短いから間に気を付けなさい。入り込みすぎると反撃を受けるわ。」

「うん。」

そして葉は構えを取る。

そして、八重花より後ろに下がった。

「やる気あるの?」

「ごめんなさいい!グリグリはやめてえ。」

お仕置きで八重花が葉の頭にウメボシを食らわせる。

涙目になりながらようやく葉は敵の前に立った。

「...」

しかし実際に敵と対した葉は臆することなく構えを取った。

後がないのが理由の1つだが黒原や久美といった知り合いがデーモン化するという割とヘビーな相手やラスボスである魔女ファブレとの戦いを生き抜いてきたため度胸はついていた。

「オーツ！」

「きゃあ！」

…尤も力の浄化と回復しかしていなかったため戦闘技能は素人だったが。

物凄く隙だらけな大振りの攻撃を叶は悲鳴を上げながら避けるだけで反撃しない。

「違うわ！そこは横に避けて反撃…ああ、それは後ろに下がって。

ほら、今、前。ああ…」

八重花の指示は適切だったが叶にそれをこなせるだけの技量がなかった。

「そんなこと言われたって、そんな、色々言われ、ても、無理だよ。」

何だかんだできっちり避けてはいるがドッジボールでボールから逃げ惑っているようなものだから反撃に転じられるわけもない。

（私に武器があればあんな奴に遅れを取ることはないのに。…ジオード。）

心の中で共に戦った剣を呼ぶが応答はない。

結局指示もうまく行かず、八重花はすべてを叶に任せなければならなくて歯痒い思いを抱いた。

「ふう、ふう。そろそろ本気出しちゃうよ。」

低レベルな泥仕合を見せられた八重花としてはそれなら最初から出せと言いたいところだったが我慢した。

叶は右手のオリビンをギュッと握りしめると

「たあーっ！」

真っ正面から突撃した。

「…間合いに気を付ける気ないわね。」

もはや怒りを通り越して呆れる八重花の前で腕を振り上げた人型に向かつて叶が突っ込んでいく。

このままではオリビンが刺さるよりも早く叶が挽き肉になるのが先だ。

「本当に世話の焼ける。」

八重花は足元に転がっていた小石を掴み、投げつけた。

「アタツ！」

「よし。」

狙い通り、叶の後頭部にぶつけることに成功、これで足が止まれば危機は脱する。

だが展開は思わぬ方向に転がった。

突然頭を小突かれた叶はこれまでの疲れもあつて踏ん張れず前に倒れていく。

それに抗おうと手を振った結果オリビンがすっぽ抜けて、攻撃のタイミングを外された人型の闇は知能が低いのか倒れた叶に詰め寄ろうとし、そして

サクッ

オリビンが人型の額に突き刺さった。

「オオオーツ！」

オリビンの光は魔を払う力を持つ。

それを直接体内に差し込まれた人型の闇は断末魔の叫びを上げて消滅していった。

八重花にはそれがこう聞こえたという。

「そんなバカな。」

と。

ペタリと地面に座り込んだ叶に八重花が寄り添うと一瞬の違和感の後、人の活気に溢れた商店街が戻ってきた。

「…終わった？」

「そうみたいね。」

若干人の目を集め始めたので八重花が手を引き上げて叶を立たせる。「どうやら他の人が消えたんじゃないやなく私たちが別の空間に飛ばされ

たようね。」

それは人型の闇が叶たちだと知った上で引き込んだことを暗に示していたが

「他の人たちがなんともなくてよかった。」

叶はそんな思惑には気付く様子もなくただ他人の無事を喜んでいた。これが慈愛の心を持つ”セイント”、そしてただの恋する女の子の作倉叶だった。

「いっぱい動いたから疲れたし汗かいちゃった。早く帰ってお風呂入りたい。」

ぐったりとしながら帰途に着こうとする叶を八重花が襟首を掴んで止めた。

「ええと、八重花ちゃん？」

疲れているからこそ叶は鋭敏に面倒なことを察知した。

だけど掴まれていて逃げられない。

八重花は左手で叶を捕まえながら右手でメールを打っていた。

「Innocent Vision”集合せよ。」

そして太宮神社に合流した”Innocent Vision”と半場陸友の会のメンバーは社務所で八重花の報告を聞いた。

「ジエムやデーモンではない新しい魔の者ですか。」

太宮院琴は急遽会議場所として指名されたのにちゃんと全員分の茶菓子を用意して待っていた。

この辺りの未来予知は陸で慣れている面々はそういうものとして受け入れていた。

「琴先輩は何か知りませんか？」

ファブレとの戦いが終わっても叶と琴の関係は良好でちよくちよく遊びに来ている。

気軽に尋ねる叶だが琴は困ったように首を傾げるだけだった。

「近い将来に波乱ありといった内容は見受けられますがそれが此度

の怪物と合致するかはなんとも。」

「俺たちのソルシエールが使えないってのに新しい敵が現れるなんてついてないな。」

「あたしのスピネルも調子悪いから前みたいに大群で襲ってこられたら厄介ですね。」

真奈美は今は義足の左足を撫でて力なく笑う。

「そもそもフアブレが消えたのにジエムが出てくることがおかしい。」

明夜も今回の襲撃に疑問を抱いているようだった。

ジエム、あるいは別の何かがフアブレ以外の誰かによって使役されたのだとしたら新たな敵が出現した可能性が出てくる。

「ヴァルキリーが何か良からぬことを企んでいる可能性もあるがな。」

由良が片膝を立てて座りながら顔をしかめる。

「あれがジュエルだったっていうの？」

八重花は同学年になったことを機に由良への敬語をやめた。

八重花も”Innocent Vision”の仲間になった訳だし何より”ライバル”とは対等であろうという意気込みのためだ。

由良も仲間の間での遠慮を嫌う質なので争いはなかった。

「お前たちが見たことを疑ってるわけじゃない。ただヴァルキリーの奴らが恒久平和とかいう大層な野望を諦めたとは思えないからな。また良からぬことを企んでるに決まってる。」

もともと由良はヴァルキリーの掲げる理想に懐疑的なので余計に意見がきつくなる。

フアブレとの戦いときは率先して共闘していたとは思えない毛嫌いっぷりである。

「ヴァルキリー…乙女会ですか。花鳳撫子様が卒業されて今は等々力良子さんが乙女会の会長になりましたね。」

「あれはただの張りぼてだ。実質的には花鳳と繋がりのある海原妹が仕切ってる。ヴァルキリーは何も変わっちゃいないんだ。」

酷い言われようだが周知の事実なので問題ない。

というか外部である由良ですらその情報を簡単に見抜けるのだから誰が見ても良子が張りぼてだとわかるというものである。

琴は何かを考え込むような顔をしていたが叶が目を向けると何でもないと首を横に振った。

「今のところ作倉と真奈美しか戦力がないのは痛いがヴァルキリーやその新しい敵をのさばらしておくわけにもいかない。俺たちも少し調べてみるか。」

「あんパンで張り込み。」

明夜が変な方向にやる気を出しているのを苦笑はするが誰からも反対意見は出ない。

「だが今後も”Innocent Vision”が活動するなら暫定的にリーダーを決めないとな。」

「りくが戻るまで”Innocent Vision”を守る頭は確かに必要ね。」

この件にも全員異論はなく、叶はやっぱり同学年とはいえ歳上でリーダーシップのある由良が適任だと考えていた。

「そういうわけだ。よろしくな、作倉。」

「……………はい？」

叶は何で肩を叩かれたのか理解できず惚けた声を出した。

誰からも文句は上がらず、むしろ分かりきっていたかのように叶を見つめている。

琴が巫女装束の袖で口許を隠しながらクスクスと笑った。

「おめでとございます、叶さん。」

「ええー！ー！ー！」

太宮神社に叶の叫びが木霊した。

### 第3話 もう一人の予言者

叶が”Innocent Vision”のリーダーに半ば押しきられる形で就任し、ささやかなお祝いをした騒ぎもようやく終わり、琴は1人になってお茶を飲んでいた。

「Innocent Vision」が再び動き始めましたね。皆さんが力を合わせれば様々な方々の行く末に見られる暗雲を打ち払うものとなることでしょう。」

ズズズとお茶を啜る琴が時計に目を向けるともうすぐ9時を迎えようとしていた。

「そうでした。今日はお客様が”太宮様”の予言を求めに来るのでした。」

琴は立ち上がり本殿へと向かう。普段の客はどんなに偉い地位の人でも、それこそ総理大臣ですら時間を作って昼間に予約を取って訪ねてくる。

だが今日の客はこのような時間にしか空き時間を作ることができないほど多忙なのだと言う。

普通なら一昨日来やがれではないが丁重にお断りしているところだが今回の相手は知らないわけではなかった。なので特別に取り次ぐことにした。

奥の間で準備をし、境内に足を運ぶとちょうど鳥居の前に1台の黒塗りの高級車が横付けされ、運転手によって開けられたドアの向こうからスーツ姿の女性が降りてきた。

直接の面識はなくとも琴には聞き慣れた名前の人物を丁寧なお辞儀で迎える。

「ようこそお出でくださいました。花鳳撫子様ですね？」

スーツ姿の女性、花鳳撫子は微笑みを浮かべて頷いた。



「本日は夜分遅くに申し訳ありません。業務の関係上、会社を抜ける機会がないもので。」

車を送り出し、奥の間に向かう途中で撫子は琴に謝罪した。

「確かに遅い時間ですね。」

ちよつとした嫌味に撫子は顔を俯かせるが琴はすぐに優しく微笑みかける。

「ですが入社されたばかりで大きな事業を成功に導いたと噂で聞き及んでいます。ご多忙なのは存じておりますのでお気になさらずに。」

「貴女は吉葉高校の方ですか？」

目をぱちくりさせた撫子の問いに琴は頷く。

「本日3年生に進級しました太宮院琴と申します。今後ともご贔負によりしくお願いします。」

「これはご丁寧ありがとうございます。」

返礼をした後、撫子は困ったように笑う。

「しかし、父に聞かされても半信半疑なのですが、本当に未来を見通されるのですか？」

（未来視が実在することをご存知でしょう。）

「太宮様”の指し示すものは定められた”結果”ではなく、そこに至るまでの”過程”の標です。未来は木の枝のように分岐していくものですのでくれぐれも過信されませんようお願いします。」

琴は内心の素直な感想は口に出さず事務的な説明をする。

Innocent Visionとは異なる選ばれやすい未来への道を見る力、それが”太宮様”のト占だった。

「そう、なのですか？」

「ご自身の目で確かめられるのがよろしいでしょう。」

琴は足を止めると振り返った。

そこは奥の間だった。

「それでは”太宮様”がいらっしゃいますがト占の最中は言葉を発

することないようお願いします。」

いつも通りの注意事項を述べて琴は退室していく。  
残された琴は室内を見回す。

（この部屋自体に魔術的な仕掛けが施されているわけではないようですね。未来視はこれから来られるという”太宮様”の力ということでしょうか？）

撫子は花鳳グループの代表として、将来的にそのトップの座を継ぐ者として政界財界でも一目置かれる知る人ぞ知る占い師の存在を知り、その力を見せてもらうためにやって来た。

聞けば撫子の父も撫子にアクセサリー部門を任せる時に直々に出向いて”太宮様”の意見を聞きに来たという。

今日は今後の撫子の向かう指針を与えてもらうことになっている。

「…。」

撫子は人が近付いてくる気配に意識を襖の外に向けた。

ほとんど音もなく開かれた襖の向こうからは全身を白一色の装束に身を纏った”太宮様”が現れた。

「…。」

わずかに驚きの声を漏らしそうになるのを撫子は押さえ込んだ。

”太宮様”は目の前に座ると硯で墨を擦り、筆を取って上質な和紙に文字を書き連ねていく。

それはまるで予め定められた事柄を書いていくように淀みなく筆は進み、程なくしてその動きが止まった。

撫子の前にひだ折りにされた占いの結果が置かれ、”太宮様”は礼をすると言も発することなく部屋を後にした。

残された撫子は目の前に置かれた結果に手を伸ばす。

「己が力を過信するなかれ。適所に人を使え。」

新しき事を始めるならば準備は過剰なほどが良い。…。」

かなりの達筆で古文体だが撫子は部屋の明かりを頼りに読み進めていく。

確かに今は春の新規テーマに着手する準備を進めているのだが、や

はり葵衣のような有能という言葉にお釣りがくるほどの人材がいるわけもなくつい自分で仕事を片付けていまいがちだった。空き時間が作れないのもその辺りに起因する。

「よい結果は得られましたか？」

撫子が熱心に読んでいるとお茶を淹れた琴が入ってきた。

「何も説明していないというのに的確な指摘です。肝に命じさせていただきました。」

琴はお茶を撫子の前に置いて向かいに座る。

「それは何よりです。しかし先ほども申し上げましたが”太宮様”の卜占はあくまで可能性でしかありません。最終的な判断はご自身でなさってください。」

撫子はもう一度占いの結果に目を通して紙を懐にしまった。出されたお茶を飲んで一息つく。

「未来視ですか。このような力があれば社会での成功など容易いでしょう。なぜ一部の方々しか”太宮様”の存在をご存知ないのですか？」

撫子は”太宮様”に聞けないから琴に尋ねた。

琴はお茶を一口飲んで湯飲みを置く。

「未来視を悪用すれば高い確率でギャンブルで成功することも可能ですし”太宮様”御自身が社会を陰から操ることも出来るでしょう。ですが、だからこそ”太宮様”は世俗を離れ、個人ではなく世界を導く標としてのみ働く存在となるよう誓約されているのです。」

「なるほど。大変ためになりました。またいずれお邪魔することもあると思いますがよろしくお願いします。」

「いえ。貴女に幸多き未来があることを願っています。」  
互いにお辞儀をし、今日の占いは終わりを迎えた。

玄関に向かう間も撫子は結果を反芻しているのか無言で、迎えに来た車に乗り込んで帰っていった。

そのテールランプが見えなくなるまで見送った琴は一つため息を溢した。

「あれが花鳳撫子、ヴァルキリーの実質的な長ですか。仕事とはいえ”Innocent Vision”の敵と話をしているのは複雑な気分ですが、陸さんや叶さんなら受け入れてくださいますよね？」

信頼する2人の友人にして”Innocent Vision”のリーダーを思い浮かべて琴は微笑みながら戻っていった。

撫子は車に乗り込むとすぐに携帯を操作して耳に当てた。

ブルル、

「葵衣。」

「お疲れさまです、お嬢様。いかがなさいましたか？」  
ワンコール以内に繋がった葵衣はわずかに不思議そうな声をかけてきた。

職についてからは基本的に私用であつても葵衣に連絡を取ることが少なく、家にいる時に直接伝えることが殆んどだったからだ。

それはヴァルキリーやジュエルなど他人に聞かれるとまずい案件が多いからという理由もある。

そんなわけで葵衣の驚きも無理からぬことだった。

「んー、葵衣。どうしたの？」

電話の向こうから気だるげな緑里の声が聞こえてきた。

「姉さん、少し待っていてください。」

「早くしてね。」

もうすぐ10時とはいえこれまでの生活からして就寝には早い。

だというのにあの眠たげと言つか気だるげな声と甘えるような台詞。

(まさか…)

撫子の頭の中では2人が同じベッドで横になり、それはもちろん裸で

「葵衣…」

「姉さん…」

などと甘く囁き合っている光景が広がっていた。

「すみません。お待たせしました。…お嬢様？」

「み、緑里の声が聞こえたみたいだけど今は部屋なのかしら？」

ちよっと上ずった声を平静に留めながら撫子は自然な感じで尋ねる。自分の想像が当たってほしいのか欲しくないのか。

…自問してみると4対6と割と僅差だった。

「いえ、今は入浴中でした。」

外れてはいたが裸の付き合いの部分は当たっていた。

気だるい声も長風呂すれば湯中りするし背中を洗うなり話をしていたらそれを切り上げてくれば催促もするだろう。

つまり撫子の考えていたような疚しいことは何一つない…とも考えられる。

「今帰りの途中だから後にしましょうか？私も背中を流してもらいたいわ。」

「そちらは構いませんが。お嬢様からご連絡をいただいたほどですから急を要する要件とお見受けします。」

さすがは葵衣と言うべきで撫子の行動からその真意をすぐさま見抜いた。

撫子も今は側にいない優秀な付き人を誇らしく思いながら真面目な顔になる。

「それなら願いますわ。至急、太宮院琴と”太宮様”について調べてほしいの。その調査結果と交渉次第では今後の活動に大幅な進展が期待できそうよ。」

もちろん進展するのは事業ではなくヴァルキリーの動向だ。

かつて少人数編成の”Innocent Vision”が半場陸の持つ未来視によってヴァルキリーの手を逃れ、大軍勢を退けた。

結局はファブレの消滅とともにソルシエルが失われ休戦状態に入っているが、未来の道筋が分かれば裏について”Innocent

Vision”を壊滅、あるいは統合することも容易くなる。

”Innocent Vision”のソーサリスおよびセイントやジュエリストといったメンバーの強さや有用性はファブレとの決

戦で確認していることから撫子としては是非とも仲間に取り入れた  
いと考えていた。

それが後に陸が目覚めた時にヴァルキリーに引き込む材料になるこ  
とまで見越して。

『太宮神社の予言者”太宮様”については以前少しばかりご主人様  
にお話をお伺いしたことがございます。』

撫子が知らなかったトップシークレットを葵衣が知っていることに  
ちよつと納得が行かない撫子だったが文句を言っても仕方がないと  
すぐに切り替えた。

「それよ。どこまで踏み込めるかはわからないけれど出来るだけ詳  
細に知りたいわ。お願いね。」

『はい。それでは直ちに…』

電話の向こうで敬礼でもしていそうな葵衣の姿が目に見えなくなる。

撫子の就職を機に学生である緑里と葵衣は直属の任を解かれたがそ  
れでもやはり撫子が真に信頼するのは緑里であり葵衣だけだった。

「急ぎではあるけど、緑里の背中を流すくらいは構わないわよ。」

『…ありがとうございます。』

最後にそう付け加えると葵衣はわずかに照れ臭そうな声でお礼を言  
って電話を切った。

撫子はそれを微笑ましく思いながら、流れていく窓の外を眺める。

「半場さんが目覚めず、協力が得られない以上ヴァルキリーの悲願  
の成就には”太宮様”の未来視が必要ですよ。しかし…」

撫子はそれが困難なことを自覚していた。

それは琴自身が語っていた未来視の在り方にその答えが含まれてい  
たからだ。

「自分のために未来視を使わないということは、不特定の誰かのた  
めに使うこともしないという事ですからね。」

琴は未来視の力の持つ無限の可能性と危険性を自覚している。

そのような手合いには金銭や榮譽というような即物的な交渉は通用  
しないだろうと撫子は踏んでいた。

「…まずは葵衣に期待しましょう。」  
撫子に乗せた車はゆっくり家へと向かっていく。

撫子が帰宅後すぐに風呂場へ向かうと脱衣所では湯浴み着を着た葵衣が調べた資料を纏めていた。

1時間足らずでどれほどの情報が集まったのかはわからないが驚異的な早さであるのは間違いない。

「おかえりなさいませ、お嬢様。すぐにご用意いたします。」  
葵衣は資料をしまつと撫子の服を脱がせていく。

ここまでやってもらう必要はないのだが本人がやり始めた以上撫子は何も言わず身を任せる。

「一緒に入っても構わないのだけれど。」

「従者が主と同じ風呂には入れません。」

職務に忠実な葵衣は時に融通が利かない。

一糸纏わぬ姿になった撫子は葵衣を連れだつて浴室に入った。

温泉旅館ほどではないが一般家庭とは比べるべくもない広さの風呂場を歩きシャワーの前に腰かける。

葵衣は慣れた手つきで撫子を丁寧に洗っていく。

「ふう。それで？」

「はい。」太宮様”に関する情報は皆無でした。100年以上前から”太宮様”の占いが存在していたことからその名は襲名されるものなのか、あるいは怪異の類である可能性も考えられます。」

「人ではないと？」

「あくまで可能性ですが。」

普通なら鼻で笑うような荒唐無稽な話だが撫子たちはファブレという”化け物”を目の当たりにした。

未来視を操る存在が妖怪変化であっても今は納得できるほどに了解の幅は広がっている。

「ですので本日は太宮院琴様についての報告をさせていただきます。ですが太宮院様も負けず劣らず情報が少ないです。」

「そつでしようね。目立つ存在なら在学中に噂を耳にしたでしょうから。」

葵衣は2年の時に巫女服で登校してくる琴を何度か見ており、不幸を呼ぶ巫女という噂も耳にしていたがその時はそれほど重要視していなかった。

今更ながら葵衣はその時に撫子に知らせておくべきだったと後悔していた。

「…太宮院様ですが、ご両親は他所の神社に出向くことが多く太宮院様が切り盛りしていると云えます。」

「普段は”太宮様”と太宮院さんだけということね。金銭で困窮しているためにご両親が他所に出ているのならそちらの交渉で引き込めないかしら？」

先ほど琴には即物的な交渉は通用しないと考えたが家庭の事情が関わってくれば切り崩す糸口になる。

しかし葵衣はあっさりとは否定した。

「いいえ。金銭面での苦労はないようです。通常の職務に加え”太宮様”のト占がある分、他所の神社よりも余裕があると考えられます。」

琴がいつも叶のために用意しているお菓子はその辺りから捻出されているのだが、当然撫子たちは知るわけもない。

「過去に何人もの政財界の大物が”太宮様”のお力を独占しようと兆の桁の破格の金額を提示して協力を仰いだそうですがその誰もがすげなく断られたようです。その後、”太宮様”とのつながりが断たれて失脚する方が後を絶たなかったため交渉を持ちかける方はめつきりいなくなつたそうです。」

「予想通りではあるけれど。ほかに何か弱みのような情報はないかしら？」

ここまで隙がないと脅迫くらいしか手がなくなつてきた。

気乗りしないものの可能性の芽として聞かないわけにはいかない。

「それが、太宮院様は交遊関係がほぼ皆無で。唯一良好な友人関係



を築いていると見られるのが…」

葵衣はそこで口を閉ざした。

良くない結果が見つかったのだと知りつつ

「続けなさい。」

撫子は先を促した。

「はい。そのご友人は壱場高校2年、作倉叶様です。」

撫子は思わず天を仰ぎ見た。

「はい。それによつて”Innocent Vision”、その人物の中でも一番引き込みづらい相手だった。

「やはり一筋縄ではいかないようね。引き続き情報を収集、何としても”太宮様”の力を手に入れるのよ。」

「御意のままに。」

髪を流す撫子の目は理想の実現に燃えていた。

#### 第4話 交錯する情報

翌日、叶が登校すると裕子と久美、真奈美、芳賀が集まっていた。というより裕子の席で芳賀が騒いでいた。

「裕子お、昨日新学期記念パーティーやったんだろ？なんで誘ってくれないんだよお？」

…というか泣きついていた。

ちよっと近づくの躊躇いつつ

「お、おはよう。」

「あ、叶おはよう。」

一番早く声をかけてきたのは詰め寄られていたはずの裕子だった。つまり芳賀は放置であり

「うおーん。」

芳賀は机に突っ伏して泣いている。

「いいの、裕子ちゃん？」

「いいのよ。女の子の集まりに参加しようなんて甘いわ。」

どうやら最初から誘う気はなかったらしい。

叶もいまだに陸以外の男子と接するのは苦手なため今後の事も考えて擁護しなかった。

（裕子ちゃんのことだからまた別に2人きりでお祝いするんだろうけどね。）

裕子が学校で芳賀に対して素っ気ないのが冷やかされるのが嫌だという照れ隠しであることはわかりきっていた。

芳賀もそれを知っているからおちやらかした仕草をするだけなのだ。

隠しているつもりでしっかり読まれているあたりに2人の迂闊さが見て取れる。

「ほら、席に着け。欠席にするぞ。」

チャイムより早くやってきた担任の横暴にクラスメイトが非難の声を上げるのを聞きながら叶たちは自分の席に戻っていった。

八重花は授業を聞いている振りをしてしながら片手で器用に携帯を操作していた。

『昨日の商店街の監視カメラの映像、見て。』

昨晩帰りついでから八重花は万能検索ツール『エクス』で商店街のカメラの画像を入手、自分達がどうなっていたかを確認していた。自分の体感した現実を過信せず客観的な映像の証拠を求める辺りが八重花らしいと言える。

送り先は明夜と由良。

八重花の席は最後列なので前方で2人が携帯を確認したのを見た。

数分後

『何も映ってないな。』

『叶も八重花もいない。』

同じような感想が返ってきた。

それは八重花も同じだった。

確かに商店街を通ったはずなのに2人が通過したはずの時間にはその姿が映っていなかった。

商店街の途中で結界に取り込まれて解除と同時に戻ってきたと思っていたので瞬時に現れる姿を予想していたのだがその期待は外れてしまった。

『場所も時間も合ってる。だけど私たちは映っていなかった。どういうことだと思う？』

八重花にも仮説はあり、その数は決して多くはない。

『魔術的な方法で隠蔽されたか。』

1つは由良の言うように科学の力を超越した魔術で2人の姿を隠した。

結界の名残だと考えればその説明も頷ける。

『八重花たちが通った商店街自体が偽物だった。』

だが明夜の言う通りだとすれば相手は広大な領域に精巧な幻影を映

し出す力を持っていることになる。

ジエムに似て非なる闇、映っていない2人の姿。

まだ相手の情報も戦力も何一つ得られていない状況に八重花は不安を覚えた。

（私はりくのような便利な力は使えない。なら今ある力を最大限に利用するまで。）

『早退する。』

返事よりも早くチャイムが鳴る。

由良が振り返ったとき、既に八重花の姿はなかった。

下沢悠莉と神峰美保のクラスは2組だった。

偶然なのか” Innocent Vision”のメンバーとはかち合わなかったため互いに気兼ねなく学生生活を送れている。

尤も体育や選択授業は1組と合同なので明夜たちと一緒になってしまうが。

その美保が休み時間に入った直後廊下に目を移すと見知った姿が昇降口の方に歩いていくのを見た。

（東條八重花？）

向かった方向には職員室などもあるため一概に帰宅とは言い切れなかったが2限が終わった段階で鞆を持っているとなると早退の可能性が色濃い。

「どうかしましたか、美保さん？」

八重花の去っていった先を難しい顔で見つめていた美保に悠莉が声をかける。

振り向くと悠莉の後ろには興味深げに2人を見るクラスメイトの姿があった。

なんだかんだで乙女会幹部クラスの2人は一般生徒にとっては憧れで気安く声をかけづらい相手なのである。

見せ物になっている現状に苛立ちを覚えた美保は悠莉を連れ立って

教室を出た。

「皆さん、美保さんを心配していたんですよ？」

「…悠莉、あんた少し変わったわよね？」

以前の悠莉はもつと笑顔で人を殺せるような人間だった。

人の気持ちを知りながらそれを利用して相手を追い詰めるような悪女だった。

少なくともクラスメイトの心の機微を感じ取れるような人間ではなかったはず。

「そうですね。やはり…恋は女を変えるんですね。」

頬に手を添えてうつとりする姿は恋する乙女に見えなくもないが悠莉がやると何故か色っぽいというかぶっちゃんエロい。

通りがかった男子生徒が魂抜かれて茹で蛸みたいになったのがいい証拠だ。

「はあ、なんでまたよりによってインヴィなんか。悠莉なら選り取り見取りでしょうに。」

悠莉は女の美保から見ても掛け値なしの美人だ。

以前のような殺人並みの嗜虐癖が緩和された今ならどんな相手だろうと声をかければ墜ちるに違いないと思えた。

「私の本質は変わりません。そんな変人を受け止められるのは半場さんくらいのもですよ。ふふふ。」

美保の困り顔を見て悠莉は楽しげに笑う。

やっぱり変わってないと思いつつ昇降口の見える窓まで移動して本題に移る。

「まあ、いいわよ。それよりアレ、どう思う？」

悠莉が目を向けると昇降口から校門に向かっていく人が見えた。

「あれは…八重花さんですね？こんな時間にどうしたのでしょうか？」

「怪しいわよね？何か”Innocent Vision”が企んでいるとは考えられない？」

美保の懸念はそこだった。

ヴァルキリーが第二次ジュエル計画を始動させたように”Inno

cent Vision”もまた何かを始めたのではないかと疑っているのだ。

「しかし、ソーサリスが消えてジュエルを持たない”Innocent Vision”の戦力は作倉叶さんと芦屋真奈美さんの2人だけ。そもそも魔女やヴァルキリーの力の悪用を防ぐ目的で活動している”Innocent Vision”が動く理由が分かりません。」

悠莉の意見も尤もだった。

だが現実に八重花はおかしな行動をしている。

「家族の訃報かも知れませんか？」

悠莉は八重花を擁護するようなので美保は説得を諦めた。

「ジュール計画が漏れて探りを入れている可能性もあるわ。」

「その辺りは後ほど葵衣様に連絡を入れておきましょう。もう次の授業が始まります。」

ちよとチャイムが鳴った。

当然八重花の姿はもう見えない。

「Innocent Vision”。今度も邪魔したら次こそは……」

「……」

美保の静かな怒りに悠莉は何も言わずクラスに戻っていった。

昼休み、食堂で昼食を取る生徒の中に叶たちの姿があった。

だがメンバーは4人。

叶と真奈美、裕子と久美の隣同士で座っていた。

「八重花ちゃん、早退だつて。調子悪いのかな？」

「その辺り八重花はしっかりとしてると思うけど。」

「いや、真奈美。八重花はのめり込むといる無茶するタイプよ。

去年の冬頃はずっと変だったから。」

その理由を知る叶と真奈美は苦笑いを返した。

ただ今日の早退の理由に関しては八重花本人からもクラスメイトの明夜からも聞いていない。

由良には元から聞いていない。

八重花を誘いに行つたとき由良は既にいなかったし明夜もどこかへ行こうとしていたところだった。

「明夜ちゃん、前は一緒にご飯食べてくれたのにね。」

「にはは、りくりくがないからだね。」

恐らくはその通りなので何とも言えない顔をする叶。

（私だつて陸君と一緒にご飯食べたとか、カフェに行つたりとか、映画見に行つたりとか…）

乙女の妄想は膨らんでいくが現状実現不可能な事実に気落ちする。

「八重花も半場くんもいないけど4人でも楽しいでしょ？ほら、笑う笑う。」

裕子が久美の頬を摘まんで強引に笑っているように見せる。

「にや、もともと笑つてるよ！」

「あはは。」

「裕子ちゃん、久美ちゃん。やめなよ。」

かましい4人は食堂でも目立っていた。

（そっか、八重花は早退したのか。）

バレー部の後輩を連れ立って食堂で昼食を摂っていた良子は聞くともなしに八重花の名前を聞いた。

八重花をパートナーにする計画は八重花が”Innocent vision”に移ったことで完全に終わった。

そこでようやく良子も吹っ切れて今では以前のような凜々しい姿に戻っている。

悠莉とは逆の変化と言えた。

「キャプテン、そう言えば乙女会に人を増やすって噂を聞いたんですけど本当なんですか？」

「ん、そうなの？」

良子の知らない情報に聞き返すと後輩は首をかしげた。

「噂ですけど。花鳳様やヘレナ様が卒業されてしまいましたからそこに新しい人を入れるんじゃないかって。」

「今のところそういう話は出てないよ。」

「そうですか。」

さすがに人員増加となれば傀儡とはいえ会長の判断が必要になる。

一度もそうだった話題が上らないのだから単なるデマだろう。

（そもそもソーサリスがこれ以上増えないんだから増員があるわけないか。）

ソーサリスはファブレによってソルシエールを与えられた乙女のことだ。

力を与えるファブレが消滅した以上、今後ソーサリスが増えることもない。

「でも純乙女会は再結成するよ。興味ある？」

良子の問いに対する反応はまちまちだった。

今なおジュエルの力を持っている部員もいるが中には戦いの厳しさから逃げ出した者もいる。

ジュエリアを持っていてもジュエルを発現できなかった子もいた。

「純乙女会は派閥争いが厳しいとか噂を聞きますし。」

さすがにジュエルの事は出回っていないが人間関係の話に蓋は出来ず、悪い噂は広まりやすい。

一時期純乙女会が壊滅的に人員を減らしたのはそういった理由もあった。

（こりゃ、ジュエルを集めるのに苦労しそつだね。）

反応を見て苦笑した良子はどんぶりを傾けてご飯を流し込むように食べると立ち上がった。

「弱気なやつはあたしが鍛え直してやろう。さっさと食べて練習するよ。」

「は、はい...」



活を入れられた部員が慌てて昼食を平らげていく。  
良子はどうやって勧誘したものかと悩みながら、結局部員の指導だけで昼休みを終えるのだった。

5 限体育という苦行が割り当てられた2年1組、2組。

食後にいきなりマラソンという嫌がらせを受けて男女共にやる気は最底辺だった。

由良と明夜は適当に流しつつ1周遅れの悠莉を追い抜いた。

「元気ですね。私は辛いです。」

「元気。」

「授業なんて出ればいいんだ。」

一言一言交わして2人はさっさと前に出る。

ソーサリスがなくなつたからと言つて動きに関しては一般人よりも格段に良いためあまり疲れた様子はない。

「ヴァルキリー。」

ポツリと明夜が呟いた。

トラックの反対側では美保が結構なスピードで走っている。

「乙女会が動き出したみたいだな。作倉たちの事件と関係があるのかわからないが、用心しろよ。」

「うん。」

2人はペースを乱さず走る。

やがて後ろから荒い足音が響いてきた。

2人は振り返らない。

「随分とゆっくりね。それともそれが限界なのかしら？」

あっさりと2人を追い抜いた美保はわざとペースを落として嫌味を言う。

明夜は無視、由良は露骨に嫌そうな様子で顔をしかめた。

「食後だつてのに元気だな。それともドーピングでもしてるのか？」

「ハハ、何をバカなこと言ってるのよ。」

口では小バカにしつつ一瞬目が細まったのを由良は見逃さなかった。  
「まあ、精々仲良くゆっくり走っていればいいわ。あたしの邪魔さ  
えしなれば蹴っ飛ばしたりしないわよ。」

軽く手を上げると美保は振り返りもせずペースを上げて走り去った。  
言葉の裏側にヴァルキリーの神峰美保を隠して。  
タッタッタッタ

結局明夜と由良のペースは変化しない。

「…どうだ、明夜？」

「ドーピング真っ黒。」

「ソーサリスか？」

「たぶん、ジュエル。」

明夜は無視をしている振りをして美保の力を探っていたのだ。  
話は全く聞いていないので無視と変わらないが。

「ちつ。花鳳も厄介なものを作りやがって。」

由良が舌打ちをして怒気を滲ませると勘違いしたクラスメイトが悲  
鳴を上げて道を開け、追い抜こうとしていたものは引き下がり、追  
われる者は速度を上げた。

「…。ちつ。」

「…。」

タッタッタッタ

2人のペースは変わらない。

ただどっしりだけ足音が寂しそくに聞こえるまま授業は終わりを迎える  
のだった。

## 第5話 “太宮様”を追え

放課後、ヴァルハラで紅茶を飲みながら悠莉はさっそく葵衣に”Innocent Vision”の動向について聞いてみた。当然八重花の早退の件も伝える。

「第二次ジュエル計画の情報漏洩の可能性は考えにくいでしょう。ジュエリアの情報はお嬢様の信頼なされている製造ラインの極少数の職員とヴァルキリーの方々だけにしか明かされておりません。」  
「ですが、人の口に戸板は立たないと言います。」  
「職員に箝口令が敷かれていますので家族であっても漏洩が発覚した場合即座に解雇となります。せつかくの職を棒に振りたがる者もいないでしょう。」

容赦ない制度だが辛酸を舐めさせられてきた撫子からすれば当然の配慮である。

「東條様のご家族の訃報は聞き及んでいませんがジュエルとは別件であることは間違いありません。」

「確かに、まだ大して出回っていないジュエリアを嗅ぎ付けるなんて普通は無理よね。」

美保が葵衣の意見を拾ってまとめる。

悠莉もそれほど深刻に考えていなかったためすぐに引き下がった。だが葵衣は紅茶の波面を見詰めながら考えていた。

（普通では分からない。しかしInnocent Visionならば未来に起こる事象から現在の状況を推察することができる。たとえInnocent Visionで無くても未来視ならば同じような事は可能なはず。そしてもう1人の未来視、太宮院琴様は”Innocent Vision”の作倉叶様のご友人。その繋がりから占いとしてその事を告げたとしても不思議ではない。）  
「葵衣、どうかした？」

波面を睨み付けたまま動かない葵衣を心配して声をかけた緑里だっ

だが反応はない。

「姉さん。」

「は、はい!?!」

突然名前を呼ばれて微妙に丁寧語で対応する姉。

「私は所用で出ます。ヴァルキリーの事は一任しますのでよろしく  
お願いします。」

「え、会長は良子…」

「頼みます。」

葵衣は有無を言わず押し付けると鞆を持って早々にヴァルハラを  
飛び出していつてしまった。

残されたメンバーは葵衣らしからぬ慌てように唾然としていた。

「なんだっただらう、今の?」

「さあ。ところで会長であらせられるはずの良子先輩は?」

「部活でしょ?」

緑里はさも当然のように答えたがバレー部キャプテンと乙女会会長の  
のどちらが優先されるのか美保は悩み出す。

「今日は解散でしょうか。」

春麗らかな放課後、ヴァルキリーの面々はあっさりと普通の学生に  
紛れていった。

葵衣は早足で太宮神社に向かっていた。

「“太宮様”のト占を私の為に使って貰えるとは思えませんが、揺  
さぶりをかけて情報を引き出してみましよう。」

「もしも“太宮様”の力が”Innocent Vision”にあるのならばヴァルキリーの今後の作戦行動に大きな支障が出るこ  
とになる。」

「最悪ヴァルキリーへの協力は得られなくても”Innocent  
Vision”に益になる行為は止めさせなければならぬ。」

たとえそれが撫子の意に削ぐわれない、殺人という行為であろうとも。

葵衣が太宮神社に到着すると境内には誰もいなかった。

「まだ学校からお戻りではないのでしょうか？」

神社を切り盛りしているとはいえ琴も高校生、放課後に遊びに行くことも十分に考えられる。

神社は人気がなく神主もいないようだった。

「…。」

ゴクリと葵衣が生唾を呑み込んだ。

（今なら、”太宮様”の秘密を探ることも出来るのでは？）

何の情報も得られない予言者だが数多くの人が会っている以上実在するはず。

神社に誰もいない現状ならば本人に会うことができるかもしれないという期待が葵衣の中に芽生えた。

（いや、しかし。それは不法侵入という犯罪行為。）

葛藤する葵衣の中には天使と悪魔がいた。

緑里に似た天使は言う。

『そんなのは駄目だよ。バレたら撫子様が悲しむよ。』

一方で美保に似た悪魔が囁く。

『別に扉に鍵がかかっている訳じゃないんですからちよつと興味本意で奥まで入っちゃったことにすれば大丈夫ですよ。』

確かに神社の本殿や奥の間へと続く通路にバリケードの類いは無かった。

葵衣の心が悪魔の方に偏っていく。

ここは天使が頑張るべき所だったが

『でも成功して”太宮様”の情報が手に入れば撫子様も喜ぶよね。』

（…ああ、姉さんのバカ。）

緑里は良心よりも結果重視だった。

こうして葵衣は若干緑里に責任転嫁しつつ太宮神社本殿に潜入を開始した。

葵衣は忍者のように足音を立てず壁に張り付くようにしながら奥を

目指していた。

（畏は無し。監視カメラもないようですね。）  
奥の間までの間取りは撫子に教わっていたがそれ以前に横道はなく、誘導されるように奥へとほぼ1本道で進んでいく。

音の無い世界に薄ら寒いものを感じながらも忠誠心と好奇心が葵衣の足を前へと進めていく。

やがて撫子がト占を受けたという奥の間に到着した。  
音を立てないように襖を開き、中を確認してみたが四畳半の部屋に特に変わった何かがあるわけではない。

葵衣は襖を閉めると視線を廊下のさらに奥へと向けた。

その先はまだ昼間だというのに深淵の闇へと続いているように何も見えない。

ここから先はト占を受けに来た人では進めない領域。

葵衣は禁断の地へとゆつくりと歩を進めた。

窓はなく、空気が澱んでいるように感じられる。

神域とされる神社に満ちる清涼感よりも遙かに強い張り詰めた空気を葵衣は息苦しく感じ、左目の奥がチリチリと痛む。

一歩一歩牛歩の如く無限に続くように思える廊下を進んでいく。

「はあ、はあ。」

呼吸を抑えようにも上手くいかず、そんなささやかな吐息ですら大きく聞こえてしまうほどの空間は葵衣の神経を蝕んでいく。  
だが終わりのない廊下などあり得ない。

やがて見えてきたのは古ぼけた一枚の戸だった。

神聖な空気はその戸の向こうから漏れ出してきた。

（あそこに、”太宮様”が。）

葵衣は踏み留まる。

本当にここから先に進んで良いのか、最後の良心に尋ねる。

今から踏み込む先は人の道を外れるだけじゃない、神をも恐れぬ所業であると。

（私は…お嬢様の夢を実現させるためならばたとえ神であろうと敵

に回しましょう。」

決意は固く、葵衣は強く1歩を踏み出した。足を出す毎に戸が近づいてくる。

あと3歩、あと2歩、1歩…そして遂に戸に手をかけた。

「そこまでしておいてはいかがですか？」

「！？ エルバイト！」

突然背後からかけられた声に手を引つ込めた葵衣は振り向きながらジュエルを抜いて振るっていた。

人造ソルシエル・エルバイトは電気を操るジュエルであり、その派生として風を操る能力を付加してあった。

ウインドロードは使えないため、能力的にはセレスタイトのグレイドダウン品と言えた。

風邪の如く走る刃。

だがエルバイトは空を切る。

「はあ、はあ！今は…」

あれだけ気を張っていたのに声をかけられるまで人の気配に気付かなかった。

声の主が幽霊という可能性もあったが一瞬確かに人の気配を感じた。葵衣が見つめる廊下の先、来た道の先の闇から白い襦袢に朱袴の巫女が音も立てずに現れた。

「ようこそ、太宮神社へ。海原葵衣さん。」

巫女は口許を袖で隠しながら告げる。

だがその目は決して笑ってはいなかった。

「太宮院様…。クッ！」

見られた以上作戦変更だった。

このまま逃して通報されては撫子に被害が及ぶと判断した葵衣は琴を無力化すべく攻撃を仕掛ける。

セレストایتではないとはいえジュエルによる身体能力強化と葵衣の会得した剣術技能により素早い攻撃を放つ。

だがそのすべてを琴は流れるようにかわしていく。

暗所だからというだけでは説明がつかない回避は陸を想起させた。

（この回避能力、未来視ですか！？）

葵衣は表面上は変わらず内心焦りを覚えていた。

かつての決戦時、葵衣は一度も陸に傷を負わせることができなかった。

ウインドロードを使った超高速攻撃すらInnocent Visionで暴かれて。

（同等の能力となると圧倒的に不利。）

相手の力は未知数で今の戦力は最盛期の半分以下。

しかし失敗すれば様々なものを失うという焦燥感。

それらが周囲の闇に触発されて際限なく膨らんでいく。

左目の朱色が闇を照らし出す。

この感覚を葵衣は知っていた。

衝動の暴走。

かつて多数のジュエルを血の海に沈めたおぞましい感覚が葵衣の中で沸き起ころうとしていた。

だが闇の向こうの琴は慌てる様子がない。

殺気に怯えているようにも見えなかった。

（逃げ…）

心の制止よりも早く葵衣はエルバイトを振り上げて斬りかかった。

風力を受けて圧倒的な速度で振り下ろされた刃は

キンッ

何かに阻まれた。

「ッ！？」



驚きに固まる葵衣の目の前で巫女の口が割け

「いたずらっ子には、お仕置きだね。」

突然足下の床が抜けた。

悲鳴をあげる暇さえなく葵衣は闇に落ちていった。

「…ん、ここは………ハッ！」

微睡みからゆっくりと覚醒した葵衣は何があったのかを思い出すと文字通り飛び起きた。

掛けてあった布団が浮かび上がる。

「布団？」

よく見れば葵衣は純和風な部屋に敷かれた布団の上で寝かされていた。

少なくとも地獄の底ではなさそうだった。

「あら、もう動いて大丈夫なのですか？」

「ッ!？」

葵衣が慌てて声のした方に振り返ると水をのせたお盆を手にした巫女が少しだけ驚いたように目を丸くした。

(太宮院琴様。)

さつき闇の中で見たのと同じ人物。

だが浮かべている表情はまるで別人のようだった。

「わたくしに御用の方ですよね？ 吉葉の生徒さんのようですよ。すみません、少し帰宅が遅れてしまったもので。」

「はい。…?。」

嘘では無いものの話が噛み合っていない感じに違和感を覚えていた。まるでさっきの攻防がなく、夢だったかのように。

「わたくしを探して本殿の奥まで探しにこられたようですがどうして廊下で倒れられていたのですか？」

「倒れていた?…私が、ですか？」

「はい、奥の間の前辺りでうつ伏せに。ですので客間まで運ばせて

いただきました。」

巫女は葵衣を座らせると自分も座って茶碗の水を差し出した。

「あ、申し遅れました。わたくし、太宮院琴と申します。」

「私は海原葵衣です。ご迷惑をお掛けして申し訳ございません。」  
調子の狂った葵衣は社会的制裁を覚悟の上で琴殺害を断念した。

あとはいかに自分に有利な状況に話を持っていけるかを頭の中でシミュレーションする。

「すみませんが何故廊下で倒れられていたのか説明していただけますか？気が付かないところに出っ張りがあって躓かれたとなれば修理しないなりません。」

葵衣はまた首を捻る。

完全にすつとぼけられる演技派か同姓同名の別人のように感じながら

「神社の方を探して奥までのほぼ一本道を進み、奥の間ですか、その先の暗い廊下をずっと進んだ先で……」

ありのままを説明していくがどンドン琴の首が傾いていくので途中で切り上げた。

ここから先はエルバイトを振り回す話なので話すわけにもいかない。

「奥の間の奥の廊下、ですか？」

琴は振り子のように首を左右に揺るとクスクスと口許を隠して笑い出した。

嘲るような調子ではないもののわけもわからず笑われては気にもなる。

「何かおかしいところがありましたか？」

葵衣としては奥の間までの道筋はありのままを話したはずだったが琴は控えめに頷いた。

「奥の間までは一本道ではありませんよ。それに、ふふ、奥の間は一番奥にあるから奥の間と呼ばれているのです。その先に続く廊下なんてありませんよ。」

「そんな…バカなことが……」

葵衣は到底信じられるわけもなかった。

葵衣は頼み込んで琴に奥の間まで案内してもらった。

言われてみれば客間へ続く廊下は奥の間に向かう途中にあったし他にもいくつか通路が分かれていた。

そして奥の間の先は闇ではなく小さな明かり取りの小窓があるだけの行き止まりだった。

「本来はあまり人をお通ししていい場所ではありませんので戻りましょうか。」

葵衣は素直に従い本殿の入り口まで見送られた。

「すみませんがこれから所用がありますので。わたくしにご用があたりでしたらまた後日にこちらか学校でお声をかけてください。」

「はい。…失礼致します。」

深々とお辞儀をする葵衣に微笑みかけると琴は社務所の方へ行ってしまうた。

また1人になったがもう一度チャレンジする気は起きなかった。

「夢…だったのでしょうか？」

今となつてはエルバイトを抜いた事さえ現実かどうか思い出せない。

葵衣は首を捻りながら帰っていった。

## 第6話 探求する者たち

琴の用事。

それは：

「こんにちは、琴先輩。」

「いらつしやいませ、叶さん。」

叶とのお茶だった。

相変わらずお茶菓子の用意を万全にして美味しいお茶を用意して叶を迎える。

「わあ、羊羹ですか。今日も美味しそうですね。いつもすみません。」

「いえいえ、叶さんのその笑顔が見られるのならこれくらいなんでもありませんよ。」  
輝くような叶の笑顔を琴はうつと見つける。

それを告げるとすぐに叶は恥ずかしがるがそれもまた琴のお気に入りだった。

「さあ、座ってくださいな。」

「はい。」

叶に席を促し、自分も向かいに座る。

初めは身近な出来事の話だったがやがて先日の人型の闇の話、そして結界の話になった。

「結界というのは本来仏教で用いられる言語で一定区域を限ることを表します。神道での聖域に当たるものですね。」

「聖域っていうと悪い人たちは入れない場所ってことですか？」

専門的な話で引かれないか心配していた琴だったが自分に関わりがあるためか叶は思いの外興味があるようだったので安心して続ける。

「完全に排することは難しいでしょう。これは陰陽道になりますが善中の悪、悪中の善のように完全なる善人はなく、完全なる悪人もいません。その中で基準となる程度を定めることは簡単ではありません。」

せん。」

「それじゃあどうして悪い人が入れない聖域になるんですか？」

「入る者は拒みません。ですが入った者の心にある悪の大きさに合わせた障害を与えるのです。悪に心を蝕まれた存在は聖域の中では満足に活動できませんので結果的に善なる者の領域となるのです。」  
フフフと不気味な笑みを浮かべる琴に叶はちよつと引きつつ話を続ける。

「でも神社でそんな風に悪い人が苦しんでいるところ見たことないですよ？」

「さすがに境内にそこまで強力な聖域を作ると大変ですから。聖域は本殿よりさらに奥に行くほど強くなるようになっていくのですよ。そして”太宮様”の占いを行う奥の間は神域との境となる空間になります。」

「はあ、”太宮様”は神様なんですか。」

段々難しくなってきた理解が追い付かなくなってきた叶は言葉尻を掴まえて適当に納得した。

だが琴はボンと手を打つ。

「さすがセイントの叶さん。なかなか鋭いですね。未来視の力は人の身にはあまる力。ですから占いの時にのみ”太宮様”を降ろして未来を書き記して頂くのです。そして”太宮様”は人前に姿をお見せ下さるため生き神とされているのです。」

「????？」

後半は叶にはちんぷんかんぷんだった。

琴は理解されないのを承知で語ったのだから真意は伝わったことになる。

「あまり口伝してよい内容でもありませんので今聞いたことは内密にお願いしますね。」

「は、はい。説明してと言われても上手く出来ません。」

琴は満足げに頷くと後ろの柵から取って置ききの栗蒸し羊羹を取り出した。

よく分からない話で難しい顔をしていた叶の表情がパツと明るくなる。

「変な話を聞かせてしまいましたし口止めをしましたのでこちらは  
お詫びと口止め料です。今新しくお茶を淹れ直しますね。」  
琴は席を立つてお茶を用意しながら先ほどの事を思い出す。

（海原葵衣さん。普段は冷静な方だと聞き及んでいましたがあの慌て様。神域に踏み込んで暴かれましたか。あるいは暗闇の中で怪異にでも遭遇しましたか。なんにせよヴァルキリーの方々がこれを期に手を引いていただけると助かるのですが。）

琴はお茶を淹れて戻る。

撫子や葵衣の今後の行動はそれこそ神のみぞ知る未来の事、琴には  
分かり得ぬ先の話。

今考えたところで答えが出るわけもなく、その時にならなければ分かるはずのないこと。

だから琴は余計な事に気を回すのを止め

「んー、おいしーですー！」

愛らしい叶を目一杯楽しむのだった。

八重花は家に帰り着くとすぐさま部屋に引っ込んでパソコンを起動させる。

そして黄金色のフラッシュメモリをコネクタに接続する。

「『エクセス』、起動。」

まるで音声認証のようにパソコン画面が瞬時にサイバネティックに変化した。

画面中央に入力するバーが現れ、急かすようにカーソルが点滅する。  
「まず検証しなければならぬのは私たちがあの場にいたのかどうか。」

それがわかれば結界を作り出したのか幻影を作り上げたのか判別出来、相手の力を見極める指標となる。

「顔認識機能をオン、商店街すべての監視カメラの映像から事件当日私または叶の姿を探せ。」

実際の入力には八重花の手打ちだが口とほぼ同速度で打ち込んでいた。パソコンに保存されていた写真データをツールに放り込み顔の特徴を認識させる。

その後映像データを再生してヒットする人物を探す。

だが時間を遡っても商店街内の他の場所のカメラを見ても2人の姿も怪しい人影も映っていないかった。

八重花は苛立たしげにマウスをトントンと指で叩く。

「これだと本当に幻覚か異次元空間になるけど…」

八重花としては信じたくはない。

自分達を狙う相手がどれほど強大で強力なのかを知らなければ勝つことはできない。

相手の全力だと思っていた力が実はほんの一部だったなどという状況、あるいは全力で当たった相手が実は弱く、疲弊したところを第三勢力によって倒されるといった状況は避けたい。

特に現状は戦力が乏しいので情報の手違いはそのまま”Innocent Vision”壊滅の可能性に繋がってしまう。

正しい情報の確保が望まれる。

「商店街の入り口付近のカメラで最後。これで見つからなかったら相手は私たちの認識をねじ曲げるような存在ってことになるわね。」それが正しい情報なら相手がどれほど強大であろうと受け入れるしかない。

八重花はそういう相手なのだとは諦めていた。

マウスをトントン叩きながら早回しの映像を眺めるが2人が歩いている様子はない。

「万事休す、ね。」

カチッ

ピコン

叩いていた指がマウスを動かしてクリックしてしまった瞬間、これ

まで無反応だった識別ツールが一瞬だけ応答した。

萎れかけていた八重花がガバツと起き上がり目を皿のようにして画面を睨み付ける。

だがもう映像は止まっていて反応も消えている。

「……フツ、ククツ。」

だが八重花は笑っていた。

それはもう嬉しくて堪らないといった様子でしまいには声をあげて笑い出した。

「なんの偶然が起こったのかは知らないけど反応したってことは対象物は必ず映っているってことよ。ならあとはトライ&エラーで映った条件を探すまでよ。フフフ、楽しくなってきたわ。」

知識の探求者・東條八重花は目をギンギラギンに血走らせて作業に没頭していった。

美保と悠莉は撫子の名義で貸しきられた簡易地下シエルターに来ていた。

長期生活をするには設備の面で乏しいために厳しいが余所からの邪魔が入らない、頑丈に出来ているという点においては近くの広場や森、体育館とは比べ物にならないほど優良な場所だった。

特に人に言えない秘密を持つ2人ならなおさらである。

「準備はいい、悠莉？」

「構いません。美保さんのお好きなようにしてください。」

それだけ聞くと怪しい会話をした2人は

「『ジユエル！』」

その手に量産型の魔剣を呼んだ。

左目が朱色に輝きを放つ。

現れたのは両者共に光を纏う武骨な両刃の剣・アルミナだった。

ただしデザインは美保が細身のロングソードに対し悠莉の方は肉厚で頑強なクレイモアである。



「完全に武器での戦闘を捨てたわけね。」

「もともと剣で打ち合うのは苦手ですので。」

ジュエルの身体能力強化の効果で悠莉は重い金属の塊を難なく持ち上げる。

だが重量をキャンセルしているわけではないので美保のロングソードは風を斬るように振るわれた。

「ちよつと勘が鈍ってきたからね。ここらで引き締めておかないと。」

「それにジュエルの特性を正しく把握しておきませんといざというときに使えませんからね。」

悠莉が柄を握りしめると刀身が青白く光を放った。

「アルミナ。」

名を呼ぶとすぐに悠莉の前に青い障壁が出現した。

「コランダムの境界は作成可能ですね。もつとも……」

さらに意識を集中させるが空中には3枚の壁を作るのが限度だった。「これでは内部に封じるのは難しいでしょう。完全に盾として割りきった方がいいかもしれませんね。」

概ね思い描いた通りの能力を使って満足げな悠莉だったが

「あー、レイズハートどころか飛ぶ光刃も使えないじゃない!」

美保はアルミナを振り回して怒っていた。

確かに刀身は光っているのだがどんなに振っても飛ぶ様子はない。

「これじゃあスマラグドじゃなくてルビヌスよ! 良子さんよ!」

キレかけていて良子さんが罵倒の単語になっているくらい暴れている。

翠色の光を纏った刃の威力は高く、耐衝撃性の防壁を切り裂くほどだが美保の求めるものとは違う。

「…もしかしたら派生の違いかもしれませんね?」

「派生?」

考え込んでいた悠莉がピンと人差し指を立てて言うと美保は暴れるのを止めて興味を示した。

見えないところで賤の効果が続いている。

「ソルシエールの中にはいくつか同じ根源を持つものがありましたよね？」

「そうかもね。」

「その大元を突き詰めた時、スマラグドはアルミナが起源ではなかったのでしょうか。だから同じような使い方をしてもグラマリーを扱えないのですよ。」

「それならエルバイトかクオーツに変えてもらえば…」

「あるいはそれら3つ以外を起源に持つのか、ですね。」

美保のささやかな期待も悠莉はあっさり撃ち落とす。

確かにアヴェンチュリンやセレナイトのような特殊な系統のジュエルは聞いたことがないからスマラグドの流れを汲むジュエルもあるかどうか分からなかった。

「ちよつとこれは抗議してこないと。」

美保は早々にジュエルを引き上げると出口に向かっていく。別に利用権限が美保にあるわけでもないのに悠莉が呼び止める理由はないのだが

「美保さん。」

悠莉は美保を呼び止めた。

「何よ？あたしは今から抗議に…」

「今の責任者は緑里様ですよ。」

「…」

悠莉がそれを告げた瞬間、美保の眼鏡がずり落ちた。

落胆に膝をつくのを目一杯堪えているのに気付きつつ、悠莉はさも残念そうに目を伏せて頬に手を添える。

「今もお一人でヴァルキリーのためにヴァルハラに待機してください。っている緑里様に美保さんは鬼の形相で乗り込んで不良品なんじゃボケとヤクザのようにいちやもんをつけに行くというのですね。ああ、おいたわしや、緑里様。」

「ぐ…くっ…」

大仰に言っているを知りつつも本質を捉えた言葉にプスプスと良心という名の針が美保の胸に突き刺さっていく。

まち針クラスの細い針だって数が刺されれば痛い。

「だぁーもぉー、あたしが悪うございましたぁー！」

美保はふてくされたように近くににあった椅子に乱暴に飛び込んで手足をバタつかせた。

物事が思い通りに行かなくてちょっと拗ねている。

「そもそも緑里様に詰め寄ったところでジュエリアに関する事はすべて花鳳様と葵衣様が執り行っているのですから無駄なんですけどね。」

そして最後のトドメを忘れない悠莉によって美保がガツクリと首を落とすのだった。

「この分だと緑里先輩のベリルも怪しいね。ジュエルにあんな細かい遠隔操作が出来るとは思えないもの。」

結局今日のところは諦めた美保は当初の予定通り悠莉と2人で実戦形式の戦闘訓練を行っていた。

実際の戦闘の形を取ることでグラマリーの反応性や強度などのデータを感覚として覚えていく。

美保は翠の光を纏った刃を振り回して悠莉を攻め立てる。

対する悠莉は器用に3枚の障壁を駆使して防御していく。

「とりあえずはこれも悪くないか、なっ！」

美保が力を込めると光が爆発的に高まり障壁を揺さぶる。

「しかし私たちが力をつけたとしてもこの力を振るう相手がいませんが。」

「Innocent Vision」がいるでしょ？あいつらをぶっ倒さないとあたしの気は収まらないよ！」

激しいラッシュに悠莉の防御がぶれる。

障壁の強度、展開速度ともにサフェイロスには遠く及ばない。

早いうちにアルミナの感覚になれておかないといざというときに命

に関わりかねなかった。

（今まさに命の危機のようですが。）  
いつ碎かれるかもわからない青の障壁を駆り、悠莉は1歩も引かずに戦い続ける。

壁と刃が光の火花を散らす。

特訓は誰に知られることもなくまだ続いていた。

## 第7話 現代の眠り姫

どんなに手を伸ばしても光には届かない。

何が足りないのだろうか？

腕の長さ？

走る速さ？

呼ぶ声の大きさ？

祈る気持ち？

そのうちの1つか、2つか、3つか、あるいはぜんぶか。

それともここにはない他の何かか。

とにかく何かが必要なくて手が届かない。

暗い所は怖いと知っている。

明るい場所は暖かいと知っている。

だから手を伸ばすのに、届かない。

だから、届かない自分が悪いのではなく、届かない位置にある光が悪いのだと思うようになっていった。

新学期というものは決めるべき事柄がたくさんある。

クラス委員を決めたり、近々催されるレクリエーションの実行委員を選出したり、クラスの中で自分の役割を決める機会が多い。

叶は去年のクラス委員代理の実績からクラス委員に推薦されたが

「他にやりたいことがあるのでクラス委員は辞退させていただきま  
す。」

きっぱりと断った。

去年までの叶なら間違いなく周囲の期待に押し切られて仕事を引き受けていただろうからかなり自分の意思を伝えられるような強さを手に入れていた。

クラスメイトも担任ですら驚いていたのだから相当だ。

結局クラス委員長は加藤という真面目そうな生徒になり、副委員長は久住裕子という不真面目そうな生徒に落ち着いた。

叶は保険委員になり、一部の生徒が納得していた。

ロングホームルームで大体の役職が埋まり

「にははは、頑張るよ。」

最終的に久美が放送委員に収まって授業時間が終わりを迎えた。

「みんなご苦労だね。」

さっそく真奈美が労を労う。

「1人だけうまく仕事から逃げたな。このニート！」

裕子に人差し指で額をグリグリ押される真奈美は苦笑している。

「まあ、何にしてもこの目とこの足じゃいろんな人に迷惑かけるからね。そこは自粛したと言って貰いたいな。」

明るい雰囲気になれがちになるが真奈美は左足を事故で切断しその後左目をも失うというかなり悲惨な体験をしている。

そのため左目は眼帯をしているし左足は義足を付けている。

今でもよく知らないクラスメイトが真奈美と接するときはおっかなびっくりだし距離を置かれている感じはあった。

真奈美はその距離を無理に詰めようとしたりはせず皆が受け入れてくれる時をゆっくり受け入れるつもりでいた。

「そういうことなら仕方がない。」

「本音は仕事が目倒くさいだけだね。」

「ニート！」

じゃれ合う4人を見つめるクラスメイトの目は温かく好意的な雰囲気だった。

「あれ、八重花ちゃんいない。」

休み時間、ちよつとした用事で1組を訪ねた叶だったがお目当ての八重花の席には誰もいなかった。

「やっぱりいない。お手洗いかな？」

クラスの中や廊下を見てみるがやはり八重花の姿はない。

それほど急ぎの用事でも無かったのでまた後でいいかと諦めをつけて教室に戻ろうとすると

「叶。」

明夜が近づいてきた。

「明夜ちゃん、おはよう。」

「おっはー……」

無表情無感情でギャグっぽい挨拶をする明夜に1組クラスメイトが戦慄する。

（あの柚木さんがフランク（？）な会話を！？いったい何者？）

1組の暗黒のスリートップの1人、沈黙の明夜が普通に話しかける叶に、そしてその反応にクラス全員の目と耳が集中する。

「うん、それでね……」

（華麗にスルーした！！？？）

知人の奇抜な挨拶に苦笑いの欠片も浮かべることなく普通に会話を始めた叶にクラスメイトが戦慄する。

「ん、作倉。」

「おはようございます、羽佐間さん。」

（ボスキター！！！！）

スリートップの1人、実質的な頂点に君臨すると噂される夜叉姫由良ですら気さくに声をかける存在にクラスメイトは尊敬と畏怖の念すら抱き始めていた。

（彼女はいったい何者なんだ？）

1組クラスメイトは叶がいなくなるまで苦悩し続けることになり、後日スリートップの最後の1人である雌豹の八重花と仲が良い姿が目撃されたことで叶は神格化されたのだがそれはまた別の話である。いつの間にか叶はいなくなっていた。

「八重花ちゃん、今日は学校来てないんだ。病気かな？」

叶は携帯を取り出してアドレスを読み出す。

病気なら見舞いに行くが八重花の場合休む理由がそれだけではないことを知っていた。

「八重花ちゃん、何かに没頭すると他の事忘れちゃうから。」  
廊下の端に移動して電話をかける。

ブルルルル

コールはしているがなかなか繋がらない。

10回鳴らして出なければメールしておいてそれでも返信がなければ様子を見に行こうと考えていると呼び出し音が消えた。

「…叶？」

「あ、やっと出た。今日は学校の日だよ？」

「人間に与えられた時間は無限ではないの。だから今やらなければならぬことが出来たとき学校に向かう行為のすべてが無駄になるのよ。」

全く悪びれた様子もないがいつもの事なので諦めている。

「それはいいんだけどね、…」

叶が要件を伝えると

「そう言えばそんな約束してたわね。悪いわね、今日はちょっと手が離せそうにないわ。」  
「すまなそうに謝った。」

独特の価値観を持つ八重花だが決して唯我独尊ではない。

悪いことをしたと思えば謝る普通の感性も当然持っている。

「別にいいよ。八重花ちゃんが病気とかじゃないならそれで。何をやってるのか分からないけど頑張ってるね。」

「ええ、了解よ、リーダー。」

ガチャ、プープープー

「…リーダー？」

最近そんな名前で呼ばれるようなことがあったけど現実逃避でわからない振りをする叶は携帯をしまった。

「八重花ちゃんも結局ダメなんだ。それなら予定変更かな？」

叶は視線を吉葉の町並みに向ける。



高層ビルのほとんどないこの一帯は遠くまで見通せる。  
叶の視線の先には吉葉総合病院があった。

由良は授業中大人しく席に着いていた。

去年の素行を知る教師たちは目を丸くしているようだが自分ではそれほど重大な事とは思っていない。

去年の夏頃からはやるべきことが出来、もしかしたらクラスメイトや学校の関係者が魔女なのではないかと考えると衝動を起こしそうだったため授業に出る気がなくなっただけだったのだから。

今はソルシエールが失われ、復讐という目的がなくなりやっとな日常に戻ってきたと言える。

「であるからして…ええとだな、は、羽佐間…ここを…」

尤も、元からあった悪いイメージと去年の素行ですっかり教師生徒に恐れられている事実は変わらないが。

由良は指定された問題を解いていく。

去年の授業の記憶は曖昧だが今やってる内容なので難しくもない。

「…」

「…正解。」

由良は解き終わると席に戻る。

由良が動いている間クラスメイトが異常に静かだったが仕方がないことだ。

「…フンッ。」

仕方がないことだが…ちょっと拗ねてしまう由良だった。

特に事件もなくつつがなく放課を終えた学生たちは遊びに部活に勉強にと思いいに散っていく。

叶もまたその一人だったが今日はその連れ合い（儼、速）の姿はな

かった。

裕子はクラス委員会に引つ張られていき、久美は家の用事だと言ってすぐに帰っていった。

昼の電話のように八重花は家に隠っているし、真奈美はちょっとソフボール部に顔を出してみると言っていて出ていった。

あの体ではソフボールを続けるのは難しいだろうけどそこから逃げず話をしに行った真奈美の強さを叶は凄いと思っていた。

真奈美に言わせれば叶を見て決心したそうだが自分の事というのは得てして分らないものである。

「あ、明夜ちゃんと羽佐間さんを誘った方がいいのかな？」

叶の向かう先は2人にも少なからず関わりがある。

思い立ったので誘ってみようと1組に顔を出してみたがクラスの生徒に恐る恐る接されるだけで明夜と由良はいなかった。

「いつもないような気がするけど2人ともどこに行ってるんだらう？」

詮索するのも気が引けるので疑問に思うだけにして叶は学校を後にする。

家からも学校からも半年くらい前から何度も通っていたから道はすっかり覚えてしまっていた。

ちよつと抜け道も使つて到着したのは清潔感のある真っ白な建物、

吉葉総合病院。

「こんにちは。」

病室の位置は分かっているが受付の看護師に挨拶をする。

もはや顔馴染みと化した看護師は叶を見て破顔した。

「いらつしゃい。今日もお見舞いかしら？クスクス、熱心ね。」

ナースステーションでも話題の悲劇のカップル扱いを受けている叶はお辞儀をして部屋へと向かう。

病院内の進み方も覚えたままに。

病院の奥まった場所に位置するちよつと暗い病室。

部屋の前に立つて小さく深呼吸。

トントン

ノックをしても返事はない。

それを分かっているも少しだけ寂しく感じながら叶はスライド式のドアを静かに開いた。

「……」

部屋の主は中央にあるベッドの上にいた。

叶の到着にも気付く様子もない。

ベッドサイドには点滴と心電図のモニターがあり  
ピッ、ピッ

と規則的な機械音を奏でている。

ただそれだけ。

物々しい生命維持装置もなければ医師が張り付いているわけでもない。

「すう…すう…」

「こんにちは、陸君。」

部屋の主、半場陸はただ眠り続けているだけだった。

陸の症例は医師にとっては全く未知の奇病だった。

一部では現代の眠り姫と揶揄されるこの症状は糸巻きのような分かりやすい原因がないため有効な手立てがなく経過を観察し続けるしかないのが現状だった。

「顔色も良いし、うん、いつも通りだね。」

看護師の真似事をして確認をした叶は複雑な思いを抱いている。

叶たちは陸を眠らせた糸巻きを知っていた。

”運命視” Innocent Vision、そして”運命改変”

Akashic Visionの異能を与えた魔石アズライト。

人が持つには大きすぎる力の行使の反動が陸をいつ覚めるかもわからない眠りへと連れていってしまったのだ。

そして唯一陸を救い出せる可能性のあるアズライトと共鳴できるソルシエールは失われた。

だから叶たちには運命すらも超越する奇跡が起こるのをただ待つことしか出来なかった。

「新学期が始まったんです。…」

叶は最近あった出来事を何も答えない陸に語っていく。

「ジエムみたいな怪物に襲われたんですけどオリビンでズバッと…」  
若干思い出を美化しつつ楽しそうに語る叶。

不意に返事がかかるのを期待するようにみんなで話したことや琴の出してくれた栗蒸し羊羹が美味しかったことなど些細な事でも語っていく。

そうしているうちに日は傾いて白い部屋を橙色に染めていく。

冬に比べればだいぶ遅くなってきた夕日も見慣れた光景。

「私たちはみんな元気ですよ。だから陸君も早く元気になってくださいね。」

叶の瞳に涙はない。

陸は間違いなく生きているのだから。

また明日ここに来れば同じように会えるのだから。

そう思えるようになるまで少し時間はかかったけれど今はもう悲しみはない。

むしろいつ目覚めるのか楽しみにすら感じるようになっていた。

「また来ますね。」

椅子から立ち上がり出口に向かう。

ドアを閉める直前、扉のスライドする音に紛れて

『…気をつけて…』

「え!？」

陸の声が聞こえた気がして慌てて病室に戻るが当然のように陸は眠ったままだった。

「今のは陸君、ですよね?」

「すう…すう…」

寝た振りの可能性も考慮して頬をつついてみるが意外とプニプニの感触が返ってきただけで返事はない。

「眠っていても心配してくれてるんですね。」

結局陸が目覚めた様子はなく幻聴である可能性も否めない。

それでも叶は陸の言葉だと信じることにした。

「うふふ。」

幻でも声をかけてもらって叶は浮かれたように病室を出ていく。

「さようなら。また来ます。」

「はい、さようなら。…?」

「今日はご機嫌だったわね、あの子?」

「奥手な彼女もとうとう眠り姫の目を覚まさせるために口づけをしちゃったとか?」

「あー、あり得るかも。うーん、初々しいわ。」

看護師たちが叶の機嫌の良さを見て様々な憶測を口にした。

現実は物語のようには行かず、陸の目覚めは今はまだ雲を掴むような儂い可能性でしかない。

それでも雲のない空に手を伸ばし続けるよりは叶の心はずっと楽になった。

また明日を、そしていつか陸が目を覚ます未来を信じて強く生きていこうと思う。

そして強く成長した自分の姿を見てもらうのが叶のささやかで大切な夢だった。

「よし、頑張ろう。」

叶は気持ちも新たに赤く染まった町を帰っていく。

『…気をつけて…』

その言葉が示す意味をまだ知らぬままに。

## 第8話 暗躍する者の影

「オッケー。今日の部活終了ー！」

「ありがとうございます！」

威勢のいい声が体育館に響き渡る。

バレー部は近々行われる大会に向けて練習に励んでいた。

「ありがとうございます、良子先輩。乙女会の会長も兼任されているのに部員の指導をしてもらって凄く助かりました。」

「あ、あはは…」

これが美保や緑里だったら傀儡会長の事を馬鹿にするのだがそこまですぐで詳しい事情を知らない部員たちにとっては偉くなって忙しいはずなのに部活に出てくれる素晴らしい先輩だという認識でしかなかった。

乙女会では全く仕事をしていないなどと疑う筈もなくキラキラと輝く瞳を向けている。

「まあ、乙女会には優秀な人が多いけど部の方はあたしがしっかり指導してあげないといけないからな。」

「すみません。私たちが不甲斐ないばかりに。」

副部長がしょんぼりと俯く。

実力はあるのにどこか自信がないため力を発揮しきれていない良子が目をつけた次の世代のリーダー。

だからこそ自信をつけさせるために副部長を無理矢理やらせてみたわけだが、まだまだだった。

「あたしも3年だからいつまで部活の方に顔を出していられるかわからないけどあんなだけはっきり作り上げてあげるから覚悟しておきなよ？」

「は、はい！」

指を突き付けて宣言する良子に副部長は臆することなくしっかりと頷いて返事をした。

良子は満足そうに頷いて副部長の頭を撫でる。

「キヤプテン、片付け終わりましたよー。」

「わかった。全員撤収。」

部員たちが良子の号令を聞いてぞろぞろと更衣室の方に退けていく。頭を撫でられたままでポワンとした副部長と良子だけが残され

「くつくつく。これは副部長殿の成長度合いを隅々まで確認するいいチャンスかな？さあ、シャワー行こうか。」

「え、えーと、…や、優しくしてください。」

若干勘違いしている副部長の言葉の意味は分からないまま2人はシャワー室に向かい…筋トレ談義に発展するのだった。

緑里と葵衣はヴァルハラにいた。

葵衣はヴァルキリー関連の仕事と先日撫子から承った”太宮様”関連の調査の続き、緑里は学校の勉強をしていた…というかさせられていた。

「葵衣い。もういいでしょ？」

「駄目です。これからまた忙しくなるので勉強を見てあげられる暇がありません。自力で解けるようになってください。」

葵衣はほんの小さな苛立ちを常の無表情に押さえ込んで自分の仕事を進めていく。

ジユエリア関連の計画は今のところ予定通りに進行していて近いうちに第一陣が出荷されることになっている。

しかし”太宮様”に関する情報は皆無と言って差し支えない状況だった。

そもそも未来予知を行う占いについては大手企業トップが数人から十数人。

どんなに多く見積もっても3桁には届かない人数しか知らない。

日本だけで一億五千人のうちの数十人しか知らず、しかも情報を広

めようとしないうためネットの情報にはまったく引つ掛からないのだ。  
（意図的に”太宮様”の占いの情報を流し、占いを求める人で溢れた所で救済する形で確保するというのは…駄目ですね。）  
的中率の高い占いは確かに多くの人が興味を持つだろう。

だがそれは”太宮様”が不特定多数の悪意ある人間に狙われる可能性を大きくする。

そして先日侵入した時に感じた神聖さはおそらく葵衣の浅はかな策謀などお見通しだろうと思わせるものだった。

（こちらは期待できませんね。しかし太宮院様も…）

あれからさらに調べを進めたが小学生、中学生の時期はまったく言っていないほどに普通の子供だったらしく今のような特殊性はなかった。

変化が訪れたのは高校生になった初夏頃。

授業中に突然倒れ、そのまま病院に運ばれた琴は翌日から巫女装束で登校するようになったという。

（話を聞こうにも太宮院様と親しいご友人はいないようですし、手詰まりでしょうか。）

最後の手段として叶に直接話を聞くという方法もあるが”Innocent Vision”にヴァルキリーが琴を探っていることを知られると今後の行動に支障を来すため本当に最後の手となる。

「ふう、当面は調査を継続しつつジュエルの管理体制の強化に努めるとしましょう。」

”太宮様”の力が必要になるのはヴァルキリーの戦力が整ってからだ。

未来の可能性を磐石にするためにもジュエルの力は必要になるのは不可欠である。

「そう言えば大人しく勉強しているようですね、姉さ…」

思考に埋没していた葵衣が文句を言わなくなった緑里を労おうと横に目を向けるとそこに緑里の姿はなかった。

神隠し的な何かではなくサボタージュの方だ。



「…。」

葵衣は感情を表に出さないように訓練している。  
だから見た目は変わらない。

ただその背中に立ち上る怒りのオーラまでは隠しきれないでいた。

「ふ、ふふふ、しかも答えが間違ってますね。しかたありません。  
捕えてしっかりと理解できるまで勉強を見てあげるとしましょう。」  
葵衣はゆっくりと立ち上がり出口へと向かう。

部屋を出る直前に見えた葵衣の口許は笑うようにつり上がっていた。

半年ほど前、杏葉には不審死が頻繁に起こっていた。

現在それは”災害”の前兆で狂った人間の犯行だと認識されている  
が夜の闇の中には狂気が紛れていた。

そしてその狂気とはジエムを指す。

魔の力により負の感情を肥大化させられた人間が変容する化け物は  
怨みをぶつけるように人を襲った。

だがその被害が広がることはなかった。

むしろジエムとなった人物の行方不明として扱われることになった。  
それは自らの手を血に染めようと世の平穏を守ろうとした1人の  
少女の存在があったからだ。

タン

ビルの上から建川の町並みを見下ろす人の姿がある。

「…。」

風に乱れる髪を気にする様子もなく、風に含まれる微弱な魔力を探  
るように明夜は無表情の目をゆっくりと動かしていた。

「…異常ない。」

一通り周辺の気配を調査して特に怪しい所が無いことを確認した明  
夜は次の場所に向かうべくビルの端に立つ。

真下から噴き上げてくる風に体が揺れる。

2年になってようやく杏葉高校の制服姿になったがそのスカートが

はためく。

ソルシエールがあつた頃は特に気にすることもなく跳んだがその力が失われた今は一度立ち止まることにしていた。

トンツ

地上数十メートルの高さで明夜は跳ぶ。

一歩間違えば地面に落ちたりリングのようにくぐちやくちやになるというのに恐れた様子もなく幅跳びの要領で空を駆け、

タンツ

隣のビルの屋上に問題なく着地した。

「…。」

明夜は自分の手を見つめると数回拳の開け閉めを繰り返す。

「ファブレは消えた。だけど新しい敵が来た。」

今度の敵は叶と八重花を狙ってきた。

それは何か目的があつてシンボルやソルシエールなどの”非日常”の側にいる人間に接触してきただけと考えられなくもない。

「だけど今後も”Innocent Vision”やヴァルキリーにだけ接触してくるという保証はどこにもない。」

その裏で罪のない人たちがその毒牙にかかっている可能性を否定することはできない。

だから明夜は動いている。

力なき”日常”に生きる者を守るために。

「…。」

明夜は何も語らず、今日も人々を守るために飛び回り続ける。

たとえその手に戦う術が無かったとしても。

草木も眠る丑三つ時、八重花は部屋の電気もつけずパソコン画面を凝視していた。

あれから2日、幾度か無意識に落ちた以外はほぼ不眠不休でパソコンと向き合っていた八重花はすでに乙女としていろんなものを捨て

かけていた。

髪はボサボサで目は充血し、目の下にくまを作った姿を見れば百年の恋も一時に冷めそうだった。

それでも八重花が気にしないのは見せるべき相手である陸が目覚めておらず、この行為が陸の目覚めの助けに繋がる可能性を秘めているから。

そして何より陸が見てくれで八重花を嫌うような狭量な男ではないという信頼があるからだだった。

ピコン

ソフトが電子音を響かせる。

その音は八重花にとつて神の声に等しかった。

「ふ、ふふ、…やったわ。そう、そういうことだったのね。」

八重花はマウスを握りしめたまま肩を震わせている。

喜びのあまり声が出ないのかと思いきや顔を上げた目はむしる怒りに燃えていた。

「ずいぶんと手の込んだ結界を組み上げたものね。」

八重花は膨大な数のトライ&エラーで発見された2人の位置をマップに記していく。

しかしそれはマップではなくその隣に置かれた白い空白の上にとつた。

映像データの時間と連動したポインターは見る間に線を描いていく。叶と八重花、2人の動作を鏡写しにしたように。

それは商店街に入ってから人型の闇を見つけて逃げ、諦めて戦い、商店街を去るところまでで終わった。

「これをマップの反転データのフィルターと被せると…」

手慣れた作業で反転マップを乗せるとそれはびったり地図データの道と連動していた。

「これで決まりね。この結果は商店街の幻覚を作り上げたわけじゃない。商店街の中にある鏡やガラスの中に反転した商店街を作り出し私たちを放り込んだのね。効果範囲は商店街通りの全域。だから

カメラには最後まで映らなかつた。」

八重花が偶然見つけたのは映像データの中に小さく映るカーブミラーや商店のガラス窓の中の叶と八重花だった。

解像度が荒くてなかなか見つからなかつたが自宅パソコンのスペックを最大限に利用し根気よく探していくことでとうとう答えにまでたどり着いた。

だが瞳の炎は消えない。

「幻影の次は鏡像反転の結界ね。本物か、それともそのブラフを誘導する偽物か。」

八重花は椅子に大きく背中を預けて仰向けのようになりながら天井を睨み付ける。

日夜酷使した目にとある人物が浮かび上がり頭痛がした。

「どちらにしても面倒なことには変わらないわね。まずは…」

八重花はバツと椅子から勢いよく立ち上がるとバツと飛び上がりバツと布団を被った。

「zzzz…」

八重花は眠る。

来るべき戦いに備えるために。

明夜が去り、八重花が眠りについた壱葉の町。

建川とは違い壱葉は人と共に眠りについていて物静かな空気を月明かりが照らしていた。

「オーッ！」

夜の町に遠吠えが響く。

就寝した人々が目覚めるほどではなく、まだ起きている人間がいたとしても犬の遠吠えに聞こえたであろう声。

だがそれは獣ではなく夜よりも暗い人型の闇だった。人型の闇は家の屋根の上で背に月明かりを浴びながら雄叫びをあげる。

「オーツ！」

人を襲うにしては遅すぎる。

深紅の瞳は何を見ているのかわからない。

家の屋根を飛び回り、暗い道を駆け抜ける人型の闇はとうとう足を止めた。

その瞳が笑みを浮かべたように細くなる。

目の前にあるのは一軒の家。

泥棒に入るほど裕福そうには見えない家を人型の闇はじっと見つめ、ゆっくりと歩き始めた。

表札には「作倉」、そう書かれた家に人型の闇が近づいていく。

誰もが眠り鎮まり、誰も怪異が歩いている異常に気付かない。

「ツ！？」

だが人型の闇の足が縫い付けられたように止まる。

細まっていた目を見開き、作倉家の屋根の上を見上げていた。

そこに、あるはずのない人影があった。

目撃者がいたところでターゲットもろともに排除してしまえばいい。しかし人型の闇は家への侵入をあっさりと断念して逆方向に駆け出した。

人影がその後を追う。

両者共に風のような速度でおよそ常人のものではない。

人型の闇が化け物なのは疑いようがないが、それに追従する人影は月明かりに翻るスカートを浮かび上がらせていた。

人の姿をした”化け物”は徐々に人型の闇との距離を詰めていく。

「オーツ！」

逃げきれないと判断した人型の闇が足の裏を滑らせて急停止し、振

り向きざまに拳を振るった。

だが人影は予測していたように回避して距離を取った。  
睨み合う両者は互いに無手。

だが人影があくまで人の姿をしているのに対して人型の闇は鉤爪のように大きく鋭利な武器だった。

「ッ！」

互いに向かい加速し、一瞬の交錯で離れる。

静寂が世界を支配する。

それを破ったのは何かが倒れる音、そして

「オーッッ！」

獣のような雄叫びだった。

人影はゆっくりと振り返る。

その手にはいつの間にか剣が握られていて、その左目は朱色に輝きを放っていた。

人型の闇は砂粒のように分解しながら消滅していく。

人影はそれを見届けると一度顔を上げ、遠くなくなってしまった作倉家を見てかすかに笑みを浮かべると影に溶けるように消えていった。

## 第9話 春の麗の眠たい日

「ふああ…」

春麗かな朝、春眠暁を覚えずを体現するように眠そうな生徒が見受けられる中、叶もその1人だった。

机に着くなりアクビをしたところを裕子たちにはっちり見られて顔を赤くした。

「眠そうね？何々？夜中まで何してたのかな？」

好奇心の塊のように尋ねてくる裕子だが叶は慌てる様子もなく首を振る。

「早く寝たよ。ただ最近うちの近くに野良犬がいるのか時々遠吠えが聞こえるの。そのせいでちょっと目が覚めちゃって。ふああ。」

真つ当な理由に裕子がつまらなそうな顔をした。

「にははー、それにしても眠いよね。」

「少し前まで寒かったのに急に暖かくなってきたからね。」

久美の意見に真奈美が賛同する。

いつもならここで芳賀が何か言ってくるのだが

「zzzz」

当人は机に突っ伏して寝息を立てていた。

腕枕をして気持ち良さそうに眠る姿は可愛く見えないこともない。

裕子はその顔を覗き込み

キユポン

手にしたマジックインキの蓋を外した。

「裕子ちゃん!？」

「それはさすがにまずいんじゃない?」

「にははは、やっぱり定番の肉かな?」

制止に入る叶と真奈だが久美は乗り気だ。

「大丈夫、水性マジックだから。」

キユツキユ

裕子は笑いながら本当に書いてしまった。

そこに書かれたのは「猿」。

「猿？」

「お猿さん？」

「にはは、ぴったりだ。」

裕子は満足げに頷いている。

だがなぜ猿なのかと真奈美が考えるとすぐにある可能性が浮かび上がってきて、顔が赤くなった。

「にははあ。」

久美も同じ考えにたどり着いたらしく顔を赤らめていた。

「なんでお猿さん？」

叶だけがよく分かっているらしく首を傾げていた。

その後、何故か芳賀はクラスの男子に追い回されるはめになっていた。

八重花もまた睡魔と戦っていた。

尤もほとんど陥落寸前で盛大に舟を漕いでいたが。

「東條、昨日休んでたけど風邪か？」

担任が名簿を付けながら尋ねる。

だがこの時八重花は正常な判断をする思考が眠っていた。

だから口をついて出たのはある意味純粹な魂の言葉。

「この身を焦がし…焦がれるほどの、恋の病。」

………

クラスが静まり返る。

その言葉を深読みした者は八重花の昨日の行動を想像して例外なく顔を真っ赤にしていた。



「ま、まあ、その、なんだ。ほ、程々にな。」  
担任も日和った忠告でお茶を濁して話を打ち切ろうとしたがペンを落としてしまいうくらい動揺していた。

「……?」  
八重花はまだ夢の中。

その後、情熱的で一途な雌豹という通り名を授かることになるのだがその事実を八重花はまだ知らない。

緑里は背筋をシャキツと伸ばして授業に励んでいた。

内心

(あー、暖かくてここで寝たら気持ち良さそう。)  
と全力で考えていたが今の緑里がその行為を実行することは自殺志願と同義だった。

何故なら緑里の背後には監視者の目が光っているからだ。  
「……」

振り返らなくても葵衣が動向を監視しているのが分かる。

確かに昨日葵衣が考え事をしているうちに逃げ出し、家でも撫子が帰ってきたことを理由に勉強を中断したが、まさかここまで怒るとは思っていなかった。

(心配してくれるのはわかるけどさ。)

ただどそれで勉強に縛られるのは納得行かなかった。

勉強しろと言われ続ける子供がやる気を無くすのと同じ理論である。  
とは言え

(ジーツ。)

(ひい!)

葵衣の怒りが収まるまでは大人しくしていようと心に誓う緑里だった。

昼休み、八重花を昼食に誘いに来た叶たちが見たのは机に張り付いて全く顔を上げようとしない八重花の姿だった。

「どうかしたの、八重花？」

「…」

裕子が尋ねるが反応なし。

「ん、何か言ってる？」

八重花がブツブツと何かを呟いているのに気付いた真奈美が顔を寄せる。

「…もう死にたい…」

「八重花、早まっちゃダメだ！」

「え！？なに、どうしたの？」

八重花の細々とした呟きに真奈美が危機感を抱いて慌てて肩を揺すり、それを見た裕子たちが驚く。

結局どんなに揺らしても八重花は貝のように閉ざっていて顔を上げようとはしなかった。

「どうしちゃったんだろ、八重花ちゃん？」

心配そうにしていた叶は由良がこっちに来いというように指をちょいちよいと動かしているのに気付いた。

「あ、ちよつと待っててね。」

一声かけて由良のところに行くとそのまま廊下に連れ出された。

いまだに由良と仲良くしている叶が不思議でならない裕子たちは不安げな顔をしていて、どちらの心情も理解できる真奈美はただ見守るだけだった。

由良は廊下の窓に身を預けるとクツクツと押し殺したような笑いを漏らした。

「八重花ちゃん、どうしちゃったんですか？」

用件がわかっている叶は八重花が心配だから真剣に尋ねる。

悪のボスの笑いを浮かべる由良と真剣に問い掛ける叶の構図は叶が脅されている感じなので周囲の生徒は気を揉んでいた。

どんどん自分の評価がドン底に向かっていているとは露知らずひとしき

り笑った由良は叶の方に振り返った。

「八重花は朝に寝惚けてな、失敗をやらかしちまったんだ。クク、今はそれを自覚して落ち込んでるってわけだ。しばらく放っておいてやれ。」

対外的な印象は最悪でも叶にとっては優しく頼りになる人に思えた。だから2人きりで話す機会が得られたことを幸いに叶は勇気を振り絞った。

「はい。あの、羽佐間さんのこと、お姉さんで呼んでいいですか？」

「お姉さん？まあ、兄貴や姉御よりはマシだが…」

由良は少し悩むように目を伏せ、顔を上げると頷いた。

「わかった、それでいい。だが俺もこれからは力ナって呼ぶからな。」

「これまでは「羽佐間さん」に「作倉」だった。

だけど仲間になってからも随分経っている。

仲間意識を割と気にする由良はきっかけを探していたのだった。

「力ナって呼ばれるのは初めてです。なんだか嬉しいです。」

恥ずかしそうにはにかむ叶を見て由良がわずかに相好を崩す。

「それじゃあ失礼します、お姉さん。」

「ああ。」

嬉しそうに去っていく叶の背中を見送った由良は肘を窓のさんにかけて寄りかかり苦笑する。

「結局年上扱いだが、まあいいか。」

由良は教室に戻らずそのまま購買に向かっている。

「あー、こういう日は屋上で昼寝したいな。」

サボり癖はだいぶ抜けたものの授業がかつたるいのも事実。

暖かな陽射しの誘惑に負けた由良は購買で買ったパンを片手に屋上に登り、気ままな昼寝に勤しむのであった。

昼食後の授業、それは睡魔の大軍勢との戦いとなる。

満腹感と又ク又クした気温、そして老教師の担当する古文の授業という三種の神器を前に次々と陥落していく生徒が増えていく。美保は頼杖をつきながら次第に重くなっていく目蓋に抗っていた。無意味にペンを回してみたりするが眠気の解消には至らない。

ただ乙女会の品位を維持するために極力授業中眠らないようにとのお達しが出ているのだ。

ちなみに「極力」は良子が会長になってから追加されたものであり十中八九会長は夢の中だろう。

その不公平さへの不満でジュエルが発動しそうになるのを堪えつつ美保は視線を巡らせる。

ざっと見ただけでも男子の大半は脱落している。

女子はさすがに大っぴらに突っ伏して寝ている生徒はいないがそれでも頼杖をついた格好で舟を漕いでいる。

美保の視線が悠莉に向けられた。

少なくとも後ろから見た姿はしっかりと座って授業を受けているように見える。

しかし美保の眼鏡で強化された視力は見逃さない。

(手が動いてない。)

起きて授業を聞いているなら板書しているはずなのに悠莉の手は止まったまま。

(ここは同じヴァルキリーのメンバーとして規則違反の注意をしてあげないといけないわね。)

そんなことは思っておらず悪戯心満載で携帯を取り出した美保は教師に見えないようにしながら悠莉に電話をかける。

ブウウウン

ブウウウン

ちゃんとマナーモードにしていたらしく突然の着信音で飛び起きる光景は拝めなかった。

「……ん。」

しかもバイブレーションでは悠莉は起きない。

思いの外つまらない結果に落胆しかけた美保は

「…あ、ん…」

悠莉の艶かしい声にガバツと頭を起こした。

見るとまだ眠っているようだったが耳まで赤くなっているし吐息が色っぽい。

「ん、ん…」

むずがる姿も可愛らしさを通り越してエロい。

枯れてる老教師は耳も遠いのか気付いていないようだ。眠りの淵で抗っていたクラスメイトは男女問わず驚いた表情で悠莉を見ている。特に男子は目を充血させて凝視していた。

（クツ。面白いことにはなっただけどこれはヤバイわね。）

男のリビドーが暴走する前に止めなければならぬ。

とりあえず通話は切ったが息を切らした喘ぎだけでクラスの空気が悶々としている。

美保は消しゴムの端を千切ると親指の上に乗せ、机の横から悠莉を狙う。

左目を瞑った状態で

（ジュエル。）

身体能力を強化した。

出力を調整しつつ、

バシユ

指弾を放った。

バンツ、ゴンツ

（ヤバツ、強すぎた！）

背後から強打された悠莉はそのまま机に額を激突させた。きつとおでこと後頭部にたんこぶができているはずだ。

「…。」

だが悠莉は何事もなかったように起き上がって板書を始めた。

（よし、気づいてな…）

心でガッツポーズをする美保の手の携帯が鳴った。

すぐに止めるとメールの着信だった。

メールは悠莉から、だが美保が見ていた限り携帯を弄っている風には見えなかった。

(ノールツクタイピング!?)

技巧に驚きつつメールを開いた美保はおののいた。

文面は

『後でお話があります。』

その日の放課後、美保を見た者はいなかった。

こうして皆が眠くなるような暖かな日。

病院でも中庭に出て日向ぼっこをする人の姿が多かった。

「ふああ。今日はいい陽気ね。」

「うん、いい妖気ね。」

看護師の1人がアホ毛を揺らす。

一瞬寒くなったがすぐに春の暖かさが戻ってくる。

「こんなに眠りやすいと眠り姫じゃなくてもずっと寝ていたくなるわよね。」

「123号室の半场君ね。不謹慎よ。」

そう言いつつも移ったのか小さくあくびをすると恥ずかしそうに咳払いした。

「でも逆に寝てるより気持ちいい陽気だからひよっこり目を覚ますかも知れないわよね?少し窓を開けてこようか?」

「それならちようど見回りだから私が行くわ。」

看護師は席を立った。

「お願いね。」

「妖気に気を付けてね。」

「もうええっちゅうねん。」

同僚の漫才を背中で聞きつつ巡回を開始した。

寒い時期は寒い暑い要望が多かったが春はどの患者も穏やかに見えた。

患者の笑顔に看護師も笑みを浮かべて対応し、笑顔の循環が生まれしていく。

笑えばどんな病気も追い払えるなんて楽観的な事を考えているわけではないが怒ったり難しい顔や悲しい顔をしているよりははずっといい。

看護師たちはいつも笑顔を絶やさぬよう心掛けているのだ。

そして患者の様子を見回っていた看護師は最後に陸の眠る123号室を訪れた。

「現代の奇病ね。あんな可愛らしい彼女さんが待ってるんだから早く目を覚ましてほしいものね。」

よくお見舞いに来る叶を思い浮かべた看護師はムツと眉を寄せて首を捻る。

「あれ？あの子のお見舞い、他にもたくさん女の子がいたわね。」  
叶と一緒に来ることも多い裕子たち、ちょっと怖い感じのする由良と明夜、どこかの深窓の御令嬢と思われる悠莉、さらには言葉総合病院の出資主の花鳳グループの撫子と側近の葵衣も何度かお見舞いに来ている。

「女の子ばかりだけどどういう関係なのかしら？もしみんな彼女さんだったりしたら目を覚ましたらちよっとお説教しないといけないわね。」

看護師は決意を胸にスライド式のドアに手をかけた。

開いた瞬間、

「きゃっ！」

季節外れの春一番が吹いたのかナースキャップが飛ばされてしまった。

埃を払って被り直してから病室に入ると窓が開いていて心地よい風

が吹き込んでいた。

「あら？誰かお見舞いに来た方が開けたのかしら？」

ナースステーションにつめていたが今日はまだ学校の時間だからこれまで見たことのある少女たちはお見舞いに来ていない。

すべての人をチェックしているわけではないが少し気になって窓辺に立つとベッドサイドのテーブルに飾ってある花瓶に見覚えのない花が差してあった。

「マーガレット、可愛らしい花。やっぱり誰かお見舞いに来ていたのね。」

看護師は少し窓を閉めて陸の様子に異常がないことを確認して病室を後にした。

誰もいなくなつた病室ではカーテンだけが風に揺られて動いていた。



## 第10話 シャッターチャンスを狙え

人型の闇の襲撃は始業式の日以来なく、表面上はヴァルキリーも大  
人しい。

週始めから慌ただしかった”Innocent Vision”の  
面々もようやく落ち着いてきた新学期初の休日。

叶は

「すう、すう。」

まさしく春眠暁を覚えずを体現するように日が上ってもベッドで又  
クヌクと眠っていた。

気持ち良さそうに寝ていて目を覚ます気配はない。

そんなお寝坊な叶の部屋のドアが音も立てずに静かにゆっくりと開  
いていく。

ギシツとわずかに軋む音すら注意を払うように何者かの足が止まる。

「ん……すう……」

叶が起きたかと思われたが寝返りを打っただけだった。

掛け布団を抱き枕代わりに、パジャマから少しだけ覗くお腹がセク  
シーだ。

侵入者は慎重に気配と足音を殺しながら叶のベッドへと近づいてい  
く。

手には差し込む陽射しで輝く金属の何か。

そしてとうとう叶が気付くことなくベッドサイドまで侵入者はたど  
り着いてしまった。

寝こけてちよっぴり間抜けな可愛らしい顔を見た侵入者は手をゆっ  
くりと上げていき

カシャッ

シャッターが切られた。

「んん…ふえ？」

「おっハロー、叶。」

「……………裕子、ちゃん？」

まだ寝起きで頭の回転が緩い叶はようやくデジタルカメラを手に上機嫌に手を振っている裕子に気が付いた。

「…。」

ポテン

「裕子ちゃんはうちの子じゃないから…まだ夢なんだよ。」

寝起きの無思考理論を展開して納得した叶はまた枕に頭を埋めて眠ろうとする。

「あー、デジカメじゃなくてビデオにすればよかった。こんなに面白くは。」

カシヤカシヤと写真を取る音によやく叶の頭も本格稼働を始める。

「そう言えば裕子ちゃん…何してるの？」

裕子がいることを認識すれば次の疑問は当然そこに当たる。

裕子は胸を張って右手のデジカメを見せた。

「前から欲しかったんだけど昨日買ったのよ。だから練習も兼ねて叶のドツキリ寝起き訪問。フヒヒ、お宝映像たっぷり手に入ったわよ。」

「あ、ええー！？ひゃあ！」

叶はカメラを向けられている事実気付いて飛び起きた。

しかし布団を突っ掛けて転び、盛大にパジャマを捲り上げさせながらお尻を突き出す形で上半身から倒れる形となった。

「シャッターチャンス！」

カシヤッ

「わーん、撮らないでよお！」

朝から叶の悲鳴が響く平和な日の始まりだった。

「むう、酷いよ、裕子ちゃん。」

「あはは、ゴメンゴメン。」

2人は真奈美たちを迎えに行くために並んで歩いていたが叶は頬を膨らませて拗ねていた。

裕子は謝っているが悪びれている様子は少ない。

「写真も消してね。」

「それは…どうしようかな？叶のセクシーショットを見せれば半場くんも目を覚ますかもしれないから取っておこうかな？」

「う…。」

陸の目覚める条件が分からない以上裕子の案も一概に馬鹿に出来ない。

叶は羞恥と陸の目覚めを天秤に掛け

「…他の人には見せたら駄目だからね？」

妥協した。

「わー、半場くん愛されてる。」

楽しそうに笑った裕子は適当に頷くだけ。

「絶対駄目なんだからね。」

必死に抗議する叶を裕子はのりくらりとかわすのだった。

次に訪ねたのは久美の家。

中山の表札がある簡易の門を潜って呼び鈴を押す。

出てきたのは久美母だった。

能天気な久美とは別種のおっとりした人だ。

「あらー、裕子ちゃん、叶ちゃん、いらっしやい。久美ちゃんにご用事？」

「ドッキリ寝起き訪問の時間です。久美はまだ寝てますか？」

面白そうな企画を聞くと久美母は目を輝かせた。

この辺りはまさに親子だ。

「まだ起きてきてないわよ。うふふ、可愛く撮れたら一枚頂戴ね。」

「了解です。」

「お邪魔します。」

ノリノリの裕子と久美母に苦笑しつつ叶も中山家にお邪魔した。

裕子に倣って足音を立てないように久美の部屋に向かう。

何度も来ているので部屋の位置は知っていた。

「ストップ。久美の声がするわ。」

「もう起きてもおかしくない時間だからね。」

むしろ叶が寝坊したからあんな面白い写真が撮れたわけで普通なら起きている時間だ。

「なんだ、つまんない。久美、遊びに行こー。」

「にやにや、ゆうちゃん!？」

悲鳴のような声が聞こえたが裕子は構わず部屋のドアを開け

パジャマの下は履いてなくて下着姿で、上も今まさに脱ごうとして胸元まで上げたグラビア写真のような格好をした久美を見た。

「…。」

「…。」

久美も叶も驚きで固まり

「激写!」

裕子だけが嬉々としてシャッターを切っていた。

「あらー、可愛く撮れたわね。ポスターサイズで印刷出来るかしら?」

「にやー、やめてー!」

かしましい親子のやり取りを出されたお茶を飲みながら見ていた裕子と叶は時計を確認する。

あんまりのんびりしていると遊びに行く時間がなくなってしまう。

「久美、そろそろ行くよ。」

じやれ合う子猫みたいな2人に声を掛けて立ち上がると久美も渋々ついてきた。

「裕子ちゃん、また可愛い久美ちゃんの写真が撮れたら教えてね。」

久美母、娘と精神年齢が同じくらいに見える娘大好きママさんである。

「はい。ごちそうさまでした。」

「お邪魔しました。」

「行つてきます。」

こうして久美を仲間に加えて一行は次の目的地、八重花の家に向かう。

「八重花なら少し前に出掛けたわよ。」

東條家を訪ねて八重花母に尋ねた第一声である。

「連絡してなかったからね。当てが外れたか。」

裕子は難しい顔で悩み出したが叶と久美はしょんぼりしていた。

裕子のこの計画性の無さが今回のとんでも写真を生み出すきっかけになってしまったのだから。

「仕方がないわ。とりあえず真奈美の所に行つて、それから八重花に連絡を取ろうか。」

「あ、そう言えば真奈美ちゃん、今日は足の事でお医者さんに行くつて言つてた気が。」

デジカメを買いに行つてた時の会話なので裕子は初耳だった。

「病院かあ。…つまり、診察の後に真奈美は半場くんの所にお見舞いに行くわけね?」

「多分そうじゃないかな?」

これまでも定期的な診察の後にはそのままお見舞いをしてくと聞いていた。

「誰もいない個室に2人きり。これは何も無いと思う方がおかしい。」

「

「そう、かな?」

しょっちゅう1人で見舞いに行く叶はなにもしないので首を傾げるが裕子は聞いちゃいない。

「にやはは、こっそり覗かないと。」  
久美も乗り気だ。

恐らく自分がやられた腹いせを他人にも味わわせたいのだろう。  
間違った復讐の連鎖である。

「そういうわけだから急遽病院へ行き先変更。」  
「おー。」

裕子と久美が突撃隊のように病院に向かっていき

「あ、待ってよ。」

叶も慌てて後を追いかけるのだった。

陸の病室は入院病棟1階の個室である。

つまり中庭を経由して窓からでも侵入することができるのである。

裕子を先頭にしたパーティーは人目を避けるように灌木の陰を進み、  
壁沿いを歩き、そしてとうとう目的の部屋の窓に到着した。

裕子は手で立ち止まるように合図をすると神妙な顔つきで振り返った。

「これより諜報活動を開始する。各員、発見されないように続きたまへ。」

「にやはは、ラジャー。」

「いいのかな？」

叶は否定的だったが裕子は構わず窓から中を覗いた。

そこでは、まるで真奈美が眠る陸にキスをしているかのように顔を寄せている後ろ姿があった。

「お宝ゲット！」

「ん？…何やってるの、裕子？それに久美、叶まで。」

「やっほー。」

「にやはは、ゆうちゃんは謀報活動には向かないね。」

「だから駄目だと思っただのに。」

窓の外からひよっこりと顔を出した3人を見て真奈美は首を傾げた。

正面から入り直して陸の病室に入るとすぐに裕子はカメラを手に不敵な笑みを浮かべた。

「さあ、芦屋さんや。白状してもらいましょうか？」

「今日は探偵の真似事でもしてるのかな？」

余裕な態度を崩さない真奈美に対して裕子は早速さつき撮った決定的瞬間を見せた。

「いったい何をしていたのかしら？話してもらえるわよね？」

真奈美はまじまじと写真を見つめ

「へー、よく撮れてるね。面白いな。」

全く動じることなくむしろ他人事のようだった。

「なんでそんな？これってキス…」

「残念だけどあたしが手前に居すぎだね。座っていた椅子から立ち上がるたびに義足が引っ掛かって前屈みになったんだよ。」

真実などそんなものである。

裕子はあからさまに落胆した様子で足をプルプルさせた。

「なんだ、つまらない。デリートデリート。」

「あ…」

裕子が写真データを消そうとすると真奈美が小さく声を漏らした。

裕子はそれを聞き逃さない。

「…ふーん。真奈美さん？」

「な、何？」

「どないしましょか？」

叶と久美の分からない主語の抜けた会話だが真奈美は顔を赤くして唸っていた。

「…は のたい焼き。」

「3個ね。」

は とは壱葉で一番と言われるたい焼き屋である。

アノコの他にクリームやチーズが人気なのだがお値段が1つ250円と高めなので学生たちも余裕のあるときのご褒美に買うような店なのだ。

「…わかったよ。」

「まいどあり。」

がつくりと頂垂れる真奈美の前でニシシと笑いながら裕子はデジカメをポケットにしまった。

「すう、すう…」

これだけ騒いでいてもやっぱり陸が目覚ますことはなかった。

「んー、やっぱり奢りだと美味しいわ。」

「うっ…」

1人たい焼きを3つも手にした裕子は満面の笑みで商店街を歩いていた。

その後ろを1つだけたい焼きを買った叶と久美が続き、思わぬ出費に落ち込む真奈美の手には何も無い。

「真奈美ちゃん、私の少し食べる？」

「にやはは、こっちのチーズも美味しいよ。」

「2人とも、ありがとう。」

真奈美は涙を浮かべながら一切れのたい焼きを食べる。

「後は八重花の面白い写真が撮れると面白いんだけどね。」

すっかり気を良くした裕子は決定的瞬間を納めるために周囲を見回している。

八重花が一番いそうなのがこの辺りだったからだ。

「八重花はあんまり格好に頓着しないからね。お洒落な洋服屋の多い建川よりも近場の壱葉にいと見た。」

「そもそも洋服を見に出たとは限らないんだけどね。」

気分はすっかり名探偵の裕子は勝手に推理を進めているが前提がい



ろいろ間違っていた。

だが今日は裕子に神が降りていた。

「お、八重花発見。」

「……!?」

3人が驚きの声が出ないほど驚いて視線を前に向けると確かに八重花がいた。

商店街のサイドミラーやショーウィンドウを覗いて回っている。

「拳動不審ね。これは秘密の匂いがするわ。」

それを言えば裕子の方が傍目には怪しかったりする。

八重花は何を買ってもなく店の前を通過していく。

「にはは、ゆうちんのいう通りやえちん拳動不審。」

「……。」

叶と真奈美は八重花が先日の人型の闇について調べていると気付いたのでノーコメントだった。

八重花は商店街の端まで終えると裏路地に入ってしまった。

「あの辺りは飲み屋が多い界限。なにやら美味しいネタの予感がするわ!」

裕子は八重花が向かった路地に向かっていく。

ここまでついてきた被害者3人は疲れ気味でゆっくりと追いかける。裕子が路地の向こうに消え

「ギニャー!」

猫が思いきり尻尾を踏まれたみたいな悲鳴が響いた。

「ゆうちん!」

「何だ?」

「とにかく行こうよ!」

叶と真奈美はいざというときのために戦う覚悟をしながら路地に駆

け込んだ。  
そこには

「あわわわ……」

「あら、叶たちも一緒だったの。」

地面にひっくり返ったカエルみたいに伸びている裕子とパンパンと手を打ち合わせている八重花がいるだけだった。

「後をつけられてるようだったからここに誘い込んで不意討ちにしたらこのざまよ。」

八重花はフンと鼻を鳴らした。

恐らくは敵を誘き寄せるつもりであからさまに分かりやすく調査していたのだろう。

だがかかったのが無関係の裕子だったため不機嫌なのだ。  
八重花の目が裕子の手にあるデジカメに止まる。

「ふーん、面白いもの撮ってるわね。」

八重花と3人が一斉に頷き、カメラと携帯を構えていた。

叶たちの手にはアイスやクレープが握られている。

裕子ののされて伸びた恥ずかしい写真をネタに奢って貰ったのだ。  
みんな同じような写真を撮られたため手加減はない。

「ひーん、もう許してえ！」

「だめー」

## 第11話 報告会

週明けの月曜日、すっかり平常授業に移行した学校は一定のリズムでの生活になっていた。

朝登校して午前の授業を受け、午後は眠気と戦い、そして放課後を迎える。

「カナ、いるか？」

「あ、お姉さん。」

「！？」

教室を訪ねてきた由良と叶のやり取りに真奈美を含めたクラスメイ  
トが驚いて動きを止めた。

当の2人は気にした様子もなく叶がドアのところに近づいていく。

「どうかしたんですか？」

「近況報告をするぞ。連絡は任せた、リーダー。」

「あ、はい。わかりました。」

叶はすぐに携帯を操作して”Innocent Vision”の  
メンバーに集合メールを送る。

啞然としたままの真奈美の携帯も鳴るがフリーズしたままだった。

さらに琴にも連絡を取るが

「今日は琴先輩に予定があるそうです。」

というわけで太宮神社ではなく商店街のファーストフードに集まっ  
ていた。

「それでリーダー。召集した理由は？」

八重花がわざとリーダーと呼んで煽ると案の定叶は慌て出した。

「えっと、あの…」

不安げに瞳を潤ませて由良に助けを求めると”お姉さん”は仕方が  
ないとばかりに溜め息をついた。

「まだまだ精進が必要だな。」

「すみません。」

「まあ、いい。今日でジエムに似た化け物にカナと八重花が襲われて1週間だ。その間に分かったことや起こったことがあれば検討するぞ。」

こうなることは予想済みだったらしく由良はあっさりと進行役を引き継いで話を進め始めた。

叶がやっぱりリーダーは由良の方がいいんじゃないかと思ったが口には出さないでいた。

「俺は町で以前のような不審な事件が起こってないか探ってみたがまだ特にそれらしい事件は起こってないな。」

「夜の町も平和。」

由良と明夜が独自に調査した結果を報告する。

由良は主に不良グループなど裏側に近い人脈から不審な殺人が行われていないかの聞き込み、明夜はこれまで通り深夜の町を飛び回つての直接的な捜査を行っていた。

「まだ動き始めたばかりだからなんとも言えないが現状では2人が見た人型の闇はジエムやデーモンとは違うような気がする。あるいは人を媒介にしないタイプのジエムなのかもしれないが今までとは違うようだな。」

「うん。夜が静か。」

真面目な調査と考察に叶と真奈美が感心しつつ冷や汗を流す。

2人とも現在の”Innocent Vision”の貴重な戦力だが調査は何もしていなかった。

「ただそこは慣れた”Innocent Vision」と新規メンバーの違いと納得する。」

「私は例の結界に関する結界について報告するわ。」

「ー!？」

だが”Innocent Vision”としては新規メンバーである八重花が手を上げたことに2人は焦る。

「色々な解析をしたらあれは商店街全部を作った幻覚でも私たちの認識がおかしくなったわけでもなくて鏡の世界に飛ばされたのよ。監視カメラの映像で鏡の中にだけ姿が映っていたのを確認したわ。」

「監視…」

「カメラ…」

叶と真奈美では確認の仕方すら思い付かない方法にただ聞いている事しかできない。

「鏡の結界、幻覚…」

由良が難しい顔をして俯く。

「結界を作り出したのがあの人形の闇なのか別の誰かなのかはまだ分かっていないわ。」

八重花も由良と同じ疑惑を持って調査を続けていたが結局尻尾を捕まえることはできなかった。

「厄介な技を使う敵だって事だな。それでカナ、何か無いか？」

「真奈美もね。」

全員の視線が集まると2人は冷や汗を滝のように流し始めた。見る見る顔色が悪くなっていき

「「ごめんなさい！」」

テーブルに土下座するように頭を下げた。

反応がないためビクビクしながら審判を待つ。

「なるほどな。最初の接触以来は特に音沙汰無しか。狙ってくるなら2人だと思っていたんだが、思った以上に相手は慎重なのか？」

「あるいは別の目的もあってそちらを優先させているかね。」

だがお叱りは無く、むしろ2人の反応をもとに議論が展開していた。訳が分からず叶が顔をあげると由良はフツと笑みを浮かべた。

「もともと調査してるとは思っていない。それに一番狙われるはずのお前らが普通に生活を送れるかどうかで相手の出方を見ていたんだ。」

「あ、なるほど。」

真奈美がポンと手を打つ。

確かにそれならば下手に情報を与えず普段通りに生活させた方が判断しやすい。

「だが最初の接触から1週間、その間に何もしてこないのはやはり妙だな？」

「そうね。ヴァルキリーの方にちよっかいを出しているとも考えられるけどあの人型の闇が1体しかないわけがないもの。もしかしたら私たちの気付かないところで襲撃の準備をしているのかもしれないわ。」

由良と八重花が話を進めていく。

明夜はほとんど口を挟まないが時折相づちを打っている。

真奈美は苦笑い、叶は首を捻る回数が多かった。

「八重花の考え方は陸に近いな。だが予測が予測でしかないのが痛い。こつちから打って出られない。」

「それが普通よ。これまでの”Innocent Vision”が異常だっただけ。」

ヴァルキリーの側から”Innocent Vision”を見ていた八重花だからこそ陸の未来視によって行動していた”Innocent Vision”の異常性を強く感じていた。

そんな力を使い続けていたからこそ陸は眠りについてしまったとも考えられ、八重花は悔しさをかみ締める。

「そうなるその後手に回るしかないか。面倒だな。」

「攻略本を片手に戦いを挑むような考えは改めないといざというときに危険よ。」

すっかり2人が”Innocent Vision”の活動の方向性を決めていく。

「あ、あの。」

そこに申し訳なさそうに手を挙げた叶が割り込んだ。

「何だ？」

「2人ともすごいのでリーダーをお任せしてもいいのではないのでしょうか？」

「ダメよ。」

「駄目だな。」

「無理。」

「諦めな、叶。」

「あれ！？全員？」

叶の申し出は即答で却下された。

「カナ。リーダーに必要なものは何だ？」

「ええと、みんなを引っ張るリーダーシップです。」

由良はコーヒートを口に運びながら頷く。

「正解だ。だが、どんなにリーダーシップがあってもついていけない人間の指示は受けたくない。俺なんかはその傾向が強い。だからヴァルキリーからの誘いを蹴って最終的に”Innocent Vision”に入ったんだ。」

由良の蹴っては斬ってであり壮絶な戦いを繰り広げたのだが血なまぐさい話になるので由良は何食わぬ顔で端折った。

叶は由良の意見をヒントに別の答えを考える。

「つまり、人望ですか？」

叶の答えに由良は満足げに頷いた。

他の皆も同様に頷いている。

「ああ。陸は人望があり、リーダーシップもあった。だがカナに陸と同じことをしるとは言わない。幸い陸並みの作戦参謀に八重花もいるんだ。使ってやらなきゃ勿体無いだろ？」

「本当はりくにアピールするためにリーダーを引き受けたいところだけど譲ってあげる。しっかりやりなさい。」

「叶なら安心。」

「あたしはリーダーって柄じゃないからね。叶はあたしが守るよ。」

叶は自分に人望があるなんて思っていなかった。

だけど自分をみんなが必要としてくれることが嬉しくて

「はい。頑張ります！」

今度は自分の意思でリーダーを引き受ける事にした。

” Innocent Vision ”のメンバーはそんな新リーダーを温かく見守っていた。

ヴァルキリーでもまた乙女会議を開いていた。

議長は良子ではなく葵衣だ。

報告は会長である良子から始まった。

「この1週間でうちの部もだいぶまとまってきたから良いところまでいけるはずだよ。」

乙女会会長としてもヴァルキリーのソーサリスとしてもなくバレー部部长としての意見に美保と緑里が額に青筋を浮かべ、悠莉は笑っており、葵衣は無表情だった。

「良子先輩は座っていればいいですよ。」

口の端をひくつかせながら美保が妙に優しい口調で戦力外通告をした。

どこからも異論が上がらないので良子は慌てる。

「じよ、冗談だって。ええと、部員に純乙女会について聞いてみたんだけどあんまりいい印象を持ってないみたいだったよ。競争が厳しいとか、あとクリスマスパーティーの敗けでまだジュエルの子の士気も低い。」

「東條八重花についてたジュエルが抜けたから今ジュエルに残ってるのって良子さんの後輩がほとんどですよね？つまり今のジュエルの総意って事ですね。」

かつて100人を超えていたジュエルは今や10人程度にまで減っていた。

活動も停止状態なので士気は下がる一方だった。

「由々しき事態ですね。このままでは折角新たにジュエルの力を手に入れたとしてもその風評が原因で参加を自粛するかもしれません。」

悠莉も困ったように頬に手を当てる。



視線が葵衣に向く。

「その件に関しては第二次ジュエル計画の中に解決案が盛り込まれております。皆様、こちらをご覧ください。」

葵衣が全員にレジユメを配る。

「『プロジェクトジュエル要綱』ですか。」

「詳細はお読みいただければ分かりますが簡単にご説明します。まず、現在の純乙女会は解散します。」

「解散？そうしたらジュエルはどうするの？」

緑里の質問に葵衣は頷く。

「この解散という措置は今後のジュエルが壱葉に留まらず全国、全世界へと展開していく事への措置です。」

「確かに壱葉高校の乙女会の下部組織じゃここの生徒の管理しかできないからね。」

良子が資料を見て嫌そうに顔をしかめながら聞いた話に関する意見を述べる。

「良子様の仰る通り私たちがすべてのジュエルを統率しようとするには構成員が多すぎます。そこでお嬢様との検討を重ねた結果、…ピラリとレジユメを捲るとそこには強調された文字が並んでいた。」

「ジュエルクラブを新たに設立することに決定しました。」

「ジュエルクラブ？」

「各地にWveの支店を展開し、ネットにはジュエリアクラブとしてその存在を公開します。表向きはWveの会員となりますがジュエルが覚醒された方には暗証番号が記憶され、隠しページからジュエルクラブへ招待されるシステムになります。」

「今まではボクたちが指導していたジュエルをWveで管理するんだ。でも訓練とかはどうするの？ボクたちが出張する？」

近隣ならまだしも遠出や海外派遣となると学生であるソーサリスには厳しくなる。

当然理解している葵衣は首を横に振ってページを捲る。

「お嬢様が信頼のおける方を選出しインストラクターとして派遣されます。新規ジュエルにはヴァルキリーへの忠誠だけではなく守秘義務の暗示も組み込まれており情報漏洩にも配慮がされていますので吉葉から離れた地でも不祥事の発生を抑制できると考えられます。さらにはヴァルキリーへの昇格を排し、ジュエル内での順列を儲け、高位の方には褒賞を与える制度も検討中です。」

これまではヴァルキリー（乙女会）への昇格を餌にジュエルの士気を高めていた。

しかし実際は誰一人としてジュエルからソーサリスに格上げになった者はいない。

それはそもそもソーサリスとジュエルが違うものだから。

これからはヴァルキリーの存在を知らないままジュエルになる人が増えていくため、ジュエルの中で士気を高めるための配慮だった。

聞き終えたソーサリスは感心した様子で冊子を眺めていた。

「いつ頃プロジェクトが始まるんですか？」

「現在ジュエリアの生産を急ピッチで行っている段階です。予定では5月上旬、ゴールデン・ウィーク中にプロジェクトを始動することになっております。」

「ならこれからだね。うちの部員もそれに入れるんでしょう？」

「はい。通知はいたしますが良子様からお伝えいただけると助かります。」

ジュエル計画が順調に進んでいるのがわかり良子と悠莉は喜んでいますが緑里と美保はまだどこか不機嫌そうだった。

「ボクのジュエル、式が全然使えないんだけど？」

「あたしの方もレイズハートとか光刃が使えないですよ？」

2人は自分たちのジュエルについての不満が残っていた。

良子はアルミナが直球ど真ん中でバランスが使えなくなった以外は形状も長斧なので遜色なかった。

葵衣はウインドロードが使えない以上基本的には何を使っても同じ

なため風を操れるエルバイトになっている。

だが美保にアルミナ、緑里にクオーツはどちらも特性とあっておらずグラマリーが使えない状態だった。

「以前解析したデータから美保様と姉さんは『ベリロス』と呼ばれる力の流れに当たるようです。現在ジュエルの種類を増加させるべく研究されていますので完成までもうしばらくお待ちください。」

葵衣は分かっていたようにスラスラと答えた。  
結局のところ現在のジュエルを使っているということに変わりはない。

美保はテーブルに頬杖をついて紅茶に手を伸ばし、緑里は机にだしなく倒れ込んだ。

葵衣は緑里を横目で見つっさらに続ける。

「続いて”Innocent Vision”の動向についてですが……」

その前置きで全員が葵衣を見た。

表情は各々異なるが概ね真剣だった。

「いくつか不可解な点は見られますが基本的には主だった活動はしていないようです。先日、作倉叶様が新しいリーダーに抜擢されたとのことですがその真意は不明です。」

全員が叶を思い浮かべる。

ファブレとの戦いでは主に回復役として活躍した叶がリーダーとしてはどうなのか、ほとんど付き合いのないヴァルキリーのソーサリステたちには判断できない。

「リーダーを決めて動かなきやならない何かがあるってことよね？ ジュエル計画についてバレたんじゃなければ何をしようとしているのか、興味ありますよね？」

美保がクツクツと笑いながら提案する。

美保の不気味な笑いに緑里が怪訝な顔をした。

「何する気？」

「このまま訓練だけつてのもつまらないですよね？だからちよつと

お話を聞くついでに遊んでもらおうかと。」

「それでしたら私も一口乗らせていただきます。」

美保と悠莉は”遊び”の計画を練り始めたが誰も止めようとはしなかった。

## 第12話 セイント vs . ジュエル

報告会から2日後、件の人型に関する新たな情報は得られず、生活としてはいつも通りに過ごしていた。

そんな休み時間。

「作倉さん、お客さんだよ。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

言伝てしてくれたクラスメイトに礼を述べ、裕子たちと別れて廊下に出た叶は

「こんにちは、作倉叶さん。」

「下沢、さん。」

不用意に飛び出してきてしまったことを激しく後悔したがすでに遅かった。

悠莉は別に何かを仕掛けてきた訳ではない。

ただ悠莉がこの場で殺せる意思を少し滲ませるだけで叶はすくんで動けなくなった。

「ふふ、そんなに怯えなくても何もしませんよ。少なくとも今は。」

悠莉はクスクスと可愛らしく笑うが叶は笑みを返せない。

全身が強ばって言うことを聞かなかった。

悠莉はさらに小さな声で告げる。

「Innocent Vision」のリーダーになられたそうですね?」

「なんで、それを?」

叶の表情が無意識のままにこわばり目が見開かれる。

悠莉はそれを見て目を細めた。

「敵対組織の情報はいつも注意を払っています。他にもいろいろとお聞きしたいことがありますので放課後こちらまでお越しいただけますか?」

そう言っつて悠莉は震える叶の手に住所の書かれた紙を握らせた。

悠莉はすぐに離れてそのまま教室に向かっていく。

「あ、そうでした。」

だが数歩進んだ所で立ち止まり振り返った。

「別に1人で来られる必要は有りませんが無関係な方を連れてきたり、来なかつた場合にはどうなるか、お分かりですよね？」

「！！」

叶は返事もできずただ本能的な恐怖に身を震わせるだけだった。

悠莉は笑いながら去っていく。

叶は悠莉が見えなくなつてからようやくよろよろと壁に背をつけ、渡された紙を見た。

その住所は叶にこそ見覚えは無かつたが、そこはかつて廃ビルの倒壊が起こつた場所。

” Innocent Vision ” と ” RGB ” の戦いの跡地だった。

不良の溜まり場と言われていた廃ビルの不自然な倒壊は当時起こつていた行方不明や不審死事件と関連付けられて報道された。

その後、土地の所有者は売りに出したが不可解な噂のせいで買い手が見つからず半年たった今も倒壊した当時のまま放置されていた。

その現場で生き埋めになりかけた美保と悠莉は砂塵を伴う風に髪を揺らしながら入り口に目を向けていた。

「自信あるみたいだったから任せただけど本当に来るんでしょうね？」  
元々美保が脅しながら” お話 ” を聞き、その後” 遊び ” をしようと思つていたのだが交渉役は悠莉がやるというので渋々譲つたのである。

決して悠莉に逆らうと怖いといったビビりな理由ではないと美保は強く主張している。

「ゲームとは景品があるからこそ楽しいものではないですか。宝物を手に入れてからゲームをしようなど不粹です。」

「それは聞いたって。でも相手が来ないことにはゲームにもならないわよ?」

美保は誘った場面を見ていないので叶がどんな対応をしたのか分からなかった。

叶の反応を知るからこそ悠莉は絶対の自信を持って待っている。

「要は来た方が来なかった場合よりも酷い目に会わないかもしれないと錯覚させれば必ず来ます。彼女はいまや私の糸に絡め取られた蝶ですよ。」

美保は蜘蛛女だというツツコミを控えた。

コランダムが使えなくても悠莉は怖いのだ。

「それよりも”Innocent Vision”は来るでしょうか?」

この場合”Innocent Vision”とは叶以外のメンバーを示している。

ソルシエルを失い、ジュエルを持たないソーサリスは戦闘能力は一般人と変わらないため出てきたところでももの数ではない。

「芦屋真奈美は当然来るだろうけど他のは来ないでしょ?わざわざ死にに来るようなバカは居ないわよ。」

「さあ、どうでしょうね?」

結局コランダムに放り込んで美保の意識は変わっておらず、相変わらず仲間意識は薄い。

悠莉は本当の意味で死なないと美保の性格は直らないと諦めていた。そして団結力の高い”Innocent Vision”がどんな行動に出るか、悠莉には予想できていた。

「そろそろ時間ですね。」

一際強い風が砂塵を巻き上げる。

その向こう、土地の入り口に人影が見えた。

美保と悠莉は”遊び相手”の登場で口の端に笑みを浮かべ、次第に見えてきた来訪者を見て笑みのまま頬をひきつらせた。

吹き荒れる砂塵の向こうからやって来たのは強い意思を瞳に湛え、

怯えた様子も見せず歩いてくる作倉叶ただ1人だった。

美保と悠莉が顔をひきつらせていたのはこの状況に微かなデジャヴを感じたからだだった。

それは幾度となく対峙してきたヴァルキリーの宿敵。

絶対的に不利な状況でも不敵な笑みを崩さず本当に戦況をひっくり返してしまう人の姿をした”化け物”、Innocent Visionの半場陸を彷彿とさせるものがあつた。

(そんなわけないわ。)

美保はすぐに気持ちを切り換える。

身近にそう何人も陸みたいな化け物があるわけがないと言い聞かせた。

「まさか1人で来るとは思わなかつたわ。仲間に見捨てられたのかしら?」

「...」

叶は答えず小さく首を横に振るだけで脅えた素振りは見せない。

(どうなってるのよ?)

(おかしいですね?彼女のの中に眠る獅子でも目覚めましたか?)

(蝶じゃなかつたの?)

小声というかほとんど目線での会話で少し責任を感じた悠莉が前に出る。

「来ていただいて感謝します。ですがお1人とは随分無謀ですね?それとも作倉さんの持つ力は私たちを1人で倒せるほど強力なのでしょう?」

悠莉の後ろで美保がギョツとする。

ファブレとの戦いの時に回復しかなかったとはいえ攻撃に用いる大技を隠している、あるいはここ数カ月で覚醒した可能性だってある。

美保はだんだん叶が恐ろしい相手に思えてきた。



ソルシエールやジュエルの上位に位置するシンボルを持つセイントである時点で叶のポテンシャルは全くの未知数と言えた。

だが悠莉は焦っている様子はない。

「佐倉さんのシンボル・オリビンは戦闘用には向かないはずです。」

「…そうですね。」

やっと叶が口を開いた。

声が震えているようにも感じるが元からこんなだったような気がする。

それよりも自らの無力を肯定するところまで本当に陸に似ていて2人は不気味に思った。

「サフェイロス・アルミナ。」

悠莉はアルミナに自らのソルシエールの名を与えて呼び出した。

左目が朱色に輝きを放ち左手にクレイモアが現れる。

「ッ！」

叶はわずかに驚いたような仕草を見せただけでオリビンを抜かなかった。

「どうしました？」

「私は戦いに来ただけじゃありません。」

叶はきつぱりと”遊び”の誘いを断った。

それを聞いて美保が鼻で笑う。

「何を言ってるのよ？戦う気がないのに敵の前にノコノコやって来たって言うの？そんなのただ殺されに来ただけじゃない。ジュエール！」

美保もアルミナを顕現させる。

2つの朱色の目に睨まれて叶もようやく脅えた表情を見せた。

その瞬間、2人が重ねていたインヴィの影が消えた。

恐らくは由良か八重花の入れ知恵だろうと考え、叶が”Innocent Vision”の仲間と相談した事まで推察した。

(そうなると作倉叶は囧。)

(本命は芦屋真奈美さんですね。)

ジュエリストの真奈美が持つセイバー・スピネルの戦闘力は1月の決戦の時によく知っていた。

ソルシエールの無い今、スピネルはヴァルキリーが最も警戒する力であった。

「戦う気がないなら他のメンバーが助けに来る前に試し斬りの的になつてもらおうよ!」

美保がアルミナに光を宿して振り上げたが叶は身を固くするものの逃げ出しはしなかった。

そして当然、光刃は飛ばない。

「クツ、行くわよ!」

ジュエルへの不満を戦う力に変えて美保は叶に飛び掛かった。

ソルシエールほどではないものの身体強化された加速は凄まじく、瞬く間に叶に肉薄する。

「さつさと死んじやいな!」

「オ、オリビン!」

叶が頭を庇うような格好で呼び出したオリビンがアルミナとぶつかり合う。

明らかに勢いは美保の方が上だったのにアルミナの方が弾かれた。

「まぐれで防いだからっていい気にならないことね!」

美保は光の軌跡を無数に残すラッシュをかける。

「きゃー!」

叶はでたらめにオリビンを突き出すだけだったが美保の描く軌跡はオリビンに触れる前に不自然に歪められていた。

「反発する磁石みたいにアルミナが逃げる!」

それでも意地でアルミナを振り回すがどんなに力を込めてもオリビンには当たらない。

「強力な聖なる力にジュエルでは触れることもできないのでしょうか。」

「

「そんな馬鹿なことがあつたら堪らないわよ!」

「そんな非常識な奇蹟を起こす力を持つからこそ、セイントは神に

選ばれた存在なんですよ。」

剣の技巧は圧倒的に美保の方が上なのにオリビンの防御領域が思いの外広くて一太刀も叶に届かない。

「悠莉、見てないで手伝いなさいよ!」

「…仕方ありませんね。」

悠莉は周囲を見回したが小さく首を横に振って意識を叶に向けた。いかに強力な守りを誇る叶と言えど背後はがら空き。

美保が足止めをしている間に後ろから斬りかかればそれで終わりだ。

「この後にお話を聞かなければなりませんから殺しはしませんよ。」

サフェイロス・アルミナの刀身を撫でながらゆっくり叶にと歩み寄っていく。

「殺して見せしめにして交渉に持ち込むって方法もあるんじゃない?」

「うー。」

足止めが目的になったので美保にも余裕が生まれた。対する叶は背後から迫る悠莉への恐怖に唖る。

「美保さん。呼び出しの時と同じで交渉は取り戻せるかもしれないと思わせないと意味がありませんよ。殺してしまったら復讐の念で逆上するだけです。」

悠莉が叶の後ろについた。

本来は叩き斬る用途に用いる形状の剣で突きの構えを取る。

「作倉さん、安心してくださいね。」

「え?」

「痛みもすぐに快樂に変わりますから。」

「いやー!」

叶が本気で悲鳴をあげると防衛本能のためかオリビンの輝きが増した。

ジュエルの反発によって2人が逆方向に弾き飛ばされる。

「本当に厄介な能力ね!」

「コランダム。」

悠莉は叶を中心に3方向にコランダムの障壁を展開させた。

接近限界でコランダムがバチバチと火花を散らすような音を立てる。

「ああっ！」

これで叶は身動きが取れなくなった。

オリビンの力が弱まれば3つの壁が叶を徐々に封じ込めていく。

特殊空間に放り込めなくても1人相手ならばコランダムは十分に行動制御として有用だった。

「あとは力を使い果たすまで待つだけで捕縛完了です。」

「いつそのことヴァルハラに連れて帰ってヴァルキリーに忠誠を誓うようになるまで拷問するかね。ハハハハ！」

勝利を確信した美保は高笑いをあげる。

だが悠莉はこの後の展開になんとなく予想が付いていた。

だって、美保が高笑いをして勝利したことなんて一度もないのだから。

ブ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ

戦場に突然バイクが乱入してきた。

ヘルメットも着けずタンDEMで走行という警察官が見たら止める不

良は

「柚木明夜！」

「羽佐間由良さん。」

由良と明夜だった。

由良の後ろには真奈美、明夜の後ろには八重花が乗っている。

「明夜が免許持っているのは意外だったわ。」

「気合い。」

それが免許を取る方の気合いなのか免許が無くても気合いで乗れるという意味なのか八重花は言及しなかった。

今は足以上の機動力があることに感謝する。

荷台にくくりつけた箱から水風船を取っては投げつけた。

由良も美保たちの回りをぐるぐると回りながら後ろに乗った真奈美が同じように水風船を投げつける。

ほとんど痛くはないが制服があつという間にびしょ濡れになって重くなっていく。

まだ衣替え前で冬服なので透けはしないが換わりに重い。

悠莉はコランダムを動かして直撃を防いでいたがコランダムが抜けたその隙に叶は包囲から抜け出した。

「あー、イライラする！」

「水風船で私たちを止められると思っっているんですか？」

2人は標的をバイクに変更して斬りかかっていく。

逃げ足ならバイクの方が速いのに由良たちは無謀にも突っ込んで来ていた。

「行けるか、真奈美？」

「もちろんです！」

向かってくる悠莉に対して真奈美が後ろの席で立ち上がる。

義足を脱ぎ捨てると

「来い、スピネル！」

刃の足、セイバー・スピネルを呼び出した。

左目の青い光がまっすぐに悠莉に向けられていた。

「っ！コランダム！」

悠莉は急遽制動をかけ3枚の障壁を前面に展開した。

直後、青い壁の向こうからシートを蹴ってバイクの速度で飛んでくる流星を見た。

「低空スターダストスピナ！」

「武器の無いあんたらに勝ち目はないよ！」

「明夜、任せるわ。」

「うん。」

八重花は無謀にもバイクの後ろから飛び降りた。重心が後ろに偏ったバイクは前輪を持ち上げるような格好になり、跳ねてアルミナの一撃を回避してみせた。

「なっ!？」

美保は曲芸ばりの回避に目を丸くして飛ぶバイクを見送る。

「まだ終わらないわ。」

「!？」

そして顔を上げていた美保の視界、地面すれすれを泥だらけになりながら駆け込んだ八重花は陸が以前使っていたスタンガンを濡れた美保の肌押し当ててスイッチを押した。

「ギヤアア!」

バチツと一瞬の攻撃で美保は白目をむいたがジュエルの耐性強化によりどうにか落ちるのを免れた。

バキン

「キャア!」

そして、美保の背後でも何かが砕ける音と可憐な少女の悲鳴が上がった。

3枚の障壁を突き破った真奈美は地面を滑るようにして着地する。気がつけば包囲されているのは美保と悠莉の方だった。

バイクに跨りアクセルをふかす由良と明夜。

八重花のスタンガンがバチバチと音を立て、叶と真奈美の聖剣が輝きを放つ。

「さすがに、まずいですね。」

「くう!」

美保は歯をギリギリさせて悔しそうだったが戦況の不利は悟っているため特攻をかけたりはしない。

「逃がすと思っっているのか？」

” Innocent Vision ” が輪を狭めていく。

「今のあなた方と私たちは性能が根本的に違いますから。美保さん。」

「あー、もうっ！」

悠莉と美保は大きくしゃがみこむとばねの様に上へと跳躍した。軽々と頭上を飛び越えていく。

「このっ！」

咄嗟に真奈美が跳んで蹴り上げるがアルミナで防がれた。

着地した2人は散り散りに撤退を開始した。

真奈美なら追いつける可能性もあったが迷っている間に離されてしまった。

「…見えた。」

「そんなこと言ってる場合か！」

明夜にツツコミを入れた由良はため息をついてバイクを止めた。

「逃げられたか。だがまあ、とりあえずカナが無事みたいで何よりだ。」

「……」

話を振られた叶だが返事がない。

「叶？」

心配なつて真奈美が肩を叩くと

「きゅっ。」

叶は緊張が切れて倒れてしまうのであった。

### 第13話 敵ではありません

ヴアルキリーの美保と悠莉が完全に戦場から離脱したのを確認してから” Innocent Vision ”の乙女たちは大きく脱力した。

「えーん、怖かったよー！」

「あー、よしよし。よく頑張ったよ。」

緊張の糸が切れた叶は真奈美に泣きつく。

「やっぱり奴ら、ジユエルを持ち出してきやがったか。」

由良はバイクを止めると髪をわしわしとくしゃくしゃにして嫌そうな顔をした。

予想していたことではあったが実際に向こうにだけ力を持っているのを見ると危機感を覚えずにはいられない。

「八重花、平気？」

明夜が八重花を支えるようにしながら皆の所に近づいてきた。

奇襲のためとはいえ速度を出したバイクから降りてただですむわけがなくあちこち擦りむいていたり打っていた。

「この位、なんてこと無いわ。」

顔をしかめながら強がる八重花は今回の作戦の立案者だ。

ヴアルキリーがジユエルや新たな力を手に入れているかどうかを探り、力を持っていた場合はその力に対して叶のオリビンがどこまで対抗できるかを観察することが目的だった。

叶が窮地に陥った時のために由良の知り合いからバイクを借りて待機して戦況を観察していた。

「結果的に追い払えたから良いものの八重花は無茶しすぎだよ。」

真奈美がたしなめるが八重花は不敵な笑みを浮かべるだけだ。

「この手の無謀な作戦は立案者が率先して動かないと上手くいかないよ。」

「それにしても実際にやりあってみると改めてソーサリスは” 化け



物”だな。」

「ジユエル相手にここまで手こずるのは正直予想外ね。まあ、ソーサリスだからこそジユエルを使いこなせているとも考えられるけど。」

水風船やスタンガン、バイクと様々なものを持ち出してきて5人がかりでようやく2人を撤退に追い込めたが八重花の怪我を含め払った代償の割に得られるものは少なかった。

「叶のオリビンの守りは強力。」

「それは収穫だが攻撃力は低いし大人数を相手にするととなると厳しくなるぞ。」

ようやく泣き止んだ葉が鼻をスンスンさせながらオリビンを持つ。

「八重花ちゃん、傷の手当てをするね。」

「そう言えば葉の力があれば医者要らずなのよね。今後も無茶できそうね。」

反省する様子の無い八重花の前に立った葉は静かにオリビンを逆手に持って振り上げる。

すでに効果は知っているとはいえ短剣を目の前で振り上げられるのはなかなか怖いものがあった。

「元気になーれー!」

ザクツと音が聞こえそうな勢いで振り下ろされたオリビンだったが、実際は八重花の体には傷一つついておらず、むしろついていた傷が塞がっていく。

「ふう。生き返るわ。葉の戦闘能力の低さも問題だけど真奈美のスピネルも本調子じゃないものね。」

刃を突き立てられながら普通に話を進めようとする八重花に苦笑しつつ真奈美がスピネルを叩く。

「そうだね。さっきだってバイクの加速を借りなきゃスピードも威力も上がらないからね。いったい何でこうなったのか知りたいよ。」

普段落ち着いている真奈美が珍しく焦りを見せた。

今回の戦いで力の低下をまざまざと見せ付けられたからだ。

「はい。これで大丈夫だと思うよ。」

オリビンを引き抜いた叶の顔に笑顔が浮かぶ。

八重花が拳を開いたり握ったり体の様子を確かめる。

「折れてるんじゃないかと思っていたのにそれまで治ってるわ。大した速効性ね。何かの作戦に使えるかもしれない。」

八重花のむちやくちやな論理だったが今回のことで今後も無茶が必要になりそうだったため誰も笑えなかった。

嫌な沈黙が降りる。

「前途多難。」

「「はあ。」」

新生”Innocent Vision”の初陣は辛勝となった。

一方敗走した美保と悠莉はジュエルを消して町を歩いていた。

美少女2人など普通なら男たちが注目して声をかけてくるものだが今日はより多くの視線を集めながらも誰も近づこうとしなかった。

1つは頭から見事に濡れ鼠になっていること。

水も滴るいい女ではないが本当に袖やスカートの端から水が滴っているのはよほどの勇者でなければ声をかけないし近づきもしない。

だがそれ以上の理由として

「あー、ムカつく!」

美保は頭から湯気を出しかねないほどに怒りを撒き散らしていた。

こんな状態ではたとえ水に濡れていなくて誰も寄ってこない。

そんな晒し者の気分を味わいながらも町を歩いているにはわけがあった。

「クリーニングに出すか、もしくは新しく制服を買わなければいけませんね?」

私服ならまだ良かったが制服で、しかもバイクが砂埃を巻き上げる中で水風船をぶつけられたので服についたのは泥水のようなものだった。

さすがに乙女会の人員がやんちゃな小学生みたいな泥だらけの格好でいるわけにはいかない。

よってすぐに終わるならクリーニングに出し、それが無理なら明日も学校なので制服を調達しなければならなかった。

「あー、予定外の出費！春は買いたいものが多いって言うのに！」  
そういうわけで美保の怒りが収まる気配はない。

悠莉でも持て余す現状に笑顔のまま困っていると言っていると携帯が鳴った。  
防水携帯なので壊れていないようだった。

登録名は海原葵衣。

「はい、下沢です。」

『お疲れさまです。そちらの状況は分かっております。すでに迎えるの車をご用意致しましたのでそちらをご利用ください。代えの制服もご用意してありますのでご心配なさらず。』

花鳳撫子には息のかかった特殊チームがありヴァルキリーの活動を監視しているという。

今回はそこから報告が上がったのだろう。

「ありがとうございます。」

悠莉は礼を述べて電話を切った。

常にどこからか監視されていると思うとゾッとするが少なくともこれまで監視の視線を感じたことはないのでプロなのだろう。

以前撫子も言っていた。

「彼らは空気です。監視という仕事を与えていますですがそこに意思はなく、たとえ皆さんが命を落とすことになってもただその事実を報告するだけの存在なのです。」

つまり助けに入ってくることはないが邪魔もしないということだった。  
た。

だから悠莉は気にしないことにした。

「美保さん、迎えが来るそうですから落ち着いてください。」

監視されていることを言うと美保の機嫌がさらに悪くなるのは目に見えているのでそのことには触れず、悠莉は濡れた髪を弄りながら

車の到着を待つのであった。

売りに出されているとはいえ私有地への不法侵入、ヘルメットを被らず2人乗り、騒音。

数々の悪行を重ねた”Innocent Vision”は傷の手当てを終えると戦場から早々に離れた。

「お役に立てやしたか、姐さん！」

「誰が姐さんだ！」

バイクは妙に腰の低そうな不良が回収に来たため”Innocent Vision”内で由良への恐怖度が増加した。

それに気付いた由良はフンとそっぽを向く。

「あいつら弱いくせに悪ぶってるから他の不良に目をつけられてのされそうになつてたんだ。それをたまたま助けてやつたらなつかれただけだ。」

近づく者すべてを壊したいほどに復讐に燃えていた頃の由良は憂さ晴らしに苔葉や建川近隣の不良グループに手当たり次第喧嘩を吹っ掛けていた。

なので最近でもまたに不良に因縁をつけられることがある。

ソーサリスの力を失った由良だが持ち前の威圧感抜群の睨みと喧嘩と戦いで鍛え上げたバトルセンスのため無敗のままだった。

「俺が弱くなつたつて噂が出回ってるらしい。」

「それは仕方ないんじゃないかしら？無法者の不良だった人間が留年したにも関わらず4月から真面目に登校して遅刻欠席も許容範囲腑抜けだと思われるのも無理ないわ。」

八重花の言った内容は学生としては良いことだというのに捉え方の違いで悪評に聞こえる。

由良は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「煩わしくなくなるなら腑抜けで構わないんだがな。」

「由良先輩も随分丸くなりましたね。」

「鬼の攪乱。」

真奈美で1つ、明夜でもう1つ青筋が浮かび上がった。

「ま、まあ、お姉さん。2人とも褒めてくれてるんですよ。ね？」  
叶が慌てて止めに入り2人に同意を求める。

真奈美は大きく頷いた。

「そうですね。」

「……………うん。」

明夜は微動だにしなかったが叶のうるうるした視線に負けて頷いた。  
由良は怒りの矛先を逸らされてしまい、八つ当たり気味に叶の頭を  
ポンポン叩く。

「もう怒ってないから離れる。」

「本当ですか？」

「うっ。…本当だ。」

叶のうるうるアイは由良にも有効で怒りがどっかに行ってしまった。

「不戦の勝者ね。」

八重花は叶を見ながらそう呟いて笑った。

夜に差し掛かるつかという時刻、ヴァルハラ of 明かりはいまだに灯  
つており、席には現在の総数に当たる5人のソーサリスがテーブル  
を囲んでいた。

美保と悠莉は水気も柔らかかなタオルで拭き取り、制服もサイズがぴ  
つたりなものをあてがわれたのだが

「シャワー浴びたかった。」

「そうですね。髪が傷んでしまいます。」

さすがのヴァルハラにも風呂はついていないので美保は分かりやす  
く、悠莉は分かりにくいながらも不機嫌な様子だった。

2人の視線が一応最高権力者である良子に向けられた。

「あ、あたしじゃないよ？」

「お2人をお呼びしましたのは私です。申し訳ございません。」

葵衣に先に頭を下げられてしまい2人は引き下がる。

「要件は、”Innocent Vision”についてですね？」

「はい。ソルシエルと組織の当主を失った”Innocent Vision”の現行戦力とヴァルキリーの敵になりうるかについてお聞きしたく思います。」

葵衣は律儀にメモを取るための紙とペンを取り出した。

美保は先刻の戦いを思い出すと苦虫を噛み潰したように顔を歪めた。  
「作倉叶のセントの力は面倒よ。シンボルの能力が高くてジュエルが触れられないんじゃないわよ。芦屋真奈美のスピネルも悠莉のコランダム3枚を貫いたしソルシエルを無くした奴等もインヴィみたいな戦いをしてくるからうざったいのよ。あいつらは敵よ。こそこそ動いてるのもどうせうちからジュエルを奪おうとしてるからに決まってる。さっさと殺すべきよ。」

美保は白熱した様子で机をバンと叩いた。

紅茶の波面が揺れるがギリギリで溢れなかった。

葵衣は手を動かさず美保の話を聞いていた。

「なるほど。悠莉様も同意見でしょうか？」

葵衣の目に明らかな真剣味が帯びる。

美保の時は止まっていたペンが悠莉の動きに反応してピクリと動く。

「いいえ。」

「詳細をお願い致します。」

「はい。まず作倉叶さんですが、確かにオリピンはジュエルに対して非常に強力な力です。しかしそれを扱う彼女はまるで戦闘向きではありません。複数人で攻めればすぐに倒せるでしょう。」  
美保の意見を取り入れつつも真っ向否定する悠莉に美保はムツとする。

「芦屋真奈美さんに関しても以前のような力は出せないようですね。本調子の彼女でしたらコランダムどころか私まで貫けたはずですよ。それをバイクの加速を利用してあの程度、原因は分かりませんが弱体化をしているのは明らかです。」

ヴァルキリー最大の懸念と言えたスピネルの弱体化という朗報に良子や緑里も笑みを浮かべる。

「他のソーサリスは気にする必要ありません。奇策に動揺してしまいました。が裏を返せば正攻法では私たちに対抗できないということです。」

「現在の”Innocent Vision”の戦力については了解致しました。」

悠莉の言葉を応用に速記で記入していた葵衣は最後の一文字を書いてペンを止めた。

見たままに悠莉の意見を優遇している葵衣を見て美保はますます機嫌を悪くするが客観的な意見で考えたと反論できなかったのでふて腐れたように黙っているだけだった。

「それでは、”Innocent Vision”がヴァルキリーの敵になりうるかについてはいかがですか？」

「それはつまり…敵でなければヴァルキリーに”Innocent Vision”を取り込むということですか？」

悠莉の荒唐無稽な先読みに良子たちはギョツとしたが葵衣は動かない。

「…その可能性を考慮するだけです。」

悠莉は葵衣の返事を聞いて即答を避けた。

悠莉の中で”Innocent Vision”の評価は決定している。

ただそれを告げることで変わるかもしれない状況を考えてみた。

しかしどんな道筋を思い浮かべても今の”Innocent Vision”にヴァルキリーに対抗する力はないと思いついた。

悠莉は全員の顔を見直し、

「今の”Innocent Vision”はヴァルキリーの敵ではありません。」

微笑みを浮かべてはつきりと告げた。

## 第14話 拡大するジュエル

対決の翌朝、戦いの緊張でなかなか寝付けなかった叶が眠い目を擦りながら登校している。

「ん？」

「あ……」

横の道から出てきた美保とばったり会ってしまった。

叶にとって美保はとりあえず敵と出会ったら殺すところみたいな思考を持つ危険人物に見えていた。

「……」

美保は嫌そうな顔で叶を見ている。

周囲に人影は乏しく、2人を気にしている者はいない。

「……あ、あの。」

「ふん。」

美保はつまらなそうに鼻を鳴らすとプイと顔を背けて学校に向かっていってしまった。

「……行っちゃった？」

昨日の今日で好戦的な美保が変わるわけがないから暫く待ってみたが結局美保が戻ってくることはなく、叶は首を傾げながら足を踏み出し

「気を付けてください、叶さん。」

「ッ！？」

不意に背後から掛けられた声に音にならない悲鳴をあげて数センチ飛び上がった。

無駄に早い鼓動を押さえ込むように胸に手を当てながら振り返ると巫女装束の琴が口許を袖で隠しながら目を丸くしていた。

「驚かせてしまいました？」

「はい。それはいいんですけどどうしてまたその格好なんですか？」  
以前の琴は今のような巫女装束で登校していたが半場陸と友の会に



なつてからは比較的制服で登校することが多かった。

だが新年度になつてからはまた白と朱のコスプレと思われかねない格好に戻っていた。

「太宮様の予言が朝からあつたので着替える時間が無かつたのです。」

理由は何であれ琴が巫女装束であることに変わりはなく周囲の注目を集めていた。

「それはいいんですけど、気を付けなさいというのはどういう意味でしょうか？」

もつとも叶は気にした様子はない。

琴の姿形ではなくその言動を気にしていた。

「言葉通りです。ヴァルキリーには気を付けてください。あの組織は”Innocent Vision”にとって危険な組織です。」

「は、はい。気を付けます。」

叶は先日の戦いの記憶も含めて強く頷いた。

叶の反応を見て問題ないと判断したのか琴は表情を和らげて学校に向かつて歩き出した。

叶も隣に並ぶ。

「また新しいお菓子を…」

「わぁ。おいしそうです…」

制服と巫女装束、2年と3年、そして”Innocent Vision”と太宮神社の巫女といると違いのある2人だったがお菓子の話で盛り上がる姿は普通の女の子だった。

吉葉高校に到着し、昇降口に向かうと由良も下駄箱に行こうとしているところだった。

「おはようございます、お姉さん。」

「カナと太宮院か。」

挨拶のようなただの確認のような微妙な返事をする由良に叶は普通

に話しかけている。

琴はその光景を目をパチクリと見開いて見ていた。

「お2人は少し見ない間に随分と仲良くなりましたね？」

自分もお姉さんなんだけどなとちよつと拗ねつつ表面上は平静を保つて琴は尋ねる。

「そうですね？」

「はい。以前の叶さんは羽佐間さんを怯えている印象がありました。それがお姉さんやカナと呼ぶような仲になっていれば驚きもします。

」

叶は自覚がなかったようだったが説明すると納得した様子で頷いていた。

「もともと仲間だったんだ。ちよつとしたきつかけでそう呼び合うようになった、それだけだ。」

由良は面倒くさそうに説明するとさっさと下駄箱に行ってしまった。

「あ…行っちゃいましたね。」

見送る叶は別に残念そうでもない。

2人の関係に劇的な変化があったわけではないことに安堵した琴は

「か、叶さん。私のことも琴お姉ちゃんと…」

衝動に任せて提案したが

「？琴お姉ちゃん？」

『琴お姉ちゃん…琴お姉ちゃん…琴お姉ちゃん…』

「ウツ！」

あまりの破壊力に鼻血を吹きそうになった。

「どうしたんですか、琴お姉ちゃん!？」

駆け寄りつつ律儀に呼び方を守る叶はそれが琴を追い詰めていることに気付いていない。

「だ、大丈夫です。ですが、今まで通り琴先輩をお願いします。」

琴は追加ダメージで息も絶え絶えになり胸を押さえながらよろよろ

と靴箱に向かつていった。

結局残された叶は

「どうしたんだろう、琴お姉ちゃん？」

ちやっかりその呼び名を定着させていた。

教室では真奈美の席に裕子と久美が集まっていた。

パツと見た感じで真奈美が困っているのがわかったが

「あ、叶。いいところに。」

逃げ出すことを考える前に裕子に見つかってしまった。

机に近づいていくと机の上にはファッション雑誌が広げてあった。

「何の話？」

「ほらここ。W V e の新商品が出るんだって。」

そのページには高級感を保ちながらも学生でも手を出せるようなア  
クセサリーやバッグなどが紹介されていた。

花鳳撫子プロデュースのブランドは今や若者の間で絶大な人気を誇  
るファッションだった。

「それにほら、ここには花鳳先輩のインタビューも載ってるよ。い  
やー、1年間とはいえ花鳳先輩と同じ学校に通ってたってだけでち  
よっと優越感だよね。」

裕子がページを捲ると撫子の写真とW V e に対する記者の質問と撫  
子の答えが所々目立つように太字で書かれていた。

「にははは、うんうん。でも、りくりくは知り合いみたいだったね  
？」

「そうなのよね。いったい何がどうなって半場くんはお近づきにな  
ったのかしら？紹介してもらったわ。」

裕子は本気で悔しがる。

実際裕子がW V e の魅力に染まったのは陸が眠りについてからだっ  
た。

「そう、だね。」

叶と真奈美は目線を交わし合って曖昧に返事をした。

叶と真奈美は撫子の本質を、ヴァルキリーとして何を為そうとしているかを知っている。

だから裕子のように手離しに有名人と知り合いであることを喜ぶことは出来なかった。

「あ、八重花は乙女会に入ってたんだから先輩と付き合い深いんだあとで聞いてみよ。」

裕子は久美とはしゃいでいて2人の様子を見ていなかった。

2人の視線はインタビューの一文を見ていた。

「店舗の全国展開を予定している…。」

「失言だったわ。」

撫子は発売されたファッション雑誌のコメントを確認して葵衣に連絡を取り、第一声がこれである。

葵衣はヴァルハラにいたので周囲には誰もいない。

撫子が失言と言ったWVeの全国展開、それは第二次ジュエル計画の主幹となるため”Innocent Vision”への情報開示は慎重にしなければならぬと話合っておいた話だった。

だというのに話のうまい記者との会食で舌が滑らかになってしまった話してしまったのだ。

葵衣に連絡を取ったのはこれを知った”Innocent Vision”の動きを探るためである。

「確かに店舗展開の情報は開店してから広まるのが望ましくありませんでしたが5月上旬までに各店舗は開店致します。もはや”Innocent Vision”が止められる段階ではないと考えられます。」

そもそも、かつてジュエル計画を頓挫させた輸送車襲撃と工場破壊は公表されていないが魔女の仕業である。

さすがに”Innocent Vision”がそこまで非人道的な手段に出るとは思っていなかった。

ましてや、今の”Innocent Vision”ではなおのこと。

『先日のごことで”Innocent Vision”にジュエルの存在が知られた以上全国展開がジュエル計画であることは気付かれましたと考えるべきね。動向には注意を払いなさい。』

「承知致しました。例の交渉はこちらで推し進めてよろしいでしょうか？」

『任せるわ。』

撫子は呼ばれたらしく一言二言話すとすぐに電話を切ってしまった。ツーツーという電子音から耳を離れた葵衣の目の前にも件の雑誌が広げられている。

「当初の予定で考えれば今回の情報は危険要素。」

そしてパソコンにはジュエル計画の進捗状況のグラフが開いている。「ですが、今回は有効な交渉材料となるかもしれませんね。」

葵衣はわずかに口の端を歪ませて始業ベルまで作業に没頭した。

ファッション雑誌など読まない明夜と由良にWVeの全国展開をメルするとすぐに返信があったが内容は後日話し合おうとの事だった。

叶も真奈美もクリスマスパーティーの起こりとその裏で進められていたジュエリアの全国販売計画の全容は知らないため由良たちの反応に首を傾げるばかりだ。

八重花を誘いに一組に行ったときも2人の姿はなかった。

「あの2人にも思うところがあるのよ。」

八重花はそれだけ答えて食堂に向かってしまったので叶たちも慌てて後を追った。

何とか5人分の席を確保してランチを手に入れた乙女たちは会話の

花を咲かせる。

ここが人気の少ない喫茶店だったり、裕子と久美が由良と明夜だったならすぐにもヴァルキリーの動きについての話が始まるころだが、この場所この面子では不可能なため裕子の話に合わせて食を進めていく。

「それでどうなのよ、八重花？花鳳先輩と懇意になってWVの優待会員とかになって安く買えるようになれるのかな？」

いつの間にか本音が混ざり始めていたがツツコミはなし。

「無理よ。乙女会は別にそういう目的で作られた訳じゃないもの。」

そんな卑しい心持ちの人間を乙女会に入れるわけがないでしょう？純乙女会には大勢いたけど、とは言わない。

「う…」

卑しい自覚はあるらしく裕子は硬直した。

「そもそも連絡先を知らないもの。話はだいたいその場でしたし、連絡を取るなら海原葵衣経由って感じだったから。」

それが八重花を警戒しての措置だったのかヴァルキリーとしての方針なのかわからないがとにかく八重花の携帯に入っているのは葵衣の連絡先だけだった。

「そこからなんとかならない？」

裕子は弱々しく最後の抵抗を試みるが

「連絡するのは構わないけど何て言うつもり？私の友達が欲目に眩んで花鳳先輩とお近づきにならないって言ってるんですけど取り次いで貰えますかって？少なくとも私ならすぐに電話を切るわね。」  
八重花の容赦ないが的確な未来シミュレーションを前にガクリと首を落とした。

こうして裕子のささやかな野望は話す相手を間違えたがゆえに早急に終了した。

「…りくが頼めば、あるいは…」

「には？やえちゃん何か言った？」

「…何でもないわ。」

八重花は思い付いたその裏技的な交渉ルートを闇に葬り、腹いせにやけ食いをするのだった。

放課後、叶は由良たちに連絡を取ろうと考えていたがその前のホームルームで保険委員の集まりがあると連絡を受けたため会議室に移動した。

部屋に入るとすでに先輩や同学年、さらには1年生が集まり始めていた。

「ッ！？」

叶は部屋に足を踏み入れたときに背筋に氷を押し込まれたような寒気を感じた。

その感覚は忘れるわけもない始業式の日に襲ってきた人型の闇から感じたものに似ていた。

「大丈夫？顔色悪いわよ？」

肩を叩かれてハッと振り返ると入り口で立ち止まったせいで渋滞ができていた。

部屋の中からも心配そうな視線を感じるものの先ほどの殺気は消えていた。

叶は深呼吸して気を落ち着かせる。

「ありがとうございます。ちょっと緊張しちゃって。」

嘘も方便、その言葉で心配そうな空気は和らいだ。

叶は近くの席につきながら周囲に気を配る。

（あの化け物が学校にいるの？それとも…）

あまり考えたくはないが見た限り化け物が化けているような人はいない。

（あの化け物を操る人がいるの？）

叶は会議が始まってからも警戒し通して逆に注意が散漫になり、冗談とはいえ委員長にしますよという言葉に危うくはいと答えてしまふところだった。

叶としては”Innocent Vision”のリーダーすら持て余しているのだから他に余裕はなかった。

委員会が終わると皆散り散りに帰っていきボーツとしていた叶はほとんど最後になってしまった。

接触してくる人はいなかった。

ホツとしたようなモヤモヤするような微妙な感覚を胸に抱きながら夕日の色に染まり始めた廊下を歩いて昇降口に向かう。

「今日は遅くなっちゃったから明日でいいかな？」

由良と明夜は捕まらない。

八重花によれば午後の授業にはいなかったらしい。

だからまた明日にでも話そうと思った。

「もう少し遅くなってしまうても問題ありませんか？」

「ッ!？」

誰もいないと思っていた下駄箱で突然声をかけられて叶は声にならない悲鳴をあげる。

下駄箱の陰から現れたのはヴァルキリーの長の腹心、仕えるべき相手が卒業してからも執事服を身に纏う男装の麗人、海原葵衣だった。彼女の手には1通の封筒があった。

だがその感情を映さない目は叶を捉えていた。

「ッ。」

叶は恐怖を押し込めて葵衣に相對した。

今は”Innocent Vision”のリーダーだから。

「お茶会に御招待させて戴きます。」



叶が葵衣の用意した車に乗せられて連れてこられたのはシックな珈琲の喫茶店だった。

ここはかつて撫子が陸にヴァルキリーの理念を説き、敵対することになった店だ。

尤も今日は貸し切りでもマスターが花鳳の者でもない平時の喫茶店だったが。

葵衣は予約をしていたのかマスターに会釈をするとそのまま奥まったボックス席に向かつてしまった。

叶も慌てて後を追う。

てつきりそこにはヴァルキリーのソーサリスが待っているものと警戒していたが席にも周りにも彼女らの姿はない。

「本日はヴァルキリーの長、撫子お嬢様の代理である私と”Innocent Vision”のリーダーで在らせられる作倉叶様だけでの言わば首脳会談です。」

心を読んだようなタイミングでの声に叶は目をしばたかせる。

促されるままに席についてカフェオレを2つ注文した。

イメージ的に葵衣はブラックかと思っていたので叶は葵衣を意外そうに見た。

「もともとコーヒーではなく紅茶を好みます。渋味は良いのですが苦味は苦手です。」

またも心を読んだような会話。

叶は葵衣のジュエルは読心術なんじゃないかと思った。

「心を読んでいるわけではなく作倉様の心が表情によく表れているのです。人としては美点ですが交渉事には向かないのでご注意ください。」

さらにその考えまでも読まれた挙げ句助言まで受けてしまい叶は驚きすぎて曖昧に頷くことしかできなかった。

これから行われる会談と言う名の交渉の主導権を奪われたことに気が付かないまま注文したカフェオレに口をつける。

「それで、首脳会談で言われても何を話せばいいのか分からないんですけど、何のお話ですか？」

表情だけでなく心根まで交渉事に向かない叶は葵衣に自らの無知をさらけ出す。

ここで葵衣が荒唐無稽な話をしても叶は信じてしまうはずだ。

多少嘘っぽくても専門家が言うには…、や最近の研究で…、などの語句を用いればその真偽に拘わらず大抵の人は納得してしまう。

「ヴァルキリーと”Innocent Vision”の今後についてのお話です。」

だが葵衣はそのような手段を使う気は無かった。

それは撫子の名を貶めるような手段を使えないという忠義と正論でも論破できるという自信、そして無垢な少女に嘘をついて騙すことに対する罪悪感、それらが交ぜになった結論だった。

「ご存知かと思われませんがヴァルキリーの究極の理想は世界の恒久平和です。かつてはソルシエールの力で理想を実現する計画でしたが今は魔女ファブレから与えられた力ではなく、そこから我々が作り出したジュエルによって進めていくことになります。」

「でも、陸君が言っていました。ヴァルキリーの理想は人を殺すことで成り立つものだって。」

「半場様の率いる”Innocent Vision”との会談の際には確かにそのような考えの下で活動しておりました。しかしソルシエルでは最終的に行き着く場所が人類の抹殺となると気付いたため、ジュエルは殺害の象徴ではなくヴァルキリー統制の証として持つことになりました。」

ファブレの明かした真実の解釈、ジュエルの在り方の一面だけを強く押す、都合の良い表現で葵衣は話を進めていく。

叶はキャッチセールスの話を聞いているように時折頷きながら耳を傾けていた。

確かにヴァルキリーの在り方も半場陸との幾度もの衝突や様々な情報を得て変化し、気に食わない相手を問答無用で殺すようなことはなくなった。

しかし本質的には従属か死かの2択であり、従わない相手を排除する姿勢は変わっていない。

「ヴァルキリーはジュエルという新たな力で理想の実現を目指します。それでは”Innocent Vision”はどのようなのでしょうか？」

「私たちですか？」

「はい。」Innocent Vision”はもともと殺人の肯定したヴァルキリーの在り方を否定した半場様が数人のソーサリスと共に作り上げた反ヴァルキリー組織とでも呼ぶべきものです。」

叶も聞いた話を思い出し頷く。

「ですが”Innocent Vision”は大きく力を失いました。半場様が倒れられ、主力だったソルシエールの力は失われ、そして残ったのはセントの力を持つ作倉様と芦屋様のみ。お二方も現状の戦力としては不十分と言わざるを得ない状況です。」

「確な状況判断は叶も自覚しているからこそ重くのし掛かってくる。」「ジュエルはこれから力をつけていきますのでヴァルキリーの戦力は増加していくと思われます。対して”Innocent Vision”は低下したまま増加する傾向が見られません。もしも以前のような決戦が起これば間違いなく我々の勝利となることでしょう。」

それは純然たる事実。

未来視などなくてもわかるほどの圧勝でヴァルキリーの勝利に終わる。

叶も先日的美保や悠莉との戦いがさらに大きな規模で行われることを想像して小さく身を震わせた。

葵衣はそのわずかな変化を見逃さない。

「ヴァルキリーが変われば”Innocent Vision”の

存在理由はなくなります。皆様がヴァルキリーに協力してくださればより迅速にヴァルキリーは理想を実現することが出来ると考えております。」

葵衣はいつもながら静かな表情だがその瞳には確かな熱意があった。フアブレという障害がなくなり、この交渉で”Innocent Vision”の戦力を傘下に組み込むことができればヴァルキリーは磐石の体制で計画を邁進させられる。

撫子の理想の実現が一気に近づくことを葵衣は内心歓喜する。

叶はカフェオレのカップをじっと見つめて考えているように見えた。だけど叶では陸のような大局的な物の見方は出来ない。

圧倒的な戦力差と目指すべき目標の瓦解を武器に葵衣は”Innocent Vision”の頭から切り落とそうとしていた。

「それは駄目です。」

だから葵衣は、叶が穏やかながら強い思いを秘めた瞳で顔をあげ、はつきりとした否定の言葉を発したことが理解できなかった。

「…理由をお聞かせ願えますか？」

だから葵衣は尋ねる。

葵衣にとって未知の思考を辿り、自分では絶対に至らない答えへと行き着いた者を少しでも理解するために。

「確かに今の”Innocent Vision”は全然強くないでヴァルキリーに簡単にやられちゃうと思います。」

叶はあっさりとそのことを認めた。

だがそこに恐怖や悲壮感が含まれていない。

あくまで穏やかに、コーヒーを飲みながら世間話でもするように弱体化した”Innocent Vision”を肯定した。

「それならばヴァルキリーに参加すべきとはお考えになりませんか？力を持ち、人々を導く立場に立つことを誇りに思いませんか？」  
付け入る隙を見つけて葵衣はすかさず説得を試みるが返ってきたの

は困ったような笑みと横に振られた首だった。

それは改めて葵衣が叶の心を理解できていないことを意味していた。  
(分かりません。作倉様が今何を考えていらっしやるのか、まったく分かりません。)

さつきまで手に取るように理解できた叶の心がわからない。

人は無知を、故に未知を恐れる。

葵衣は今、叶を恐れていた。

「他のみんなはどう考えているのかわかりませんが私は一応”Innocent Vision”のリーダーですから。だから”Innocent Vision”としてはヴァルキリーに入ることはありません。もしかしたら他のみんなは入ってもいいって考えるかも知れませんが私はたとえ1人になっても”Innocent Vision”を無くさせません。」

「それは何故ですか？」

もはや葵衣は考えるのをやめた。

ただ叶の言葉を聞き、その言葉を理解しようとした。

ここにきて会話の主導権を完全に叶に明け渡したのだ。

叶はどこか恥ずかしそうに両手でカップを握ってカフェオレに口をつけるとはにかみながら顔を上げ

「だって、陸君が起きたときに”Innocent Vision”がなくなっていたら可哀想じゃないですか。」

叶の答えを示した。

葵衣は思わずカップを取り零しそうになった。

(なんとということでしょうか。)

葵衣は怒りとも呆れとも感嘆ともつかない感情がぐるぐると体の中を巡るのを感じた。

叶の出した答えは戦力差も目指す理想も関係ない。

ただ陸を想っての行動だった。

そしてそんな数字以外の要素の答えがあると知ったとき葵衣は絶望した。

もしかしたら叶は駄目でも戦況を正しく理解できる八重花や由良ならば説得できるかもしれないと思っていた。

だが”Innocent Vision”は元々陸を絆として集まったメンバー、叶と同じ気持ちでいる可能性が高い。

「私は最初からヴァルキリーとの戦いなんて望んでいません。ジユエルの世界がやってくるのなら諦めますけど少なくとも今は、陸君が目覚めるその時までには私は”Innocent Vision”を守ります。」

「…ヴァルキリーが”Innocent Vision”を排除しようとしたとしてもですか？」

反論の余地を無くした葵衣は苦し紛れの脅迫まで口にした。

それでも叶の強さは揺らがない。

「その時は全力で守ります。それでも守りきれなかったとしたら、それはきつと陸君が見る運命なんですよ。」

葵衣は完全に言葉を失い、叶はただ優しく微笑みを浮かべるだけだった。

話が終わった。

葵衣が自信を持って挑んだ交渉は決裂。

即時開戦のような状況にはならなかったもののヴァルキリーと”Innocent Vision”が相容れない存在であることが浮き彫りとなってしまうた。

葵衣はテーブルの下で握った拳の中にある宝石に意識を向けた。

（ここで作倉様を捕えて”Innocent Vision”に降伏を提案しますか？）

自らのプライドを捨て撫子の名も汚す行為だがこのまま帰してしまうのは危険だと葵衣の中の何かが告げていた。

（エルバ…）

葵衣が強迫観念に吞まれて机の下でジュエルを取り出そうとした瞬間  
パンツ

店のドアが勢いよく開いた。

ビクリと驚く店内の客はもう一度驚いた。

そこには巫女装束を着た少女が息を弾ませて立っていたからだ。

「琴先輩？」

叶が立ち上がって首を傾げると琴はあからさまに安堵した様子で近づいた。

（太宮院様がなぜここに？）

葵衣は表情に出さず驚愕する。

琴が来ない店というわけではないがこのタイミングで現れるのは明らかに異常だった。

「琴先輩、どうかしたんですか？」

叶が飲みかけのカフェオレを差し出すと琴はそれを飲んで喉を潤した。

「…いえ、近くを通っていたところ叶さんを見掛けたのでご挨拶を  
と。」

言葉とは裏腹に琴の目は葵衣を見ていた。

さりげなく叶を庇うように後ろに回しているのも警戒の表れだった。

「叶さんどどのようなご用でしたか？」

「些末事です。もう済みました。作倉様、ご足労をお掛けして申し  
訳ございませんでした。」

葵衣は立ち上がると深々と頭を下げた。

「こちらこそなんだかすみません。お代は…」

「ヴァルキリーの予算から出しますのでご心配は不要です。」

葵衣の拒絶するような態度と琴の急かすような態度に叶は支払い交渉を諦めた。

「ありがとうございます。そのお礼ではないですしご存じかもしれ

「ませんが。」

「なんでございましょう?」

葵衣はもう驚くような情報はないと軽い気持ちで叶の”お礼”に耳を傾けた。

叶は真面目な顔をして

「私たち”Innocent Vision”の敵はヴァルキリーではありません。」

そう告げた。

それは先日悠莉が言った言葉と似て非なるもの。

そして

「私たちの敵はジエムに似ているけど違う、新しい敵です。」  
ヴァルキリーにとってあまりにも寝耳に水の情報だった。

「それでは失礼します。」

葵衣が問い質す前に叶は琴に引つ張られるように店を出て行ってしまった。

ドアが閉まるのを見届けた葵衣は力なく椅子に腰を下ろす。

冷めたカフェオレに口をつけ、深いため息をつく。

完全にペースを乱された。

ヴァルキリーの要求は何1つ通らず、”Innocent Vision”のリーダーがヴァルキリーは敵ではないと宣言した以上攻撃しづらくなった。

(そして何より、新しい敵?それはいったい何です?)

叶が葵衣を混乱させるためについた嘘という線は叶の善性を今日の話で知ったからこそあり得ないと言い切れた。

つまり”Innocent Vision”はその未知の敵と接触した。

(4月の初めに”Innocent Vision”が動いていたのはジュエルに気付いたのではなくその敵に対する警戒でしたか。)  
葵衣は席を立つ。

控えていた運転手が会計を済ませており店を出るとすぐに車に乗り



込んだ。

「どちらまで？」

「ヴァルハラへ。早急に対策を練らなければなりません。」

葵衣は緊急用の電話を繋ぐ。

「お嬢様、緊急事態でございます。」

## 第16話 前途多難

「琴に連れ出された叶はすぐに”Innocent Vision”全員に連絡を入れた。」

由良と明夜も捕まったので全員を太宮神社に集合させることにした。神社に向かう途中、店を出てからずっと無言の琴に叶は声をかけた。「あの、琴先輩？もしかして怒ってますか？」

「いいえ。ちつとも怒ってなんてこれっぽっちもありませんよ、ええ。」

振り返らないしちつともとかこれっぽっちとかやたらと強調する辺り明らかに怒っていた。

叶が何を言うべきか悩み、そもそもなんであの店にいることを知ってたんだろつと疑問を持った辺りで琴が振り返った。

「後で内容はお聞きしますが先程の海原葵衣さんのお話は叶さんと”Innocent Vision”の道における分岐点でした。その選択如何で叶さんは茨の道を歩むことになる。もう少し早くお伝えしていればよかったです。」

琴は今にも泣きそうな程に目に涙を溜めていた。

「そこでようやく琴が怒っているのではなく後悔しているのだと気付いた。」

「琴先輩、泣かないで下さい。」

叶は手を伸ばして琴の頭を引き寄せ、胸に抱き締めた。

「私は、叶さんが心配で……」

「ありがとうございます。私は琴先輩やみんなが居てくれれば大丈夫ですから。」

叶はあやすように琴の艶やかな黒髪を優しく撫でる。

「琴の抱きつく力がわずかに強まり胸に顔を埋めた。」

「叶さん。」

「何ですか、琴お姉ちゃん？」

「ッ!？」

琴が抱きついたままビクリと震えた。

何故かプルプル震えている。

「琴お姉ちゃん?」

「は、…」

「は?」

「鼻血出そうです。」

泣いて興奮していたときに不意討ちをされたのがキタのか琴は鼻にティッシュの紙縋こよりを詰め込んだ。

「叶ふあん。お姉ひゃんは控えてくだひゃい。」

「ご、ごめんなさい。私、琴先輩はそっちの方が喜んでくれるかと思っで。」

シユンと俯いてしまう叶のいじらしさが琴の胸を打ち、慌てて手を振って狼狽ろうたいした。

ポンと紙縋が飛び出すほどに懸命に説得する。

「嬉しいです。ですがその、喜びすぎるといっつか、感極まるというか、もう我慢できないといっつか…」

段々危ない方向に向かおうとしているが叶は良いところしか聞いていない。

「よかったです。それなら少しずつお姉ちゃんに慣れてくださいね。こっちの方がずっと琴先輩と近い感じがして私は好きです。」

『好きです…好きです…好きです…』

琴の頭の中でその言葉がエコーする。

「さ、さあ、早く戻らないと皆さんをお待たせしてしまいますね。」

「あ、はい。急ぎましょう。」

それだけで機嫌を直した琴が早足になって太宮神社に向かっていくのを

「待つてくださいよ。」  
叶は首を傾げながら追いかけるのだった。

叶が太宮神社に到着すると真奈美と八重花はすでに待っていて、社務所に通されて少し待つと由良と明夜もやって来た。

「カナがこんな時間に呼び出すってことは随分と大事みたいだな。」  
「お姉さん。私だってもう高校生なんですからそこまで厳しい門限なんてないですよ?」

今は6時を回ろうかという時間、今から話をする確実に遅くなるが叶はすでに家に連絡をしてある。  
普段なら7時までには帰らないと過剰に心配されるが今日は問題なかった。

「叶が”Innocent Vision”として呼び出したということはあの人型の闇に遭遇したか、あるいはヴァルキリーが接触してきたってところね。」

「…。」  
八重花の指摘に叶が絶句し、皆に緊張が走った。

叶は気を持ち直して頷く。

「今日の放課後、ヴァルキリーの海原葵衣先輩とお話しました。内容は…」

「ヴァルキリーの今後の活動と現状の戦力差を主軸とした”Innocent Vision”への降伏勧告ってところかしら?」  
八重花がまたも的確に話の内容を言い当てた。

「八重花ちゃん、あのお店にいた?それともやっぱり読心術?」  
叶が目をぱちくりさせるのに対して八重花はなんでもなさそうな顔をしていた。

「やっぱりの意味がよくわからないけど、今の状況でヴァルキリーが戦い以外の行動に出たならそれは”Innocent Vision”を取り込もうとする以外考えられないわ。」

そこまで言い切った八重花の目がスツと細まった。

「それで、何をどう答えたの？」

「あ、あう……」

八重花の眼光に叶が怯える。

「やめる、八重花。どうせ順番に話すんだから急かすな。」

由良が仲裁に入ると八重花はふんと鼻を鳴らして居住まいを正した。

由良は苦笑する。

「八重花の先読みは本当に陸っぱいな。カナ、初めから説明してくれ。」

「は、はい。」

八重花のフライングで脱線した話がようやく軌道に戻り叶が話し始めた。

「海原葵衣先輩が言うにはヴァルキリーは今後ジュエルを使って人を殺さないように世界の恒久平和を目指そうです。ジュエルはヴァルキリー統制の証になるって。」

「嘘だな。」

「嘘ね。」

いきなり物言いが入った。

由良、八重花と声は出さなかったが明夜も頷いている。

「ソルシエルだろうがジュエルだろうが結局のところ戦いの衝動からは逃げられない。どれくらい製造の段階で規制できるのかは知らないが、結局ヴァルキリーに従わない奴を間引く世界にしかないぞ。」

「Innocent Vision」を勧誘してきたときも人々を導くみたいな感じのことを言っていました。」

ヴァルキリーが平和な世界で頂点に立つと言っているようなものなので葵衣としては失言の域に達する言動だが、どちらにしる同意しなかった以上関係ない。

「ソルシエルもジュエルも選ばれなかったもの。本質は同じ。叶と真奈美は違う。」

「あたしも厳密には違うからやっぱり叶だね。」

「わ、私は選ばれたなんて、そんなこと……」

由良が反論をし、叶が同意、そこに明夜と真奈美が絡み会話は瞬間に広がっていく。

「オホン。」

それを止めたのは琴だった。

姿勢よく座っているが顔は少々不機嫌だ。

「このままではいつまで経っても本題に辿り着きません。叶さんのお話を聞いた上で質問や意見を述べるようにしてください。」

「はい。」

小学校の先生みたいな琴に皆は小学生みたいな返事をしておとなしくなった。

気を取り直して話を再開する。

「ヴァルキリーの理想を聞いた後、今のヴァルキリーと”Innocent Vision”の戦力の違いを説明されました。今後ジユエルは増えていくけどソルシエルの力に頼っていた”Innocent Vision”の戦力は増加しないだろうって。」

口は挟まないものの全員が相づちを打つ。

「言われるまでもなくヴァルキリーと”Innocent Vision”の現状の彼我戦力比は大きい。」

「そしてさっきの話に戻るんですけどヴァルキリーが人を殺さないなら”Innocent Vision”が反抗する必要はない、だから一緒に理想の実現を目指しましょうって言われました。」

叶の話が一段落すると皆の口からため息が漏れた。

「典型的な良いとこだけしか言わないセールスね。」

「結局ヴァルキリーが支配する社会のどこが平和なんだか。」

「何も変わってない。」

叶や真奈美はヴァルキリーの実態をそれほど知っている訳ではないので特に意見は無かったが話の大半が信憑性に乏しかったことは由良たちの反応を見れば明らかだった。

「それで、叶はなんて答えたの？」

真奈美の質問に再び場が沈黙する。

この回答によつては”Innocent Vision”の内部分裂が起こる可能性があるため緊張が走った。

「陸君が目を覚ましたときに無くなっていたら可哀想だから”Innocent Vision”は無くさせませんって答えました。」

叶ははにかんでそう答えた。

「…。」

「…。」

さすがに予想外の答えに全員がフリーズし

「…くす。」

「はははは！そりゃ傑作だ！」

「ふふ、海原さんもさぞ驚いたでしょうね。まさか”Innocent Vision”のリーダーが、ふふ。」

思い思いに笑い出した。

「え？え？」

叶は突然笑い出した理由が分からず慌てるがみんな笑うのに忙しくて理由を話せない。

「はは。さすがは叶。」 Innocent Vision”のリーダーだね。」

真奈美も笑いを堪えながら叶を称賛する。

「な、なんなのお！？」

叶の悲鳴も笑い声に消えていった。

「それじゃあ私の答え、間違つてなかつたんですね？よかつた。」

「考えられる限り最高の答えだな。」

「”Innocent Vision”としては正解だし理屈派の人間には反論できないもの。」

”Innocent Vision”の理屈派2人からお墨付きを

もらって叶は胸をホツと撫で下ろす。

「これが叶さんの、” Innocent Vision ” の選択ですか。これでは仕方ありませんね。」

琴は叶の答えを聞いて寂しげに笑っていた。

それに気付いて叶が声をかけるよりも先に琴はいつもの表情に戻ってポンと手を叩いた。

「それともう1つありましたね。叶さんが人型の闇の話を書かせたとき、海原葵衣さんは酷く驚かれましたよ。」

「あれ、そうでしたか？ 私にはいつも通りに見えましたけど。」

「見た目に惑わされてはいけませんよ。」

このまま見極め方講座を始めかねない2人を由良が慌てて止める。

「ちよつと待て。それならあれはヴァルキリーじゃないってことか？」

「そうだと思います。だって見た目からしてジエムじゃないですか？いくらヴァルキリーの皆さんでもあんなのは作れないと思います。」

「言われて納得の叶理論。」

つまり人型の闇の登場は新たな敵の出現を意味していることがほぼ決定した。

ヴァルキリーの件が落ち着いてすぐにまた別の敵の存在が浮き彫りになった現実のため息を禁じ得ない。

「一難去つてまた一難。」

明夜の言葉が現状のすべてだった。

「申し訳ございません。」

花鳳邸。

仕事を終えて帰りついた撫子を待っていたのはリアルに土下座した葵衣の謝罪だった。

撫子は報告と葵衣の行動、どちらにも動じた様子はない。



「顔を上げなさい、葵衣。」

「しかし、私がつとうまく事を運べば”Innocent Vision”をヴァルキリーに組み込むことも出来たはずですよ。」

葵衣はグリグリと額を地面に擦り付けて自らを罰する。

それほどまでに葵衣は今回の失態を重責に思っていた。

撫子はしゃがみこんで葵衣の頬に手を添えて上を向かせた。

「私を赦していただけののですか？」

すがるような目で尋ねる葵衣に撫子は大きく頷いて見せ、赤くなつた額を優しく撫でた。

「正直に白状すれば”Innocent Vision”の吸収合併は成功するとは初めから思っていなかったのよ。」

「何故でしょうか？現在のヴァルキリーと”Innocent Vision”では戦力差は歴然としています。吸収合併という穏和な方法は双方が傷つかずに済む最良の方法であると思われませんが？」

「確かにそれは合理的で正しい判断よ。」

「はい。」

葵衣は正座した格好でしつかりと頷く。

スーツ姿の撫子の前に座らされている男装の葵衣は見方によっては親や教師に説教されている少年のようであった。

「しかし世の中はそんなデジタルで動いているわけではないわ。様々な人の思惑が働いていて、時にそれは利益や損得とは無関係な選択をすることもある。今回の”Innocent Vision”の場合、彼女たちは戦力を必要としているわけではなく半場さんの帰る場所を守るために組織を続けているのよ。」

葵衣は普段の無表情を繕えないほどに愕然とした。

まさか説明するまでもなく撫子はこの結末を理解していたというのだ。

そんな葵衣を見て撫子は頭を撫でる。

「参加してそれほど長くない作倉叶さんと話すと聞いたのでもしか

したらうまくいくかもしれないと期待していたのだけれど、やはり  
” Innocent Vision ” にある半場陸という名の絆は  
強力だったようね。」

「絆。ヴァルキリーにもそれはあるのでしょうか？」

「。。。。。。わ、私と葵衣、緑里には強い絆があるでしょう  
？」

撫子は思い切り捻り出してようやくそこが出てきた。

だが切羽詰まった葵衣はその事実があることを救いとして安堵した。  
ようやく立ち上がった葵衣は撫子の部屋に共に向かいながら思索し  
ていた。

「まだ悩んでいるの？」

「いえ。吸収合併の件とは別に作倉様が去り際に仰っていたのです。  
” Innocent Vision ” の敵はヴァルキリーではなく  
ジエムに似た新たな敵だと。」

撫子が前を向いたまま足を止めた。

葵衣の位置から撫子の表情は窺えない。

「ヴァルキリーで確認は？」

「されておりません。ですが作倉様が嘘を仰ってられたようには見  
えませんでした。」

ならばこの言葉に再び魔の手が忍び寄っていることになる。

ようやくジュエル計画が軌道に乗りそうだという矢先の新たな敵の  
出現。

撫子は苦笑して再び歩き出した。

「本当にわたくしたちの夢は前途多難ね。」

だが前を見据える撫子の目は困難に立ち向かっていく強い意思を宿  
していた。

## 第17話 計画

ヴァルキリーとの対話で成すべき事を再認識した” Innocent Vision”。

人型の闇の目的とその向こう側に居るであろう黒幕を突き止めなければ再び襲われることになるかもしれない。

またソルシエルを失った明夜たちは叶たちの助けとなるべく新たな力を得なければならなかった。

だが

「うーん、やっぱり温泉は捨てがたいわね。」

「城が見たい。あと刀とか。」

「ハイキングとかしたいね。山登りとか。」

「真奈美、意外とチャレンジャー。」

” Innocent Vision” は敵への対策ではなく2週間後に迫ったゴールデンウィークの旅行の計画を立てていた。

それぞれが持ち寄った旅行雑誌やガイドブックを元に行き先を決めるわけだが果ては北海道から沖縄まで意見は見事にバラけていた。

「こっちは雅人君の旅行があるからちようどよかったけどまさか叶たちが羽佐間先輩たちと旅行に行くとは思っていなかったわ。」

とは彼氏持ちの裕子談。

久美も家族旅行が入らなければ裕子に着いていくと言って芳賀を困らせていた。

「ウジウジ悩んだところでソルシエルが戻ってくるわけでもない。たまにはこの界限を離れてパツと弾けるか。」

という由良の発案で企画がスタートしたわけだが行き先からすでに難航していた。

パンパンと八重花が手を叩いて注目を集める。

「このままだといつまで経っても決まらないわ。ここはくじ引きで行き先を決める人と回りたいルートを決める人を決めるべきよ。」

「このままじゃ決まらないもんね。うん、いいと思う。」

「リーダーが賛成なら俺は構わないぞ。」

「くじ引き。」

「どこになつても恨みっこなしだね。」

八重花の案に全員が賛同し早速くじが作られた。

「箱の中に紙が入っているわ。赤丸が行き先、青丸がルートを決める人ね。」

教室にあつた段ボールに紙を放り込んでがさがさと振る。

ドカリと机の真ん中に置かれた箱からは本人たちの緊張感を押し固めたように独特のオーラを醸し出していた。

そして全員が徐々に戦闘時の雰囲気纏って行く。

「くじを引く順番は：やはり俺たちは戦う運命にあるようだな。」

「私のモットーは先手必勝、全力投球。一番手を譲る気はないわ。」  
由良と八重花が火花を散らす。

明夜も手を絡めて組み、その間を覗き込むなど準備に余念がない。

「私は残り物でいいよ。」

「叶、それだと本当に欲しいものを手に入れられないよ。」

「！…うん、頑張る。」

叶と真奈美もまた闘志を漲らせていく。

箱の上に5つの拳が突き出された。

「恨みっこなしだ。」

誰かが生唾を飲み込んだ。

その音すら聞こえそうな静寂を生む緊張の中で

「最初はグー！ジャンケン…」

「ポンッ！」

一瞬の戦いが起こった。

全員が振り下ろした手を中途に止めたまま動かない。全員の視線が円陣の中央に注がれていた。

そこに並ぶ手はグー、グー、グー、グー、パー。

叶の手だけが石ではなく紙を出していた。

「えっと、勝っちゃいました？」

「くっ、やはり無欲の勝利ね！」

「だがまだだ！これでは終わらないぞ！」

「妙なテンションで白熱する”Innocent Vision”のメンバーの輪から少し離れて叶はクスツと笑った。

みんな落ち込んでいる様子もなく楽しそうにしている。

それが空元気なのかどうなのかは分からない。

敵に狙われている状況、ヴァルキリーの戦力、失われたソルシエール、そして目覚めない陸。

不安ばかりが募る現状でも笑っていられる強さが”Innocent Vision”にはある。

「あ、あたしの勝ちだ。」

「…所詮、魔剣に手を染めた私たちじゃセイントには勝てないのね。」

「あはは、別にあたしはセイントじゃないけどね。」

2番手は真奈美になったようだった。

勝ったところでくじが当たるかは別問題な筈なのだが八重花ですらそのことを忘れる熱狂ぶり。

3人のソーサリスは拳をぶつけ合いそうなほどの勢いで何度も勝負を繰り広げていた。

そして

「勝った。」

「まだだ！ここからが本当の勝負だ。」

「…パンドラの箱のように残り物にこそ福があるのよ。」

明夜、由良、八重花の順で決着した。

「まずは叶からね。どちらかが当たる確率は5分の2、4割よ。だけど叶が外せば次は5割、その次なら7割弱…」

「八重花。それはとらぬ狸の皮算用だよ。」

一番最後なので確率的にはかなり厳しい八重花が自分を奮い立たせているところに真奈美が苦笑気味にツツコミを入れる。

「八重花じゃないがカナの引きによって俺たちのテンションが変わるんだ。さあ、引け。」

箱を押し付けられて困り顔を浮かべていた叶は一度グツと拳を握ると箱に手を入れた。

(どれがいいかな?)

別に叶はそれほど強く行きたいと思っっている場所はない。

みんなで楽しく旅行ができればと考えているだけだ。

(あれ?)

叶は箱の中にある紙の感覚が微妙に異なることに気が付いた。

5つの紙の内、1つが温かく感じたのだ。

それはまるで誰かに手を握られたような、それでいて不気味な感じはなく優しい感触。

叶はその紙を手にとって箱から引き抜いた。

見なくても分かる。

叶は苦笑しながら折り畳まれた紙を開いた。

そこには赤い丸が記されていた。

「当たり、みたいです。」

それを見た八重花はよろめき、ガクツと机に両手をついた。

「…まだよ、まだ25%しか当たりの確率はない。私の番では100%。ふふふ…」

それは残り1枚で最後なら残っていれば絶対に当たりだがその前に25%と33%と50%があることを意図的に無視している。

「そこまで必死にならなくても全員で行けば楽しいんじゃないかな

「甘いぞ、真奈美！興味のないやつが神社仏閣を回る旅行なんてただの苦行だ。自分が楽しむためには何としてもルート選択の権利を得る必要があるんだぞ！」  
いつになく白熱した由良の様子にビビりつつ真奈美が箱に手を入れる。

あまり悩む様子もなく引き抜いた紙は白紙だった。

「よくやった、真奈美！お前はこれからマナと呼んでやろう！」

「あ、ありがとうございます。」

真奈美は叶と苦笑しあい隣に座った。

「叶は何処に行きたい？」

叶は行き先を決める権利を得たのだからどこでも選べる。

それによってルート選択は当然大きく変わるわけだから叶の選択は非常に重要だった。

「そうだね……」

叶は窓から吹き込んできた風に首を巡らせた。

空は雲一つない青空でどこまでも続いているようだった。

「…海が、見たいな。」

「ス力。」

「まさか…外れだ。」

「やつ、た？本当に100%？」

叶が行き先を決めたとき、後ろでも八重花が奇跡の当たりを引いて驚きすぎて呆然としていた。

こうして”Innocent Vision”は八重花プロデューズで水泳には早い海に行くことになった。

それを見るともなしに見ていたのは偶然通りがかった悠莉だった。  
「あら、随分と楽しそうですね。ゴールデン・ウィークに旅行に行かれるのでしょうか？」

机の上に旅行情報誌とガイドブックが置かれているから一目瞭然だった。

悠莉は毎年ゴールデン・ウィークは家族と旅行することになっていたが、ああして楽しそうに計画を立てている姿を見ると羨ましくも思えてくる。

「ヴァルキリー全員は厳しいかもしれませんが”RGB”でなら行けるかもしれませんね。来月くらいからジュエルも本格的に運用を開始するようですしその前の骨休めとして。」

口に出してみればそれはとても素晴らしいことのように思えてきた。しかしすでに半月を切っていて今からでは宿の確保も出来るかどうか。

それ以前に美保と良子に予定を聞かないことには始まらない。

「半場さんのような男性と旅もしてみたいですが気ままな女同士の旅も良さそうですね。」

こうして悠莉はいつも以上に笑みを浮かべながらヴァルハラに向かっていた。

予約を取れるかどうかの瀬戸際は叶たちも同じ。

役割が決定した”Innocent Vision”の面々は一度着替えるため家に戻ると会場を東條宅に移して集合した。

八重花は割と高確率のくじを引き当てたことでもかなり浮かれている。今も自前のモニターパソコンを前に指の準備運動を嬉々として行っていた。

「私の情報検索能力を使って今日中に目当ての場所を決定するわ。叶、行き先の指示を頼むわよ。」

「う、うん。頑張るよ。」



八重花の気迫に押されながらも叶も気合いを入れて画面を見ている。他のメンバーは情報誌の海に関するページを重点的に探していた。

「この季節じゃ海開きはしてないだろうな。そうなると海以外に売りがある場所がいいか。」

「熱海とかその辺は温泉がありますね。」

「北海道、海鮮。」

目的地を探しつつ全員が自分の要求を出していく。

「外野は無視して叶の行きたいところを言いなさい。」

八重花はネットで海の画像を表示して叶に見せた。

海と検索をかけたただけなので海の家メニューから海の風景写真までいろいろ画像がアップされている。

「あ…。」

その中の一つで叶が小さく声を漏らした。

八重花はすぐにスクロールを停止させた。

それは静かな海の写真だった。

どこか高いところから撮影したらしく下に古い町並みや電車の線路が見え、海と空の境が延々と左右に広がっている。

確かによく撮れているが特に何か変わったものが見えるわけでもなく、叶が見覚えのある風景というわけでもなかった。

「…ここ？」

「うん。」

叶は迷わず頷いていた。

叶が見たいと思ったのはこの海だと直感めいた何かが言っているようだった。

「叶が一発で当たりを引いて、そのサポートに私が付くなんて出来すぎよ。」

確かに1人目に当たりが出るだけならまだしもその後最後までもう1つの当たりが出ない確率は相当低い。

そこに運命的な何かを感じずにはいられなかった。

そして行き先もまた誰かに導かれるように決まった。

「ここからそう遠くないわね。これだけじゃ面白味にかけるからそこから近場で楽しめる場所を探すわ。」

八重花は写真の住所を探し当てるとそこに行くことを前提にしたお楽しみ旅プランの計画に移行した。

娯楽が欠片もなさそうな、それ以前に観光地ですらないような場所に行き先が決まってテンション大暴落を起こしていた由良たちもそれを聞いて復活した。

「そうなるやっぱ温泉だな。」

「温泉と海の幸は固そうですね。」

「美味しいもの。」

「了解。宿泊可能な宿を探しつつ温泉と食事に重点をおいて検索をかけてみるわ。」

八重花が検索を始めるとパソコンの回りに人が集まり出したので叶は下がってベッドに腰かけた。

気が付くとぼんやり自分の手を見つめていた。

(あの時くじから感じた感触。陸君に似てたかも?)

手を握った事だつて数えるほどしかないが叶にはそう感じられた。

(もしもあれが本当に陸君なら、旅行の行き先にもきつと意味があるよね。)

導かれる先に何かあるのか分からない。

それでも陸が呼んだならそれには意味があると、ただ陸を信じようと叶は思った。

「カナ、こつち来い。候補が出たぞ。」

「は、はい。」

呼ばれた叶は立ち上がって近づいていく。

”RGB”もまた吉葉駅前のファーストフードで旅行の計画を立てていた。

「ここはやはり海外が…」

「近場で遊ぶべきよ。」

「山登りとか川下りとかやりたいね。」

「が行き先以前に意見が掠りもしない。」

ブルジョワな悠莉は問題外だが美保と良子の意見にしても近場で川下りが出来るような大きな川はない。

「悠莉。あんたん家じゃないんだからそんなお金があるわけないでしょ?」

「それに今からじゃ飛行機とか宿の予約を取ったりするのも厳しいんじゃないかな?」

海外反対派の美保と海外に興味はあるが現実的な良子の意見に悠莉は頬に手を添えて首を傾げる。

「そうですね。しかし近場で遊ぶだけでは旅行ではないですよ?」

「そうなるとやっぱり山…」

「却下。」

「冗談はもう少し面白い内容でお願いします。」

ここぞとばかりに自分の意見を主張しようとしたがあっさりと拒否され、言動がつまらない冗談扱いされた良子は哀愁漂う表情でオンラインジュースのストローを意味もなく弄りだした。

そんな姿を悠莉がどこか楽しげに見つめている。

「こうして考えるとヴァルキリーって本当にバラバラというか自分勝手よね。」

美保が乗り出していた体を背もたれに投げ出してジュースを飲みながら呟いた。

「ソルシエールやジュエルは欲望とか負の感情で動くからね。それぞれ違って当然だよ。」

「それなら”Innocent Vision”はどうなんです?」  
美保の本題にして疑問に良子は無い頭を回すがやっぱり何も出てこ

ない。

「ふふ、簡単なことですよ。」

だが悠莉は確信を持っていらっしゃるらしく笑っていた。

2人の興味の視線を受けてゆっくりと口を開く。

「それは半场さんへの愛です。」

「…あー、はいはい。」

「なかなか面白い冗談だね。」

悠莉としては大まじめだったのだが全く相手にされず、その後ファーストフード店に数時間居座って店員に嫌な顔をされながら”R G B”は旅行先を決めていくのだった。

## 第18話 金色ウィークの幕開け

そして”Innocent Vision”、ヴァルキリー、謎の敵、それらすべてに関して何も事件が起こらないまま黄金週間が到来した。

叶が待ち合わせ場所である壱葉駅に着くとパンツスタイルにちょっと不釣り合いな麦わら帽子を被った明夜が待っていた。

「おはよう、明夜ちゃん。楽しみだね。」

「うん。楽しみ。」

表情はほとんど変わらないがウキウキしているのが雰囲気から窺えた。

それを微笑ましく思いながら道の方に目を向けると旅支度をした”Innocent Vision”のメンバーが壱葉駅に集まって来ていた。

「カナと明夜が先だったか。」

由良はジーパンにシャツにジージャンで肩に荷物を提げている。

「相変わらずお姉さんはかっこいいですね。」

目付きの鋭さを凜々しさと置き換えれば由良はモデルのようなスタイルを持っていた。

長い足、細い腰、大きな胸、どれを取っても叶に勝ち目があるパーツがない。

「…はあ。」

小さくため息をついた叶の心を何となく悟った由良はポンポンと叶の頭を叩いた。

「その辺りは温泉でじっくり確認してやるからな。」

「い、いいいえ、遠慮します！」

逃げ出そうとする叶だが頭を押さえられているから動けない。

由良の口の端がニヤリと笑ったように叶には見えた。

「姉としてはカナの成長を確認する必要がある。そもそも女同士の

スキンシップだ。気にするな。」

実に男らしい考え方の由良に叶は反論を押さえ込まれて渋々頷いた。  
「また叶を苛めてるのね？」

そこに割り込んでくる声に振り返ると黒いワンピースに黒く唾の広い帽子を被った八重花が腰に手を当てて立っていた。

その後ろには杖を手にした真奈美もいる。

「いじめるわけがないだろう？俺はただ温泉でカナの成長を確認しようって話をしただけだ。八重花だって気になるだろ？」

そこは即座に反論してくれることを期待していた叶だったが八重花はジロツと叶の全身を無言で見つめていた。

「…確かに、私の中の叶のデータを更新する必要があるそうね。」  
ニヤリと笑う二人目は明らかに面白がっていた。

「えーん、真奈美ちゃん。」

「裸の付き合いは友情を育む基本だよ。」

泣きついた真奈美は元ソフトボール部の体育会系だった。  
孤立無援になった叶はべそをかきながらガクリと項垂れるのであった。

「げ、あんたら。」

突然かけられた嫌そうな声に顔をあげるとヴァルキリーの”RGB”、等々力良子、神峰美保、下沢悠莉がいた。

尤も嫌そうな態度を示したのは美保だけで

「八重花、元気そうだね。」

「おかげさまで。」

「皆さんは相変わらず仲が良いですね。」

「そうだね。」

割と他の2人は和やかだったりする。

「そこ、和むな！」

いつもカリカリしている美保はこんな時でもキレやすい。

「まあまあ、せっかくの旅行ですから落ち着いてください。」

「あたしはこの面子と行き先が一緒じゃないってわかるまで落ち着

けない！」

「何を繊細な女の子みたいなのを言っているのですか。」

「あたしは繊細な女の子だ！」

美保が噛みつき悠莉が受け流す構図は健在ですっかり見世物だ。

叶が救いを求める視線を八重花に送るとため息をつきながらも2人に近づいていった。

「悠莉、煽って遊ばない。」

「美保さんの打てば響く反応を見ているとつい歯止めが聞かなくなるんですよ。」

困りましたねと他人事のように苦笑する悠莉にもう一度盛大なため息をつくると今度は美保を見、

「はあ。」

何も言わずため息をついた。

美保の額に青筋が浮かぶ。

「何よ、そのため息は！？やるなら相手になるわよ！」

美保の左目に朱色の輝きが満ち始める。

八重花は掌打をその眼前スレスレに打ち込んだ。

完全な不意打ち、倒すつもりで放たれていたら間違ひなく昏倒していただろう死角からの一撃に美保がタラリと冷や汗を流す。

「こんな大勢の前でジューエルを使うつもり？こっちはやる気が無いんだから落ち着きなさい。」

「…チツ。わかったわよ。」

美保はふて腐れてそっぽを向くと八重花から離れていった。

代わりに悠莉が寄ってくる。

「皆さんはどちらに行かれるつもりですか？」

「由芽浜に行つてから小旅行よ。」

「由芽浜…観光地ではありませんよね？」

八重花はスツと視線を叶に向けるがそちらは話をしている気付いていなかった。

「聖人様のお導きよ。何かあるのかはりくでもない限り予想もつか

ないわ。」

お手上げとばかりに首を横に振ると悠莉はクスクス笑った。

「旅が楽しくなるスパイスは用意されているようですね。私たちは山と海と温泉をコンセプトにした旅行です。」

「悠莉、そろそろ時間よ！」

どこか尋ねる前に美保と良子が悠莉を呼んだ。

「急ぎませんと乗り遅れてしまいますね。それではよい旅を。」

「ありがとう。そっちなもね。」

悠莉はニコリと微笑むと会釈をして2人のもとに去っていった。

「ヴァルキリーと馴れ合う日が来るとは思わなかったな。」

八重花に近づいた由良は複雑な顔をしていた。

「今でこそ”Innocent Vision”の八重花だが元はヴ

アルキリーにいたからこそ先ほどのように話ができるわけで、明夜

や由良、真奈美はやはり敵という認識が強いので戸惑っていた。

叶はどちらとも言えないがとりあえず美保の怒りは怖いのであまり関わりたがらない。

「今の”Innocent Vision”は戦いを極力避けないといけないのよ。力が無いまま戦うくらいなら馴れ合うくらいなんてことないわ。」

八重花は遠くを見ていて表情を見せなかった。

痛いところを突く正論に暗くなりかけた空気を

「あたしたちもそろそろ電車の時間だよ。」

真奈美が声をかけて払拭した。

「折角の旅行だ。楽しまなきゃな。」

「吉葉でのしがらみを温泉で流したいわね。」

「それじゃあ、”Innocent Vision”慰安旅行に出発です！」

叶の元気な声を合図に”Innocent Vision”の旅がスタートした。



ガタンゴトン

ゆっくりと走るローカル電車で客の姿はほとんどない。

「貸し切り電車？」

「違うわ。電車を貸し切るにはかなりの金額が必要になるもの。」

車両を見回ってきた明夜の疑問に八重花がある意味正しく答える。

叶は窓の外をぼんやりと見つめていた。

流れていく風景は徐々に畑や森のような自然色豊かなものにならなくなってきており、目に映る家屋も昔ながらの風体を見せるものばかりになってきた。

「まるでタイムスリップしたみたい。」

昭和の時代を知らず、豊かな物質社会で生きてきた叶たちですら皆が寄り添い一生懸命に生きてきた古き時代を懐かしいと感じた。

窓枠に肘を置いて同じように景色を眺めていた由良は叶の言葉にフツと笑みを溢した。

「この光景を見て不便だとかぼろくさいと言わない辺りにカナの善性が見えるな。」

「お姉さんは古くさいと思いますか？」

「まあな。だが、悪くはない。現代人は恐ろしいくらいに他者に無関心だ。隣人の顔を知らず、何か事件が起こっても自分には関係ない関わろうとしない。」

実感のこもった声で怖い顔をした由良はまた表情を和らげた。

「だが、古き良き時代には物の豊かさはなくても人情という心の豊かさがあった。はたして今と昔、どっちが幸せなんだろうな？」

その答えはそのどちらの時代にも生きてきた者にしか出せず、叶たちにはその解答権はない。

「なかなか難しい話をしてるみたいだね。」

「真奈美ちゃんは今と昔、どっちがよかったと思う？」

「どうだろうね。少なくともあたしがこれだけの怪我をして生きてるのは発展した医療技術のお陰だから一概に昔が良かったとは言え

ないよ。」

それも視点の一面。

技術の進歩は目覚ましくたった十数年で情報通信は世界すべてと繋がるほどに広がり、物質の豊かさは技術力の向上を表している。知識と技術が多くの人を救っている現実は変わらない。

「…やっぱり今がいいんです。」

叶はしつかり悩んだ結果そう答えた。

「何でだ？」

「技術はもう世界が滅ばない限り後戻りはしませんよね？でも人の心は変えていこうという意思があればきつと昔のように人情味に溢れたものになることができるはずです。だから今、じゃなくて未来の方がいいに決まっています。だって未来はまだ定まっていらないんですから。」

陸や琴と出会ったからこそ叶は未来の不確定さと無限の可能性を信じる事ができた。

キョトンとしている2人を見て叶の顔が赤くなる。

「…って、私は、その、考えているわけです。」

と自信無げに付け加えて俯いた。

「なるほどな。カナは未来への希望を持っているわけだ。」

「未来が良くなっていくと信じられるのも叶らしいよね。」

「うーん。そういう訳じゃないよ。ただ琴先輩と陸君ならみんなが幸せな未来を知ってるんじゃないかなって。」

叶の言っていることは他力本願だが人間1人の意思で世界を変えるのは難しい。

だが琴の先見や陸の Innocent Vision、Akashic Vision は未来を導く力を持っている。

「でもその力に頼るんじゃなくて一緒に未来を築いていきたいと思っってます。」

それはヴァルキリーとはまた違う高い理想。

ジュエルによる統率に根付くヴァルキリーの理想とは真逆の各自の

意思で平和へ導くもの。

それは従えるよりも難しい。

「…まあ、新しい”Innocent Vision”の掲げる理想としちゃ悪くないな。」

「力に頼らず皆が平和でありたいと願う世界。壮大だね。」

「戦わない世界がいい。」

「その机上の空論みたいな夢物語をどこまで現実に出来るか、なかなか面白そうな話ね。」

明夜と八重花もいつの間にか聞いていてみんなで円を作っていた。

「日常を守る”Innocent Vision”が日常を変えるものになるわけだな。ま、気長にやるか。」

由良が真ん中に手を差し出す。

「困難は多いと思うけど、あたしは叶についていくよ。」

真奈美がその上に手を添える。

「頑張る。」

明夜も続く。

「ヴァルキリーにもあの化け物にも邪魔はさせないわ。りくが目覚めるときまでになんとかしたいものね。」

八重花はすでに先の問題について考え始めていた。

最後に叶が手を乗せる。

オリーブの光が5人の乙女を祝福するように淡い光を放った。

「この旅行が終わったら”Innocent Vision”、活動開始です。」

「「おー！」」

掛け声と共に振り上げられた手にはまだ淡い光が点っていた。

ガタンゴトン

ローカル電車はゆっくりと走る。

「そう言えばカナ。太宮院は誘わなかったのか？あいつはカナの誘

いならホイホイついてくると思ったんだが。」

「あはは、実はですね…。」

「…と言うわけで”Innocent Vision”のみんなと泊まり掛けで旅行に行くことになったんです。琴お姉ちゃんも一緒にどうですか？」

普段ならここで琴お姉ちゃんに対するツッコミが入るのだが今日は動かないで俯いている。

「琴先輩？」

呼び方で気分を悪くさせてしまったのではないかと心配になって呼び方を改めると顔を上げた琴はブワツと漫画みたいに泣き出した。

「え、え！？そんなに琴お姉ちゃんが嫌だったんですか！」

「違います。ぐすつ、どちらかと言えば琴お姉ちゃんじゃないともっと泣きます。」

「ええと、それじゃあ、琴お姉ちゃん、どうしたんですか？」

泣きながらもちゃっかり要望を出す琴に戸惑いつつ叶が改めて尋ねると琴は鼻を嚙りながらヨヨヨと袖で口許を隠しながら横座りに体勢を崩した。

「ああ、わたくしはどれほど不幸なのでしょう。ゴールデン・ウィークと呼ばれる大型連休には各界のお偉方が”太宮様”の先見の予定を無理矢理願い出てきて帳簿がいっぱいになるほどです。あと一月早ければどんなことになるかと予定を空けたというのに。ああ、口惜しい。懐が潤っても心が寒い。」

「…って泣いてました。」

話を聞き終わった由良は反応に困って頬を掻いた。

「それは沢山仕事が入ってガツポリ儲かるっていう自慢か？」

「…多分、違うと思いますよ？」

叶もそう聞こえなくもなかったので反論も弱々しい。

「でもやっぱり”太宮様”は凄いですね。前にはこの間選挙で負

けて辞任した総理大臣さんも来ていましたし。」

叶はその時偶然居合わせて春頃に失脚すると聞いていた。

それが現実になり改めて”太宮様”の先見のすごさを実感したものだっただ。

「俺たちがいない間に悪さをされなきゃいいんだが。まあ、太宮院なら心配ないか。」

「はい。」

電車は目的地にゆっくりと向かっていた。

## 第19話 彼女を呼んだモノ

電車がホームに停車した。

最後にガタンと大きく揺れてふらついた叶は

「おっと。」

ポヨンという効果音が聞こえそうな感じに由良の胸に受け止められた。

何となく空しい気持ちになりながら礼を言っ て荷物を手に電車を降りた。

固いコンクリートのホームに踏み出した一行はそこから見える景色を見て思った。

「…何も無い。」

思わず口に出てしまうくらいホームから見える景色は何もなかった。あるのは海と木々の山と畑と点在する家。

もう少し海の方に行けば家も増えているが都会や吉葉とは比べるべくもなく何もなかった。

八重花は鞆からミニノートタイプのパソコンを取り出して起動させる。

「…無線LANがこんなところにあるわけないわよね。」

一応携帯電波でネットが接続できるようなアプリケーションを持っているが今は必要ないのでパソコンを閉じる。

「叶、ここに何か用があるの?」

普段は叶の味方の真奈美ですら何もめぼしいものがない場所を前にして叶の選択に疑問を抱いてしまう。

「うん。そんな気がする。」

それでも叶は何かを確信したようにしつかりと頷いた。

空を見つめて風の声に耳を傾けるように立っている。

その姿はどこか神に祈りを捧げる聖女のように真奈美たちは声をかけることもできず呆然とその姿を見つめていた。

くー

突然聞こえてきた音はその神秘的な光景を台無しにした。

張本人である明夜は悪びれた様子もなく

「とりあえずご飯。」

お腹を押さえた。

「そうだね。街道の方に出ればきつと食べ物屋さんもあるよ。」

叶から感じられた神秘性もすっかり消えてしまい、由良と真奈美、

八重花は先立って歩き出した叶の背中を見て首をかしげるのだった。

無人駅をあとにしてしばらく歩くと海沿いの街道に出た。

街道付近は確かに家が増えていたが…飲食店は皆無だった。

「ごはん…」

明夜がジッと由良を見ている。

厳密に言えば胸を。

「これは肉まんじゃないぞ。」

「うっ。」

「明夜が空腹のあまり幻覚を見始めたわ。早くなんとかしないとカ

ニバリズム明夜になるわ。」

「カニバリ…カーニバル？」

「カニバリズム。人食よ。」

「!？」

八重花の冗談もその後ろでギラギラとしているように見える明夜の目を見ると本気のような気がして叶は真奈美に抱きついた。

「仕方がないね。ちよつと手分けしてこの辺りの店を探しに行こう。

携帯は通じるはずだから見つけたら連絡。見つからなくても30分

後には一度集合するように。」

てきぱきと指示を出す真奈美に全員即座に頷き、明夜から逃げ出すように散開したのだった。

叶と真奈美は同じ方向に移動したのだがすぐに道が二股に分かれていた。

1つは海側に進む道、もう1つが山側の道である。

真奈美は海側の道に足を向けた。

「一緒に動いても効率が悪いし叶はそつちを見てきて。」

「でも真奈美ちゃん、歩くの大変じゃないの？」

義足こそ服と靴で隠れているが眼帯をしていて杖をついて歩いている女の子などどこが悪いのはい一目瞭然だ。

叶の心配を真奈美は軽く笑って答える。

「もう義足で歩くのも問題ないよ。杖は万が一の時のためだし。それに本当に大変な時はスピネルを使うから大丈夫だよ。」

「…うん。わかった。気を付けてね。」

「叶もね。それじゃあ、また後で。」

手を振って普通に歩いていく真奈美の背中を見送ってから叶は逆方向の山側の道へと進んだ。

4月下旬にしては暑い日差しの中、叶は食べ物屋を探して歩くが道を成す壁はどれも木造の家屋ばかりで中には無人になって朽ちかけているものもあり、その中に店らしいものはない。

道はなだらかだが確実に傾いており視線を先に向けると青々とした木々の生えた山が見えた。

「さすがにあつちにはないよね？」

それだけでなくも集合場所から大分離れてしまっていた。

そろそろ戻らないと時間に間に合わなくなる。

「見つからなかったけど、明夜ちゃんに食べられちゃわないかな？」

ブルルと身震いしながら振り返った叶は

「あ……」

小さく驚きの声を漏らした。



集合時間になったので元いた場所に由良が戻ると真奈美と八重花が話し合っていた。

その後ろで明夜がお菓子を食べている。

「コンビニでも見つかったか？」

真面目な会話をしている風の2人には声をかけづらかったので明夜に尋ねると首を横に振った。

「持ってきたお菓子。」

「…それなら最初からそれを食つとけばわざわざ探しに行く必要なかったんじゃないのか？」

すると明夜は不思議そうに小首を傾げた。

「？これはお菓子。ご飯はご飯。」

「あー、そうかい。」

別腹理論を地で行く明夜に呆れつつまだ話し合っている2人に目を向けた。

「あいつら、何を話してるんだ？」

「モグモグ、叶が戻ってこない。」

「一大事じゃねえか！何暢気に菓子食ってるんだ！？」

いつも通りの口調で重大な事件を告白する明夜に由良が激しくツッコむ。

明夜は食べ終えた菓子の袋を鞆に詰め込むと立ち上がり

「お腹が減ってたら動けない。」

割と真面目な顔になっていた。

由良は頭を掻いて呆れると気持ちを入れ換える。

「カナが帰ってこないんだってな？」

「はい。叶は時間を守る子ですから。」

「一番考えられるのは迷子だけど、それほど複雑な道とは思えないわ。」

叶の友人たちの証言はある可能性を示している。

由良もそれに行き着いて表情を固くした。

「…誘拐か。」

「そこまでじゃなくても近くの家を引きずり込まれたって可能性はあるわ。土地勘のない私たちでは対処できない点では同じよ。」  
誘拐あるいは監禁の先にある事態に由良たちは戦慄する。

「電話は？」

「何度もしてますが繋がりません。」

「すぐに搜索に……」

「闇雲に探しても家の中に入られたら見つけれないわ。」

気ばかり焦るが案はことごとく却下される。

ジリジリと照りつける太陽が不快で由良は舌打ちした。

「だが、ここで全員で待つても仕方がない。マナはここに残って連絡待ち、俺たちは探しに行くぞ。」

「それが妥当ね。」

「エネルギー充填完了。」

八重花も冷静に努めていたがすぐにでも探しにいくつもりだったのだ。

「叶とはこの道の突き当たりで分かれました。山の方に向かったと思います。」

真奈美を残して3人は叶を探すために駆け出した。

走りながら周囲を警戒するがそもそも迷い込むような道はなくすぐに突き当たりに到着した。

「ここで分かれたのか。」

「拐ったのが山に住む化け物じゃないことを願うわ。」

八重花が物騒なことを呟くので由良は緊張を高めた。

ソルシエールという魔剣があり、それを生み出した魔女がいる以上日本の怪物を信じない道理はない。

何が出てきてもいいよう心構えをする必要があった。

「化け物と言えば始業式以来姿を見せない人型の闇もいる。奴等が吉葉にしか出ないかどうかなんて分からない以上警戒が必要だな。」

「見知らぬ悪意ある他人も正体不明の敵も等しく私たちの敵。世知

辛い世の中ね。」

山に向かつてなだらかに登っていく坂は途中から急になり民家もその辺りから無くなっていった。

「食い物屋を探してたカナがこれ以上進んだとは思えないな。引き返すか？」

「そうね。とりあえず叶が通ったと思われる道にはいなかった。本気で誘拐の可能性を検討した方が良いわね。」

いよいよ切迫してきた事態に由良はバシンと拳を手のひらに打ち付ける。

「あー、くそ！ソルシエールみたいにある程度カナの気配が拾えれば探せるってのに。」

「できる。」

スツと上がった手を由良と八重花がキョトンとした表情で見る。

明夜は表情を変えず

「できる。」

もう一度告げた。

「できるなら最初からしろ！」

「最初は遠かった。けど近くに來たから……」

明夜は鼻をクンクンと動かす。

「って匂いかよ！」

「それで見つかるなら何でもいいわ。」

八重花の許諾を得て明夜探知機が動き出す。

今來た道をゆつくりと戻っていく。

由良と八重花はどういう結果になるか予想もつかないので固唾を飲んで見守るだけだった。

「クンクン。ん……」

左右に鼻を利かせながら歩いていた明夜が足を止めた。

視線の先は行きには気付かなかった横道があった。

「こつち。」

「だが何でカナはこんなところに行つたんだ？」

「それは本人のみぞ知るよ。行けば分かるわ。」  
八重花は素早く真奈美にメールを送ると先立って進んでいく明夜を  
追いかけて出した。

「ったく、とんだ慰安旅行だな。」  
由良も苦笑しながら後に続いていった。

路地を進み、山の斜面に作られた階段を登っていくと比較的整えら  
れた道に出た。

轍があることから車が来れる場所のようだった。

高いところに出たせいかな潮の香りのする風が吹いている。

そこに混ざる花の匂い。

「近い。」

明夜が早足になってさらに坂を上っていった。

「あ、やっと追い付いた。」

後ろから真奈美も合流して3人は明夜の後を追った。

木々の立ち並ぶ道を進んでいき、光の指す広い場所へ到着した一行  
が見たものは

雄大な海を一望できる高台に作られた墓地だった。

叶はその一番奥にある墓の前に立っていた。

「叶！」

「カナ、無事か!？」

「あれ?どうしてみんなここに?」

叶の無事を確認してほっとしつつ駆け寄っていく。

「どうしてはこっちの台詞よ。連絡も寄越さないでこんな場所に1  
人で来るなんて。…まさか、偽者?」

「叶の匂いで間違いない。」

「え!?!私、臭う?」

八重花の疑念を取り去る明夜の言葉は叶の心にダメージを与えた。

「それはさておきだ…」

「さておかれました!」

「ゴホン。約束を無視してここにいた理由があるんだろ?」

由良は頭ごなしに怒りはしない。

理由を聞いた上で怒る必要があれば体罰込みで怒る懐の広い姉御…もといお姉さんである。

叶はどこか大人っぽい笑みを溢すと立ち位置をずらした。

「この人が私を呼んだみたいです。」

叶の前にあつた墓石には半場家之墓と彫られていた。

驚愕の現実を理解が追いつかない由良たちの前で叶は手に止めていた蝶々を掲げた。

「私を呼んだのは海さん、陸君の妹さんです。」

叶の言っている意味が理解できない。

それでも叶が嘘をつく理由がないのでどうにか納得できる答えを探した。

「確か本人の話ではジエムに喰われて肉体はデーモンになったって。ならそこにあるのはなに?」

「家族の想いじゃないかな?」

「海は魔女の奴に殺されてアダマスになっただろ?それにアダマスもカナがオリビンでぶっ壊したじゃないか。」

「うーん。そうなると私を呼んだのは幽霊ですね。」

何を質問しても叶の反応でさらなる謎の深みに嵌まっていく。

(まさか、電波系だったとは)

由良と八重花がげんなりする。

平和な頭がよくない電波を受信したのではないかと不安を抱いた。代わりに真奈美が前に出る。

「さっきの蝶々が半場の妹さん?」

「あの子から海さんの気配を感じたからここまで来たんだけど違っ

たみたいだよ。あの子、この花がお気に入りに入りたい。」

海の墓の前には墓に添えるには相応しくない色鮮やかなマーガレットが飾られていた。

叶の手を飛び立った蝶はまたその花に止まっていた。

「誰かが花を供えたみたい。…もしかしたらあの写真を撮ったのもその人かもしれないね。」

「それは…半場海が私たちをここに呼んだって言うの？」

叶は首を横に振る。

「わからない。でも、ここに来たのは偶然じゃない気がするよ。」

墓地にまた風が吹いた。

叶は耳をすませるように目を閉じた。

「何が聞こえる？」

明夜に質問に叶は

「変な明夜ちゃん。風の音だよ。」

おかしそうに笑った。

墓地からの戻り道、

「半場海の気配なんてカナが何で知ってるんだ？」

由良はさつき忘れていた疑問を口にした。

魔女との最終決戦に叶が参戦した時には既に海ではなくファブレが相手だったはずで生前に叶と面識があったわけでもない。

つまるところ叶が海の気配を知っていること自体がおかしな話だった。

「そう言えば何ででしょうね？でもあの蝶々を見たときに海さんだつて自然に思ったんです。」

叶も不思議そうにしていたのでもはやそれは誰にとつても不思議ではない。

「案外本物に呼ばれたのかもね。」

真奈美が幽霊の仕草をすると叶はおかしそうに笑った。

「そんなわけないよ。ですよね？」

「……」  
叶は同意を求めて振り返ったが誰一人として目を合わせてくれな  
かった。

## 第20話 狙われたアイドル？

叶の不思議ちゃん属性が開花した事件はあったものの旅の蛇足である謎スポットだった半場家之墓への寄り道を済ませた” Innocent Vision ” 一行はそこから海岸沿いを走るローカル線に乗った。

「これから本当の慰安旅行ですね。皆さん、温泉に浸かって普段の疲れを取ってください。」

「旅行の始まりから異常に疲れたわ。」

八重花の愚痴に叶は冷や汗を流しながら笑う。

その疲れた原因の大半は叶にあるのだから仕方がない。

「そ、その疲れを取るのが温泉だからちよっどいいよ。うん。」

八重花は慌てる叶を流し見ると黙り込んでしまった。

だが今の叶に八重花の反応に注意を払う暇はない。

「カナ。」

「はい。」

” Innocent Vision ” のお姉さん、羽佐間由良が椅子の背もたれに寄りかかったまま腕を組んで叶を呼んだ。

叶は思わず床に正座しそうになったが由良が腕を解いて自分の隣を叩いたので従って腰かけた。

「何を言われるかは分かってるな？」

「はい。勝手に1人で行動してみんなに迷惑をかけてしまいました。」

反省した様子で俯く叶の頭に由良は手を置く。

「今回のカナの失踪じゃヴァルキリーや謎の敵以外に普通の人間に誘拐されたことまで考えた。俺たちソーサリスにソルシエルは無 いし真奈美のスピネルも調子が悪い。カナのオリビンも戦う武器じゃない。それが今の” Innocent Vision ” だ。だから何かあったときに助けてやれるとは限らない。だから、あんまり



無茶するなよ。」

グリグリと頭を押さえ込んでいた手で最後にポンと頭を軽く叩いて由良の話は終わった。

「怒らないんですか？」  
「つきり」

「何やってんだお前は！！」

と雷を落としたように怒鳴られると思っていた叶は第2波を危惧して恐る恐る尋ねた。

「私もあなたは怒鳴って殴って理解させるタイプの人間だと思っていたわ。」

八重花も楽しそうに眠れる獅子にちょっかいを出す。

その被害を被りかねない叶は涙目で八重花に刺激しないでと訴えかけた。

「でも由良先輩は戦闘中以外であんまり怒鳴ってる印象ないですよ。どちらかと言えば聞き手と言うかご意見番って感じでしたよね。」

ここで真奈美の由良擁護。

明夜も頷いているから信憑性は高い。

由良のためにも叶のためにも救いの言葉に叶は緊張を緩めたが何故か由良は腕を組んで目をつぶり青筋を浮かべて震えていた。

そして

「俺は兄貴でも姉御でもご意見番でもなーい！」

「「きゃー！！」」

由良は爆発した。

その後由良を除く”Innocent Vision”の取り決めであんまり年上扱いしないことが決定されたのであった。

ここは湯の町温泉郷。

硫黄泉があるらしく独特の臭いに満ちた温泉街はゴールデン・ウィークのため人で賑わっていた。

サングルに浴衣姿で出歩く人たちの間を進んで目的の宿に到着する。

「玉楼館、ここね。」

「わー。」

叶は思わず感嘆の声を上げた。

それは老舗旅館と呼ぶに相応しい佇まいの純和風の温泉宿だった。

「おいおい、本当にここか？払った金額間違えてないか？」

八重花が組み上げたプランは想像していたよりもだいぶ低価格だった。

金は前払いで八重花に渡して移動費と土産代は財布に入っているが追加料金を請求されると足が出そうだった。

「問題ないわ。何時までも立っていても仕方がないから入りましよう。」

八重花が1人入っていつてしまったので叶たちも慌てて後に続いた。

「いらつしゃいませ。」

中も外観に負けない老舗ならではの風格が見えた。

冗談で一泊5万円と言われても払ってしまいそうだった。

「予約した東條です。」

「東條八重花様ですね。承っております。ようこそいらつしゃいました。」

和服の仲居さんに恭しくお辞儀されて慌ててお辞儀を返す叶。

八重花は堂々としていて他の3人も大人しくはしているが慌てた様子はない。

「お部屋までご案内致します。」

仲居さんに微笑まじげに見られて真っ赤になった叶を引き連れて仲居さんに続く。

通されたのは珊瑚の間という部屋で落ち着いた高級感が滲み出していた。

「それではごゆっくりお寛ぎ下さい。」

折り目正しい礼をして退室していく仲居さんを見送り、ホッと一息ついた叶たちはとりあえず

八重花を包囲した。

「さあ、吐け。どんな裏取引をした？」

「この宿の労働力としてこき使われるとか？」

「お金払えないで私たちが売られちゃうのかな？」

「温泉饅頭おいしい。」

明夜以外の必死な剣幕に対して八重花は涼しい顔を崩さない。

むしろ冷笑を浮かべているようにすら見えた。

「フッフ、とりあえずはアイドルになってがっばり儲けさせて貰う

わよ。勿論、裏のね。」

「裏のアイドルって？」

「えーと、半場が目を覚ましたら聞いてみな。」

子供の作り方を聞かれた母親のように困った真奈美が陸に丸投げした。

尤もそれまでに叶がこの話を忘れているだろうという腹積もりあつてのことだが…陸哀れ。

「それで稼げなくなったら次は腎臓ね。大丈夫よ、1つ取っても死ぬことはないわ。」

「えーん、八重花ちゃんが怖いよお。」

怯えて泣きつく叶を抱き止めた真奈美は苦笑を由良に向けた。

由良は頭を掻いて呆れたようなため息をついた。

「カナが面白いうように引つ掛かつてるがそのネタは失敗だ。」

「あら、残念。」

八重花はさして残念そうでもなく手をヒラヒラ振った。

「え、嘘なの？」

「当然よ。私は何の不正も働いてないわよ。ただちょっとモニターをするだけ。」

「モニター？」

叶の頭の中にサンドイッチマンみたいに前後にディスプレイをぶら下げた八重花の姿が浮かび上がる。

「…多分叶の考えてるものとは大分違うわ。雑誌の記事にお客さんの本音みたいなものがあるじゃない。つまりこの玉楼館を繁盛するように宣伝するから安く泊まらせて貰うのよ。」

まさかの裏技に全員舌を巻くがふと気付く。

「あたしたちそんな記事になるようなこと書けないよ？」

「そこは私がやるから大丈夫よ。ただ、写真とか撮られることがあると思うけどその時は愛想良くしてね。」

「そのくらいなら身売りに比べれば苦にもならない。」

何はともあれようやく安堵した一行は

「温泉だ！」

早速部屋に置いてあった浴衣とタオルを持って温泉に向かった。

周辺にも有名な温泉があるわけだがまずは手始めに玉楼館の温泉から。

ポンポン服を脱いでいく明夜や由良とは対称的に叶は恥ずかしがって着替えようとしない。

「お、遅れて入ります。」

と言われては悪戯心が刺激されるわけで由良は明夜と目配せする。

「ひん剥くぞ、明夜！」

「覚悟。」

「きゃー！」

こうして叶は文字通り丸裸にひん剥かれてしくしくと嘆き、その間にちゃっかり真奈美と八重花は風呂に入っていた。

タオルで体を隠しながら洗い場にいる2人に泣きつく叶。

「置いていくなんてひどいよお。」

「ご苦労様。」

「お陰で真奈美の準備がスムーズに進んだわ。」  
そこでようやく真奈美が義足を外していることに気が付いた。  
普段は太股に固定するための留め具を服で隠しているが脱げば目立  
ってしまう。

由良や明夜がそれを見て態度を変えとは思わなかったが見ないで  
すむに越したことはない。

「一応耐水らしいけど温泉で錆びたりしたら面倒だからね。八重花  
も助かるよ。」

「叶にはこれからもあの2人の関心を引いてもらうつもりだから役  
割分担よ。」

「えー、そんなあ。」

アワアワでもつれ合う乙女たちを由良は頭にタオルを乗せて縁に肘  
を引つ掛けながら眺めていた。

「平和だな。」

「ブクブク。」

明夜は肩を通り越して口まで浸かって温泉を堪能しているようだっ  
た。

「うー、くらくらする〜。」

その後湯船に入った叶を由良が見逃すわけもなくちよっとおじさん  
くさいスキンシップを受けてくれたになっていた。

先が上がって飲み物を買うために廊下を歩いていた。

少しふらつく足で歩いているとあまり目立たないように自動販売機  
があった。

外観を極力昔ながらにしつつ現代のニーズに対応させた形になっ  
ているらしい。

ただし狭い場所に無理やり押し込めたせいか叶はその自販機スパー  
スに入るときに出てくる人とぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい。」

「いえ、こちらこそ不注意でした。」

互いにとりあえず頭を下げ、謝って顔を上げ

「「あ。」」

驚きの声がハモった。

「下沢、さん？」

「と言うことは他人の空似ではなく作倉叶さんですか？」

それは吉葉で旅行に行くと言っていた悠莉だった。

「あー！」

そんな驚きの叫びが聞こえてきたのはすぐ後だった。

「美保さん。あれほど騒がないよう言っておいたというのに。」

「多分みんなと会ったんですね。行きましょう。」

「はい。」

叶と悠莉が連れ立って声のした方に行くと肩を怒らせた美保と不機嫌そうに腕組みをしている由良が睨み合っていた。

それぞれの連れは一応宥めようとしているが抑止力としては働いていない。

「なんであんたらがここにいるのよ？ なんとか浜に行っただんじやないの？」

「それはこつちの台詞だ。海と山がどうのって言うてただろ？」

互いに一歩も引かず火花を散らし合う2人。

美保は由良の胸元に目を向ける。

緩い浴衣を押し上げ、合わせ目から覗く谷間と自分を見比べて勝手に怒りのボルテージを上げていく。

左目に朱色の輝きが灯り始める。

由良が警戒して構えを取った直後

「等々力先輩、拘束してください。」

「はいよ。」

美保は後ろから良子に羽交い締めにされた。

「良子先輩！？ 悠莉！」

ジタバタと暴れる美保の前に立った悠莉はクスクスと笑う。

「騒ぎを起こさないようお願いしましたよね？ ここは温泉の熱で暖

「かいですから外で一夜を過ごしても大丈夫でしょうか？」

「ヒツ!？」

その笑顔の後ろに般若が見えた美保は小さく悲鳴を上げると大人しくなった。

悠莉は申し訳なさそうに振り向いた。

「すみません。美保さんがお騒がせしてしまいました。」

「いや、こつちも悪かった。」

「ふふ、そうですね。」

「そこは否定しておけ。」

ムツとする由良だが悠莉は取り合わない。

「多少無理を言って部屋を用意していただいたので面倒を起こされると困るんです。」

「一般人ではちよつと手を出しづらい高級旅館を狙う点は同じだったようね。その手段がそつちは財力みたいだけど。」

八重花はわざと割高で部屋が埋まるかどうかわからない宿を選んでいた。

宿としては客が増えるのはいいことだし宣伝されれば将来的な集客が見込めるからモニターの八重花に安値で部屋を確保したのであった。

一方、悠莉の親は年に数回程度玉楼館を利用する。

そのお得意様の娘である悠莉の願いとあって宿は悠莉たちの部屋も確保したのであった。

「せっかくの旅行です。喧嘩しないようにしましょうね。」

悠莉のお願いだったがその後町を回っているときに再びかち合い射的やゲームでのバトルとなった。

うら若き乙女たちの勝負は観客を呼び、一時的に温泉街の活気が増したのは別の話である。

そしてあつという間に帰りの日が訪れた。

”RGB”は”Innocent Vision”よりも一足早くチエックアウトして電車で吉葉に向かっていた。

帰ったら久々に撫子がヴァルキリーの今後についての会合を開くことになっている。

車窓から外の景色を眺めて微笑みを浮かべる少女、外から見た姿を写真や絵にすればとても決まっていそうな悠莉の後ろでは始終不機嫌な美保と駅弁を食べている良子がいた。

「悠莉、どうして”Innocent Vision”を殺るのを止めたのよ？あんなチャンスそうそうないのに。」

「宿で殺人なんて起こればすぐにバレますよ。ヴァルキリーの活動は现阶段では隠さないといけません。」

「もぐもぐ。それだけじゃないんじゃないかな？」

食べながらもしっかり聞いている良子の鋭い目に悠莉は頷いた。

「Innocent Vision」が目の届くところで戦う姿勢を見せないでいただければ計画の障害になることはありません。

下手につついて反抗作戦を裏で練られてしまうなら友好的な態度をとっておいた方が得策というものです。：ヴァルキリーの敵は”Innocent Vision”だけではないのですから。」

悠莉がわずかに遠い目をした。

それはゴールデン・ウィーク前。

悠莉は偶然に路地の陰に紛れるように立つジエムに似て非なる存在を確認していた。

その人型の闇は悠莉に気付かなかつたらしく影に溶けるように消えてしまったが叶の話が現実味を帯びた瞬間だった。

「ジユエルが動き始めますよ。」

窓に映る悠莉の左目は朱色の輝きを放っていた。



## 第21話 ジュエリアプロジェクト

土日を含んだ9日間の大型連休が明けた登校日、

「ねえ、聞いた？ 壱葉駅の近くにもWVeがオープンだって。」

「私も会員登録しないと。」

登校中の叶は学校の女子がその話題で持ちきりなのを聞いて俯いた。今の”Innocent Vision”にはヴァルキリーを止めるだけの力はない。

戦う意思を見せれば間違はなくヴァルキリーは”Innocent Vision”を殲滅するために攻撃を仕掛けてくる。

そのとき叶たちが勝てる見込みは皆無だった。

だから何もできない。

叶には”Innocent Vision”の名を守ることしかできなかった。

教室に到着すると

「叶！」

裕子が駆け寄ってきた。

「裕子ちゃん、おはよう。旅行どうだった？」

「そんなことより……」

そんなこと扱いされた芳賀が机に突っ伏すが叶も裕子も気付かない。

「これよ！」

バンと目の前に突き出されたカードを見て叶は咄嗟に顔がひきつりそうになるのを抑えた。

「昨日店に行ってジュエリアクラブに登録したのよ！」

それは最近話題になっているWVeの会員登録制の優待プロジェクト、ジュエリアクラブの会員証だった。

（大丈夫。これはジュエルじゃない。）

叶は自分にそう言い聞かせて平静を保つ。

「よかったね。」

「叶もどう？久美はあんまりWVe使わないって言うのよ。」  
目を向けると久美がにやはと苦笑いを浮かべていた。

（もしかしてデーモンになった時の怖さをジュエルに感じてるのかな？）

ジュエルとデーモンは別物だが魔女の力が元になっている点は変わらない。

その力を無意識に怖がっているように見えた。

「どんな特典があるのか知らないけどね。どう？」

「裕子ちゃん、お友達を紹介するとポイントが貯まるんでしょ？」  
ギクツと口に出しかねないほど分かりやすい反応を見せる裕子。

マルチ商法だが花鳳撫子の計画なので詐欺ではないだろう。

（ポイントを集めるとジュエルになれるとか？）

そうなるなら裕子にポイントを稼がせるわけにはいかない。

「停戦状態とはいえヴァルキリーにとって”Innocent Vision”が敵であることに変わりはなく、裕子がジュエルになればいつか叶たちと戦うことになってしまう。」

叶が裕子を殺すか裕子が叶を殺すか、どちらにしても救いはない。

「うーん、私もあんまり買わないから。」

どこにジュエリアが仕込まれているかもわからない服を買う勇氣はなく、叶はやっぱりと断った。

「八重花も望み薄だし真奈美もどうだろう？」

裕子は残念がることもなく次の獲物を探しにいつてしまった。

叶は小さくため息をつく。

（どうか裕子ちゃんがジュエルに目覚めませんように。）  
今、叶に出来るのはそう願うことだけだった。

「昼休みになり”Innocent Vision”の面々は屋上に集合した。」

手には購買やあらかじめコンビ二で買ってきたパンやおむすびがあ

り、一部は弁当持参だった。

明夜という名の腹ペコ星人は叶の弁当を狙っているようだった。

普段なら良心でおかずを分け与えているところだが重たい雰囲気ですこまで気が回っていなかった。

「休み明けで学校に来てみればすっかりジュエリアクラブとかいので話題が持ちきりだな。知ってたか？」

焼きそばパンを乱暴にかじりながら由良が尋ねると叶と明夜は首を横に振った。

「WVeの新店舗の話は裕子ちゃんから聞いていましたけどそのジュエリアクラブは全然知りませんでした。」

「興味なかった。」

由良の視線が真奈美と八重花に向く。

真奈美は同じように首を横に振ったが八重花はモグと弁当を食べた。

「公式ホームページには記載されていなかったけど割と噂にはなっていたわね。」

「そうか？そんな話は聞いたことないぞ？」

「ネットだよ。まあ、情報量が膨大すぎるからどれが真実か判断しないといけないけど、今回の情報は本物だったようね。」

公式には明かしていなかったということは知られなくなかったということ。

それがただの客に対してなのか”Innocent Vision”、あるいは新たな敵に対してなのか。

後者に属する者としてはやはり商業戦略以上のものを勘繰ってしまった。

「名前がそのままジュエリアだ。関係がないわけがないな。」

「結局謎の事故で発売無期延期になったいまだに一部で話題の願い石、ジュエリアの名にあやかっただとも考えられるけどこの場合は関係ありでしょうね。」

「吉葉高校に代わるジュエルの管理とか？」

真奈美の疑問に八重花が頷く。

「可能性としては高いわね。全国展開したジュエルをここで統轄するのは実質的に不可能よ。それよりも各地に拠点を設けて地域ごとに管理した方が楽だし効率的ね。」

八重花の考えに全員が押し黙る。

「八重花ちゃんは何でも知ってるね。」

叶が素直に感心したように告げると八重花はフツと笑った。

「何でも知っているなんて傲るつもりはないわ。今手にある情報を整理し、もしも私が花鳳撫子と同じことが出来ると仮定したらどうするかを推察しただけよ。」

それはそれで十分に素晴らしい能力だが八重花にとっては誇るべきものでもないらしい。

モクモクと焼きそばパンを食べていた由良がパックの烏龍茶で口の中身を流し込んだ。

「で、どうするよ、リーダー？」

「どうする？」

「どうするのかしら、リーダー？」

「叶はどうしたい？」

全員の視線が示し合わせたかのように一斉に向けられて叶は驚きのあまり食べていた肉団子を喉に詰まらせかけた。

「ゲホゲホッ。うう。」

口許をハンカチで拭い、ついでに流れた涙も拭いた叶はすっかりと顔を上げた。

「うーん、どうしましょう？」

リーダーは特に何も考えていなかった。

その頃ヴァルハラに集まったヴァルキリーの面々もまた昼食を摂っていた。

ただし以前のように撫子がいるわけではないので食料は各自持参だ

った。

良子は女の子らしからぬ銀色で四角くてでかい通称ドカベンをほとんど絶え間なく箸を動かして食べていく。

ちっちゃくて丸くて可愛らしい悠莉の弁当の2倍以上あったはずの中身はいつの間にか悠莉の残りの半分以下にまで減っていた。

「等々力先輩、行儀が悪いですよ。」

「もぐもぐ。早寝早飯は芸のうちだよ。」

撫子とヘレナが居なくなりハリボテとはいえ会長になった良子は結構好き勝手にやっている。

度を過ぎなければ葵衣が何も言わないのもそれに拍車をかけていた。

「モグツ、それはそうと、ジュエリアクラブが受付を開始したってクラスで噂になってたね。」

そんな良子が思い出したように話題を振ったが口に食べ物を含んだまま話すような行儀の悪い真似をしない乙女会のメンバーはすぐには話題に乗らない。

テンポを崩された良子が不満げに咀嚼しているとようやく葵衣が箸を置いて顔を上げた。

「ゴールデン・ウィーク最終日に一斉に情報が公開されるよう手を打たれたと仰られていました。本日昼までですすでに数千人の登録がされ、現在もうなぎ登りに増加中です。」

本来は会社の売り上げは社外秘だがトップの撫子が横流ししているのだから誰も文句は言えない。

「でも葵衣先輩。それって一般人の登録者数ですよね？うちらに必要なのはジュエルクラブの方だったはず。そっちはどうなんです？」

いくらジュエリアクラブの会員が増えたところで利益を得るのはWVeであり花鳳グループだけだ。

そこにヴァルキリーは介在していない。

「さすがにジュエリアクラブのような伸び率ではありませんが現在で十数人、日本各地で登録がなされました。こちらも順当に増加していくことが見込まれます。」

「受付を開始して1日で十数人ですか。これは期待できそうですね？」

「まあ、使えるようになるまでには時間がかかるだろうけどね。悠莉の希望的観測に緑里が茶々を入れる。」

何はともあれジュエル計画は本格的に動き始めたのだ。

流れ始めた水はどんな妨害が発生しようとする易々とは止まらない。Innocent Vision”にも新たな敵にももうどうしようもない段階にまで計画は進展していた。

「ふう、ごちそうさま。」

皆が話している間に食べ終えた良子は葵衣の淹れた食後のお茶を飲んでほうと息を吐いた。

「ジュエル計画はひと安心。もう少し数が集まれば指導とかもあるかもしれないけど今は待ちの時。そうなると他にちよっかいかけたくなるよね？」

良子の悪戯な笑みを見て全員目の色が変わった。

「葵衣、撫子先輩からは特に指示はないんだよね？」

「はい。大筋の計画さえ守っていただければその過程での活動は制限しないと窺っております。」

良子は満足そうに頷くと全員を見回して言った。

「あたしらが相手にするべきなのは”Innocent Vision”と新しい敵、どっちだろうね？」

トスツと箸でフライを突き刺した美保が笑う。

「当然”Innocent Vision”ですよ。今は大人しくしてるみたいですけどいつうちらに牙を向くかわからないじゃないですか。だから今のうちにその牙を折って飼いやりませうよ。」

力を込めすぎて箸が折れた美保は情けない声を上げた。

続いて緑里が手をあげる。

「ボクも”Innocent Vision”だと思っ。作倉叶とか悠莉が見たっという敵はまだまとこっちは攻撃しかけてき

てないんだし。さつさと弱ってる” Innocent Vision” からやつつけて万全の体制でその敵を倒すべきだよ。」

美保と緑里の意見は弱者である” Innocent Vision” を今のうちに潰しておこうという意見だった。

「ですが万全の体制を取ろうとしているのは私たちだけではないか  
もしれませんか？」

そこに別の意見を投じたのは悠莉だった。

「葵衣様。最近になってその謎の敵の発見頻度が増えてきていると  
いうお話でしたね。」

「はい。先月末、ゴールデン・ウィークに入ってから各所でそれらしい影が多数目撃されています。現在のところ警察には不審死や謎の失踪による搜索願はほとんど届いておらず現状では行動理念は不明な点が多いです。」

悠莉は紅茶に口をつけて微笑みを浮かべる。

「つまり未知を未知のままにしておいては危険だと言えます。彼らの目的が何であるか、排除すべきかどうかを見定めるのが先決ではないでしょうか？」

「なるほどね。” Innocent Vision” の戦力はそう変わるものじゃないけどその敵はもしかしたら時間を置くだけジエムみたいに増える可能性もあるんだ。」

良子も感心した様子でしきりに頷いていた。

これで2対2、葵衣は黙っていて今回の決定に関わるつもりはない様子。

「美保さんは随分と” Innocent Vision” が嫌いなようですが、怖いんですか？」

そうならば後は懐柔か脅迫による論破しかあり得ない。

先制したのはやはり毒舌の悠莉。

だがこの程度毎日のように言われ続けている美保には痛くも痒くもない。

「冗談。うるちよろ目障りな羽虫をさつさと払いたいだけよ。そう

「いう悠莉こそ”Innocent Vision”潰してインヴェに嫌われるのが嫌とか考えてるんじゃないの？」

美保がここぞとばかりに反撃に出る。

この質問で慌ててくれれば追い討ちで畳み掛けて反論を封じようと考えていた。

「そうですね。だから”Innocent Vision”を潰させるわけにはいきません。少なくとも向こうが仕掛けてこない間は。」

「……………」

だが悠莉はあっさりと認めた。

美保ばかりでなく緑里や良子、葵衣までが固まった。

美保がプルプルと震えると左目を朱に輝かせながらガンとテーブルを拳で叩いた。

「まさかあんだ、ヴァルキリーを裏切るつもり!？」

激昂して立ち上がった美保に対して悠莉は優雅に紅茶を飲んでいる。カップを静かに置き

「裏切りという言葉在美保さんから聞くことになるとは、ふふ、滑稽ですね？」

凍えそうなほどに冷たい視線を美保に向けた。

美保は金縛りにあったように硬直する。

良子も美保ほどではないにしても顔面は蒼白でカタカタと手に持ったカップが揺れていた。

「ヴァルキリーに反旗を翻すつもりはありません。ですが八重花さんと同じように私の中で”Innocent Vision”の比重が高まったんです。だから倒すべき時がきたら躊躇いませんし攻撃を受ければ反撃します。私はただ今の”Innocent Vision”には倒す価値がないと言っているだけですよ。」

「それならばその倒すべき時とは？」

美保と良子が動けなくなり、緑里も怯える状況でただ1人葵衣が質問した。



葵衣にとっては悠莉の心情は謀反には映らない。  
悠莉はクスリと笑って答えを示した。

「当然、半場さんが”Innocent Vision”に復帰した時ですよ。」

## 第22話 オ

ジュエル計画の進行が明るみに出てきてヴァルキリーの戦力が増強されていくことが確実になってきた時分、”Innocent Vision”は壱葉や建川にいた。

WVeへの襲撃ではない。

確かに店内に足を踏み入れたりもしたが別に妨害工作も破壊工作も営業妨害もしていない。

”Innocent Vision”はヴァルキリーではなく謎の敵の情報を追っていた。

「”Innocent Vision”の理想は人がそれぞれに平和を望む世界に導くこと。だから目的がわかってるヴァルキリーよりもあのオーって鳴く怪物を止めるか目的を聞き出す必要があると思う。」

ジュエル計画に対する”Innocent Vision”の行動を尋ねられた叶は悩みに悩んだ末そう答えた。

「ヴァルキリーとは戦わないって方針だからね。それでいいんじゃないかな?」

「奴等も動きは見せないが絶対に裏で動いてるだろうからな。そろそろ表に引きずり出してやるか。」

叶の意見に皆が概ね賛同する中、八重花だけが難しい顔をしていた。

「八重花ちゃん、やっぱり私の考えた作戦じゃだめ?」

不安げな叶に対して八重花は首を横に振って否定した。

「異論はないわ。私が考えてたのは名前よ。」

「名前?」

「そう。新しい敵とか奴等とか、分かりづらいじゃない?陸がああ黒い化け物をジェムと呼ぶようになって浸透したように今回の敵に

も名前をつけるべきよ。」

何を悩んでいるのかと思えばと呆れた様子の由良や真奈美だが確かに呼びづらいのも事実だった。

「そうなることやっぱここはリーダーであるカナにバシッと決めてもらうべきだな。」

「ええ！？私ですか？」

最近面倒な役を無茶ぶりされることが多いなと思いつつも叶は真面目に考え始める。

とはいえ陸のように知識の幅が広いわけでもないのだから叶にユーモア溢れる名前など思い付くはずもない。

「それじゃあ…オーって鳴いたから、オー…」

どどん自信がなくなつて尻すぼみになっていく声に全員はしばし啞然としていた。

「オーって、また捻りがないな。」

「分かりやすいけどね。」

「おー。」

感心してるのかバカにしてるのか判断に困る返答に叶は苦笑するしかない。

しかし事の当事者である八重花は満足そうに唸っていた。

「一見何も考えていないようだけど未知の敵にオーパーツのオー、ぴったりかもしれないわね。」

「あ、あは、ありがとう？」

褒められるのかバカにされているのか微妙な言葉に叶は苦笑いを浮かべていた。

「そういうわけなので”Innocent Vision”はオーの調査をします。」

「「おー！」」

お約束の反応に笑いながら”Innocent Vision”の動向は決定されたのであった。

そういうわけで吉葉・建川周辺を調査することになったが叶と真奈美はペアで移動していた。

八重花の見立てでは初めて遭遇したオーはオリビンに反応して攻撃を仕掛けてきたことから今後も叶が狙われる可能性が高く、そして現状で敵との戦いが出来るのは真奈美だけだと。

そういうわけで由良、八重花、明夜は主に哨戒や聞き込みなどの情報収集をし、叶と真奈美は情報を集めながらも戦いに備えるという流れになっていた。

叶たちは初めてオーと遭遇した商店街を抜けて住宅街を歩いている。「八重花ちゃんたち、大丈夫かな？情報を集めている最中にばったりとオーに会ったりするかもしれないよ？」

「それは当然あるだろうね。けどあの3人はソーサリス。あたしたちよりずっと戦い慣れしているからたとえ戦う力が無くたってうまく逃げることもくらいできるよ。」

不安げな叶を真奈美は安心させるように笑顔で答えた。

真奈美も不安がないではなかったが戦士としての予感が自分たちの方が危険だと告げていた。

気が付くといふ歩いてきていて病院近くの公園に差し掛かっていった。

「…。」

「…。」

叶、真奈美両方とも公園に入ると口数が減った。

真奈美にとってはジュエルの衝動に突き動かされて陸と戦った地であり、同時に叶にとっては一時とはいえ陸を憎いと思うほどの凄惨な光景を目の当たりにした場所だから仕方がないと言えた。

「…人、いないね。」

「公園に人が溢れ返ってる光景っていうのも想像しにくいけどね。」

一月前なら桜が咲き誇り花見客で溢れていたのだが最盛期を過ぎた今ではその客の姿もなかった。



退路がないとわかれば真奈美も戦う決意をした。  
普段はスカートの下にスパッツを穿くことで隠している義足の留め具を外す。

ごろんと倒れる左足の形をしたもの。

支えを失った本体もまたバランスを崩すが

「私に駆ける力を、スピネル！」

掛け声と共に真奈美の眼帯の奥が青い輝きを放ち、何も無い左足の先に美しい刃の義足が顕現してしつたりと大地を踏み締める。

最後に構えた左腕に義足と同色の手甲が現れ、聖なる力を宿す魔剣、セイバー・スピネルが完成した。

「あたしと叶のどっちが狙いかは分からないけど、やらせはしないよ。」

しつかりとオーに向き合い、怯まない真奈美の姿に叶も気持ちを奮い立たせる。

「来て、オリビンツ！」

震えていた右手を空に掲げると掌から灯火のような淡い光が浮かび上がり、それがやがて短剣の形を成した。

それをグツと握り込んで空を切り払う。

光の軌跡を描いたオリビンが短剣として鈍い銀の輝きを放った。

「行くよ、叶。」

「うん。」

互いに頷き合うと真奈美は大地を蹴って走り出した。

以前ほどの速度はないものの十分な速さでオーに接近していく。

「オーッ！」

迎え撃つオーは鋭い爪を振り上げて体を弓なりに反らせる。

「はあっ！」

下から跳ね上がるような上段蹴りと反動をつけた爪が衝突した。

「ぐっ。」

競り負けたのは真奈美の方だった。

崩れかけた体勢を奇跡的なバランスで立て直し、追撃してきた逆の

爪を手甲で弾く。

ギリギリとつばぜり合いをするように真奈美とオーは一步も引かずに硬直状態になった。

「やっぱり力が出ない。ヴァルキリーのジュエルは普通に動いてるのに、何で？」

疑問を口にしながらも力の駆け引きで押しは引いてを繰り返していた真奈美は

「オー！」

一気に力を込めてきたオーに逆らわず状態を後ろに倒す。

抵抗がなくなつて前のめりになったオーは地面に倒れた瞬間に真奈美を貫くために爪を引く。

押し倒された真奈美の体が右に捻れていき

「これならどうだ！」

膝に当たる部分から突き出した刃の突起を体の捻りを利用してオーの脇腹に叩き込んだ。

倒れきつた瞬間を狙ったオーと倒れていくことすら攻撃の機会とした真奈美の認識の違いが一撃を当てさせた。

「グオーッ!？」

脇腹に直撃して腹にめり込んだ刃にオーは悲鳴染みた雄叫びをあげた。

だが真奈美の攻撃はまだ終わらない。

トンと右手を地面につくと膝蹴りをした左足を伸ばしながらさらに体を右に捻る。

膝から下すべてが剣の義足のスピネルは突き刺さつた刃が内側から腹の傷を抉り、伸びきつた足が弧を描いて斬撃を放つ。

「オオーッ！」

腹を抉られたオーは痛みに目を見開きながらも斬撃を後ろに跳んで回避した。

押さえた腹から血ともコールタールとも言える液体を垂れ流していた。

「よいしょ。」

腹這いの格好になっていた真奈美は腕の力で跳ね上がって再びオーと対峙する。

「真奈美ちゃんすごい。」

見ていることしかできなかった叶は感心していたが当の真奈美はむしろ渋面を浮かべていた。

「はあ、はあ。あれで、落とせなかった。」

よく見れば真奈美は額に汗をかき息も荒かった。

かつてファブレと戦っていたときは空高く飛び上がり変幻自在のアクロバティックな蹴りで相手を翻弄しながらもほとんど息を乱すこともなかった真奈美にしては異常だった。

（スピネルが重い。このままじゃスピナもまともに使えるか。）

オー自体はファブレの操っていたデーモンと同程度の強さでしかない。

だが弱っている真奈美にとっては十分に強敵だった。

チラリと横を見ると叶は心配そうな顔で真奈美を見つめていた。

（叶は戦い向きじゃない。あたしが守るんだ。）

気合が入り少しだけ体が軽くなったように思った。

傷口を押さえながらもオーの瞳は敵意に満ちていて引き下がる気配はない。

「行くよ！」

真奈美が再び駆け出す。

正面から突っ込んでいく姿はさつきと何も変わっていない。

オーも左手を振り上げて迎撃体勢に入っていた。

真奈美は地を滑るような前傾姿勢のままさらに接近し

「オオーッ！」

黒い爪が振り下ろされた瞬間、右足で斜め前、オーの傷口の脇に飛び込んだ。

オーは脇腹の傷を右手で押さえていた。

左手での攻撃にとって右脇は死角となる。



結果としてオーの爪は空を切り、そして真奈美の攻撃はまだ終わっていない。

右足で踏み切った真奈美の着地した足も右足だった。つまり真奈美はオーに背を向ける形で跳んでいた。

そこで右手が襲ってくる危険を無視した飛び込みは

「おおおっ！」

防御ではなく攻撃である証。

捻った体を戻すためにスピネルの左足が勢いをつけて回る。

その刀身は光を纏っていた。

刃による後ろ回し蹴りを完全に虚を突かれたオーが対応できるわけもなく

「ギャオオオー！」

その漆黒の胴体を真っ二つに切り裂いた。

断末魔の叫びを上げたオーはそのまま大地に崩れ落ちてコールターののような体液を流しながら土に消えていった。

真奈美は大きく息をついてスピネルの光を納めた。

苦戦は強いられたがどうか1人の力でオーを撃退できた。

叶を、仲間を守ることができるといふ自信が真奈美に芽生えた。

「叶、大丈夫……」

だが振り返った瞬間に笑みは凍りついた。

叶のすぐ後ろに今まさに爪を振り下ろそうとしているオーがいた。

倒しそびれたわけではない、別の個体だ。

だがそんなものは何の気休めにもならない。

「叶ッ！」

無駄だと理解していても全力で駆け出した真奈美を不思議そうに見た葉が背後に振り返り、そして

「舞え、式！」

どこからともなく飛来した4枚の人形の紙片がオーの腕を分断し、

首を跳ね、胴体を真つ二つにした。

「……え？」

ようやく自分が襲われかけていたことに気付いた叶は飛び散った才一は呆然と見つめ、真奈美は叶の無事に安堵するあまり地面に座り込んでしまった。

「まったく、これが今の”Innocent Vision”？悠莉の言うように戦う価値もないね。」

あからさまな侮辱も今は悔しさよりも安堵の感情を呼び起こした。空を駆ける3枚の式を手にとったのはヴァルキリーの海原緑里だった。

「それで、さっきの君たちが言っていた新しい敵ってわけ？」

叶はまだ呆けているので真奈美が頷く。

「はい。あたしたちは”オー”と呼んでます。」

「ふーん、オーね。この程度じゃボクたちの敵じゃないね。」

緑里は右手に持ったジュエルを無造作に振るった。

これまで見たことのない緑がかった刀身をもつ剣。

「それは？」

真奈美の疑問に緑里は笑みを浮かべる。

「これがボクの新しいジュエル。ベリル・ベリロス。ようやく完成したんだよ。」

操作系能力用ジュエルのベリロスは美保や緑里のソルシエールの解析結果を製造されたものだ。

誇らしげに見せびらかした緑里は叶と真奈美を一瞥すると背を向けた。

「ヴァルキリーもとりあえずはオーに対応することになったんだよ。」

緑里はそう告げると途中で立ち止まり、首だけ振り返って笑った。

「必要ないと思うけど一応忠告しておくよ。ヴァルキリーの邪魔しないだね。」

力に裏打ちされた笑みに2人は反論も出来ず去っていく緑里を見送

ることしか出来ず

「…ごめん、叶。」

真奈美はそう呟いてガクリと膝を付いた。

## 第23話 重圧

辛勝したもののヴァルキリーとの力の違いを見せつけられ、叶を守れなかった真奈美は失意に沈んでいた。

「真奈美ちゃん、大丈夫？」

それを怪我をしたと勘違いした叶は駆け寄って抱きつくが真奈美は弱々しく頷くだけ。

その顔は今にも泣き出しそうに見えた。

叶は周囲を見回す。

オーが倒れたことで結界が消滅し、町の喧騒が帰ってきた。

だが今は静かに話をしたい気分だったので

「真奈美ちゃん、行こう。」

叶は手を引いて歩き出した。

「こんにちは。」

「いらっしやいませ、叶さん。」

叶が向かったのは太宮神社だった。

こう言つては失礼だが予想通り人気はなく静かであった。

「真奈美さんはどうされました？」

叶がそんな風に考えていたことなど知らず琴は叶の後ろで沈んでいる真奈美を見て驚いていた。

「ちよつといろいろあります。お仕事の邪魔はしませんからあそこに座っていていいですか？」

叶は本殿の階段を指差した。

「わたくしがお邪魔でなければお茶を淹れますから社務所でゆっくりお話されると良いでしょう。」

「でも、お仕事が…」

叶の心配を琴は口許を隠してクスクスと笑う。

「ここはろくに客も来ない静かな場所ですから。」

叶の考えはしつかりバレていて冷や汗を流しながら琴の後にについていった。

餡蜜とお茶を出されても真奈美はどんよりと雲を背負って落ち込んでいた。

琴は叶に目配せする。

本人の前でもう一度現実を突きつけるのは酷だと思い2人は立ち上がって廊下に出た。

「何があつたのですか？」

「実はさつきあの新しい敵、オーって呼ぶことにしたんですけど。」

「オーに襲われたんです。」

琴はわずかに目を見開くが叶と真奈美が主だった傷を受けている様子がないことに気付いてすぐに落ち着きを取り戻した。

「お2人が無事にここに来たのなら勝たれたのでしょうか？それなのに何故真奈美さんはあのように気落ちされているのです？」

叶はすぐには口を開かなかった。

力の弱ったスピネル、ベリロスという新しいジュエルを手にした緑里、そして何より何もできなかった自分。

叶だつて落ち込んでいた。

それでも普段通りに振る舞わなければ真奈美はもつと心配するし琴や他のみんなも同じだとわかるからいつも通りを心がけていた。

それが”Innocent Vision”のリーダーとしての仕事だと考えているから。

「オーに襲われて、真奈美ちゃんは戦ってくれたんですけどスピネルの調子が悪くて。それでも真奈美ちゃんは勝ったんですけど、もう1体いたことに私は気付かなくて襲われかけて。そうしたらヴァルキリーの海原緑里先輩が助けてくれたんです。真奈美ちゃんが苦労して倒したオーをあつさりと。」

「……そういうことでしたか。」

琴は事情とそれぞれの心情を察して納得した。

「ならばお茶とお茶菓子を食べるだけに止めて本日は早々に帰るのが良いでしょう。ここで慰めの言葉を掛けたところで真奈美さんの申し訳なさが募るばかりです。」

傍観者だからこそ冷静な助言が琴には出来た。

「でも、心配です。」

「信じて待つことも信頼だとわたくしは思います。」

「…はい。ありがとうございます、琴お姉ちゃん。」

頷く叶の頭を琴は優しく撫でる。

部屋に戻った2人はお茶の話だけで本題には触れなかった。

真奈美も少しだが笑顔が戻り、餡蜜とお茶を食べきった。

「またいつでも遊びに来てくださいね。」

琴に送り出された2人は言葉少なに帰路につき、分かれ道に差し掛かった。

「それじゃあ真奈美ちゃん、お姉さんたちには私から連絡しておくから今日はゆっくり休んでね。」

「うん。ありがとう、叶。」

真奈美は頷くとだいぶしっかりとしてきた足取りで帰っていった。

それを見送った叶は完全に真奈美の背中が見えなくなってから表情を曇らせた。

「何もできなくてごめんね、真奈美ちゃん。」

叶は自宅とは違う道を歩き出した。

到着したのは病院だった。

「こんにちは。」

「ん？おお、麗しの眠り姫の王子様だ。」

看護師たちが陸の事を眠り姫と呼んでいるのは知っていたが王子様と呼ばれたのは初めてだった。

「あの、王子様は…」

「何お見舞いの子を苛めてるのよ。ごめんね、気にしないで。」

すぐに別の看護師がフォローに入ってくれた。

叶は2人に会釈して陸の病室に向かう。

廊下を進み123号室のドアの前に立つ。

「あれ？」

ふと部屋の中に人の気配がした気がした。

別に誰が陸のお見舞いをしてもおかしくはないので叶は時間を改めようかと思ったが知り合いである可能性の方が高いためノックをすることにした。

コンコン

ノックを試してみたが中から返事はない。

コンコン

もう一度してみたがやはり応答はなかった。

「失礼します。」

恐る恐るドアをスライドさせるがやっぱり誰もおらず窓が少し開いていてカーテンが揺れているだけだった。

「あれ、気のせいだったのかな？」

窓辺に行ってみるが外にも人の姿はない。

そのまま陸の方に振り向こうとした時、ふと花瓶に花がさしてあるのに気が付いた。

「かわいいお花。誰だろう？」

よく見るとそれはマーガレットだった。

それは由芽浜で見たものと同じ。

叶の微笑みがそのまま凍りつく。

「…海、さん？」

旅先で起こったファンタジーが現実侵食してきた感覚に鞆を強く握りしめていた。

叶はベッドの横に置かれた椅子に腰掛ける。

特に意識せずに大きなため息が出た。

「…陸君はやっぱり凄いですね。」 Innocent Visio n”のリーダーとしてみんなをまとめて、戦いでも凄くて。」

叶が知る陸は明夜や由良、蘭に信頼され、未来を見、未来を変える力を持つヒーローのような姿だ。

そこに至るまでの過程はわずかに話を聞いたことしか知らない。

かつてはInnocent Visionの力に翻弄されていたなど叶が知る由もない。

「私は全然駄目です。人望があるって言われましたけどやっぱりお姉さんとか八重花ちゃんの方が適任だっと思ってますし、オリビンがあっても怖くて誰かと戦うことなんてできません。」  
ポツリ、ポツリと溢れ落ちていくのはみんなの期待を受けて口に出せなかった本音。

どんなに強くなったように見えても叶の本質は気弱で臆病な少女のままだ。

多少不思議な力を手に入れたとしても誰かと争うなんて無理だった。

「陸君……」

叶はベッドに眠る陸の手を握る。

眠り続けているため少し冷たい手を両手で包み込み、自分の頭を寄せる。

「目を開けてください！起きて、私を……助けてっ！」

押し寄せる恐怖と掛けられる重圧と未来への不安、必死に押し込めていた感情が溢れ出し、叶は慟哭した。

ギョツと陸の手を握り締め、少しでも陸の体温を受けようと頬を押し付ける。

「うっ、どうして、起きてくれないんですか！？私は、ずっと待ってるのに。陸君、陸君ッ！」

とうとう胸にすがり付いてわんわんと泣き出した。

布団をきつく握り締め、のし掛かるように泣きじゃくる。

顔はもう涙でぐしゃぐしゃだった。

それでも陸はまったく動かない。

眉を潜めることも、叶を払い除けることも、呼吸や心音を乱すこともありはしない。



完全な無。

それが無性に悲しくて叶はさらに涙を溢れさせる。

「うわあああん、どうして、どうして!？」

今すぐ起きて大丈夫だよって笑ってほしい。

たとえ笑ってくれなくて重いと怒ってくれてもいい。

陸が何か反応してくれればそれだけで叶は救われる。

けどそんな奇跡は起こらず、叶は涙が枯れるまで泣き続けるだけだった。

「…さん。」

声が聞こえた。

「かな…ん。」

懐かしい声。

泣きたくなくなるくらい聞きたかった声。

「陸…君？」

そう気付いた瞬間、叶はガバツと跳ね起きた。

「陸君!？」

「うん。」

そこにはベッドの上で上半身を起こした陸がいて、叶はたまらず涙を流した。

「よかった。本当によかったよ、陸君。」

「あー、ええと、泣かれると僕も困るな。」

陸は言葉のわりには落ち着いていて叶が泣き止むのを待っている。

こういうときにそつと抱き締めるとかの選択をしない辺りが陸のヘタレと言われる由縁である。

「みんな、凄く心配したんだよ。」

「うん、知ってる。」

「明夜ちゃんもお姉さんも、八重花ちゃんも真奈美ちゃんも、琴先輩も、それに私も、みんな心配したよ。」

「よく知ってるよ。」

陸はすべてを知っているように少し困ったような笑みを浮かべながら頷いていた。

その顔に見惚れていた叶は今更ながら顔が涙でひどいことになっていたことを思い出して慌ててハンカチで拭った。

「あー。見ないください。」

「まあ、それも僕のせいみたいだからちよつと心苦しいよ。」 Innocent Vision”が大変みたいだしね。」

寝起きだというのに事情に詳しいとは思ったがそこは未来視 Innocent Visionを持つ陸だからと自然と納得できてしまった。

「はい。ヴァルキリーはジュエル計画を進めていて、オーって怪物も現れて私たちに襲いかかってくるんです。」

「ジュエル計画、か。やっぱり花鳳先輩は諦めてなかったか。」

陸は胸元に手を添えながら苦笑した。

目線で先を促されて叶は続ける。

「それなのに”Innocent Vision”はソルシエールがなくなつて真奈美ちゃんのスピネルも調子が悪くて、何より私が足手まといだから大変なんです。」

再びのし掛かつてくる重圧に押し潰されそうになるがすぐに表情を綻ばせた。

「でも陸君が起きてくれたならもう大丈夫ですよね。」

「申し訳ないけどしばらく僕はここを動くわけにはいかないんだ。本当に申し訳なさそうに俯く陸を見て叶は陸が目覚めたばかりだったということを今更ながら思い出した。

「ずっと寝てたんだからリハビリとかもありますね。ごめんなさい、私、自分の事ばかりで。」

「面倒な事を押し付けたのは僕だよ。僕の方こそごめんね。」

恐縮する叶に陸も謝罪する。

「そんな！…確かに大変ですけど、陸君が戻るまで”Innocent Vision”のリーダーは私が頑張ってみます。」

さつきは泣き言を言ったが陸が戻るまで”Innocent Vision”の名前だけは残すと決めたのは叶自身だ。ならばその宣言だけは守らなければ仲間にも陸にも顔向けできない。だがそれを聞いた陸はとても悲しげに微笑んだ。

「…いいんだよ。」

「何がですか？」

主語がなく何を言いたいのかわからなかった叶が首をかしげると陸は酷く辛そうに顔を上げ

「”Innocent Vision”、解散させてもいいんだよ？」

叶の決意を根底から覆す一言を口にした。

叶がリーダーを勤めているのは陸が帰ってきたときに帰る場所を残すためだった。

それを本人に否定されては叶にはどうしようもなかった。

「どうして…」

「僕はみんなを苦しめるために”Innocent Vision”を作ったわけじゃない。だからそれを維持することが辛いなら無理しないで無くしてしまえばいい。」

創立者にしては冷たい言葉も皆を心配しているからだと分かるから叶は戸惑ってしまう。

「でも、そうしたら陸君の帰る場所が…」

「”Innocent Vision”がなくなったら叶さんは僕を迎えてくれないかな？明夜や由良さん、八重花に真奈美は僕の事なんか忘れちゃうかな？」

「そんなわけないです！…あ。」

答えはすでに叶の中にあつたのだ。

たとえ”Innocent Vision”が無くなっても陸を迎えることには何の支障もないのだと。

必要なのは名ではなく陸を慕う心なのだから。

「でも、頑張ってみます。私、今の”Innocent Vision”が好きですから。」

「…そう。なら、気を付けて。」

いつか幻聴のように聞こえた声。

今まではつきりと聞こえていた声が遠ざかっていく。

「あ、あれ？」

「それと、1つ言い忘れてたけど…」

陸は最後に苦笑を浮かべて言った。

「これ、全部夢だからね。」

「ええ！？」

「きゃっ！」

叶が跳ね起きるとタオルケットをかけようとしてくれていた看護師が驚きの声を上げた。

「あれ、私？」

叶は周囲をきよきよと見回す。

ここは陸の病室で隣には看護師が立っていた。

「ここで眠っていたのよ？彼の側でいい夢見られた？」

興味ありげな視線で尋ねてくるが叶は首を捻る。

「何だか凄く驚かされたような気がしたんですけど…忘れちゃいました。」

「そう？そろそろ面会時間の終わりだけど彼と泊まってく？」

「い、いえ、帰ります！ありがとうございます。」

叶は恥ずかしそうに勢いよくお辞儀をして病室を飛び出していった。

「なんだか元気になったみたい。やっぱりいい夢だったのかしら？」  
優しく微笑む看護師の隣で陸は変わらずスヤスヤと眠り続けていた。

## 第24話 それぞれの思い

オーに襲われたことを連絡した翌日の朝、

「カナ、いるか？」

2年4組の教室に由良が尋ねてきた。

最近はずっかりまともな素行だったが過去の噂は根強く由良が顔を出すと教室が一斉に静まり返った。

「あ、はい。」

叶は席を立ってドアまで小走りに駆け寄る。

由良が叶を呼ぶときは大抵”Innocent Vision”の  
用件だ。

いつもなら叶の後ろについてくるかそうではないにしても注意を払っているはずの真奈美は

「……。」

机を見つめ続けていてあからさまに落ち込んでいた。

事のあらましは昨晚に伝えてあったため由良は真奈美の様子を見るだけで声をかけなかった。

叶だけを連れ出して人通りの少ない踊り場に向かう。

「マナは、まだ立ち直ってないか。」

「はい。昨日少しは元気になってくれたかと思ったんですけどやっぱり……。」

スピネルの力が戻れば真奈美の気も持ち直すだろうがそれが出来るなら苦労はなく、現状では真奈美自身が納得できる答えを見つけてくれるのを待つ以外に手はなかった。

現在、真奈美以上に無力な由良は

「そうか。」

と呟き、言葉を選ぶように珍しく髪先の先を弄ったりしていた。

「戦う力があるだけマシだと思っただがな。今はヴァルキリーの奴らとの違いに落ち込んだところでしょうがない。…それを言ったと

ここでマナは納得しないだろ。」

「はい、多分。…お姉さんはどうなんですか？」

先ほどの由良の言葉にもあったが真奈美はスピネルの力が弱っただけだが由良や明夜、八重花はソルシエールをまるまる失っているのだ。

叶の質問に由良はなんと答えたものかと呟き頭を掻いた。

「一緒だった相棒が消えたんだ。喪失感はある。だがそれを嘆いてお情けで玻璃が帰ってくるなら鬼の目にも涙と馬鹿にされようが泣いてやるが、違うだろ？」

由良は真面目なのか冗談なのかわからない口調で語るのに叶は反応に困って苦笑いを浮かべる。

「それに俺たち”Innocent Vision”は元々その時にある力を最大限に使って生き残ってきたんだ。無くなった力を嘆くよりも今できることを探した方が建設的だ。」

それを分かっているから由良たちは動じていない。

八重花も戦う代わりに話術や情報収集能力を駆使して叶たちをサポートしてくれていた。

みんながみんな、何が出来るかを懸命に考え戦っている。

だから力の弱った真奈美にも出来ることはあるはずなのだ。

それを真奈美が自覚し、出来る何かを見つけるまで叶たちは静かに見守ると決めた。

「もうチャイムがなるな。」

話し込んでいると休み時間なんてあつという間だ。

由良は教室に戻ろうと歩き出し、途中で立ち止まった。

「カナももっと落ち込んでるかと思っただが、割と元気そうで安心したぞ。」

背中越しにも由良の優しさが見えて叶の顔が綻ぶ。

「お姉さんや琴お姉ちゃん、みんなが元気付けてくれますから。」

叶は陸の名前を意図的に伏せた。

どんな夢だったかおぼろ気だったし不確定情報で希望を持たせては

忍びないと思つたからだ。

「琴お姉ちゃん？ああ、太宮院か。…俺の事は由良お姉さんとは呼ばないんだな。」

最後はよく聞き取れない声だったが見るからに気落ちした様子の背中を見て

「お姉さんも由良お姉ちゃんって呼んだ方がいいのかな？」

微妙に間違つた解釈をして叶は首を傾げるのであった。

授業中、2年1組の教室で八重花は教師のありがたい教えに耳を傾けることもなくノートを広げてシャーペンでトントンと叩いていた。それが目的な訳ではなく考え事をしている時の癖のようなものだったが考える時間が長いせいか黒点が濃くなつていく。

「”Innocent Vision”とヴァルキリー、そしてオー。この三つ巴はかつてのファブレがジエムを引き連れていたときに近い状況。」

ノートの隅に”Innocent Vision”、ヴァルキリー、オーと三角形になるように書き込む。

（違いはソルシエルが無くなつて”Innocent Vision”の戦力が激減したこと。）

”Innocent Vision”をぐるぐると円で囲む。

（ヴァルキリーはジュエルによって戦力は維持しているし、オーは未知数。パワーバランスが崩れたことでヴァルキリーやオーが”Innocent Vision”を本気になつて攻めれば潰せるようになった。）

ヴァルキリー、オーからそれぞれ”Innocent Vision”に向けて矢印を引く。

（今でも”Innocent Vision”が存続しているのは叶の交渉でヴァルキリーが攻めにくくなったことと無力だからいつでも潰せると思われていること。オーがまだ偵察に近い接触しかし



てこないこと。つまり相手方の理由に依存している。）

トントンとペンは一定のリズムでノートに黒点を刻む。

八重花の目はノートを向いていて、その実自分の内側に向いていた。八重花は八重花に問い掛ける。

この状況を打開し、陸の作り上げた”Innocent Vision”を存続させる方法を。

（やはり戦力の増強が急務。私と明夜、由良が戦えるようになれば状況はある程度好転する。）

戦力の増強として思い浮かぶ方法を3つほど書き連ねた。

（ただ普通の武器を持ち歩いていたら戦う前に警察に銃砲刀剣類所持等取締法違反になってしまうし身体強化がない分かなり苦戦を強いられることになる。さらに戦う意思を示すことでヴァルキリーが本気で潰しにくる可能性が高い。）

ノートに記した普通の武器にxを書く。

次に書いたのはジュエルの文字。

（ジュエルを手に入れて武器とする。ソルシエルを使う資格を持つ私たちならジュエルを使うことはできるはず。だけどジュエルにはヴァルキリーのために使うという縛りがある。それは私たちがヴァルキリーに屈し、傘下に入ることに他ならない。オーの力が手に負えないくらいに強大になったらなりふり構ってられないけどこれは最後の手段。）

ジュエルの文字も横線を引いて消す。

最後に書いたのは…

「この問題を…東條。」

「はい。」

八重花は思考を止めて立ち上がり黒板に向かう。

ノートは閉じられてその中身は誰にも見えない。

学内はジュエリアクラブの話題でいまだに賑わっていた。

W V eのポイントカードでしかないはずの会員証はなぜか少女たちの心を惹き付けてやまない。

通学路を歩いてても、廊下をふらついていても、教室で座っていても耳に入ってくる。

そんな中でも明夜はいつも通り周囲に無関心な様子でいるだけ。

ミステリアスな美少女としてそれなりに男子には人気だが女子には気味悪がられることの方が多く話に誘われることはない。

その本質が天然気味で大食漢でのんびりしているだけだとしても、深く付き合おうとしない輩にそれを理解することは出来ない。

今も周囲の話を耳に入れつつ昼食を考えているだけだが、ふと明夜の耳に

「最近、野犬が夜にいたみたいで遠吠えが煩くてちよつと寝不足だよ。オー、オーって騒がしいの。」

そんな言葉が聞こえてきた。

「それ…」

「きゃっ!」

気が付けば明夜はその集団の前にいた。

瞬間移動みたいな速さに目をパチクリさせる女子たちには構わず

「それ、何時頃?」

明夜は用件だけを尋ねる。

無表情で詰め寄られて腰が引けている女子は懸命に記憶を引きずり出す。

「ええと、深夜の2時とか3時近くだったような気が。私も寝惚けてるからよく分からないけど。」

それを聞くと明夜はグツと手を前に出して女子の手を掴んだ。

「ヒッ!」

何をされるのかと怯える女子の前で

「ありがとう。」

明夜は表情を変えずお辞儀をした。

手の握りもよく見ればただの握手だった。

「う、うん。どういたしまして。」

返事をされると明夜は手を放して席に戻っていった。

女子は握られた手を見つめて呆然としている。

「なんだったんだろ？」

「実は柚木さんちの犬とか？」

こうして明夜のミステリアス度はさらに高まるのであった。

(オーの動いてる時間はもっと後？その時間に調査する。)  
変わらない表情の裏で明夜は確かな決意を固めていた。

由良は校舎裏にいた。

冬場は寒くて人の寄り付かない場所も暖かな気候になると日向を嫌う不良たちが沸いて出てくる。

「嬉しいぜ、羽佐間。まさか留年してまで俺たちにリベンジの機会をくれるなんてな！」

そして不良たちの間では羽佐間由良を倒すことは最強の称号と同義だった。

しかも留年してからは由良が腑抜けになったと噂が広まったせいで裏の名声を求めた挑戦者が頻繁に現れていた。

「馬鹿か。留年しなかつて3年になつてただけだから学校にいただろうが。」

由良の呆れた様子に不良のリーダーは憤慨する。

「留年した奴に馬鹿と呼ばれる筋合いはねえ！」

由良の留年理由は出席日数不足であり、成績はそこまで悪くは無かつたのだが風評では羽佐間由良は馬鹿だから留年したと広まっていた。

そしてその言葉は由良にとって禁忌であった。

さつきまで漂っていたやる気のない雰囲気殺る気に引き締まる。それを感じ取つた不良の1人は由良の目を見ただけで気を失った。

「おい、どうした!？」

倒れた仲間を声をかけるが振り向くことは出来ない。

由良から視線を外した瞬間に自分が捕食者の牙にかかることを本能的に知っているからだ。

ゴキリと由良が拳を鳴らす。

「…今日の俺は機嫌がいい。泣いて叫ぶその先まで付き合っただぞ。」

「そ、それって死んで…」

「は、ハッターだ！」

怖じ気づく仲間を鼓舞しようとして振り返ったリーダーは

「無防備だな、おい。」

「…あつ！」

頭を鷲掴みにされてそのまま地面に叩きつけられていた。

強烈な頭への一撃にリーダーの意識はあっさりと刈り取られた。

「ちつ。これじゃあ叫ぶ暇もないか。」

由良がしゃがんでいた体勢からゆっくりと立ち上がる。

上体を倒したまま立ち上がり、その後じわじわと顔を上げていく様に不良たちの恐怖は加速度的に高まっていく。

顔が上がった由良の左目が不良たちには朱色に染まっているように見えた。

「さあ、次はどいつだ？」

「ぎゃー、殺されるー！」

「置いてくたよお！」

残った不良たちは一気に戦意を喪失させて我先にと逃げ出していた。

「…ふう、面倒な。」

由良は髪をぐしゃりとかいてため息をつく。

以前のソルシエルで強化されていた体の時ならともかく今は1対多数の戦闘は厳しい。

そのため最近は何かに恐怖を植え付け、精神的に追い詰めて追い払うようにしていた。

由良は地面に転がった不良のリーダーの横に屈み込む。

「頭蓋骨が砕けたわけでもないようだし放っておいても大丈夫そうだな。」

由良とてこんな下らないことで人殺しにはなりたくないもので状態を確認して問題ないと判断した。

そのまま立ち去ろうとしたが、不意に叶の顔が思い浮かんだ。

「うーむ。」

ポリポリと頬を掻き、

「声だけはかけてやるか。」

由良は保健室の方へと歩いていくのだった。

「はあ。」

真奈美はトボトボと昇降口に向かっていた。

本来なら昨日戦ったオーについて”Innocent Visio n”の皆と話し合うべきなのだと思覚はしていたがそのことを思い出す度に圧倒的な力でオーを倒した海原緑里の姿がフラッシュバックしてしまい気が重くなる。

「はあ。」

再び深いため息をつく。

ジュエルの力は強く、オーをあっさり倒してしまった。

だが真奈美の気落ちはその力の差だけが原因ではない。

（あたしはスピネルの力に頼りすぎているんだ。）

より正確に言えばスピネルの元となったジュエル・アルミナの身体強化とセイントに由来する優位性を当てにし過ぎていた。

皆がソルシエールの特性に特化したグラマリーを編み出していく中で真奈美はスピネルの魔剣優位性と強化された運動能力を使った力業しか使ってこなかった。

だが力が弱まった現状ではもはや技と呼ぶのもお粗末なもの。

（あたしは全然スピネルを使いこなせていなかったんだ。）

叶を守れると思っていた過信と同様にスピネルを満足に振るえていたという自信を打ち砕かれたことが真奈美をここまで落ち込ませていた。

「あたしは、ダメだ。」

ゆるゆると靴を履き替えて昇降口を出る。

校庭の脇を通って学校を出ようとしていた真奈美は

「あ、真奈美先輩！」

ソフトボール部のユニフォームを着た少女に声をかけられた。

「ああ、浅沼か。部活？」

「はい。先輩はお帰りですか？」

浅沼響はソフトボール部の後輩で同じ中学出身だった。  
あさめまひびき

その頃から真奈美の後を追ってくる子犬系で真奈美も可愛がっていた。

「そうだよ。部の方はどう？」

「真奈美先輩が抜けて大変ですけど、大丈夫です。」

響はもともと気弱なタイプだったが真奈美を慕ってソフトボール部に入った。

その後も先輩後輩として良好な付き合いを続け、響はその間にメキメキと力をつけていき、それが自信となって明るくなった。

今年度の新入生のソフトボール部の部員の中でもかなりの逸材で夏季大会でレギュラー入り出来るかもと噂されているのを聞いていた。

「本当は真奈美先輩と一緒にソフトやりたかったです。」

「それは…あたしもだよ。ごめん。」

中学卒業の時、同じ高校に入ったら一緒にソフトボールをやるという約束はもう果たせない。

（あたしはいろんな約束を破ってばかりだな。）

「先輩？」

自嘲的な笑みを浮かべる真奈美を響が心配そうにのぞきこむ。

真奈美は無理やり笑って軽く手を振った。

「なんでもないよ。それじゃあ部活がんばって。」

「はい！失礼します。また部活の方に顔を出してくださいね。」  
元気に走り去っていく響を見送る。  
頑張っている響を見るのが居たたまれなくて真奈美は早足にその場を去っていった。

## 第25話 今と未来の駆け引き

「事業は拡大の兆しあり。傲らず慢心せず事に挑むべし。」  
撫子は書き連ねられた文字を読んだ。

今日は先日発表して大反響を呼んでいるジュエリアプロジェクトの先行きを”太宮様”に占ってもらうために訪問していた。文面を見る限り順調な拡大が見込めてホツとする。

書簡に目を通していただくとお茶を淹れ直した琴が入ってきた。ただしその表情は若干不機嫌だ。

「高校の先輩であった事実を使つて予定を無理矢理擦じ込むのは感心しませんよ。」

本来、今日は”太宮様”の先見の予定は入っていなかった。

しかし朝に撫子から連絡があり、その後放課後には葵衣が菓子折りを持参してお願ひしてきたため仕方なく夜に卜占を行った。

それがなければ叶を呼んでお茶にしようと考えていた琴は私的な理由でとても不機嫌だった。

対する撫子もお茶を受け取って申し訳なさそうな顔をした。

「わが社の命運をかけたジュエリアプロジェクトですので是非とも”太宮様”の示す未来をお聞きしたかったです。」

「何度もご説明しましたが…」

「”太宮様”の占いは結果ではなく過程を見るもの。今回出た占いの内容を過信しないよう注意するように。よく覚えています。」

台詞を取られてますます機嫌を損ねた琴はお茶を啜る。

撫子はお茶を置くと居住まいを正して真正面から琴の顔を見た。

「実は本日はもう1つ占っていたきたい案件があります。」

「図々しいにもほどがあります。皆が常に1つ、それも数カ月に一度占いを受けている規則を破るなど無礼です。」

どこまでも自分勝手な撫子に琴は心底呆れたような冷たい目を向け席を立とうとした。



撫子はそれでも悠然とした態度を崩さず瞳を閉じてお茶を口許に運びながら

「良いでは無いですか、”太宮様”？」

そう、声をかけた。

ピタリと琴の動きが止まる。

撫子が目蓋を開くと琴は慌てた様子もなく腰を下ろした。

「もう少し驚いていただけれると思っていました。」

撫子は少し残念そうに告げる。

「驚くほどの事ではありません。わたくしを”太宮様”だと誤認し、引き込もうとした方が過去に何人もいらっしやいましたので。」

琴から放たれていた不機嫌な雰囲気は鳴りを潜め、撫子のどんな些細な言動も聞き逃すまいというように真剣さを宿していた。

「誤認、ですか？」

撫子は確信があるのか余裕の表情を崩さない。

琴は頷いた。

「誤認です。わたくしは太宮院琴であつて”太宮様”ではないのですから。」

琴も確固たる意思をもって撫子から目を逸らさない。

数分の間、互いに睨み合いに近い視線をぶつけ合っていたが不意に撫子のため息を漏らした。

「予定通りには行かないものですね。正体を見破られた太宮院さんに秘密をばらさない代わりにヴァルキリーへの協力していただけるよう申し出るつもりでしたが。」

「それは世間一般では”脅迫”と呼ぶのですよ？」

「いいえ、”お願い”ですよ。」

フフフと2人で不気味な笑いを浮かべ合う。

今度は琴がため息をつく番だった。

「それでは”太宮様”だと言われたのもわたくしを動揺させる虚言

だったということですか。ふう、あまり気を揉まさないでください。

「いいえ、わたくしは貴女が”太宮様”だと確信しています。」  
弛緩しかけた雰囲気再び張り詰める。

「…理由を、聞かせていただけますか？」

琴は居住まいを正してしつかりと聞く体勢に入った。

「それで納得していただけるのなら。まず背格好が太宮院さんが腰を折って歩く姿と同じです。これでも服飾関係の職業ですので体型の見極めには自信があるのです。」

「根拠としては弱いですね。背格好は家族なら似てきてもおかしい事はありません。」

根拠と呼ぶにはあまりにもお粗末な見た目の判断基準に琴は苦笑を浮かべてお茶を飲んだ。

「もちろんこれは疑念を抱いたきつかけの1つに過ぎません。次に筆跡が同じであることが挙げられます。」

撫子は続けて証拠を提示する。

琴がこめかみに指を添えて首を傾げた。

「花鳳さんの前でわたくしが何か書いたことはなかったはずですが？」

「はい。ですが書き物なら毎日されているでしょう？」

撫子の言葉に琴の体がわずかに強ばる。

確かに琴はほぼ毎日数時間書き物をしている。

琴が学生である以上それは必然的に行われる行為であった。

「何度も確認させていただきましたし都合の良いことに一度書道の現場も撮影できました。」

確かにクラスメイトに頼まれて文字を書いたことがある。

それが撫子の手の者だと知った琴は軽く人間不審に陥った。

「盗撮とはまたずいぶんと犯罪的になりましたね。」

「それに関しては謝罪します。ですが書体も癖も確認させていただき同一であると確認しました。」

撫子が言い切ると琴は口をつぐんだ。

乾いた口を温くなってきたお茶で湿らせる。

「書を教えてくださったのは家族ですので書き方の癖が似るのも仕方がないと思います。」

「それもありますね。」

撫子はまたも頷いた。

だが同意するということは撫子の示した証拠が証拠の意味を成さないことになる。

怪訝な顔をする琴の前で撫子は深くお辞儀をした。

「これが最後になりますが、先に謝らせていただきます。」

ゴクリと琴は固唾を飲み込んだ。

撫子は顔を上げ

「望遠カメラから赤外線カメラ、その他様々な測定機器を用いて徹底的に屋敷内を調査させていただいた結果、太宮院さんとご両親以外に生体反応は確認されませんでした。」

最後の決定的な証拠を突き付けた。

「…。」

さすがの琴も驚きを隠せない。

だがそれは証拠ではなくその手段を用いた撫子に対してである。

「…呆れました。そこまで手の込んだ犯罪行為を行っていたとは。」

これが世間に知られれば花鳳さんの信用は落ちますよ。」

琴は大きくため息をついて撫子を睥睨する。

だが脅しも笑みで受け流して撫子は座り直した。

「すべてはヴァルキリーのため、世界の恒久平和のためです。大事の前の小事かと。」

「どんな世界でも人のプライバシーの侵害は大事です。」

琴は譲らず話の主導権を握ろうとするがやはり分が悪い。

「もう認めてしまわれてはいかがです？生体反応は3つしか確認さ

れずご両親は外に出ることが多いご様子。貴女がいる時にだけ”太宮様”の予定が入っている。これでもまだ言い逃れ出来ますか？」  
撫子は勝利を確信して琴を追い詰めていく。

もはやチエックにまで追い込んだ。

もうどこに逃げようと最終的には勝ちが確定したと言えた。

「まったく。わたくしのプライベートを明らかにして何が楽しいのでしょうか？」

「貴女と親密になることでヴァルキリーの未来を見ていただけならわたくしはいくらでも動きます。」

「今回の事で貴女方と親密になることだけはないと断言出来ます。」  
琴は心底呆れたように吐き捨てた。

それすらも負け犬の遠吠えにしか聞こえないから撫子は笑みをこぼす。

「では仕方がありません。貴女が”太宮様”であると公表し、その力が本物であることを告知させていただきます。」

これでチエックメイト。

秘匿すべき先見の力が公表されればその力を求める人々やマスコミが殺到し、身柄を狙う者も出てくる可能性が高い。

それを保護する名目で協力を取り付けようという魂胆だった。

「…これはもう完全に脅迫ですね？」

「先程も言っただけです。事を成すためならばこの程度は大事の前の小事であると。」

琴はもう一度深く深くため息をつき

「ならばその小事として取り敢えず刑務所にも入っていただきましょう。」

袴の袖に手を入れた。

『事を成すためならこの程度は大事の前の小事であると。』

「っ!?!?」

それは間違いない。撫子の声だった。

何か魔術的な方法を使ったのではない、もっと簡便な方法。

琴が袖の下から取り出したのはICレコーダーだった。

撫子の表情が一気に青ざめた。

お茶碗を持つ手も震えている。

「何故そのようなものが……。まさかわたくしがどのような手段を取るか」太宮様”の力で見てその対処を？」

「何を言っているのですか。この程度の準備、口伝という不確かな物を商売としている以上当然の保険でしょう？ 占いの結果が違つたと文句を言われる方のためにその時どのような会話をしたのかを常に記録させていただいているだけです。」

琴は常に”太宮様”の卜占は道筋を示すものであり良い結果を導くものではないと説いている。

その場では理解している客もいざ不幸に見舞われると何か理由を探し、”太宮様”の占いに当たってくることがある。

記録はその時に自分が何と言って同意していたかを思い出させるためのものだった。

「疑われるのでしたら本来部外秘ですが記録をお見せしましょうか？」

「……いいえ、結構です。」

撫子が首を横に振ると琴は何事もなかったようにICレコーダーを袖の下にしまった。

「これで互いに秘密を握り合う状態というわけですね。核兵器のボタンと同じように互いが秘密にしていることで抑止力になる。」

撫子はわずかに顔を歪ませて苦々しく口にした。

だが同時にこれは撫子にとっては好条件とも言えた。

秘密を握り合う連帯感を利用してヴァルキリーに引き込めないかと考え始めていた。

琴はお茶を飲み干すと

「わたくしの方は誰かにお話しされても構いませんが。」

事も無げに告げた。

今度こそ撫子の顔に驚愕の表情が浮かぶ。

「何を言っているのです！？本当にわたくしが”太宮様”の話を広めれば貴女は人に狙われて大変なことになりますよ？」

「そうでしょうね。」

今度は琴が余裕の態度を見せる。

この未来を見通して落ち着いていられる姿が陸とかぶって撫子は顔をしかめた。

「ですが花鳳さんの脅しの対象はわたくしの未来、つまりまだ定まっていない時間です。ならば対処などいくらでも可能です。既に犯罪行為に手を染めてしまった花鳳さんとは違うのですよ。」

「くつ。それでも混乱は避けられませんし貴女を狙う者が現れるでしょう。保護が必要ではないですか？」

ここがヴァルキリーの、撫子の最終防衛ライン。

ここで”Innocent Vision”に保護を求めるようなら”Innocent Vision”を潰して琴を奪い取ると考えていた。

だが、琴はそんな撫子の決意を嘲笑うように

「そのようなものは必要ありません。」

前提条件を覆した。

「必要、ない？」

「はい。」

震えそうになる声で尋ねる撫子に琴は平然と頷き返す。

「ではお聞きますが、煩わしいと感じる有象無象を相手にわざわざ本物の先見を行う必要がどこにあるのでしょうか？」

「あ……」

そこが撫子の見逃した最大の誤算。

太宮院琴という人間性を見誤りだった。

「作法は同じでも内容を適当にしてしまえば当たることはなくなり  
ます。占いなど所詮は個人の考え方で姿を変える曖昧なもの。当た  
らないと知れば人々の関心は瞬く間に失われていくでしょう。数カ  
月もあればまた今のような平穏が訪れ、嘘の占いで稼いだ金銭で裕  
福な暮らしもできるようになるはずです。そう考えると悪くない話  
かもしれませんね。刑罰が確定する花鳳さんとは違って。」

撫子は膝に置いていた手を力なく落とした。  
チエックメイトだと思っただけなら逆に角に王手を掛けられたような心境  
だった。

そして負けたときの痛手は撫子の方が遥かに大きい。  
最後に首まで落として撫子は自分の負けを悟った。

腹いせに”太宮様”の情報を公開しても琴が脅迫の証拠を警察に持  
つていくことは止められない。

逆に琴が先に警察に情報を持ち込めば撫子が”太宮様”の情報を広  
める機会がなくなる。

そして広められたとしても琴の損害は微々たるもの。

対する撫子は部下に盗撮を指示した主犯格であり琴を脅迫した実行  
犯でもある。

撫子が捕まればW V eの経営に大打撃でありジュエル計画にも支障  
が出る。

身代わりを立てても花鳳グループの関係者から犯罪者が出ることは  
マイナスイメージしかない。

今回の敗北は撫子の未来に暗雲を引き込んでしまった。

「…どうしても、ヴァルキリーに協力して下さらないと？」  
俯き震える声で尋ねる。

「少なくともわたくしは大事の前の小事として犯罪を容認するよう  
な方の片棒を担ぐ気はありません。」

琴は迷いなく断った。

「ならば…」

撫子の左目が朱色に輝き、新型ジュエル・クォーザイトが現れ、そ

して

それが振るわれるよりも早く、撫子の眉間に瑠璃色の矢が群青の弓を引き絞った形であてがわれた。

青い瞳が撫子を射抜く。

「その、瞳…セイント…」

握ったクォーザイトが畳の上に落ちる。

これで詰み。

この場の支配権は完全に琴のものとなった。

今警察に連絡されれば撫子は抵抗も出来ず逮捕され、転落人生を始めることになる。

未来に対する不安、恐怖が重くのしかかる。

呼吸が苦しくなり、地面についた手が震える。

そんな撫子に琴は矢を引き

「お帰り下さい。」

一言そう告げた。

「見逃すというのですか？」

それは撫子にとって救いだった。

今後の脅迫材料にはなる可能性は高いが今この場で即決されなければいくらでも対処の方法はある。

わずかに表情を緩めた撫子に琴は袖で口元を隠して笑った。

「切り札というのはいざというときに使うものですよ。たっぷり苦しんでください。」

いつ気まぐれに明かされるかもしれない恐怖を味わえという琴に撫子は何も言えなかった。

「…失礼します。」

結局振り返ることなく撫子は去っていった。



## 第26話 この一球にすべてを込めて

明夜は草木も眠る丑三つ時、人が眠りに落ちた時間に闇に落ちた町を駆けていた。

クラスメイトの証言でオーの活動時間がジェムよりもさらに遅い時間である可能性が出てきたためその調査にやって来たのだ。

さすがに日を跨いだ時間だけあって遊び歩いている少年少女も家に帰っており町は死んだように眠っている。

住宅街を明夜は走る。

人の気配が全く無いからこそ夜の気に満ちる魔の気配を感じ取っていた。

(当たり前。)

名前を知らないクラスメイトにわずかばかりの感謝の念を抱きつつ気配の出所を探る。

(沢山ある。ここからじゃ分からない。)

明夜は十字路の真ん中に立っていたが遠くの気配がうまく感じ取れない。

ほとんど迷いなく塀へと飛び上がりそこを足場に家屋の一階の屋根へと跳び移り、そこからさらに上の屋根へと登る。

足音を立てるようなへまはしない。

羽根のように降り立ち周囲を見る。

半分ほどの月が空に輝き、家屋の幾つかでまだ明かりがついているが基本的には町は暗い。

しかし明夜の目には町の暗さとは別になお暗い存在がいるのが見えていた。

(いた。)

取り敢えず1体のオーが明夜の視認範囲ギリギリにいた。他の気配はさらに遠いため見えない。

(…接触する。)

話には聞いていたが現物を見たのはこれが初。

” Innocent Vision ” の敵である以上その強さを知っておく必要があった。

明夜は屋根の上をゆっくりと歩き出し、徐々に速度を上げていく。体勢を低くして一蹴りごとに跳ぶように前に進む。

家屋の屋根がまるで所々に穴や谷のある平面であるかのように明夜は安定して駆けていく。

細められた目でまだ遠いオーが気付いた様子を見た。

そのオーが手を向けてきたように見えた直後

「っ！！」

突然右肩を強引に後ろに引つ張られ、焼けた石を押し当てられたような衝撃を受けて体勢が崩れた。

小さく悲鳴を上げながらも即座に体勢を立て直し左手を右肩に当てた。

オーの腕がわずかに動いた瞬間に体を捻るとチツと腕を何かがかすった。

明夜は直ぐ様走り平面の穴、屋根から道路に飛び込んだ。

塀に背中をつけて周囲を警戒しながらボタンをいくつか外して肩を出すと赤くなっているうち痣になりそうだった。

「 遠距離攻撃。 」

すぐに相手の攻撃手段を判断し現状分析を始める。

相手との距離が100メートルくらいになっただけに撃たれたので射程は約100メートル。

予め打ち出していたのでなければ手が動いた瞬間に射出し、1秒程度で着弾したので秒速100メートル。

時速換算すれば時速360キロメートルとなりかなりの高速弾丸だ。 「 …… 」

明夜はもう一度塀から1階の屋根に飛び乗ると今度は上に飛び上がらずゆっくりと懸垂の要領で頭を出していく。

撃たれた肩が痛んだが明夜は無視して頭を上げる。

オーがわずかに視界に入った瞬間手が動いた。

「来る。」

明夜はすぐに頭を引っ込めると家屋の壁を蹴った。

明夜の頭上を弾丸が一瞬で跳び去っていくが明夜も跳んでいたことで相対速度差が緩和され弾丸の形が見えた。

頭から落ちながらも器用にくるりと回転して着地した明夜はさつき見た弾丸を思い出した。

「卵形。オーと同じもの。」

尖形ならば肩に刺さっていたであろうことから今も今の形状で間違いはない。

あるいは真球状があまりの速度に変形したのかもしれないが球であることに変わりはない。

明夜は周囲を見回し、近くにあった家の庭に侵入してあるものを手に取った。

明夜の口の端がわずかにつり上がっていた。

明夜が再び地上から離れた平面上に飛び上がった。

オーはその瞬間を逃さず空中に滞空している明夜に狙いを定めた。

撃つ意思を向けた瞬間、射程内ならば約1秒で標的に命中する弾丸。一般人なら2発と耐えられず、ジュエルなどで身体を強化しても衝撃を殺す能力でない限り近づくとさえ許さない遠距離射撃。

その漆黒の弾丸は

ガキン

金属の音を夜の静寂に響かせた。

音もさることながら直撃して吹き飛んだはずの明夜が前にある屋根の上に立っていた。

遠目の利く特性を持つオーはさつきまでとの明夜の違いに気付いた。

明夜の手には野球の金属バットが握られていた。

自分を狙ってくることを予測していた明夜は飛び上がりから正眼に

バットを構えており、ぶつかつたと思つた瞬間にバットを振り下ろすことで受け止めるのではなく受け流してみせた。

「やっぱり武器が手にあると楽。」

明夜は平らな屋根の足場を見つけるとそこに陣取り何度か足場の調子を確かめた。

そしてオーよりも斜め上方向にバットを突き付ける。

「ッ！」

オーが息を飲んだのが離れていてもはつきりと伝わってきた。

明夜はオーの時速360キロの超豪速球に対してホームラン宣言をしたのだ。

「オーッッ！！！」

本来備わっていなかったはずのオーの魂と呼ぶべきものに火が着き、雄叫びをあげた。

明夜はバットのグリップをグツと握って数回スイングした。

空を切るバットの音にオーは自分の右手を見つめた。

自分の体の一部と化した砲身と自らの肉体を放つ弾丸。

それはまさに自分自身と言える。

だが明夜はその存在意義、アイデンティティを崩そうとしている。負けられないとオーの瞳に炎が点つた。

明夜が構えを取つた。

遠くてもオーを、自分が打ち返す球を見ているのが分かる真っ直ぐな目を向けているのが分かっていた。

オーが真っ直ぐに右腕を伸ばした。

明夜にはなく見えないストライクゾーンへと。

夜の静寂に緊張感が走る。

風の音すら耳障りで両者は完全な静寂の時をただじっと待つ。

やがて風が弱まり、宙を舞っていた木の葉が一枚ひらりと落ちた。

「オーッッ！！！」

振りかぶる代わりにオーが吠えた。

漆黒の弾丸が打ち出され、

そして、  
ヒュン

明夜のバットはかすりもせず振り抜かれた。  
だがオーに喜びはない。

人知を越えた360キロの球にぶつからなかったものの明夜はタイミングを合わせてきた。

あとバット1つ分スイングが高ければぶつかっていた。

明夜は今の弾丸の軌道と自分のバットの軌跡を思い出してスイングを繰り返す。

やがて満足したのかまた構えを取った。

これほどの速度を前にしても明夜が恐れをなした様子はない。

ただ真摯に次に飛んでくる球を打ち返そうとしていた。

オーは次弾を装填する。

より神経を研ぎ澄まし射出強度を考えてさらに速い球を放つべく練り上げていく。

そして

バンツ

破裂音をさせながら弾丸が打ち出され

チツ

明夜の振ったバットにかすった。

それだけで明夜の腕は後ろに弾かれ右腕1本で支える形になったがバットを手放すことはなかった。

明夜の根性に戦慄を覚えつつオーは紅色の瞳を笑みで細める。

さっきのでより速い球の出し方はわかった。

空振りとファールでツーストライク。

あと1球で勝利はオーのものになる。

「オーッ！」

咆哮で全力を出したオーが最後の1球を放った。

明夜は…振らなかった。

弾丸は明夜の頭の位置を通過して行った。

明夜が首を動かして避けなければ直撃していた。それはオーの勝利であり、同時に敗けであった。今の文字通りデッドボールとなる一球も明夜が狙ったと文句を言えばオーは弁解できない。

だが  
キユッ

明夜は何も言わず、怒ることも逃げることもせず構えた。それは互いの信頼。

オーは会釈をすると右腕に左手を添えた。速度を殺さず狙いを外さないために左手をガイドレールとする。風がまた出てきた。

オーは静かに夜という闇の海の凧を待つ。最高の1球のため。

明夜も微動だにせずオーが弾丸を打ち出す時を待つ。最強の1球と見えるために。

「アオーン！」

オーではなく本物の犬の遠吠えが空気を震わせた。それは号砲となり

「オオーンッ！！！」

ドンッ

オーの最速の一撃が放たれた。

明夜は完璧なタイミングと軌道で金属バットをスイングした。

「ぐう！！！」

その瞬間、腕にとんでもない衝撃が襲ってきた。時速360キロメートルの運動エネルギーがバットによって止められるわけもなくバットがひしゃげていく。

真芯で捉えたため弾丸は逃げ場を作らずバットにめり込むように突き進み、高速で回転する球がバットに穴を穿つように煙を吹き上げ

た。

さらに明夜の足も滑り体勢を維持したまま大きく後ろに流された。屋根のギリギリ端で踏ん張り持ちこたえたが弾丸のエネルギーはまだ衰えていない。

バットが折れるのもあとわずかと言えた。

(負け…ない。)

明夜の目に不屈の闘志の輝きが宿った。

全身に力が漲り、本来のスイングとは異なる全身を使って球を前に飛ばすための動きに変わる。

バットへの負荷を増やさずに体のバネを使って弾丸のエネルギーを返す力を生み出す。

カキーン

夜の静寂に甲高い金属音が響き渡った。

オーは飛んでいった己自身と言える黒球を見送ることもなく呆然と立ち尽くし、やがてガクリと膝から崩れ落ちた。

自信を打ち砕かれたオーが顔を上げると明夜はペコリとお辞儀をして屋根の上のフィールドから立ち去ったのであった。

その間際、オーの目には朱色の輝きが見えたような気がした。

「そんなことがあった。」

「久々にみんなで昼食となった”Innocent Vision”は屋上に集まり各自昼食を取りながら近況報告をしていた。

事件があった者、無かった者。

現在意気消沈中の真奈美も少し落ち着いてきたのか自分の心境を語った。

そして明夜のこれである。

「あはははははは！」

由良は大口を開けて大爆笑。

「くくつ、…」

真奈美も控え目ながら笑いを堪えきれないよう俯いて肩を震わせていた。

「随分と面白い事例ね。」

八重花は口の端に笑みを浮かべながらもオーが取った行動に興味があつたらしく真剣な表情をしていた。

「うわー、明夜ちゃんすごいね。」

そして叶は素直に感心していた。

「はっはっは。それで、オーが全部そんな面白い奴だと思っつか？」  
ひとしきり笑った由良がその余韻を残したまま尋ねた。

当然のように全員首を横に振った。

「コアがデーモンのように人ならその人の記憶が偶然蘇った。そうではないならオーを作った人物の気まぐれか、はたまた奇跡か。こんなところで奇跡の安売りしてほしくないけれど。」

八重花が本人ですら本気にしていない調子で仮説を述べた。

オーがどうやって生み出されているのかもそれをやったのが誰なのかも分からないのでその答えはここで議論しても意味がない。

「オーがみんなスポーツマンなら戦わなくても済みそうだけど、明夜の時も初めは普通に狙ってきてたみたいだからね。」

「残念だね。」

戦わないという希望は通りそうになくて真奈美と叶は残念がった。

「しかしオーの秒速100メートルの弾丸もとんでもない武器だな。」

「連射性能はそれほど高くはないみたいだけど編隊を組まれて波状攻撃でもされたら現状では打つ手なしよ。何しろバットをへし折る弾丸だもの。生半可な盾じゃ紙と変わらないわ。」

これまで遭遇したオーはノーマルタイプと呼ぶべき通常の人型だったが特殊なタイプも存在することが判明した以上他にも特性特化型のオーがいることは予想された。



「オーやヴァルキリーが力を強めていくのに”Innocent Vision”は弱いまま。このままじゃ…だめですよね？」

伺うような口調ながらも目には既に強い意思を宿して叶が言った。

「そうだな。このまま流されるだけってのは性に合わない。」

「戦わないと生き残れない。」

由良と明夜がすぐに賛同し

「…あたしも力を取り戻したい。皆を守れる力を。」

真奈美がグッと拳を握って告げた。

「でもどうすれば…」

「策なら考えているわ。」

言い出したはいいが何も具体案がなかった叶の不安げな声は八重花に掻き消された。

全員の視線を受けた八重花が不敵な笑みを浮かべて

「敵対勢力に勝つためにはソルシエルを取り戻すしか手はないわ

！」

そう言い切った。

戦慄が駆け巡る。

「玻璃が戻ってくるのか!？」

「本当?」

喜色を見せながらも信じられない様子の2人に八重花は自信ありと頷く。

「明夜の話で確信したわ。普通の人間に時速360キロの球は打ち返せない。つまりソルシエールの力を無意識に引き出したのよ。」

目から鱗の表情で納得した由良はグッと握り拳を作って気合いを入れた。

「力を取り戻すためなら何だってやるぞ！」

「おー。」

「あたしも付き合っよ。」

「まだ確定じゃない。でも希望はあるのよ。私はそれを繋ぐわ。」  
ソーサリスは力を取り戻すために特訓をすることを決めた。

(みんなもがんばるんだから、私も頑張る。)  
そして叶もまたひそかに決意を固めるのであった。

## 第27話 ジュエルクラブ

” Innocent Vision ” がソルシエル復活計画を始動させた頃、ヴァルキリーもまた新たな動きを見せていた。

「レイズハート！」

「なんの！」

美保のスマラグド・ベリロスから飛び出したレイズハートを良子のラトナラジュ・アルミナが切り払う。

スマラグドではほぼ無制限に生み出せていたレイズハートもジュエルであるスマラグド・ベリロスでは同時に3発、連射で5発程度と少々心許ない。

「ハアツ！」

「あたしに接近戦を挑むなんて無謀だよ！」

突っ込んできた美保に対して良子は高々とラトナラジュ・アルミナを掲げてルビヌスを発動。

大地に足を楔のように打ち込んで一撃に全力を込める。

「レイズ、ハートツ！」

左右と上の3方向から光刃を向かわせる。

速度はそれほどでもないが不動の体勢に入った良子にはかわせない。さらに追撃として2発を放ち、美保自身も突っ込んでいく今の美保の放てる最強の一手。

「ああー！！！」

「おおー！！！」

その翠の怒濤を良子のハルバードが真っ向から迎え撃った。

真紅と翠の光が激突して爆発する。

光が収まったとき、中間点では互いのジュエルを打ち合わせた形で力比べをしている2人の姿があった。

ギリギリと鎧を削り合っていた2人はフツと戦意を消してどちらと

もなく力を抜いた。

「今ので互角ですか。」

「くそう。正面からの攻撃なら絶対負けないと思ったんだけどな。」

ここは壱葉に作られたWVeの地下にある訓練場。

ジュエルに目覚めた乙女たちがその使い方や戦い方を覚える秘密の園である。

”RGB”は新規にジュエルになった者たちにその力を実演するために訪問しに来ていた。

良子と美保の実戦さながらの模擬戦闘を見たジュエルたちは下は中学生くらいから上はOLくらいまで幅広い年齢層だったが皆一様に啞然としていた。

良子は悠莉からタオルを受け取ると汗を拭きながらジュエルに話しかけた。

「ふう。こんな風にジュエルを使いこなせるようになるかとグラマリーって呼ばれる必殺技が使えるようになるんだ。わかった？」

全員が一斉にコクコクと頷く。

まだジュエルを手にして間もない彼女らにとって2人が見せた戦いは物語に出てくるヒーローと同じでありまだ現実味を伴っていない。悠莉はそんなジュエルたちの様子に気付いてどうしたものかと考える。

しかし以前のジュエルでさえただの一例を除いてほとんどグラマリーが発現しなかったのだからそう簡単に会得させる方法があるわけではない。

そもそも悠莉たちだって明確にグラマリー発現のプロセスを理解しているわけではない。

力が欲しいと強く願った結果に得られたものだ。

(そうなるよ…)

「サフェイロス・アルミナ。」

悠莉は自らのジュエルを取り出した。

予定では美保と良子の模擬戦の観戦で終わりだったので美保と良子

モインストラクター・村山もジュエルも首を傾げた。

悠莉は長大な刃を指で撫で

「さあ、どなたからでも構いませんからかかってきてください。」  
微笑みながらも戦意を顕わにした。

その闘気に当てられて数人のジュエルがよろめく。

慌て出したのはインストラクターだ。

主に杏葉高校3年生だったジュエルに声をかけ普段は職員として働いている彼女たちはソーサリスの力を知っているため忠誠心が高い。だからこそ万が一粗相があつてはならないという気持ちが強かった。「し、下沢様！彼女たちはまだジュエルの扱い方を覚え始めたばかりです。ソーサリスであつた下沢様のお相手には早いかと。」

無論、聡い悠莉が村山の考えが分からないわけがなく、理解した上でジュエルを抜いたのだ。

困惑するジュエルたち。

美保と良子はタオルを首にかけたまま成り行きを見守っていた。だがジュエルはヴァルキリーのメンバーは自分たちを導く選ばれた存在だと教えられてきたため武器を向けるなどできるはずもなかった。

悠莉は戸惑つたように動かないジュエルを見て大仰に首を横に振つた。

小さくため息をついたあと見下したように笑う。

「私たちヴァルキリーはソルシエルに選ばれた特別な存在。その理想はこの世界の恒久平和でありジュエルはヴァルキリーのために働く駒でしかありません。代えの利く代用品。一山いくらという程度の価値しかありません。ソーサリスとジュエルには天と地ほどの存在価値の差があるのです。」

「…。」

悠莉は自分の言葉に陶醉したように身ぶり手振りを交えて語る。

インストラクターからもそう教えられていたとはいえ実際に本人から言われるとイラツとくるものがあつた。

悠莉はそれに気付かない様子で楽しそうに続ける。

「ジュエルである皆さんが私に恐れを抱くのは自然なことです。そして従順であることは下々の者にとっては美德ですから誇ってください。ヴァルキリーの手足となつて働ける喜びを享受なさってください。栄光を得る私たちの陰でヴァルキリーのおこぼれの榮譽にすがりなさい。」

「……」

ジュエルは胸の奥から沸き出してくる怒りを必死に押し止めていた。同じくらいの年齢、あるいは自分よりも年下の人間に傲岸不遜な態度で自慢話をされれば誰だって機嫌が悪くなる。

悠莉はサフェイロス・アルミナを胸に抱き締めるようにしながらジュエルの周りをゆっくりと回る。

「ですが、力のない駒は必要ありません。全人類がジュエルとなつた暁にヴァルキリーの側にあるのはヴァルキリーの理念を正しく理解し、力を持つ者です。それ以外はその他、ヴァルキリーの管理を受ける力を持たない方々となります。あなた方は……どうでしょうね？」

あからさまな見下した笑みは口元を隠した程度では隠せていない。せっかくジュエリアクラブの中の特別な存在、ジュエルになれたというのにその誇りを踏みにじられたジュエルたちは悲しみ、落ち込み……そして怒りを表に出した。

悠莉の朱色の瞳がスツと細くなる。

「怒らせてしまいましたか？ ですがこれは事実。ジュエルは完全な実力主義、力がなければ消えていくだけです。さあ、悔しいのなら私に力を見せてください。」

「あぁー！！」

とうとう堪忍袋の緒が切れたジュエルの1人がハンドアックス型のジュエルを手に出現させながら悠莉に向かって駆け出した。

「下沢様！」

慌てて守りに入ろうとした村山を良子が止める。

困惑する村山の前で斧を振り上げた高校生くらいのジュエルは

「あなたなんかは何でバカにされなきゃならないのよ！」

叫びながら何の躊躇もなくジュエルを振り下ろす。

ガギン

悠莉はサフェイロス・アルミナを横薙ぎに振るって斧の側面にぶつける。

それだけで体勢を崩したジュエルは地面に斧を打ち付け、盛大に転んだ。

すでに悠莉は倒れた者を見ていない。

弱者に用は無いとでも言うように。

「反逆ですか？これからヴァルキリーに従順な正しいジュエルになるべく教育されていくというのにそれではいけませんよ。これは他の地域のジュエルへの見せしめが必要ですね。」

悠莉の笑みが酷薄な色を宿す。

両手で握ったサフェイロス・アルミナをカラカラと引き摺りながらジュエルたちに近づいていく。

その姿は死神を連想させた。

ジュエルたちは恐怖し

「う…わあああああ！」

恐慌に陥って悠莉に襲いかかった。

1人が飛び出すと堰を切ったように恐怖の対象を消し去らんとジュエルが手に手に武器を取った。

21人のジュエルのうち半数以上の13人が鬼気迫る表情で悠莉を殺そうとした。

悠莉は止まれというように左手を前に突き出した。

だがジュエルはもう止まらない。

そして悠莉の左手の意思は止めることではない。

「コランダム。」

最前を走っていたジュエルの目の前に突如青い壁が出現した。

「ぐあっ！」

前触れもなく現れた壁に咄嗟に対応できるわけもなくジュエルは障壁に激突、後続のジュエル2人も巻き込まれた。

勢いを削がれながらも残ったジュエルは悠莉を目指して進む。

悠莉はジュエルの猛攻から逃れるように大きく後ろに飛び退いた。

「わああああ！」

中央に出現した壁を避けるように左右に別れた集団の正面に

「コランダム。」

悠莉は再び両側の人の流れの前に障壁を展開した。

「こんなもので！」

壁が出現することを知ったジュエルは壁を回避して突き進む。

左右に別れていたジュエルが合流してきて再び大集団となった。

それが悠莉の思惑とも知らず。

「これでどうですか？」

悠莉は展開していた3枚の障壁を消すとジュエルたちの進行方向の

上空、悠莉の斜め上に等間隔で並べた。

一番ジュエル寄りの1枚が落ちてくる。

「早く行ってよ！」

「押さないで！」

迫る壁から逃れようと加速するが

「きゃあ！」

遅れた数人が壁に激突した。

その壁は倒れて後続をすべて地面に押さえつけた。

どうにか通り抜けたジュエルたちに対しても息をつく間も無く次の

壁が降下を始める。

「はあ、はあ。負ける、もんか。」

緊張と疾走で息を荒らげながらもジュエルは前を目指す。

「ああ！」

また数人が脱落して残りは3人になった。

最後の1枚が落ちてくる。

明らかに間に合わないタイミングで降ってくる障壁に絶望が広がる。



だが

「負ける、もんかあ！」

杏葉高校の制服を着た少女が立ち止まりかけていた一団の中から飛び出した。

「危ないわよ！」

ジュエルの制止の声にも立ち止まる様子はなく

「てえい！」

少女は障壁と床とのわずかな隙間、わずかな希望に向かって飛び込みズン

ギリギリで通り抜けた。

そのまま前転して無理矢理立ち上がり

「せえい！」

槍型のジュエルを悠莉に向けて渾身の力で振り下ろした。

悠莉は少女の最大の一撃をサファイロス・アルミナで軽く受け止め、

「ふふ、合格です。」

さっきまでの見下した様子ではない天使のような微笑みを浮かべた。

「…へ？」

何が何やら分からず、ただ全力を出しすぎて脱力した少女を

「おっと。」

良子が片手で支えた。

目をぱちくりさせる少女に良子は嬉しそうに笑いかける。

「小さいのになかなか根性あるね。どう、バレー部に入らないかな？」

「は、はあ。」

困惑の極みにある少女は元より、この場にいたジュエルとインストラクターもまた悠莉の変わり身に戸惑っていた。

悠莉は障壁とサファイロス・アルミナを消して全員を見回す。

悠莉に挑んだ者、途中で脱落した者、初めから動けなかった者。

その誰にも微笑みかける。

「ソルシエルもジュエルも本質的なものは同じ、力の源となるも

のは強い感情です。ですが今のジュエルの皆さんにはそれが足りませんでした。向上心、もつと言ってしまえば他者よりも優れた存在であり自分は特別な人間であるという意識を持たない限りどれほど訓練を積もうとグラマリーを発現できるほどのジュエルにはなれませんが。」

それが悠莉の導き出した答え。

そしてその仮説はファブレがソーサリスを増やさなかったという事実による正当性があった。

だから悠莉はわざと憎まれ役を演じ、ジュエルに反抗心を植え付けたのである。

決して追い詰められ、表情を歪めるジュエルを見たかったわけではないのである。

…決して。

「私が言ったことの全てが本当だとは言いません。ですがジュエルは実力主義であり、力ある者が優遇されるのは事実です。皆さんが感じた不満や嫉妬、怒りを力に変え、強くなることに貪欲になってください。」

悠莉がそう締め括るとポツポツと拍手が起こり、やがて全員が手を叩き始めた。

特に全力で手を叩いていたのは最後まで諦めなかった少女。

キラキラとした瞳で悠莉を見つめていた。

悠莉が一礼して引き下がると

「あ、あの！」

少女はすぐに悠莉に声をかけた。

「はい、何ですか？」

「わ、私、吉葉高校1年生の綿貫紗香と言います！あの…お姉様とお呼びしていいですか！？」

力一杯懇願してくる紗香に顔を見合わせる悠莉と良子。

「まあ、あたしは柄じゃないけど悠莉ならいいんじゃない？」

「いいえ！良子お姉様と呼ばせてください！」

「え!？」

他人事だと思っていたら自分にも飛び火して良子は慌て出す。そしてそんな面白い状況を悠莉が見逃すわけもなかった。

「そうですね。綿貫さん…」

「私のことは紗香と呼んでください!」

無駄に気合いの入った紗香に気圧されつつ悠莉は言い直す。

「それでは紗香さんと呼びます。紗香さんは吉葉高校の後輩ですし、構いませんよ。是非とも等々力先輩を良子お姉様と呼んであげてください。」

「こら、悠莉!」

「あ、ありがとうございます!」

抵抗しようとした良子だったが嬉しそうに頭を下げる紗香を見て諦めたらしく苦笑した。

「私、頑張つてジュエルを使えるようになります。すっごいグラマリーも使えるようになってみせます。そうしたらお姉様たちの仲間に入れてください。3人でチームを組んで。」

ここで暴走する紗香が爆弾発言。

良子は苦笑し悠莉はむしろ楽しそうに笑い、

「ちよつと待ちなさいよ!」

1人蚊帳の外だった美保が吠えた。

「なんですか、神峰先輩?」

明らかに態度の違う紗香に美保の怒りが一気に高まる。

「悠莉も良子先輩もあたしと”RGB”ってチームを組んでるのよ!」

「そんなの解散してください。私の方がお姉様方にふさわしいんですよ!」

ナンパな男達も近づかない美保の怒りを前にしても紗香は臆することなく言い合っていた。

「あんなんかがヴァルキリーのジュエルになれるわけないわよ!」  
「なってみせます!」

にらみ合い、鼻先を押し付けあい

「ふんっ!!」

同時に顔を背けた。

「ふふ、面白い事になりましたね。」

「ライバル出現だね。」

「誰が(ですか)!!」

この日の悠莉の教えはすぐさま全国のジュエルクラブに伝えられ、ジュエルの士気の向上に大きく貢献した。そして美保には予想外のライバルが現れ、頭を悩ませることになる。

## 第28話 特訓開始

クラス副委員長である久住裕子は普段副委員長として全く自覚がないと言われても反論できない。

だがイベント・祭好きの彼女は興味があることには妥協しない。だから

「さあ、体育祭、絶対に勝つわよ！」

体育祭実行委員を押し退けてクラスを仕切っていた。

「何であいつ体育祭実行委員やらなかったんだ？」

と全員が首を傾げたがそんなものを裕子は気にしない。

「体育の徒競走のタイム順をリストアップして。人によっては何種類が出てもらうわよ。」

足の早い生徒は大抵運動部であり、体力と速力には自信があるので大して不平の声は上がらない。

「身体測定の日も出して。ただし男子、それを口実にスリーサイズを聞こうとしたら蹴るわよ。」

握力や瞬発力のデータも加味して他の種目に出る生徒を割り振っていく。

そのどれもが納得のいくものだから反対意見が出ることもなくトン拍子で決まっていた。

「さて、残るは…」

ここまで順調だった選出が止まった。

これが去年なら迷いなく決まっていたのだが今年は少し事情があった。

「真奈美と叶、どっちにリレーに出てもらうべきか？」

去年なら真奈美をリレーに据えていただろうが今の真奈美は義足に眼帯姿だ。

多少同情は受けるだろうが明らかに不利の要素となる。

それならば真奈美を動きの少ない競技に割り当てて叶を起用した方が得策かもしれない。

「でも、実際問題義足の真奈美と叶、足の速さ同じなのよね。」

「ちよつとだけ私の方が速いよ?」

そのちよつとはコンマ03秒、本当にちよつとだった。

叶の足が遅いのか義足を着けていても真奈美が速いのかは判断が難しいところだった。

「うーん。皆はどう思う?」

胸が揺れるから真奈美という意見は即時却下。

憤ましい叶が泣きそうな顔をしたため言葉を発した男子は有志によりボコボコにされた。

それ以外もどちらにも決めかねるといった状況だった。

行き詰まったかに見えた瞬間

「はい。私がリレーに出ます。」

叶がすっかりと手を上げて宣言した。

叶をよく知らない生徒はそれで納得したが中学からの友人や1年の時のクラスメイトは目を見開いて驚いた。

「あの引つ込み思案な作倉さんが立候補した。」

「最近ちゃんと意見を言うようになった。」

「明るく綺麗になった。」

そんな意見が出て叶は照れ臭そうに頬を染め

「やっぱり陸(男・半場くん)の影響(だな・よね)。」

満場一致で陸の影響だと言われて茹で蛸になりながら縮こまっていたのだった。

かくして叶をリレーに登録して体育祭の準備が静かに始まった。

放課後、部活動以外にもちらほらクラスの練習が見られるようになる中、”Innocent Vision”のメンバーもまた体操着姿で校庭の隅に集合していた。

グラウンドを利用する部活の部員たちが好奇の目を向けていたが由良がその中心にいると声をかけてくるようなことはなかった。

ジャージの上を羽織った八重花が首から下げたホイッスルをピーツと吹いた。

「それじゃあ私たちは体育祭の練習の振りをしながらソーサリス復活計画を始めるわよ。」

「どんとこい！」

「頑張る。」

「あたしのスピネルも復活させるよ。」

「やるよお。」

少女たちが校庭の隅でやる気を出している微笑ましい姿に男むさい野球部やサッカー部は興味津々だ。

あの羽佐間由良だって遠くから見ている分には美人なのだから。

「それで八重花、具体的には？」

「叶がカナ、真奈美がマナで私は八重花？」

意気込んでいる由良に八重花ははぐらかすように尋ねた。

「それならエカだ。」

「…。」

非常に微妙なあだ名に八重花は思わず謝りそうになってしまった。

「冗談だ、ヤエ。だから泣きそうになるな。」

「…泣きそうになんて、なってないわよ。ぐす。」

八重花はジャージの袖で目元を拭うと腰に手を当てた。

「まずは走り込みよ！健全な精神は健全な肉体に宿る。」

「健全な…」

「肉体。」

「カナ、マナ。どうしてそこで俺を見る？」

2人の視線は制服よりも薄い体操着を着た由良に向けられていた。

正確には普段の制服よりもはつきりとメリハリの出る格好だからわかるプロポーションだ。

視線の理由は異なるが周囲の男子とたいして変わらない理由なため由良は苦笑して頭を掻いた。

「話を戻すわよ。ソルシエールは肉体に作用しながらも力の根源は精神に依存しているわ。つまりどちらも底上げすることでソルシエールの発現を促すのよ。」

それで本当に取り戻せるかという質問はない。

明確な答えが分かっているならとくに八重花はジオードを取り戻しているはずだから。

八重花の考えた案を元にして全員で条件を探していくという話になっていた。

「とりあえず学校の外周ランニングよ。ピッ、ピッ。」

ホイッスルでリズムを刻みながら八重花が先導して走り出すと”Innocent Vision”のメンバーもそれに続く。

ピッ、ピッ、ピッ

比較的遅いペースを保ちながら校庭を出て校舎脇を走り校門から外周コースに入る。

校門から外は学校の敷地ではないが運動部がランニングで使用するコースがある。

すでにウォームアップは終わっている部活ばかりなので外周コースを走っているのは陸上部くらいのものだ。

そのペースの速さを目の当たりにして急ぎなくなる気持ちを押し込めて一定のペースで走り続ける。

さすがにホイッスルを銜えたまま走れるわけもなく音はしないが八重花がペースメーカーとして働いていた。

そのただの走り込みが1周終わる頃

「はあ、はあ。みんな、待ってえ。」

叶はずでにはてて遅れていた。

義足の真奈美はまだ余裕そうで軽く額に汗をかいている程度。



これを裕子が見たら間違いなく自分の判断を悔やんでいただろう。叶の体力はかなり駄目な子のレベルだった。

「叶、無理しても仕方がないわ。少しずつ走れる距離を伸ばして走る速さを上げられるようにするの。だから今は休みなさい。」

「うん、わかった。」

息も絶え絶えに返事をして叶は1周して戻ってきた校門に不時着した。

「カナのやつ、本気で体力ないな。」

「普段はあそこまで酷くはなかったと思います。調子が悪かったのかな？」

「叶は付き合いで参加しているだけだもの。私たちは限界まで走り続けるのよ。」

ウォームアップと思わせておいて実は本命だった限界ギリギリマラソン。

「当然、ちゃんとした理由があるんだろうな？」

そうでなければただの嫌がらせの拷問だ。

尤も同じメニユーを八重花もこなすわけだからよほどMな性癖持ちでない限りそれはあり得ない。

「火事場の馬鹿力。人間は追い詰められたときに潜在能力を発揮できると言っわ。だからとりあえず限界まで自分を追い詰めてみるのよ。」

かなり無謀な策だが走っていて思考能力が低下している上に体は温まってハイになっている由良は乗り気だった。

「インヴィ、ファイ！」

「オー！」

叶を除く”Innocent Vision”のメンバーは日が沈む頃まで本当にぶっ続けて走り続けたが、結局左目が輝くことはなかった。

限界マラソンを早々に離脱した叶はしばらく声援を送っていたが体力が回復した辺りで抜け出した。

体操着のままジャージを着て帰り支度を済ませ、向かった先は太宮神社だった。

いつものようにいつの間にか帰ってきてきて境内の掃除をしていた琴は叶が来たのを見て微笑むと箒を動かす手を止めた。

「あ、お掃除の邪魔でしたか？」

「いえ。時間を潰していただけですので。”Innocent vision”の皆さんは学校の回りを走っていたようですが叶さんはいいのですか？」

本当にいつ帰ってきてるのか謎な琴だが叶はもうそういうものと認識しているので驚かない。

「無理しない程度に走って少しずつ速く長くしていけばいいって八重花ちゃんが言ってくれたので。」

「無理しない、ですか。」

琴の目が若干冷やかさを帯びる。

叶はそれに気付きながらも気にしない。

そういつた強さは去年の叶にはなかったものだ。

琴が知っているのは変わり始めた頃からの叶なのでそれほどの驚きはない。

「それでは準備をしてから参りますので先に上がっていて下さい。」

「はい。」

真剣な表情になった2人は短く会話をするとすぐに別れた。

叶は本殿に上がり大広間に向かった。

二十畳ほどの広い部屋の真ん中に入ってジャージを脱いだ。

学校で走る前にも準備運動はしたがもう一度柔軟を念入りにしておく。

「お待ちせしました。」

部屋に入ってきた琴は袖を絞り帯で縛った格好をしていた。

その姿を見ると巫女というよりは合気道の先生のようなだった。

そしてその認識は正しい。

「琴お姉ちゃん、今日もご指導よろしくお願いします。」

押忍というように拳を腰のところグツと握り叶は頭を下げた。

叶の姿はどこか微笑ましく、琴は頬が緩みそうになるのを無理矢理抑え込んだ。

「特訓の間は師匠と呼ぶようにと言っておいたはずですよ。」

「すみません、師匠。」

素直な叶の態度に満足そうに頷いた琴。

「それではまず受け身の練習からです。先日教えた型を頭ではなく体に覚え込ませるのです。」

「はい！」

バンツ、バンツ

起き上がったては受け身を取って転がり、叶はそれをただひたすらに繰り返す。

それを見守りながら琴は先日の事を思い出していた。

「私に格闘技を教えてください！」

夕方に駆け込んできた叶が開口一番に叫んだ言葉に琴は目をぱちくりとしばたかせた。

「あの、そういうのは道場に申し込むものですよ？」

思わず正論で諭してしまうくらい叶の様子が異常とも言えた。

「それはわかってます。でも短期間で戦い方を身に付けたいんです。だから何かいい方法はありませんか？」

琴としても叶が頼ってくれるのは嬉しかった。

だが叶の運動能力はちゃんと知らなくても高くないことは分かるし、剣道や薙刀、空手などの格闘技をやっていたとは聞いていない。

（叶さんに格闘技は難しいでしょうね。）

何であれ叶が人を傷つける技術を体得できるとは思えない。

結局のところ格闘技は強い意思があるからこそ辛いトレーニングに

耐えて技術を磨いていけるので傷つけることを躊躇ってしまったら会得できない。

「私、足手まといにはなりたくないんです。だからみんなを守る力が欲しいんです。」

戦う力と守る力。

見方の側面の違いでありながら根底に根差す思いは真逆のもの。

そして守る力は戦う力を手に入れるよりも厳しい。

守る力は加減を間違えれば容易に破壊の力に変わってしまうから。

(残念ですが叶さんには…)

「お願いします、琴お姉ちゃん。」

「お任せください!」

その前の理知的な考察も叶のうるうるした瞳での懇願の前には全くの無意味だった。

自分の浅ましさに自己嫌悪しつつも叶が晴れやかな表情になったならそれでいいかと思った。

引き受けてしまったからには妥協はしない。

「まず叶さんが身に付けるべきは守る力ではなく誰かに守ってもらわなくても平気な力です。叶さんが1人で戦えれば”Innocent Vision”の皆さんは自分の戦いに集中できるようになりチームの総合力の向上に繋がります。」

「はい!」

的確な指示に叶が感銘を受けて意気込む。

熱心に師事されて琴もやる気になってきた。

「特訓です。私から教えを乞う間、師匠と呼ぶのですよ。」

「はい、師匠!」

こうして叶もまた力を得るための秘密の特訓を始めたのであった。

「えいつ、えいつ！」

「そこまで。」

「はい！」

琴の一声に叶は従いすぐに立ち上がる。

呼吸は荒いし受け身を取るために打ち付けていた手は赤くなっているが泣き言をいうこともない。

「格闘技にせよ戦闘にせよ体勢を崩し相手に隙を見せては敗北は必  
定です。どんなに攻められてもがちりと守りを固め、崩されても  
すぐに体勢を整えることができれば相手に警戒心を抱かせることが  
できるのです。」

特に叶のオリビンは守りの力。

少しでも体系的な守りの技術を叶が体得すれば1人で戦場の中心に  
立つても捌けるようになる可能性は高かった。

「そうすればみんなは私を守る必要がなくなつて戦いに集中できる、  
ですよね？」

「その通りです。そして叶さんが守りと癒しの拠点となることで”  
Innocent Vision”の戦力は飛躍的に増大するでし  
ょう。」

自分が”Innocent Vision”の要になれると言われ  
て俄然叶のやる気が高まる。

「頑張ります！」

「はい、頑張ってください。」

特訓は遅くまで続けられた。

## 第29話 黒の襲撃

” Innocent Vision ” は地獄と呼ぶのも生ぬるい特訓を行っていた。

体力の限界、気力の臨界に到達し、時にはその先の領域にまで足を踏み入れていそうな筆舌にし難い壮絶な練習を見た他の学生たちは嫌が心にも危機感を募らせる。

見える場所であれだけの訓練をしていればクラスの方は隠れてどれだけの練習をしているのかと。

” Innocent Vision ” の活動が壱葉高校の体育祭に緊張感を与えていきかつてない活気に満ちていた。

当然ヴァルキリーでも ” Innocent Vision ” の活動は確認していた。

「体育祭に向けて頑張ってるんじゃないかな？」

と楽観的な意見を述べたのは会長の良子だったが他のメンバーは懐疑的だ。

「 Innocent Vision ” の新しい作戦じゃないかな？」

「うちらと対抗するための体力作りとか？」

「それにしてもずいぶんと無茶をなさってるみたいですね。先日の体育の時間は魂が抜けているようでした。」

色々な意見が飛び交うがソルシエールの復活を目指していることに気付きはしない。

” Innocent Vision ” の話題が収集しないまま尽きたところで葵衣がヴァルキリーやジュエルについての連絡事項を読み上げる。

「先日の壱葉での実演によりジュエルの士気はかなり高まったと報告を受けています。」

「あたしらと言うより悠莉が1人で持っていた感じだけだね。」

「……」

その時のことを思い出して良子は苦笑し、美保は紗香を思い出してムツと顔をしかめた。

あれから紗香は学内でもたまたま悠莉や良子の周りを子犬のように駆け回ってじゃれていた。

その慕われる対象の中に当然のように美保はなくむしろ敵に思われているようなのでなお面白くない。

「それほどでもありませんが成果が出てなによりです。」

悠莉は美保の反応を楽しげに見つめていた。

だが葵衣の報告はしかしと結び言葉がついた。

「他の地区のジュエルクラブからもヴァルキリーのジュエルの力を見せてほしいとの要望が寄せられています。さすがに皆様のご予定もおありですので遠方への実演については断る予定ですが近隣のジュエルクラブに向向いていただけませんかでしょうか？」

実演と言うよりは実戦を求めていることはすぐにわかった。

万の言葉よりも一の実験が勝ることもある。

ジュエルの強化を望むヴァルキリーとしては可能な限り指導すべきだった。

「ちよつといいかな？」

解答を出す前に良子が手を上げた。

「なんででしょうか？」

「移動費とかはヴァルキリーが出してくれるんだよね？」

「はい。こちらの都合でお願いしていますので送迎から食事の用意まで整えておきます。」

それを聞いて良子の口がニンマリと笑みを作った。

「それならあたし、休みの日ならその遠方って所でもいいよ。北海道、東北、関西どこでも。」

「良子先輩、全額負担をいいことに旅行するつもりですね！はい、それならあたしも行く！」

良子の思惑を知った美保はたしなめるのではなく便乗した。

「それのお金は撫子様から出るんだよ！葵衣、止めさせないと。」  
「しかし姉さん。お嬢様はご自身の資産の確保とジュエルの成長、どちらを選択されると思いますか？」

「それは：ジュエルの方。」  
撫子の恒久平和への願い、そしてジュエルへの意気込みは人生を懸けていると言って過言ではない。

「お嬢様に確認を取っても同じ返答をされるでしょう。ならば予定調整のためにも事を進めましょう。」

恐らく葵衣の言う通りなので緑里は抵抗を諦めた。

良子と美保はすでに旅行の計画を話し合っている。

「美保さん、等々力先輩、待つてください。全員で1ヶ所に向かっても実演には効率が悪いです。ここは各地のジュエルクラブの拠点に私たちが向いて実戦指導を行った方が効率的ではないですか？」  
美保と良子に声をかけておきながら実際は葵衣に尋ねている。

葵衣は一応考える。

要望があつたのはほとんど全国、北海道から九州までのジュエルクラブからあつた。

そしてジュエルクラブには公表はしていないが北海道地区、東北地区、関東地区、というように区分けされた地区の統括を行う支部が存在する。

そこにヴァルキリーを派遣し、周辺のジュエルを集めれば一度の遠征で全国のジュエルを喚起することが可能となる。

その効果は一度の旅行の予算と比べても計り知れないほどに大きい。  
「悠莉様の提案を採用させていただきます。今週末に企画できるよう調節を行いますのでよろしくお願い致します。」

葵衣が認めると早速どの地区に行くかの話し合いを始めた。

葵衣は関東地区に残ると言うので東北と中部と関西と九州が候補に上がった。

「良子先輩。この状況、昔を思い出しますね。」

「奇遇だね。何も知らないジュエルを自分色に染める。前のジュエ



ル部隊と同じだ。」

かつては一部隊20人程度だったものが今回は100人を超える規模になる。

統率が困難になる反面、部隊の集まった兵团になるため戦術の幅が大きく広げられるとも言えた。

「よし。九州男児の心意気を買ってあたしは九州に決めた。」

「良子、ジュエルは全員女子だよ。」

冗談か本気が分からないが良子は九州に決定。

「ボクは中部地区にする。やっぱり撫子様のお金で旅行するのは気が引けるよ。」

「それなら姉さんは自腹で……」

「……ヴァルキリーのためだからね。頑張るよ。」

葵衣の意見に被せる形で縁里は同意した。

「それじゃああたしは……」

「美保さんはいかにも関西人なツツコミの人ですから関西で決定ですな。」

「なんでやねん！」

狙ってないで自然と出てきたツツコミに美保が耳まで真っ赤になる。

「あー、もー！いいわよ、関西でツツコミに磨きをかけてやるわよ！」

そして勝手に切れて関西に決めてしまった。

「それでは私は東北ですね。」

悠莉は異論なく、こうしてヴァルキリーの実演遠征の計画が動き出した。

「オオーー！！」

「はあっ！」

下校時の夕方、突如襲ってきたオーに対して真奈美はスピネルを呼び出して対抗する。

今回のオーは腕がブレード状になっていて木だろっが石柱だろっが鉄パイプだろっが切り裂いてしまう。

スピネルが斬られることないため必然的に回避かスピネルでの防御に行動が制限される。

だが今日の真奈美はこれまで以上に動きのキレがあった。

「体が軽い。」

ここ最近の地獄の特訓メニューの効果かそれにより向上した体力の影響か、はたまた深夜に1人でやっているスピネルの素振りの成果か。

なんにしる真奈美はかつての力を取り戻すまでには至らないもののオーに後れを取らない戦いをこなせるようになっていた。

細く鋭いブレードの軌道を手甲でそらし、無防備になった脇へミドルキックを放つ。

以前だと捌きからキックへの移行が重く遅かったため避けられてしまっていた。

それが腕で捌きその動きを足を振り上げる動作と連動させることで受けてから蹴るではなく受け流しながら反撃に転じられた。

オーは退いて紙一重で横薙ぎの一撃をかわし真奈美の攻撃後の隙について斬りかかる。

ガッ

だがその腕は左足のスピネルを軸足とした後ろ回し蹴りによって振り下ろす前に阻まれた。

相手の腕の力を利用して右足で蹴ってオーから距離を取った真奈美は確かな手応えを感じていた。

「スピネルの反応がいい。やっぱり特訓の効果かな？」

真奈美は苦笑を漏らす。

それというのもフアブレとの戦いで以降スピネルを使う機会がなかったことを八重花に説明すると怒った様子で腰に手を当て

「手入れをしなければ武器が錆び付いて当然よ。しかもスピネルは相当に変わり者だもの。相手にされなくて拗ねてるんじゃないかし

ら？」

と説教されたのだ。

その後人目を忍んではスピネルを使うようにすると確かに素直に伝えてくれるようになったように思えた。

「道具にも魂がある。いつかソフトウェア部の先輩が言っていたな。長年使い、強い思いを込めたものには魂が宿ると。すまなかった、スピネル。」

スピネルは何も答えない。

ただ主である真奈美に従い力を使う。

「それで十分だ。」

真奈美が地を蹴って駆け出す。

そのままある程度の距離をおいて真奈美は斜め前に飛び上がった。かつて真奈美が幾度となく使用し窮地を脱してきた光の尾を引く流星。

だがそれには高さが足りなかった。

強化された肉体により3メートルくらいの高さには到達したがスターダストスピナには空に吸い込まれるような高さには上がらなければならぬ。

「だけどこれならこれで！」

真奈美の意思を受けてスピネルの切っ先から光に包まれていく。

刀身を光で満たして飛ぶ姿は矢の如く。

「スピナアロー！」

スピネルを鏃、自らを矢として真奈美は放物線を描いてオーに突撃する。

「オーッ！！！」

オーはブレードを大きく振り被って全力でスピネルに向けて斬りつけた。

光の渦と闇の瘴気がぶつかり合って消滅していく。

だが武器の特性上、魔を祓う聖なる魔剣はオーに対しても有効でブレードにヒビが入る。

「行っけー！」

真奈美の叫びでスピネルの輝きが増す。

オーはブレードを修復しながら押し返そうとするがそれよりも早くブレードの崩壊点が訪れた。

光の矢は勢いのまま地面を滑って停止し、その背後で体に大穴を開けたオーが黒い液体となって消滅した。

「ふう。」

真奈美は振り返りながら息をついて周囲を確認する。

例によって結界に取り込まれた真奈美だったがたった今オーは倒した。

にも拘らず歪んだ空はまだ元に戻らない。

（まだ敵がいる？）

真奈美は気配を探るのはそれほど得意ではなく、結界内はオーの気配に満ちているため他の敵の位置が掴めない。

真奈美はさらによく目を凝らして周囲を観察し

「!？」

それを見た。

それはまるで最初からそこに立っていたようにいつの間にかそこにいた。

オーよりも静かに、オーよりも圧倒的な気配を放っている。

今まで気付かなかったことこそが異常に思えた。

それはオーとは全く異質の存在だった。

だがオーと違うとははつきり理解できるのにそれを明確な像として認識できない。

まるで全身に纏った黒いオーラがモザイクとして働いているかのようにならぬうちにそこに誰だかわからなかった。

「何者だ？」

だから真奈美は問う。

オーよりも上位の存在なら話をすることはできるはずだと確信していた。

「…。」

返ってきたのは沈黙。

真奈美はそれを理解されなかったのではなく対話する意思がないのだと取った。

それが動いた。

明らかに人よりも力強く大地を蹴り瞬く間に真奈美との距離を詰めてきた。

「この！」

だが真奈美もジュエルで強化された状態なので十分に反応できる。

スピネルによる蹴りの横薙ぎを放つとそれは横でも後ろでもなく前に向かって跳躍した。

真奈美の斬撃をかわしつつそのまま頭蓋骨を蹴り砕くような強力な蹴りを放ってきた。

「くっ！」

咄嗟に腕の手甲でガードするとそれは真奈美の腕を足場にして大きく背後に跳んだ。

真奈美は体勢を崩しながらもすぐさま振り返り

空中にいるその左目が朱色に輝いているのを見た。

そしてその手に握られたものは槍とも剣とも言える尖型の結晶のようだった。

「玻璃！？」

それは由良の持つ玻璃にそっくりだった。

だがその詳細を確認する前にその切っ先に力が収束するのを感じた。真奈美は慌てて左足を大きく後ろに振り上げる。

切っ先から放たれたのは黒い闇。

それが真奈美に牙を向いた。

対する真奈美はスピネルを最大限に輝かせて地面を切り裂きながら

左足を大きく前に振り上げた。

「アルファスピナ！」

黒の闇と光の軌跡がぶつかり合い拮抗する。

ここで真奈美がガンマスピナやデルタスピナに続けることができたなら競り勝っていたはずだが今の真奈美にその力はなく

「うわあー！」

真奈美は弾き飛ばされた。

地面に倒れた真奈美に向かってそれは武器を手に近づいてきた。

「く、う…。」

起き上がるうにも力が入らない。

まだ連戦は厳しかったのだ。

静かに放たれる殺気が真奈美の辿る未来を雄弁に物語っていた。

だがその足が止まった。

見ると真奈美が地面を切り裂いた時に出来た傷から結界が綻びかけていた。

「……………」

そのの放つ殺気が急速に縮んでいく。

結界の消失と共に姿を隠していた闇も消えかけていた。

それが踵を返して去っていく。

「あれ…は…」

ダメージで朦朧とする意識の真奈美が最後に見たのは壱葉高校の女子制服のスカートが翻る光景だった。

### 第30話 疑惑

「じー。」

廊下でも

「ジーツ。」

休み時間の教室でも

「Gー。」

放課後の特訓の最中でも由良は誰かに見られている感じを受けていた。

これが悪意に塗り固められていたりすれば敵と判断して叩きのめすところだが今回の視線に害意や殺意は全く含まれていない。

それどころか犯人は分かっているのだ。

ただその理由が分からないから今は気にしない。

今日の八重花考案の地獄の特訓メニューはそんな視線を気にしていられるほど生易しいものではなさそうだった。

今日は叶が家の用事で早々に帰っていつてしまったので4人の” Innocent Vision”。

「カナの特訓への参加率はあるまり良くないな。」

「仕方がないわ。純粋なセイントの叶には肉体強化はつかないみたいだからついてこられないのよ。」

「いや、ソルシエールがない俺たちはカナと同レベルのはずだろ。」

「マナもバレルとヤバイからスピネルじゃない分動き回りづらいはずだ。つまりカナはただのさぼりだ。」

「叶、ダメな子。」

「…。雑談はそこまでよ。」

叶の弁護に回ったものの旗色が悪くなった八重花は強引に話を打ちきった。

全員が話に分れらせて誤魔化そうとしていた校舎の壁を見る。

そこは普段と同じ壁。

ただし、そこには2本のしっかりとしたロープがぶら下がり風を受けて揺れていた。

屋上から壁伝いに下ろされたロープを使ったかなり無謀で教員に見つかるとかなり面倒な特訓だった。

さすがに素手では手の皮がずる剥けになってしまうので八重花が持ってきた革製のグローブを着ける。

「ソーサリスに戻ればこれくらい片腕でどうにでもできるのに。はあ。」

「ヤエの中のソーサリスはかなりの化け物に美化されてるな。」

ソルシエールの力で体は丈夫になるが普通に怪我はするし100キロの重さを軽々と持ち上げられる訳でもない。

だからソルシエールが戻ってきたとしても片手でどうこうするのは難しいはずだ。

不可能と言わない辺りがソーサリスを”化け物”と呼ぶ由縁だが。

「レスキュー隊。」

明夜がロープを見上げてわくわくしていた。

壁沿いに降りる訓練は確かにレンジャーやレスキュー隊の分野だ。

「それじゃあ屋上に…」

真奈美がそう言うと

「何言ってるの?」

八重花はとて不思議そうな顔をしていた。

由良と真奈美だけでなく明夜までもがまさかの可能性を想像して冷や汗を流した。

そしてその想像は現実となる。

「これは下るための特訓じゃなくて登るためのものよ。ゴールが近づくほど失敗したときの危険も増す。肉体的にも精神的にも極限状態を作り出すにはピッタリだと思わない?」



とても素敵な笑顔の八重花の目はマジだった。

「…。」

由良たちはもう一度屋上から垂れ下がっていて風が吹くだけで揺れるロープを見た。

上から下りるだけならどうにかなりそうだったが下から登るのはマッスルキングダムの住人の領域だ。

「俺、この特訓が全部終わったら…」

由良がまさかの死に台詞を言うのかと思いきや

「ソルシエールが無くても超人になれるんじゃないかと思う。」

「『あー。』」

実に納得できてしまう諦めた一言だった。

そして”Innocent Vision”はロープ登りを敢行、八重花の思惑通りいろんな意味での限界への挑戦だった。

「はあ、ぐっ、きつい。」

ロープは2本なので2人ずつ登る。

じゃんけんの結果、由良と真奈美が先に行くことになった。

一応命綱代わりにロープを腰に巻き付けて腕と壁を蹴る力で登り始めるが常に重力に引かれ続けるのは想像以上に厳しかった。

さらに真奈美は昨日の戦闘であちこち負傷している。

（最後に見たあれは吉葉高校の制服だった。それにあの玻璃に似た魔剣。）

由良であるはずがないと思いつつも完全に否定できないため話すこともできずにいた。

体力が落ちている時に考え事をしていたからだろう。

「マナッ！」

「え？」

気が付けば真奈美の手が滑って体が宙に投げ出された。

（仲間を疑ったバチが当たったかな？）

危機的状況で妙に達観した真奈美は抗うことなく身を投げ出そうとし「掴めっ、馬鹿野郎！」

突然目の前に由良の手が差し伸ばされた。隣のロープから飛び移ってきたのだ。

（やっぱり由良先輩じゃない！）

真奈美はその手をしっかりと握り

「このおおおお！！！」

由良はもう片方の手で真奈美の登っていたロープを握り締めた。

「ぐああ！」

自重と重力と真奈美の重量を一手に支えることになった左腕が干切れそうなほどの痛みを発し力が抜けそうになる。

「由良先輩！」

真奈美は由良を守るために手の力を弱める。

だが由良は右手をいつそう強く握って離そうとしない。

「下らないこと、考える暇があるなら、足掻け、馬鹿！」

「！！ はい！スピネル！」

その一言で気を持ち直した真奈美は生きるためにスピネルを呼び出し「止まれえ！」

壁に左足を打ち込んだ。

楔を打ち込んだことで真奈美の落下は止まり、さらには由良のブレキとして機能した。

地上までは残り5メートルほどしかなく、あと少し遅ければ地面に激突していた可能性もあった。

「はあ、はあ。きつかった。」

「本当に、死ぬかと思いました。」

落下速度さえ消えれば自重くらいは支えられる2人はスルスルとロープを滑り降りた。

「先生に見つかった。」

「やっぱり無謀だったようね。全員撤収よ！」

由良の心配をしている暇もなく遠くから生活指導の体育教師が竹刀

を振り回しながら駆けてくるのが見えた。

「行きましよう、由良先輩！」

「ああ。」

真奈美は由良に寄り添うように義足を取り付け直した足で走り出す。そこにはもう由良に疑念を抱いている様子はなかった。

どうやら先生に顔は割れなかったらしく分散して逃げ切ると呼び出しがかかることはなかった。

” Innocent Vision ” の面々が無茶をしているのは学内でも知れ渡っているので後日詰問される可能性はあるがそこは口裏を合わせてはぐらかせばいい。

ロープ登りと逃走劇ですっかり汗だくになった由良と真奈美は運動部のシャワー室に来ていた。

不法侵入ではなくソフトボール部にお願いして借りたのである。シャワーを浴びて汗を流す。

「それで、俺に何が用があったんじゃないのか、マナ？」

由良は仕切りの向こうから真奈美に声をかけた。

朝から感じた視線の主が真奈美であることは気付いていたがその理由が結局分からなかった。

そして逃走劇を始める頃にはそれも終わっていたようだったのでちょうど誰もいないことだし尋ねようと思いつたわけだった。

「用というか：結局人違いだと確信できたと言いますか…」

なにぶん事情を話すと本人に

「実は疑ってました。」

と説明することになるため真奈美の歯切れは悪い。

キュツとバルブを閉める音が聞こえて隣からの水音が止んだ。

もう出るのかと頭を流しながら思った真奈美は

「意味もなくあんな行動を取るとは思わない。理由を話せ。」

「わあーっ!？」

突然由良が同じシャワー室に乱入してきた盛大に悲鳴を上げた。バクバク心臓が脈打つ胸を直接手で押さえつけながら驚いた表情で振り返った。

「俺が言うのもなんだが今みたいなシチュエーションはキヤアの方が女らしいぞ？」

由良は全く隠そうともせず腕組みしてクツクツと笑っていた。

寄せられたことで強調される胸に真奈美は恥ずかしさを感じて由良に背中を向ける。

シャワーを頭からかぶって伝えるべき言葉を並べていく。

「実は昨日、オーとの戦闘の後にまた新しい敵と出会ったんです。」

「新しい敵？どんなやつだ？」

由良の疑問に真奈美は一瞬伝えるのを躊躇ったが

「： 玻璃とそっくりな形状の魔剣を持つ壱葉高校の制服を来た女子生徒でした。 結界内では闇に隠れていて見えなかつたんですけど、去り際に少しだけ。」

「なるほど。それで犯人は俺じゃないかと疑ったわけか。」

「すみません。」

真奈美は背中を向けたまま頭を下げる。

仲間を疑ってしまったのだから何を言われても文句は言えない。

由良は沈黙したままで怒っているのか呆れているのかも分からない。

真奈美はただ投げ掛けられる言葉を受け止めようと待った。

そして、突然太ももを撫でられた感触に

「きゃあー！」

真奈美は今度こそ乙女の悲鳴を上げた。

それでも由良は太もも、正確には太ももにある義足の固定具を触る手を止めない。

「普段じっくり見る機会が無かったがこうなってるのか。着けたまままでいいのか？」

「シャワーくらい、なら。温泉とかだと、外さないよ。」

くすぐったさに身をよじる真奈美。

吐息が触れて艶かしい声が漏れた。

「しかし地獄の特訓に付き合ってるだけあってしつかり筋肉がついてるな。」

「あの、恥ずかしいのでそろそろ…」

「ん、ああ、悪い。」

このまま悪意なく全身を撫で回されそんな恐怖を感じて真奈美が恐る恐る申し出ると由良は思いの外あっさり引き下がった。立ち上がってポンと由良の頭を撫でる。

「カナもお前も少し人が良すぎるぞ。俺が襲った相手が確認も取れてないのに無防備過ぎる。もし俺がその犯人なら間違いないさつき殺せていた。」

「自分の受ける被害を省みずに私を助けるために危険を冒してくれるような優しい人はそんなことしません。そう信じるくらい深い付き合いをした自信はありますよ。」

「生意気だ。」

ぐりぐりと由良は真奈美を頭を押さえ込むがどちらも笑顔でじゃれているだけだ。

その手が止まり

「これ以上仲間を無くしたくないだけだ。」

そんな呟きを聞かなかったことにした真奈美は顔を上げた。

「吉葉高校の格好があたしたちをミスリードするものである可能性もありますけど、あたしはこの学校の生徒じゃないかと思ってます。結界内ではあたしは闇に包まれた相手の姿を正確に認識することができませんでした。バレないと思って服装に気を配らなかつたんじゃないかと。」

「つまりそこが連中の仕出かしたミス、オーの謎を探る鍵になるってわけか。」

災い転じて福となる。

襲われたことでオーに迫る手がかりを得たのだ。

そしてこれまでの闇の集合体のような姿とは違う人の姿をしたもの。

それがオーを操っている黒幕かもしれないのだ。

敵が強大で暗闇の底で足搔いているような状態だった” Innocent Vision” に差し込んだ光。

それは八重花のソルシール復活計画であり今回の情報でもある。光はまだ頼りないものだが確実に” Innocent Vision” の歩む道を照らしている。

「疑うのは仕方がないが早めに打ち明ける。取り返しのつかない事態になってからじゃどうしようもないが事前に話し合えばいい策が見つかるかもしれないんだ。」

「はい、すみませんでした。」

「それに…俺は陸の下に集まったやつらには悪いやつなんていないって信じたい。」

一瞬だけ悲しげな顔をした由良はすぐに表情を元に戻してしまったから真奈美も何も言えなかった。

オーの使った鏡像結界や幻覚はある1人の人物を思い起こさせる。いつも喧嘩をしていたように見えた由良もやっぱり心配しているのだった。

「あたしも信じますよ。」

そして何も言わなくても” Innocent Vision” の全員が陸の目覚めを信じ、願っていることを知っていた。

「とにかくこの話はヤエに伝えないと。」

「今日はいまませんでしたけど叶にも言っておかないと。あたしと同じように狙われているんですから。それに学内に敵が潜んでいるなら叶も何か気付いているかもしれないし。」

相手の狙いは不明だがセイントを殺すことが目的ならやはり叶の方が標的になりやすいだろう。

「そうなるとますます1人で行動させるのは危険なんだがその辺、カナは分かっているのか？」

八重花の地獄の特訓も少し参加してはすぐどこかに行ってしまう。叶が琴との特訓を秘密にしておきたいという思いで何も言わないの

だが、その事で由良たちの心配を増やしていた。

「叶はあれでしつかりしてるから大丈夫ですよ。また太宮院先輩の所にお邪魔してるんじゃないかと。」

その内容は知らないものの叶が琴の所に出向いていることを看破する真奈美。

「よく分かるな？」

「あたしたち以外に叶がよく行く場所なんて裕子たちの所か太宮院先輩の所くらいです。それに裕子たちの所なら何か言ってくるはずです。」

「行き先を言わないのは太宮院のところでサボってるのを知られたくないからか。」

勝手な憶測だったがお菓子を食べているのが見つかって驚いている叶の姿が思い浮かんで2人して笑った。

「…由良先輩。」

真面目な顔をした真奈美に由良も表情を引き締める。

そして

「何だ？」

真奈美は言いづらそうに視線を外し

「いい加減、自分のシャワーに戻ってもらえませんか？」

恥ずかしそうに呟いた。

真奈美の羞恥に染まる真つ赤な顔はまぎれもなく乙女のものだった。

### 第31話 実技指導旅行

体育祭を来週に控えた週末。

”Innocent Vision”の特訓の影響でクラスによっては土日返上で練習するらしいがヴァルキリーの面々はそちらには参加せず放課後になると早々にヴァルハラに集合した。

今日から泊まり掛けて各地のジュエルクラブに実技指導をしに行くのだ。

実質的には一人旅のようなものなので良子や美保は見るからに楽しもうとしていた。

「皆さんお揃いですね。」

最後に入ってきた葵衣の手には封筒が握られていた。

「お荷物は今朝皆様のご自宅で受け取りましたので特にご用がなければこのまま出発していただきます。良子様、美保様、悠莉様は遠方ですので飛行機や新幹線のチケットを用意させていただきました。駅まではお荷物とご一緒に車でお送り致します。」

出発の準備は滞りなく終わっている。

あとは葵衣のゴーサインが出れば旅行に行けるのだが葵衣はまだオーケーを出さない。

「最後にお嬢様からの伝言です。」

その言葉に浮かれていた良子と美保が固まった。

今回の実技指導は葵衣が同意したとはいえ撫子の了解を得ないままにWVeの予算を使用して行うことに決定した。

撫子が納得しなければいろいろと不都合が出かねなかった。

約2名が固唾を飲んで耳を傾ける中、たつぷりと間を作った葵衣はようやく口を開いた。

「あくまでもジュエルへの指導が目的の旅行ですので羽目を外しすぎないよう注意してください、とのことです。」

そこには予算低減という言葉は入っていない。



だが疑り深い美保はまだ油断しない。

「でも結局羽目を外すなっことは予算は低めにしろっことですよね？」

宿代や食事代、土産代などを持ってくれるとはいえ出費は少ないに越したことはない。

「はい。各自に充てられた予算は…」

葵衣はどこから取り出した電卓に数字を入力して2人に見せた。

「なっ!?!」

「おっ!?!」

2人の目が飛び出しそうなほどに見開かれる。

6桁前半とはいえ学生が行く旅行、しかも一泊の値段にしてはかなり豪華な予算だ。

宿の選択は自由なので現地で一泊数万円する豪華ホテルに泊まってもよく、それでもまだ余る金額だ。

「お、おお…」

2人の目が\$マークに爛々と輝く。

「美保さん。ここに留まっていると出先に到着するのが遅れますよ?」

「ハッ!そうよ。葵衣先輩、もう何もありませんよね?」

悠莉の言葉で我に帰った美保は落ち着かない様子で葵衣に訪ね

「はい。お気をつけて行ってらっしゃいませ。」

見送られるとすぐにヴァルハラを出て行ってしまった。

「あ、美保、ずるいぞ!」

良子も追いかけるように出掛けていった。

それを見送る3人は無感情に呆れに笑顔と三者三様だった。

「悠莉も早く出ないと遅くなるんじゃない?盛岡でしょ?」

東北ジュエルの統合支部は盛岡駅近くに建てられたジュエルクラブとなっっている。

土曜日は午前授業でまだ昼とはいえここから駅に行き数時間新幹線に乗るとなると到着は夕方になっってしまう。

「私はそれほど観光するつもりはありませんから今日は顔見せ程度に済ませて明日本格的に指導するつもりです。」

「あ、そういうこと。」

かく言う緑里も名古屋だが撫子の資金で楽しむのは気が引けるといふことで指導だけして戻ってくる予定だった。

「姉さん。これを。」

「うん？」

葵衣はチケットの入った封筒とは別にもう一つ封筒を取り出して緑里に差し出した。

緑里は首をかしげながら受け取り

「え？これ、お金だよ？」

1万円札が数枚入っていることに気付いて困惑した。

「姉さんの事ですから安いホテルに宿泊して観光にも行かず、ごく少人数にのみお土産を買うだけの低予算旅行を考えていたのでしょ  
う？」

「う。」

あまりにも的確すぎる指摘に緑里は反論できる要素が見つからず後退る。

普段無表情の葵衣が呆れたようなジト目を向け、ふうとため息までついた。

「ですからこれは…私からの餞別です。お嬢様のお金を使うのが心苦しいのであればそれを使ってください。」

「でも、妹のお金も結構使いづらいよ。」

緑里は葵衣の心遣いに対する嬉しさと申し訳なさの間で揺れていた。やっぱり返そうと出そうとした手を葵衣が押し戻す。

「遠慮は無用です。しっかりと楽しんで感想とお土産を期待していただきます。」

普段滅多に見ることのない葵衣の微笑みに緑里は見惚れてしまう。

「葵衣…」

「姉さん…」

見つめ合う2人の間に何だか百合の花が見える。

「ふふふ。私はお邪魔のようですのでお先に失礼しますね。」

悠莉は微笑まじげに2人の姿を見ながらヴァルハラを後にし海原姉妹だけが残り

「ちゃんと身嗜みを整えて先方に粗相の無いようにしてくださいね。それと無理はしないこと、良いですね？」

「うん。葵衣も気をつけてね。」

「はい。」

誰もいなくなつたことにすら気付かないほど互いを想い合っていた。

「やって来ました、九州は福岡。」

福岡空港からタクシー乗り場に降り立った良子は旅行鞆の代わりにスポーツバッグを担いでいるため部活の遠征のような出で立ちだった。

「ええと、ジュエルクラブから迎えが来てくれるはずなんだけど。」

葵衣のくれた予定によればこのままジュエルクラブに向かって挨拶をすることになっている。

「失礼ですが、等々力良子様ですか？」

「ん？そうだけど？」

声をかけられて振り返るとWV eの制服を着た小柄な女性が立っていた。

「お待ちしておりました。私はWV e福岡店の長崎です。よろしくお願いします。」

丁寧な挨拶だったが何故か良子は無反応。

少し不安げに長崎が様子を窺うと良子は

「福岡弁じゃないんだ。」

と真面目に驚いていた。

長崎はあははと苦笑するのであった。

迎いの車に乗った美保は流れていく大阪の町を眺める。  
ジュエルクラブインストラクターの神戸かんべはまだ運転免許を持っていないとのことなので助手席に乗っている。

それなら運転手だけが来ればよかつたんじゃないかと思う美保だったがさすがに初対面ということではないので自重した。

「美保さんは大阪は初めてです？」

フレンドリーなしゃべり方と大阪弁のイントネーションは割とお気に入りで、だが神戸はとにかくよくしゃべる。

息をする代わりに喋ってるんじゃないかと思うくらい延々と話している。美保は車に乗っているだけなのに疲れてきていた。

ふと視線を感じて見てみるとミラー越しに運転手と目があつた。

運転手は美保と同じような顔をしていて妙に親近感を抱いた美保であつた。

名古屋のWV eに到着した緑里は準備があるから少し待つてほしいとインストラクターの豊田に言われて店内を見て回っていた。

（客の入りは結構いいみたいだけどジュエルはどれくらいいるのかな？）

悠莉がやったという直にジュエルと勝負をする方式に興味があつた。ジュエル・ベリロスは白鶴寄りの特性のグラマリーを持っているため単純な一対多数では苦戦は必至だ。

（だけど白鶴以上の強度と操作性がある。これを使いこなせるようになればかなり使い勝手がよくなるはずだよ。）

「お待たせしました。こちらへどうぞ。」

石川は店員として客を招き入れるようにスタッフルームへと連れていく。

そこからさらに奥、スタッフの多くには在庫品倉庫と伝えてある部屋の地下にジュエルクラブの訓練所がある。

ジュエルは別ルートで外から直接迎えるようになっていた。

地下への階段を降りた先には

「おお…」

思わず感嘆の声を漏らしてしまうほどに整然と並び立つジュエルたちがいいた。

その総数は少なく見積もっても100人以上、壇上から見れば黒山の人ばかりだ。

（これは全員と勝負したらさすがに死ぬよね？）

負けん気の強い緑里でも1対100に挑む気にはなれず無理をしないと約束もしているため断念するのだった。

「それでは吉葉からお越しいただいた下沢悠莉様にご挨拶をいただきます。下沢様、よろしくお願ひします。」

盛岡店でインストラクターを務める岩手いわての紹介を受けて悠莉が前に出た。

「ヴァルキリーの下沢悠莉です。ここにいらっしゃるジュエルの皆さんは恐らくヴァルキリーやソルシエルについてはほとんどご存じないでしょう。自分と同じくらいの歳、あるいは年下なのに何を偉そうにと思っている方もいらっしゃると思います。」

出だしから反応に困る話をされて集まったジュエルがにわかによめき出す。

わずかなざわめきは瞬く間に広がっていく。

「まだお話の途中です。静かにしなさい。」

岩手が注意するとどよめきは沈静化していく。

インストラクターである岩手は純乙女会時代のジュエルであるため何をしたのは知らないが今の悠莉よりも人望を集めているようだった。

静かになったところで岩手が悠莉に話の続きを目で促した。

それだけで前にいたジュエルたちは岩手が悠莉を敬っているのが見

て取れた。

「既に聞いているかもしれませんがジュエルの力は本人の心に強く依存します。強くなりたいと願う思いが力になります。ですので私を見下している方は遠慮なく挑んでみてください。そしてその力の差に絶望してください。」

さつきよりもざわめきが大きくなる。

悠莉がわざと煽っているのがわかるので岩手は何も言わない。

ジュエルの中から殺気や嫌悪感、敵愾心の感情が立ち上っているように見えた。

「ですが私も全員と戦っているほど時間はありません。本気で私を倒したいという方は明日ゆっくりとお相手しますが、まずはその気概を削いでおきましょう。」

悠莉は舞台正面から横に体を向けまっすぐに岩手を見た。

「悠莉様、まさか？」

「1人目の獲物はあなたです。サフェイロス・アルミナ。」  
動揺する岩手に躊躇うことなく悠莉はサフェイロス・アルミナを突きつけた。

ヴァルキリーの面々が出掛け、1人言葉に残った葵衣はジュエルクラブには向かわずにヴァルハラにいた。

ジュエル関連の雑務に”Innocent Vision”がオーと呼ぶ敵の調査、”Innocent Vision”自体の動向もチェックしなければならない。

様々な仕事を平行して処理している葵衣は建川という近場での実技指導ということもありギリギリまで仕事をこなしてから行くつもりでいた。

コンコン

普段来客など滅多にないヴァルハラ扉が叩かれた。

「どつぞ。」

「失礼します。」

入ってきたのは葵衣のクラスメイトのジュエルだった。初めて足を踏み入れたヴァルハラに戸惑っているのが態度に表れていた。

「用件は…聞くまでもありませんね。ジュエルクラブからの呼び出しですか。」

「はい。村山さんが海原さんをお連れするようにつて。」

建川でインストラクターをしている村山は実利主義で無駄だと思うことは決してやろうとしない。

「私を呼びに行く時間は無駄だからその間は通常訓練をしている、そういうわけですね？」

「はい。」

貧乏くじを引かされてベそをかいている同級生には何の感情も向けず葵衣は作業していたアプリケーションを閉じていく。

約束の時間まではまだあったがその手の決まり事は守る村山が呼び出すのだから予想以上に今回の実技指導に対するジュエルの期待が大きかったのだろう。

「あの、今日の指導、よろしく願います。」  
「ここにもその1人。」

葵衣のジュエル・エルバイトは風を操るがその本質はセレスタイトとは異なる。

だから今の葵衣にはソーサリスだった頃の戦い方は出来ない。なので直接指導せずに村山に任せようと思っていたのだがこの様子だとそれでは済まされそうになかった。

「私が教えられるのはジュエルの基礎だけです。」  
葵衣は立ち上がると出口へと向かう。

同級生のジュエルも慌てて後を追った。  
鍵を掛けて外に向かうと校門前に花鳳の家の運転手が車を停めていた。

2人が乗り込むと車は静かに発進した。

「先ほど、基礎だけだと言われましたけどそれがしっかりできれば  
ジュエルを上手に扱えるようになりますか？」

素朴で真摯な問いに葵衣は答えをわずかに躊躇った。

ジュエルは悠莉の言うように感情を糧に力を得るもの。

ジュエルに選ばれた以上何かを渴望する願いがあるのだろうかただ  
真面目なだけではジュエルは進歩しない。

だが葵衣の戦術はジュエルに頼らない。

ウインドロードも身体強化も能力の底上げをしただけで本質的な戦  
闘能力は武術で学んだものだった。

それはたゆまぬ反復練習により培われるもの。

「そうですね。なれますよ。」

葵衣は頷いて答えた。



### 第32話 それぞれのやり方

ヴァルキリーのメンバーは各地のジュエルクラブで挨拶をして一通り訓練を見るとジュエルたちに歓迎会と称して町に連れ出された。各地の名物を食べ、名所を巡りジュエルとの親睦を深めていく。東北の悠莉以外は。

ジュエルクラブの訓練所は静まり返っていた。

呆然、啞然、驚愕、恐怖、怒り。

感情は様々でありながら声として現れない。

舞台の中心にいるのは悠莉。

足元にはジュエルを手に倒れ伏した岩手。

ジュエルたちが一目置く岩手が為す術もなく倒された現実をジュエルたちは受け止めきれずにいた。

悠莉は立ち尽くすだけのジュエルたちを見回して頷いた。

「あなた方が信頼する岩手さんが倒れても動きませんか。結構です。ヴァルキリーへの反逆はこのような末路を辿ることになると覚えておいてください。それでは今日は解散です。」

悠莉が話を締め括ると初めは戸惑っていたジュエルたちが1人、また1人と出口に向かっていく。

悠莉に近づいてくる者はいない。

向けられるのは怯えた目が怒りに満ちた目。

悠莉はその視線にゾクゾクする気持ちを抱きながら面には表さない。やがて全員が出ていくと足元に倒れていた岩手が服の埃を払いながら立ち上がった。

「酷いですね。本気で殺されるかと思いましたよ。」

「本気のもりで戦っていたらわざとやられたのは岩手さんではありませんか。」

誰もいなくなつた訓練所で2人は殺し合いをしたとは思えないほど

穏やかに会話をする。

「最初はジュエルを持った悠莉様になら勝てるかと思いましたが無理でした。やはりグラマリーの力はすごいですね。」

今のジュエルにグラマリーが使える者はない。インストラクターでさえグラマリーを発現することができなかったジュエルたちなので使えたのは元八重花ジュエルだった桐沢茜だけ。その茜も今はジュエルにいない。

「それにしても悠莉様がヒールを演じるとは意外でした。」

「持論を証明するためには試してみるしかありません。憎しみの対象を限定すればより強い感情を持つことができるはずです。」

悠莉が語ったのはソルシエルやジュエルの事例から導き出したグラマリーを得るための仮説でしかない。

実際にグラマリーを得るジュエルが現れるかどうかを探っているのだ。

そのために苔葉同様自分を悪役としてジュエルたちの感情を煽った。また、唯一グラマリーを得た茜を育てた八重花の育成方法を真似ることでも上手く行くかどうかも検討するつもりでいた。

「それでは明日その事を皆にお話しすればいいですか？」

「いいえ。そんな短期間でジュエルが成長すれば苦労はしません。」

私が帰っても今の話は伏せておいてください。」

「それでは悠莉様が。それに死んだことになっている私はどうすれば？」

岩手はいろんな意味で困り顔を浮かべた。

「私のことは構いません。岩手さんは明日の終わり頃に傷を負った風に装いながら飛び込んできて私に襲いかかれば復活した奇跡のヒーローですよ。」

悠莉は事も無げに告げてクスクスと笑う。

「怖い人ですね。それならせめて今日は私がおもてなしをさせていただきますとしましょうか。」

こうして悠莉は盛岡の町に消えていった。

「さあさあ、死にたくなければ死ぬ気で避けなさい！」

美保の操る翠の光刃、レイズハートが訓練所のスペースを縦横無尽に飛び回る。

美保の指導は「鬼ごっこ」。

美保とレイズハートが鬼となり当たったり斬られたら負けというサバイバルゲームだ。

ジュエルは当然応戦してよく美保を倒せたらボーナスありとなっている。

スマラグドならそれこそ全員分のレイズハート一斉掃射があったが今は3つなので美保も駆け回る。

「ほら、突っ立つてると的にするわよ！」

狂喜の笑みを浮かべながらスマラグド・ベリロスを振るい、隙あらばレイズハートを死角から撃ち込んでくる戦いぶりにジュエルたちは恐れ戦いた。

そして恐怖で硬直したジュエルなど美保にとっては格好の的だった。翠の刃が飛び交い、朱色の輝きが煌々と光を放つ。

「はははは、誰か止めてみなさいよ！」

翠の夜叉はジュエルを圧倒していた。

一方、良子は100人を越えるジュエルを並べてひたすら素振りをさせ続けていた。

「ここはもう少しコンパクトに振った方がいいよ。」

「はい、ありがとうございます。」

良子はその1人1人にアドバイスをしていくがそれが終わったからといって素振りが終わりというわけではない。

サボろうものなら周囲のジュエルがすぐに知らせるといいう味方すべてが監視役の状況は自分と他人に一切の妥協を許さない。

いつ終わるとも知れない素振り続けるストレスと体力と気力の低減がジュエルを追い詰めていく。

「わーっ！」

1人のジュエルが発狂したように暴れだした。

手にしたアルミナを振り回して周囲に斬りかかろうとする。

突然の事態にジュエルたちは手にした武器で応戦することもできずおろおろするばかり。

「きゃー！」

そのうちの1人を標的と定めて狂乱したジュエルが武器を振り下ろした。

「ルビヌス！」

真紅の風が駆け抜けた。

身体強化の2倍掛けという破格のスペックは良子の前に存在する距離を縮める。

アルミナが少女の体に突き刺さるよりも早く真紅の鉾槍が弾き飛ばした。

「ふう、大丈夫だったかい？」

「はい……」

助けられたジュエルにとって良子は王子様のように映り

「なっていないね。素振りやり直し。」

「「えー！」」

他のジュエルにとっては鬼のように見えた。

「赤組、隊列が崩れてるよ！」

「はい！」

「白組はこの隙を逃さない！」

「了解！」

緑里はジュエルを適当に振り分けて紅白戦を行わせていた。緑里の檄が飛びジュエル同士の戦いを繰り広げる。

最前線でジュエルを率いていた緑里は隊としてのジュエルの運用に重きを置いている。

悠莉のように個々の資質を刺激してグラマリーの発現を促すのではなく数としての兵力としてジュエルを見ていた。

だから無理にグラマリーを持たせようとは思っていない。突出した力を持つ者は隊に歪みを生むから。

「白組が優勢。でもこの程度、まだひっくり返せる。」

ひっくり返せなければそこまでだ。劣勢で諦めてしまうような兵では使い物にならない。自分ならあそこはこう動くとかを考え出すと緑里はウズウズしてきた。

まだ戦術のいろはも知らないようなジュエルたちの戦いぶりを見ていられなくなってきた。

それはあっさりと臨界を突破する。

「豊田さんは白組に参加して。ボクは赤組だ！」

「緑里様!？」

困惑した豊田を残して緑里は戦場に飛び込んでいく。

左目に朱色の笑みを浮かべながらヴァルキリーの斬り込み隊長は赤組の劣勢をひっくり返す活躍を見せるのだった。

葵衣が参加しても訓練内容に違いのない関東ジュエル。

ジュエルの引き出しと収納をひたすらに繰り返した後はジュエルを取り出しながらの素振り。

2人一組での組み手。

武器を使用した基本的な戦闘技法の説明と面白くない内容を葵衣と村山は淡々とこなしていく。

休憩時間になると吉葉高校1年でありWVe吉葉店の綿貫紗香が葵

衣に近づいた。

他のジュエルは恐れ多くて葵衣に声をかけることなど出来ない。

「こんにちは。悠莉お姉様と良子お姉様は遠征されたみたいですね？」

「はい。悠莉様は東北、良子様は九州で指導に当たられています。私ではなくお2人のどちらが残った方が良かったですか？」

紗香のことは悠莉たちから聞いていたので葵衣も普通に会話をする。それがこの場にいる人間たちにはひどく特殊なものとして映っていた。

紗香はそんな好奇と嫉妬がない交ぜになったような視線を気にした様子もなく首を横に振った。

「私の目標はお姉様方とチームを組むことです。良子お姉様が攻め、悠莉お姉様を守りとなるなら私が目指すのは射撃です。お2人はタイプが違いますから別のヴァルキリーの方に教えてもらえると勉強になります。」

葵衣は表情には出さず驚いていた。

ここまで明確な目的を持って貪欲に知識を得ようとするジュエルは見たことがなかった。

そして悠莉たちに心酔している姿は桐沢茜に通じるものがあった。

葵衣は紗香の姿勢を好意的に感じた。

「それならば美保様に師事……」

「あり得ません。」  
即答だった。

「あれは私の越えるべき壁、倒すべき敵です。」

紗香は美保への敵対心を糧に槍の形状を持つクォーツを顕現させた。振動波を放つクォーツは紗香の望む射撃型の攻撃に向いている。

（羽佐間様の音震波や超音振は射撃としては少々効果範囲が広いですが、特性は適しています。）

しかし生憎ヴァルキリーにはクォーツ由来のソルシエールは無かった。

当然由良に教授を求めろわけにもいかない。

「特性は違いますが何かありましたら私が相談に乗りますよ。」

「あ、ありがとうございます！」

談笑しているように見える2人を見るジュエルの目には暗い嫉妬の光が凝っていた。

ギン、ギンッ

狭い空間に絶え間なく金属をぶつけ合うような音が響く。

「はああ！」

「このお！」

すべての敵意、すべての殺意が中央に立つただ1人に向けられている。

1人に対してジュエルは100を超す。

それだけの数で一斉に攻めればどれほど強い相手であってもひとたまりもない。

…そうジュエルたちは信じて手に手に武器を取った筈だった。

「な、なんなの！何なのよ！？」

誰かが泣きながら叫んだ。

その悲鳴も怒号と悲鳴に掻き消される。

「あれは…”化け物”よ！」

東北の地でジュエルを得た少女たちはこの日、本物の”化け物”に出会った。

下沢悠莉という可憐な少女の姿をした”化け物”に。

「さあ、どうしました？」

振るわれる2桁に届く刃を悠莉はコランダム製の壁で防ぎ、弾き、いなし、時にはサファイア・ロス・アルミナを用いて無力化する。

全方位からの一斉攻撃も悠莉には容易く防がれてしまいジュエルたちはきつく奥歯を噛む。

「もう一度困んで！」

「あら、良いのですか？私を囲むとどうなるか、もう一度知りたいみたいです。」

悠莉の言葉に指示を出そうとしていたジュエルが呻き声を漏らした。ジュエルたちの初手は全員が一斉に包囲して反撃の隙を与えずに悠莉を倒すというものだった。

完全にヴァルキリーに対する反逆なので本来はジュエルが機能しないところだが悠莉の権限で許可されていることを知らない。

力の所持の決定権を握られているとは知らず、岩手の仇として悠莉に刃を向けたのだった。

悠莉は自身の周りに3枚の障壁を作り上げた。

強固な壁だったがジュエルたちは突き破れると信じていた。

幾十、幾百の攻撃が繰り返され、とうとうコランダムにヒビを入れた。

「もう一息よ！」

「残念ですが、時間切れです。」

上がった土気に水を差すように慌てた様子のない悠莉の声がした。

悠莉はサファイロス・アルミナの切っ先を地面に向けて両手で握ると地面に突き立てた。

「キャスト・オフ。」

悠莉が言霊を紡いだ瞬間、殻が内側から爆発したように飛び散った。砕けたコランダムはガラスの小片のように鋭利な刃物となって全周に撃ち出され、詰めていたジュエルの半数近くがたったの一撃で倒されたのであった。

後は悠莉の独壇場だった。

仲間がやられたことで恐怖を覚えたジュエルの動きは鈍くなり、気持ちを奮い立たせて斬りかかっても1人2人では悠莉のコランダムは貫けない。

「なんで、なんで！」



ガン、ガン

何度も青い障壁にジュエルをぶつけるが今度は傷すらつかない。それでジュエルは気付いてしまった。

最初のヒビは自分たちを引き付けるための餌だったのだと。絶望して手が止まったジュエルに

「がら空きですよ。」

悠莉は障壁を押し出してジュエルを弾き飛ばす。

「コランダムをただ守るだけの壁だと思わないことです。」

こうして全員の戦意が喪失するまで戦いとすら呼べない戦いは終わりを迎え

「なかなか楽しかったですよ。また遊んでくださいね。」

悠莉は返事のない室内に声をかけて微笑むと訓練所を出た。

結局登場のタイミングを逃した岩手が困り顔で悠莉を迎えた。

「これでジュエルクラブの退会者が増えたらどうします？」

「その程度の意味では未来を担うジュエルの名は与えられませんよ。」

悠莉はどこまでも冷徹に這い上がってくるジュエルだけを待つ。

岩手はただ去っていく悠莉の背中を見送るだけ。

こうして指導旅行は幕を閉じたのであった。

### 第33話 熱闘！体育祭大戦

すっかり暖かくなってきた5月も下旬、吉葉高校のグラウンドはそれ以上の熱気に満ちていた。

普段は真面目に常套句を述べるだけ代表生徒がマイクをひっ掴み

「吉校体育祭、始めるぞ！！」

ライブハウスのように威勢良く開会を宣言し

「「おーっ！！」」

空気を震わせるほどの叫びが上がった。

これが後に吉葉高校の歴史に名を残す「熱闘！体育祭大戦」の幕開けだった。

「今年は叶たちが全生徒のやる気を煽りまくったから気迫が違うわね。」

”Innocent Vision”が行っていたソルシエール復活計画の特訓が生徒たちには体育祭の為の特訓と認識され、そのあまりの激しさに各クラスも危機感を抱いて練習に力を入れたというわけだった。

「だけどそれは私たちも同じよ。密かにやっていた特訓の成果を今日こそ見せるのよ！」

「イーツ！」

クラスの男子が一齐に右手を前方に出して奇声を上げた。

全身タイトのあれみたいで気持ち悪いが一糸乱れぬ動作に団結力の高さが窺えた。

男子が戦闘員なら裕子は女幹部といった感じだ。

「今年は参謀の八重花が別のクラスに行ったのが痛手だけど私たちは勝つよ。叶、最後のリレー、任せるわよ。」

今年は皆のやる気が違うので接戦が予想された。

そうなるのと得点配分の高い男女混合リレーの勝敗が大きく結果を左右することになる。

全員の視線が向けられた叶は

「うん、頑張る。」

怖じ気づくこともなくしつかりと頷いた。

それを見てチームリーダーの裕子は俄然盛り上がる。

「さあ、みんな！叶を全力でサポートするわよ！」

「イーッ！」

2年1組の席は異様な雰囲気にもまれていた。

座席の区画を生徒が囲い、中を見せない。

それは武将が戦場に設営する陣のようだった。

参謀・東條八重花は4組の盛り上がりを音に聞いてほくそ笑む。

「裕子たちはやる気ね。無駄なことを。うちには秘密兵器がいるのだから。」

八重花の視線の先では明夜が眠そうな顔で柔軟をしていた。

1組の切り込み隊長・柚木明夜は

「お腹空いた。」

いまいちやる気はない。

それを見て不安を抱く1組生徒たちだが

「優勝したら美味しいものを食わせてやる。」

総大将・羽佐間由良の一言で明夜の瞳に火が点った。

「敵は、蹴散らす。」

「ほどほどにしなさいよ。」

八重花が一応たしなめて怖じ気づくクラスメイトに召集をかけた。

「これから体育祭で勝つための策を授けるわ。」

体育祭優勝ランナーでもある東條八重花は自信に満ちた笑みを浮かべていた。

そしてその間にある2組でも不敵に笑う姿があった。

「無駄よ、無駄。優勝はうちに決まってるじゃない。」  
乙女会の神峰美保である。

ジュエルによる身体強化は普通の少女を超人たらしめる能力を与える。

特訓した程度でただの人が超人に勝てるわけがないと美保は考えていた。

その肩がポンと叩かれる。

「何よ、悠莉。あたしはヒーローインタビューのイメージトレーニングで忙しいのよ。」

悠莉は先を見すぎな美保に苦笑して何故か慰めるようにポンポンと叩いた。

「美保さん。当然わかっていていると思いますが体育祭中にジュエルを使うのは禁止ですよ？一般の方にジュエルの力を披露するのは危険ですから。」

「…。あー、そうだった！」

ようやくその事実気付いた美保は叫ぶが許可が降りることはない。「期待していますね。ジュエルの力を使わず等々力先輩や今日のために特訓を重ねてきた”Innocent Vision”を退けて優勝する美保さんの姿。ふふふ。」

悠莉はクスクスと可愛らしい笑みを浮かべながら去っていった。残された美保は暫く呆然とした後、

「やってやるわよー！」

負けん気を燃やすのだった。

こうして始まった体育祭はもはやスポーツを越えた戦いと化してい

た。

徒競走では他者を押し退けるように腕を使い、長距離走はたとえ体が死んでも精神で走り抜くと言わんばかりに最初から全力で疾走し、障害物競争では自らもトラップを仕掛けていくため收拾がつかない事態になっていた。

「ここに入学して以来一番の盛り上がりだね。」

良子はのんびりとそんな事を言っているが他の生徒にしてみればハラハラドキドキを超越した恐怖によるドキドキバクバク状態だった。「どうして先生たちは止めないんだ？」

1人の良識的な男子生徒がその疑問を口にした。

今の競技にスポーツマンシップがあるとは言えず走行妨害は下手をすれば暴行障害扱いだ。

そんな不祥事を教師たちが見過ごすのかと憤慨して設営テントに目を向けると…そこには見ず知らずの黒スーツサングラスの集団が座っていて黙々と作業していた。

「誰!？」

実は花鳳の暗部である。

もちろん教師陣は初めの徒競走、それ以前に選手宣誓がちゃんと行われていなかった時点で体育祭中止の準備を進めていた。

しかし、いち早くそれに気付いた八重花がヴァルキリーの葵衣と内密に連絡を取り協力を要請、学生として体育祭の中止は望ましくないとして葵衣は要請を受け、行動に移そうとしていた教師陣を暗部により無力化したという訳だった。

もはやここは無法地帯。

勝者が決まるその時まで戦い続けるしかないバトルフィールドだった。

「いいじゃないか、楽しくなってきた。そろそろあたしの出番だね。」

良子は拳を打ち合わせて立ち上がった。

昨年八重花を最後まで苦しめた真紅の獅子がいよいよ牙を剥こうと  
していた。

途中経過で2年の得点は1組と4組の接戦だった。

2組も健闘しているが美保が空回り気味。

そして3年2組、良子のクラスがトップを走っていた。

その結果を見た八重花は親指を噛む。

「やはり等々力先輩が大本命でダークホースね。こっちの予想を超えてくるわ。」

「あれでジュエルの力を使っていんだから正真正銘怪物だな。」

パワーとスピード、そのどちらも持っている良子が次々に勝利を収めトップに君臨している。

それでも1組が善戦しているのは明夜の存在が大きかった。

パワーでは劣るもののスピードで勝る明夜は単純な競争なら負けない。

「期待してるわよ、明夜。」

「奢りのために頑張る。」

その裏で由良が財布の中身を確認してため息を漏らしていた。

「やっぱり八重花たちと等々力先輩が来たね。」

4組も作戦会議。

こちらは男子勢の団結力により得点を維持してきたがスーパープレイヤーがいらない分次点止まりだった。

「つくづく真奈美の怪我が惜しい！」

「いや、あたしにあの2人と同じ活躍は無理だから。」

過度の期待を向けられてもどうしようもないことだ。

それにおそらく何も失わずに今を迎えたとしても今ほど強くはなかったと真奈美は思っている。

失ったもの以上に多くのものを手に入れたからこそ真奈美はここにいる。

「個人競技には強いけどクラスとしての総合力では負けてない。このまま食らいついて最後の種目で勝負をかけよう。」

最後の種目、男女混合リレー。

当然そこには良子と明夜も参戦する。

良子は学年違いなので抑えるのは困難。

1組にはさらに由良と八重花がいる。

これらを打倒して優勝するのは不可能にすら思えた。

女子を中心に諦めムードが広まっていく。

「にはー、今年は相手が悪かったよ。」

久美に至っては完全に諦めていた。

「裕子、このままだと男たちの方にも影響が出るぞ。」

「でも現状を巻き返すいい案なんてないわよ。」

芳賀と裕子も戸惑いを隠せなくなってきた。

こうなればセイバーの力を使ってと密かな決意を抱いた真奈美は

「大丈夫です。」

その優しくも力強い声に震えるほどの感動を覚えた。

全員の視線を向けられても叶は焦らず

「大丈夫。」

安心させるように頷いてみせた。

不安げな表情が、諦めた笑いが、悔しさに歪む顔が、叶の微笑みに溶かされていく。

「今できることを全力でするしかないよ。リラックスして本来の力を出し切ろう。結果はその後についてくるよ。」

どこか達観したようにすら感じる穏やかな言葉。

それはクラスメイトの気持ちを一つにまとめた。

「菩薩だ。菩薩様が参られた。」

誰かがそんな言葉を呟いたが否定はない。

今の叶にはまるで後光が差しているようだった。

「まだチャンスはあるから、頑張りましょう、皆。」  
「猛るような雄叫びは上がらない。」  
「ただしつかりと頷くその瞳には確かな闘志が静かに燃えていた。」

「どういうこと？後半の4組の追い上げが異常よ。」

「ああ、明夜が押されるほどとはな。」

2年1組でも、

「トップだけとまだまだ油断できないね。気合い入れていくよ！」  
3年2組でも2年4組の動きに驚きを見せていた。

「あー、悔しい！」

2組は美保が頑張っただけのものの離されていた。

そして3チームが僅差で最終種目を迎えた。

規律に縛られない今体育祭では特別ルールで上位4チームでの決戦レースとなった。

これにより男女混合リレーを制した者が祭りの勝者となる形となった。

∴2組以外は。

「うちが勝つには1位になって4組が2位に来る必要があるのね。」  
「だが美保はまだ諦めていなかった。」

「私は応援してますね。」

悠莉は参戦する意思はなく観戦しようと考えていたが

「悠莉、ちよつと手を貸してくれない？」

「失礼致します。悠莉様、よろしいでしょうか？先生方が反抗作戦を企てているようです。」

話の途中で海原姉妹に声をかけられた。

悠莉の口の端がわずかに上がる。

「それは、多少手を出しても構わないということですか？」

返答を待たず悠莉は席を立つ。

「問題にならない程度か…あるいは問題に出来ないようにしていた



「だけるなら。」

こうしてヴァルキリーの3人が学生のために暗躍する中、いよいよリレーの号砲が鳴り響いた。

第1走者の男子は差はつかず第2走者の下へ。

そこで会場がどよめいた。

2番手に出てきたのは明夜だった。

良子が意外そうな顔をしている横で由良が胸を張る。

「先行して他のやつらにプレッシャーを与える。八重花の案だ。」

「直接勝負を避けただけじゃないのかな？」

良子の余裕は崩れない。

「行け、明夜！」

「行く。」

バトンを受け取った瞬間に明夜は視界から消えていた。

大地を滑るような低い姿勢で瞬く間に後続を引き剥がしていく。

その姿に第2走者の女子は愕然とするが

「頑張ってください。」

2年4組は叶の声援ですぐにリラックスし持てる力を出しきるべく駆け出す。

「あたしまで引き離されないようにしなさい！」

美保の激励で2年2組、

「あたしを信じなよ。」

良子への信頼で3年2組も持ち直す。

明夜が大きく差を開けて第3走者にバトンタッチ、他3クラスが並んで続く。

「作倉へは俺が繋ぐ！」

その集団からわずかに抜きん出たのは芳賀だった。

「雅人くん、いつけー！」

彼女の声援を受けた分他の男子よりも速い。

観客のブーイングすら力に変えて最終走者の叶に望みを託す。

2年1組は既に由良がかなりのスピードで前を駆けていた。

「頼んだぞ！」

「はい！」

バトンを受け取った叶は正面の応援席に座る体操着姿の琴と目を合わせた。

唇の動きを見てわずかに目を細める。

伝言は

「叶さんの本気、見せてあげましょう。」

叶は静かに一步を踏み出す。

大地を踏み締めた足が力を伝えて体を前に押し出す。

勢いを殺さず左足を静かに付け、上乘せするように前へと蹴り出す力とする。

会場がどよめく。

「なっ、速い!？」

「聞いてないわよ!」

わずかに遅れてバトンを受けた美保と良子が見たのは流れるように速度を上げていく叶の背中だった。

「叶さんに教えていた受け身は力の流れを制する手法。今の叶さんは自分の力の流れの効率的な利用ができるはずです。さあ、生まれ変わった叶さんの姿を見せてください。」

「ハッ、ハッ…」

叶は今までに感じたことのない感覚の中を走っていた。

(苦しくない。体が軽い。)

自分の体が羽根になったみたいに体が前へと自然に向かっていく。風を切る感覚を体感していた。

その風がわずかに乱れる。

気が付くと由良の背中が見えた。

そして後ろからも風を感じる。

「いろんな意味で伏兵だね！」

良子は賛辞し追い抜いていく。

叶は焦らない。

(また。)

背後から禍々しい風を感じて叶はコースをずらした。

「あたしがビリなんてあり得ないわよ！」

朱色の風が吹き抜けていく。

「わ、美保!？」

「馬鹿野郎！」

「勢い付けすぎた！」

弾丸のような美保は2人を巻き込んで転倒した。

それを避けた叶がゴールテープを切り、

「叶が一位よ！」

「くっ、2位は譲らないぞ！」

裕子の歓喜の声でいち早く復活した由良が2位でゴールし、

「体育祭の勝者は、2年4組です!!」

「わああああー!!!」

4組の優勝で体育祭大戦は幕を閉じた。

### 第34話 束の間の休息

大波乱の終局を迎えて大熱狂のまま幕を閉じた壱葉高校体育祭の翌日は振り替え休日。

戦い疲れた乙女たちはこの日ばかりは戦いを忘れて各々の休日を過ごしていた。

由良はベッドから起き出すとカーテンを開けてベランダに出た。

Tシャツにシヨーツだけの格好なのでなかなか際どいが高層マンションの上方階に覗きの目はない。

眠気を朝日で飛ばしながら振り返り

「あー、いい加減、掃除しないとヤバイか。」

部屋の現状を振り返って頭をかいた。

「それでは行って参ります。」

「お土産買ってきますから。」

海原姉妹は徐々に休みが重なったため2人で買い物に行くことにした。

使用人仲間に挨拶をして出掛ける。

「皆様笑っていたようですがやはり変ですか、姉さん？」

普段執事服しか着ない葵衣は以前撫子からプレゼントされたフリルをふんだんにあしらったワンピースを着ていた。

露出がそれほどあるわけではないが恥ずかしいらしくいつもの無表情が若干困り顔になっていた。

「普段とのギャップに驚いたんじゃない？」

対して緑里はジーンズにシャツにジャケットに帽子と男っぽい格好をチョイスしていた。

使用人たちが微笑ましく見ていたのは普段とはあべこべな2人を見

てのことだった。

緑里は躊躇いがちに歩く葵衣の手を握った。

「それじゃあ行こうか、葵衣。」

「はい。」

端から見るとそれはデートのようであった。

美保と悠莉は建川にやって来ていた。

昨日の敗北の腹いせに衝動買い兼衝動食いをすると宣言した美保に悠莉が付き合わされたのだ。

「こうして美保さんはお金と女性として大切なものを失っていくのですね。」

「うっさい！自棄にならなきゃ腹の虫が収まらないわよ。」

一瞬とはいえジュエルの力を人前で使用し、由良と良子を巻き込んで転倒した美保だったが

「体育祭の異様な興奮状態の中でしたのでジュエルの存在は土壇場での潜在能力の発露として問題ないでしょう。」

葵衣はそう判断し、美保への処罰はなかった。

「あそこで突っ込まなければあたしの勝ちだったのに！」

「その場合、ジュエルの私的使用により断罪でしたけどね。」

悠莉の容赦のないツッコミに美保はウツと呻く。

「うっさいうっさい！行くわよ、悠莉。」

「仕方ありませんね。」

何だかんだで仲の良い2人は雑踏の向こうに消えていった。

明夜はプラプラと散歩していた。

陽射しは穏やかで思わずこの場で眠りたくなってしまふような陽気。猫同士の戯れを見つめていた明夜は不意に顔を上げると警戒する猫みたいにキョロキョロと周囲を見回した。

「…あつち。」

方向を定めて歩き出す。

住宅街と大通りの交差点まで向かって歩いていると商店街の方から見知った人物が曲がってきた。

「真奈美。」

「ん？ああ、明夜。こんなところで会うなんて珍しいね。」

真奈美はいかにも部屋着という感じのラフな格好でコンビニの買い物袋を下げていた。

それも当然で真奈美の家は目と鼻の先だった。

「散歩。」

「そうなんだ。…それはそうと…」

真奈美は苦笑して視線を下に。

明夜は買い物袋とは逆の左手に抱えられた紙袋を至近距離で凝視して鼻をひくつかせていた。

「さすがに目ざといというか鼻ざといというか。」

「肉まん？」

「そうだよ。コンビニに売ってたからつい、ね。」

ゴソゴソと紙袋を開けると中には肉まんが3個入っていた。

季節外れの肉まんの存在に明夜の喉がゴクリと鳴り、捨てられた仔猫みたいな潤んだ瞳で真奈美を見上げた。

「欲しい？」

ゴクリと即座に首が縦に動く。

「今日はちよつと由良先輩のところに行くんだ。何でも部屋が大変なことになってるとかで。」

真奈美は本題をあえて伝えずにゆらゆらと紙袋を左右に振る。

「…手伝う。」

「そう？ありがと。」

強かな真奈美は礼を言つと肉まんを1つ手渡した。

明夜は宝物のように見つめて  
パクッ

一口で食べきった。

「それじゃあ準備するから家が上がってて。」

口をもきゅもきゅさせながら頷く明夜。

真奈美は肉まん旅のお供を手に入れた。

「うふふ。」

琴はえらく上機嫌な様子で境内の掃き掃除をしていた。

普段なら一掃きごとにゆつくりとするものがサツサツと早く動いため埃が舞っている。

だが琴はそんなことは気にも止めず同じ場所を掃き続けながら社務所を見ていた。

「ありがとうございます。またお越しく下さい。」

そこには太宮神社には珍しい客の姿と、それを応対するさらに珍しい姿があった。

接客が終わってほうとため息をついた後に琴の方を向いた。

「琴お姉ちゃん、上手く出来てましたか？」

「大丈夫ですよ。しっかり神社の巫女に見えました。」

そう、今の叶は巫女装束を着て仕事に励んでいた。

普段着なれている服だというのに叶が着ただけで琴のテンションは右肩上がりだった。

「特訓のお礼とはいえわざわざ手伝っていただかなくてもよかったですよ。」

「いえ、普段から琴お姉ちゃんにはお世話になっていきますからお手伝いさせてください。」

健気な叶に頬擦りしたくなるほどの衝動に駆られたがそこは理性で御す。

「お昼とおやつは用意しておきますのでそれまでしっかりお仕事を願いますね。」

「はい。」

良子は体育祭が終わったというのにまた走っていた。

「あたしもまだまだだね。もっと鍛えないと。」

特に叶が見せた走りはまだ粗削りながらも良子が理想とする走りに近かった。

今はその姿を自分に当て嵌める形でフォームを修正しているところだった。

吉葉高校の前を通過し太宮神社の前を通ると叶と琴の姿が見えた。

「バイトかな？」

今日のところは用はない。

そのまま通り過ぎて商店街近くまで差し掛かった良子は

「おっと！」

「ッ！」

脇から出てこようとしていた人に危うく激突しかけた。

咄嗟に横に避けたものの女の子は驚いたのか尻餅をついてしまっていた。

良子は女の子を助け出そうとして止まった。

（可愛い子だな。）

歳は同じくらいに見えるが線が細く小柄なので幼く見える。

さらにフリルをふんだんにあしらったワンピースは可愛らしさを助長し、ペタンと女の子座りをして俯いている姿は保護欲を掻き立てるものがあつた。

（この近所にこんな子がいたんだ。吉葉の生徒かな？）

何はさておきいつまでも地面に座らせておくのは忍びない。

ランニングウェアでアスリート用のサングラスまでしているからか女の子は怯えた様子で顔を上げようとしなない。

シャイなのだと解釈して手を差し伸べようとした良子は

「だい……」

「近づくなー！」



女の子が出てきた道から飛び出してきた少年（？）に思い切り腹に飛び蹴りを叩き込まれた。

「ぐふう！」

完全な不意打ちでガクリと膝をつく。

「平気だった？変な事されてない？」

「はい、大丈夫です。」

2人は安否を確認し合うとすぐに立ち上がり良子に警戒しながら小走りに去って行ってしまった。

「うー、危なかった。」

咄嗟に腕を挟み入れたから良かったものの直撃していたら臓物の1つでもやられていたかも知れないほどの威力のある蹴りだった。

良子はナイスキックと呟いて苦笑しながら立ち上がる。

「ヤンチャなナイト様付きか。でも、どっかで聞いたことのある声だったな？」

良子は首を捻るが上手く思い出せず、やがて思い出すことを諦めてジョギングを再開するのだった。

「あら？」

「あれ、八重花？」

由良の高層マンションに出向いた真奈美と明夜は入り口でぼったりと八重花に鉢合わせた。

「八重花って由良先輩の家に行くような仲だったんだ？」

”Innocent Vision”に入ってから対等に話すようになった2人だがプライベートでも仲良くなっていたのは初耳だった。

八重花は呆れたような顔をして首を横に振る。

「違うわよ。ちょっとソルシエル復活計画の提案をね。そういう真奈美たちこそどうしたのよ？」

「遊びに行くがてら部屋の掃除の手伝いをね。」

八重花は物好きねと呆れたように呟いて先に歩き出したので2人も後続く。

エレベーターで20階まで上がって羽佐間とプレートに掲げられた家の前に立つ。

呼び鈴を鳴らすと中から足音が聞こえてきてドアが開いた。

「ああ、お前らか？何か用か？」

昼もとうに過ぎたというのに由良はシャツパンツの寝起きスタイルのまま出てきた。

気の弱い男なら鼻血を噴きかねない無防備な色気があった。

「私は特訓の件よ。」

「あたしと明夜は遊びと掃除の手伝いに来ました。」

「きました。」

「あー…」

由良はバツが悪そうにポリポリと頬を搔くとドアを開け放った。

「とにかく入ってくれ。」

「「お邪魔します。」」

明夜にとっては久しぶり、八重花と真奈美にとっては初の由良の部屋。

そこは

「「ごみ置き場。」」

明夜が入って即答するくらいにごみごみしていた。

かつて”Innocent Vision”が生活していたときのモデルルームみたいな美しさはない。

調度品類はほとんど増えていないので散らかっているのは服や食べ終えたゴミがメインだった。

「やろつやろつと思ってはいたんだがな。」

由良も自分のずほらさに呆れたように頭を搔く。

「真奈美、肉まん1つじゃ足りない。」

明夜の意見も尤もだ。

明らかに肉まん1つで手伝うのは割に合わない。

しかし真奈美としてもここまでひどいとは思っていなかった。自分の行動の浅はかさをちよつと悔いており上乘せするべきか悩んだ。

「片付けてくれるんなら夕飯を奢ってやるぞ。」

由良の提案に明夜の瞳に火が入った。

「やる。」

「由良先輩もやるんですよ?」

「へいへい。」

「八重花もね。」

「…ふう。ここじゃ打ち合わせもできないから仕方がないわね。」

真奈美が由良と八重花も巻き込んで羽佐間宅の大掃除が開始された。

「よくもまあ、半年足らずで汚したもんだな。」

「そういうのは自分で言わないものよ。」

”Innocent Vision”で生活していたときの姿を知らない八重花と真奈美は呆れるしかないがそれを知る明夜はあまりの惨状に結構絶望していたりする。

「…ここはきつと違う家。」

確かに”Innocent Vision”の苦しくも楽しかった潜伏生活の思い出の地がごみ置き場みたいになっていればショックを受けようものだった。

尤もここは由良が今なお生活している場でありいつまでもモデルルームみたいな状態を維持しておくことは難しいという現実もあるわけだが。

「カップ麺、お弁当、パスタ、ピザ…ゴミを見ていくとその人の生活習慣が見えてくるものね。」

食品ゴミを中心に集めていた八重花が楽しげに呟く。

「1人身で自炊を続けられるのは料理が苦じゃないやつだけだ。俺は絶対無理だ。」

何だかんだで綺麗になった部屋のソファーに全員ぐでつと身を預ける。

「つ、疲れた。」

「これからは定期的にやりなさいよ?」

「前は綺麗だったんだがな。」

「あの時は、陸がこまめに掃除してた。」

この家に引きこもっていた陸が掃除をしていたこと自体は別段驚くべき事ではない。

しかし、その前提条件を知らない者たちにとっては無視できる内容ではなかった。

「りくが…」

「掃除をしてた?」

それはすなわち同棲あるいは通い妻的なものを意味している。

八重花と真奈美はユラリと立ち上がると由良たちの前で立ち止まった。

「ど、どうした?」

2人の雰囲気の違いに引きながら尋ねる。

「さっきの話、詳しく聞かせてもらいましょうか?」

「前は高級マンションのモデルルームみたいなの…」

「そっちじゃなくてりくが生活していたって話よ!」

痺れを切らした獣がニヤーツと由良たちに襲いかかる。

「うおっ!?! やめる!」

「くすぐりたい。」

「りくー。」

「教えれー。」

乙女たちは暫くソファーの上で獣的なじゃれ合いを展開したのだった。

「すう、すう…りくう…」

「はん、ば…んん…」

暴れ疲れた2人は陸も眠っていたベッドで2人仲良く寝ていた。

” Innocent Vision ” の思い出の一部を吐かされた由良たちもソファーに深く背中を預けている。

「まったく、ひどい目にあった。」

「あれくらいなら優しい方。」

何しろ以前の八重花なら嫉妬の炎でこのマンションごと焼き付くしかねなかったのだから明夜の言う通りだった。

「…。」

「…。」

沈黙が降りる。

居心地が悪いわけではない。

久々にあの頃の話をしたため過去のことを思い出していた。

「すごく、懐かしい。」

「ああ。俺と明夜、陸と蘭、4人で暮らしたな。」

「楽しかった。」

「そうだな。俺もああいうのは初めてだった。」

「…また出来る？」

表情の変化に乏しい明夜が不安げに尋ねる。

由良はフツと笑って明夜を隣に座らせると頭に手を置いた。

「当たり前だ。陸も蘭も帰ってくる。」

「ん。」

明夜は小さく返事をする。と由良の肩に頭を乗せて寝息を立て始めた。

こうして乙女達の休日は静かに暮れていった。

### 第35話 乙女会の危機

上も下も左も右も前も後ろも、”自分”すら存在しない闇の中。刹那なのか永遠なのかもわからない世界。

その闇の中に微かな光が生まれる。

それは偶然か必然か…あるいは運命か。

その光に照らされてようやく”自分”が”ここ”にいると知った。

”ここ”にいる”自分”に気付いたことで全てを思い出した。

未練があつた。

そしてまた未練ができた。

どちらも根源は同じ。

だけでもういい。

このまま光を手離して、”自分”を手離せばこの上も下も左も右も前も後ろもない世界に溶けて消える。

それでいい。

それが正しい。

…だけど、できなかつた。

光を離すまいと抱き締める。

とても悲しい。

とても悔しい。

”ここ”は嫌だ。

そんな思いが届いたのか、一瞬にして無限の無音の世界に”声”が…聞こえた。

振替休日が開けた翌日、1時限目の授業は臨時の全校集会となった。

「本日、集会が開かれた理由を皆さんは理解していると思います。

先日の体育祭についてです。体育祭はこの吉葉高等学校が開校した

年から行われてきました。…」

校長は長年の伝統ある体育祭が正しく行われなかったことを嘆かわしく思うと述べた。

「歴代の先輩方が先日の体育祭を見てどう思うでしょうか？」

笑うんじゃないだろうかと思う生徒もいたが大半は熱狂の昂りも1日経ったことですっかり冷めて冷静になったことで恐縮して黙っていた。

「学生の自主性を重んじることは教育上重要であることは確かです。しかしそれは規則の範疇での自由であり、無秩序な行動を容認するものではないことを理解してください。」

校長は怒りよりも悲しみが大きかったようでも落ち着いているというよりは沈んだ様子で話を終えた。

次に出てきたのは厳しいことで有名な生活指導教諭の中谷。

40代半ばの恐持ての体育教師だ。

「学校を遊び場と勘違いしている生徒が多い！」

地声がでかいためキンキンと耳に響くマイクの音も気にせず普段から溜まっていた鬱憤を晴らすように叫ぶ。

「男子は丸刈り、女子はおかつぱで十分だろう。それがロン毛、金髪、化粧にアクセサリなんて色気付いて。」

明らかに今回の件と関係ない上に戦争直後クラスの古い考え方のため、さすがに学生たちも反感を抱き始めるが行動に移るまでには届かない。

言いたいことが終わって無駄にやり遂げた様子の中谷が退くと今度はいかにもきつそうな眼鏡のPTA会長が入れ違いで壇上に上った。「私は悲しいです。」

その言葉から始まったのは自分の息子がいかに優秀だったか。

それなのに程度の低い友人と名乗る輩によって爛れてしまったと涙ながらに語っていた。

「子供は素直に大人の言うことに従い、正しく健やかに成長していくべきなのです。」

そんなだから子供が反抗するんだと当の息子にさえ思われるほどで学生の誰一人として無言の否定をしていた。

それには気付かずPTA会長の無駄に長い話は終わり、最後に近隣住民代表まで出てきた。

「うるさいんじゃない！」

大音響の叫びだったがこればかりは事実なので頭を下げるしかなかった。

こうして延々と説教が行われた。

大半の生徒はすでに疲弊していて終わりが見えたことで安堵していた。

最後にもう一度中谷が壇上に上がる。

「自分達がいかに愚かなことをしたかわかっただろう。最後にごめんなさいと頭を下げて謝罪をしたら終わりにしてやる。」

かなり傲慢なやり口で当然反感を覚える生徒もいたが一度の謝罪で説教が終わるならと我慢する。

中谷の合図で

「ごめんなさい！」

大音響の謝罪が行われた。

これで許しが出れば炎天下での説教もようやく終わると誰もが思っていた。

だがいつまで経ってももういいという声は聞こえない。

頭を下げたままの生徒たちが訝っている

「どういうつもりだ？」

低く怒りの滲み出す声がマイク越しに聞こえてきた。

生徒たちが顔だけを上げて周囲を見ると頭の下げられた中にちらほらと立ったままの生徒がいた。

3年2組等々力良子。

3年3組海原葵衣、海原緑里。



3年5組太宮院琴。

2年1組東條八重花、羽佐間由良、柚木明夜。

2年2組神峰美保、下沢悠莉。

2年4組芦屋真奈美、久住裕子、作倉叶、中山久美、芳賀雅人。

「ヴァルキリーと”Innocent Vision”、他数人が浮かべる表情にこそ多少の違いはあっても頭を下げようとはしていなかった。

首謀者格に反省の色が見られないことに中谷は激怒して顔を真っ赤に赤らめた。

「羽佐間由良！この件の首謀者はやはり貴様か！」

中谷と由良の相性はすこぶる悪い。

魔女にソルシエールを与えられる前から目付きが悪くケンカを吹っ掛けられることが多かった由良は幾度となく中谷に呼び出されてはあることないこと何でもかんでも説教されてきた。

当然由良が黙っているわけもなく真っ向から対立、ソルシエールを手に入れた頃は殺してやろうかと考えたこともあったが、偶然にもその頃中谷は盲腸で入院していたため難を逃れたという悪運の強い相手であった。

「俺は学生として体育祭を楽しんだだけだ。文句を言われる筋合いはない。」

由良の言うように悪のりこそしたが別段特殊な悪いことはなにもしていない。

普通に競技に参加しただけだった。

「信じられるか！どうせ相手を脅したりしたんだろう？」

「…。」

ノーコメント。

由良が脅す気はなくても同じ種目になっただけで棄権した生徒は数人いた。

バツが悪いのではなくちょっと落ち込んでいたりする。

「それから等々力良子に海原！乙女会だかなんだか知らんが率先し

て悪事を働くとはずいぶんとなつてない集まりみたいだな？」

元々花鳳撫子の名を使って半ば強引に教室を確保し設立した経歴を持つ乙女会は教師からの印象が悪くなかった。

それでも撫子が在学中に不用意なことを言つて花鳳グループに睨まれては敵わないと黙認してきた。

撫子の卒業と同時に乙女会を解散させる方向で動いた教師たちだったが乙女会ならびに生徒たち大半の署名によつて存続を認めざるを得ない状況に追い込まれてしまったのであった。

そういう理由から学校側とヴァルキリーは対立していると言えた。

「…。」

良子は腕を組んだまま中谷を睨み付けるように見ながらも黙っている。

「お嬢様の道楽で作つたクラブなど学内には必要ない。さつさと解散してしまえ。」

常に乙女会との対立の最前線にいた中谷はここぞとばかりに糾弾していく。

「お嬢様の道楽…」

撫子の作つた乙女会への侮辱に海原姉妹の不平を買つた。

ヴァルキリーのメンバーが目で会話し、最後に良子が頷いた。

「何をやる気だ？」

「さすがにジュエルではないと思うけど、何かしら？」

由良と八重花が小声で話している間に事態は動いた。

「みんな、道を開けてくれ。」

良子がそう願い出ると生徒が左右に移動し朝礼台までの道が築かれた。

教師が指示してもここまで迅速に動くことはない。

良子はその中央をしっかりとした足取りで進んでいく。

「な、何をやっている！まだ話は…」

「話というのなら学生の言い分も聞いてもらわないといけないと思いますよ？」

朝礼台の前に立った良子は見上げるように中谷に告げる。

だがその表情に負い目も怯えもなく、上に立っている中谷の方が気圧されるほどに自信に満ちていた。

「よっ。」

軽く跳躍して朝礼台の上に飛び乗る。

そのままくると反転すると

「それじゃあ壱葉高校に乙女会が必要かどうか話し合おう。」

マイクも使わず全員に向けて呼び掛けた。

「何を勝手に…」

「中谷先生。大人の都合じゃあたしたちは納得しませんよ？本気で潰したいならちゃんとした理由を出してください。」

良子は腰に手を当てて不敵に笑う。

「…いいだろう。そっちの言い分を聞いてやるうじゃないか。」

中谷も不服そうながら良子に相對する。

「乙女会は女の子たちに淑女としての礼節を教えるクラブです。そののどこがいけないんですか？」

あまり頻繁ではないが乙女会主催でマナー講座を開いたりする。

「そんなもの教師が教えればいい。」

「…って言ってるけど？」

良子は視線を公聴している生徒に向ける。

「そんな授業ないじゃん。」

「それに先生だと偉そうだし。」

「乙女会の方々優しく丁寧に教えてくれるわ。」

すると女子生徒からの援護射撃。中谷は腕を振り回して黙らせる。

「マナーなど社会に出てから知ればいい。以上！」

横暴だとブーイングする生徒を一喝して黙らせた中谷は反撃に出る。

「乙女会の部室だがあれは誰の許可を得て使っているんだ？」

「学校に決まっているでしょう？」

いくら何でも学校に認められずにクラブとして活動できるわけがない。

当然許可は得ていた。

だが中谷のいやらしい笑みは消えない。

「それなら顧問は誰だ？」

「？あれ、そう言えば誰だ？」

今更ながら良子はその事実に首をかしげた。

クラブなら当然監督する教師がいるはずである。

だがヴァルハラに顧問はおるか他の先生が入ったところも見たことがない。

「顧問のいない部活を認めるわけにはいかないな。」

中谷は乙女会の粗を探してようやく見つけたとおきの弱点を持ち出してきたためすでに勝った気であるようだった。

「ふむ、顧問：？」

良子がどんなに首を捻ってもそんなものは出てこない。

中谷の笑みはますます強まる。

「それだけじゃない。部の活動報告書に構成員名簿、提出書類が足りないようだが？」

書類関係は他の部活でも未提出や不備等の大小問題はあるので職員たちもそれほど神経質にチェックするものではないのだが中谷は調べていた。

他人を蹴落とすための努力を惜しまない困った人物である。

「良子お姉様、しっかりしてください。」

「等々力先輩、ひねり出すんです。」

紗香や他の男子の声も聞こえるが良子はもう体を90度傾けるように首を捻っているがどれも記憶になかった。

「それなら乙女会は解散……」

「失礼します。」

「！？」

突然の聲に中谷が振り返るとそこには紙束を手にした葵衣と

「校長？」

吉葉高校校長が申し訳なさそうに立っていた。

「こちらが乙女会の構成員名簿です。人数が変動する時期でしたので安定するまで提出は控えていました。こちらは教室の利用申請書でこちらが昨年の活動報告書です。」

葵衣は一枚ずつ書類を説明しながら手渡していく。

よく見れば書類には学校指定の印がされており正式に受理されたことを示していた。

「ちょ、ちよつと待て！これはいったい誰が……」

「そしてこちらが乙女会の顧問の先生となります。」

葵衣は最後に校長を差しした。

中谷の口が半開きのまま固まる。

「すまないね、中谷君。言いそびれていたよ。」

いろいろと特殊なクラブであるため書類を校長が保管していたのである。

「さらに乙女会の存続理由を提示させていただきます。乙女会が吉葉高校に設立して以来女子生徒の受験者数が増加しています。」

葵衣が渡した紙にはここ十年の吉葉高校の入学者数のデータ。

3年前、つまり撫子が入学して乙女会を作った翌年から女子の受験者は倍になっており、男子の方も増えていた。

花鳳撫子のネームバリューであることは明白であった。

「近年少子化の影響で廃校になる学校も増えてきたと聞きます。乙女会の解散は花鳳撫子お嬢様の名を吉葉高校から消し去ることと同義です。果たしてその後受験者数を確保する手立てがありますでしょうか？」

葵衣の言うように

「私、乙女会に憧れて吉葉高校を選びました。」

「わたしも。」

「あたしもです。」

現在在学している学生たちは乙女会が設立し、受験者が増えた後の

世代。

それがすべて葵衣のデータを補完した。

「それなら乙女会がなかったらどうかかな？」

良子が尋ねると

「選びませんでした。」

全てではないが多くの子が声を上げた。

顧問はおり、書類は不備なく書かれており、将来的な学校経営にまで切り込まれ

「……」

何より校長はもとより他のどの先生も助けに入ってはくれない。

結局乙女会に反対し、花鳳に抗おうとするものは中谷を置いて他には誰もいなかったということだった。

「それじゃあ乙女会はこのままって事でいいですね、中谷先生？」

「…勝手にしろ。」

中谷はがつくりと肩を落として朝礼台から降りた。

良子と葵衣は勝ち誇ることもなく壇から降り、

「これで全校集会を終わります。」

最後まで残された校長の言葉で集会は閉会となった。

こうして乙女会の危機は去り、以降文句を言う教師はいなくなった。

そして

「頭下げなかったけど怒られなくてよかったよー。」

「おー、よしよし。よく頑張ったね。」

集会が終わった後叶が涙目になったのを親友たちが宥める光景が確認された。

### 第36話 監視者の目

学内にオーの手の者がある。

真奈美によりもたらされた情報により”Innocent Vision”は表面上は普段通りに警戒を強めていた。

すでに警戒を続けて1週間ほどになるがオーの襲撃はなく学内でも不審人物は見つかっていない。

「顔が判別できていれば一発なのに、惜しいわね。」

八重花は「エクセス」を用いて探索しているが芳しい結果は得られていなかった。

さすがに顔不明、名前不明、学年不明では壱葉高校に在学する女子約300人、真奈美の見た背格好から絞り込んだとしても100人程度の候補がいる。

「一応手分けして”Innocent Vision”で探りを入れては見たが望ましい結果は得られなかった。」

「さすがに潜伏しているだけあつて普段は爪を隠しているわよね。」  
「そういう意味で言えば”Innocent Vision”もヴァルキリーも違くない。」

「日常”の中に”非日常”を隠しているのだから。」

せめて八重花が遭遇していればもう少し特徴なりを判別できたかもしれないが真奈美の代わりに遭遇したら今頃墓の下だっただろうか  
ら贅沢は言えない。」

「あの人型の闇が化けたとは考えにくいわね。やはりファブレのようにオーを生み出した張本人と考えるのが妥当かしら？」

「八重花、コーヒーとお菓子貰ってきたよ。」

思案中の八重花の部屋のドアが開いてお盆を手にした真奈美が入ってきた。

「ありがとう。とりあえずコーヒーだけでもらうわ。」

「了解。」

真奈美はテーブルにお盆を置くとコーヒーをパソコンデスクの上に置く。

自分の分は手に持ったままパソコン画面を覗き込む。

「進展は？」

「思わしくないわ。少なくとも真奈美が判別できない相手を私が見つけるのは難しいわね。」

八重花は画面に候補に絞った女子生徒の写真をずらりと並べているが真奈美がピンと来る相手はいない。

「せめて声のデータでも取れていれば違っただけど。取ってないわよね？」

「どうやって取るのかもわからないよ。」

ふむと顎に手を添えると八重花は机の引き出しから無造作に置かれたICレコーダーを取り出して再生ボタンを押した。

『八重花、コーヒーとお菓子貰ってきたよ。』

それは真奈美が部屋に入ってきたときの台詞だった。

「簡単でしょ？」

「…。」

真奈美は若干犯罪者を見る目を八重花に向けるが当人は悪びれた様子もなく女子の並ぶウィンドウを閉じた。

「それに聞いた感じだと袋を頭から被ったみたいにくぐもった感じに聞こえたよ。」

ボイスチェンジャーまではいかないでも声の判別は難しいのではないかという真奈美の発言に八重花は答える代わりに別のアプリケーションを立ち上げた。

「声紋認証っていうのがあるのよ。それにイントネーションの癖や声量も判断材料になるわ。」

さつき採取した真奈美の声と以前どこかで取ってあった真奈美の声紋パターンを抜き出してピークを重ねると当然ながら一致した。



「はー」

真奈美は最先端の科学技術に、そして何よりそれを自宅のパソコンで再現する八重花に関心とも呆れとも言えない声を漏らした。

「八重花、将来科捜研に就職しなよ。」

「ふふ、考えておくわ。」

真奈美の褒め言葉に微笑みを浮かべて八重花は伸びをした。

そのまま天井を見上げる八重花の瞳は頭の中に描かれた構想を眺めている。

「情報が足りないなら…集めるしかないわね。」

叶は保険委員会に参加していた。

先日の体育祭を例に取り上げてああいった場合の対処法がレクチャ―される。

真面目にノートを取っていた叶はふと視線を感じて振り返る。

振り返った叶を訝しんで目をむけてくる生徒はいたがすぐにノートに戻ってしまった。

「？」

叶も判別がつかないものをいつまでも見ていられないので前に向き直る。

殺気や敵意といった類いの視線ではなかった。

どちらかと言えば好奇に近いものだったがあいにくそんな目を向けられる謂れはない。

（もしかしてオーが監視してる？）

あり得ない話ではない。

オーが1匹いたらあと10匹はいると考えた方がいいという感じの相手なので警戒しすぎるということはない。

（やっぱり見られてる。）

あまり気配や視線に過敏な方ではない叶でさえはつきりと気付いた。相手はそれほど尾行や監視に長けてはいないように思えた。

(みんなに連絡…)

ここは協力を求めて犯人を突き止めようと考えたところで先日の特訓を思い出す。

(こうやってみんなに頼ってばかりじゃ駄目だね。これは私が何とかしなくちゃ。)

1人で捕まえて功績を、ではなくみんなの邪魔はできないという考え方は実に叶らしい。

(頑張るよ。私も”Innocent Vision”の一員なんだから。)

こうして叶の監視者追跡作戦が密かに開始されたのであった。

「これで本日の委員会を終了します。各クラスへの配布資料を受け取っていただくさい。」

委員長が閉会を告げると会議室はにわかに騒がしくなり早く帰りたい委員が我先にと資料に群がっていく。

叶は席から動かず荷物を纏める振りをしながら周囲を見ていた。

(早く帰る人たちは違うよね。)

今は騒がしくて視線は分かりづらいがまだ見られているように感じる。

今振り向いてしまうと見ていることがバレてることに気付いて逃げてしまうかもしれない。

あくまでも気付かない振りをしながらどうにかして相手を逃げられないように追い込まなければならぬ。

(とにかく周りが落ち着くまで待とう。)

多くは委員会が終わると帰っていつてしまうのだが中には集まって雑談を始めてしまう人たちもいるためなかなか視線の主の特定がでない。

「作倉さん、ちょっといいですか？」

「は、はい？」

呼ばれて顔を上げると委員長が立っていた。

インテリ眼鏡の好青年といった風貌で穏やかな性格から女子に人気があるらしい。

叶はよく分からなかったが裕子がそう言っていた。

「実は配布用のプリントの部数を間違えていたようで足りなくなっ  
てしまいました。すみませんが印刷を手伝ってもらえませんか？」

まだ結構な人数が残っているから1人では大変そうだった。

「はい、いいです…」

快く了承しようとしたその瞬間、明らかに視線が強まった。

(ツ！)

驚きを押し込めて平静を装う。

幸い委員長は叶の変化に気付かなかつたらしく

「それではすみませんがコピー室まで行きましょう。」

「はい。」

叶は返事をして席を立つ。

先程強く感じた視線はまた弱くなったが確実に叶に向いていた。

放課後の廊下を男女2人で歩く。

これが”Innocent Vision”の仲間や裕子たち、琴  
なら雑談をしながら楽しく移動でき、陸だつたらちよつとしたデー  
ト気分でドキドキかもしれなかったが残念なことに相手は顔見知り  
程度の委員長。

「どうして私に声をかけたんですか？」

と相手が気があった場合にはしどろもどろになりそうな質問にも

「こう言つては失礼かと思いますが一番時間を持て余しているよう  
に見えたので。」

となんとも面白味にかける回答が得られた。

人通りも疎らな廊下を歩く。

だが確実に背後からの視線は向けられていた。

( 追いかけてきた。今なら振り返れば正体が掴めるかも。 )

叶は振り返るうとして

「あ、そういえば……」

タイミング悪く委員長が雑談を振ってきたのでタイミングを逸してしまった。

そうしているうちに直線の廊下が終わり階段へと差し掛かる。

「ん、カナ、何やってんだ？」

「あ、由良お姉ちゃん。」

「ッー!!」

また屋上に居たらしい由良がちょうど上から降りてきたところだった。

初めはお姉ちゃんは恥ずかしいと言っていたが数日で慣れてからはすっかり由良お姉ちゃんに定着していた。

琴が少し拗ねているようだったが叶にはどうしたのかよく分からなかった。

そして何故か委員長がビクリと震えていた。

由良は隣に立つ委員長に気付きつつも特に関心がないのかすぐに叶に目を向けた。

「別の男に乗り換えた訳じゃないだろうが、どうかしたのか？」

瞳がわずかに細められた。

これが脅迫に類する物だと耳にすれば一瞬で拳を叩き込みそんな感じだ。

「委員会の資料のコピーですよ。由良お姉ちゃんはどうしたんですか？」

それを聞いた由良はあからさまな警戒の気配を解いた。

「ヤエはマナとさっさと帰ったし明夜もいつの間にか居なくなってたからな。たまには屋上で昼寝だ。」

叶は屋上で授業をサボってたんじゃないかと思っていたので

( 言わないでよかった。 )

と内心ホッとしていた。

「それじゃあ俺は帰るが、気を付けるよ?」

色んな意味に取れる忠告は”Innocent Vision”の中ではヴァルキリーかオーについてと決まっている。

少なくとも隣に立つ男に襲われるなよではない。

尤もオリビンを持つ叶ではあるが戦闘能力は低いので襲われたら危険ではあるが。

叶が頷くと由良は手をヒラヒラ降りながら階段を降りていった。

「すみません。お待たせしました。」

「あ、いや、大丈夫だよ。」

委員長は少し慌てた様子で眼鏡を押し上げた。

「作倉さんは羽佐間さんと仲がいいのですか?」

「そうですね。仲はいい方だと思います。」

”Innocent Vision”のことを明かすつもりはないが仲良くしてもらっているのは明らかなので隠すようなことでもない。

「…彼女のようじゃこいい女性はこういった男性を好むのだろうか?」

委員長がこつこつという話題を振ってくるのは意外だったが叶は聞かれた以上考える。

だが考えるまでもなく浮かぶのは陸の事だった。

「心も体も強い人だと思いますよ。由良お姉ちゃんを色んな意味で支えてあげられる人です。」

由良の名を知る者の大半は彼女を孤高の一匹狼だと思っている。

だがその本質は姉御肌で仲間思いで意外と傷付きやすい心を持っていたり妙に可愛らしいところがあつたりと個性豊かな普通の女の子ではない。

それを理解してあげられればあるいは…と考えたところで陸には敵わないと思いついて続きは口にしなかった。

「強い人、か。」

委員長はその言葉を深いため息と共に出したがその真意を問う前に

目的のコピー室に到着した。

コピー自体は数分だったがやはり少々かさ張るため2つに別けて少ない方を任された。

「少し遅くなったようです。皆さんを待たせるのも悪いので急ぎましょう。」

1階の階段のところで委員長が提案してきたとき叶はこれをチャンスだと思った。

(今角を曲がったからまだ監視の目は追いついてない。)

「あのお、トイレ…なので先に行きます!」

叶は宣言するのが恥ずかしくて言い切るや否や階段を駆け上がった。そのまま会議室のある2階を通りすぎて階段半ばに身を潜める。

「無理に我慢させてしまいましたか。もっと気を配っていればよかったですね。」

階段を上ってきた委員長は叶には気付かず、自分の行動を反省するいい男だった。

(監視している人もすぐに追いかけてくるはず。ここで待っていて犯人を見つける。)

幸いにももう校内に残っている生徒は多くない。上がってくる生徒が監視者である可能性が高い。

叶はじつと息を潜めて上がってくる人物を待つ。  
1分、2分…3分経っても誰も上がってこない。

「あれ?」  
2階に戻ってもやはり階下に人の姿はない。

「…失敗かな?」  
いつまでも戻らないわけにはいかず叶は肩を落しながら会議室に向かう。

すると会議室の向こうから歩いてきた男子に声をかけられた。

「こんにちは、作倉さん。」

「え？…あ、黒原君。」

それは去年クラスが一緒だった黒原策だった。

「こんなところでどうかしたんですか？」

叶が首を傾げて尋ねると黒原は悲しそうな顔をした。

「…2年6組の保険委員だから。」

（そうだったんだ。）

保険委員として何度も委員会に参加してきたが全然気付いていなかったことは流石に言わないでおく。

「それで、このあと…」

「ああ、作倉さん、戻られましたか。資料ありがとうございました。」

黒原が何か言おうとしたところで話し声を聞き付けた委員長が部屋から出てきて遮られた。

叶は手に持っていた書類を渡して会議室に入る。

「黒原君も入らないとだめですよ。」

「う、うん、わかった。」

どこかおどおどした様子の黒原を不思議に思いながらも叶は特に尋ねることもなく席に戻る。

（結局監視してる人は捕まえられなかった、はあ。）

それどころか監視者の姿も見えていない。

（やっぱりみんなに助けってもらえばよかったかな。）

視線は今も続いている。

悪意や敵意ではなく、しかし常に見つめられている不快感のある目。その目はただじっと叶を見つめているだけだった。

「…。」

その監視者のさらに後ろ、こちらは監視していることを気付かせない本物もまた静かに叶を見つめていた。

### 第37話 スニーキングミッション

葵衣は自室のパソコンを使って各地のジュエルクラブの活動報告に目を通していた。

（ジュエルクラブの人員の増加は開店当初に比べて下火になってきたとはいえいまだ増加しています。）

参入時期の違いによるジュエルの錬度の違いは問題ではあるがそこは各地のインストラクターが階級分けしている。

階級ごとの訓練メニューをこなしていれば問題なかった。

（しかし…）

別の問題もある。

各地のインストラクターからの連絡に添えられた言葉

「敵が現れず士気が落ちてきています。」

それはヴァルキリーにも言える問題だった。

（オーは常に”Innocent Vision”を襲撃しているようです。姉さんを除けばまともに交戦したジュエルは皆無。各地のジュエルに至ってはオーの姿すら見たことがない現状。戦う相手が見えずただ訓練を繰り返す日々では確かに士気を維持するのは困難でしょう。）

ヴァルキリーのすぐ近くには”Innocent Vision”という敵が存在するがこちらでも武力を用いて相手をするには弱いため逆に手を出せない状態にある。

いつでも潰せるという意識が戦闘意欲を削いでいるのである。

「どう対処するべきでしょう？」

近隣ジュエルとの模擬戦闘訓練や結束を高めるための慰安旅行など手段はいくつかあるが各員の日程調整や移動手段の確保、そして何より資金の問題がある。

1000人近くの人を動かす、宿や娯楽を確保するのは膨大な資金がいる。



一度や二度なら許容されるかもしれないが味をしめて何度も要望を受けるようになっては厳しくなってくる。

「ジユエルの士気が高まり、かつ予算の支出を最小限に留める方法ですか。」

「それならやつぱりヴァルキリーが出向くことじゃないかな？」  
突然聞こえてきた声だったが別段驚いた様子も見せず葵衣は振り返る。

「ちゃんとノックはしましたか、姉さん？」

「したよ。葵衣が気付かなかっただけ。」

本来ノックとは中の相手の様子を窺うものなので葵衣が気付かなかれば意味がないのだが、葵衣は小さくため息をつくだけで諦めた。

「ヴァルキリーの出張ですか。」

「そう。1000人動かすよりは5人の方が予算も手間もかからないし、ボクたちが行けばやる気出すよ。」

緑里にしては、というと馬鹿にしているように聞こえるが確かにすべてを解決させる有効な手段だった。

「明日皆様に予定を窺う必要はありませんがまた週末に予定しておきましょう。」

コンコン

予定が決まったところで部屋のドアがノックされた。

「はい、どちら様でしょうか？」

「私よ。」

そう言っただけでドアを開けて中に入ってきたのは撫子だった。

「何故かそこで撫子は立ち止まった。」

「ああ、ええと、お邪魔だったかしら？」

緑里はふざけてベッドに入って上体を起こしており、葵衣は一仕事終えて立ち上がるうとしているように見えた（実際は来客に対応しようとしただけ）。

だが

……  
「ふう、やっと終わったぜ。」

「お疲れさま、布団は暖めておいたわ。」

「気が利くじゃないか。だけどせっかくなら君に温めてもらいたいな。」

「やだ、もう、ふふふ。」

「ははは。」

……

みたいな妄想が撫子の頭の中を駆け抜けたのだ。

もちろん撫子がそんな妄想をしているなどは夢にも思わない緑里と葵衣は顔を見合わせて不思議そうな顔をする。

「ジューエルクラブへの対応を話していただけですので問題ありません。」

「そう。そうよね。」

撫子はそう自分に言い聞かせるように室内へ入ってきた。

その顔が若干残念そうに見えたが2人にはなんのことか分からない。

葵衣は立ち上がり撫子の座る椅子を然り気無く用意する。

「ありがとう、葵衣。」

「はい。」

葵衣は礼をすると対面に腰を下ろす。

「どのようなご用件でしょうか？」

緑里もベッドから椅子に移動して聞いている。

撫子は頷き

「太宮院琴さんを拿捕しましょう。」

至極真面目にそう切り出した。

交渉が決裂したことは聞いていた2人もその詳細を聞くと呆れやら恐れやらがなない交ぜになった感情を抱いた。

「未来視の力を持つ人はボクたちとは考え方が違うんだね。」

「ある程度未来を操作できる、あるいは未来に何が起こるのかを予測できる強みのお陰でしょう。」

未来への脅迫に対して平然と答えた琴に海原姉妹は驚きを隠せない。

「その件で太宮院さんの手元には私の脅迫の証拠が残ってしまったわ。恐らくは直接リークすることはないけれど万が一出回ってしまったらええわたくしはおるか花鳳全体が痛手を被ることになる。何としてもその憂いを取り除かないと危険よ。」

「つまり太宮院琴様の拿捕、あるいは最悪証拠となるデータの消去を行うということでしょうか？」

「そうなるわ。」

琴には交渉で完全に断られていることから”太宮様”の力を借りるためには琴自身の身柄を確保するしかなかった。

そのための拿捕だが抵抗された場合にも音声データだけは処分しないと作戦は失敗となる。

「了解致しました。」

「ボクもわかりました。ヴァルキリーのみんなにも声をかける？」

撫子が捕まればヴァルキリーもただでは済まないので協力は惜しまないはずだが

「いえ、私と姉さんで今から向かいますよ。」

葵衣が提案したのは超電撃作戦だった。

日付が変わる頃、夜の闇を執事服とメイド服の影が駆けていく。

葵衣と緑里である。

緑里がメイド服の理由は…特にない。

全身タイツを嫌がり、制服では足が付くことを懸念したときたまたま近くにあった服だったというだけだ。

ちなみにこのメイド服は撫子が気まぐれに葵衣に着させようとして忍ばせていたものだったりする。

2人は撫子の付き人として様々な武芸に携わっており足音を殺して  
走ることなどわけない。

「葵衣、データと太宮院、どっちを優先させる？」

「データの確保が先決です。お嬢様を脅かす代物を捨て置けません。」

「だよね。」

緑里はニツと笑う。

撫子は何日も今回の事で悩んでいたのだろう。

隠してはいたが目に見える形で疲れが出ていた。

だからこそ葵衣はその不安を1秒でも早く取り除き今夜からでもゆ  
っくり眠れるよう、こうして太宮神社に乗り込もうとしているので  
あった。

近くまで車で来た後は走ってきて太宮神社が見えてきた。

「葵衣、そっちは正面だよ？」

任務に入ったのでほとんど口パクに近い小声での会話。

それでも聴力まで鍛えている2人には十分に拾える音量だった。

「周囲は草木が多いです。ここは正面から乗り込んだ方が早いでし  
よう。」

人目を忍ぶのは人目があるときにするもの。

もともと人通りが少なくさらに深夜帯となれば出歩く人も皆無であ  
るため下手に裏から回るよりも早いとの判断だ。

一応鳥居周辺に感知装置がないか確認してから境内に飛び込む。

「本殿に向かいますよ。」

2人は極力闇に紛れるように静かに走り本殿の表に面する廊下から  
中へと入る。

器用に着地の際には靴を脱いでいる。

「二手に分かれよう。15分で見つからなかったら一度ここに集合。」

「はい。気を付けてください、姉さん。」

互いに親指を立てて健闘を祈り、2人は廊下を逆方向に駆け出した。

葵衣はかつて入り込んだ奥の間を目指していた。正確に言えば奥の間に続く道のどこかに琴の私室があるとの予測の下に動いていた。

（以前奥の間のさらに奥まで引き込まれましたね。今回は注意しておかなければ。）

古い家屋だからか内部照明の類いはなく外からの明かりに乏しい廊下は外以上の闇の中で一寸先も見えないような状況だった。迷路の鉄則として左手を壁につけながら慎重に進んでいく。

不意に廊下に差し掛かり

「ッ！」

その向こうから人が現れた。

暗くてよく見えないが背格好は葵衣と同程度で場違いなメイド服がうつすらと見えた。

「姉さんでしたか。」

「葵衣。」

すぐ近くにいるのに暗すぎて顔がよく見えない。

こんなことなら暗視スコープを持ってくればよかったと後悔していた。

「あちら側は確認し終わりましたか。」

「うん。そんなに広くないから。」

確かに本殿も大広間や客間などそれほど部屋の数はない。

そうなると本命は葵衣が探しているこちら側となる。

「2人で手早く探してしましましょう。」

「うん。」

緑里は返事をする手と手を握ってきた。

驚きはしたがこの暗がりでは仕方がない。

葵衣も握り返して緑里が来たのとは違う右へと折れる。

「何があるか分かりません。用心してください。」

「うん。」

緑里の返事を確認してから2人はまた歩き出した。

しばらく真つ暗な闇の中を歩くと廊下の先に光が灯っているのが見えた。

葵衣は足を止める。

「太宮院様の私室かもしれません。」

殺していた足音をさらに小さくし廊下の軋む音にすら注意を払いながらゆっくりと近づいていく。

障子の向こう側に行灯があるらしく明かりがゆらゆらと揺れる。

部屋の前まで来たが中に誰がいるのかは分からなかった。

「私が中を覗いてみます。姉さんは待機しててください。」

頷く気配を受けて手を離してもらうと障子に張り付いてゆっくりと開いていく。

袴が見えた。

畳の上に横になっているのかわずかな隙間から覗いた光景を横断している。

さらに隙間を広げていく。

やはり巫女装束を着た人物が畳に横たわっている。

(だらしなく横になっているのでしょうか?)

琴のイメージとは異なるが普段は意外とだらしないとも考えられる。弱いが交渉の材料に使えそうだった。

(太宮院様が眠っているのならば好都合です。今のうちにデータを回収させていただきます。)

もう少し隙間を開けて室内にパソコンがないかを確認していく。

足元の方から確認していき徐々に頭の方へと視線を巡らせていった

葵衣は

「！」

スパンと勢いよく障子を開けた。

「姉さん!？」

そこに横たわっていたのは琴ではなく巫女装束を着せられて寝かさ

れていた緑里だった。

葵衣は慌てて駆け寄り抱き起こす。

「あ、葵衣。」

緑里は震える指で開いた障子の向こうを指す。

言われなくても分かっている。

緑里がここにいるということとは廊下であったのは違う何かだということになる。

「あまり驚いていただけませんでしたか。」

廊下の暗がりから出てきたのはメイド服に身を包んだ琴だった。

背格好が同じくらいなので問題なく着られている。

「しかし、お2人は普段からこのような格好をされているのですね。」

琴の中でコスプレ姉妹という意識が定着してしまった。

これはこれで微妙に弱味ではあるのだが、海原姉妹はそんなことよりもまず追い込まれた状況を警戒していた。

琴は腕を組みフツと口元に手を添えて笑った。

「本日の余興はいかがでしたか？楽しんでいただけましたか？」

「楽しいわけあるか！」

「姉さんの着ていた服を剥ぐとは悪趣味にも程があります。」

海原姉妹は不服そうだが琴は取り合う様子はない。

「脅迫に続きまたも不法侵入を企てた花鳳の方にかける情けはありませんよ。」

琴はスーツと後ろに下がって廊下の向こうに消えていこうとする。

部屋にパソコンのような音声データを保存する機器がなく、琴に気付かれた以上これ以上の探索は不可能であるためここで琴を逃がすわけにはいかなかった。

「行けますか、姉さん？」

「もちろん。追うよ！」

2人はすぐさま立ち上がり琴を追う。

「うー、袴走りづらい。」

まるで滑るようにひらひらのスカートを僅かに残して角に消えていく琴を追いかけているうちに2人は境内に飛び出した。鳥居を背にメイド服の琴が笑う。

「わざわざ戦いやすいところに出てくれるなんてね。」

「太宮院様、お嬢様のためその身柄を確保させていただきませう。双子の姉妹は左手を掲げる。」

「ベリロスツ！」

「エルバイト。」

左目が朱色に輝き、その手に魔剣が：

「神前ですよ、控えなさい。」

現れる直前、琴の言霊がジュエルの発動を封じた。

「え！？」

「ジュエルが発動しない？」

自分の手をまじまじと見つめる海原姉妹に琴は敵かな声で告げる。

「ここは聖域。魔を祓う神の言を賜りし地で魔の者が力を振るえる道理はありません。」

神社の敷地内が螢火のような輝きに満ちる。

それはさながらオリビンの輝きのようで葵衣たちは直感的にそれが神の力なのだと気付いた。

ジュエルは封じられ、追いつめられたのが自分たちだと知った2人は警戒を強める。

パシヤ

突然目映い輝きが琴から発せられ目を覆う。

「なかなか面白い画が撮れました。」

琴が手にしていたのはデジカメだった。

ICレコーダーといい変なところで現代的な巫女である。

その行動を疑問に思っていると鳥居を塞ぐように立っていた琴が反身を引いて道を開けた。



「お帰りなさい。その装束は差し上げますよ。」

そこでようやく今のが証拠写真だということに気がついて緑里は歯噛みした。

力を削がれ、不法侵入の写真を撮られた2人は目配せし合い、力を抜いた。

「…夜分にお邪魔致しました。」

「安心してください。少なくとも”Innocent Vision”に悪意ある手を加えない限り件の証拠が出回ることがないと約束します。」

琴はICレコーダーを手に微笑む。

”Innocent Vision”、より正確に言えば琴の懇意としている作倉叶に手を出せば証拠をばら撒くという脅しに今の葵衣たちは抗う術を持たない。

律儀にお辞儀をして帰った2人を見送った。

「…フェルメール。」

琴は表情を引き締めてシンボルである群青色の弓を取り出し、瑠璃色の矢を番えた。

パシユ

満ちる神気を纏った矢が輝き、引き絞った矢が神社の外に向けて放たれる。

「オー！」

どこかの屋根の上から断末魔の叫びが聞こえ、消えた。

「力に集う亡者、ですか。」

シンボルを消した琴は部屋へと戻ろうとして

「…。」

自分の恰好を見た。

さすがに秋葉原にいるような見せるためのメイド服ではないものの神社には不釣り合いな恰好。

緑里の趣味かスカートは膝丈で振り返るとふわりと翻る。

「うっ、さすがにこんな恰好は叶さんにも見せられません。」

今更ながら恥ずかしくなった琴はそそくさと中に入るのだった。

### 第38話 ト占交渉

「オーオーオー？」

翌日の昼食、いつものように屋上に集まった”Innocent Vision”が食事をしていると八重花がそう口にした。

「そう。オー観測作戦、オー、オブザーベーション、オペレーション。略してオーオーオー。オーを捕まえたり罠にはめて行動原理や目的を調べるのよ。」

「おー。」

「おー。」

「おー。」

感心するような声を上げる由良、真奈美、明夜の3人。

「お約束のボケをありがとう。」

八重花はフツと笑った。

「でもオーを捕まえるにしてもいつ襲ってくるか分からないよ？」

叶も真奈美も襲われたがそれらは不定期で何ら法則性があるようには思えなかった。

「明夜が深夜に複数体のオーが活動しているのを確認しているでしょ？」

「あ、そういえば。」

ポンと手を打ったのは叶ではなく明夜。

「...。」

呆れたような目が一斉に向けられるが明夜は動じた素振りも見せず叶の弁当を狙っている。

「でもそれだと一度に複数襲ってくる危険性がある。戦力が叶と真奈美しかない私たちには少し厳しい状況になることが予想されるわ。」

現状は葉が1対1でギリギリ、真奈美で2体が限度といったところであるため、どれくらい敵が潜んでいるか分からない場所に飛び

込んでいくのは危険が大きい。

モンスターハウスの棍棒と木の盾の装備で飛び込むようなものだ。

「そうしたら襲われるのを待つの？」

「それは第3案ね。とりあえず叶には太宮院の巫女さんに出現を予測できないか聞いてきてもらいたいのよ。」

「確かに未来視を使えばいつ襲ってくるかは分かるな。」

由良の相づちに八重花は微妙な表情を浮かべてアスパラのベーコン巻きを口に含んだ。

「でも、どうもあの巫女さんは中立みたいなのよね。だから教えてくれないかもしれないけど、そうしたら第2案を実行に移すわ。」

「中立なのに頼みに行くんだ？」

真奈美がミートボールの1つを明夜の口に放り込みながら首をかしげる。

「私たちが行っても多分無駄よ。でも叶ならあるいは……ってところね。過度の期待はしていないから気楽に聞いてきなさい。」

「うん、わかった。」

「ちょっとわり琴の弱点を弁えている”Innocent Visio n” 参謀・東條八重花の考案した「オーオーオー」が動き始めた。

その日の放課後、さっそく太宮神社にやって来た叶は制服姿のまま境内の掃き掃除をする琴を見掛けた。

短めのスカートが気になるらしく始終後ろを気にしている。

「こんにちは、琴お姉ちゃん。」

「こんにちは、叶さん。」

声をかけると特に変わった様子がない琴。

むしろそれがツッコミ待ちなんじゃないかと会話の経験を積んでスキルアップした叶は思い至った。

「その服、とっても似合ってますよ。」

「ああ……」

叶が褒めた瞬間、琴が箒を支えにガクリと膝をついた。

「ええ!？」

「叶さんなら流してくださいと信じていたのに…」

どうやらまだ叶にはツッコミ待ちとスルーの判断は難しかったようだ。

それでも素直に

「どうして制服なんですか？」

と聞かなかつた辺りに叶の成長が見てとれた。

…なんの成長かは分からないが。

「…わたくしは箒を片付けてから行きますので先に社務所で休んでいてください。」

気落ちした状態から再起動した琴は重い足取りで箒をしまいに行った。

言われた通りに社務所に向かう叶。

「…。ハッ、そういうえば！」

途中まで歩いたところで琴は重大な事を思い出してサッと顔が青ざめた。

さっきまでとは別格のスピードで社務所に向かって走る。

「叶さん、待ってください!中には…」

だが時すでに遅し。

勝手知つたる社務所の社務所に上がり込んだ叶はいつもの部屋に入らず廊下で立ち尽くしていた。

琴は今度こそガクリと地面にへたり込んだ。

叶はとても微妙な表情で振り返り

「私、琴お姉ちゃんがこういう趣味でも大丈夫ですよ?」

とても素敵な笑顔を浮かべた。

「違うんですー!」

琴は地面にうつ伏せて号泣する。

いつもの広間には昨晚緑里と交換したメイド服が吊るしてあった。

「ぐすん、だから違うんです。」

「わ、わかりましたから、泣かないで下さい。」

泣きじゃくる琴を部屋に引き込み、宥めてどうにか落ち着かせた叶はどつと疲れを感じてため息をついた。

「それじゃあこれはヴァルキリーの海原緑里先輩の服なんですね？」  
「ぐすつ、はい。」

確認をしつつもいまいち叶は納得できずにいた。

海原緑里は妹の葵衣とは違い服装は女子の制服だが一人称はボクだし言動もどちらかと言えば男の子っぽいところがある。

学内でも等々力良子と並んでかっこいい王子様系女子ランキングでトップを争っている。

そんな緑里がメイド服を着ているイメージが浮かばなかった。

葵衣の方はもつと浮かばなかったが。

「それで交換したけど巫女装束を間違って全部洗濯してしまって代えがないと。」

「はい。」

それが制服を着たままでいた琴の真相だった。

琴にとって制服や可愛い服は裸と同列くらいに恥ずかしいそうなので相当の苦行だったらしい。

「叶さんには見られまいと隠し場所を考えていたのに、探していたことを忘れてしまうとは。ああ。」

また泣き出しそうになる琴の頭をポンポンと撫でてあやす。

「別におかしくありませんよ。制服も可愛い服も、琴お姉ちゃんなら似合います。」

叶は嘘は苦手だから正直な感想しか言わない。

それを知っているからこそ琴は反応に困って俯いてしまう。

「…本当ですか？」

「はい。」

「そうですね。それなら、叶さんと一緒なら今度着てみます。」

「はい…ん？」

同意してから余計な単語があった気がしたが琴が明るさを取り戻したので叶は追求しないことにしたのであった。

これが後に大変な事態を招くことになるとは知らずに。

「オーオーオー、ですか。」

「はい。オー観測作戦、ええと、オー、…なんとか、オペレーションの略だそうです。」

うる覚えで半端な伝わり方だが今回の場合はさほど重要ではないので琴は突っ込まなかった。

「そのために”太宮様”の卜占でオーの出現を占ってほしい、そういうことですね？」

「はい。」

琴は難しい顔をした。

八重花の予想通りに”太宮様”の先見は極力運命の流れに介入しない形での観測とし、誰かの利益になることは避ける必要がある。

誰かが得をすればその分他の誰かが損をするようにシステムができているから。

普段行っている占いもあくまで存在する可能性の範囲内での成功を示すだけであり、破滅する運命にある人が助かるような助言はしないのを心情としていた。

(この件はどうなのでしょう?)

今回の占いは比較的正確な時間と場所の情報求められる。

本来なかったはずの場所に”Innocent Vision”が移動することで流れが変わってしまう可能性が存在する。

これが陸のInnocent Visionと”太宮様”の先見の違い。

琴は見るべき”過程”の他にそれによって波及する波紋の行く末ま

で考えて伝えるかどうかを決めなければならぬのである。

（やはり少々厳しいでしょうか。）

叶たちが取るうとしてしている道は細くて険しい。

無理を押し通せば必ずどこかに綻びが生まれてしまう。

「すみませんが…」

「あ、そう言えば八重花ちゃんからお手紙を預かったんです。」

断ろうとしたタイミングで差し出された手紙に琴は言葉をつまらせて黙った。

嫌な予感を覚えながらも手紙を受け取り封を開ける。

そこには手書きの文章で一言

『第1案が通らない場合は叶が囮となる第2案になります。』

と記されていた。

琴は手紙を握りつぶしてしまいたい衝動を抑えて丁寧に畳んだ。

（さすが陸さんが一目置く才女と言っべきでしょうか。わたくしの弱味を的確に理解しているようですね。）

八重花の第2案もまたオーがいまだに叶や真奈美しか襲ってこないという事実から考えて合理的な手段ではある。

しかしそこに叶の安全の保証はない。

もちろん安全策は講じるだろうし真奈美も付近に配置するだろうがこれまでよりも強い相手がいきなり襲いかかってきた場合、叶が持ちこたえられないとは限らないのだ。

（しかし、わたくしは太宮の巫女。個を捨て公を導かなければ…）

叶の事は心配だがやはり使命を違えるのは難しいと決心し手紙を封筒に戻そうとした琴は

（写真？）

手紙の他に1枚の写真が入っていることに気が付いた。

何だろうと何気無くひっくり返して見た琴は

「ブッ！」



乙女にあるまじき吹き出し方をして慌てて口と鼻を手で押さえた。

「どうしたんですか、琴お姉ちゃん!？」

「な、なんでもありません。」

琴は平静を装うのに失敗しながらも何でもないことのように振る舞う。

「すー、ふうー。」

深呼吸をしてもう一度写真を見る。

それは以前裕子が撮影した寝起きの叶の写真だった。

無防備な可愛らしさと所々覗く肌のセクシーさがその一枚にはあった。

(う、鼻血出そうです。)

これは八重花からの前払い。

これを受け取るということは自らの信念を曲げること。

(わたくし、わたくしは!)

クワツと目を見開いた琴は

スツと懐に写真を忍ばせた。

ここにはいない八重花がニヤリと笑った気がした。  
交渉成立である。

「わかりました。他ならぬ叶さんのお願いですから”太宮様”に占っていただきますよう。」

「わあ、ありがとうございます、琴お姉ちゃん。」

八重花との駆け引きに気付いた様子もなく喜ぶ叶を見て琴はちよつと罪悪感を抱いたが笑顔で覆い隠す。

「巫女装束が乾いたか確認してきますのでこちらでお待ちになっていてください。」

琴は叶を残して外へと出ていった。

上手く話が進んだ事を喜びつつ手持ち無沙汰になった叶は室内を見直し

「……」  
メイド服に目が止まった。

「……」  
何となく琴が戻ってこないのを確認して、なぜか足音を立てないように立ち上がり、意味もなく丁寧にハンガーを手にする。

「意外としつかりしてるんだ。」

秋葉原も本物も知らない叶だがふだん見慣れないちょっと変わった可愛らしい服に実は興味津々だった。

だが今はいつ琴が帰ってくるか分からない状況。

軽く合わせてみるだけですぐに元の定位置にそれこそ埃の一つにまで注意を払って戻し、席に座り直した。

絶妙なタイミングでドアが開く音がして巫女装束に着替えた琴が入ってきた。

「お待ちせしました。奥の間にご案内します。」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

叶はバレていないことに内心ホッと息をついて立ち上がった。

”太宮様”の卜占もこれで何度目になるのか、すっかり慣れた叶はさらさらと淀みなく記されていく達筆な文字を眺めていた。  
眺めているだけで相変わらずよく分からない。

”太宮様”が退室していき、難読文字と格闘していると琴が奥の間に入ってきた。

「結果は出ましたか？」

「はい。多分これが数字みたいなのでこの日かと。」

”太宮様”の予言には襲撃の日時とそこに至るまでの準備が記されていた。

「太宮様”も叶さんには甘いですね。」

内容を読み聞かせた琴は呆れたように笑う。

「この通りに準備を進めればオーオーオーは上手くいくんですよ

？」

期待に満ちた目で尋ねる叶に対して琴は首を横に振り、厳肅な態度を取った。

「そうとは限りません。あくまで”太宮様”の先見は起こりうる未来への道筋を示すものでしかありません。ほんの少し流れと違う行動を起こせばそれはまったく別の未来へと向かうことになります。その事を努々お忘れ無きよう。」

「…はい。」

叶は琴の忠告をしつかりと胸に刻み込んで頷いた。

占いを終えて社務所に戻った2人はお茶を淹れてホッと一息ついた。

「占ってもらえて良かったです。本当にありがとうございます。」

「いえ、叶さんの安全の方が大切ですから。」

報酬のことはおくびにも出さず琴は年上らしく優しく微笑む。

大切だと言われて叶ははにかんだ。

社務所には相変わらず人が訪れることもなく、穏やかな時間が流れる。

「それはそうと、叶さんもメイド服に興味がおありのようですね。」

「え…!？」

その時間は唐突に終わりを迎えた。

冷や汗を流す叶の向かいで琴がとても輝いた笑顔を浮かべている。

(こっちにこーい、こっちに…)

「ひい！」

幻聴に怯えて後ろに下がったがすぐに壁に当たり、上からかけてあったメイド服が落ちてきた。

「”太宮様”の導きですね。さあ、お着替えしましょうね。」

琴が両手をわきわきさせながら近づいてくる。

「叶さん…！」

「きゃー…！」

とうとう理性が決壊して飛びかかる琴と悲鳴をあげる叶。

そして

「い、いらつしやいませ、ご主人様。」

「最高ですよ、叶さん！」  
パシヤ

叶は心で泣きながらコスプレ撮影会に付き合わされた。

### 第39話 オーオーオー

琴がコスプレ（させる方）に目覚めかけ、叶が心にダメージを負った日から数日、”Innocent Vision”とヴァルキリーでそれぞれに動きがあった。

”Innocent Vision”は「オーオーオー」、ヴァルキリーはジュエル指導旅行である。

叶は1人で買い物に出ていた。

作戦の決行を前に鋭気を養う意味で建川に出向いたが気に入った洋服が見つかったので上機嫌だった。

「今日は良いことありそう。」

その良いことがオーの捕獲なのか襲ってこないなのか。

「それにしても八重花ちゃん、私は参加しなくていいなんて。これでも私、”Innocent Vision”のリーダーなのに。」  
戦力にあまりなっていないのは自覚しているがそれでも”Innocent Vision”としての活動で蚊帳の外にされると落ち込んでしまう。

特訓はいまだに続けているものの成果が出ているのかどうかは戦っていないので分からない。

「やっぱり私、お荷物なのかな？」

叶は気持ちが沈みかけたが首をブンブンと振って気合を入れる。手に持ったお気に入りを見ていると元気になれた。

「うん、駄目ならこれからみんなの役に立てばいいんだよね。」  
気持ちを入れ換えた叶は軽い足取りで家路に着いた。

…はずだった。

気が付けば葉が立っているのは建川であって建川ではない場所だった。

夕日に染まった風景は間違ひなく建川なのだがそこにあるべき人の姿が葉を除けばどこにもない。

「結界！？それじゃあこれは…」

「オーツッ！！」

葉の疑問に答えるようにオーの雄叫びが空間に木霊した。

「太宮様”の占いは時間までは指定されなかったけど、夜だと思つたのに。」

しかしよくよく考えれば明夜が自発的に遭遇した深夜以外はすべて夕方の時間帯だった。

逢魔が時に魔が寄ってくるのは今も昔も変わらない。

「私1人でもやらないと。オリビン、お願い。」

葉が買い物した袋を道の端に置き、祈るように両手を組むと右目が青く輝き手のひらの間には灯火の光が現れた。

握り込めばそれは短剣の形を成す。

「…すう…」

葉はオリビンを右手で構えると軽く腰を落として息を整える。

今までならさつき聞こえた声を頼りに視線をさ迷わせてオーを探していただろうが琴の特訓を受けた葉はひと味違う。

戦闘に際した葉への命令コードはズバリ「専守防衛」。

葉自身は動かさず常に周囲を警戒するだけに止め、攻撃された場合にのみ応対し逃げる相手は追わない完全な守りの型だった。

人のいない世界は耳が痛くなるほどに静かだ。

自分の呼吸すら聞こえる。

ザッ

なればこそ微かな異音にも神経を研ぎ澄ませていれば聞き取れた。

「！！」

音源は右後ろ、叶は左足を軸に円を描くように右足を後ろに引く。それにより体勢を崩すことなく向きを変えた。

オーが屋根の上なら飛び込んでくる。

右足をさらに後ろに引いて半身になる。

右腕を突き出して飛び込んでくるオーに叶はオリビンの刀身を当て、受け流した。

オリビンの反発によりオーは速度を殺すこともできず叶から離れて店の壁に激突した。

それを見届けた叶は

「で、でき、ました。」

自分でやったことに自分で驚いていた。

受け身の次に教わったのがとにかく逃げずに相手の動きを見ること、そしてオリビンで受け流すことだった。

限界まで集中力を高めてどうにか一撃凌いだが少し気が緩むと足が震え出した。

「あはは、やっぱり全然駄目だよ。」

それでも逃げ出すわけにはいかない。

結構な勢いで追突したように見えたオーだったが特に損傷した様子もなく立ち上がった。

ただオリビンに触れた右手の指からは黒い煙が上がっている。

「諦めては、くれませんよね。」

叶はため息のように大きく息を吐いて再びオリビンを構えた。

琴の教えは十分に戦力になるとわかった以上あとは使いこなすだけ。

「それなら私が上手くできるようになるまで付き合ってもらいます。」

「オーッ！」

その言葉に怒ったようにオーが叶に襲いかかった。

キン、キン

「はっ、とおっ。」

「オーッ！」

叶はオー相手に善戦していた。

オリビンの高い防御能力に助けられている感はあるがそれでも逃げずに受け流していく。

オーの爪は攻撃する度に傷を負っていき、すでに指先は消滅している。

それなのにオーは痛みを感じないのか絶えず叶に襲いかかってくる。

(何なの？怖い。)

叶はオーの在り方を恐れた。

生物にとって痛みは危険を知らせる大切なシグナルだ。

それが働かないオーは生物として生み出されなかったということになる。

ただの駒として命尽きるまで活動を続ける、それは歪な命の使い方だ。

(命をこんな風に扱う人に、負けられない。)

叶の瞳にオーの主に対する反抗心の炎が点る。

オーの爪を弾き、がら空きになった胴に向けてオリビンを振るう。

リーチの長さが足りず回避されたが追撃はなく、オーは大きく後ろに跳んで警戒を強めた。

(やっぱり攻撃に出ても避けられちゃう。)

それに攻撃に移った瞬間、一瞬無防備になったのを叶は自覚していた。

(心を落ち着けて…守ることに専念する。)

再び初心を取り戻して構えを取る。

徐々にだがオーの戦力は削れている。

対して叶は集中による気疲れはあるものの体力的にはまだ余裕であり傷も受けていない。

このまま戦い続けていけば先にオーが消滅するのは目に見えていた。



「オーッ！」

オーにもそれが分かっているのだろう。

雄叫びを上げると全身を弾丸とするように一直線に叶に向けて突っ込んだ。

「っ！」

叶は怯えて固まりそうになる体を意思の力で動かして右手のオリビンを強く握った。

突撃してくるオーに逆らわず半身になった体をそのラインからわずかにずらし、急速に近付いてくるオーの眉間にオリビンを突き立てた。

勢いで右腕が後ろに持っていかれそうになったが

「オーッ！」

そうなる前に突き刺した場所からオーが消滅を始めていき、通りすぎる前に消え去った。

「。はあ、はあ。」

オーが消えてからしばし警戒を続け、完全にいなくなったのを確認してから叶は大きく息を吐いた。

「…勝てたんだ、私。」

ペタンと地面に座り込んでしまいそんな脱力感とわずかな達成感に震える叶は歓喜の声を上げようとして

「オーッ！！！」

複数聞こえた叫びに笑みを凍り付かせた。

今度こそペタリと地面に座り込んでしまう。

1体を時間をかけて倒すのがやっとだった叶に複数の相手を同時に処理できるわけがない。

今の叶には目の前の敵に集中するために周囲への警戒が疎かになる欠点があった。

「でも、やらないと。」

今の状況は戦わなければ生き残れない。

ならば泣き言を言う前にできることをやるべきだ。

叶は足に力を入れて立ち上がりオリビンを構えた。

暖かな光に勇気を貰い相手を探す。

優位な状況だと認識しているのかオーは隠れることもなく正面と左

右からゆっくりと出てきた。

3対6つの紅色の瞳が叶を見ている。

「…。」

3体に気を配るがどれか1つが動く意識がそちらに集中してしま  
う。

オーに口は無いがニヤニヤと弱者を追い詰めるような目をしてジリ  
ジリと距離を詰めてくる。

「っ！」

とうとう叶は逃げ出した。

「オーッ！」

オーもその後を追いかける。

特訓で体力がついたとはいえ人外相手に戦えるような肉体強化はさ  
れていないのでぐんぐん距離が縮んでいく。

叶は後ろに目をやると急カーブして近くの狭い路地に飛び込んだ。

人が1人通れるくらいの路地にオーも駆け込んだ直後

「えい！」

先頭のオーの胸にオリビンが突き刺さった。

「オー！」

叶は必死に考えて狭い路地で戦うことを思い付いたのだ。

そうすれば敵は正面からしか襲ってこれず前だけに集中できる。

前を走っていた仲間が消えたことで後続のオーはゆっくりと路地に  
入ってきた。

これでまた1対1。

しかも前方からの敵に対応すればいいという叶に有利な状況だった。

「オー！」

オーが爪を振ってくるのをオリビンで受け流す。突進とは違い体勢はあまり崩れないがタイミングはずらせるので連続攻撃を受けにくくなる。

攻めの戦い方ではないが確実に叶が押していた。

（大丈夫、私、戦える。）

攻撃する度に手を削っていくオーを見て叶はやれると確信した。

その叶の上に影が落ちる。

受け流したわずかな隙で上に目を向けると飛び上がったもう1体のオーが落下してこようとしていた。

叶の策は正しかった、普通の人間が相手ならば。

だが誤った、相手が人間の常識に囚われない”化け物”であることを。

「くう！」

そこから先は防戦一方だった。

1体が地上、もう1体が上空から攻め立てる連続攻撃は叶の能力を上回り後退を余儀なくさせる。

だがここは結界。

無限に続く道に果てはなく叶の救いはどこにもない。

「はあ、はあ。」

オリビンの重ささえ辛くなってダラリと下がりそうになる腕を持ち上げる。

オーは止めを刺すべく飛び上がり、駆け出した。

叶の目に涙が滲む。

今まで押さえていた言葉がとうとう涙と共に溢れ出そうとしていた。助けて、と

地と空からオーが爪を振り上げて迫る。

言葉は声にならず叶はギョツとオリビンを握って身を縮こませた。

狂気の爪が迫り

「叶、癒しの光！」

「ッ！」

突然、声が聞こえた。

言われるままに傷と体力を癒す光を放つ。

攻撃でないもののオーにとっては不快な力。

戸惑った様子で攻撃の手が止まる。

そこに

「よくやった、カナ！」

「由良お姉ちゃん！？」

路地の上から由良が降ってきた。

手には鉄パイプ。

それを空中で体勢を崩したオーに向け、全力で振り下ろした。

ガイイン

とんでもない音を響かせてオーは地面に落ち

「オッ！」

由良はその上に着地した。

「由良、お姉ちゃん。」

とつとつ叶の目から涙が溢れ出した。

助けに来てくれた。

それだけで満たされる思いだった。

「おっと、俺だけじゃないぞ。」

そう、さっきの声は由良ではなかった。

路地の入り口からは八重花が腕を組みながら笑みを浮かべて入ってくる。

「明夜、真奈美、やっっておしまい。」

「アイアイサー。」

「待ってて叶。すぐに済むから。」

八重花の左右をすり抜けるように飛び出した明夜と真奈美。

真奈美はすでにスピネルを付けており、明夜は両手に木刀を握っていた。

「オーツ！」

由良に押し潰されたオーが吠えて飛び上がり、もう1体が真奈美たちに向かって襲いかかる。

明夜はそれを見るとあろうことか壁を足で蹴って上へと飛び上がっていく。

「こつちの相手はあたしだよ。」

波状攻撃を警戒して顔をあげたオーが声に気付いたときにはすでに真奈美が眼下にまで飛び込んできていた。

そのまま大地を切り裂くようにして光の刃が走る。

「アルファスピナ！」

「オーツ!!!」

真下からの斬撃にオーは分断されて消滅した。

さらにもう1体も

「逃がさない。」

三角跳びで上昇した明夜が驚くオーを木刀で叩き落とし、

「待ってたぜ！」

由良が落ちてきたオーに向かって鉄パイプをフルスイングして壁に叩きつけた。

ピクピクと痙攣する姿はいつそ可哀想に思えるくらいに哀れだった。

「ええと、ごめんなさい。」

叶がオリビンを突き刺すとむしる救われたような顔をして消滅していった。

すべてのオーが消えたらしく結界が消滅する。

路地には叶を優しく見守る” Innocent Vision”の仲間たちが集まっていた。

叶は涙を浮かべながら精一杯微笑む。

「みんな、ありがとう。」

「実は礼には及ばないわ。」

「え？」

キョトンとする叶の前で八重花はあらかじめ作っていたらしい紙を取り出した。

『プロジェクト・オーオーオー　　叶を囿にして』

いつの間にか作戦名に不穏な文字が増えていた。

「叶が頑張ってくれたおかげで叶のデータも含めてオーの情報が掴めたわ。生け捕りは無理だったけど上出来よ。」

「まさかあいつら、捕まえたら自害するとは思わなかったな。」

「びっくり。」

どうやら裏でも戦闘があつたらしいが叶はそれよりもまず重大なことを聞かなければならない。

「もしかして…初めから見てたの？」

「そうよ？」

八重花は何を今さらと言わんばかりにあっさりと答えた。

ガツクリと崩れ落ちる叶を真奈美が支える。

「でなければあんなヒーローみたいなタイミングで助けになんて入れないわよ。それができるのは本物だけね。」

あり得ないと失笑する八重花は別種の不敵な笑みを浮かべて砕け散った結界の夕日から紺色に切り替わった空を見上げた。

「” Innocent Vision”の理想を叶えるためにそろそろ反撃に移らせてもらおうよ。」

## 第40話 強き力

” Innocent Vision ” が「オーオーオー」のためにいろいろと動いている頃、ヴァルキリーは再び各地の地方支部に実技指導の遠征に向かっていた。

名古屋の緑里と大阪の美保は同じ新幹線で東京駅から出発した。

「今回も同じ場所だけど指導なら色んなヴァルキリーがした方がいいんじゃないの？」

緑里は疑問に思っ て美保に尋ねる。

クロスワードらしき雑誌とにらめっこしている美保は顔を上げた。

「前にあたしと良子先輩が言ったじゃないですか。ジュエルの育て方で競うって。」

「そうだったけ？」

緑里は駅で何となく買った甘栗の皮を剥きながら首をかしげる。

いつもそんな感じに勝負の話をしている印象が強いせいで思い出せないが言われてみればそんなことがあったような気がしないでもなかった。

「言っ たんです。そうしたら一度や二度じゃ指導にならないじゃないですか？だから今後も基本的には行き先は同じですよ。」

あくまで美保や良子の取り決めであるため葵衣や撫子が異を唱えればなくなる決め事だが今のところヴァルキリー内で異論は上がっていない。

緑里が話題として切り出したのも精々旅行先が変わった方が楽しいんじゃないかと思っ た程度だ。

「あ、でも今回はジュエルの士気をあげるのが目的だからあんまり虐めないようにね。」

「さすがに分かってますって。出発前に何度も葵衣先輩に念を押されましたから。まあ、ジュエルの方から求めてきたら分らないですけど。」

フツフツと笑う美保を見て守る気が無いことをよくわかり緑里は呆れた目を向ける。

「うちは大丈夫ですよ。問題は悠莉んとこじゃないですか？」

「そうみたいだね。」

東北の状況は葵衣から少し聞いていたし悠莉自身もジュエルをとりあえず千尋の谷に突き落とすと言っていた。

這い上がってくるのを願っているのか蹴り落とす行為に快感を求めたのかは定かではない。

しかし悠莉の思惑はともかくジュエルたちが悠莉への反抗を企てていると東北の管理者から葵衣宛に連絡があったのである。

当然悠莉もその話は耳にしていたが

「そうでなければ私が泣く泣くヒールを演じた意味がなくなってしまう。」

と言葉とは対照的な笑顔で言っていた。

「…。」

「…。」

「まあ、悠莉の教育方針ですから。」

「そうだね。」

結局考えても無駄という結論に至った2人は適当に話をしながら目的地に向かっていった。

村山と葵衣は建川の訓練所でジュエルの指導に当たっていた。

手に持った実践指導マニュアルには撫子や葵衣の実際の経験やスポーツ科学の知識を用いて段階的にジュエルを鍛え上げる手法が記されている。

ヴァルキリーには以前の実技指導の出立前に渡してあったが活用しているかは分からない。

「地方によって特色が出てきているようですね。」

村山が表情を変えずに葵衣に尋ねた。



「はい。東京や九州は体系的な訓練による基礎能力の底上げ、中部では組織戦闘を想定したフォーメーション技術、関西では1人でも戦えるよう個々人の能力の特化とヴァルキリーの教育を反映した成長を見せ始めています。」

ヴァルキリーの指導者の教えに基づいてインストラクターが訓練を行っているのが特色が出るのも当然だった。

とりあえずジュエルクラブ開設の早期に登録し訓練してきたジュエルはかつてのジュエルと同程度まで錬度を上げてきている。

突然オーが攻めてきても少なくとも技術面で後れを取ることはないレベルにまで仕上がっていた。

そこで葵衣が言葉を止めた。

しかし1ヶ所、成長の度合いがひどく不安定な地域がある。

成長しているのは他の地域の3分の1程度で残りは退会したり出てきてもやる気がないと報告を受けていた。

ただし成長しているジュエルは急激に力をつけており錬度で言えば他を圧倒していた。

グラマリーの覚醒が一番近いのは間違いなくそこだと言える。

「東北、悠莉様の育てるジュエルは…統率が取れていません。」

「おおお！」

悠莉が訓練所のドアを開けた瞬間に出迎えたのはジュエルの斬撃だった。

悠莉はそれをサフェイロス・アルミナで軽く受け流す。

「悪くない攻撃ですけどドアの向こうにまで殺気が漏れ出しているは奇襲になりませんか？」

「くっ…わあああ！」

悔しげに顔を歪めたジュエルがさらに斬りかかろうとするが岩手に止められた。

「あら、岩手さん、生きていたのですか？」

「一応前回倒したことになるので辻褄を合わせたが

「あれが演技だったことはとつくにバレています。」

と岩手はジュエルを羽交い締めにして引き剥がしながら答えた。

「そうでしたか。」

悠莉は演技だと知ってもなおギラギラとした視線を向けてくるジュエルにゾクゾクとした快感を覚える。

（少し見ないうちに随分といい顔になりましたね。）

数は減っているが訓練所に残っているメンバーは美保みたいな目をしていた。

不平、不満、苛立ち、怒り、それらをぶつきたいと願う負の感情が瞳の奥で揺らめいている。

襲ってきたジュエルを追い返し、悠莉は前に立つ。

他の地域のヴァルキリーが受けるような尊敬の視線はない。

あるのは敵意であり殺意だけ。

「今日もわざわざ私のために集まっていたいてありがとうございます。」

あえてジュエルたちの神経を逆撫でするような言動にジュエルたちから感じる雰囲気さらに悪化する。

「私と岩手さんの戦いが演技だと知ってなお私に敵意を向けてくる皆さんの考えがまるで理解できません。」

今回も悠莉はヒールに徹するつもりでいた。

少数とはいえ大きく成長を見せたことを嬉しく思うなんて言葉は投げ掛けない。

「何を怒っているのか分かりませんが愚かなことは止め、私の指示に従って動くことをお勧めします。」

歳上もいるというのに清々しいほどに無礼な物言いにとうとうジュエルの堪忍袋の緒が切れた。

「ふざけるなー！」

「バカにして！」

「殺してやるわー！」

怒号で訓練所の空気が揺れる。

ビリビリと肌に響く殺気に岩手は戸惑うが悠莉は平然としていた。

(これはなかなか…あれは?)

今にも襲い掛からんばかりに昂るジュエルの中に悠莉は異質な力を感じた。

ジュエルの放つ力が強いからこそ気付いたわずかな違い。

他が怒りに燃える赤ならばそれは…黒。

(なるほど。)

悠莉が口の端を吊り上げる。

それを馬鹿にした笑みだと受け取ったジュエルは遂に武器を手に悠莉に躍り掛かった。

「コランダム。」

3枚の壁が三角錘を形成して悠莉を守る。

ガン、ガンとジュエルたちの攻撃が障壁を揺るがすが壁は碎けない。そして悠莉はジュエルを見てはいなかった。

(攻撃をしてくる様子はなし。これは…観察ですか?)

見た目は特徴に乏しいただの女の子だった。だが前髪に隠された目は朱色の輝きではなく凝った紅色をしていた。

幾度目かの猛攻でコランダムの障壁が砕かれた。

(ジュエルの出力は予想以上ということですか。)

意識していなかっただけにいささか驚いたがジュエルが雪崩れ込んで来る前に新たな障壁を生み出す。

障壁の生成速度を越えない限り守りに入った悠莉に攻撃は届かない。

そして少女もまた動かない。

それを打開するために悠莉はあえてすべての障壁を解き、ジュエルの前にその身を晒した。

(どう動くのか観察させてもらいますよ、オー。)

「ッ！お姉様!?!」

訓練の休憩中、突然叫んだ綿貫紗香にジュエルたちは怪訝な顔をしたが誰も声をかけない。

ヴァルキリーに取り入り、学内でも悠莉や良子、葵衣と親につきまとっているためジュエルの間でやっかまれているのである。だが紗香は気にしていない。

紗香が見ているのは遥か上だけで下や横には興味がないから。それがいつそうジュエルたちとの亀裂を大きくしていた。

「どうされました？」

葵衣が声をかけると周囲が一斉に怖い顔をしたがやはり気にしない。

「なんだか、嫌な予感がして。」

強く想っているとはいえ悠莉や良子と紗香の繋がりはなく、単純に思い過ごしと考えるのが妥当である。

だが葵衣は不確定な事象を好まない質だった。

「悠莉様と良子様ご連絡を入れます。少々お待ちください。」

言うが早いか葵衣は携帯を取り出してまず良子にコールした。

呼び出し音が続く、紗香が祈るように指を組む。

『葵衣、何か…』

ピッ

良子の声が聞こえた瞬間に葵衣は携帯を切っていた。

今の一瞬で良子が訓練中であることと紗香が言うような状況にないことを確認したのだ。

すぐさま悠莉に連絡を入れる。

これで繋がればただの杞憂に終わる。

だというのに葵衣も嫌な予感がしてきた。

何度コールしても呼び出し音がなるだけで繋がらない。

「どうですか？」

「悠莉様に繋がりません。ジュエルの方に連絡を入れてみましょう。」

葵衣は村山に岩手への連絡を頼み、自身はもう一度悠莉に掛けてみる。

だがいつまで経っても繋がらない。

「やはり繋がりません。」

「こちらもです。ただ訓練中だということではないですか？」  
話を聞いていたらしく意見を述べてくる村山だが紗香と葵衣の表情は固い。

「盛岡周辺のWVeに連絡、ジュエルクラブの存在を知りつつ本日不参加の方に大至急状況を確認するよう手配をお願いします。」  
葵衣はわずかな逡巡の後迅速に行動を開始した。  
村山もジュエルに待機の指示を出しつつあとに続く。

「悠莉お姉様……」

今の紗香にはただ祈ることしかできなかった。

数十の凶刃が振り上げられ、振り下ろされる。

ヒュン、シュンと空を切る音が鳴る。

コランダムを解除した悠莉は乱戦の直中にいた。

だが、服にはいくつかの斬られた痕があり所々血が滲んでいる場所もあつたが基本的には傷を負ってはいなかった。

「何で当たらないのよ!？」

「当てたいのなら当たるように振ってください。」

武器を振り回すだけの乱雑な攻撃を捌き

「くらえー!!」

「くらいませんよ。」

大振りの鎚をかわし

「「やー!!」」

複数が同時に襲ってくる攻撃を防ぐ。

「悠莉様、私も加勢します。」

「この程度問題ありませんよ。」

悠莉の一言で攻撃の苛烈さはさらに増したがそれをも悠莉は避け、視線を黒の少女に向ける。

岩手がその視線の先に気が付いた。

ジュエルとの違いに気付いたかは不明だったが他のジュエルがヒートアップしていくのに1人だけ最初と変わらない表情を浮かべていればおかしくも感じる。

岩手が悠莉に目を向けると乱戦の中で一瞬だけ目が合い、悠莉は頷いた。

岩手は手にエルバイトを出現させながらゆっくりと少女に近づいていく。

「あなたは悠莉様と戦わないのね。それならここは危険よ？離れて……」

岩手が腕を掴んで捕まえようとした瞬間、少女はこれまでほとんど動かなかったのが嘘のように機敏な動きで飛び退いて距離を取った。岩手がエルバイトを構えると刀身をパリツと電気が走った。

エルバイトの基本は電気を刀身に纏わせる魔剣でありグラマリーが発現すれば放出も可能であると考えられていた。

少女の纏っていた気配が急速に強まり、荒れ狂っていたジュエルも気が付いた。

「ようやく動きましたね、オー。」

悠莉が声をかけると少女の姿がグラリとぶれ

「オーツ!!!」

その下から漆黒紅目の人型の闇、オーが現れた。

初めて見た敵に存在に戸惑いを見せたジュエルたちだったがすぐに本来の使命が頭をもたげ

「オーを倒すわよ!」

誰かの叫びをきっかけに

「わあああ!」

悠莉に向かっていていた敵意が一斉にオーに向かっていった。

「あれがオー。私たちの敵ですか。」

「私も初めてみましたけど、オーと叫んでいますし。」

悠莉の微妙な返答に岩手は苦笑を浮かべたがすぐに真剣な顔に戻り

オーとジュエルの戦いに目を向けた。

今の戦いは訓練とは違う実戦であり相手も殺すつもりで攻撃してくるが精神が昂っているのかジュエルたちが恐怖心を抱いた様子はない。

単体ではまだ弱いジュエルも数が集まればオーを押ししていた。

「どうしてオーがここに？」

ヴァルキリーの方ではこれまで一度も直接遭遇はしておらず、すべて”Innocent Vision”襲撃だった。

それがわざわざ東北に現れた理由。

「もしかしたらジュエルたちの放つ力の大きさに惹かれてやって来たのかもしれないね。」

悠莉が微笑んだ先ではジュエルがオーの胸に剣を突き立て、その隙に他のジュエルがオーを叩きのめして倒していた。

「やったー！」

「私たちの勝ちよ！」

勝利に湧くジュエルを優しげな瞳で見つめていた悠莉は気付かれる前に訓練所から去った。

岩手が慌てて後を追う。

「悠莉様！」

「今回の指導はこれで終わりです。きちんと褒めてあげてください。」

悠莉はそのまま出口の扉を開けて出ていく。

そしてすぐに戻ってきた。

見ると少し顔が赤い。

「替えの服をお願いします。」

悠莉もオーの襲撃で忘れていたがさっきまでジュエルの攻撃にさらされていて服は結構ボロボロだった。

意外と抜けている悠莉に岩手は微笑ましげに笑い

「はい、ただいま。」

WVeに洋服を調達に行くのだった。

## 第41話 復活と発現

「オーオーで一応の成功を収めた”Innocent Vission”は休日を挟んだ月曜日、学校を無断欠席した八重花に呼び出された。」

放課後になってから全員で八重花の家に向かう。

「あ、”Inno”…」

「紗香さん、人前では禁止です。」

ジユエルの紗香を従えた悠莉と遭遇したが

「皆さんでお出掛けですか？」

口調に違わず和やかで交戦の意思は見られなかった。

紗香の方は悠莉の後ろで警戒している様子だったが襲いかかってくるようなことはない。

「ちよつと八重花にお呼ばれしてね。」

「そうですね。面白いお話でしたらお聞きしたいものです。」

然り気無く情報を聞き出そうとする辺りは抜け目ないがそれに動揺するのは叶くらいのもだった。

「さあな、それは八重花に聞いてくれ。」

由良がさっさと話題を切り上げて歩き出したのでそのままお開きとなった。

杏葉高校を出て八重花の家に向かう道すがら

「八重花ちゃん、何で私たちを呼んだんだろう？」

叶が不思議そうな声を出した。

みんなから若干可哀想な子を見るような目を向けられて叶は慌てる。

「あれ、もしかして分かってないの私だけ？」

「…まあ、叶は当事者だけど部外者だったからね。」

「叶は知らない。」

真奈美と明夜のフォローに叶も思い至った。

「あ、オーオーですね。」



「だろうな。何にせよ下沢に言ったように八重花に聞かなきゃわからない。」  
結局身になる話にはならないからと美味しいスイーツの話で叶と真奈美が始め、当然明夜が興味を持ち、由良も誘って甘いものを食べに行く計画を立てているうちに八重花の家に着いたのだった。

「八重花、来たぞ。」

由良が先頭でドアを開けて入ると部屋の中は暗く、パソコンのディスプレイの明かりに照らされていた。

「あー、八重花ちゃん。ちゃんとカーテン開けないと駄目だよ。」

「…私、日光を浴びると灰になるのよ。」

「ハイになる？」

「…いいわ、開けてちょうだい。」

叶の真顔のギャグにごっそりと精神力を奪われた八重花は適当に手をヒラヒラ振った。

叶がカーテンを開けると日差しが入ってきて部屋を明るく染める。

うつすらと見えていたが部屋全体が明るみになると机の上だけでなく床にも印刷された紙が散らばっていた。

「よく来てくれたわね。叶、悪いんだけどお茶の用意をお願い。お母さんがいなくなったら適当にやってくれていいわ。」

「うん、わかった。」

勝手知ったる友人宅で叶は特に嫌がることもなく部屋を出ていった。ガチャリと部屋のドアが閉まるのを見届けてから由良はため息をついた。

「それで、カナに聞かせられないような情報でも見つかったか？」

八重花はフツと笑うだけで肯定も否定もせずにパソコンに向き直った。

「幸か不幸か、オーの狙いが見えてきたわ。」

普通なら喜ばしいことだが八重花の表情はむしろ不幸寄りだった。

叶とオーの戦闘を録画した映像と同期していくつかのグラフが変動

しているが由良たちが見ても何が何やら全くわからない。

「どうやらオーは強力な力を持つ聖剣や魔剣を手に入れようとしているみたいね。もっか一番の標的が叶のオリビンで次が真奈美のスピネルね。」

「ジュエルはどうなんだ？」

「オーにとってジュエルの質はそれほど高くないみたい。多分シンボルとソルシエルが目的だったのよ。だけどソルシエルは無くなっているから必然的にシンボルを持つ叶と真奈美が狙われていると。」

八重花がそれぞれのデータから結論を導き出した説明をするが他の3人はちんぷんかんぷんだった。

「お茶淹れてきたよ。」

そこに叶がトレイに紅茶とクッキーを乗せて戻ってきた。

オーの標的になっていていることはもちろん、戦闘をこっそり隠し撮りしていたことがバレるのはいろいろと不安にさせたりして悪いので部屋のドアが開くのと同時に動画は閉じられていた。

その動作を驚くことなく寸分変わらずにバツボタンを押せるあたりが八重花の地味にすごいところである。

「本当に適當ね。」

八重花の適當とはいいい加減ではなくほどよくあてはまるの方だったがそんな無駄に高度な言葉遊びに気付くわけもなく

「あ、ごめんね、勝手にいろいろ使って。」

叶は恐縮するし

「これで適當なら本気のおもてなしはどうなるんだ？」

「じゅるり。」

由良と明夜は東條家について考え始めてしまった。

「あはは。」

真奈美だけは分かったようで今の現状を見て笑っていた。

「それで八重花ちゃん、どんなご用事？」

テーブルに着いてお茶を囲んで一息ついた辺りで叶が切り出した。本題の1つは叶以外には伝わったが八重花の用件はそれだけではない。

むしろさっきのはオーオーオーの事後報告でありこちらが今日の本題と言えた。

「ソルシエール復活計画についてよ。」

それを聞いて全員が「クッキーを食べている明夜以外が動きを止めた。」

「これまで体育祭の訓練と称して特訓のメニューを消化してきたけど成果らしい成果は得られていないわ。」

「特訓の効果で今のままでもオーと戦えそうだけどな。」

由良はクツクツと笑うが実際に生身でオーと戦ったのだから笑い事ではない。

八重花に軽く睨まれて由良は肩を竦めて黙った。

「その結果から考えて肉体を追い詰めるだけではソルシエールは反応しないと判断したわ。やっぱり敵との交戦での緊迫感や集中力が必要だと思うのよ。」

八重花はお茶を飲むと周囲に散乱した紙を漁り出した。

そして目的のものが見つかったらしくテーブルの上に置いた。

「だからこれからは叶と真奈美のどちらかと出来るだけ一緒にいてオーとの戦闘に介入するわよ。」

八重花の示した紙には組み合わせの表が書いてあった。

「あれ、八重花の名前がないね？」

そこには叶・由良、叶・明夜、真奈美・明夜、真奈美・由良の組み合わせだけで八重花の名前がない。

「特訓はしたけれど私はこの2人みたいな戦いは無理なもの。私は後方での作戦指示につかせてもらおうわ。実際に効果があったら何か手を考えるってことで。」

「つまり俺たちは実験台って訳だな。」

「まあ、そうなるわね。」

八重花は悪びれず答え、由良も別に怒っている様子はない。

今までの特訓もそれはそれで危険だったが今度は本当に命が危ぶまれる手段だった。

しかし代案はなく、一番可能性がありそうな策に思えた。

「俺と明夜だと威力は俺の方が上でそっちは真奈美か。なら俺がカナと組んだ方がバランスがいいか。」

「明夜のスピードで翻弄して叶が攻撃って方法もあるけど…確かに大振りの攻撃はあまり動かない叶の方がやりやすそうね。」

もともとどちらかが決まればそれで決定なので由良と八重花が決めてしまった。

それに異論を唱えるような者はいないが。

「由良お姉ちゃん、よろしくお願いします。」

「こっちこそ止めは任せるぞ。」

ぺこりとお辞儀をする叶の頭を叩き

「よろしく。」

「うん。」

真奈美と明夜も問題なしで「第二次ソルシエル復活計画」がスタートした。

その頃、学校ではヴァルキリーがヴァルハラに集まっていた。

先日の胸騒ぎから今日は暇さえあれば悠莉を訪ねていた紗香もヴァルハラには入らず

「気を付けてくださいね。特にあの神峰先輩には。」

と真顔で忠告して帰っていった。

今日もこれからジュエルの訓練だという。

悠莉が部屋に入るとすでに全員集まっていた。

「遅くなりました。」

「それよりも大丈夫なの？」

席に着くと美保が眼鏡の奥の瞳に心配を見せる。

紗香の言葉と美保の態度とのギャップにくすりと笑い、

「美保さんが心配してくださるなんて、ジュエルの雨でも降るかも  
しれませんね。」

あえて茶化す。

「何が珍しいのよ!」

打てば響く美保の反応を楽しみつつ同様の目を向けてくるヴァルキ  
リーのメンバーに微笑みかける。

「どうかしました?」

「うーん、悠莉の場合それが強がりとか冗談なのか本当は何でもな  
いと思ってるのか判断しづらいね。」

良子が呆れたような微妙な顔をした。

それは全員が思っている事だった。

悠莉は葵衣の淹れた紅茶を飲む。

「後者としておきましよう。」

悠莉は他者の弱味を暴くのは好きだが他者に弱味を見せることは好  
まない。

コランダムの壁は他者を心に入れず拒絶するための壁だから。

「悠莉がそういうならいいけどね。」

ろくに心配もさせてくれないので何も言えず静かになると葵衣が手  
を挙げた。

「先日、遂にジュエルに対してオーが行動を見せました。実質的に  
は交戦ではなく監視であったと報告を受けていますが今後は襲撃の  
可能性も懸念されますのでご注意ください。」

「おー。」

「姉さん、ふざけないで下さい。」

ノリとしては正しかったのに怒られてしよげる緑里。

タイミングを逃したものの良子も同じことをしようとしていたので  
未遂に終わってホッと胸を撫で下ろした。

「悠莉んとこのジュエルを見に来たってことはやっぱり一番ジュエ  
ルが成長してるってこと?」

美保は不服そうに誰にもなく尋ねる。

美保だつて手抜きをしているわけではなく美保なりに全力でジュエルを…

「いびつていると。」

「…何に対してかわからないけど悠莉、絶対あたしのこと馬鹿にしたわよね？」

「うふふ、何のことでしょう？」

悠莉と美保のやり取りはいつも通りなのでそのまま美保の疑問を考え始める。

「ジュエルの成長という意味では確かに悠莉様が担当された東北地区が大きくなっています。しかし組織、隊として考えた場合にはその限りではなく現段階では優劣をつけることはできません。」

葵衣は得られたデータからの客観的意見を述べるが、やはりヴァルキリーのメンバーの主観的にはオーの襲撃を受けた悠莉の育成に興味がある。

「私は下沢ジュエル隊を作るために東北へと赴いているわけではありませんから。見解の相違です。」

だが悠莉は比較の前提条件を事も無げに否定した。

葵衣は何も言わないが美保たちはそれでは納得できるわけもない。

「どういうことよ？」

「まさかジュエルを虐めたくて行ってる訳じゃないでしょ？」

良子はあるのか？と半信半疑だったが悠莉は微笑みながら首を横に振って否定した。

「まさかそこまで暇ではありませんよ。その程度のことでしたら美保さんで…コホン、何でもありませんよ。」

「ちよつと待ちなさい！そこを詳しく…」

「美保、今はそんなことより悠莉の考えを聞かないと。」

美保の存在意義は悠莉の考え方以下だと緑里に言われて美保撃沈。そして悠莉は当然フォローしない。

「私が行っているのは強力な部隊の訓練ではなく、グラマリーを扱

えるジュエルの育成です。」

それが悠莉の志。

ひたすらに敵対心を煽り、幾度も叩き伏せているのはそこから這い上がる力のあるジュエルを見極めるためだった。

「八重花さんのジュエルだった桐沢茜さんはスピネルに覚醒する前の芦屋真奈美さんを圧倒していました。やはりジュエルを持つからにはグラマリーを発現させられるようにするべきだと考え、私という敵を想定して力を引き出そうとしているのです。」

悠莉はそれを優しげに語る。

憎まれ役を買って出てグラマリーの発現条件を探す姿は献身的に映った。

「実際、悠莉様の指導によりいくつかジュエルの成長促進に繋がるトレーニングが見つかっています。」

客観的な葵衣までもが悠莉を褒める。

「それならあたしのところも厳しくするかな？」

「ボクはとりあえず集団戦闘の追求でいいよ。」

悠莉に感化されて悩む良子と自分の方針を貫く緑里。

ふと美保が睨むような目で外を見ていた。

悠莉が気付いて声をかける。

「どうかしましたか？」

「…ねえ、そのグラマリーを使えるようになったジュエル、東條八重花が辞めた後どこに行ったの？」

グラマリーを手に入れた本人に聞けば悠莉のように危険な真似をしなくてもグラマリー取得のプロセスがわかるはずである。

だが葵衣は首を横に振った。

「ジュエル、桐沢茜さんは魔女ファブレとの決戦の後に行方不明となっております。」災害”による死亡の可能性がささやかれておりますが現状では判断しかねます。」

ファブレとの戦い、”災害”は人々に恐怖を植え付けたが、その真実を知る者はごく僅かだった。

あまりの恐怖に多くの人が記憶を自ら封じたのだらうというのがもっぱらの見解だった。

「妙な話ね。普通なら東條八重花が連れていくでしょ？」

「詳しくは存じ上げておりませんが戦いが終わった後に迎えに行つたときにはすでにその姿はなかったと聞いております。」

普通に納得しそうになったがふと葵衣の言動におかしな点を感じた美保は首を傾げた。

「誰に？」

「東條様です。」

敵であるはずの八重花本人に直接聞ける葵衣の豪胆さに美保は驚いて目をぱちくりさせた。

「何にせよジュエルのグラマリー発現方法が分からない以上私たちが検討していくしかありません。」

悠莉が手をポンと合わせて議題を締めくくる。

こうしてジュエル計画は着々と進んでいく。

「でも悠莉、絶対あんた『厳しく当たって悔しげに顔を歪める皆さんの表情がステキ』とか思ってるんでしょ？」

「…。」

「目を逸らした！」

「ふう。」

「あからさまにため息ついた！」

「これだから美保さんは…。」

「何よ、その蔑んだ目はー！」



## 第42話 久美の謎を追え

叶が登校しようと家の外に出ると

「あれ、由良お姉ちゃん？おはようございます。」

塀に背を預けるようにして由良が立っていた。

「よう。」

軽く手をあげて返事をする由良だったがそれだけでたまたま前を横切ろうとしていた男子生徒がビクツと怯えて小走りに通過していった。

「……。」

「……。」

変な現場を見た、見られたの気まずい沈黙が降りる。

「と、とにかく学校に行きましょか。」

叶は努めて普通に声をかけようとして最初から失敗し、やや強引に由良の手を取って歩き出した。

「……俺って、そんなに怖いかな？」

結構落ち込んだ様子の由良だが、残念なことによく知り合う前は似たような反応を示していた叶には弁解できず、行動を共にする初日から微妙な感じになってしまっていた。

結局会話はあまり進まず

「じゃあな。」

由良は昇降口で別れた。

「うーん。何とか由良お姉ちゃんを励まさないと。」

「叶さん。」

上履きに履き替えながら励ます方法を考えていると下駄箱の陰に隠れるようにした人から弱々しい声をかけられた。

「っ！琴お姉ちゃん？」

突然だったので驚き、琴だと気付いて安堵するが様子がおかしい。

制服姿が、ではない。

「どうしたんですか？」

「…朝、叶さんを見かけたのですがずっと羽佐間由良さんと一緒に  
だったので声をかけられませんでした。」

琴としては寂しかった事をアピールしているだけの甘えだったのだ  
が、叶には由良が怖くて近づけなかったと言っているようにしか聞  
こえなかった。

（励ますの、無理かも。）

叶はいろんな感情の結論を苦笑で表すのだった。

お姉ちゃんズに絡まれた叶が教室に向かうと

「叶ー！」

いきなり裕子が飛び付いてきた。

「わわっ、裕子ちゃん？どうしたの、芳賀君に苛められた？」

「作倉まで…俺、そんなにひどい奴に見えるのか？」

しかもいつの間にか近くにいる芳賀がシヨックを受けて落ち込み出  
した。

今日は会う人みんな落ち込ませている気がする叶はとりあえず裕子  
を助けようと決意した。

「それで裕子ちゃん、どうしたの？」

優しく抱き締めてポンポンと背中を叩きながらあやすと裕子が落ち  
ついてきた。

「お母さんだ。」

「お母さんね。」

…一部おかしな反応を見せるクラスメイトがいたが気にしない。

「久美が、久美が最近遊んでくれないの！」

確かにこれだけの騒ぎになっているのにははと割り込んでこな  
いどころかまだ来ていない。

真奈美は定期診断で病院に行っていて遅刻なのでそれを除けばほと

んどのクラスメイトが登校してきている。

「遊んでくれないって、遊びに誘っても付き合ってくれないの?」

”災害”以降裕子と久美はとても仲が良く、芳賀の存在が霞むほどだった。

そんな久美が突然相手にしなくなるなど考えにくかった。

「あ!」

裕子が歓喜とも悲鳴ともつかない声を上げた。

見ると久美が教室に入ってきたところで、普段なら抱き合っている叶と裕子を面白がって声をかけてくるはずであった。

「...」

それが一瞥しただけで机に向かってしまった。

叶は驚き、裕子は今にも泣きそうになっていた。

チャイムが鳴る。

すぐさま問いただすことができなくなり席に戻った叶は

(どうしたんだろう、久美ちゃん?)

原因の究明を心に誓うのだった。

1時限目

「...」

カリカリカリカリ

2時限目

「...」

カリカリカリカリ

3時限目...以下略。

(やっぱりおかしい。)

昼休みまで久美を観察していた叶は改めて久美の様子のおかしさに気付いた。

(久美ちゃんが、真面目に授業を受けてる。)

多分に失礼な話だが周知の事実だし本人も認めていることだった。

それが無駄口一つ叩かず板書に集中し、さらには休み時間も教科書

を開く始末。

もはや久美の皮を被った別人なんじゃないかという疑惑まで思い浮かぶ。

それは久美がデーモンに変わった姿を思い出させた。

叶は頭を振って嫌な想像を払い除ける。

（久美ちゃんはまだデーモンとは関係ないよ。）

結局叶1人が悩んだところで安楽椅子の探偵ではないので答えは出ない。

ならば叶が取る行動は1つだった。

「なるほど、それは確かにおかしいわね。」

「心を入れ換えて真面目になったと思われない辺りにご本人の人柄が見えますね。」

昼休みの食堂には叶と八重花、そして琴の姿があった。

由良と明夜は久美とはあまり関わりがないし真奈美は5時限目から登校してくると連絡をもらっていた。

琴がいるのは”太宮様”を当てにしたわけではなく単純にご飯を誘いに来たので誘っただけだったりする。

「うん、特に裕子ちゃんを避けてるように見えたよ。」

八重花がいつそう難しい顔をして顎を手を添えた。

その姿はまるで少女探偵のように決まっていた。

「まさか裕子、久美可愛さあまり襲ったんじゃない？」

「まあ。」

推理は破天荒だったが。

そして正しく言葉の意味を読み取った琴は頬を赤くして口許を手で隠していた。

「酷いことをしたなら裕子ちゃんもわかるはずだよ？」

当然叶は正しくない方の意味に取って否定する。

どちらだったとしても叶のいう通りである。

「そうね。つまり裕子が気付かないところで傷つけたか、あるいは

裕子とは無関係だと考えるのが妥当ね。」

「しかしその場合、情報の取得は本人に直接聞く以外にありませんね。」

相談を持ちかけられたのは叶なのに当人を放り出したまま議題が進行していくのを見て叶もどんよりと暗雲を背負った。

「何を落ち込んでるのか知らないけどちゃんと聞いてた？」

「う、うん？」

突然話を振られて当然聞いていなかった叶は曖昧にしか答えられなかった。

「だから、直接久美に聞くのは叶に任せるわ。」

いつの間にかそんな話になっていたらしいがそれは一番手っ取り早くて一番大変な方法だ。

「直接聞くのはいいけど、私より八重花ちゃんの方が上手く聞き出せるんじゃないかな？」

いろいろと頭の回る八重花の方が話術に長けているから適任だと叶は思ったが八重花はふむと悩むような素振りを見せた。

「久美がもう少し話ができるようなら私が行ってもいいけど、今は無理ね。多分声をかけても無視されるかすぐに話を切り上げられるわ。」

「友達なのにそんなこと……」

「裕子が無視されてるのよ。あり得ない話じゃないわ。」  
確かに泣きついてきた裕子を思い出して反論できなくなる。

八重花は人差し指を振って注意を向けさせる。

「それに今の久美みたいな状態の人間は警戒心が強いから鋭いのよ。話術で聞き出そうとするとそれが伝わって警戒されて口を閉ざしてしまう。そういう意味でも叶が適任なのよ。」

「？何で私の方がいいの？」

叶が首をかしげると八重花も琴も微笑んだ。

「叶さんは癒し系ですから。警戒させる相手とは対極にいる存在です。」

「そういうことよ。叶を無視するのは難しいはずだから。」  
2人とも言わないが叶の困って泣きそうになった顔を破壊力は凄まじく罪悪感を抱かない相手はいないだろうという最大の武器だ。  
無自覚な最終兵器は

「うーん、わかった、やってみるね。」  
やっぱり良く分かっていないようだった。

そうして午後の授業でも観察していたが食後の満腹感と暖かな陽気で舟を漕ぐ生徒が多い中、久美は眠そうにしながらもちゃんと授業を聞いていた。

「それではここまで。」  
5時限目の授業が終わると久美は教室を出ていった。  
それを見送っていた叶は

「叶、久美を気にしてるみたいだったけどどうかした？」  
午後から出席している真奈美に声をかけられた。  
叶自身なんとなく見られている感じがしていたが真奈美だったらしい。

「うん、ちょっとね。」  
久美が戻ってこないか気にしながらかいつまんで事情を説明する。  
「確かに真面目に授業を受けてるのを見て不思議には思ってたんだ。  
あたしも手伝うよ。」

「ありがとう、真奈美ちゃん。」  
そうこうしているうちに休み時間は少なくなり、久美も戻ってきた。  
一瞬目があつたがすぐに逸らされた。

「間違いなくおかしいね。」  
「うん。」  
作戦の開始を放課後に決め、最後の授業に取りかかるのだった。

「久美ちゃん。」  
ホームルーム終了と同時に小走りに帰ろうとする久美を叶は呼び止

めた。

さすがに無視することはなかったが困った顔をしている。

「…かなつち、久美、ちよつと急いでるの。」  
「やはとは笑わない。」

それだけで久美の印象が暗く感じた。

無視はしないが久美は叶との会話を切り上げたがっている。

それが悲しくて、でも久美を苦しめるのも嫌で

「それじゃあ1つだけ聞かせて？」

叶は一番聞きたいことを尋ねる。

久美はそわそわしながらも頷いた。

「…久美ちゃんは、私たちが嫌いになっちゃった？」

それが叶の聞きたかったこと。

裕子を避けるようになったのも叶たちと話をしないこともすべてそういうことなら辻褃が合うから。

一番信じたくない可能性をあえて叶は質問した。

「そんなこと！…っ！」

久美は何かを叫ぼうとしたが顔を伏せ、そのまま逃げるように駆けていってしまった。

「久美ちゃん！」

呼び止めるが久美は立ち止まらず階段の方に折れ曲がって見えなくなった。

何事かと帰り際の生徒たちが見ているが叶はただ走り去った久美の面影を追いかけていた。

「面白いことになったわね。」

突然の声に振り返るといつの間にか八重花が後ろに立っていた。

そして琴もいる。

「八重花ちゃん、琴お姉ちゃん。」

叶は安心して堪えていた涙が頬を伝った。

その可愛らしさに琴が鼻血を吹きかけて悶絶している間に八重花が抱き締めた。

「私、何も聞けなかった。ごめんね。」

ギョツと八重花に抱きついて涙を流す叶。

教室のドアの陰で様子を伺っていた真奈美も出てきて琴と一緒にギヤラリーからの壁になった。

八重花はボンと叶の頭に手を添える。

「何を言ってるの？あれ以上の答えはそうそう聞き出せないわよ。」

その声は励ますための方便には聞こえないほど自信に満ちており、八重花の表情もそれを雄弁に物語っていた。

「それってどういう…」

「それはあと。真奈美、残りの2人に昇降口に集合って連絡して。」

「わかった。」

「乗り掛かった船です。わたくしもお付き合います。」

瞬く間に準備が進んでいき

「行くわよ、叶。」

「うん。」

とりあえず何も分からないまま叶は動き出した。

前方に小走りで移動する久美が見える。

” Innocent Vision ” と琴はその後をつけていた。

「今日のミッションは中山の尾行か？」

「それは私たちの方で2人を呼んだのは復活計画の可能性があるからよ。」

元は今日から2人で行動する予定だったがそれを八重花が全員での移動に切り替えたのである。

「久美が、変。」

「そうなんだ。あたしたちはその原因を探ってるんだ。」

明夜も久美の異常に気が付いた。



「八重花ちゃん、さっきのあれ以上の答えはないってどういうこと？」

「細かい事情を聞くよりも久美の気持ちの方が分かったからよ。久美は否定しようとしているように見えた。だけどそれを言わずに逃げ出した。本音を言えない状況にあることは間違いないわ。そしてそれは久美自身ではなく第三者が関わっている。」

「第三者!？」

叶が驚きの声を上げて周囲が何事かと目を向けてくる。

明らかに怪しい女子高生集団だったが由良効果で誰も関わってこようとしてこなかった。

「そう考えればいろいろと辻褃が合うのよ。私たちを避けているのも授業を真面目に受けているのもその人物の差し金があるいは久美自身が変わろうとしていると考えられる。そこにあの久美の反応。」

久美、弱味でも握られたのかしら？」

「それでしたらご両親に成績の事を注意されたのではないですか？」

「その可能性は低いわ。久美の家はどちらかと言えば放任だもの。」  
話している間にも久美は駅前の方に向かっていく。

「電車に乗るのか？あんまり遠出だと今日は持ち合わせがないんだが。」

「状況次第ではね。その時は利子付きで貸してあげるわ。」

八重花が由良に悪い金融を持ちかけていたがそれは必要なかった。駅前で久美が立ち止まったからだ。

「待ち合わせかな？」

「相手の顔が拝めるのは好都合。」

久美が顔を上げた。

遠くて声は聞こえないが間違いない。

話しているのは

( (男ー!?) ) )

スーツ姿の青年だった。  
皆は呆然と見送った。

### 第43話 本当に大切なもの

久美が男性と町の方へ歩いていくのを尾行しながらもメンバーは混乱の真つ最中だった。

「制服女子高生とスーツ姿の男の密会か。想像以上の展開だな。」

「この状況はやはり援助交…」

「琴お姉ちゃん、恋人かもしれないよ？」

危険な発想に行き着こうとする琴に慌てて叶がフォローを入れた。

確かに程度の差はあれ同じことをみんな考えはしたが。

「それにしても久美に男の人が。やっぱりあの人が久美が変わった原因かな？」

「男のために女は変わる。確かによくあることね。」

八重花はそう口にしつつも固い表情をしていた。

簡単に久美が変わった理由が分かっただけで済まないようだ。

「…解せないわ。」

ポツリと八重花が呟いた。

表情は固いまま、顎に手を添える。

「どうしたの？」

「久美にもし恋人が出来たとしたら真つ先に私たちに報告するはずよ。それに叶に見せた反応は恋人の事を恥ずかしくて隠しているって感じじゃなかった。もしかしてあの男に脅されてるのかしら？」

八重花が物騒なことを呟くが男性に関する情報が皆無いため否定も肯定も出来ない。

次第に口数が減っていき、久美たちを追うことに集中する。

久美は緊張しているように見えるが、年上の恋人を前にしているからなのかそれ以外なのはわからない。

「曲がった。どこかに入るみたいだな。」

「これでホテルなら確定です。」

「琴お姉ちゃん、怒りますよ？…由良お姉ちゃんが。」

「ごめんなさい。」

叶に怒られたからなのか由良の名前が出たからなのか琴はすぐに謝った。

脅しに使ったことを謝ろうと叶は由良に目を向けたが

「遊んでいる場合じゃないわ。行くわよ。」

八重花が急かして移動を始めてしまいタイミングを逸してしまった。久美たちが曲がった道に入るとそこには既に2人の姿はなく

「学進館予備校？」

めぼしい建物はそこだけだった。

「えーと、これまでの観察結果をまとめますと中山久美さんは成績に関してご両親と話したなどの理由で予備校に通うようになり勉強を頑張るために叶さんたちとの付き合い方が変わった、そういうことですか？」

確かに久美の成績は良くないというが悪い。

どんなに温厚な両親であつても進路を考えればそろそろ手を打った方がいいと考えてもおかしくない。

久美や久美の親をよく知らない由良や琴ならそう考える。

「うーん。」

だが久美の親友たちは首を捻っていた。

「いくら何でも変わりすぎだよな。」

「久美のお母さん、どっちかと言えば遊んできなさいって言うタイプだもんね。」

「一家全員が洗脳でもされない限りね。」

そこまで言わしめる中山一家に興味は湧く由良と琴だったが建物に入られた以上、これ以上の尾行は見つかる可能性が高すぎた。

「ここまでだな。」

「何にせよ問題になるような大変な事態にはなっていないかったので、すからそれほど心配する必要はありませんよ。」

年長者2人の判断に八重花も反論しないことで尾行は終わりを迎える。

明日以降にそれとなく予備校の事を聞き出し、態度を少し改善するよう説得すれば今回の騒動はこれで終わり。  
…その、はずだった。

「…まだ、です。」

帰ろうとしていたメンバーは1人学進館予備校を見続けている叶の呟きを聞いて立ち止まった。

「叶さん、何が心配なんですか？ここは一般に認知されている普通の予備校でヴァルキリーやオーとは関わりありません。いろいろと気を張りすぎて過敏になっているのでしょうか。」

叶は俯く。

「琴の言うように”非日常”への関わりで”日常”のわずかな変化に敏感になっているのは感じていた。」

「だからこそ、叶は引けない。」

「久美ちゃんが、泣きそうに見えたからです。」

叶が動く理由はそれで十分だった。

久美は叶がまだ気弱な少女だった頃からの親友なのだから。沈黙が仲間を包み込む。

「だがそれは長くは続かなかった。」

「やっぱり、見過ごせないね。」

「謎の探求を放り出そうとするなんて私らしくないわね。」  
心強い親友たちが賛同してくれた。

「つたく、しょうがねえな。」

「叶さんは意外と頑固ですね。」

大人な解釈を持つ姉2人も笑い、そしてずっと無口だった明夜が叶に向けて親指を立ててみせた。

「潜入調査する。」

『次はこの問題を制限時間2分。』

「には、早すぎます。」

「その口癖は止めるよう言ったはずだけど？バカっぽく見られるよ？」

「はい…ごめんなさい。」

「ほら、あと1分。」

「にゃ…！」

「…君は本当に覚えが悪いね。やっぱり友達も頭の悪い子たちばかりなんだろう？」

「そんなことないよ！」

「敬語。」

「…」

予備校近くのファーストフードで明夜が八重花のICレコーダーを使って回収してきた音を聞いた面々は怒りに顔を歪めていた。

「なんだ、これはよ？」

由良も

「これは教育とは呼べません。矯正や調教のような悪質なものです。」

「

琴も

「こつやって友達に付き合っなくなって怒られたんだろうね。久美、可

哀想に。」

真奈美も

「口調まで強要するなんて行きすぎてるわね。」

八重花も、口々にこの教師に当たる男性、久美が呼んでいたのは相原という名字の男に対する不平を上げていく。

言葉の端々に久美への侮辱の色がありありと滲んでいて聞いているだけで胸がむかついてきた。

「久美ちゃん。」

叶が涙を流して悲しむ。

辛い境遇にある久美への心配はもちろんのこと、それに気付いてあ

げられなかった自分を悔いていた。

「あつたわ。相原琢磨、学進館予備校の非常勤教師。」

八重花はミニノートを使いネットで相原について調べていた。

「口コミはなし。新人なのか情報を差し止めているのか。」

「一予備校の教師の情報なんてそうそう転がってないだろ。明夜、こいつはどんな野郎だった？」

「聞いたまま。」

嫌な奴だったと全員が脳内変換。

「この先生に直談判して久美の待遇を改善させるべきだね。」

真奈美は冷静に振る舞っているが今にも飛び出していきたそうな焦りが見えた。

それだけ久美が大事だという思いの表れだがその思いに縛られて回りが見えなくなっている。

八重花がパソコンの画面から顔を上げて真奈美を止める。

「落ち着きなさい、真奈美。今から乗り込んでいくのはさすがにまずいわよ。こつちが悪人にされて最悪警察沙汰になるわ。」

「でも！」

叫んで立ち上がるうとする真奈美を琴が押さえる。

「行くなどは言っていないよ。ようはタイミングの問題です。」

琴が意味深な笑みを向けると八重花はフツと笑って頷いた。

「帰りのタイミングで仕掛けるわよ。」

学進館予備校の出口から久美と相原が出てくる。

久美は見るからにくったりして足元もふらついていた。

「君なりに頑張っていることは認めるよ。僕の言う通りにしてれば間違いない。」

「…はい。」

虚ろな目で頷く久美は相原の少し後ろを歩き出した。

” Innocent Vision ”の皆は姿を現さない。

八重花と由良、真奈美、琴は走っていた。

「まったく、最悪のタイミングだな！」

「あの相原という男性が犯人という可能性は？」

「まだ私たちのことを知らないからそれはないはずよ。」

「それより急ごう。あたしが遅れたら置いてって。」

4人は全力で走る。

遅れたのには理由があった。

それは時間を見計らってファーストフードを出て学進館予備校に向かう途中だった。

「オーツッ！」

遠吠えのような叫びと共に周囲の空間が改変されていく。

「結界！？」

「このままじゃ閉じ込められるぞ！」

夜の明るさはそのままに歪んだ異質な光へと変わっていく世界。

「オリビン！癒しの光！」

その世界を灯火の光が照らし出した。

世界の改変が停止する。

「オーは私が食い止めるから、八重花ちゃんたちは久美ちゃんのとこに行つて。」

叶はオリビンを掲げたまま腕を震わせていた。

強引に結界を止めているため負荷がかかっているのだ。

「それならあたしも……」

「他のオーがいるかもしれないから真奈美ちゃんはみんなと一緒に」



行つて。」

叶は無理をしながらも笑顔を浮かべて振り返る。

「久美ちゃんをお願いね。」

真奈美は一瞬だけ迷いを見せて瞳を閉ざし、開いたときにはしつかりと頷いた。

「…わかつた。行くよ、八重花。」

「だがさすがにカナ1人に任せるのは。くっ、こんなことなら鉄パイプを持ってくるんだつた。」

由良が悔しそうに手を打ち付けるがそういう問題ではない。

「そうしたらここに来る前に職務質問よ。明夜、任せるわ。」

「了解。」

明夜がどこからか工事現場の黄色と黒のバーを持ってきて敬礼した。

「叶さん。」

「琴お姉ちゃんも。」

琴は頷いて叶に背を向ける。

時間をかけるだけ叶が辛くなると気付いたから。

真奈美を先頭に閉じかけた結界を突っ切っていく。

「オーツ！」

折角の一網打尽の機会を邪魔されてオーが吠えるが邪魔に感じたのはむしろ叶の方だった。

「…」

「叶？」

いつになく真剣な様子に明夜が戸惑っていた。

「すぐに終わらせて駆けつける。明夜ちゃん、手伝つて。」

「うん。」

オーが姿を見せた瞬間、叶たちは攻撃を開始していた。

「久美！」

「ッ！？」

真奈美が久美と相原の姿を見つけて声をかけるとビクリと震えて足

を止めた。

相原が面倒そうに振り返り、久美も怯えたように振り返る。

「…どうして、ここに？」

「久美が心配だったからね。」

詳細は語るだけ無駄だ。

今はその思いが伝わればいい。

「…。」

久美は黙ってしまい俯いてしまった。

「…ふん。」

相原が久美の前に出ると八重花たちを眺め、露骨に小馬鹿にした笑いを漏らした。

「なるほど、中山君の成績が悪いのはやはり悪い友達が原因だったね。」

「なんだと？」

「眼帯少女にいかにも不良みたいな子がいる。しかも中山君が驚いていたってことは後を尾けてきたんだろう？悪い友達にしか見えないな。」

真奈美と由良の外見はともかく尾行に関しては八重花たちに非があるので言い返せない。

相原は勝ち誇ったように口の端を吊り上げて振り返った。

「わかっただろう？友達なんていない方がいい。僕の言う通りに勉強していれば必ずご両親は喜んでくれるよ。」

「あ、う…。」

久美は迷っていた。

父親が持ちかけた予備校の話に1年の時の悲惨な成績を思い出して頷いた。

勉強は厳しかったし友達と付き合うと言われて辛かったが確かに理解できることは増えたし真面目に勉強していると両親は喜んでくれた。

ただ真奈美は心配してきてくれた。

八重花も、あまり関わりのない由良や琴まで、そしてここにはいないけど叶や裕子も心配してくれている。

(どうしたらいいか、バカだからわからないよあ。)

久美は頭がごちゃごちゃになって訳が分からなくなった。勉強を取るべきか、友達を取るべきか決められない。

「友達か勉強か、その2択でしか考えられないなんて器の小さい男ね。」

だから八重花の言葉に久美は震えた。

「…なんだって？」

相原はギロリと睨み付けるが八重花は揺らがない。

「要するにご自身に友達がおらず勉強に明け暮れて成績を上げたため、それを他者に押し付けようとしているのでしょうか？」

琴も口許の笑みを手で隠して加勢する。

凶星だったのか相原は顔を真っ赤にして拳を震わせた。

「うるさい！友達なんかいらぬし実際にこうやって生徒の成績は上がってるんだ！文句はないだろう！」

「そうね。でも、その勉強法を親は理解してるのかしら？」

八重花が問い詰めると相原はわずかに後退った。

「…もちろんだ。」

「そう。…真奈美。」

八重花と琴が前に出て隠れていた真奈美が前に出てくる。

その手には携帯電話を握って。

相原の顔が引きつる。

「そういうことだそうです。あ、はい。」

真奈美は一言二言話すとさらに前に出て相原に携帯電話を差し出した。

震える手で相原は耳に当てる。

話術には自信があったから弁解すれば理解されると考えていた。

「先生？ごめんなさいね、せつかくですけど辞めさせていただきます。」

だが久美の母は聞く耳を持たず即決で解答を提示してきた。相原の頭が絶望に染まる。

「何ですか！？絶対に成績は上がって有名大学にだって…」

「久美ちゃんはきつと大学には行きません。それなら難しい勉強をするよりも今を友達と楽しく過ごしてほしいんですよ。本当に大切なものはきつとそういうものだと思います。」

「そん、な…」

ガクツと膝をついて呆然とする相原の手から携帯を回収して真奈美は久美の前に立った。

「まな、ちん。」

「よく頑張ったね、久美。」

「…まなちんっ！」

ブワツと涙を溢れさせて久美が抱きついた。

「久美ちゃんはいいい友達を持ったわね。」

抱き締めた手に握る携帯から優しい母の声がする。

「うんっ！」

ようやく浮かべた笑顔はとても輝いていた。

父がろくに風評も調べずに予備校を推奨した。

もちろん久美の将来を心配した結果であり外聞など欠片も考えていなかった。

だからこそ母も何も言わなかった。

そして、何も言われなかったからこそ成績で落胆させてしまったと思っただ久美は言い出せず1人で頑張っていたのだ。

「久美！」

「にはは。」

だがそのささやかな悪夢も終わりを迎えた。

本当に大切なものは勉強とは別にある。

今日も久美の元気な笑い声が教室に響いていた。

#### 第44話 資格を持つ者

時は久美が大切なものを取り戻した日に少しだけ戻る。

叶は制服のままベッドに横になっていた。

制服が皺になるのは理解していたが疲れて起き上がるのも億劫だった。

明夜が家の前まで送ってくれなければ今ごろは道端で座り込んでいただろう。

「はうー、疲れた。」

もちろん戦闘での疲れもあるがそれ以上に叶を疲れさせたのは闖入者の存在だった。

明夜は黄色と黒が螺旋を描くポールを半分に折った二刀流でオーを翻弄していた。

縦横無尽に駆け回りバーで叩く。

元々攻撃力は度外視した武器チョイスなのでオーへの決定打には程遠い。

「オーッ！」

だが周囲を跳ね回られれば注意は当然そちらに向く。

明夜が大きく飛び上がり両手を振り上げた。

オーは迎撃するために上空を見上げる。

「ええい！」

叶の掛け声と共にザシュツと光の軌跡がオーに刻まれた。

オーは明夜に気を取られるあまり一瞬叶の存在を忘れていたのだ。

「オー！」

吠えながら消滅するオー。

だが結界はまだ消えない。

「まだいるみたいだね？」

「油断大敵。」

呼吸を整えて相手の出方を待つ。

人のいない結界の世界は静寂に包まれている。

互いの息づかいまで聞こえるほどだった。

ガサッ

後ろから聞こえた何か動く音に咄嗟に反応しようとした叶は

「逆。」

明夜の声に無理矢理意識を逆方向の前に戻した。

気が付けば前方からオーが突っ込んできていた。

「音じゃなくて気配で探る。」

明夜はポールを巧みに使ってオーの爪を受け流す。

正面から受けければ容易に折れ、切り裂かれるであろうポールは明夜

を守る盾として機能している。

その戦い方は叶の求めるものに近かった。

(明夜ちゃんの戦い方を盗む。)

叶は集中して明夜の一拳手一投足を追う。

「後ろからも来た。」

だがゆっくり見ている暇もなく別のオーの接近を明夜が戦いながら

知らせてきたため慌てて対応する。

「癒しの光！」

以前の戦闘で見つけたオーの動きを束縛する癒しの光で後方からの敵だけでなく明夜の相手をしていたオーの動きまで止め、さらには明夜の傷の回復まで行った。

今がオーを倒すチャンスだとオリビンを握り締めて叶が駆け出そうとした直後

「Innocent Vision」とオーの戦闘を確認。これより攻撃行動に移行します。」

結界の揺らぎの向こうからジュエルを引き連れた葵衣が現れた。

「ヴァルキリーがなんでここに？」

完全に形成された結界には外部からの干渉が出来ないことは以前確認していた。

ジュエルたちは揺らぎの向こうから現れた。

それは葉が八重花たちを行かせるために崩した結界のほころびだった。

ヴァルキリーの出現に驚いているうちに癒しの光の束縛の効果が弱まっていて、オーが再び叶たちに襲いかかるうとしていた。

「退く。」

言うが早いか明夜は葉を抱えて跳び、オーの攻撃範囲から飛び退いた。

オーは攻撃対象の逃亡に戸惑いを見せるがすぐにジュエルの集団を相手にすることを選択した。

叶と明夜は近くの屋根の上からその様子を観察する。

「明夜ちゃん、加勢しなくていいの？」

「ジュエルの力を見るいい機会。八重花がいないのが残念。」

戦略上明夜の判断は正しいが他人が傷つくかもしれない状況を見るのが辛い叶は戸惑ってしまう。

葉が迷っている間にも戦場は動き出していた。

「敵勢力は2体。私と村山さんを班長として二手に分かれてください。」

すぐさまジュエルの一団が二手に分かれてそれぞれのオーに武器を構える。

葵衣がエルバイトを振り上げ、

「戦闘開始。」

振り下ろした瞬間

「わあーっ！」

結界内の空気を震わせる勇ましい声を上げながらジュエルがオーに向けて突撃を開始した。



オーは素早く、攻撃は重い。

1人のジュエルでは支えきれず弾かれる。

しかしそれが2人、3人と増えていけば拮抗してくる。

葵衣は指揮を取りながらオーの力量を推し量っていた。

(ジュエル3人で抑え込むことが可能ですね。ならば…)

連れているのは急な呼び出しに応じた13人のジュエル。

2つに分かれているため6と7だがこれで3、3のチームが組める。

「3人チームを編成。一方が防御に回りその隙にもう一方のチームが攻撃。」

すぐさま3人チームが組み上がり攻防が分業された。

「…。」

紗香は1人輪から外れて全体を見ながら立ち尽くしている。

指揮を簡略にするためチーム分けの人数を3人としたがその結果として紗香が1人余ったのだ。

村山は特に指示を出すこともなく紗香を放置している。

村山自身、久々の戦闘で面には出さないが一杯一杯なのである。

「オーッ！」

物量による攻撃をオーはスペックの高さを駆使して捌いていく。

防御の後にはか攻撃が来ないパターンを読みきれば警戒するのは後発のチームだけでいい。

オーは初撃を甘めに入れて防御させ、攻撃してくるジュエルに対して攻撃を仕掛けた。

「きゃあ！」

咄嗟にガードするジュエルだったが弾かれて陣形が崩れた。

オーはその穴から飛び出すべく身を屈めた。

包囲を抜けられると集まったジュエルは周囲からの攻撃に守りに入らざるを得なくなり攻勢に出づらくなる。

それに気付いた葵衣はエルバイトに風を纏わせた。

(跳ばせは…！)

だがグラマリーを放つよりも早く  
ヒュン

飛来した長槍がオーの額に突き立った。

「オオーッ！」

仰け反り、悲鳴をあげるオーは完全に無防備になる。

誰もがその光景を呆然と見つめていた。

「い、今です！一斉攻撃！」

村山の指示でやるべきことを再認識したジュエルは

「やあああ！」

全力でオーに武器を振り下ろした。

2桁近い武器が突き刺さったままオーは声を上げることもなく消滅した。

「こちらも終わらせましょう。蜂矢の陣。」

「はい！」

葵衣の一声でジュエルが鎌の形を成す。

戦国時代の陣形を採り入れた型は定番だからこそ安定した強さを発揮する。

「突撃。」

「行くわよ！」

先陣を切る陣形に続くように鎌の陣形が突撃をかける。

「オオーッ！！！」

そのまま怒涛の如くオーを飲み込み、集団が通過し終えた時、オーは消滅していた。

戦闘を眺めていた叶と明夜は戦いが終わって肩の力を抜いた。

「凄かったね。」

敵の数こそ少ないが叶が見たのは合戦の姿そのものだった。

そしていつかオーではなく自分たちがああ場所にいるかもしれない

ことに戦慄を覚える。

「…。」

明夜は戦いが終わった戦場を見下ろしたままだった。

結界が溶け始めた。

あと数分もすれば元通り人で溢れる駅前が戻ってくる。

その喧騒が訪れるまでの静寂の中、1人の少女がジュエルに取り囲まれていた。

「何か用ですか？」

紗香が長槍のジュエルを回収した直後、味方であるジュエルたちが周囲を包囲した。

少なくとも礼を言われ、讃え合うような和やかな雰囲気ではない。

むしろもう一戦始めようかという緊迫感があった。

「後ろから槍を投げるなんて頭おかしんじゃない？」

「偶然オーに当たったから良かったものうちらに当たってたらどうするつもりだったのよ!？」

ぎゃーぎゃーと不平不満を口々に叫ぶ女たち。

一度溢れ出せばこれまでの鬱憤も一緒に流れ出して全方位から罵声が放たれる。

「あなたたち…」

「少し、様子を見ましよう。」

止めに入ろうとした村山を葵衣が止めた。

村山は葵衣の真意が分からず困惑していたが指示に従い足を止めた。紗香は吹き荒れる罵詈雑言の嵐が聞こえていないかのようにつきました顔をしていた。

ジュエルたちにはその歯牙にもかけていないような態度が気に食わなかった。

「なんとか言いなさいよ!」  
ガンッ

音を立てたのは叫んだジュエルではなく紗香の槍だった。

石突がアスファルトの地面を砕いていた。

「うるさい人たちですね。」

苛立たしげに周囲をねめつけた紗香はボゴリとアスファルトの塊が付いたままの槍を引き抜くと上下を逆転させて肩に担いだ。

それはまるで石のハンマーのようで、紗香はそれを軽々と持っている。

「あのタイミングを逃せばジュエルの中に死人が出ていましたよ。」

紗香の本質を見極めた言動をジュエルたちはきよとんとした後鼻で笑った。

「何をバカなことを言ってるのよ？あの時だってちよつと陣形が崩れただけでこつちの方が圧倒的に有利だったじゃない。」

賛同に沸くジュエルの集団。

非を認めない以前に状況を理解していなかったことを知り、紗香は落胆のため息をついて話を切り上げた。

だがそのため息を聞いて糾弾するジュエルはさらに苛立つ。

「気に食わないわね。言いたいことがあるならばつきり言いなさい

よ。」

「…。」

紗香は左目に朱色を宿しながらも冷めた目でジュエルを見る。

それは興味なんて欠片も持ち合わせていない色の無い目。

侮辱よりも低い、「無関心」の目だった。

短慮だが人の悪意に敏感な少女であるジュエルはそれに気づいて顔を真っ赤にした。

「あんたはあ！」

先頭に立って糾弾していたジュエルはカッとなってサーベルを振り上げた。

だがそれよりも早く

「はあっ！」

紗香の左目が強い朱色の輝きを放ち、石槌と化した槍を全力で地面

に打ち付けた。

槌と地面双方のアスファルトが砕けて無数のつぶてが飛び散っている。

「ぎゃあ！」

「わあ！」

前にいた者たちから次々に被害を受けていく。

接近してきていたジュエルは全身につぶてを受けて泡を吹きながら地面に倒れていた。

紗香はくるくると数回槍を回すと肩に担いで殺気の隠った視線をジュエルたちに叩きつけた。

小さいながらも気迫溢れる姿に年上のジュエルたちは戸惑いを見せる。

「お姉様方の属するヴァルキリーの指導を受けていてこの程度だというなら、わたしはここにいる全員を殺しますよ？」

怒気と殺気のない交ぜになった視線にジュエルは完全に気圧されていた。

「そこまです、綿貫紗香さん。」

そのタイミングで葵衣が割って入った。

ジュエルたちにとっては救いの女神のように見えた。

このまま怒られるであろう紗香を見て嘲笑する者もいた。

だが葵衣は紗香の前に立ち、その目を正面から見るとすぐに振り返った。

「本日の戦闘は終了です。私たちの敵の存在を理解し、今後の訓練に励んでください。」

事務的な挨拶で済ませて終わりにしようとする葵衣にさすがのジュエルたちも困惑を隠せない。

「その子に罰は無いんですか？だって味方を攻撃したんですよ？」  
必死に訴えかけるが葵衣の目は紗香同様に冷たかった。

「その味方に対する暴言も先に手を上げたのも彼女ではありません。言動に関しても罰する理由はありません。結界が解かれようとして

います。速やかにジュエルを隠蔽して下さい。」  
ジュエルたちが口をパクパクとさせている間に紗香はジュエルをし  
まっていた。

周囲の結界が消滅し、沸いて出るように人の姿が増えていく。  
そうなるを集まっているのは不自然に移るためジュエルたちは散り  
散りに帰宅していった。

紗香への恐怖と憎悪を抱いたまま。

世界が元に戻り、葵衣も気付いていながらも何も言わずに帰って  
くの見届けて叶は大きく息をついた。

「ジュエルも大変なんだね。」

「…。」

隣に話しかけるが明夜は考えているのかポーツとしているのか反応  
がない。

どこの屋上かは分からないが久美のもとに向かうために出口を探し  
ていると

「槍のジュエル。魔女がいたらきつとソーサリスになった。」

明夜がポツリと呟いた。

それを喜ぶべきなのか悲しむべきなのかはわからない。

叶に出来ることはただヴァルキリーとの戦いが起こらないことを願  
うだけだ。

何も言うことが出来ずにいた叶の携帯が鳴って話題がそれた。

「八重花ちゃんからメールだ。うまくいったって。行こう、明夜ち  
ゃん。」

「…うん。」

思い返してみてもやはりジュエルの存在は叶にとって衝撃的だった。  
感情の発露によって闘争心を剥き出しにして敵であるオーに容赦な

く襲いかかる一団。

ヴァルキリーのメンバーのような精練さはなくジュエルの形そのままに武骨な思いを武器に戦う乙女たち。

叶はヴァルキリー以上にジュエルを怖いと思った。

「あの人たちにはヴァルキリーの人たちみたいない信念がないみたい。ただ目の前の敵を倒すためだけに力一杯武器を振り回していた。それに味方にだって攻撃をしていた。ジュエルは仲間じゃないのかな？」

叶は自分とは無関係で”Innocent Vision”にとつては望ましいジュエル同士の同士討ちにすら心を痛めている。

それが叶がセイントたる由縁とも言えるがやはり戦いに身を置くものとしては甘いと言わざるを得ない。

「わたしは戦いたくなんて無いのに、どうしてみんな仲良くできないんだろう？」

それは”Innocent Vision”として掲げた理想そのもの。

だが状況は確実に叶の思惑とは逆の方向、戦いの激化へと向かっている。

「やっぱり理想の実現は難しいね。でも、陸君、私頑張るよ。」

陸が目覚めたときに争いがなくなっていればいい。

叶や八重花、”Innocent Vision”の皆がこの理想を求めるのは陸がもう未来視の力を使って苦しまないようにとの思いがあるからだった。

「ふあ、今日は、もう寝ちゃお。」

モゾモゾと制服を脱いでパジャマ姿で布団に潜り込む。

「明日、陸君に……」

いろいろあって身も心も疲れた叶は眠りに落ちていった。

## 第45話 密会

「オーッ!!」

「おおお!」

両者の咆哮が轟き、オーのブレードと由良の鉄パイプがガイインと鈍い音を響かせた。

一発一発が全力で振るわれる由良の攻撃をオーはブレードで捌いていく。

だがその威力は決して無視できるレベルではなく意識を傾けて相手をしなければ危険だった。

「おら、おら、おらっ!」

ガンッ、ガンッ、ガイイン

防御に傾倒したオーのブレードが激しく揺れる。

足を止めて攻撃を防ぐオーは

「カナ!」

「はい!」

由良が大上段に振り上げたタイミングで飛び込んできた叶に対して反応が遅れた。

当然最警戒すべきは叶であるが振り返れば全力鉄パイプの餌食になる。

ほぼ等価値の命の危機に対して高くないオーの知能は判断できず

「オー…ッ!」

発狂したところをオリビンと鉄パイプのダブルコンボで叩きのめされて消滅した。

カランと鉄パイプの先端を地面に落として由良が息をつく。

「とりあえず終わりだな。」

久美の件でイレギュラーがあったとはいえその翌日から”Inno



cent Vision”は「第二次ソルシエル復活計画」を開始した。

放課後に叶と真奈美が町を適当に歩き回り、由良と明夜がその後をついていき、オーが現れて結界の形成が始まったら中に飛び込むという行き当たりばったりな作戦だった。

実際エンカウト率は高くないし人目につくところを歩くと由良たちが武器を持ち歩けなくなるのだが、今日は上手く武器を持ち込んだままオーとの戦闘に入ることができた。

「由良お姉ちゃん、お疲れさまです。」

「ああ、カナもな。」

「いえ、私はほとんど何もしてませんから。」  
疲れを見せる由良に癒しをかける。

作戦の趣旨がソルシエールの復活であるため戦闘の大半は由良と明夜が担っている。

身体強化も無くオーと戦っているため由良は全身汗だった。

「ふう、生き返る。」

マッサージチェアに座ったみたいなの緩んだ表情に叶はくすりと笑い、癒しを行いながら周囲を見る。

オーの消滅で結界が消えていこうとしていた。

「そういえば、どうしてオーは毎回結界を張るんでしょうか？」

「んー、一番あり得そうなのはこっちの増援が入れないようにすることだろ。」

確かに戦闘に関して言えば由良の意見は正しい。

しかしそれに同意する一方で叶は別の疑問を抱いた。

「普通の人たちが巻き込まれないのはどうしてなんでしょ？」

「…ふむ。」

由良が思案顔になる。

かつて魔女ファブレが操っていたジェムはむしろ一般人の中から力を得ていた。

そして最終的な目的は集めた力を使ってファブレが現世するための

体を作ろうとしていた。

だがオーの行動は明らかに違う。

むしろ一般人を遠ざけ、オリビンやスピネルを重点的に襲撃している。

それはシンボルを脅威に思っているのか、それとも別の理由があるのか、それは由良たちには見当もつかなかった。

由良は表情を緩めて叶の頭をポンとたたく。

「今は悩んでも答えは出ない。黒幕を取っ捕まえるためにも俺たちはソルシエールを取り戻さないとな。」

癒しの光が消えるとはぼ同時に結界も消失した。

由良は人がいないことを確認して鉄パイプでコツンと地面を叩いた。こんな物を持つている姿を見られたら間違いなく通報される。

「それでソルシエールの方は戻りそうですか？」

人気の少ない道を思い浮かべながら並んで歩き出した叶は由良に尋ねる。

由良は鉄パイプを弄びながら自分に問いかけるように首を上に向けた。

「どうだろうな。戦っている最中に鉄パイプが軽くなったように感じる時はあるが、それがソルシエールなのか気分が高揚してそう感じるのかはわからん。」

「…。」

叶は戦闘中の由良の様子を思い浮かべる。

「おらおらおらあ！しねやあ！」（注：叶のイメージです。）

実に楽しそうに撲殺鉄パイプをブンブン振り回している。

確かに気分が高揚しているように見えた。

「…も、もしかしたらその気持ちの昂りがソルシエールを起こすのかもしれないですし。」

「ああ。魔女の話だと感情はあくまで鍵であって力の発現は魔力の

方にあるらしいからな。」

以前は家族を殺した敵として魔女を憎み、話題に出すだけでも表情を険しくさせていた。

しかし由良もすっかり落ち着いて魔女ファブレの話題を昔の事と割りきれるようになってきていた。

由良が丸くなったと言われるのはおそらくそのためだった。  
ピロリンッ

「あ、メール：真奈美ちゃんからです。真奈美ちゃんたちはオーと遭遇しなかったから切り上げるそうです。」

「出現頻度が上がってきたとはいえランダムなことには変わらないか。この計画の終わりはいつになるんだ？」

そもそも復活するかも分からない計画なのだから愚痴を言っても仕方がないが状況の変化に追いつかなければ意味がないのも事実だ。

ヴァルキリーやオーが本格的に動き出したときに力がなければ駆逐されるのは目に見えている。

「焦っても仕方がないです。」

「…そうだな。」

叶に諫められて由良は肩をすくめて苦笑した。

気が付けば叶の家の前に到着していた。

「送ってもらってありがとうございました。気を付けて帰ってくださいね。」

「ああ。オーならともかく普通の男ならこいつで一撃だ。」

「はは。本気でやらないで下さいね？」

ひきつった笑みを浮かべる叶に手を振って由良は鉄パイプ片手に帰っていった。

「ソルシエール、どうやって戻ってくるのかな？」

由良を見送った叶は自分でもその方法を考えながら家に入っていた。

八重花は夜7時を過ぎた頃、私服姿で駅前に行った。

落ち着いた雰囲気、格好は八重花の実年齢よりも大人びて見え、外灯の光を頼りに本を読んでいる姿はよりいっそうその印象を強めていた。

ナンパな男たちがチラチラと八重花に視線を向けているが当人は無視というが気にすらしていない。

そんな八重花の前に1人の男が立つ。

「君、彼氏と待ち合わせ？来てないみたいだから少し俺とお茶しない？」

男たちは果敢に挑んだ勇者に嫉妬と尊敬の念を送る。

八重花は読んでいたページに筆を挟むと本を閉じた。

向けられた冷たい視線に男はたじろぐ。

「待っているのは彼氏ではないし約束の時間はまだで、お茶をしているほどの時間はないわ。」

「それなら今日じゃなくても……」

誘いを真っ向から断つたのにそれを今はダメだと解釈する男に八重花はさらに瞳に宿る感情を冷たくする。

「……はつきり言わないと分からないようね。あなたに興味はないから結構よ。」

ストリートな物言いに男が絶句する。

ちよつどその頃、ナンパ男たちの雑踏がざわめき出した。

それはゆっくりと八重花の方にも伝播してきて

「おまたせしました、八重花さん。」

お嬢様らしい落ち着いた格好の下沢悠莉が雑踏の向こうから現れた。

もう1人現れた美女に男たちが色めき立つが当人たちは周りが見えていないように自然に振る舞う。

「時間はまだね。ただ、わざと待ち合わせの時間を10分遅らせてそこらの人たちを煽るのはどうかしら？」

「あら、そうと分かっているながら先に待っていた八重花さんも人が

悪いですよ?」

2人とも笑みを浮かべながら腹の探り合いをする。

実はどちらの言い分も真実だったりするがそれを隠しつつ相手の言質を取るうという高度な会話だった。

「君たち、よかつたらお茶でもどう?」

さっきのナンパ男が性懲りもなく声をかけてきた。

というかすぐ近くにいたのを完全に無視されてプライドが傷ついたためリベンジしてきた。

「こちらの方は?」

「背景よ。」

「ああ、なるほど。」

平然と酷いことを言っただち去ろうとする2人にさすがのナンパ男も堪忍袋の緒が切れようとしていた。

「ちよつと待てよ。」

怒気の混じる声に2人はさも意外そうに振り返った。

「人の話を聞かないなんて、ちよつと可愛いからって随分とお高く止まってるじゃないか?」

「ふう。私が見つっぱり断つたのに性懲りもなく声をかけてくる方が話を聞いていないっていうのよ。」

「ぐつ。」

周囲から、確かに、と忍び笑いが聞こえてきてナンパ男の顔が羞恥と怒りで赤くなる。

「人がせつかく誘ってやってるんだ、ただなんだからついてこいよ。」

「

傲慢な方ですね。ちなみにお店はどちらへ?」

「へ?えと、あそこの...」

突然の譲歩とも言える悠莉の返事に男はたまたま目についたファーストフード店を差した。

悠莉があからさまに落胆のため息をつく。

「私たちを誘いたいのでしたら最高級の紅茶を振る舞うお店を用意

してください。」

「そ、そこさえ見つければいいのか？」

ナンパ男たちが一斉に携帯で情報検索を開始する。

男達の滑稽な光景と悠莉の言動の結末を予測できた八重花は呆れたように目を細めるが悠莉は微笑みを浮かべたまま頷いた。

「はい。美味しい紅茶がただで飲めて八重花さんとの会話の場を用意していただけるなら部外者が1人いようが些細なことですから。」瞬間、携帯を弄っていた指がピタリと止まった。

中には携帯を取り落とす者もいた。

「行きましようか、八重花さん。」

「そうね。」

呆然とする男たちの間を抜けて2人は去っていった。

残された男たちを周囲の人間たちがクスクス笑っている。

一番惨めなナンパ男は歯をギリギリとくいしばって拳を強く握りしめていた。

2人はファーストフードを否定しておきながら安価なファミレスに入った。

夕食時なのでそれぞれパスタとドリアを注文する。

「ふふふ、まさか私たちが密会しているとは誰も思っていないですよ。」

「誰かに聞かれたら誤解を招くような言動は止めなさい。クラスの仕事でしょ。特にそっちはどこに耳があるか分かったものじゃないんだから。」

八重花は呆れたように訂正する。

今やジュエルは学生にとどまらない。

もしかしたらこの店の店員がジュエルである可能性も否定できない状況にあるのだから不用意な発言は危険だった。

まさに壁に耳あり障子に目あり、どこで誰が見て聞いているか分か

ったものではないのである。

「理由は何であれこうして私と八重花さんが2人で会っている状況はおかしいですね。」

クスクスと悠莉は笑う。

実際は1、2組での決め事に2人が抜擢されたからなのだが確かに理由ではなく事実の方が重要そうだった。

「プレデターに戦う気がないなら問題ないわ。」

「窮鼠猫を噛むと言いますけど?」

「追い詰められていないと自覚している鼠が決死の抵抗をするはずがないでしょう?」

ただの会話のはずなのに含みがあるように聞こえる2人はちょうど運ばれてきた料理で一度話を中断させた。

悠莉の前にはパスタ、八重花にはドリアが置かれる。

「いただきます。」

「いただきます。」

食事への感謝を述べてフォークを手取る。

教養の差か悠莉は食器の音を立てずにパスタを食べていた。

互いに無言で店のBGMを聞きながら食を進めていく。

「八重花さん、半場さんはまだ眠ったままですか?」

手を止めた悠莉が尋ねると八重花さんは口に運びかけていたドリアを戻してため息をついた。

「今日の私たちの目的はクラスの仕事。仕事の話ならともかく雑談はいらないわ。」

今食べている夕食にしたって悠莉の都合でこの時間になったのだから八重花としてはあまり世間話に花を咲かせて遅くなるのは避けたかった。

悠莉は相変わらずの微笑みを浮かべていて何を考えているか分かりづらい。

「そうですね。それなら……」

悠莉は靴から封筒を取り出して八重花の方に滑らせた。

タイトル部分を見ると決めるはずの仕事の書類のようだった。

「少し遅くなりそうでしたが間に合ってよかったです。」

「…まったく、よくやるわ。」

つまり悠莉は仕事を口実に八重花と話をするためにクラスの仕事を終わらせたということ。

八重花としては面倒な仕事を任せてしまった手前文句は言えない。

諦めて悠莉の望む世間話をすることにした。

「相変わらず眠っているようね。私はほとんど見舞いに行かないから詳しくは知らないわ。」

「そうですか。私も立場上半場さんのお見舞いに行くのが難しいもので。」

ヴァルキリーのメンバーが陸の見舞いに行くことを誰も禁止してはいないがやはりヴァルキリー内や”Innocent Visio n”からの批難はある。

特に悠莉の場合、よく一緒にいる美保が難色を示すためほとんど病院を訪れる機会がなかった。

今日の八重花との会合にもついてこようとしていたので説き伏せていたのも悠莉が遅くなった理由の1つだったりする。

「八重花さんがお見舞いに行かないのは意外ですね。むしろあらゆる手段をこらして半場さんを目覚めさせようとするのかと思っていました。」

冗談のようで八重花ならやりかねないという確信に満ちた言葉。

八重花はそれを否定しない。

「だからよ。りくのそばにしていると何がなんでも手に入れようとしてしまいそうで、そんな自分が怖いのよ。」

八重花は仲間の前では見せない弱音を悠莉に見せた。

それはかつてルチルで改心するきっかけを与えたのが悠莉だからである。

「ふふ、乙女ですね。」

からかっていると言うよりは妹の成長を喜ぶ姉みたいな笑い方だっ



た。

八重花はブイとそっぽを向くとフォークを動かし始めた。

ピンポン

店のドアが開く合図が鳴ると数人の男たちがまっすぐに八重花たちに向かつてきた。

先頭に立つのはさつき声をかけてきたナンパ男だった。

男は目元をひくつかせて八重花たちを見下ろす。

「紅茶がどうか言っというて結局ファミレスかよ。」

「学生ですから安くて美味しいに越したことはありません。」

男の額に青筋が浮かぶ。

「ちよつと付き合えよ。」

男は親指を立てて後ろを示す。

実際は後ろではなく外に出るというサインであり、さすがに八重花たちもその程度には茶々を入れない。

「それなら先にお会計をしないといけないわね。」

「遅くなったのは私が原因ですので今日は私が払います。」

「そう、悪いわね。」

男たちを待たせているとは思えない普通の帰り支度の様子にただでさえ沸点低めの男の堪忍袋の緒はあっさりと千切れかけていた。

「バカにすんな！」

吠える男を見て八重花と悠莉は顔を見合わせてフツと笑い、ゆっくりと向き直った。

笑っているのにその瞳の奥に灯るのは笑いではない別の感情。

ナンパ男が連れてきた内の数人がその眼力に気づいて後ずさった。だが激情したナンパ男は自分が置かれた状況に気づいていない。

「少しばかり教育が必要ね。」

「女性に声をかけるマナーをたっぷり知ってもらいましょう。」

その後、何処からともなく男たちの悲鳴が夜の街に響いていたが、  
何が起こったのかを知る者はいない。

## 第46話 騒がしき日

八重花と悠莉がやっていた仕事とは実は2年生の修学旅行についての計画書だった。

普段敬遠されがちな八重花だが運動会で見せた類い稀なる知略を買われて計画立案を任されたのだ。

それを知った2組の悠莉が立候補したことで昨晚の出来事に繋がったわけだが、当然それは他のクラスにも同様のお達しが来ていた。

「そういうわけで、修学旅行を高校生活の華々しい思い出とするための案を皆に問いたい！」

この手の騒ぎに裕子が動かないわけがなく、今回も実行委員を押し退けて指揮を取っている。

もうお前クラス委員長になっちゃえよと誰もが思ったが裕子は聞く耳を持たなかった。

「さあ、我こそはと名を上げんとするものはおらんか！」  
將軍口調で教卓をバンバン叩く。

しかしいきなり思い出に残る修学旅行と言われてもすぐに思い浮かぶようなものじゃない。

案が上がらず静まるクラスの中でスツと手が上がった。

「はい、叶。どんな案？」

「ええと、案じゃなくて、行き先はどこだっけ？」

これは叶が聞いていなかったわけではなく実行委員が行き先を告げる前に裕子が司会ジャックをしたせいだ。

行き先が決まれば見て回れる場所も限られていくので思い出に残る旅の計画も楽になる。

さすがは久住グループのブレーキ役とクラスメイトの中で叶の株が上がった。

「私たちが行く先、そこが修学旅行よ。」

だが裕子は皆の思考の斜め上を突っ走る。

なんか良いこと言ったみたいなの顔をしているが誰一人として納得していない。

「大阪を中心にした近畿地方です。」

ここぞとばかりに本来の修学旅行実行委員が伝えるために教卓前を奪い返した。

裕子も負けじと場所を奪おうとしておしくらまんじゅう状態になる。男子としては結構派手にヒラヒラするスカートが際どくて気が気じゃなかったりする。

「にははは、たこ焼き、うどん、かに道楽。」

「食べ歩きツアーはありだよな。」

男子勢は久美発案の食べ物関係に食いついた。

関西に限らないが旅の醍醐味の1つはやはり食である事は揺るがない。

「神戸の夜景とか見てみたいかな？」

「わー、いいねえ。どうせなら彼氏と見たいわ。」

「いれただけどね。」

「うっさい。」

一方、女子は真奈美の意見への賛同が多い。

「えと、修学旅行らしく神社とかお寺を見に行くのもあるよね。」

「…。」

真面目な叶の意見は残念ながら賛同者はとても少なかった。

食い倒れだ、風景だ、神社仏閣も…と騒ぎ始めた教室。

「ストーリーップ！」

それを裕子の大声が停止させた。

雑談めいた議論を繰り広げていたクラスメイトがパチクリと目をしばたかせて裕子を見た。

裕子は大仰に頭を振って額を押さえた。

「私は悲しいよ。皆が言ってるのは『普通の』修学旅行。来年になったら、ああそんなこともあったね、で終わるような程度の記憶よ。」

私が求めてるのは何年経っても忘れないような思い出を作れる修学旅行よ。」

裕子は拳を握り締め、皆に訴えかけるように教室を見回しながら熱弁した。

確かに中学の修学旅行を思い返してみれば何となくしか覚えていない人が多いが、逆に覗きを試みたり先生の目を盗んで別の男子や女子の部屋に遊びに行ったなどのちよつと悪さをした生徒たちほど楽しかった思い出として強く心に残っている。

「私は吉葉高校の修学旅行に行つてよかつたと思えるような旅にしたいのよ。だから皆、力を貸して。」

裕子が教卓に手をついて頭を下げる。

いがみ合っていたはずの修学旅行実行委員は一步後ろで涙ぐんでいた。

ここまで熱い情熱を前に2年4組の生徒が黙っているわけではない。体育祭でもわかるようになってしまえば突っ走るパワーがこのクラスにはあるのだ。

「時間をくれ、裕子。」

「雅人くん？」

顔を上げた裕子が見たのは芳賀を先頭に頼もしく頷くクラスメイトたちだった。

「明日までに徹底的に調べ上げるぞ。みんな、今日は眠れると思うな！」

「どんとこいやー！」

「望むところよー！」

やる気という名のオーラで教室が熱気に包まれる。

「班分けをするぞ！パソコンが使える奴は近畿地方の名所やうまいものを中心に片っ端から調べる。できれば口コミ情報系で穴場を探れ。それ以外は図書館と町の本屋に行つてガイドブックを使うぞ！」

「「おーッ！」」

ドドドと地響きのような足音を立ててクラスメイトは散り散りに去

っていった。

「えーと、成功かしら？」

教室に残ったのはあまりの勢いについていけず呆然としていた裕子と実行委員、そして取り残された叶と真奈美だけだった。

「叶、あたしたちも動こうか。」

「そうだね。」

叶たちも連れ立って教室から去っていき、最後には静けさが残された。

実行委員がポンと裕子の肩を叩く。

「寂しくなんてないんだからね！」

「はいはい。」

ツンデレ裕子を宥めながら2人も出ていった。

そして誰もいなくなつた。

叶と真奈美は商店街の書店を見に行こうと考えて昇降口に向かっていた。

「ん？」

「口論みたいだね？」

階段の近くを通過しようとしたとき階下から喧嘩しているような声が聞こえてきた。

しかしこの下は空き教室以外だとヴァルハラ以外になく、しかも喧嘩の声は女のものだ。

2人は顔を見合わせる。

「ちょっとだけ見てみようか？」

「う、うん。」

危険があることは承知していたが知的好奇心に突き動かされて2人は静かに階段を降りた。

踊り場から下を覗くと階段を降りた辺りで2人の女子生徒が額を付き合わせて口論していた。

1人は神峰美保、もう1人はジュエルの綿貫紗香だった。

紗香の方は先日 of 槍のジュエルであるため叶も知っていた。

「ジュエルの子だね。何を話してるのかな？」

「シッ！」

真奈美は叶の口に手を当てて黙らせる。

実質的にこの階段にいること自体がヴァルキリーの領域になることになる。

校内でいきなり攻撃してくることはないとは思ったが気付かれないに越したことはない。

そこまで口にしなくても真剣な目を向けただけで叶は理解したらしく頷いた。

叶の口から手が離れ、2人は階下の口論に聞き耳を立てる。

「ずるいです！わたしも行きたいんです！」

「無茶言っつんじゃないわよ！」

どうやらどこかに行く算段らしい。

ヴァルキリーの遠征計画かとさらに注意して聞き耳を立てる。

「どうして神峰先輩がよくてわたしが行っちゃ駄目なんです!？」

紗香は駄々っ子のように手を振り回して文句を言っている。

「だー、もう！そんな元から決まっつてんでしょうが！」

美保は腰に手を当てて焦れつたそうに足でトントンと床を叩いていた。

睨み合う両者の間に火花が散る。

それはさぞかし重要な作戦なのだろうと考え、詳細を聞き逃すまいとさらに耳に意識を集中させる。

「ここは神峰先輩がわたしと変わるべきです！」

「はっ、馬鹿も大概にしなさいよ。」

「何ですか、けちんぼ！」

「誰がけちだつてえ！」

口論は平行線のまま激化していくが肝心の内容は分からない。

「何を話してるんだ？」

「よくわかりません。」

ギャーギャーと口論から掴み合いに発展しそうな勢いで美保と紗香は感情を昂らせていく。

紗香の左目が朱色に輝き、その手にはジュエルが握られていた。

「へえ、やる気？」

美保がスツと目を細めて狩人の笑みを浮かべた。

だが紗香は引き下がらない。

「やりますよ。神峰先輩に勝って、わたしは……」

紗香はグツと槍のジュエルを手に握って

「悠莉お姉様と修学旅行を一緒にするんです！」

力強く吠えた。

叶と真奈美は危うく盛大なツッコミを入れそうになった。

つまりは口論ではなく完全に紗香の駄々だったということだ。

「はははは！」

そこに突然響く笑い声。

それは叶たちのすぐ横からだった。

そう言えばさつき叶は別の誰かと少し話をしたような気がした。

あの時は聞き耳を立てるのに集中していて気付かなかったが。

その笑い声に気付いて一触即発だった美保と紗香も視線を踊り場に向けた。

叶と真奈美も恐る恐る振り向く。

「いやー、まさか修学旅行の話だなんてね。」

そこには腕を組んで大笑いしている良子と冷たい視線を叶たち、美保たちに向ける海原姉妹が立っていた。

叶と真奈美は踊り場の壁に背中をつけていた。

目の前には悠莉を除く在校ヴァルキリーのメンバーとジュエルの紗



香が取り囲むように立っている。

「何をされていたのか説明願えますか？」

葵衣がいつもの冷静な口調で問いかけてくる。

少なくとも即死刑としない辺りは叶たちにはありがたい話だが少なくとも好意的に解釈はされていない。

「理由なんてどうでもいいわよ。敵地に飛び込んできたなら殺される覚悟はあるのよね？」

そしてここに即死刑の思考の持ち主がいた。

美保が残忍な冷たい光を宿した目で笑う。

今はジュエルを出していないが許可がおりたならすぐにも首を跳ねようという意味が伝わってきて叶は身震いした。

「学生なんだから校内のどこにいても不思議じゃないと思います。」

真奈美はしつかりと顔を上げて反論する。

「普通の学生ならね。だけど”Innocent Vision”なら話は別だと思わない？」

「…。」

緑里の問いかけに真奈美は口を閉ざす。

実際に領域侵犯を自覚して身を隠して聞いていたのだからさっきの反論もただの一般論を述べただけだ。

「うー。」

紗香はただじつとヴァルキリーの敵である叶たちを見つめている。

その視線に気付いて叶が微笑みながら手を振るがプイとそっぽを向かれてしまった。

シヨックを受けてしょんぼりする叶はおずおずと顔を上げる。

「帰ろうとしたら階段の下から喧嘩みたいな声が聞こえてきて、何かあったのかと思って様子を見に行っただけです。」

それは事実。

美保も自覚があるらしく何も言わなくなった。

実際合流する前の良子や海原姉妹も階段の上から口論を聞いたので

その点に関して反論はない。

「それはあり得る話ですが、相手がヴァルキリーであると気付いた後もその場に留まり話を聞いていたのは情報を得ようとしていたからではないのですか？」

葵衣の目は主観を廃しているが故に虚偽を許さない圧力がある。

「それはあります。」

叶は否定しなかった。

美保や緑里が警戒してわずかに指先を動かした。

「でも、もしも喧嘩なら止めに入れるかもしれないと思ったから動けませんでした。」

「…。」

それが他の人間なら弁解のための方便だと鼻で笑っただろう。

だが叶だから、清い心を持つセイントが不安げながらも真剣な目をしていたからヴァルキリーの面々は否定できなかった。

「でも聞き耳を立ててたのは本当のことです！」

このまま開放する流れになりそうだったヴァルキリーは紗香の言葉にハツとなった。

「確かに理由は何であれ盗み聞きは良くないな。」

良子はうんうんと頷いて納得する。

それで再びヴァルキリーの優位に立ち戻った。

「さて、どうやって落とし前をつけてもらおうかしらね？」

「ボクたちのジュエルの練習台になってもらうのもいいかもね。」

美保と緑里がジリと叶たちに近づく。

それを葵衣が制した。

「以前インヴィの力で未来視を行った時、その見返りは情報でした。情報には情報を、それがインヴィのお考えのようです。ここはそこから情報を提供していただくことで収めるのは如何でしょう？」  
葵衣の提案は正当に聞こえる。

「そうですね。」

「ならば、最近の”Innocent Vision”の不可解な

活動についてお聞かせ願えますか？」

丁寧な口調だが有無を言わせない雰囲気があった。

「ええと……」

しかし修学旅行云々の口論とソルシール復活計画の内容では価値が違いすぎる。

しかし嘘がつけない叶は計画を話そうと口を開き

「乙女会の生徒が校内の廊下ではしたなくも口論をしていた情報は  
どうです？」

隣から聞こえた余裕を含んだ声を聞いて口をつぐんだ。

「それで手を打てというのですか？」

葵衣の声色が若干固くなるが真奈美は右目を不敵な笑みに細めて頷く。

「前に乙女会の存続を朝礼で戦っていましたがあれは他の生徒の模範となる乙女会としてですよ？廊下で声を荒らげ、放置すれば暴力事件にまで発展したかもしれない。それが教師の耳に届けばどうなるでしょう？」

「真奈美ちゃん、八重花ちゃんみたい。」

叶が褒めているんだか呆れているんだか微妙な感想を口にする。

確かに言動で相手を追い詰める術は八重花から学んだスキルだった。そして真奈美自身も内心胡散臭いと思っていた。

「しかもあたしたちの友達には噂好きと情報操作が得意な友人がいます。校内に噂として広げることもできますよ。」

真奈美は不自然にポケットに突っ込んだ手を揺らす。

かつて琴のICレコーダーの件を知る海原姉妹は戦慄した。

今のところ琴があ的情報を利用した痕跡はないが”Innocent Vision”に手を出せば公開すると言っていた。

今、それこそ情報一つの為に”Innocent Vision”を刺激して眠れる獅子を起こす方が遥かに高い代償を支払うことに

なりそうだった。

その辺りの事情を詳しく知らない美保や紗香は大層不満げだが葵衣は俯いて答えを出した。

「…仕方がありません。ですがこの情報が出回った際には御覚悟を。」

葵衣の視線を軽く受け流し真奈美は恭しく頷く。

「ありがとうございます。それでは。…まあ、あれだけの声ですから聞いていたのがあたしたちだけとは限らないですけどね。」

真奈美は最後にそんな爆弾を投下して叶と共に去っていった。

残されたヴァルキリーは実に後味が悪い雰囲気を漂わせていた。

そして

「ヴァルキリーである前に乙女会として規範となるべく…」

「わーん、ごめんなさい。」

「おのれえ、”Innocent Vision”。」

美保と紗香は葵衣からお説教を受ける羽目になるのだった。

## 第47話 変わらない心

翌日、叶と真奈美はヴァルキリーとの騒動で忘れていたがクラスは修学旅行の計画に燃えていた。

一時限目が担任の授業な事をこれ幸いにとジャックし、机を集めて近畿地方の巨大な地図を展開、調査した情報を記していく。瞬く間に白地図は黒や赤の情報で埋め尽くされた。

昨日はテンションに乗り遅れた裕子も今日は朝から全力全開で陣頭指揮をとっている。

その下には実行委員と芳賀がついついてクラスの団結は凄まじいものがあつた。

ちなみに3組と合同で計画を立てる手筈なのだが実行委員をはじめ全員忘れていた。

「情報は揃つたわね。次は各自のおすすめをプレゼンして。食べ物でも名所でも何でもいいわ。自分がいいと思ったものを挙げていて！」

「はい！」

裕子が言い終わると同時にクラスメイトの挙手が乱立する。

「私は京都の和菓子を推すわ。和菓子は洋菓자에比べてカロリー控えめだそうでその中でも特に有名なお店がここここよ。」

「俺は最近できたって話題のアミューズメント施設がいいと思う。最新鋭の体感ゲームがあるらしいぞ。」

そのゲームについて熱く語り出す男子生徒。各自が調べてきた内容を語っていくので情報のない叶と真奈美は内心焦っていたが普通に神社仏閣を推薦する生徒もいたのでそれに便乗する形で難を逃れた。

地図におすすめポイントが記されて一応の完成を見た。

やはり各府県の主要都市にスポットが集中する形になっていた。

後はルートを裕子が決定すれば終了だ。

裕子はうーんと唸り

「よし、全部回るわよ!」

高らかに宣言した。

「「おおおおお!!!」」

「「えええ!?!?!」」

クラスに歓声と悲鳴が上がる。

だが修学旅行と言ってもすべてが自由時間な訳ではない。

むしろ自由時間の方が少ないくらいなのだから裕子の案は無謀としか言えなかった。

「だってみんなのおすすめなのよ?誰かの意見が良くて他が駄目なんて不公平じゃない。」

裕子は悲しげに地図を見つめながら呟いた。

クラスメイトが美味しいと、楽しいと思える場所だから行きたい。

それは荒唐無稽だけど優しい考え方だった。

だけど予算も時間も限られている旅行ではどんなに切望しても裕子の意見は通らない。

実行委員が裕子の肩を叩く。

「久住さんの気持ちは分かりました。でも全員で全てを回るのは無理です。」

「でも…」

「だから、一班一県で回り、最後に皆で思い出を分かち合いましよ  
う。」

感動で裕子の目に涙が浮かぶ。

「素敵よ!」

「久住さん!」

実行委員と裕子が抱き締め合う。

「へっ、まあ今日のところはいいさ。」

彼氏としての見せ場を取られた芳賀だが女同士なので大目に見る。

「そうしたら班分けよ。話を聞いて興味を持った所に集まって。人数は後で調整するわ。」

地域ごとに場所を指定していくと悩みながら分散していく。

基本的には自分のおすすめに行くが向かう場所は一ヶ所では無いので総合的に判断してより楽しそうだと思える地域を選択する生徒もいた。

「叶、真奈美。久美と一緒に大阪に行かない？」

司会進行の裕子も当然生徒なので行き先選択の権利がある。

久美を連れ立って叶たちに声をかけた。

「大阪に何かあるの？」

叶が地図を覗き込むと多くは食べ物屋だった。

「もちろん食べ歩きツアーよ。」

そして期待を裏切る事なく親指を立てて言い切った。

だが叶と真奈美は顔を見合わせる。

大食らいなら楽しいかもしれないが1日に何店舗も回れるような胃袋はしていないし乙女として食べ過ぎはいろいろと怖かった。

「私、どつちかと言えば少食だから。」

「あたしも。部活やってた頃の感覚で食べてると大変なことになるよ。」

そして容量の問題を差し引いたとしても食べ歩きツアーは出費が高みそうだった。

「にははは、食べ歩きツアーは男子が中心に動いた方がよさそだね。」

「久美まで。」

一応提案者に当たる久美までが否定派に回ったため裕子は唸り出した。

ここに芳賀を加えたメンバーで大阪に行きたかったのだが巡回する場所の大半が食べ物屋では叶たちの説得は難しそうだった。

そこで裕子はふと気が付いた。

元々全員で全部を回ろつという無謀な計画を実行委員の意見によって地域ごとに分断し、後で内容を共有し合うことになった。ならば同じ班の中でもそうやって共有し合えば良いのだ。

「ならこうしましょう。食べ歩きだけど大阪の味を知るための一口試食ツアー。」

「一口試食？」

叶が首を傾げ、真奈美は呆れたような目を向ける。

「いくらお金が勿体無いからって試食コーナーでお腹を満たそうとするのは感心しないよ。」

「そこまで言っていないでしょ！単に1つの店で1人が注文してそれを分け合うのよ。そうすれば出費は少しだしお腹も一杯にならないし。」

不名誉な扱いを裕子は否定しつつ説明する。

それは叶たちが考えを改めさせるいい案だった。

「それならみんなで1つだから少なくとも済むね。」

「しかも気に入ったらその時に追加で買えばいい。なかなかいいじゃないかな？」

裕子の案を受けて叶たちが乗り気になった。

久美も

「みんな一緒ならもちろん行くよ。」

という日和つぷりを発揮して行動はほぼ決定されたと言えた。

「なあ。」

そこに追加予定の芳賀が声をかけてきた。

「どうしたの、雅人くん？心配しなくても特別に私たちの班に入れてあげるよ？」

「いや、入れてくれないとグれるからな。そうじゃなくて…」

雅人は班分けをしているクラスメイトたちを指差す。

そこには何故か大阪に生徒が集中していた。

「裕子のアイデアを聞いて他のやつらもすっかり同じことをやるうとしてるぞ。」



「こらあ！人の案を奪うな！」

裕子は拳を振り上げて集まった大阪行き希望の生徒をバツバツと薙ぎ倒し

「アイアムウイナー！」

見事大阪行きの権利を獲得したのであった。

「…実際は話し合いだったけどね。」

こんな暴走した修学旅行計画だが

「これが生徒の自主性というやつか。」

なぜか担任が生徒たちの熱気に当てられて感涙し、結局このまま進行することになった。

3、4組の計画が提出されたことで修学旅行が現実味を帯び始めた頃、ヴァルキリーでも修学旅行の話題が持ち上がった。

「修学旅行か。あたしは部の合宿の方が楽しかったな。だって神社とか寺を見てもつまらないでしょ？」

歴史的建造物を見て過去の建築当時の世界観を学ぶことが修学旅行の本質なのだが良子はそれを全面的に否定した。

尤も多くの生徒が同じ考えでいることは否めないが。

「ボクもあんまり楽しくなかったかな。葵衣はサボるし。」

「サボタージユではありません。お嬢様のお仕事の補佐について出なければならなくなつたからです。」

修学旅行を経験した先輩からつまらなかったと聞いてげんなりする美保とは対照的に悠莉は微笑みを浮かべたままだった。

「美保さん、安心してください。今年は記憶に刻み込まれる旅行を演出するために修学旅行実行委員を引き受けたのですから。先輩方から聞いた過去の修学旅行の良し悪しを並べ、良いところはそのままに悪い点を改善するプランを練りました。さらに八重花さんの知略により詳細にまで詰めた計画は必ずやご満足頂けるはずです。」

途中から旅行会社の店員みたいになっていたが先日の案を八重花が修正したプランが実行委員会に提出された。

美保はむしろそちらよりも八重花の名前が普通に出てきたことに顔をしかめたが悠莉は気付かなかったのか無視したのか何も言わなかった。

「悠莉のプランか。予算度外視の高級ツアーとかじゃないの？」  
撫子ほどでは無いにしても悠莉もお嬢様と呼ばれる人種で買い物の値段設定は一般人よりも高めにある。

良子はその一端を倉谷のショッピングモールで垣間見ただけに他の生徒を心配して尋ねた。

「その点は八重花さんに指摘されましたし、翌日には質をほとんど落とさずに割安のプランを用意していただきました。」

「さすが八重花。」

乙女会会長が認めるほどの才女・東條八重花。

その才女がヴァルキリーとしては敵に回っているため美保と海原姉妹は反応に窮した。

「修学旅行と言えば4組も面白いことになってるんだって？」

美保も同年代なのでクラスメイトとの話から4組の計画の話は聞いていた。

「どんな？」

「何でも各自が持ち寄った見所を回るとか。しかも一班一県らしいですよ？」

美保の説明を聞いて葵衣はいつも通りだったが良子と緑里は目をぱちくりさせる。

「はあ、そりゃまた壮大な。」

「でも面白そうではあるね。」

ありきたりな修学旅行を経験した2人は楽しそうな計画にむしろ興味を持ったようだった。

「Innocent Vision」の作倉叶様と芦屋真奈美様は大阪に向かわれるようですね。」

朝に決まった話をすでに葵衣は知っていたようで美保の知らない情報まで持っていた。

今さら驚いても仕方がないので誰もそこには突っ込まず、葵衣のもたらした情報に耳を傾けた。

「まあ、インヴィの友人たちは八重花以外集まってるから一緒に行動するのは別におかしくないけどね。」

「食い倒れの町で食い倒れないかな？」

「姉さん、そんなことあり得ません。」

「えー、そうかな？」

3年生たちが適当な話題で言葉を交わしている横で当事者2人は対照的な笑みを浮かべていた。

困り顔の悠莉は不敵というかもはや不気味に近い笑みを浮かべた美保を横目で見やり小さくため息を漏らして手を頬に当てた。

「ふっふっふ、わざわざあたしの育て上げてるジュエルのいる大阪を選ぶなんてあいつらもついてないわね！」

「美保さん、ジュエルを動かせば”Innocent Vision”に気付かれますよ？」

熱くなる美保に対して悠莉は反応が悪い。

せっかく計画したプランを無茶苦茶にされそうだからという理由もあった。

だが面白いことを見つけた美保は簡単には止まらない。

「大丈夫よ。向こうのジュエルが勝手に突っ走ったって言えば問題ないわ。それに死人に口なしよ。」

しかも殺る気満々だった。

それを聞いた葵衣と緑里が顔を見合わせる。

”Innocent Vision”、作倉叶に手を出したのがバレれば琴が撫子の脅迫の証拠を公開すると言っているのだ。

「美保様。お嬢様の、ひいてはヴァルキリーの存続のため軽率な行動は慎んでください。」

冷静な物言いだがそこには明らかかな妨害の意志が込められていて美

保は目を細める。

「最近、ヴァルキリーは慎重すぎですよ？気に食わない相手は殺す。前みたいにそれで良いじゃないですか。」

「試用段階のヴァルキリーとは違うのです。本格的にジュエルを浸透させるまでは目立つ行動は控えなければなりません。」

手に持つのがソルシエルだろうとジュエルだろうと美保の本質は変わっていない。

だが悠莉や良子、果ては撫子までが陸との接触によってぶれてしまった。

それは手にしたソルシエルの呪縛が弱まったためとも考えられるが少なくとも美保にとっては弱体化に他ならない。

強力なカリスマを持つ撫子が頻繁に連絡を取れなくなり、ヴァルキリーのトップである人間の意志が揺らいだ。

”Innocent Vision”はソルシエルの消失により弱体化したが、ヴァルキリーもまたソルシエルがなくなったときに弱くなっていた。

その志は下手をすれば各地にいるジュエルよりも低いかもしれない。

「相手が弱いからっていつまでも遊ばせているのも目障りなのよ。」

「しかし例の証拠が…」

葵衣が言い切る前に眉間にスマラグド・ベリロスが突きつけられた。

「…。」

「美保ッ！」

ガタンと椅子を派手に揺らして緑里が立ち上がるが鋭い視線を向けられてすくんだ。

「弱味を握られたなら早く殺さないよ。あたしたちが修学旅行に行くってことは”Innocent Vision”は全員言葉からいなくなる。あの巫女を守るやつはいなくなるってことじゃない。」  
葵衣と緑里は押し黙る。

確かにこれまでの失敗で琴に脅迫や不法侵入の証拠を握られて動かないようにしていたが美保の言うように使われる前に何とかしなけ

ればならないものだった。

姉妹は頷くだけで意思を確認しあった。

「部の主力メンバーが旅行に行っちゃうからあたしも手伝うよ。」

「ありがと、良子。」

心強い仲間の同意に緑里が微笑んだ。

良子はそれを軽く手を振って応える。

良子も参加を表明し、いよいよ本格的な計画に変わっていく。

「まだ準備期間があります。未来視を超える策を持って太宮院様を亡き者にし、ヴァルキリーの未来を切り開きましょう。」

「それ、会長の役目……」

葵衣の宣誓の陰で悠莉は難しい顔をしていた。

## 第48話 第3の未来視

表では7月頭に行われる修学旅行の準備が進められ、裏ではヴァルキリーの太宮院抹殺計画が水面下で進行していくそんなある日、叶は病院を訪れていた。

怪我をしたわけでも病気でもなく陸に会いに来たのだ。

「最近、前より頻度が落ちてるから彼、寂しがってるんじゃない？」  
「からかうように言った看護師に挨拶して叶は病室に向かう。」

確かに最近ではヴァルキリーやオーへの対応で忙しくなっており、あまり陸の所に来られなかった。

「寂しがってくれるなら、嬉しいかも。」

看護師に言われたことでクスリと笑って廊下を歩く。

陸の入院している一画は静まり返っている。

同じように寝たきりや重い障害を患った人たちが入っているのかわからないが他の区画よりも少し空気が重いように感じられた。

叶は心持ち足音を小さくするようにして陸の病室に向かった。

スライド式のドアの取っ手に手をかけて一呼吸、横に引いた。

その瞬間

「きやつ！」

吹き付けてきた風に叶は顔を腕で覆った。

突風は一瞬の事でゆっくりと腕を外すと少しずつ暑くなってきたためか窓の開いていたが叶のよく知る部屋だった。

「びっくりした。春一番かな？」

春一番はとうの昔に終わっているが残念ながら今ツツコミを入れてくれる人はおらず、陸も相変わらず眠っている。

変わりが無いことに寂しげな笑みを浮かべ、叶はベッド脇の椅子に腰を下ろす。

いつもはひんやりしている椅子だが気候のせいかわ少し温かった。

「もう少しく私たち修学旅行です。陸君と一緒に行きかけたです」

けど、よく考えたら目が覚めても陸君1年生なんですよね。忘れていました。」

陸が眠り続けてもうすぐ半年になる。

モニターする機器の音はいつも一定で良くも悪くもならないからこのまま一生同じ状態が続くようにも感じられた。

「弱気は駄目駄目。」

叶は慌てて頭を振って悪い考えを振り払う。

「修学旅行が終わってテストが終わったら夏休みですよ。私、陸君と遊びに行きたいです。」

2人で、が理想だがそれはきつとみんなが許してくれないだろうと苦笑する。

「みんな海に行きたいですね。私は、その、あんまり水着とか自信ないですけど、やっぱり見たいですか？」

ここで力強く見たいと起きられても微妙だったが、幸か不幸かやはり陸が目覚めることはない。

「オーの事とかヴァルキリーの事とか、何も心配しないで陸君が目を覚ますのを待っていたいんですけど、そもいかないみたいです。でも安心してください。陸君は絶対に私が、私たちが守りますから。」 Innocent Vision ”は無くしません。」

以前夢だったが” Innocent Vision ”を無くしてもいいと言った陸に叶ははつきりと告げた。

もしも陸が起きていたならきつと困ったように微笑んでくれただろうと叶はそんな表情を思い浮かべる。

「え？」

それは幻覚か。

叶の目にはたった今思い浮かべたのと同じ顔をした陸がいた。

「陸君!？」

慌てて呼び掛けるが陸は相変わらず眠ったまま。

目をごしごし擦って改めて見れば陸は穏やかな顔で眠っているだけだった。

「見間違い、だったのかな？」

それを知る事は出来ず、叶なりに納得するしかない。

「本当だったとしても結局陸君が喜んでるのかどうかわからないよ。」

叶もまた困ったように呟くと立ち上がった。

「ありがとう、陸君。元気が出ました。」

ぺこりとお辞儀をした叶は病室を後にする。

ピッピッと陸の状態を示す計器だけが規則正しい音を…  
ピッピッ

一瞬の変化は誰にも気付かれず、カーテンが風に揺れるだけだった。

由良は珍しく八重花と2人で喫茶店に入っていた。

テーブルには2つのコーヒークップが置いてあるが中身は片や漆黒のようなブラック、もう片方は茶色に変化したミルクティー、もはやカフェオレの域の飲み物だった。

「由良がこつちを飲んでいればもう少し可愛いげがあるのにな。」

八重花が意地の悪い笑みを口許に張り付けながらカフェオレの入ったカップを持ち上げる。

「ほっとけ。どうせ俺に可愛げなんてない。」

由良は椅子の背もたれに肘をかけてブラックコーヒーを飲む。

悪っぽくてかっこよくはあるが可愛らしさは皆無と言えた。

「あら、そうかしら？少なくともりくの前では何度か乙女っぽい姿が見られたって聞いてるわよ？」

「なっ！？誰にだ！？」

予想外の口撃に由良は露骨に動揺してコーヒークップをテーブルに叩きつけながら身を乗り出したが八重花は柳に風とばかりに笑みが崩れることはない。

「さあ、誰かしら？」

「…明夜が飯に釣られたか。」



由良は拳を震わせながら呟く。

明夜は大切な事は秘密主義のくせしてどうでもいいことは聞かれるとあっさり答えてしまう。

さすがに人の恥ずかしい話をペラペラ喋りはしなかつただろうが食を与えられたら抗いはしなかつたろう。

「ちよつと予想外の出費だったけどそれなりに有益な情報を得られたわ。」

「まったく。相変わらず陸に関することだと見境ないな、ヤエ。」  
由良の表情は曖昧すぎて呆れているのか笑ってるのかよくわからない。

「ありがとう。」

だから八重花は褒められたことにして礼を言った。

こういつた凶太さも八重花が自らの意志を貫く強さの1つなのである。

今度は間違いなく呆れのため息をついた由良はコーヒー片手に斜に構えた座り方のまま横目で八重花を見た。

「それで、わざわざ俺1人を呼び出した理由はなんだ？」

” Innocent Vision ”としての用件なら全員を呼び出せばいいし簡単な用事ならクラスで声をかければいい。

わざわざ少し奥まったところにある喫茶店に来た理由を考えれば敵だけでなく味方にも聞かれたくない話だと容易に推察できた。

そんな由良の考えを読み取ったように八重花はフツと笑う。

「さすがね。実は叶たちには内緒で頼みたいことがあるのよ。」

由良は妙に苦々しく感じるコーヒーを飲み下して八重花の言葉を待つ。

あまり人に聞かせられないような頼みをいくつか想定するが八重花が頼んでくるとは思えないので却下。

そうなると当てはまる答えは見当たらず由良は考えるのを諦めて耳を傾けた。

八重花がカフェオレを一口飲んで告げる。

「由良、あなたには修学旅行を欠席してもらいたいのよ。」

「……………なんだ、それ？」

長い沈黙を破って由良が出した言葉はそれだった。

もつととんでもない情報とかとある人物を始末してほしいとか同級生にはちよつと話しづらい内容の話を想像していた、さらに言えば間違いなく”Innocent Vision”関連だろうと考えていたのに八重花の言葉は由良の想像のさらに上を行っていた。

「俺が修学旅行に行かないと何かメリットでもあるのか？年上だから仲間外れにって言っんならさすがにキレルぞ？」

冷静なようで結構動揺している由良が身を乗り出して詰め寄ってきても八重花は動じない。

「もちろん理由もなくそんなお願いはしないわ。」

落ち着くように促すと由良は不満げな顔のまま席に戻った。

八重花はペンを取り出し、備え付けの紙ナプキンを一枚取るとそこにIVと書いた。

「以前の”Innocent Vision”は1年から3年まで全学年がいたけど今は全員が2年生ね。」

IVの下に2と書き加える。

何となく2年生に留まったことを責められているような気がして由良はムツと唸る。

「次にヴァルキリー。」

少し離れたところに今度はVと書く。

「あちらも学年が繰り上がって今は1年生がいらないけど2年と3年で構成されているわ。」

Vの下に2と3が加わる。

「今度の修学旅行は2年生全員が行くから……」

両方の2を斜線で消す。

「これだけなら出先でやつらに気を付けなければいいはずだ。」

「そうね。だけどこれを忘れるのは危険なのよ。」

由良は次は〇が書かれるものだと思っていたが違った。太と3が記される。

「太宮院琴。もう1つの未来視を持つ叶の友人。彼女が狙われる可能性があるのよ。叶から聞いた話だと何度もヴァルキリーからの襲撃を受けているみたい。私たちが出払った修学旅行の間にまた確保しようとするはずよ。」

「何でそう言いきれる？」

由良の疑問に八重花は遠くを見つめた。

「未来視の有用性と危険性は私も含めて敵対したからこそ余計に実感できたわ。だからこそヴァルキリーは必ず太宮院琴を手に入れようとする。そして修学旅行はその好機なのよ。」

八重花は別に悠莉から情報を得たわけではない。

ただ”Innocent Vision”を取り巻く環境、起こった事象と起こりうる現象、構成する人々の思想からヴァルキリーの太宮院琴襲撃を言い当てた。

それは情報収集能力と八重花の洞察力が生み出した洞察眼という名の第3の未来視だった。

それを聞いた由良は半分ほどに減ったコーヒーを俯いて見つめる。

八重花ほどではないにしても由良も聡いから八重花の予測が荒唐無稽ではないことは理解できていた。

「つまり、俺が言葉に残って太宮院を護衛しろってことか？」

「ええ。私を含めた他のメンバーだと理由もなく修学旅行を辞退すれば間違いなく怪しまれるわ。だけど由良なら去年の素行があるから行かないと言い出しても気紛れだって思われる可能性が高いのよ。」

八重花はその先を敢えて言わなかったが、仮に琴と親しい叶が急遽修学旅行に行かないと言った場合、裕子をはじめとした”普通”の友人たちが連れていこうとするはず。

一方、由良にはそうだった”普通”の友人は皆無、怖がっている生徒たちはホッとすることだろう。

由良が不当な避けられ方をしている現状には八重花も多少なりと憤りを感じはしているが利用できるものを選び好みできるほど”Innocent Vision”に余裕があるわけではないため由良の評判を利用させてもらおうと考えたのであった。

「どうかしら？お願いできるのは由良だけなのよ。」

八重花は正面から由良を見つめながら問いかける。

「ただ八重花は由良が断ることはないと考えていた。」

”Innocent Vision”の利益を考えれば琴がヴァルキリーの手に渡るのは避けなければならず、それが出来るのが由良しかないことも伝えた。

しかも琴は由良が可愛がつている叶の友人だ。

叶が悲しまないよう大人の対応で引き受けることが予想できていた。由良はカップの中身を睨み付けていたがグツと煽って半分残っていたコーヒートを流し込んだ。

振り上げた頭がぐんと前へと戻ってきてカップをテーブルに叩きつけながら

「俺は、嫌だ。」

キツパリと否定の言葉を口にした。

「…。」

由良の奇行とその後の言動に面食らった八重花は言葉の意味を冷静に受け止めるのに時間を要した。

「理由を聞かせてもらえるかしら？」

陸が作り、叶が大切に守っている”Innocent Vision”を想えば断ることのできない提案を由良は断った。

それが”Innocent Vision”を蔑ろにする考えだというのなら八重花は制裁も辞さない考えでいた。

由良は無言のまま八重花を睨んだり、空になったカップの中を意味もなく見たり、窓の外に視線を向けたりしていたが諦めたらしく小さくため息をついて頬を掻いた。

「せっかく仲間たちと一緒に旅行なんだ。俺だって、行きたいんだ

よ。」

「…。」

八重花は絶句した。

確かに由良が乙女らしい姿を見せたという話は聞いていたがまさか本当に見られるとは思っていなかった。

(可愛いわね。)

由良も自分からしくないことを言っている自覚があるため頬が赤くなってそっぽを向いている。

それが拗ねているようで可愛らしかった。

(これは誤算だったわね。)

ヴァルキリーの作戦を見抜いた八重花の洞察眼が見抜けなかったものの、それは由良が”Innocent Vision”を想う気持ちだった。

”Innocent Vision”の仲間を大切だからと思うがゆえに1人だけ仲間外れになる状況を受け入れられなかったと。

こうなってしまうっては八重花も提案を要求し続けることはできなくなった。

苦笑を浮かべながらカフェオレを飲む。

「仕方がないわね。太宮院琴には叶から注意するように伝えておいてもらうわ。」

「いいのか？」

断った負い目から由良は窺うように尋ねる。

八重花は肩をすくめて見せた。

「だって嫌なんでしょう？ だったら代案はないからあとは本人に頑張ってもらうしかないわ。」

「…悪い。」

「悪くはないわ。」

目を伏せる由良に八重花は微妙な言い回しで声をかける。だが胸のうちはむしろ喜びに近い感情を持っていた。

(本当に悪くはないわ、”Innocent Vision”は。)

## 第49話 修学旅行

そしていよいよ修学旅行の日がやって来た。

新幹線の駅まではバスでの移動であるため朝6時に生徒たちは集合している。

そんな時間だというのに巫女装束の琴は叶たちの見送りに来ていた。

「眠そうですね、叶さん。」

「はい。昨日もなかなか寝付けなかったのです。バスで寝ます。」

若干眠りに入りかけている叶を真奈美が支える。

1組の八重花、由良、明夜も集まってきており、明夜は由良にのし掛かるようにして眠っている。

「この間説明したように気を付けてください。」

周りに人がいるため主語を伏せて確認を取ると琴はしっかりと頷いた。

「心得ました。自身の安全に気を配るとします。」

気負った様子のない琴に心配そうな目を向ける叶に琴は微笑みを見せる。

「大丈夫です。叶さんを悲しませるようなことは致しません。」

「悪いな、俺のせいだ。」

由良が申し訳なさそうに謝罪の言葉を口にするると琴は意外そうに目を見開いて口許を袖で隠した。

「ふふ、起こるかもしれないという可能性でしかありません。それなのに先に謝られてはこちらの方が恐縮してしまいます。」

由良が表情を和らげたところで集合の声がかかった。

「それじゃあ、琴お姉ちゃん。行ってきます。」

「はい。お気をつけて。良き旅を。」

2年生がバスに乗り込んでいく。

それを眺めていた琴がふと視線を感じてその先を見ると2組のバスから美保が睨み付けるように見ていた。

その隣には悠莉も座っていて目が合つと会釈をした。琴も会釈を返す。

その反応を余裕と判断した美保の視線がさらに険しくなったが琴はもう既に意識を外していた。

準備が整い、叶たちを乗せたバスが壱葉高校から出ていく。

バスの巻き起こす風に髪を乱されるまま琴はジツと走り去るバスを見つめ

「さようなら、叶さん。」

ポツリと、バスのエンジン音に掻き消される声で呟いてその場からいなくなった。

「私の歌を聞けえー！」  
バスの中で騒ぎ

「震えなさい、愚民ども。革命！」  
新幹線の中で騒ぎ

そして到着した大阪で

「もう燃え尽きたわ。」

裕子はすでに燃え尽きていた。

これで1日目から自由行動ならまだ元気だっただろうが初日は無難に見学ツアーなので完全に適当になっていた。

「あー、久住の反面教師でしっかり見学するように。」  
引率の教師が言ったその言葉は妙に説得力があった。

2年生が真面目にぞろぞろ見学している頃、不真面目な集団がWV

e 大阪店にいた。

人造ソルシエル・ジュエルを担うヴァルキリーの尖兵たちである。「ヴァルキリーの神峰さんからメールを貰ったときにはビックリしたけど、ようやくうちらが戦う敵が出来たんね。」

「けどな、前のジュエルん時のヴァルキリーが”Innocent Vision”なんてばけもんと違うか？」

「それ聞いた。しかも人数は半分しかいなかった。つまりヴァルキリーより2倍強いん？」

ジュエルたちは勝手な想像で”Innocent Vision”を怪物へと仕立て上げていく。

すでに頭の中ではソルシエルを振るう度に建物を破壊し、奇っ怪な雄叫びをあげる山姥みたいな姿が出来上がっていた。

インストラクターの神戸がこの場にいなかったのもその想像に歯止めがかからなかった原因の1つだった。

その神戸は杏葉高校の修学旅行生を尾行していた。

「こちら神戸。」

『ついてきてる？』

電話の相手は美保だった。

神戸の視界に美保がいる。

そこから離れた位置に1組にいる”Innocent Vision”の姿も見えていた。

「捉えています。」

『もうすぐ班ごとに別れた移動になるわ。どうせあのメンバーは一緒の班だろうから人気の無いところで襲いなさい。』

台詞がかなり悪役入ってる美保の指示に対して神戸は電話に向かって頭を下げた。

「了解です。もう一組の方はどうします？」

『4組の2人はジュエルでどうにかなる相手じゃないわ。だから1組のやつらを1人は生かしておいて交渉に使うわよ。』



「わかりました。」

美保は自分の班に他の一般の生徒がいるため抜け出せないで八重花たち襲撃の指揮権は神戸にあった。

かつてはヘレナジュエルに所属していた神戸はクリスマスパーティーにも参加しており”Innocent Vision”の恐ろしさをよく知っていた。

「でも今はソルシエルはない。今度はやれる。」

引率の教師が立ち止まり、班行動の指示を出している。

あとは”Innocent Vision”のメンバーが3人だけになった瞬間に待機させてあるジュエルで包囲し、殲滅する。

これが前ジュエルで集団戦闘を学んだ神戸の練ったプランだった。

「動いた。」

班行動ではあるけれど自由行動ではないため学生の動きは鈍くノロノロと分散していく。

このまま他の生徒から”Innocent Vision”が離れていくのを待とうとした神戸は

「なっ!?!」

声を上げそうになるのを慌てて手で押さえて封じると美保に電話をかけた。

「何よ?あんまり電話してると怪しまれ…」

神戸は美保の文句を聞いていない。

ただ視線の先の光景に戸惑っていた。

「”Innocent Vision”のメンバーが別の班でバラバラに移動を始めました。」

「はあ!?!」

「あいつら同じ班じゃないの?そうしたら各個撃破よ。」

「もう見失いました。」

「あー、もう!」

美保が電話の向こうでイラついているのがわかる。

『美保さん、余り大きな声を出すとおかしいですよ。』  
悠莉のたしなめる声を聞いて美保が静かになる。

『とにかく誰か1人を追いかけなさい。捕まえれば他の連中の連絡先も分かるわ。』

「り、了解です。」

神戸は電話を切るとすぐに待機させていたジュエルに連絡を取った。

「すぐに集合して。攻撃するわ。」

『えー、でも”Innocent Vision”でヴァルキリーみたいな強いんでしょ？』

『うちらじゃ相手にならん化け物じゃん。』

しかし疑心暗鬼で日和ったジュエルの反応は鈍かった。

神戸の額に青筋が浮かぶ。

「いいからすぐに集合！」

『はいい！』

神戸はそのまま通りに出て3人が別れた地点に立った。

まだそれほど時間が経っていないので追いかければ見つけられるはずだ。

だがそこで1つ問題があった。

（誰を追うべきか。）

3人がそれぞれに分かれたなら追いかけた相手と戦うことになる。

ヘレナジュエルとしてクリスマスパーティーに参戦し、デーモン事件の時に辞めていた神戸にとって本物の魔剣の怖さを思い知らされた由良と明夜にはソルシエルがなかったとしてもあまり関わり合いたくなかった。

よって神戸は八重花の後を追い、ジュエルにも追跡ルートを指示して合流することにした。

だが神戸は知らなかった。

ソルシエルがない今、一番怖いのは深遠なる知略を持つ八重花であるということ。

神戸と合流したジュエル3人は大阪城の一画で八重花と一緒に行動していた壱葉高校の生徒たちを発見した。

「あの人らですか？」

「どれ？」

だがいくら探しても八重花の姿は見つからない。

ジュエルは八重花の事を知らないので神戸に任せるしかない。

「いないわね。休んでいるみたいだしお手洗いかしら？」

「あ、うちもトイレ。」

ジュエルの1人がシュツと手を挙げると近くのトイレにテツテと走っていった。

「相手の武器がないとはいえ一応戦闘時第二種警戒よ。」

神戸は緊張感のないジュエルの対応に頭を痛めていた。

「おつトイレ。」

トイレに入ろうとしたジュエルは入り口の脇に東京限定で売られたというアクセサリーが落ちていたのを見つけた。

「誰のかなあ？」

興味と罪悪感の間で揺れるがもしかしたらすぐに持ち主が来てしまうかもしれないという焦燥感からアクセサリーに飛び付いた。

「わー、いいな。」

子供のように目を輝かせてアクセサリーを眺めるジュエル。

その背後でニヤリと笑う人影がトイレからゆっくりと歩み寄っていた。

「戻ってこないわね。」

班行動の生徒たちが動き出した。

遠目で分かりづらかったが八重花らしき人物が合流したので神戸たちも追うことにした。

「メールしときます。」

ジュエルの1人が素早くメールを打つ。  
するとすぐに返信があった。

「へ？便器に嵌まった？」

「ぶつ。」

1人が素頓狂な声を上げ、1人が吹き出す。

神戸は頭痛がひどくなった。

「助けに行つてあげなさい。こっちは2人で追うわ。」

「はい。」

こうしてまた1人ジュエルが離れていく。

トイレに到着したジュエルは

「どごー？」

呼び掛ける。

「んー、んー！」

すると一番奥からくぐもつた声が聞こえた。

「まったく、何やってるのよ？」

ジュエルは苦笑しながらドアを開け

便器の上で後ろ手に縛られ猿轡された仲間の姿を見た。

「……え？」

突然の事に理解できず硬直するジュエル。

「んー！んーっ！！」

必死に何かを伝えようとしているが理解できない。

その対面のドアがゆっくりと開き、また1人犠牲者が増えた。

「…おかしいわよ、絶対に。」

ジュエル2人と連絡が取れなくなった。

神戸と残されたジュエルは顔を見合わせて不安を抱いた。

大阪は彼女らのホームグラウンド、いくらでも追い詰められるはずだった。

「神戸さん、どないしよ？やっぱ”Innocent Vision”はばけもんなんよ。」

「例えそうだったとしても今はソルシエールを失ってるのよ？」  
見えない恐怖に神経が削られていく。

ジュエルの方はすでに”Innocent Vision”という  
化け物の幻覚に飲まれて震えていた。

ただでさえ実戦経験のないジュエルがこれでは使い物になりそうも  
なかった。

神戸は美保に連絡をしようとして…止めた。

「さつきはすぐに動けばよかったのに美保さんに頼って対応が遅れ  
た。今回はしくじらないわ。」

神戸は吉葉高校の生徒たちが人気の少ない区画に足を踏み入れたの  
を好機と見た。

隙を見て八重花を拐い、決着を着けようとする。

ジュエルの身体能力ならそれも可能。

だが震えているジュエルは足手まと이었다。

「あなたは連絡を続けて。」

神戸はそう言っただけで飛び出した。

木陰から八重花を探し、全員の視線が外れた瞬間に風のように飛び  
出し、一瞬で反対側の茂みに八重花を抱えて飛び込んだ。

「さあ、大人しく……」

捕まえた人物を押し倒した神戸は

「……」

呆然と見上げてくるのが八重花と髪型や背格好が似ている他人だと  
ようやく気付いた。

押し倒された女子生徒は目を白黒させながら震えていた。

「大人しくしてもらおうよ。」

首筋に固いものが押し当てられて神戸は背筋が震えた。

ゆっくりと振り返ると木刀を握った由良とジツと見つめている明夜、そして不敵に笑う八重花が立っていた。

「おかしな動きを見せれば高校生を狙った強盗、あるいは誘拐未遂として国家権力に通報するわ。被害者がいる以上言い逃れは出来ないわよ。」

神戸は生徒から手を離して両手をあげた。

何があったのか理解できていない様子の生徒を送り出して八重花はクスリと笑う。

「面白いくらい素直に引つ掛かってくれてありがとう。」

「え？」

「つまり、ごういっことよ。」

「…。」

八重花は班の後ろについて歩いていく。

やはりクラスの腫れ物である八重花が気になるのかチラチラと前の生徒が振り返っては目が合うと慌てて視線を前に戻すことを繰り返していた。

「あの、東條さん？」

「何かしら？」

それをしばらく続けた辺りで一人の勇気あるクラスメイトが八重花に声をかけた。

別に取って喰らうわけでも睨み付けるわけでもないのに怯えられて八重花は苦笑する。

「ええと、どうして班が違うのに東條さんがついてきてるの？」

至極当然の、けどもう少し早く尋ねられると思っていた質問に八重花は苦笑する。

「つまらない班行動にちょっとしたスパイスをね。」

曖昧に答えて交差路で八重花は別の道に足を向けた。

「さて、どうするのかしら？」

「私に似た子のいる班についていく振りをして2人と合流し、その後はその班を追いかけるあなたたちを尾行していたのよ。」

「…。」

神戸はぐうの音も出なかった。

最初から仕組まれていた結果に向かわされた感覚。

これはクリスマスパーティーで戦ったインヴィの戦略に通じるものがあった。

「これからどうするつもり？」

神戸はキツと八重花を睨み付ける。

交渉の材料になるくらいなら暴れるつもりだった。

「別に何もしないわ。ただ、…。」

八重花は手にしたデジカメを神戸に見えるようにひっくり返した。

そこには生徒を押し倒す神戸の写真があった。

神戸の額をとめどなく冷や汗が流れる。

「証人と被害者がいて証拠もある。これが出回ればあなたの社会的地位は間違いなく失われるわね。」

今や花形と言われ始めたWVeの店員をくびになる。

それは転落人生の始まりを暗示するには十分だった。

神戸が暗い未来を想像して絶望を抱くのを見て八重花は口の端を釣り上げて悪魔の誘惑を囁いた。

「あることをしてくれればこの写真は消去してあげるわよ。」

「…。」

神戸が首を縦に振るまでにそれほど時間を要さなかった。

## 第50話 悪魔の騎士

叶たちが修学旅行へ行ったその日、例えば琴が連絡を入れてもすぐには帰ってこられないタイミングを見計らってヴァルキリーは琴を襲撃する計画を立てていた。

ホームルーム前にヴァルハラに集まった葵衣、緑里、良子は悠莉からの連絡を受けていた。

『 Innocent Vision ”のみなさんは全員参加されています。私たちの襲撃を警戒して休んだ方はいませんでしたね。』  
ヴァルキリーでも” Innocent Vision ”の妨害は一応懸念していたがそれは杞憂に終わった。

尤もそれが由良の可愛らしいわがままのせいだとは知る由もないが。「そうか。ありがとう。」

良子は電話から耳を離れた。

「 Innocent Vision ”は全員行っちゃって。そうしたら決行は今日? 」

「はい。太宮院様が未来視をお使いになって自らの危機を知り、 Innocent Vision ”の助力を求める可能性もあります。事は可能な限り早急に処理しなければなりません。」

太宮神社に攻め入ったことのある葵衣は良子から見て過剰なほどに琴を警戒していた。

「それじゃあ放課後にやる? 」

緑里もどこか真剣な様子で提案し、葵衣は頷いた。

「放課後、さらに言えば太宮神社に戻られる前に襲撃を行いたいと考えています。太宮神社には魔剣を封じる聖域があります。」

「いくらなんでも急だね。クラスが違うから上手く捕まえられるかな? 」

良子は琴の力を知らないので楽観的で、顎に手を添えて考えている姿もどこかのんきだ。



一方幾度となく琴の底知れなさを実感してきた葵衣は真剣に全力だった。

「各クラスに在席するジュエルに連絡を取り監視を行います。また、私たちが到着するまで太宮院様の足止めも担っていただきます。」  
「琴1人のために随分と大掛かりだと良子は苦笑したが、よく考えれば”Innocent Vision”相手では4対100の戦いを仕掛け、実質的には敗北している。」

未来視が相手では人数が多ければ勝てるわけではないことを思い出した良子は気を引き締めた。

「よし、今度こそボクたちの力を思い知らせてあげないとね。」

「これで取り逃がすような事があればヴァルキリーの名折れだからね。」

「それでは放課後に作戦を開始します。」

こうして朝の集会で作戦を立てたヴァルキリーだったが…それは朝のホームルームが終わった後に届いたメールにより頓挫した。

葵衣はすぐに人気の少ない階段の踊り場に緑里と良子を召集した。

「今さつき別れたところで呼び出しなんて、何かあったみたいだね？」

「はい。先程太宮院様の在席する1組のジュエルから連絡を受けました。本日、太宮院様は実家の業務のため欠席されるとのことです。」

葵衣の報告を聞いて緑里と良子は顔を見合わせ、眉を寄せた。

「なんか、タイミング良すぎるね。」

「これって…」

「恐らく太宮院様は私たちが襲撃することを未来視の力でご存知です。そして聖域から自らを出さないために登校されていないのでしよう。」

それは推論でしかなかったが葵衣の口から語られると真実のように聞こえて良子たちは顔を俯かせた。

「やっぱりインヴィといい太宮院といい、未来を知ってる相手と戦うのは厄介だね。」

「すっごいやな気分。」

作戦の中断で琴に対して不平を漏らす2人とは違い、先に情報を得ていた葵衣はすでに次の作戦を考えていた。

「我々はこのまま太宮神社に襲撃をかけます。」

「え!?!」

「へえ。」

理詰めの葵衣には似つかわしくない良子や美保のような特攻案に縁里は驚きの声を上げ、良子は感心した声を出した。

「襲撃が察知されているならば”Innocent Vision”を呼び戻すことも考えられます。今から放課後まで半日、急げばギリギリですが戻ってこられる時間です。」

「葵衣、時刻表まで覚えてるの?」

良子は別のところで驚いていたがこうしてヴァルキリー特攻隊は一時限目から早退して太宮神社へと向かった。

琴は本殿の祭壇の前で瞑想をしていた。

静謐という言葉が相応しい空間には外界の音は届かない。

背筋を伸ばして正座をしていた琴の目元がピクリと震える。

「やはりいらつしやいましたか。」

琴の未来視は分岐の観測。

だから多少道を誘導することは出来ても陸のInnocent Visionのように相手の行動を縛る力はない。

「太宮様」、琴は参ります。」

祭壇に向けて瞳を閉じたまま声をかけるが返事は何もなし。当然の事だ。

今、太宮神社には琴しかないのだから。

瞳を開いて袖を襷で縛り、倉から引つ張り出してきた矢筒を腰に、弓を手にする。

ハチマキがなかったので高校受験の際に父からもらった菅原道真を祀る北野天満宮で願掛けをして貰ったという由緒正しい「絶対合格」ハチマキを額に巻いた。

巫女の戦装束という様相だった。

琴はもう一度瞳を閉ざす。

思い浮かぶのは叶、そして陸の姿。

「陸さん、叶さんをよろしくお願ひします。」

琴は言霊を残し、戦場となる境内へと歩み出ていった。

ヴァルキリーが鳥居から足を踏み入れた瞬間

「神社の参道の中心は神様がお通りになる場所、人は左右を歩くものですよ。」

本殿から出てきた琴に声をかけられた。

葵衣と緑里は知っていたので左右を歩いており、良子だけがど真ん中にいた。

琴がクスクスと笑う。

「ああ、自分は神だとのたまう奇特な方でしたか？」

「違う！」

良子は慌てて横に飛び退く。

「石段はゆっくり登るものです。」

「ぐう。」

良子が弄られながらも境内に入ったヴァルキリーは玉砂利を踏み締めながら琴を包囲する。

全員「絶対合格」ハチマキが気になったが切迫した状況なので疑問は押し込めた。

「太宮院様、データを渡し、ヴァルキリーへの協力を誓約してくだ

さいませ。さもなくばヴァルキリーは太宮院様を危険分子として排除させていただきます。」

「脅迫、不法侵入に続き、遂には実力行使ですか。」  
嘲るように琴は笑うが葵衣たちは動じない。

「ちよつとやりすぎちゃったね。」  
「ヴァルキリーの存続に関わる危険じゃなりふり構ってられないからね。」

良子たちの左目が輝き、ゆっくりとジュエルが現れる。  
聖域の本領は夜に蔓延る魔を抜うもの。

人の訪れる昼にはその効果は弱かった。

「ジュエルも使える。そんなあたしたちに勝てるかな？」  
ラトナラジュ・アルミナを肩に担いで良子が余裕を見せる。

琴は右手に弓、左手に矢を持ちつがえた。

「それは神のみぞ知ることです。」  
戦うことを否定せず、良子の眉間に向けて矢を放つたのを合図に戦闘が開始された。

ドガン

凄まじい衝撃が地面に打ち付けられ玉砂利が散弾のように周囲に爆ぜる。

琴は身を低くして良子の一撃をかわした。

眉間を狙われた良子とはんでもない動体視力で矢を掴んで見せた。  
それだけで琴の攻撃は止まり、後は防戦一方だった。

避けた先で待ち構えていた葵衣に向けて琴は手で矢を投げつける。  
攻撃動作に入ろうとしていた葵衣は咄嗟にエルバイトで弾き、矢をもう一本放った琴は体勢を立て直して距離を取る。

「おつと、こつちは行き止まりだよ。」

突然飛んできた人形の紙に道を阻まれ、背後から緑里が迫る。  
振り返りざまに弓を振るつたが魔剣の前には竹だろつがグラスファ

イバーだろうが関係なく弦と弓をまとめて斬られた。

そのまま振り下ろされた斬撃を鏃で受け流す荒業を見せ、飛び退る琴だったがすでに武器は無くなっていた。

「はあ、はあ。」

肩で息をしており、さっきの攻撃で痛めた指を押さえている。

ヴァルキリーの3人が正面左右の三方から詰め寄っていく。

「お嬢様のお話では太宮院様はシンボルをお使いになられると聞いております。」

「すみませんが、ただいま品切れです。」

笑おうとして失敗した琴が膝を折った。

「ジユエルと普通の相手が戦えばこうなるよね。やっぱり”Innocent Vision”はどこか異常だ。」

良子が一步前が出る。

肩に担いだ鉾槍が琴には断頭台のギロチンに見えた。

「降伏宣言か遺言、好きな方を聞いてあげるよ?」

もはや目の前には負けか死しかないらしく琴は自嘲気味に笑った。

「わたくしが破れても第2、第3の…」

「残念だよ、未来視の巫女さん!」

良子が琴の冗談を受け取ってラトナラジュ・アルミナを振りかぶった。

これで詰みだ。

こうならないよう”太宮様”の先見で細く険しい救いの道を目指したがやはり大いなる流れには抗えなかった。

最後の冗談ももうどちらにしても結果は変わらない諦めから出たものだった。

(すみません、叶さん。)

良子の振り上げたラトナラジュ・アルミナが迫る。

(これで、わたくしは死にます。)

それは以前から分かっていたこと。

大局を見る太宮の巫女は生き死にに干渉しないことを宿命としている。

輪廻の有り様を変化させないためだ。

それは自身の事でも同じ。

だから琴は諦め、瞳を閉じた。

浮かぶのは叶の顔。

そして…瞼の裏に未来への道筋が切り開かれる光景を見た。

「え？」

瞳を開いた琴は運命の変化を受け止めきれなかった。

ラトナラジュ・アルミナは琴に当たっていない。

真紅の刃が止められていた。

見えるは漆黒の背中。

手から漆黒の刃を突き出した異形。

「オー！？」

「違います、これは…」

その瞳の色は紅ではなく朱色だった。

全員がその存在をよく知っていた。

「デーモン！？」

あり得ないその名に戦慄が走る。

「なぜ太宮院様をデーモンが守っているのですか？」

「それよりもファブレを倒したときにデーモンも消えたはずなのに

！？」

ヴァルキリーが困惑して手が止まった瞬間、デーモンが良子を武器ごと押し返した。

その力はこれまでのデーモンやオーの比ではない。

良子は足の裏を滑らせてどうにか体勢を維持する。

「なんて力だ。あたしが競り負けるなんて。」

「…。」

デーモンは何も語らないが明らかに琴を守るようにヴァルキリーに立ち塞がっていた。

「旧式の化け物が！」

緑里が式を飛ばしながら突っ込んでいく。

戸惑っていた葵衣と良子もジュエルを手にデーモンへと攻撃を仕掛けた。

すべての攻撃がデーモンに殺到し

その全てが空を切った。

(速い！)

辛うじて視認できた良子が振り返るより早く緑里が回し蹴りで蹴り飛ばされて自分の式に激突した。

「ぐあっ！」

さらに回転の勢いを殺さず葵衣に斬りかかる黒の刃を良子が咄嗟にラトナラジュ・アルミナの長柄で防御に入った。

ガリガリと削られるような音がした直後に良子の足が大地から離れる。

「うわああ！」

良子は2度地面でバウンドし玉砂利を巻き込みながら地面に転がった。

たったの一瞬でヴァルキリーのジュエルが2人も倒された。

ウィンドロードがないためスピードでついていけず、パワーも良子以上のデーモンが相手ではエルバイトを構えつつも圧倒的な戦力差を前に葵衣は踏み込めずにいた。

「なぜこのタイミングでデーモンが…。」 Innocent Vision”はデーモンまでも仲間に引き込んだというのですか？」

デーモンが笑ったような気がした。

葵衣はエルバイトから風を生み出し自分の周りに纏う。

察知と防御の効力を持つ補助グラマリー・エアコートはデーモンが消えた瞬間、背後に動きの乱れを察知した。

（同じ手は受けま…）

対応しようと振り返った葵衣の目の前、左の眼球の前には鋭利な切っ先が紙一重の距離で止まっていた。

あまりの恐怖に眼球が震え、全身の熱が奪われたような錯覚を覚える。

「あ…」

葵衣は全身を支配する恐怖感に既視感を覚えた。

それがなんだったか加速する心音に邪魔されて思い出すことができず「葵衣から離れる！」

横合いから飛んできた式によってデーモンが飛びのいたことで窮地を脱した。

「…っ、はあ、はあ。」

ようやく呼吸の存在を思い出した葵衣が珍しく息を乱し、そこに起き上がったもののおち傷だらけの良子と同じく蹴りの衝撃で膝が震えている緑里が集まった。

さっきまで優勢だったとは思えないほどヴァルキリーは満身創痍だった。

デーモンは琴を背にしたまま動かない。

それが良子たちには巨大な漆黒の壁に見えた。

「はは、ソーサリスは本当に化け物だったんだ。」

「本当に、あり得ない。」

「…私たちだけでは太刀打ちできそうにありません。撤退します。またも琴を仕留められなかったことに運命めいたものを感じながら葵衣は2人を伴って太宮神社から逃げていった。

それを呆然と見送った琴はようやく目の前に立っているのがデーモンだと思いついた。



「あの、ありがとうございます。」  
「  
琴の謝罪に答えることもなくデーモンは飛び上がって屋根伝いに消えていった。」

## 第51話 黒き暴走

「すみません、逃げられました。」

神戸は恐縮した様子で頭を下げた。

正確に言えば頭を上げたくなかった。

何故なら

「…。」

額に青筋を浮かべて目尻をピクピクひくつかせている美保が目の前にいるからだった。

「神戸え？」

怒気が滲み出してきている声に神戸はますます頭を下げる。

「美保さん、そのくらいでいいではないですか。」

仲裁に入ったのは美保の後ろで成り行きを見守っていた悠莉。

だが怒髪天を突く勢いの美保がその程度の言葉で止まるわけがない。「何言ってるのよ！ジュエルがソルシエルもシンボルも持たないやつらに傷一つ付けられず帰ってきたのよ？これが怒らずにいられるわけないでしょ！」

「ひい、すみません！本当にすみません！」

神戸は直角を超えて鋭角になるほど頭を下げた。

もうこれ以上は土下座しかない。

しかし悠莉は美保の怒りをぶつけられも常の微笑みを浮かべたままだった。

「ですが、尾行を見破られ、身代わりまで使われたとき、美保さんに気付くことができますか？」

「…。」

美保は自分を鑑み、ほぼ間違いないと騙されると気付いて呻いた。

悠莉ならともかく直情型の美保では策を見破るのは無理だと自分で気付いたのだ。

「神戸さん、お疲れさまでした。明日も作戦はありますのでよろし

くお願いします。」

「は、はい。」

(言えない。修学旅行中の作戦を打ち明けさせられたなんて言えない。)

神戸は頭を下げながら美保と八重花のどちらを裏切るにしても恐ろしいことになると思いを震わせた。

「神戸さん、大丈夫ですか？」

「は、はい、平気です。」

「そうですか。私たちはまだ見学がありますので失礼します。」

「はい、失礼します。」

神戸はボロが出ないうちに美保たちの前から逃げ出した。

神戸はジュエルクラブの訓練所に戻ってきた。

そこにはさつきまで連れていたジュエルたちが落ち込んだ様子で座っている。

「あ、神戸さん……。」

一番最初に捕まった子が神戸に気付いて弱々しい声を出した。

他の2人も神戸と目を合わせないようにしている。

幸い3人には外傷と呼べる傷はなかった。

強いてあげれば1人目の犠牲者の手首に縛った痕が少しいたくらい。

”Innocent Vision”の目的は戦力の分断にあったのでそれも当然だった。

「ごめんなさい、うちのせいで。」

2人は捕縛され、1人は恐怖に震えて何も出来なかったことを悔いているようだった。

だがそれを言えば”Innocent Vision”の策にまんまと嵌まり脅されて従ってしまった神戸も役にまるで立っていないためジュエルたちを叱ることもできなかった。

「神戸さん、あれが”Innocent Vision”なの？」  
ジュエルたちは”Innocent Vision”もオーと呼ばれる化け物も魔剣を振って戦えばいいと考えていた。

だが今回の襲撃、攻める側だったはずのジュエルたちは結局魔剣を抜くことすら出来なかった。

ジュエルというアドバンテージが”Innocent Vision”の普通の人に通用しなかったのである。

ジュエルが選ばれた者の証と教わってきたジュエルたちにとって今回の敗北はアイデンティティーの崩壊にさえ繋がりがねないほどの衝撃だったのだ。

「Innocent Vision”は…あんなものじゃない、本物の”化け物”よ。」

神戸はクリスマスパーティーの時の事を思い出してギョツと自分の体を抱き締めた。

「Innocent Vision”のソーサリスは一人で数十人を一度に吹き飛ばし、幻覚を使い、分身したりもしたのよ。」

もはや人間を語る言葉ではない内容にジュエルたちは身を寄せ合って震える。

「だけど一番怖いのはそんな”化け物”を従える”Innocent Vision”の名前の由来になったリーダーね。彼は…未来が見えるらしいわ。どんな作戦もどんな攻撃も当たらない。そんな真正正銘の”化け物”なのよ。」

クリスマスパーティーで神戸は何度も空で輝くコロナの光を見て自分の力とは比べるのも烏滸がましい力を感じていた。

だが”Innocent Vision”のリーダーは天災のような攻撃すらも凌いで生き残った。

だから神戸にとって半場陸は”人”として認識できなかった。

「今は病院にいるって話を聞いたことがあるけどね。」

ジュエルたちはすでに怯えきっていて聞いていなかった。

「そ、それじゃあうちらじゃ勝てへんやん。」

「今はソルシエールはないし本物のリーダーも不在だから大丈夫：  
なはずだったんだけど。」  
実際にまんまとやられてしまった身としてはその認識を変えないわ  
けにはいかず

「うえーん、神戸さーん。」  
泣きついてきたジュエルたちを宥めるのに苦労するのだった。

裕子を班長に据えた男女比1対4のグループは通天閣にいた。  
到着直後はテンション大暴落だった裕子もだいたい調子を取り戻して  
観覧スペースの望遠鏡にかじりついている。

「B2、今の時間は混んでいるみたいよ。明日の予定を繰り上げる  
必要があるかもしれないわ。」

「でもそれだと遠回りになるよ?」

「D6とF3の間ならどうかかな?それにさっき見た限りだとE8は  
列は並んでも掃けるのは早いから午後に回しても行けると思う。」

「にははは、いいかもだよ。」

尤も見学などそっちのけで明日の現地視察に余念がなかったが。  
一応見学の感想文の報告が必要だがそれは芳賀がやっている。

そのせいか所謂ハーレム状態だというのにあまり男子に妬まれたり  
していなかった。

「裕子、こっちは終わったぞ。」

「ありがとう、雅人くん。」

裕子は望遠鏡から目を離さず手を振って応える。

その手に買ってきたジュースを持たせると

「ひゃっ!」

声を上げて振り返った。

「裕子ちゃん、私が変わるね。」

気を利かせた葉が観測者を交代し裕子はフリーになった。

近くのベンチに腰かけて芳賀と2人で一息つく。

視線の先では叶たちがやいのやいのと計画の修正に四苦八苦していた。

「こういう時に陸とか東條がいるともっと上手くやるんだろうな。」  
叶や真奈美の前ではあまり陸の話をしないようにしているがやはりこのメンバーでいるからこそ思い出してしまうことだった。

裕子は複雑な表情を浮かべてジューズに口をつけた。

「しょうがないわよ。八重花は自分のクラスの実行委員だから忙しいし半場くんはアレだしね。」

原因不明の奇病について裕子たちは何も知らない。

以前不定期に意識を失っていたものが遂に目覚めなくなったという認識でしかなかった。

それでも叶や真奈美、八重花が目覚めると信じているから裕子たちも塞ぎ込まないようにしていた。

「でもやつぱは残念だな。陸がいればこの旅行はもっと面白くなっただろうからな。」

芳賀はベンチに仰け反るように背を預ける。

天井の上に逆さまの町が見えた。

「雅人くんって半場くんのこと好きだよな？やっぱりLOVE？」

「ばつ、違う！」

裕子の爆弾発言に芳賀がガバツと起き上がる。

裕子はニヤニヤと笑っていた。

ふうとため息をついて答えを考える。

「陸は、強いんだよ。」

「喧嘩の話？」

芳賀の真面目な様子に裕子も興味を持って尋ねる。

「いや、そうじゃなくて、人間的というか心が強いんだ。どんなに周りに文句を言われたり追い回されても陸の芯はぶれない。輪に入っているのにどこかに自分を持つてる。俺はそういう風な強さに憧れてるんだ。きっと。」

「…なるほどね。半場くんがモテる理由はそこにあるみたいね。」

「そうかもな。」

気がつけばジューズは空になっていた。

いつまでも3人に任せておくわけにはいかないと裕子は席を立つ。

「それとな…」

その背中に

「LOVEの相手は裕子だけだ。」

照れた声が聞こえた。

「…バカ。」

裕子は振り返らずにみんなと合流し

「さあ、明日の楽しい自由時間のために頑張るわよ！」

すっかり元気を取り戻していた。

そうして1日目の見学を終え、吉葉高校の修学旅行生たちは宿へと向かうのであった。

神戸は夜の町をフラフラと歩いていた。

巡回ではないし酒を飲んだわけでもない。

腹いせにケーキバイキングでやけ食いして気持ち悪いだけだ。

「はああ。」

やけに重いたため息が漏れ、スーツ姿のためか20歳以下なのに仕事に疲れたO.Lみたいになっていた。

その原因はやはり今日のことだった。

「美保さんは怖いし、ジュエルはまだ”Innocent Vision”

”には敵いそうにないし。それでも指示出さなきゃいけない

なんて、中間管理職はつらいわ。」

美保からの重圧とジュエルクラブのメンバーの制御はストレスにまみれていた。

今日の襲撃だつて3人しかいなかったのは候補がいなかったからではなく全員が手柄を立てたくて立候補して騒いだのでその中でも冷静な者を選んだからだ。

だが失敗し仲間がやられた以上明日は抑えるのがもつと困難だろう。

「はあ。」

食べ過ぎかストレスか胃が痛い。

うつ向いて足を止めた神戸は

「あれ？」

足元が変わった石が落ちていることに気が付いた。

闇から滲み出したような黒の中に目玉のように浮かぶ紅色の斑点。

一見不気味なその石に神戸は引き寄せられるように手を伸ばしていた。

するとさっきまで落ち込んでいた気分がすっきりしたような気がした。

「パワーストーンかしら？」

周囲を見回しても落とし主は見当たらない。

神戸はきゅっと石を握り、そのまま速足に、最後には走って去っていった。

それを路地の陰から見ていた人物はフツと笑って闇に消えていった。

翌日は各クラスで自由行動だった。

「さあ、4組の恐ろしさを関西に轟かせるのよ！」

昨日とは打って変わって活力全開の裕子の号令で4組は3組の生徒を引き連れて各地のおすすめスポットを堪能するために飛び出していった。

「叶たちは出掛けたようね。」

「ああ。」

昨日のジュエルの襲撃を八重花は叶たちには伝えていなかった。

教えれば人の良すぎる2人は心配して旅行を楽しめないだろうから。それに八重花の予測だとジュエルでは役不足だからセントの力を持つ叶と真奈美は狙われず、自分たちが標的になると読んでいた。そして昨日神戸から聞き出した情報はそれと合致した。



つまり旅行の間叶たちは狙われないことが確定となったのだ。だから何も言わなかった。

「しっかり楽しんできなさい。」

すでに見えなくなった親友たちを見る八重花の目は優しくかった。

「八重花さん。」

背後からかけられた声にその表情も消え去る。

振り返れば悠莉が立っていた。

「私たちもそろそろ出発しませんか？」

「そうね。」

実行委員としての職務を全うすべく八重花たちは動き出した。

クラスメイトに最高の旅行を演出するために。

その頃、大阪のジュエルには近隣から授業をサボって集まったジュエルがひしめいていた。

「Innocent Vision」が来てるんでしょ！」

「ジュエルがやられたって聞いた！」

「仇討ちや！」

血気盛んな愚連隊は暴動の一步手前まで進んでいた。

神戸の予想通りの展開だが対抗手段があるわけもなく必死に抑えられない。

「落ち着いて。ヴァルキリーからの指示が来るはずだから待って。」

「何を悠長な！神戸さんは悔しくないん？」

悔しい、その単語に神戸が反応した。

「…悔しい。悔しいわよ。」

それは昨日のことだけじゃない。

かつて純乙女会としてジュエルをやっているながらクリスマスパーティーで負けたこと、グラマリーを発現できないこと、年下のヴァルキリーにこき使われること、ジュエルたちが自分勝手なこと。

その他諸々の様々な悔しさが一気に溢れ出してきた。

気がつけば神戸の左手にはジュエルが握られており、それがまるで

脈動し、語りかけてくるように感じた。

『押さえ付けるな、解放しろ。』と。

神戸の左目の輝きが増した。

「神戸、さん？どないした？」

右手に持ち変えたジュエルを振り上げて戸惑うジュエルたちに宣言する。

「私が指揮を取るわ。今日、”Innocent Vision”を血祭りにあげるわよ！」

突然の豹変、突然の宣言。

神戸の変化に戸惑ったジュエルたちだったが神戸のその力強さとこれまでの信頼で疑問は押し流されてすぐに同調した。

「やったる！」

「Innocent Vision”を倒せばわたしらもクラスアップよ。」

各自の思惑を胸に闘志を高めていく。

神戸はポケットに手を入れた。

昨晚拾った石が力をくれるようだった。

「行くわよ！」

「おーっ！」

こうしてヴァルキリーの思惑から外れたジュエルの暴走が動き始めた。

## 第52話 目覚めし剣

八重花たち1、2組は京都で渡し舟の遊覧を満喫していた。

「旅行に行くのですから普段体験しない事柄をやりましょう。」

という悠莉のコンセプトが基になった企画なので現地での変わり種のおもてなしが多いツアーとなっていた。

そしてもう一つの変わり種は2クラスの班をシャッフルしてくじ引きをしたこと。

その結果は細工したんじゃないかと言うように八重花の班に美保、悠莉の班に由良が属することになった。

京都の渡し舟の上では悠莉が由良に睨まれていた。

他の生徒は由良を恐れて舟のギリギリまで後ろに下がっているので若干バランスがおかしい。

「おい、このくじ引きはわざとか？」

由良の問いに悠莉は小首を傾げる。

「私にそんな力はありませんよ。出来るのは半场さんか蘭様…こほん、江戸川先輩くらいではないでしょうか？」

忘れたことはないが久し振りに聞いた名前に由良が少し感傷的な顔をした。

「確かにな。だが俺たちを分断する目的ならどうだ？一緒になる可能性もあるがバラける方が確率的には高いだろ？」

「その場合、私たちが同じ班になる確率も低いですね。計算しましょうか？」

由良は顔をそらして拒否する。

ヴァルキリーが同じ班にならなくても分断させてジュエルで攻めてくることもできる。

人員不足の”Innocent Vision”には難しい策もヴ

アルキリーでなら有効な手段となりうるのだから。

「どちらにしろ人の多い場所で”非日常”の力を使うほど愚かでは  
ありませんよ。」

「そうであることを願いたいな。」

由良の話は終わりとばかりに体を横に向けて景色に目を移してしま  
った。

悠莉もそうしようとした所で

ブウウン

携帯が振動した。

電話ではなくメールだったようで手に取ったときにはもう止まっ  
ていた。

「…。」

受信したメールを見た悠莉は極力表情に出さないようにしながら唾  
然とした。

『報告。関西ジュエルがインストラクター神戸を筆頭に暴走し”I  
nnocent Vision”の襲撃準備を進行中。』

それだけでも驚くべき事態だがさらに続く文が悠莉に複雑な思いを  
抱かせる。

『ヴァルキリーは周囲への注意を払いつつ助力されたし。』

差出人不明のメールに不安を隠せない悠莉であった。

美保は観光もそこに八重花を睨むように観察していた。

「背中に穴が開きそうなのだけど、何か用？」

案内人からの名所の説明が一段落したところで八重花は振り返って  
怖い顔をしている美保に尋ねた。

それだけで美保の不機嫌指数がさらに向上する。

「東條八重花、あんたがまた何か企んでないか見張ってるのよ。」

「この企画の大筋は悠莉の発案よ。くじ引きだって他のクラスの方  
とも仲良くなりたいうって言っていたからだし。」

八重花は肩を竦めて首を振る。

疑い始めればそのすべてが疑わしく見えてくる。

そんな状態の美保に何を言っても無駄だと悟ったからだ。

八重花は視線を前に向けて小さく嘆息する。

(むしろヴァルキリーが何か仕掛けてきそうなのよね。)

正直他にクラスメイトがいるとはいえ美保に背中を見せている状態は心臓によるしくない。

ふと顔を上げた八重花は学校の時間だというのに制服姿で隠れているように見える生徒を見掛けた。

八重花と目が合うと逃げ出したからジュエルだろう。

(やっぱり。一応保険をかけておいて正解だったようね。)

八重花たちを乗せた舟はゆっくりと進んでいく。

その先に良くないものがあると分かっているにもかかわらず八重花に抜け出す術はなかった。

「んー、おいしい。」

叶たちは試食ツアー真っ最中。

6個人りの蒸したて饅頭を食べてホクホク顔だ。

「1個余るよな。これは俺が…」

と手を伸ばした芳賀の前から饅頭が消えた。

「あれ？」

全員の視線が一瞬で伸びてきた腕の先を見た。

「もぐもぐ。」

「明夜ちゃん!？」

そこにはなぜか饅頭食べている1組の明夜がいた。

「明夜は1組だから八重花たちと一緒にはずだよな?それがどうしてここに?」

真奈美の質問に饅頭を食べ終えた明夜は頷く。

「こっちの方が美味しいもの食べられるって聞いたから。」

これが八重花の仕掛けた保険。

明夜を守り、また叶たちを守る自然な違法。

明夜だからこそ許される手段だった。

「それじゃあ6人に増えたけど気にせずゴー！」

「ゴー。」

裕子は次の店で5個入り1セットの醤油風味たこ焼きの前に立った。5人なら何の問題もなかったが今は6人、1セットでは足りず2セットでは多い。

「ゆうちん。」

「任せなさい。」

裕子は店主の前に立つ。

「らっしやい！」

「私たち6人で試食して回ってて美味しければ追加で頼むこともあるんだけどなあ。」

買うものを迷う素振りを見せつつ要求を出す裕子のおばちゃん的交渉術。

店主はうむむと悩んだが。

「よっしや、1個おまけでつけたる！」

「おじさんありがと。」

結局明夜が気に入ってもう1セット買ったので2つ買っても変わらなかった。

一行の食べ歩きツアーは続く。

その頃、八重花と由良はそれぞれ危機的状況にあった。

それは舟を降りてすぐの事。

あからさまに待ち構えていた風のジュエルたちに八重花よりもむしろ美保が困惑していた。

他の生徒もいるし周囲には地元民や他の観光客もいる。

こんなところでジュエルを抜くのはあまりにも危険な行為だった。

だが美保は動けない。

仮にジュエルを使われた場合、ヴァルキリーに関わりがあると知られるのは危険だから。

「どうやら私に用があるみたいだから先に行きなさい。」

八重花はそうやって他の班員を遠ざけた。

京都の華々しい町並みから少し外れた裏路地は苔葉と何も変わらな  
い。

「人前でジュエルを使うつもり…」

社会的立場を理解させて矛を納めさせようとした瞬間

「オーーツ！」

大気を震わせて人ならざるものの咆哮が木霊した。

「なっ!?!」

さすがの八重花も驚きを隠せない。

今のはまるでジュエルの作戦にオーが合わせたようなタイミングだった。

結界が周囲に展開していき、「一般人”が消えていく。

「へえ、どうなることかと思ったけど、なかなか面白いことになっ  
てるわね。」

「…。」

背後から聞こえた声に八重花はゆっくりと振り返る。

そこには眼鏡の奥に獰猛な笑みを浮かべる神峰美保の姿があった。  
真横に左手を伸ばすとスマラグド・ベリロスが顕現する。

「…最低ね。」

八重花の愚痴に美保はさらに口の端を吊り上げて告げた。

「さあ、狩りの始まりよ。」

「うおおおー！」

「きゃー！」

由良が投げた巨大な焼き物が派手な音を立てて砕け散り数人のジュ

エルが巻き込まれた。

由良たちもまた別の場所でオーの結界に飲み込まれて交戦中だった。悠莉もいるが今は戦闘に参加する様子はない。

「何よ、あれ！」

「ジュエルもないのに、化け物じゃない！」

由良の荒々しい戦いぶりにジュエルが怯えて距離を取った。

由良はフンと息をついて悠莉を睨み付ける。

「おい、総大将。お前はこないのか？」

「そうですね。少なくとも半場さんも江戸川先輩もいない” Innocent Vision”には興味がありません。」

それが悠莉の” Innocent Vision”と戦わない本心だった。

由良は怪訝な顔をする。

「あの2人が戻ったらヴァルキリーはまた勝てないかもしれないんだぞ？」

「そうですね。ですがあのお2人に手をかけられるのなら、私は…ゾクリと悠莉が震え、恍惚とした表情になった。

怪しい雰囲気によ良が面食らった隙についてジュエルが踏み込んでくる。

「ですからあまり” Innocent Vision”とは戦いたくなかったのですが、仕方がありませんね。サファイロス・アルミナ。」

ジュエルの攻撃をかわした由良の前で悠莉の左目が朱の輝きを放ち、禍々しくも優しい笑みを浮かべるヴァルキリーの下沢悠莉が一步を踏み出した。

由良の背中を嫌な汗が流れる。

「今日、この場に私が居合わせた不幸を呪ってください。」

「急にみんなが変な壁ん中に閉じ込められたよ！」



「どうします、神戸さん!？」

そして叶たちを狙うべく別行動を取っていた神戸の下に知らせが届いた。

だが神戸は気にする様子もなくエルバイトの刀身を見つめている。

「大丈夫よ。今は私たちの敵に集中しなさい。」

「は、はい。」

雰囲気の違う神戸に戸惑いつつもジュエルは従い叶たちが来るのを待っていた。

「みんなは来ない。」

突然の背後から声に驚いたジュエルが構えると土産物屋で売っている木刀を両手に持った明夜がいた。

神戸がぎよろりと目玉を動かして明夜を見る。

「相手は私。」

どんなに策を労しても、どんなに勇ましくても、”人”の身でジュエルに抗い続けることは不可能だ。

「はあ、はあ。」

「どうやらここまでのようね。スタンガン1つでよく戦ったわ。」

膝をついた八重花の周りにはやられたジュエルが数人転がっている。それでもジュエルはまだ残っており、ヴァルキリーの美保は無傷で健在という最悪の状況だった。

八重花は痛めた右腕を押さえながら顔をあげる。

その目はまだ死んでいない。

「嫌な目をするわね。レイズハート!」

美保が顔を歪めて翠の光刃を呼び出した。

三方位に陣取った刃は指示があれば八重花を切り裂く。

それでも八重花はまっすぐに敵を、前だけを見る。

「鬱陶しいわね。何がそこまでさせるのよ?」

由良も屋根の上にまで登って大立ち回りを演じたがいよいよ追い詰められた。

屋根の端に立たされながらも由良は相手を射殺しかねない目をして  
いる。

「強い目です。よほど強い信念がおりのようなですね？」

その時、2人は同時に笑った。

恐怖でも気が触れたわけでもなく、何の迷いもない綺麗な瞳で笑みを浮かべた。

「当たり前的事よ。」

「決まってるだろ。」

八重花は足に力を込めて立ち上がり、由良はまっすぐに敵と対する。何かにつられるように、2人が同じ動きで、左手を前に突き出した。

心の奥に熱くたぎる思いが、今、爆発した。

「「Innocent Vision」を、りくの帰る場所を守るため！戻れ、ソルシエール！」

叶は熱い風を感じて立ち止まった。

振り返ってももう吹いていなかったが真奈美もおかしな顔をして  
いた。

「今、空気の震えを感じた。」

「私は熱い風だった。」

2人は顔を見合わせ、

「ごめんね、裕子ちゃん。やっぱり明夜ちゃんを探しに行ってくる  
！」

「あたしも！」

2人は異変の原因を探すべく走り出した。

封じられた空間の中、大地が燃えていた。

美保はジュエルを取り落としそうなほど愕然とし

「な、何よ、それ……」

その中心で左目を煌々と朱色に輝かせ、左手に炎を纏う魔剣・ジオードを担う八重花を睨み付けた。

「レイズハート！」

怒りの光刃が殺到するが

「はっ！」

八重花はたった一太刀ですべてを粉碎した。

手にしたジオードを見ていた八重花が動揺する美保を見て笑う。

「お礼は弾むわよ。」

同時刻、別の结界では内包する大気が震えていた。

その中心は屋根の上、由良の左手に握られた削り出した水晶のような槍とも剣とも取れる魔剣・玻璃だった。

悠莉は振動が起こす風に髪を揺らしながら目を見開く。

「ソルシエール……どうしてその力が。」

「知るかよ、そんなの。」

ぶつきらぼうな物言いながらも由良は旧友に再会したように笑う。

「さあ、玻璃。久々に暴れようぜ！」

数人のジュエルを1人で捌いていた明夜は空を見上げると大きく後ろに跳躍して神戸の攻撃をかわしつつ距離を取った。

「……目覚めた。」

そう呟いて手に持っていた木刀を地面に落とす。

「今さら命乞いをしても許しませんよ。」

神戸はジュエルを手に大上段に振りかぶりながら駆け寄った。

「死ねえ！」

振り下ろされた凶刃は

「そんな曇った刃で、私は殺せない。」

漆黒の背に鈍く輝く刃を持つ二振りの魔剣に切り裂かれた。

「がっ！」

神戸が白目を剥いて地面に倒れると

「きゃー！化け物お！」

ジュエルたちは悲鳴をあげながら逃げ出していった。

「。。。」

明夜は空を見上げたまま立ち尽くす。

その手にはソルシエル・オニクスがあり、陽光を浴びて輝いている。

「明夜ちゃん！」

「…叶、真奈美。」

駆け寄ってきた二人に手を上げると腕と連動する刃も上がる。

「それ!？」

「ソルシエル、戻ったんだ！」

「うん。これから二人を助けに行く。力を貸して。」

叶たちは駆け出した。

### 第53話 復活した力

八重花も由良もソルシエルが戻ってきたことを喜びながらも内心困惑していた。

（ソルシエルが戻ってきたのは何でかしら？それに、以前よりも力が落ちている。）

八重花は試しに右手にジオードを握ったまま左手に意識を集中させた。

以前なら簡単に青い炎のドルーズが出たはずだったが手のひらが熱くなった感覚があるだけで炎は出なかった。

（さしずめ続編になってレベル1に戻ったところかしら？）それでもジオードの炎は凄まじい威力を誇っている。

慣らしの意味も含めてちょうど良かった。

「ジュエル！攻撃開始！」

美保が苛立ちのままにジュエルに号令をかけたが”人”から”化物”へと変貌を遂げた敵を前に戦闘未経験のジュエルたちは完全にすくんでいた。

美保は不甲斐ない部下に舌打ちして自ら飛びかかる。

「ソルシエールのわけがない！きっとジュエルを奪ったに違いないわ。それならあたしが負けるわけがない！」

正面からの特攻と3つのレイズハートの超攻撃性の一撃を前にして八重花は逃げない。

右手に握ったジオードを後ろに引いて迎え撃つ構えを取る。

「ジュエルかどうか、その身で味わいなさい。ジオード、イグニッション！」

点火の掛け声と共にジオードから赤い炎が立ち上った。

炎を背に逆光となった八重花の顔で左目だけが朱色に光っている。

美保が一瞬、攻撃を躊躇いかけた。

（あたしが、ヴァルキリーの神峰美保が”Innocent Vision”を、恐れた。）

ギリツと奥歯を噛み締めてスマラグド・ベリロスを強く握る。

「ふざけんじやないわよお！」

八重花と、そして自分への怒りを糧に美保は八重花に襲いかかった。

ガキンツ

「きゃあ！」

また一本、ジュエルが弾き飛ばされた。

微細振動する玻璃と打ち合うことが出来ないのだ。

由良は無手になったジュエルを蹴り飛ばして次の相手を睨む。

「さあ、次はどいつだ！」

「ひい！」

剣士としての洗礼された立ち方ではなく手にある武器を相手を倒すために全力で振るう野蛮なスタンスと朱色に輝く瞳は、由良をよりいっそう”化け物”に

「や、山姥よ！」

そう、山姥のように見せていた。

「誰が山姥だあ!?!」

「きゃああ！」

玻璃を手に追い回す由良と逃げ惑うジュエルを悠莉はクスクスと笑いながら見ていた。

「ふふ、賑やかですね。」

「何また傍観者に戻ってやがる? 一度超音振とコランダムのどっちが上か確かめなかったんだ。勝負しろ。」

以前に一度、蘭が入る前の”Innocent Vision”と”RGB”が交戦した時に使ったが不意打ちだった。

玻璃の超音振という矛とサファイロスのコランダムという盾、その

どちらが強いのかは以前から興味があったのだ。

「あいにく今のジュエル、サフェイロス・アルミナでは境界は生み出せても境界世界は難しいんです。空間攻撃である超音振を防ぐことは今の私にはできませんよ。」

だが悠莉は慌てもせず現状での対決を拒否した。

悠莉の微笑みはその言動の真偽を掴ませない。

「ちっ、仕方ないか。」

本物との決着を望むからこそ由良が引き下がることを知ったの答え。心理戦を得意とする悠莉は力で劣ってもそれを補う技能があった。

そして由良があっさり引き下がったもう1つの理由。

（超音振は試してないが、どうも玻璃は本調子じゃないみたいだな。）

ソルシエールの不調に気付いていた。

由良は玻璃でポンポンと肩を叩いて息をつく。

「しょうがねえな。だったらその邪魔な壁をぶち抜いてここから出させてもらおうか。」

由良の闘志が玻璃を、大気を震わせる。

それはジュエルたちにまで伝播していった。

魔剣を構えてはいるものの先ほどまでのように率先して挑みかかるうとする者はいない。

悠莉はサフェイロス・アルミナを静かに構えてみせる。

「ヴァルキリーとして、はいどうぞ、とお通しするわけには行きません。復活したソルシエールの力、見せていただきますね。」

「ああ、とくと見て味わえ！」

由良の放った音震波がコランダムとぶつかって爆音を響かせた。

叶と真奈美は明夜に続く形で走っていた。

「明夜、どこに向かっているの？」

人目があるのでスピネルが使えない真奈美は場合によってはタクシ

「の利用も考慮に入れて尋ねた。」

明夜は走りながら振り返って答えた。

「八重花たちの所。」

真奈美と叶が啞然とした様子でゆっくりと速度を落とし、立ち止まった。

明夜も足を止めて首をかしげる。

「どうかした？」

「明夜ちゃん。八重花ちゃんたちは京都にいるんだよ？」

「…京都って遠いの？」

説明しても明夜の首が逆方向に傾けられるだけだった。

「少なくとも走っていける距離じゃないよ。」

「そう。」

ようやく納得したらしく明夜から急ぐ様子がなくなった。

真奈美はホッとしたあと真面目な顔になる。

「つまり八重花と由良先輩が大変だったことだね。」

「ソルシエールが目覚めた。多分ヴァルキリーに襲われてる。」

明夜は淡々と自分の感じたものと推測を語る。

それはまるで見てきたようだった。

「でも今から行っても間に合わないよ。」

八重花たちが襲われていると聞いて不安げな顔をした叶はどうしようもない状況に俯いた。

「それに向かったとしてもその頃には決着がついてるだろうしね。」

真奈美も同意し、携帯で八重花に電話をするが電波が届かない場所にいるとのアナウンスが流れるだけだった。

「…。うん、大丈夫だよ。八重花ちゃんと由良お姉ちゃんはちゃんと帰ってきてくれる。」

叶が自分に言い聞かせるように笑顔で告げると真奈美と明夜も頷いた。

「あたしたちにできるのはそれくらいだしね。」

叶と真奈美は京都の方角の空に目を向けた。



熱も振動も今は感じないが2人を信じて待とうと決めた。

「…叶、次のご飯は？」

「明夜ちゃん…」

「あはは…」

そしてすでに今の会話を忘れてしまったかのようにいつも通りの明夜に叶たちは苦笑するのだった。

「はああ！」

「せいっ！」

キン、ギン

魔女に与えられた美しき魔剣と人の手で生み出された武骨な魔剣がぶつかり合い、甲高い悲鳴をあげる。

炎と光の演舞はジユエルを完全に置き去りにして熾烈を極めていた。美保と3つの光刃の連携を八重花はジオードで捌いていく。

（やはりドルーズが無いと手数が足りない。）

八重花は足りない分を炎の噴射によってカバーしていた。

ゴウと吹き出した赤い炎が美保の頬にピリピリと痛みを与える。

「鬱陶しい炎ね！」

「それはお互い様よ。」

八重花もまた3つとはいえ太刀筋を無視した斬撃を繰り返せるレイズハートを前に攻めきれずにいた。

「いつまでもあなたの相手をしている暇はないのよ。班員を引率しないといけない立場だから。」

八重花はジオードを振り上げると炎を生み出し、それを地面に叩きつけた。

ドウツ、八重花を中心に爆発的に炎が飛び散る。

咄嗟に顔を腕で覆った美保がようやく熱さから逃れて見たときにはすでに八重花の姿はなかった。

「ジユエル！東條八重花を追いなさい！」

「は、はい！」  
ジュエルたちがゾロゾロと駆け出していくがその時にはすでに八重花の姿は見えなくなっていた。

ギヤギヤギヤギヤッ

高周波ブレードと化した玻璃と青き壁コランダムがぶつかり合って甲高い音を奏でる。

バキン

振動に耐えきれなかった壁がガラスのように砕け散る。

「コランダム。」

だが玻璃の振動する先端が悠莉の体に突き刺さるよりも先に再び障壁を展開、体から10センチ程度の位置で玻璃は再び壁に阻まれて悠莉には届かなかった。

さつきからこの繰り返しだった。

「守りに入られたら鉄壁だな。やっぱり超音振撃っていいか？」

「それで羽佐間さんが決着だと思われるのならご自由に。」

「ちっ。やりづらい奴だな。」

結局由良は舌打ちしただけで超音振は使わず玻璃を振るい続ける。

「悠莉様、頑張ってください！」

「Innocent Vision」を倒してヴァルキリーに勝利を！」

ジュエルは完全に観客に成り下がっていて歓声や悲鳴で忙しい。

「…なかなか無茶を言いますね。」

今勝負が拮抗しているのはあくまで悠莉が防戦に徹し、反撃する気がないからだ。

だが勝つためには攻撃しなければならぬ。

ソルシエール・サフェイロスのコランダムならば砕けた障壁によるコランダムの発動が使えたがジュエルではそもそも境界空間の作製さえ行えない。

盾を開けなければ攻撃できないがその隙間を高い戦闘センスを持つ由良が見逃してくれるとは思えない。結果として悠莉は防御に専念し、由良の疲れを待つという消極的な策を取らざるを得なかった。

「オーッ！」

異音が響く戦場に異形の声が響いた。

悠莉がそれを聞いて微笑む。

「どうやら私の今日の運勢は良いようですね。援軍とは言いづらいですがこれで私と羽佐間さんとオーの三つ巴、どうなるか分からなくなります。」

オーの攻撃でジュエルが負けないことは調査済み。

最初悠莉を狙ってきてても障壁を抜けないとなれば由良に標的を定めるのは道理。

後はオーと由良の戦いで障壁を使って由良の邪魔をすれば由良を倒せるかもしれないという魂胆だった。

オーが屋根伝いに跳びながら迫ってくる。

「そう思つか？」

「ッ！」

だが由良の力強い笑みを見たとき、そんな甘い考えは吹き飛んだ。

「皆さん、すぐにこの場から撤退してください！」

悠莉は自らもガラスにサファイアをぶつけながら距離を取り、そのまま由良に背を向けて駆け出した。

「は、はい!？」

ジュエルは戸惑いながらも悠莉に従って走り出す。

由良は逃げる悠莉たちを追わなかった。

右手に握るガラスの振動が大きくなっていく。

顔を上げた由良はまっすぐにオーを睨み付けた。

「お前なら遠慮はいらないな！全力、持っていけ！」

激震する玻璃がくい打ち機のように放たれて飛び掛かってきたオーの胸に深々と突き刺さる。

「オーッ!?!」

「これで終わりだと思っな!」

高々と突き上げた玻璃がさらに振動し周囲の空間までも揺らがせる。

由良は笑みを浮かべながらその名を叫んだ。

「喰らいやがれ、超音振ッ!」

「オオオオオ……」

断末魔の叫びすらも掻き消す音無き音が結界の中で爆発した。

「見つけたわ。」

八重花は闇雲に逃げ出したわけではなかった。

初めに聞こえた声の方向を目指し、この結界を形成させたと感じきオーを見つげ出した。

「オーッ!」

八重花の接近に気が付いたオーが吼えながら大地を蹴った。

少し前までなら反応できなかった速さが今は余裕を持って反応できる。

オーの爪を紙一重でかわし交差する際に背中に肘を叩き込んだ。

「オオオ!」

バランスを崩したオーが上体から突っ込んでガリガリと顔を削って停止した。

「あまりのんびりしてられないのよ。さっさと出口の鍵を開けてくれないかしら?」

口ではそう言いながらも八重花はすでにジオードを構えていた。

オーに交渉が出来るとは初めから思っていないし鍵がオーである以上排除するのが最も合理的だからだ。

「今すぐ私を解放するかその身を消滅させて結界を維持できなくなるか、好きな方を選ばせてあげる。」

「オオオーッ！」

挑発を正しく理解したのかは定かではないがオーが力強く咆哮した。  
「交渉、決裂ね。」

八重花はむしろ楽しそうに呟いた。

それと同時にジオードから溢れ出した赤い炎が蛇のように鎌首をもたげる。

「行きなさい、ジオード！」

八重花がソルシエールを振るうと炎の蛇が鞭のようにしなりながらオーに向かってアギトを開いた。

「オーッ！」

オーは咄嗟に左横へと跳んで炎の奔流を回避する。

そうなれば八重花は武器と一体となった炎を放った直後に隙が生まれる。

剣を振り抜いた八重花の反応しづらい右手側へと飛び込み

「オーッ！」

その左腕を砲身へと変化させて照準を合わせた。

弾丸は音速を超えるスピードで放たれる。

これほどの至近距離ならばそのエネルギーはすべて八重花に叩き込まれ、場合によっては一撃で肉塊に出来るかもしれない。

オーは目許に愉悦の笑みを浮かべて発射態勢に入った。

ダンッ

漆黒の弾丸が放たれた。

だが、その衝撃は何一つ現れない。

何故なら

「オオオオオオオ！?!?!」

オーが弾丸を放つ瞬間、背後から迫る炎の蛇がオーと弾丸をまるまる飲み込んだからだ。

弾丸は飛び出した瞬間に燃え尽きて消滅し、オーもまた灼熱の業火で崩れていく。

「ソルシエールの炎は私の手足と同じよ。後方不注意、減点ね。」

八重花がジオードを手にオーへと駆け、左下から右上に向けて一閃、軌跡を残した太刀筋が消え去った後、ズルリとオーの体がずれた。

「終わりよ。」

「オオオオオーツ！」

オーは灰になって消滅し、結界が消滅していった。

### 第53話 復活した力（後書き）

ようやくソルシエル復活です。

一区切りですのでしばらく休載させていただきます。

## 第54話 驚愕の進展

” Innocent Vision ” とヴァルキリーの面々はその後交戦を警戒していたがジュエルが動くこともなく…

修学旅行は表面上問題も無く無事に終わりを迎えた。

裏であった数々の戦いの痕跡などまるで残さずに。

修学旅行の翌日は振り替え休日になっており、” Innocent Vision ” は太宮神社に集合していた。

琴が全員にお茶を振る舞い、席についたところで八重花が口を開く。

「ここ数日間でいろいろとあったわ。今日はその報告と今後の活動についての話し合いよ。」

八重花や由良、明夜、そして琴は確かにいろいろがあったので黙ったままだったが叶は首をかしげた。

「いろいろって、裕子ちゃんが食べすぎて倒れて芳賀君にお姫さま抱っこされてたこととかかな？」

「…その話は後で詳しく聞くとして、今回は” Innocent Vision ” に関してのことよ。」

叶は明夜のソルシエールの事を思い出して得心しポンと手を打った。「わたくしもお話することはありますがどちらからにしましょうか？」

「私から話すわ。1つは私と由良、明夜のソルシエールが復活したことね。」

” Innocent Vision ” のメンバーは当事者だったり見ていたためもう驚かないが琴は目を丸くして驚いていた。

「ソルシエールの復活ですか。それはまた大事ですね。見せていただけますか？」



「そうね。百聞は一見にしかず、見てもらった方が早いわ。」  
八重花に合わせて由良と明夜も立ち上がった。

「起きなさい、ジオード。」

「来い、玻璃。」

「オニキス、起動。」

3人が左手を突き出して名を呼ぶと左目が朱色に輝いてソルシエールが顕現した。

刀にも似た赤と青の炎を押し込めて叩き上げたような紫の片刃の剣・ジオード。

槍とも杭とも剣とも言える穢れのない透明な剣・玻璃。

手の甲から指先の方へと向けて伸びる何処までも深い漆黒二対の刃・オニキス。

それは見迷う事なき美しき魔剣の姿だった。

久しぶりのソルシエールの威容に叶と真奈美は魅入られる。

ただ琴だけが表情を変えないままじっとソルシエールを見つめていた。

「以前に感じた力と比べ、随分と落ち着いた印象を受けます。」

琴は3人のソルシエールを見てそんな感想を漏らした。

「やっぱりそうか。」

叶には何を指しているのかよく分からなかったが八重花や由良はむしろ納得したように頷いていた。

「八重花ちゃん、どういうことなの？」

「明夜はわからないようなのだけれど私と由良のソルシエールは前よりも性能が悪くなっていたのよ。今のところドルーズが使えないわ。」

「俺の方は全体的に威力が落ちてる感じだったな。」

長きに渡り相棒として振るってきたソルシエールの調子なのだから2人が間違うはずもない。

叶たちは疑う様子もなく納得していた。

「いったい何が原因だろうね？」

「その代わりと言っちゃなんだが衝動の感覚自体はかなり薄まった感じだったな。」

ソルシエールの原動力は究極的には相手を殺したいという衝動に集約される。

魔女ファブレはそれを利用して八重花の精神を一時的に操作したり由良を暴走させたりした。

「つまり、衝動が弱まった分威力も落ちてしまったものの御しやすいくなったということですか？」

「今のところはそれが妥当な見解ね。ただ復活して間もないからもう少し様子を見ないと分からないわ。」

何はともあれソルシエールは復活し、”Innocent Vision”の戦力は大幅に増大した。

オーやヴァルキリーに数では劣るものの個々の戦闘力では上に当たり、勢力図が大きく揺らぐことが予想された。

八重花たちはソルシエールを消して席につく。

「とにかく今のが1つ目。それで2つ目なのだけど、オーを操っていると考えられる人物がほぼ特定できたわ。」

「……………」

ソルシエールの事以上に驚くことはないだろうと高をくくっていた琴及び”Innocent Vision”の面々はゆっくりとその言葉の意味を理解していき

「「ええっ!?!」」

盛大に驚いた。

八重花は慌てず注目を集めるように立てた人差し指を振る。

「今回私と由良は京都でオーとヴァルキリーの襲撃を同時に受けた

わ。」

「ああ。ジュエルが襲ってきたときに偶然オーが結界を張りやがったな。」

「そうね。でもあれが偶然じゃなかったらどうかしら？」

八重花の示す答えに一同息を飲む。

真奈美が恐る恐る尋ねた。

「それはつまり、八重花たちのクラスにオーを操る人物がいるってこと？」

「あるいは2組にね。私たちのクラスの行動を知っていてあの時京都にいたのは1組と2組だけ。さらにジュエルの行動に合わせて結界を張ったとなれば近くで見なければならぬはずよ。その点から1組、2組の生徒が怪しいわ。その中で真奈美が見た背格好の女子生徒は2人だけ。このどちらかがオーの主格よ。」

これまで正体不明だったオーの軍勢のボスの正体にいよいよ近づいてきた。

その人物を倒しさえすればオーを抑えられ、ヴァルキリーへの対応に専念できるようになるため俄然やる気が出るというものだ。

「少しずつだけど着実に進んでるね。」

「ああ、とりあえずオーのボス退治だ。」

すっかり盛り上がるメンバーの中からスツと手が上がる。

「琴お姉ちゃん？」

「そろそろわたくしの報告をさせてもらって構いませんか？」

八重花の衝撃の告白ですっかり琴の話忘れていた面々は恐縮した様子で座り直した。

琴が礼をして居住まいを正す。

「皆さんが修学旅行に行かれています間、わたくしの下にヴァルキリーが襲撃してきました。」

「…。」

「…。」

八重花がほら見なさいというようなちょっと冷たい視線を由良に向

け、由良はばつが悪そうに視線を外した。

「大丈夫でしたか、琴お姉ちゃん!?」

そんなやり取りが行われているとは知らず叶は琴を心配する。

「大丈夫ですよ、叶さん。擦り傷切り傷は多少受けましたが致命傷はありませんでした。」

「よかった。」

叶はほつと胸を撫で下ろすが他のメンバーは今の言動に眉を潜めた。「残っていたヴァルキリーは4人。社会人で動きが制限される花鳳を外せば3人か。そいつらに襲われて擦り傷切り傷つてのはおかしいな。太宮院、どんな手品を使ったんだ?」

この場合の手品は言葉通りではない。

事実、八重花や由良、真奈美の琴を見る目は若干険しく、不審の色が見えた。

それでも琴は怯えも戸惑いも見せはしない。

「わたくしはただの可憐な巫女ですよ。」

「少なくとも自分を可憐と言う人間は信用ならないわ。」

冗談を八重花が笑いもせずに一蹴するので琴は悲しげだった。

「…皆さんと肩を並べて戦えるような能力は無いことは誓います。」それは暗にそれ以外の能力があることを示しているがこれ以上は質問の意図から外れるし琴が答える気がなさそうだったので由良はそれ以上追求しなかった。

代わりに真奈美が手を挙げる。

「太宮院先輩が普通の人と同じだとしたらいつたいどうやってヴァルキリーを追い払ったんです?」

今度は叶の視線も含めて全員の真剣な目が琴に向いた。

脱線ばかりの会話に少しばかりの疲れを感じてため息をついた琴は背筋を伸ばして告げた。

「わたくしは窮地に追い込まれ、死を覚悟しました。それを、デーモンによって救われました。」

「……………」

ソルシエールの復活よりも、オーの主よりもすごい情報なんてあるわけないと考えていた一同は言葉の意味を理解できなかった。

「あ、あの、こ、琴お姉ちゃん？デーモンって悪魔のことですか？」

「神社の巫女が悪魔契約…世も末ね。」

「そういうことが、焦ったぜ。」

「…。」

「動揺されるのはわかりますが事実です。わたくしは陸さんが命名したデーモン、ジエムによって命を救われたのです。」

「……………」

再び沈黙、そして

「なんだってー！？」

本日2度目の絶叫が社務所を揺るがした。

同じ頃、ヴァルキリーもまたヴァルハラに集合してテーブルを囲んでいた。

だがどちらかと言えば和やかだった”Innocent Vision”とは違い、こちらはピリピリとはりつめた空気に満ちていた。

「それでは再確認させていただきます。大阪ジュエルによる”Innocent Vision”非武装員への襲撃は罫を張られ失敗。後日ジュエルインストラクター神戸の独断による再度の襲撃に美保様と悠莉様加わるも”Innocent Vision”がソルシエールを復活させたためまたも失敗したということですね？」

事情を聞き、それをまとめたただけのだが葵衣が責めているように聞こえて美保は目尻をピクリとひくつかせる。

バンとテーブルを叩いて立ち上がった。

「そうよ、何か悪いって言うんですか!？」

「美保さん、落ち着いてください。」

同じく失敗した側の悠莉に宥められて釈然としない美保はふんとそっぽを向いてしまった。

「責めているように聞こえたのでしたら申し訳ございません。今回の件は不確定要素が多いため確認させていただいただけです。」

「不確定要素？」

「確かにあたしの方でもデーモンが出てくるなんておかしいことになってるけどソルシエルが問題なんじゃないの？」

緑里と良子の疑問に答えたのは悠莉だった。

「なぜ”Innocent Vision”のソルシエルが復活したのかは問題ですが、それ以外にもおかしい点があります。さきほど葵衣様も言っておられましたけど2日目の襲撃は私たちではなく神戸さんの独断、言い換えれば命令違反です。それにそのジュエルの襲撃に合わせてオーが結界を張ったというのも不可解な点です。」  
美保が何か思い出したように頷く。

「そう言えば大阪のジュエルに神戸の事を聞いてみたら初めは敵討ちを止めようとしてたけど途中から人が変わったようにやる気になつたって言ってたわ。」

「それはまた、変な話だね。まるで江戸川蘭のゲシュタルトみたいだ。」

その名を聞いて葵衣と緑里が目を落とす。

戦闘の結果とはいえ蘭によって精神を犯され殺人を犯したことを忘れることなど出来はしない。

「神戸さんがオーに操られた可能性もある。オーがそのような知性を有する可能性があるということですか？」

”Innocent Vision”とは違う視点でヴァルキリーもまた今回の事件に疑問を抱き始めていた。

「インストラクター神戸は命令違反で現在勾留中です。」  
葵衣が穏やかでないことを淡々と語る。

巨大組織へと成長しつつあるジュエルを統括するためには不穏分子

は排除しなければならない。

だが神戸は捕縛後から一度も目を覚まさず現在は快復を待っている状況だった。

「私のソルシエールがあればコランダムでの尋問が出来たのですが、残念です。」

それは真相を聞き出せなくて残念なのか、尋問が出来なくて残念なのか微妙な言い回しだった。

悠莉が”Innocent Vision”のソルシエール復活を思い出させる言動をして美保の機嫌を悪くさせる。

「何にしても”Innocent Vision”がこれまでみたいにいつでも倒せるから放っておいていい相手じゃなくなつたね。」  
良子は話題を変えようとした訳ではないが結果的に美保の機嫌をわずかに和らげた。

「つまりヴァルキリーが攻撃を仕掛けていってことね。悠莉も今さら止めたりしないわよね？」

「仕方ないですね。」

口ほど抵抗が見られないのは由良との戦闘でソルシエールとジュエールの性能の違いを実感したからだ。

「オーもヴァルキリーにちよっかい出すようになってきたし、ボクたちも本気で動く時かな？」

緑里の言葉に少し前までのヴァルキリー優位の思いはない。

「オーと”Innocent Vision”、どちらも対等の敵として扱っていた。」

そこにヴァルハラ扉が開く音がした。

ヴァルハラは基本的にヴァルキリー以外不可侵の領域なため、自然と全員の目がそちらに向く。

そこにはスーツ姿に身を包んだ花鳳撫子が微笑みを浮かべて立っていた。

「撫子様！」

「お嬢様、業務はどうされたのですか？」

「休憩よ。それよりも話は聞かせていただきました。」

撫子はテーブルの前に歩み出ると全員を見回した。

それだけで言葉は消え、耳を傾ける姿勢に変わる。

やはり誰とは言わないが仮初めの会長とは違うカリスマ、威厳に満ちていた。

「オー、そして”Innocent Vision”はヴァルキリーの恒久平和に対する最大の障害です。私たちは一致団結して事に当たらなければなりません。どんなに強大な敵であろうとわたくしたち6人と数多のジユエルの力を集結させて成し得ない事はありません。」

ヴァルキリーの戦乙女たちは示し合わせたわけでもなくスツと立ち上がった。

「”Innocent Vision”のソルシエールの復活、いまだに正体や目的が掴めない異形の闇オー、そして魔女ファブレの撃退により消滅したと思われるいたデーモンの出現と情勢が入り乱れて予断を許さない状況にあります。ですが彼らの暴挙を止め、人々を導くのはわたくしたちヴァルキリーです。」

ラトナラジュ・アルミナ。

スマラグド・ベリロス。

サフエイロス・アルミナ。

ベリル・ベリロス。

エルバイト・エア。

アヴェンチュリン・クオーザイト。

人の造りし魔剣を天へと掲げ、かち合わせる。

「”Innocent Vision”、オー。殺し甲斐があるわ。」

美保が嗤い、



「いいね、この高揚感。試合の前みたいだ。」  
良子が燃え、

「ふふ、楽しみですね。」  
悠里が微笑み、

「ソルシエールよりジュエルの方が優れてるって証明してあげるよ。」  
緑里が意気込み、

「お嬢様、お願いいたします。」  
葵衣が促し、

「それではこれより、サマーパーティの準備を始めましょう。」  
撫子が新たなる戦いを宣言した。

## 第55話 時坂飛鳥

1人の女子生徒が廊下を歩いている。

背は高くもなく低くもなく平均的でスタイルも普通、今時三つ編みに丸眼鏡という格好が逆に珍しく映ることもあるが基本的に地味な少女だった。

その女子生徒が急ぐでもゆっくりでもない歩調で歩く。

そこに不思議はない。

学校の廊下を歩く学生に不自然さがあるはずもない。

その足が止まりかけ、早足になり、直線的だった歩みが変わずかに遠回りするように弧を描いた。

「…。」

それも別段特殊な行動ではない。

何故なら彼女に続く別の女子も、また男子でさえも同様の行動を取っていたから。

「…ちつ。」

そこには誰かを待つように壁に背を預けて腕組みをした羽佐間由良が立っていたのだから。

女子生徒をはじめ他の生徒が通りすぎていなくなった後、由良はポケットから携帯を取り出して短くメールを打つとその場を後にした。

女子生徒は屋上にいた。

別に男子に呼び出されて告白されるときか、逆に男子を呼び出して告白するとかではなく、また女子のグループにいじめられて追い詰められて逃げてきたわけでも、女子グループを苛めすぎて大事になりそうだから逃げ出したわけでもない。

そんなしち面倒くさい理由ではなく単純にこの女子生徒が人混みを好まないだけだ。

屋上は羽佐間由良の領土だと言われ、実際何度も見掛けていたが最近はその頻度も減っている。だが今日は別の先客がいた。

「……」

柚木明夜は何をするでもなく屋上から空をじっと見つめていた。

女子生徒は邪魔にならないよう反対側を向いて同じように遠くを見つめる。

「……」

「……」

互いに不干涉でしばらく時間を過ごした後女子生徒は屋上を去っていった。

明夜は最後まで視線を動かすことなくポツリと呟いた。

「目標、確認。」

女子生徒は昼休みに弁当を手に中庭へと向かった。

昼時は時期にもよるが屋上には人がいることが多いため日当たりが悪くあまり人が寄り付かない中庭へと足を運ぶ事が多かった。

そこにも先客がいた。

義足眼帯少女である芦屋真奈美は大抵初対面では脅えられるか同情される。

女子生徒もまた中庭のベンチに1人で座る真奈美を見て驚き、同情の念を抱きながらも距離のおかれた置かれた位置にあるベンチに腰掛けた。

男子ならばボンで義足を隠すこともできるのだがスカートでは難しく、真奈美はスパッツで固定部分を隠していた。

義足の調子を確認するように弄っているが食べているのは購買で数量限定販売しているメンチカツサンドだ。

購買を利用する男子が血眼になって買い求める品を真奈美が手にしている事実は見る人が見れば驚くべきことだが女子生徒は入学して

この方購買とは無縁の生活をしてきたのでそんなことは知らない。余り物を詰めただけのお弁当をモクモクと口に運んでいく。小さめの弁当箱に入っていた中身は昼休みの半分を使った辺りで空になった。

普段なら昼休みいっぱいここで時間を潰すのだが今日は真奈美の存在が妙に気になって落ち着かないようだった。

真奈美と女子生徒の目がたまたま合う。

真奈美は微笑んで軽く会釈をしたが女子生徒は余計に真奈美を意識してしまい深くお辞儀をするとそのまま立ち上がって中庭を出ていった。

モグともう一つ買っておいたコロッケサンドをかじりながら真奈美は出ていった背中を見送る。

「あの子が、ね。」

女子生徒が仕方なく教室に向かって階段を登っていると

「そこの方、少しお時間よろしいですか？」

2年生の教室が並ぶ3階の踊り場で声をかけられた。

振り返ると3年の太宮院琴が手招きをしていた。

由良と並んで悪い意味で有名なため女子生徒も琴の事は知っていた。

戸惑いつつも一応近づいていくと琴は微笑みを浮かべ

「素直なあなたに1つ占いの結果を教えて差し上げましょう。」

と言った。

太宮院琴の占いと言えば他人の不幸を言い当てるといふ嫌な噂が流れている。

女子生徒は断ろうとしたがそれよりも先に琴がそれを告げる。

「変革の時です。あなたは生まれ変わるのでしょ。」

聞いていたものよりもずっと普通の占いだの意味が分からず聞き返そうとしたがすでに琴の姿はなかった。

女子生徒はしきりに首を捻りながら教室に戻っていった。

放課後、保険委員の委員会があったため女子生徒は参加した。

委員会には入りたくなかったが立候補者がなく、担任の独断により出席番号で適当に決められたことを断れなかったのだから仕方がないと諦めていた。

何となく女子生徒が視線を向けた先に4組の保険委員である作倉叶が座っていた。

真面目な叶らしくもうすぐ始まる委員会の内容を取るためにノートや筆記用具を準備している。

女子生徒は叶もまた本質的には自分と同じ地味で目立たない子だと思っていた。

1年の時に何度か見掛けたことがあったが友人たちの陰に隠れているだけの印象しかなかった。

だが1年の2学期以降、特に3学期からその存在感は格段に増したように思えた。

怯えた様子は鳴りを潜め、人前でも堂々としている。

男が出来て変わったとちよつとした噂を聞いた。

そこに嫉妬の感情はなく、恋をすると本当に女の子は変わるんだと思つた程度だ。

ジツと見ていたためか視線に気付いたららしく振り返つた叶と目があつた。

叶に会釈されて女子生徒はばつが悪くて目をそらした。

その後すぐに委員会が始まり叶は前を向いてしまったが、女子生徒は結局気になつてしまい叶の後ろ姿を見ていた。

委員会も終わり、帰ろうとして昇降口を出た女子生徒は

「ちよつといいかしら？」

校門に向かう途中で声をかけられた。

見れば東條八重花が明らかに女子生徒を呼んでいた。

女子生徒は怯える。

東條八重花といえは羽佐間由良、太宮院琴と並ぶ新たな噂として上つてきた名前だ。

参謀や軍師など体育祭の手腕による通り名と何故か雌豹という名前も与えられた存在で頭の回転が早くどんな些細な秘密でさえも知っていて精神的に相手を追い詰めていくという。

そんな八重花に声をかけられればどんな脅しをされるのか分かったものではなく、女子生徒が怯えるのも当然だった。

「そこまで怖がらなくてもいいわよ。悪いようにはしないわ。」  
八重花は苦笑を浮かべて近づいていく。

蛇に睨まれた蛙の如く、女子生徒に逃げ出す術は無かった。

” Innocent Vision ” は「時坂飛鳥<sup>ときさかあすか</sup>」という人物がオーを操っている犯人だと睨んでいた。

八重花が絞り込んだという生徒の顔を見た叶が

「保険委員で見たことがある。」

そう声を上げた。

そして

「一番初めに保険委員に出たときにオーの気配を感じたことがあった。」

と再確認した。

そうなればもはや犯人像は見えたようなものだった。

保険委員に入っており、姿形が真奈美の見たものと同程度であり、そして修学旅行で八重花たちの合同クラスにいた生徒。

それは時坂飛鳥しかない。

” Innocent Vision ” は時坂飛鳥を捕縛するために活動を開始した。

八重花と女子生徒が昇降口を出た辺りで何かを話している。

そんな光景を屋上から見ている生徒の姿があった。

長い髪を二つに分けて頭の後ろで結わえたツインテールで目にかかる前髪をピンで止めている。

その下にある目はいつも何かに不満を抱いているようにきつくつり上がっている。

背も由良くらいで女子の中では比較的大きい方に入るため目付きも相まってなかなか威圧感があった。

屋上からでは2人がどんな会話をしているのかはわからない。

だが

「。。。」

「ッ！」

下で話していた八重花が視線を女子生徒から外し、屋上にいる女子生徒と目が合い、そしてフツと口の端をつり上げた。

間違いなくここから見ていることに気付いている仕草だった。

慌てて振り返った女子生徒の視線の先にはいつからいたのか八重花を除く”Innocent Vision”のメンバーが立っていた。

先頭に立つ由良がボキリと指を鳴らした。

「さあ、話を聞かせてもらおうか、時坂飛鳥？」

つまりは意図的なミスリードだった。

八重花が声をかけていたのは候補には上がっていたものの5組の生徒だった。

だが相手は”Innocent Vision”がどこまで情報を絞り込んでいるか知らない。

だからわざと違う生徒を目立つ形でマークし、時坂飛鳥に自分に対象外であると認識させた。

そしてあからさまに目立つ場所で接触することで注意を向けさせ、他のメンバーで取り押さえるという計画だった。

「……。」

飛鳥はギリと歯を噛み締めて由良を睨んでいる。  
その姿は神峰美保に被るものがある。

「待たせたわね。」

無言での睨み合いの場に八重花が入ってきた。

飛鳥の目がさらにきつくなって八重花に注がれる。

だが八重花は涼しげな表情でそれを受けると由良と並び立った。

「初めましてでいいかしら？東條八重花よ。」

「……。」

「人が名乗ったら自分も名乗るものよ？」

余裕の笑みを崩さない八重花に飛鳥はチツと舌打ちをする。

憎悪が形を成しそうなほどに分かりやすい。

「時坂飛鳥。」

「知っているわ。」

小馬鹿にした発言に飛鳥の目尻がつり上がった。

左手の指が不自然な動きを見せる。

「でも知らないこともあるわ。それを話してもらっわよ。例えばオ

ーの事とかね。」

「……。」

飛鳥はほとんど目線を動かさず周囲を確認するがここは屋上で逃げ場は少ないし明夜がじつと飛鳥の動きを見ているため逃げ出すのは不可能だった。

「逃げられないように追い詰めたのだから無駄よ。」

その視線の動きさえも八重花に見抜かれていた。

もはや退路はない。

「……クッ。」

飛鳥が俯いて肩を震わせる。

それを見ていた葉が身震いした。



「叶、どうしたの？」

「…怖い。」

真奈美に支えられるようにして立つ叶には飛鳥の周りに黒くねばつくオーラのようなものが意思を持って蠢いているように見えた。

「ククク、ハツハツハ！」

呻き声は次第に狂笑へと変じる。

「ようやくたどり着いた？初めて接触してから3ヶ月、飛鳥が直接顔見せしてから一月、ずいぶんと時間がかかったね。」

飛鳥は髪をかきあげて嘲笑を浮かべる。

明らかに見下している様子だった。

その目が叶へと向けられ、吹き出して笑った。

「まあ、リーダーがそれじゃあ仕方がないね。」

「うっ。」

叶が真奈美の胸にすがり付く。

叶には飛鳥の周りを取り巻く闇がその手を伸ばしているように見えた。

「俺たちのリーダーをあんま馬鹿にするなよ？怪我するぜ？」

由良が口調よりもずっと険悪な視線を叩きつけるが飛鳥はどこ吹く風と受け流す。

八重花は由良を押し留めて前に出た。

「叶を侮辱した報いはいずれ受けてもらうとして、あなたがオーを動かしている犯人で間違いないようね。」

八重花は平静な外見の中に燃える感情を宿して飛鳥と対する。それでも飛鳥の余裕の態度は揺らがない。

「黒い兵があなたたちのいうオーならそうね。だったらどうする？」

「こうするんだよ！」

再び割り込んできた由良が一瞬のうちに玻璃を抜刀し音震波を撃つ体勢に入り、そして

「ガッ！？」

反対側のフェンスに叩きつけられた。

闇の手が伸びて由良を突き飛ばしたのだ。

「由良先輩!？」

「いったい何が起こったの!？」

(みんな、気付いて、ない?)

「あうっ!」

今度は明夜が横薙ぎの腕に弾き飛ばされた。

叶はそこでようやく自分が感じていた恐怖に気付いた。

実際に見えているのにまるで現実感がないのだ。

「クスクス。ねえ、何をやってるの?」

「...」

八重花が冷や汗を流す。

さすがに何の予兆も見せない攻撃に対応できるわけがなかった。

飛鳥が動かないまま大きく伸びた腕の鞭が八重花に向かって振るわれる。

「真奈美ちゃん、八重花ちゃんの右側に向かってスピネルで斬って

!

「っ!」

叶は体温を奪われるような震えを押し込めて真奈美に願った。

切迫した声に真奈美は返事よりも先にスピネルを装着し

「アルファスピナ!」

真下からの斬撃を打ち放った。

見えないながらも何かを切り裂いた感触を覚えつつ真奈美は八重花を守るように立つ。

飛鳥の顔から笑みが消えて冷たい視線は叶に向けられていた。

「ふうん、さすがはセイントってところね。うざりたい。」

飛鳥が隠そうともしない嫌悪感に叶がまた身を震わせる。

「何はともあれ叶が見えるのなら戦い様はあるわ。いろいろと聞かせてもらうためにもここで倒させてもらうわよ。」

八重花のジオード、そして戻った明夜のオニキスも向けられ形勢は逆転した。

「こつちにも準備があるの。また会いましょう?」

言うが早いか飛鳥は跳躍して軽くフェンスを飛び越えるとそのまま落ちていった。

「しまった!」

八重花が慌ててフェンスに駆け寄って下を見るが覗いてももう飛鳥の姿はなかった。

「あれが時坂飛鳥。あれが、オーを操っていた存在ね。」

## 第56話 じゃんけんの1つぐ

サマーパーティー。

かつて”Innocent Vision”とヴァルキリーが正面からぶつかり合ったクリスマスパーティーから半年、再びヴァルキリーが大規模な戦闘を計画していた。

葵衣はヴァルキリーとオー、”Innocent Vision”の戦力図の修正作業を行っていた。

（ジュエルは順調に成長を続けており構成人員も着実に増加中。しかし同時にオーもまたここに来て出現頻度を増してきていることからジュエルと同程度存在していると仮定する。）

以前のジエムとは違いオーの出現方法が不明なため確認できているのが氷山の一角である可能性は否めないが今は同じだと考えておく。円グラフ化するとヴァルキリーとオーに当たる赤と黄色がほとんどを二分して埋め尽くしてしまった。

どちらも1000だと仮定しても”Innocent Vision”は5人、0.25%では1ドット分の線にしかないから宛がわれた青色なのかも判別できない。

（これだけならば”Innocent Vision”など恐れる必要はないのですが…。）

葵衣は構成員のタブから戦力へと切り替える。するとそこには同じような円グラフが現れた。

グラフでは構成員数のものと比較して青色の領域が大幅に増加して3割程度を占めていた。

1000対1000対5の戦力差で3割は驚異的と言える。

それに実際オー1体に対してジュエルは数人係りでようやく倒せる状況、2人で1体だとしてもジュエルの相対戦力はオーの半分とな

る。

それをヴァルキリーの存在が補う形で拮抗を表していた。

” Innocent Vision ” やヴァルキリーの存在が戦力差を大きく変動させる要因、それはグラマリーだ。

ソルシエールの特色に基づいて様々な能力があり、1人で複数人を同時に倒すだけの威力を持つ。

由良の超音振がその例でジュエルの集団のど真ん中で放たれた場合、軍が一気に壊滅するほどの打撃を受けることになる。

（そしてジュエルのグラマリーに比べ、ソルシエールのグラマリーは強力です。）

ヴァルキリーとして、何より撫子の理想を実現するための手段であるジュエルの力を葵衣が否定するわけにはいかない。

だがジュエルが人の身には成し得ない特殊能力の付与、一種の超能力的な位置付けであるのに対して、ソルシエールは超常の力を行使する戦略兵器とすら言えた。

（厳しい戦いになりそうですね。）

葵衣はデータの処理を終え、少しでもヴァルキリーの勝率を上げるためにジュエル訓練所のあるWVeへと向かうのであった。

ジュエル訓練所は閑散としていた。

放課後を迎えてまだ早い時間であることに加えて学生ではそろそろ期末テストが近づいてきている。

ジュエルとしての名声も大切だが、それで成績を落としては元も子もない。

ヴァルキリーに入れるという条件呈示がなくなった今でもヴァルキリーのメンバーはジュエルたちにとって目指すべき目標だった。

そういう理由から召集がからなければ参加は自由となっている。

その人気のない訓練所に現れた3人の影。

「何よ、誰もいないじゃない？弛んでるわね。」

「夕方になればまた増えるんじゃないかな？」

「ボクたちが使うにはちょうどいいよ。」

神峰美保、等々力良子、海原緑里。

ヴァルキリーのメンバーたちだった。

美保たちは授業が終わるとすぐにこの壱葉ジュエル訓練所にやって来た。

「良子先輩が予約しておいてくれるって言ってたじゃないですか。」

「悪かったって。部活の方と勘違いしてた。」

本来は花鳳所有の強化体育館で実戦訓練を行う予定でいたのだが、良子が日程を間違えて予約してしまったため仕方なく訓練所を間借りしに来たというわけだった。

「インストラクターの村山さん、物凄く不審な目でボクたちを見てたよね。」

「真面目そうだからね。急に来たから予定にないって思ったんじゃない？」

「心が狭いわね。」

「……」

お前が言うつなと言いたげな目を良子と緑里がしていたが美保は気付いていなかった。

そもそもそれに気付けるようなら美保はこんな娘に育ってはいない。よく言えば豪胆、悪く言えば自分本意なところが美保らしいとも言えた。

美保は鞆を角に置くと

「それじゃあ、始めますか…ね！」

振り向きざまにスマラグド・ベリロスを抜いて2人まとめて切り払おうとした。

「うわっとー！」

良子は咄嗟に一步引いて回避

「べ、ベリル！」

緑里は良子の反応の分認識が早くベリル・ベリロスを取り出して斬撃を受け流した。

ギャリツと刃が擦れ合う音が静かな訓練所に響く。

美保は楽しげに舌なめずりしてジュエルを構え直す。

「さすがにやりますね。」

「美保！何するのさ!？」

緑里も武器を構えたまま怒りの声を張り上げる。

それでも美保は動じない。

「あれくらいでやられるようなら殺戮パーティーに出ない方が幸せじゃないですか？だからその間引きですよ。」

悪びれた様子もなく美保は笑う。

そこには恐ろしいほどに不意打ちや殺すことへの罪悪感が含まれていない。

「何を勝手なことを！」

撫子に忠実であり本質的に真面目な緑里は納得できず吠える。

緑里の回りには人型の式符が3枚浮遊し始める。

「やる気ですね？それならこっちも…レイズハート！」

美保が戦うことへの、殺すことへの笑みを強めて叫ぶと翠の光の刃が3つ宙に浮かび上がった。

「その紙切れでいつまで持ちこたえられますかね？」

「くっ。」

緑里の式は攻撃にも防御にも攪乱にも使える非常に汎用性の高いグラマリーだが数が有限であるため無限に光刃を生み出すことのできるレイズハートを扱う美保が相手では不利だった。

以前ファブレとの最終決戦の時は満身創痍だったためあっさりと負けてしまったが万全でも勝てるかどうか、緑里は自信がなかった。対して美保は自分の勝利を疑っていない。

「とりあえずその紙切れ、切り裂いてあげますよ！」

スマラグド・ベリロスの指揮に同調したレイズハートがうねりながら緑里に襲いかかる。

ここで貴重な式を失うわけにはいかないが避けきれない。戦場での一瞬の硬直は死に直結する。

不可避の攻撃に緑里は式を犠牲にする覚悟で防御の陣を取らせた。だが、

ブウン！

翠の光刃は真紅の軌跡を残す斬撃で纏めて打ち落とされた。

美保の顔から笑みが消え、緑里は呆然と散っていく光を見つめる。

重厚な雰囲気宿す鉾槍の穂先が持ち上がり持ち主の肩に添えられた。

美保以上の超攻撃性のグラマリーを持つ良子が美保を見て口の端をつり上げる。

「間引き、ね。でもそれって、こつちにも権利があるわけだよね？」

美保がヴァルキリーのジュエルを見定めるのなら、同時に美保を見定める者も容認されるという理屈。

美保は不機嫌を露にしながらも否定はしない。

それを見て良子はラトナラジュ・アルミナをぐるりと回して右腕で後ろに引き、切っ先を美保へと向けて睨み付けた。

「その仕事、面白そうだからあたしが引き受けた。」

「…いいですよ。やれるもんならやってみてくださいよ！」

敵意を向けられただけで美保の闘争本能が猛り上がった。

指示を出すまでもなくレイズハートが良子に向かって飛来する。

良子はグッと前傾姿勢になり

「ルビヌス！」

グラマリーの名を口にした瞬間、美保の視界から消えた。

レイズハートは良子のいた場所を突き抜ける。

良子はレイズハートの反応速度よりも速くその下を滑るように駆け抜けて美保に接近していたのだ。

その初速があまりにも速かったため美保には消えたように見えた。



「っ！戻れ！」

「おっそい！」

美保が挟撃に持ち込むべくレイズハートを呼び戻すがすでに良子は足の裏を滑らせながらラトナラジュ・アルミナを振り被っていた。全身のバネを利用した速く鋭い斬撃が真紅の光の尾を引いて放たれる。

「っぐう！」

美保がスマラグド・ベリロスで受けるがあまりの衝撃に秒と耐えられず足が滑った。

魔剣は折れない故に衝撃を殺すこともできず美保の体が浮き上がり

「ハアッ！」

「うわぁ！」

足を楔のように踏み込んだ良子の全力の一撃で投げ飛ばされたように壁まで弾き飛ばされた。

「がっ！？」

背中を強打して意識が飛びかけた美保が辛うじて確認したのは背後から襲わせていたレイズハートだが、それも今の一撃の振り抜いたラトナラジュ・アルミナに打ち落とされていた。

計算し尽くされた訳じゃない。

ただ全力を出した結果として美保の戦術を力によってねじ伏せただけだった。

「これだから…良子先輩は…」

息を乱しながらよろよろと立ち上がる美保だがさっきまでの威勢はどこにもない。

良子は弱った美保をさらに追い詰めるべく足を踏み出して

ツルツ、ゴン

「あだぁ！」

突然滑って転んだ。

反転した世界で良子は不敵に笑う緑里を見た。

緑里が良子の足の下に式を滑り込ませて転ばせたのだ。

「それならボクが良子の相手だよ。美保には後れを取ったけど良子にボクを止められるかな？」

「…。よっ！」

良子は足を一度高々と上げ、その足を振り下ろす反動で飛び起きてラトナラジュ・アルミナを構えた。

「そんな小細工、叩き潰してあげよう。」

「良子に出来るかな？式！」

緑里が空いた左手を振るうと3枚の人型の式符が変則的な軌道で良子へと飛ぶ。

「このっ！このっ！」

良子はラトナラジュ・アルミナを短めに持って振り回すがちょこまかと飛び回る式には当たらない。

「そつちにばっかり気を取られてると危ないよ！」

「ッ！？」

背後からの声に良子が振り返った時にはすでに緑里がすぐ近くまで接近してきていた。

良子が式を相手にしている間に素早く後ろに回り込んだのだ。

「っ、この！」

良子は防御ではなく攻撃のために体を大きく回転させて後方へと斬撃を放とうとする。

「バレバレだよ。式！」

緑里は周囲を舞う式を良子の足と肩に向かわせた。

右足の軸をずらされ、左肩を押し出された良子は

「うわわっ！」

自分の回転を加速されてコマのごとく面白いように回りながら地面に倒れた。

チャキ

良子の首筋にベリル・ベリロスが突き付けられる。

「王手。」

良子は苦笑いを浮かべるしかなかった。

一戦闘終えた面々は絶妙のタイミングで現れた葵衣の用意したスポーツドリンクを飲んで一息ついていた。

葵衣の後から続々と入ってきたジュエルは村山の指揮の下で訓練を始めている。

「お疲れさまでした。」

葵衣の労いの言葉を良子たちは素直に受け取れない。

何せ最悪この中の誰かが倒されて間引かれていた可能性もあったのだから。

訓練だと思われているのは好都合ではあるが心苦しくもあった。

「今回の戦闘訓練は観戦していたジュエルにとっても我々ヴァルキリーにとっても非常に重要な意味がありました。」

「重要な意味って？」

緑里の疑問の声に頷いて葵衣はジュエルに目を向ける。

「ジュエルの多くは訓練でヴァルキリーの皆様と戦われたこともあります。が本当の意味での強さを知りませんでした。ですがグラマリーを駆使した限り無く実戦に近い戦いを目の当たりにしたこと。自分達との違いを強く認識できたと思われ。本日のジュエルの方々は気迫が違います。」

「それでヴァルキリーの方の重要な意味は何か？」

むしる良子たちにとってはそちらの方が重要だった。

葵衣は向き直り、3人を順に見た。

「美保様は姉さん、姉さんは良子様、そして良子様は美保様に対して優位に立って追い詰めていました。これはそれぞれの得意分野と苦手分野が存在することに他なりません。」

「それは確かにそうですね。良子先輩みたいな馬鹿正直に力で押してくる相手はレイズハートを操ってる暇が無いですから苦手です。」  
良子は搦め手、緑里は物量が苦手だと告げる。

「得手不得手がはつきりしていれば戦術で得意な状況を作り出したり苦手な相手を避けることができます。ヴァルキリーという組織運用の上でそれらが明確になることは非常に重要です。」

ヴァルキリーの戦術担当の葵衣らしい考え方だった。

ヴァルキリーやジュエルを個ではなく組織として考え、足りないものを他で補うという発想は強力な独り善がりな力を持ったためなかなか生まれない。

「ヴァルキリーが勝つために必要です。」

勝つために、その言葉の効力は大きい。

ヴァルキリーはまだ勝っていないから。

良子たちの意思が固まり団結が増す。

「それはそれとしてですね。」

意気込む3人の前で葵衣は背を向けながら

「ヴァルキリー内での間引きは許可されておりません。」

あくまで事務的に、しっかり釘を刺していた。

葵衣にはすべてお見通しだった。

「……ごめんなさい。」

3人は訓練の指示に向かう葵衣の背中に向かって頭を下げるのだった。

## 第57話 親身になる者たち

翌日、八重花は学校で時坂飛鳥を探したが当然のように姿はなかった。

（叶にしか見えない力。恐らくグラマリーで間違いないわね。そうなるの時坂飛鳥はフアブレが残したソーサリスか、あるいはフアブレと同じ魔女と呼ばれる存在か。）

正体を知られたから姿を眩ました。

だけどそれで終わったとは思っていない。

また会いましょうという言葉。

そして、かつて”Innocent Vision”が堂々と登校してきた前例があったから。

（力に自信がある者が隠れる必要はない。今は何か準備をしているだけと考えるべきね。）

八重花は結論付けると2組から離れた。

悠莉はともかく美保に見つかると絡まれて厄介だからだ。

それでなくても最近ヴァルキリーやジュエルから感じる視線が険しくなったように思っている。

（ソルシエールが復活した”Innocent Vision”を叩く作戦の準備でもしているのかしら？）

高速かつ柔軟な思考が生み出す洞察眼という名の未来視は相変わらず健在で、八重花はそれについても念頭に置きながら教室へと戻っていった。

（八重花さん？）

その去り行く姿を悠莉は見ていた。

修学旅行が終わった上にその道中でヴァルキリーが襲撃したのだから

ら旅の計画を立てていた時のようにはいかないとは理解しつつ、少し寂しさを感じていた。

だが敵対云々以前に八重花が見ていたのは悠莉たちではなかった。(このクラスに私たち以外のお知り合いがいるのでしょうか?)

八重花の交遊関係を詳しく知っているわけではないが、基本的にはあの仲良し5人組と”Innocent Vision”のメンバー程度だと認識していた。

少なくともこれまで2組を訪ねてきたことは無かったのだから。それは正しく、悪名だけなら校内全域に広まっていくのだが他に友達らしい友達は皆無である。

「ん?悠莉、どうかした?」

考え事をしてぼんやりとドアを見ていた悠莉に気付いて美保が声をかけた。

「…いえ、何でもありませんよ。」

悠莉は首を横に振って否定した。

美保に話したところどころでどうにかなる話ではないし、何より悠莉自身がどう伝えたらいいのか、何を疑問に思っているのかを整理できていなかった。

(”Innocent Vision”は、何をしようとしているのでしょうか?)

敵対者としてではなく純粹な興味として悠莉は疑問を抱くが今はそれを聞ける相手はいなかった。

そしてその”Innocent Vision”の面々は

「明夜!それは俺の唐揚げだ!」

「もぐもぐ。」

「由良お姉ちゃん、落ち着いて。明夜ちゃんも取ったりしたら駄目だよ。」

「戦場ではいつ食事が出来るか分からないから食べられるときに食

べないと。」

「真奈美、良いこと言う。」

「まだたくさんありますので慌てないで下さいな。」

「静かに食べなさい。」

昼休みに琴を交えた全員で重箱の弁当をつついていた。

元々琴が叶と昼食に食べようと持ってきたものだったが、誘いに行つた先で”Innocent Vision”のメンバーがちょうど食事に向かおうとしていたため、なし崩し的に全員で弁当を囲むことになった。

「うまい弁当だな。これがあるって知ってればパン買わなかったんだが。」

由良は胡座をかいた膝の上に乗ったパンを恨めしげに見る。

由良のイメージに反してチョココロネだ。

実は明夜がそれを食後のデザートに狙って目を光らせていたりする。「それはそれとして皆さんと一緒に御食事とは珍しいですね。学内で集まっていればヴァルキリーが良い顔をされませんよ?」

「私たちがいる限り良い顔をさせるわけにはいかないわ。」

琴の注意を八重花が拾ってクスリと笑う。

「なるほど。それなら確かに良い顔はしませんね。」

生憎高度な言葉遊びについできたのは琴だけで他は分からなかったり食事に夢中で聞いていなかった。

「ふう、たまに乙女会の作法が必要だと思ふ時があるわ。」

「乙女会の存在自体は淑女としてのたしなみを知る良い場なのですが、それが戦闘集団の隠れ蓑となっているのは嘆かわしいですね。」  
八重花と琴が真面目な話をしていても明夜と由良は弁当争奪戦を繰り広げていて、叶はその仲裁に忙しく、真奈美もそちらに目が行っていて2人の会話を聞いていない。

仕方がないので八重花はそのまま琴と話をすることにした。

「それで、なんだったかしら? ああ、私たちが一緒にご飯を食べようとしていた理由ね。」

「はい。普段はそういつた姿をあまり見ないものですから。」  
そうだったかなと首を傾げる八重花だが思い返してみると確かにそれほど多くない。

普段は叶たちは同じクラスの裕子たちと一緒にいるし、八重花たちも3人で一緒だったり各々で食べたりしていた。

「そうね。だいたい集まるときは何か話があるときだもの。…今日みたいに。」

八重花がさつきとは違い小さく呟いただけだというのに由良も明夜も、叶も真奈美も騒ぐのを止めていた。

（これが”Innocent Vision”の結束ですか。）

普段は喧嘩をしていたとしてもいざ大事なときには一致団結する心に絆を持っている。

（少し、羨ましいですね。）

最近では”Innocent Vision”と一緒にいる機会が多いものの琴の中では友人は叶と陸だけ、他は知り合いという位置付けでしかない。

そして陸が眠っている今、叶だけが琴の友となるが叶にとって琴は唯一の友ではない。

それを少しばかり寂しく思いながらも琴はそれを表には出さない。

「作戦会議というわけですか。それならばわたくしは席を外しましょうか？」

琴としては部外者であると自覚しているので提案としては妥当だと思っただが揃ってキョトンとされた。

「別に構わないだろ？今さら太宮院に聞かれて困る話でもない。」  
由良の意見に皆が賛同することにも琴は驚く。

「何故ですか？」

思わずそんな疑問が口をついて出た。

”Innocent Vision”の皆はやっぱり不思議そうな顔をする。

「多少は未来視を引き留めておくっていう打算的な事も…」



「八重花！」

真奈美に止められた意見だが、琴にとってはその方がよほど理解できる内容だった。

「そうでなければ”Innocent Vision”が自分を手元に引き留めておく必要がないと。」

だが八重花のそれはほとんど冗談だったと言うことは顔を見れば分かる。

だから琴は分からずじっと答えを待つ。

「何故って言われるほどすごい理由じゃないですよ。」

叶がそう断った後を引き継いで八重花と真奈美が答えた。

「あなたは叶の友達でしょう？」

「だったらあたしたちとも友達じゃないですか。」

「友、達……」

それはあまりにも琴にとって衝撃的な話だった。

呆然とする琴の手を叶が優しく握って笑いかける。

「陸君とお友達になったときと同じです。『友達』だから一緒にいて、心配して、助け合っんです。」

「叶、さん……」

琴の瞳から一筋雫が流れた。

それは1つ2つと数を増やしていく。

叶は慈愛に満ちた微笑みを浮かべて琴を抱き締めた。

「わた、わたくし、は……うわーん！」

琴は子供のよう泣きじゃくる。

”Innocent Vision”の面々はそれを笑ったりはせず、泣き止むまで優しく見守っていた。

「お恥ずかしいところをお見せしてしまいました。」

昼休み終わり間際まで泣いていた琴は恐縮した様子で頭を下げた。

「まあ、確かにあれだけ大泣きすりゃ恥ずかしいな。」

「ううう。」

「由良お姉ちゃん、苛めたらダメですよ。」

「ううう。」

由良に弄られ、叶に擁護されて琴はどんどん縮んでいく。

「作戦会議は放課後に持ち越しね。」

「…いつそ殺して下さい。」

もう追い詰められ過ぎて自棄になりかけていた。

だが何かを閃いたらしく死にかけみたいだった顔がパツと華やいだ。

「ならばその会議は我が太宮神社で開きましよう。全力をもっておもてなしさせていただきます。」

名誉挽回の機を得たと意気込む琴は八重花と由良がニヤリと笑ったのに気付かない。

恐らく壱葉で一番安全な場所で美味しいおもてなし付きとなればほくそ笑みもする。

「そうと決まれば早速準備を始めなければなりません。すみませんがお先に失礼させていただきます。」

琴は立ち上がると軽い足取りで屋上から出て行ってしまった。

「琴お姉ちゃん、授業は!？」

叶の声も聞かず、ボタンと屋上のドアが閉じられる。

「行っちゃったね。」

「友達いないとは聞いてたが本当にカナだけだったんだな。」

琴の変わり様に一同唖然としているうちにチャイムが鳴ってしまっ  
た。

弁当の中身は明夜が綺麗に平らげていたので叶が弁当箱を回収する。

立ち上がった八重花たちの顔は必ずしも明るくはない。

「オーとヴァルキリー、どうしたものかしらね。」

撫子は仕事の少ない合間を使って杏葉総合病院を訪れていた。花鳳グループと縁があるため院長が挨拶に出てきたが友人の見舞いに来ただけだからと仕事に戻ってもらった。

実際は友人と呼べるかは別として。

撫子は病院内でも特に静かな区画を歩く。

ここは植物状態や意識不明など何らかの原因で目覚めることが絶望的な患者を収容していた。

だから話し声など聞こえない。

家族にすら見離され、いずれは入院費すら払われなくなるまでただそこに居続けるだけの人の形をした標。

その中に陸の姿があるのが納得いかなかったが、両親にすら見捨てられた陸を生かすためには仕方がない。

そう、陸にはもう親はいない。

撫子は陸の後見人という立場にあった。

スライド式のドアを開くといつもと変わらないベッドで静かに眠る陸の姿があるだけ。

「ふう。」

撫子は椅子に腰掛けてため息をつく。

「本当に、ひどい。」

今思い返しても納得がいかない。

撫子はその事実を知ったのは偶然だった。

たまたま時間が空いてふと見舞いを思い立った日、ナースステーションで噂好きの看護師が働いていたから知ることが出来たのだ。

眠り姫が捨てられて彼女さんが可哀想だと。

彼女という言葉が叶を示していることはどうでもよかった。

「どういふことか詳しくご説明願えますか？」

気がつけば看護師に詰め寄って事情を訪ねていた。

そして撫子は半場家へ直接出向き、そこで全てを諦めた人を見た。それは言った、去年の春頃に娘を喪つてからずっと2人だったと。撫子はこの時、怒りを通り越して泣きそうになった。

協議とも言えない話し合いをしてその場で撫子は陸の後見人として認めさせ、知り合いの法律家の協力で正式に受理させた。

「半場さん。」

名を呼ぶが返事はない。

「わたくしが親代わりだとか、目覚めた時にこの関係を強要してヴアルキリーに誘い込もうなどは考えていません。」

寝顔は幼児のよう。

ただ現実ではどれほどの境遇にあったのか。

親に存在をなかったことにされることなど理解できない。

学校の大半の生徒から妬まれる気分など想像もできない。

生まれながらにして”人”と違うと思つてきた心境など分かつてあげられるはずもない。

だからこそ、撫子は惹かれたのだと思う。

自分とは真逆の方向を向いて歩きながらも、その芯は撫子の望む在り方をしている、その生きざまに。

「わたくしは貴方が共に歩んで下さらなくても良いのです。たとえそれが敵対することになったとしても、わたくしが貴方の姿を目指せるのなら。」

大きく飛ばたいて空へと舞い上がった鳳は標を探している。

今は見えなくとも更なる高みに登るための大切な標。

「しかし、目覚めたら親もなく、わたくしが親代わりだと知ったら半場さんは驚かれるでしょうね?」

撫子は楽しそうにクスクスと笑う。

こんな風は無邪気に笑つたのはいつ以来か。

花鳳の人間であれと教育を受け、人の上に立つ者としての自覚を胸に抱き、普通以上の努力を繰り返す日々。

陸とはまた別の過酷な時代を過ごした撫子は上品に笑うことは覚え

ても本当の意味で笑ったことは数えるほどしかなかった。

葵衣や緑里、一部の人が知る”花鳳の撫子”ではない等身大の女性の姿。

撫子にとって陸はありのままの自分をさらけ出せるほどに信頼を寄せる相手だった。

敵として相対してもそれは撫子の成長のためになる。

妄信的とも言える感情は恋ではなく一種の崇拜に近い想いを撫子に抱かせていた。

静かで穏やかな時間が流れる。

陸は当然のように何も言わないが撫子はそれを退屈だとは思わない。同じ時を共有している、ただそれだけの事ですら大切だと言わんばかりに。

だがそれも撫子の携帯の着信音で壊された。

仕事のトラブルで急な呼び出しだった。

「それではまた寄らせていただきます。どうか壮健で。願わくは目覚めた半場さんと会えることを。」

撫子はお辞儀をして早足に病室を出ていった。

廊下を軽快に歩く足音が遠ざかっていき、ドアが閉まるとまた無音の世界が訪れる。

ここは時から外れた世界と言える。

陸は、今もその中にいた。

## 第58話 示威行動

放課後を迎えた叶たち” Innocent Vision”の一行は合流して太宮神社に向かっていた。

動きを見せ始めたヴァルキリーや時坂飛鳥率いるオーへの対策、そして琴の全力のおもてなしが混在する太宮神社に向かうためその表情には期待と不安が入り交じっていた。

「時坂飛鳥のあの見えなかった技。あんなのどうするんだ？」

「とりあえず叶の目に頼るしかないわね。」

「ヴァルキリーはやっぱ私たちを倒そうとするんだよね？」

「シンボルに加えてソルシエルまであつたらさすがに捨て置けないんじゃないかな？」

「おもてなし。」

クリスマスパーティーを話でしか聞いていない叶や真奈美は大多数の人間と戦うことに恐れを抱き、由良と八重花は一戦交えてなお未知の敵である時坂飛鳥を警戒していた。

そして明夜はどこまでもマイペースな子だった。

「本格的な精進料理って可能性もあるがな。」

由良の一言で崖っぷちな顔に変わったが。

「ようこそいらっしやいました。」

そして太宮神社の社務所で開かれたおもてなし付き” Innocent Vision”作戦会議。

そこには目にも麗しい日本の和菓子が並んでいた。

大福餅、桜餅、柏餅に草餅、餡団子やみたらし団子、羊羹や最中、落雁、饅頭、どら焼など並び並びお菓子。

「これはまた…」

「すごいわね。」

「これだけ食べるとさすがに太りそうだね。」

「うっ、美味しそっただけど…でもちよつとだけなら…」  
「じゅるり。」

驚愕、呆然、恐怖、期待。

色々な感情を胸にちやぶ台の前に座る面々。

その前には黄金色の日本茶が出された。

まさに全力でのおもてなしに相應しい待遇だった。

「想像以上のおもてなしに感謝ね。さて、それじゃあお菓子を貰いながら会議を始めるわよ。くれぐれも食べることに夢中になって話を聞いてなかつたりしないように。」

八重花が明夜に向けて釘を刺すがすでにお菓子に夢中で聞いちゃいない。

尤も普段から聞いているのかどうか分からないのでため息だけついて説得は諦めた。

「ふわあ、美味しいよお。」

「…リーダー…」

組織のトップであるはずの叶までも甘味の魅惑にほだされていた。

流石にこめかみに青筋を浮かべる八重花の前にみたらし団子が差し出される。

「そうカリカリすんな。焦ったつてしょうがないときもある。」

妙に達観している由良の言葉を聞いて八重花はプイと顔をそらすと団子を引ったくってガツガツ食べ始めた。

「こっとなつたらとことん食べるわよ！」

「負けない。」

八重花と明夜が張り合い出す。

それを見ていた由良はやれやれと苦笑を漏らした。

「相変わらず熱いのか冷たいのかよく分からないやつだな、ヤエは」

「こっして作戦会議に集まっただけの”Innocent Visison”は日本の和菓子食べ比べに暫し没頭することになった。」

甘ったるい匂いが部屋に漂う。

「そろそろ本当に対策会議を始めるわよ。…うつぶ。」

「オーとヴァルキリーを…げぶ…まとめて相手にするか重点的にどちらかを攻めつぶ…」

如何に乙女の別腹胃袋でも厳しいものがあつた。

あれだけ目を輝かせていた叶も最後の方では死にそんな顔をしていない。

近い未来における体重計という名の絶望を思い出しただけかもしれないが。

けるつとしているのは明夜くらいのものだった。

「攻めずに守って迎え撃つって作戦もあるけどね。」

真奈美は畳に手をつけて斜めに体勢を崩しながら進言した。

「ソルシエールがあると云つても人員的には5人しかいない”Innocent Vision”なので要らぬ火種を起こさないのが得策だと真奈美は考えていた。

「日和るな、マナ。それじゃあ立派な漢になれないぞ？」

「いつまでも女でいたいです。」

由良の冗談に真奈美も苦笑で返す。

八重花は一つ咳払いをして話を戻す。

「防衛思想は悪くはないわ。でもヴァルキリーとオーの両方から攻められた場合、守りきれるかしら？」

「それは…厳しいね。」

戦術においては防衛にも多くの人員が必要となる。

敵の動向を探る間諜や防衛に当たる人員、本拠地での監視、補給部隊、それらはすべて人員あつてのこと。

太宮神社に立て籠つたとしても包囲されれば補給路は絶たれ、防衛も5人ではいつまで持つか分からない。

少人数での防衛は非常に困難な手段と言えた。

「だけど攻めるのも人数の差が圧倒的な違つから難しいんじゃないかな？」



「私はそんなに戦えないし。」

真奈美は攻める案に懐疑的で叶も攻撃には反対の姿勢を示した。叶は特にヴァルキリーやジューエルが相手では完全に防戦に回ることになるため既に恐縮していた。

「確かに全面戦争を仕掛ければ兵力差は歴然、グラマリーの威力が凄まじくても普通は勝てないわ。それこそ未来視で戦術を読み切るりくでもない限り。」

八重花は真奈美の意見を否定しなかった。その上で悲嘆に暮れないだけの自信も見え隠れしている。

”Innocent Vision”の参謀は相変わらず頭が切れて頼りになる存在感を滲ませていた。

「その言い方だと攻める意義はあるって聞こえるな。」

「そういうことよ。どちらか…そうね、この場合ヴァルキリーの方が効果的かしら。その一部に対して攻撃を仕掛けて完膚無きまでに叩きのめす。それにより”Innocent Vision”への警戒が強めて手を出しにくくさせるのよ。」

八重花の作戦は示威行動によって他の組織を牽制するものだった。

少人数の”Innocent Vision”で取りうる作戦としてはかなり現実味のある内容。

だが問題がないわけでない。

「しかし下手に手を打てば相手を逆上させ、一気に全面戦争へと雪崩れ込む危険性を孕んでいますね。」

琴の指摘に八重花は僅かに困った様子で眉を下げた。

「そうなのよね。弱すぎるとバカにされるし強すぎると反感を買う。その見極めは重要よ。」

陸のInnocent Visionのように相手を倒さずに優位性を示すことができれば良いのだが、今の”Innocent Vision”は完全な戦闘タイプと回復系が1人いるだけ。

八重花も由良も口には出さないが搦め手を得意とするオブシディアンの使い手がないことを悔やんでいた。

「それなら杏葉のジュエルが集まっていそうな場所に攻め込んで壊滅させるか？」

由良が悪どい顔をしながらクツクツと笑う。

やろつとしている手口といい完全にヒールだ。

叶と真奈美はちよつと引き気味だった。

「…そうね、いいんじゃないかしら？」

だが意外なことに八重花が賛同した。

「本気か？」

提案した由良自身も驚いていたが八重花はしつかりと頷く。

「関東全部のジュエルを相手にすると骨が折れるけど一部だけならどうにでもできるわ。ジュエルは各所に支部を作っている。

その1つを潰せば牽制になるしヴァルキリーの戦力も少しは減らせるわ。」

八重花は由良の冗談を実行可能で有益な策に仕立てあげてしまった。策士東條ここにあり。

「でも、やっぱりジュエルの人たちを攻撃したらヴァルキリーが襲ってくるんじゃないかな？」

叶は不安げに手を挙げて進言した。

「少なくとも”Innocent Vision”の仲間の誰かがやられたら、叶は兎も角として、仇討ちをするのは目に見えている。ヴァルキリーでも同じではないかと思っただ。

「無いとは言わないわ。でもヴァルキリーの誰かを倒す訳じゃないからそうならない可能性も高いのよ。」

「どういうこと？」

「叶は仲間がやられたら仕返しをしようと思ってるわけよね？」

「うん。」

「確かにヴァルキリーの1人を倒してしまうとほぼ間違いなく反撃してくるわ。さっき言った強すぎる方ね。でもジュエルは名目上ヴァルキリーの部下。1人2人だと効果が薄いけど一支部を壊滅させれば”Innocent Vision”の強さに警戒を強めて

動きが鈍るはずよ。あのヴァルキリーのメンバーがそこまで部下思いだとは思えないもの。」

叶たちはヴァルキリーのメンバーを戦場でのイメージでしか知らないが八重花は一時期ヴァルキリーに所属していたためある程度人となりを理解している。

今のジュエルがどんな餌で動いているのかは知らないが、少なくともヴァルキリーがジュエルを兵隊以上に考えることはないと言ってきた。

「ジュエルの拠点襲撃か。不用意に飛び込むと危険だね。」

「心配すんな。前衛の俺に前衛の明夜に前衛のヤエに前衛のマナ。そして後衛のカナがいればばっちりだ。」

「戦士、戦士、戦士、戦士、僧侶のパーティーはばっちりなのかな？」

真奈美の苦笑めいた呟きに由良自身の提案ながらも賛同しかけたがグツと思いつまった。

「攻撃的だろ？」

若干無理のある弁解だが交代要員がないのでこの布陣で行くしかない。

「羽佐間さんが中堅に移動してはどうです？遠距離攻撃は後衛向きですしそうなれば魔法使いでバランスも取れますよ。」

「琴お姉ちゃん、詳しいですね。」

「ふふ。…これまで多くの時間を一人で過ごしてきましたから。」

琴の後ろ向きな告白を聞き流して由良は悩む素振りを見せる。

「確かに前はそんな感じだったな。だが問題がある。」

神妙な様子 of 由良に琴は首をかしげる。

「問題ですか？」

「ああ。…実は…」

ゴクリと琴たちが固唾を飲んで続く言葉を待つ。たっぷり焦らした由良が理由を告げた。

「ソルシエール復活計画で地獄のメニューをこなしたせいか音震波

を撃つより殴った方が強いんだよ。」

「あー…」

叶以外のメンバーは納得の声を漏らした。

確かにソルシエールの性能は低下したのに武器としては軽く感じたり、真奈美も斬撃の鋭さが増している気はしていた。

「それでは仕方ありませんね。フォートップの攻撃陣形で一気に攻め落とすのが良いでしょう。」

未来視の巫女の助言も貰って方策が決まった”Innocent Vision”は早速明日襲撃すべく準備を進めていくのであった。

夜の建川は不夜城のように明かりが消えることはない。

「ぎゃあーッ！」

騒がしき若者たちの耳には不協和音は届かない。

「や、やめて！」

グシャリと何かが壁に叩きつけられた。

それは水音とねばつく肉の音を立てて地面に倒れる。

少女たちは怯えながらも手に握ったものを前に突き出した。

武骨な刃、ジュエル。

襲われたのはジュエルの4人だった。

すでに2人は血の海に沈み、直視したくない姿に変わり果てている。残った2人は恐怖心を抑え込んで朱色に輝く左目を前に向けた。

「何よ、何なのよ、あんた!？」

ジュエルを殺つたのは1人の少女だった。

年の頃は学生、顔は闇が深くてよく見えないが格好は壱葉高校のも

の。

だがその力は少女たちの知るジュエルとは全く別物だった。それ以前に何も見えない。

「あたしたちが何したって言うのよ!？」

少女は生まれて初めて感じる死の恐怖に泣きながら必死の抵抗を見せた。

闇の少女はそれを嘲笑うかのように一步前に足を踏み出して手をまっすぐ水平に突き出した。

「ただの暇潰し。」

見えないはずの口が裂けて笑ったように見えた。

「ヒッ！」

「な、何!？」

1人の少女は悲鳴を上げ、もう1人は別の異変に気付く。

闇の少女の足元が不自然に盛り上がり、影なのに立体感がある不思議な現象が起こっていた。

その浮かび上がった影は少女たちよりも背が高くそして漆黒の顔に紅色の目が開いた。

「オー!？」

「何で!？」

驚く間もなくオーはジュエルたちに襲いかかった。

オーの力は強く2人係りでようやく拮抗している状態だったがジュエルたちは追い詰められていく。

オーの向こうに立つ闇の少女の左目の朱色がジュエルの心を追い詰めていた。

「こんなところで死んでたまるかあ!!」

極限状態での感情の爆発で脅威的な身体能力を見せたジュエルの刃がオーを真っ二つに切り裂いた。

「や、やった。」

全力を振り絞ったためふらつきながら弱々しい笑みを浮かべたジュエルは

「おめでとう。それじゃあレベル2にチャレンジね。」

闇の少女の酷薄な笑みと影から沸き出してきた3体のオーを見て凍りついた。

「ねえ、逃げよう。」

少女は恐怖のあまり外聞を捨てて隣に立つジュエルの肩にすがり付いた。

だが、弱々しく掴んだだけでガクリと手前に体が傾き、そこにあるはずの頭が無かった。

「あ……あ……」

放心する少女の耳にケラケラと笑う悪魔の声が聞こえた。

「レベル1の勝者はあなたよ。だから生きている。さあ、何レベルまで生きられるかしら？」

オーが詰め寄ってくる。

少女にはもう戦う力も心もない。

「あは、あはは……」

闇に飲み込まれ、少女はいなくなった。

闇の少女、時坂飛鳥はそれを見て残忍な笑みを浮かべていた。

## 第59話 威乃戦徒美女ん再び

建川ジュエルはWVe1号店であるにも関わらず吉葉がヴァルキリーのお膝元であるためそれほど人員がいなかった。

20人程度で構成されたジュエルを統率するのはインストラクターの大和。

下の名前は撫子ではないが剣術道場の娘で武人氣質の乙女だ。それに付き従うジュエルも気骨のある少女、女性が多かった。

「常に敵を意識して斬れ！」

「はい！」

ヒュン、ヒュンとジュエルの武器が空を切る。

大和の教える訓練は剣術として実戦的な側面を持つため正しい武術を学びたいジュエルが教わりに別の地区から来ていた。

逆に厳しい指導に耐えかねて別の支部に出ていく者もいたが。

ちなみに大和は4月から新たに生み出されたジュエルの初期メンバーであり、その持ち前の武の知識とジュエルとしての成長度の早さからインストラクターに昇格した経歴を持つ。

インストラクターの上が地区管理者で関東圏では村山がそれに当たる。

現在は空席だがその上にはヴァルキリー傘下の親衛隊『ワルキューレ』としての地位がありジュエルへの指揮権も与えられるようになる。

上を目指す者は実績を積んでヴァルキリーに認めてもらう必要がある。

「気を抜くな、敵はいつ襲ってくるかも分からないぞ！」

「はい！」

そうは言いつつもそれはあくまで気構えの話であり本気で敵が攻めてくるとは大和であっても想定していなかった。

ザッ

その建川ジュエルの入り口に数人の人影が立った。

ジュエルの訓練所が地下にあるとはいえ地上は若い女性が集まる話題の店WVe。

その店員も全員がジュエル関係者と言うわけではなく普通に就職した社員やアルバイト店員も多い。

その普通の店員に慌てた様子で客が声をかけてきた。

とにかく錯乱したように慌てていて要領を得ないため店員は店の外に出た。

夕方に差し掛かろうという時間帯で人通りの多いアーケード街は人だかりが出来ていてWVeから距離を取っていた。

誰もが興味を抱きながら誰も近づこうとは思わない。

ある者は携帯カメラで写真を撮っていたりもする。

出てきた店員は思わず啞然としてしまった。

5人の集団は人目を気にした様子もなくWVeの裏手に通じる裏道に入ってしまった。

何かの企画かパフォーマンスだと思ってみていた通行人たちは何事もなかったように日常に戻っていく。

店員としては裏口に入っていく集団を止めなければならぬ立場だったが怖くてとてもじゃないが声を掛けられなかった。

とりあえず店内に入ってこなかったから一安心。

バキッ

裏口の倉庫だと教えられていたドアが壊されたみたいなのが聞こえた気がしたけど、店員はにこりと笑うと営業スマイルのまま店内に走り去っていった。



「ん？外が騒がしいな。」

大和は音のほとんど届かない地上の騒動に気付いた。だが何があつたのかまではわからない。

WVeは芸能人も来店することがあるため時々それで騒がしくなることもある。

今回もそれかと納得しかけた大和はバキッ！

訓練所へと続く扉が派手に吹き飛ばされた音を聞いて一気に緊張を高めた。

「敵襲に備えて各自戦闘体勢！」

ジュエルが混乱するよりも早く的確な指示を出して行動を一本化する。ことでジュエルたちは即座に武器を構えて隊列を組んだ。

コツ、コツ

訓練所に近づいてくる足音が響く。

大和はいつでも斬りかかれるよう刀型のジュエルの柄をしっかりと握り訓練所入り口の扉を凝視した。

足音は複数。

それが扉の前でピタリと止まった。

全員が扉の開く瞬間を不安を押し殺して待つ。

ドガンッ

だが、皆の予想は裏切られ、両開きの金属製の扉が吹き飛ばされた。

「敵だ！全員構え……」

敵の姿を捉え、指示を出そうとした大和は言葉が続かず口をあんと開けて立ち尽くした。

そこにいたのは特攻服を肩に羽織り、胸元をさらして覆い、ラップズボンで口許には大きなマスクをした異様な集団、俗にレディースと呼ばれる格好をした少女たちだった。

「な、何者だ！？」

大和がどもりながらも問い質す。

ツッコミどころは満載だが今は彼女らが侵入者であるという事実が一番の問題だった。  
先頭に立つ頭とおぼしき女は目元を吊り上げてニヤリと笑うと特攻服をはためかせて背中を見せた。  
そこに刻まれた文字は

” 威乃戦徒美女ん ”

「いの…せんと…びじよ、ん?…” Innocent Visio  
n ” だと!?”

その意味をようやく理解した大和の声で他のジュエルたちもそれがヴアルキリーの宿敵” Innocent Visio n ” だと認識したが動揺は収まらない。

ジュエルの慌てる様子を見て由良はクツと笑い声を漏らした。

「ビビってるみたいだな。」

「それはそうでしょ? 誰がこんな格好で乗り込んでくると思っのよ。はあ。」

八重花はとても重いため息をつきながら特攻服を摘まんで眺める。とても一晩で作り上げられたとは思えない出来だった。

「だいたいどうしてこんな格好なのよ?」

「そ、そうですよ。」

八重花の不平に叶も賛同した。

叶はさらし姿が恥ずかしいらしくずっと胸元を手で抱き締めていた。「ただ突入するだけじゃインパクトが足りないだろ。やつらに” Innocent Visio n ” の恐怖を叩き込んでやらないとな。」

「確かにこんな格好で襲ってこられたら怖いでしょうね。何か間違ってる気はしますけど。」

真奈美もスピネルの義足である左足は太もあたりまで晒した格好をしていて恥ずかしそうだがどこか楽しそうでもある。

明夜は右目に眼帯をしているので左目の朱色の輝きがいつそう際立つていて不気味だった。

「臆するな！成りは不良集団だが中身は…」

「殺つちやつていい？」

「殺戮集団だ。」

仲間を鼓舞しようとしていた大和だったが明夜のポツリと呟いた言葉を真に受けて物騒な事を言った。

「ジュエルたちは恐れ戦き、”Innocent Vision”もムツとする。」

「殺つちまうか？」

「それはやりすぎよ。戦闘不能に追い込めば十分ね。」

由良が、八重花が、明夜がそれぞれにソルシールを取り出して構える。

由良が玻璃を肩に担ぐ仕草はバットを持った不良の姿そのものだった。

「相手はたったの5人だ。ジュエルの力、今こそ見せる時！」

指揮官適性のある大和が同様の拡がるジュエルを統率する。

数で言えば確かに4倍。

さらに”Innocent Vision”を倒したとなれば昇格は間違いなしとあつて欲望の刃が震える。

瞬間にジュエルの瞳が殺気でキラキラし始めた。

その意志を威嚇するように燃え上がる炎の赤が揺れる。

「質の違いをたっぷりと味わわせてあげるわ。」

「怯むな！全軍、突撃い！」

大和の掛け声を発端に建川ジュエル対”威乃戦徒美女ん”の戦いが始まった。

キン、キン

「くう、速い！」

4人のジュエルによる連続攻撃を明夜は二刀をもって捌いていく。完全に死角をつく2、2のコンビネーションも技巧の剣撃と瞬間移動染みた移動速度ですべて受け流された。

「あたいに近づくと怪我するよ。」

「棒読みなのに強い！」

残像すら見えそうな斬撃の嵐はジュエルを圧倒していた。

「でい！」

「はっ！」

巨大な槌のジュエルを真奈美のスピネルが迎え撃つ。

見た目には圧倒的にジュエルの優位に見える一撃はガン

刃のハイキックが槌を弾き返すにわかには信じがたい光景を生んだ。

蹴りの後の隙について短刀のジュエルが一気に接近する。

「死ねえ！」

「叫んだら奇襲にならないよ。」

真奈美は左足の勢いに引き摺られるようにあえて体勢を崩して刺突をかわすとスピネルを地面に叩きつけて強引に縦回転へと変化させた。

「そんな!？」

人間の動きを超越しつつあるアクロバットな動きに攻撃を仕掛けようとしていたジュエルたちがたじろいだ。

真奈美はスピネルを大きく振り下ろして斬撃を放つ。

「変則ガンマスピナ！」

光の軌跡がジュエルを叩き伏せた。

ゴウ

ジュエルの訓練所の白い壁が赤く照らし出される。

赤き焰の大蛇が八重花を守るように大きくとぐるを巻き、鎌首をもたげてジュエルを睨んでいるようだった。

その圧倒的な熱量にジュエルたちは近づくことも儘ならない。

八重花は警戒したまま動こうとしないジュエルたちを見て笑う。

「来ないならこっちから行くわよ。」

八重花が右手のジオードを掲げると炎の蛇がゆらりと動いた。

動きを見せるジュエルだったがこの狭い空間で逃げ場などない。

「殺しはしないわ。当たらなければね。」

怖い宣言をして八重花はジオードを大きく横薙ぎに振るい、炎が一面を赤く染め上げた。

ブウン

「おら、どうした!」

暴力的な振動を伴う玻璃が振るわれる。

圧倒的な力と震動はジュエルを打ち合わせることさえも許さず、触れた瞬間に弾き飛ばす。

「こんなの、どうやって相手にするのよ!??」

誰かが叫んだその言葉は正に現状を表していた。

ジュエルには、グラマリーのない彼女らには由良を止める術はない。

「吹き飛ばへ、音震波!」

「きゃあー!」

震動波が数人のジュエルを飲み込んで吹き飛ばす。

ソルシエールのその力は同じ魔剣というカテゴリーにあるとは思えないほどに異質だった。

「はっ、さっさとかかってこいよ!」

ノってきた由良の感情に合わせて玻璃の振動も大きくなる。

それを止められるものは誰もいなかった。

「大和さん、このままじゃ！」  
戦闘を開始してまだ10分と経っていないがジュエルの敗色は濃厚だった。

開始前は手柄に暗く燃えていた瞳をしていたジュエルたちも今は生き延びるために逃げ回っているような状態だ。

大和はグツと歯噛みする。

「Innocent Vision」、ソルシエールの力がここまでとは。化け物どもめ。」

ここまで力の差を見せつけられてしまうと味方を鼓舞するのもほとんど不可能と言える。

せめて1人だけでも打ち倒せればと戦場に目をやった大和は戦闘開始から入り口付近に立ち尽くしておるおろしている叶を見つけた。

“Innocent Vision”のリーダーである叶が戦闘に参加していない。

そして他のメンバーはジュエルを相手にするために入り口から離れている。

(頭を潰せば隙が生まれるはず。その隙に待避を。)

大和はジュエルでは珍しく強さを求めて魔剣に魅入られた武人であるため、手柄ではなく仲間の退路を確保するために叶に目をつけた。ジュエルには叶の戦闘能力は低いという程度の情報しか伝わっていない。

「動ける者は続け！」 Innocent Vision”の頭を潰す！」

大和に付いて待機していた者、体勢を立て直すために退いてきた者が同調し、5人が叶に殺到する。

「私の方に来た！オ、オリビン！」

叶は慌ててシンボル・オリビンを顕現させて右手に逆手で握った。

「その短剣で5人を止められるものか。かかれ！」  
オリビンを前にしても臆することなく駆け寄った5人が一斉にジュエルを振り下ろす。

「ええい！」

叶は正面の大和にオリビンを合わせようとした。

大和は勝利を確信して振り抜く。

…だが、競り負けたのは大和の方だった。

それ以前に競ってすらいない。

ジュエルがオリビンに触れた瞬間、同極の磁石のように反発したのだ。

(だが4人の攻撃は避けられない。)

体勢を崩しながらも勝機を見い出した大和は、合気道に通ずる見切りで4つの刃をかわす叶の姿に度肝を抜かれてそのまま後ろに倒れてしまった。

「くつ、さすがは”Innocent Vision”のリーダー  
と言ったところか。甘く見ていた。だが…」

「次はないぜ？」

独り言に入ったツツコミにハッと顔を上に向けるとそこには由良、明夜、八重花、真奈美が立っていた。

どこからも剣撃の音は聞こえず、異様なほどに戦場は静まり返っている。

叶を襲ったジュエルたちの声すらしない。

「僅か十数分で…私の部隊が壊滅させられるとはな。」

大和はジュエルを手放した。

刀は地面に金属音を響かせる前に虚空に消える。

「俺たちが本気の全力を出してたら多分、3分で片がついたぜ。」

大和はもはや驚きの声すら出せずに苦笑を漏らした。

「殺せとは言わないがこのまま意識を持ったまま残されることに勝る屈辱はない。せめてもの慈悲を与えてはくれないか？」

大和は目を瞑る。

これで何もせず去っていかれたとしても敗者である大和には何も  
言えない。

心に思うのは一つ。

（強く、なりたい。）

足音が遠ざかっていく。

僅かな悲しみを吐息に漏らすと空気が震えた。

「…かたじけない。」

「眠れ、超音振。」

大和は激しくも優しい慈悲を受けて意識を闇に落としたのであった。



## 第60話 不意の遭遇

ヴァルハラには早速建川ジュエルの壊滅の情報がもたらされ、急遽メンバーが集合した。

「やってくれたね、”Innocent Vision”。」

「報告によれば特攻服を着た昔の不良のような姿をした5人組を多数の一般人が目撃したようです。」

葵衣の追加報告に美保が眉を潜める。

「それは”Innocent Vision”とは別の集団ってことですか？」

「ですが特攻服の背中には…」

葵衣はごそごととパネルを取り出して

『威乃戦徒美女ん』  
と書いた。

「こう書かれていたそうです。」

「い…の…せんと、びじょん。んがなんだか可愛らしい名前ですね。」

「馬鹿にしてんの!？」

悠莉はのほほんと、美保は吠えて犯人を宿敵である”Innocent Vision”に同一視させた。

「葵衣、ジュエルの被害はどうだったの？」

若干脱線気味だった会話を緑里に正され、葵衣は頷く。

「本日建川ジュエルに参加していたインストラクター大和を含めた総勢21名が全員倒されました。昏睡や火傷、裂傷などダメージのない者は皆無でしたが死者は出ていません。しかし、”Innocent Vision”への恐怖で脱会を希望する者は出てくるとは考えられません。また、倉谷のジュエルが数人消息不明となっております。」

被害報告は一部の行方不明者を除けば大事ないと言える。

だからこそ不可解でもある。

「Innocent Vision”はわざわざ面白い格好をしてジユエルを襲って何がしたかったのかな？」

良子はその疑問を口にする。

普通にジユエルを襲うだけなら武力行使になるが特攻服の意味を量りかねていた。

由良の思い付きがヴァルキリーの考えを混乱させた。

「服装は置いておきまして、私は報告を受けてすぐに車を出していただいて建川に向かいました。20分程度で到着したのですがその時には既にジユエルは壊滅していました。」

「それは、間違いなくInnocent Vision”だね。」  
ジユエルは身体能力強化が掛かっている。

本当に”威乃戦徒美女ん”というただの不良だったなら絶対に負けるはずがなかった。

つまりそんな短時間でジユエルを屠れるのはジユエル以上の強化がかかるソルシエルを持つ”Innocent Vision”だけ。

美保がギリツと奥歯を噛んで顔を歪める。

「宣戦布告つてわけね。戦争しようつていうんなら受けて立つわよ。サマーパーティーを待つ必要はないわ。」

怒りの感情に呼応してスマラグド・ベリロスが左手に現れる。

今にも飛び出していきそうな美保を悠莉が引き留めた。

「落ち着いてください、美保さん。」

「何よ？」

不満げながらも足を止めた美保に着席を促しながら悠莉は真面目な顔をする。

「相応の準備をしなければジユエルは早々に瓦解しますよ。」

穏やかではない発言に美保の目許がピクリと反応するが話の内容への興味が勝ったことで大人しく席についた。

「修学旅行先での敗北と今回の襲撃での惨敗で関東圏、関西圏のジ

ユエルは”Innocent Vision”への恐怖心を持ったはず。東北や九州などにも情報は出回るでしょうから皆が”Innocent Vision”という未知の怪物に心のどこかで恐れを抱くこととなります。勝てる策も無いまま飛び込めばソルシエールの絶大な力を目の当たりにしたジュエルは恐怖に駆られて逃走し、組織戦闘は瓦解するでしょう。」

美保、緑里、良子が悠莉の説明に聞き入って相づちを打つ。

葵衣は口を挟まないことから同じことを言おうとしていたらしくお茶の用意をしていた。

「悠莉様のご説明のように今回の”Innocent Vision”の行動はこちらへの力の誇示と思われれます。ソルシエールにセイバー、そしてシンボルの力を持つ”Innocent Vision”に不用意に手を出せば損害を被る私たちでしょう。お嬢様の計画されているサマーパーティーまで力を温存していただきたく思います。」

葵衣の出した紅茶の芳醇な香りがヴァルハラに広がり美保の怒りを和らげた。

葵衣の淹れた紅茶に抗える者などいないのである。

とはいえカルシウム足りてない美保がそれだけで大人しくなる訳もない。

「焦れたいわね。だったらオーなら喧嘩売ってもいいのよね？」  
「変わらぬ美保の在り方に悠莉は困ったような微笑みを浮かべて葵衣に目を送った。」

葵衣は頷き、感情に乏しくも神妙な様子で返答する。

「オーに關しましては、むしろ早急に打って出る必要があるでしょう。」

「どうして？オーは相変わらず時々”Innocent Vision”を襲ってるだけでヴァルキリーには来ないでしょ？」

それはそれで戦力外扱いされているとも言えたが三つ巴の状況でオーが”Innocent Vision”を重点的に攻撃している

事実は十分に重要な利点と言えた。

それを覆す、あるいはオーの標的をヴァルキリーにしてまで手を打つ必要があると言う以上、葵衣は何かを掴んでいると考えられた。

「それは…勘です。」

だが葵衣の根拠は自分の感覚だった。

美保は鼻で笑って立ち上がる。

「まあ、サマーパーティーまで”Innocent Vision”には手を出しません。オーの方は好きにやらせてもらいますよ。」  
美保がヴァルハラを出ていくと続いて良子も立ち上がった。

「ちよつと部活の指導を頼まれてるからあたしはこれで。」

乙女会会長で3年生の夏なのにいまだに部活に顔を出している良子を心配しなくてもなかったが残った悠莉と緑里は追求しない。

「それで？オーに動きがあつたんだよね？」

緑里は確信した様子で尋ね、悠莉も頷いて葵衣の返事を待つ。

2人は葵衣が勘で発言したのではないと見抜いていた。

悠莉は人の心理の動きを察し、緑里は双子ゆえに気付いた僅かな違和感から。

葵衣は小さくため息をつくと言った。

「さきほどの報告で少し出ましたが最近ジュエルの消息不明…はつきり言ってしまうえばジュエルが殺害される事件が断続的に起こっています。」

「!?!それは”Innocent Vision”じゃなくて？」

「その可能性も検討していましたが今回の襲撃でオーであると確信しました。」

「ソルシエールの力を使えば同じ時間で威嚇ではなく虐殺することもできますからね。ふふ。」

悠莉がなぜ笑ったのかは怖いので海原姉妹は言及せず頷くだけにした。

緑里は眉を寄せて紅茶を口にする。

「目立ってないだけでオーはジュエルに手を出してたんだ。やっぱ

りそれってヴァルキリーの戦力を潰すため？」

「どうでしょうか。本当に潰すつもりなら大量のオーで”Innocent Vision”のように訓練所を襲撃すれば良いはずです。」

ヴァルキリーにはオーの主格が存在している情報がないためそもそも組織的な集団であるかも定かではない。

それ以前にたとえ時坂飛鳥の存在を知っていたとしても彼女の気まぐれな虐殺に気付ける者など同属の狂人くらいのものである。

「オーがどのような行動に出るか現時点では判明しません。お気を付けください。」

葵衣の警告でヴァルキリーの会議は締め括られた。

悠莉は会議が終わると建川を訪れていた。

別に潰されたジュエルを惜しんできたわけでも用事があったわけでもない。

理由を探せばただ何となく足が向いたという程度の事だった。

WVeの倉庫が不良集団によって襲撃されたため一応店員や目撃者に警察官が聞き込みをしていたが物的被害がないことや現れた時はたくさん目撃情報があるのに忽然と消えたレディースという眉唾物の噂のため本気で犯人を追求しようという気概は感じられなかった。

（犯人は現場に戻ると言いますが、さすがにいませんね。）  
期待していたわけではないがやはり”Innocent Vision”の姿はない。

悠莉は警察と野次馬で混雑する店の前を素通りした。

（ジュエルは隠し通路から搬出されたと聞きましたし長居する必要も…）

「あ…。」

「あら。」  
大通りに接続する脇道から出てきた人を避けようとしてた悠莉は出てきた人と互いに驚きの声を漏らして立ち止まった。  
路地から出てきたのはばつが悪そうな顔をした芦屋真奈美だった。

「私はアッサムを。 芦屋さんは何にされますか？」

「同じもので。」

WVeに程近い喫茶店に2人は入っていた。

真奈美は頬杖をついて窓の外を見ているが険悪な感じはせず

（なぜ私とお茶を飲んでいるのか、そんなことを考えていそうです  
ね。）

それは誘った悠莉自身が知りたくらいだった。

原因を遡ってみれば結局陸と敵対したくないという思いに行き着くことに気が付いた。

「ふふ。」

悠莉は自分の乙女っぽさに笑みを溢した。

「何か面白いことでもあったのかな？」

「そうですね。今こうして芦屋さんとお茶をしていることでしょうか。」

怪訝な顔をする真奈美に悠莉は本心が混じった冗談を返す。

「確かにね。」

真奈美も苦笑を浮かべてまた窓の方を向いてしまった。

陸と敵対したくないから”Innocent Vision”とは極力争わず、敵という認識が薄いから八重花や真奈美とこうして一緒にいられる。

下手をすればヴァルキリーへの裏切りに繋がりがねない行動だが悠莉の人柄が策を練っているのではないかと思わせるためこれまで追求されることはなかった。

「それであたしに何か用かな？情報はうちの参謀に怒られるからあ

げられないよ。」

叶ほどではないが善人の真奈美は話術で勝てる自信がないため先に釘を刺した。

悠莉としては本当に言質をとって証言を得ようとは考えていないだけに力一杯抵抗しようとする真奈美を微笑ましく感じていた。

「残念です。私の手の中にあるのがジュエルではなくソルシエルならその心を折るコランダムに取り込めたのですが、ふふふ。」

多くの冗談と微かな本音を言葉にすれば真奈美は面白いように警戒を強めた。

むしろ立ち上がって帰りかけたが

「お待たせしました。」

絶妙のタイミングで店員がお茶を運んできてしまったため真奈美は動けなくなり深く椅子に腰かけた。

「ふう。」

「レディースでお疲れのようですね。」

「…もう知ってるんだ？」

「はい。ヴァルキリーの情報網は広く深く速いのです。」

それはヴァルキリーが数多くのジュエルと花鳳に連なるSPのような黒服の非戦闘員からなる巨大組織であり、その大半が耳聡い若い女性だからである。

情報はヴァルキリーに集約され、葵衣が的確に指揮を取るために高速で正確なやり取りが行われる。

それを超える速度で作戦を遂行するためにはそれこそ未来視でも用いるしかない。

本当に陸はとんでもない相手と争っていたのであった。

「早速報復する気？」

悠莉はアッサムティーの味に満足げな吐息を吐く。

それだけの仕草で店にいた男性を魅了する魔性の女はトンと自分の胸に手を当てた。

「誤解をされているようですがヴァルキリーは見境のない殺人を容

認している訳ではありませんし、過激派は美保さんと等々力先輩だけです。私は”Innocent Vision”との争いを望んでいませんよ。」

真奈美は難しい顔で紅茶の飲んだ。

真奈美から見た悠莉の印象はかなり後期に参入したため嗜虐の姿を知らないこともあつて比較的常識人であつた。

だからこそその言葉がどこまで本気なのか探れない。

陸は甘いからあれだが由良辺りなら絶対に信じない話だ。

「芦屋さんはなぜ建川に？皆さんと一緒にではないのですか？」

真奈美が始終居心地悪そうにしている悪いと思いつつもお茶を飲み終えるまで付き合わせようと考えたたかな悠莉。

「…みんなは先に帰つたよ。あたしは買い物で残っていただけ。」

「そうでしたか。」

それきり沈黙が訪れる。

紅茶が徐々に減つていき、時間だけが過ぎていく。

「…ねえ、楽しい？」

先に口を開いたのは真奈美だつた。

悠莉は微笑み、頷く。

「ですが、芦屋さんが楽しめなかつたようですから私もそう言つたにしておきます。次は楽しいお茶会にできるといいですね。」

悠莉は伝票を手に席を立つた。

結局今日の出会いはなんの収穫も無かつた。

「自分の分は払うよ。」

「構いません。私が勝手にお願いしたんです。」

「…ありがとう。」

思つていなかった礼の言葉に悠莉はきよとんとし、笑う。

（収穫はありませんけど、芽ぐらいは出たようですね。）

伝票を持っていくと真奈美も席を立つてついてきた。

会計は420円、財布の小銭は400円だつた。

小銭を諦めて札を出そうとするとその前に20円が真奈美から手渡



された。

会計を済ませて店を出ると真奈美はんーと伸びをした。

「20円、ありがとうございました。」

「貸しにしたくなかったただだよ。」

真奈美の態度は随分と軟化したように思えた。

別れも告げず2人は別の道を歩き出す。

(この出会いの意味は何でしょうね、半場さん?)

## 第61話 仕組みられた邂逅？

「あ、こ、こんにちは。」

「はい、こんにちは。」

そしてここにも不意の遭遇を果たした2人がいた。

” Innocent Vision ” リーダー作倉叶と、ヴァルキリー真のリーダー花鳳撫子である。

場所は吉葉総合病院の陸の病室だった。

叶が見舞いに訪れると撫子が先に来ていてベッドサイドの椅子に座っていたのだ。

「あの、失礼しま……」

陸の見舞いに来る人間は限られているが、大抵皆1人で来て愚痴を漏らしたり近況報告をしたりして陸の目覚めを待っていることを伝える。

端から見られれば恥ずかしいだろうと席を外そうとしたのだが

「せっかくですから少しお話でもいかがですか？」

撫子にやんわりと止められてしまった。

叶としてはヴァルキリーの長として恐れているのではなく、2人きりを邪魔しちや悪いかなというばつの悪さで退室しようとしたのだが当の本人に呼び止められては去りようがない。

「失礼します。」

病室に足を踏み入れて扉を閉め、普段は折り畳んであるパイプ椅子を広げてベッドの足の方に座った。

「これも半場さんの導きかしら？偶然仕事に空きが出来てお見舞いに来たら貴女と会おうなんて、小説みたいに出来すぎね。」  
撫子はくすりと笑う。

それはなんとも上品で叶は思わず見惚れてしまった。

「陸君ならやりかねないですね。」

陸は意外とお茶目だったり意地悪だったりする。

悪意ではないが何か思うところがあってこの場をセッティングした、本来はあり得ないはずのそんな可能性を2人は当たり前のように信じていた。

それが半場陸という不思議な男。

「あ、花鳳先輩のお噂はいろいろ聞いてます。Wveの全国展開とか大ヒットだとか、テレビで見ました。」

これが八重花辺りだとジュエルの全国展開を警戒しての発言かと穿った見方をされてしまうのだが裏表のない叶の言葉はスツと人の心に染み込んでいく。

それが作倉叶の力なき力。

「ありがとう。Wveと言えば今日建川店で騒ぎがあったそうね。何か知らないかしら？」

本当に急ぎの用件の時は葵衣から連絡が行くこともあるが基本的には夜に報告を聞くことになっているためまだ撫子は”威乃戦徒美女”の存在を知らなかった。

だが叶がそんなことを知るわけもなく

(怒られるのかな!?)

と内心ビクビクして顔を青くし

(もしかして、見られてたかも!?)

今度は羞恥で顔を赤くした。

赤青と顔芸のように色を変化させる叶に撫子は不思議そうな顔をしながらも言及しなかった。

「ふふ、おかしいですね。」

「ごめんなさい、変な子ですよね？」

「そうではないわ。」

撫子は頭を下げる叶を手で制し、複雑な微笑みをベッドで眠る陸へと向けた。

「本来ならばわたくしと貴女は敵同士で、出会うのは戦場で、手には刃を担っていなければおかしいはずですが、今わたくしたちはこ

うして言葉を交わしている。」

「そう、ですね。」

叶は武器なんて使いたくないと思っただけでも襲われればオリビンで応戦することになる。

能動的か否かの違いだけで叶の存在も魔剣使たちと大差無いとも言えた。

武器を取らなければ対等に話が出来ない、セイントの力でジュエルを圧倒できるからこそ一目置かれている。

オリビンがなければ何の力もない自身の事を思い、叶は気を重くした。

「敵対する者と対話すること、それをわたくしはインヴィ…半場さんから学びました。」

しかし陸は一度として武器を手にしないままヴァルキリーと向き合ってきた。

あつたのは未来を見通す魔眼 Innocent Vision と半場陸という人間の意志だけ。

その眼と意志でもって陸はヴァルキリーと対等に、それ以上に渡り合ってきた。

「陸君は、すごい人ですから。」

叶の表情にわずかに笑みが宿る。

陸の作り上げた”Innocent Vision”のリーダーとして落ち込んでばかりいられないと自らを奮い立たせた。

「そう、すごい方です。未来視という力、人としての器、…そしてその過去。」

撫子の声のトーンが落ちるのを静かな部屋で叶が聞き逃すことはなかった。

撫子は酷く辛そうな顔で叶を真正面から見た。

「恐らくわたくしが今この場に居合わせたのはこのためでしょう。」

作倉叶さん、半場さんの過去を知りたいと思いますか？」

ドクン

叶の心音が跳ね上がった。

謎に包まれていた陸の過去、それはあの半場陸を形成したものに他ならない。

言葉が喉から出ない。

カラカラと渴いている感覚。

（陸君の、過去。）

それを思うだけで心臓の鼓動はその速度を増す。

「ただし、相応の覚悟をしてください。誰にでも語れる話ではありません。」

撫子がなぜその事を知っているのかということには何も感じない。

ただ陸をもっと知ることが出来るという思い、欲望が叶の中で渦巻いていた。

（陸君。）

叶は陸に目を向ける。

穏やかに眠る姿はこの半年一度として変わったことはない。

聞きたいことはたくさんあるのに陸は目覚めない。

今日の前に呈示された陸の過去という情報は叶の渴いた欲求を満たす事だった。

「…はい。お願いします。」

叶はそれが毒であると知りながらも欲望に抗うことは出来なかった。欲望に屈したことでセントであることは関係ない。

欲望の名は恋、叶はセントである前に1人の恋する乙女なのだから。

2人は話し始める前に休憩スペースに出て飲み物を買ってきた。

一度撫子の携帯に連絡が入ったが席を外して数分で戻ってきた。

撫子は叶の方を優先したのである。

「作倉叶さん。」

「叶で構いませんよ。」

撫子は少しだけ固まり、頷いた。

「それなら叶と呼ばせてもらいます。貴女は半場さんの過去をどれほど知っていますか？」

「亡くなった妹さんが居たことと昔からInnocent Visionがあつたことくらいです。」

こうして思い出してみればいかに陸の過去を知らないかを再認識させられた。

その隠された過去が今から聞かされると考えるとまた動悸が早くなつた。

「わたくしも聞いた話を調べて補足しただけですから全てが真実であるとは限りません。」

そう前置きをして撫子は膝の上に乗せた手をきつく握つた。

「半場さんは幼い頃から未来視の力を持つていたため、虐めを受けていたそうです。子供とは異質を極端に恐れるもの。わたくしたちのようにある程度大人と同じ程度にまで成熟した精神をもつてしても脅えるのですから子供が過剰に反応するのも無理はないでしょう。」

叶は目を伏せながら頷く。

何となく予想できていたことではあつた。

陸が他人と接するのを怖がっているように感じたことがあつたから。「でもご家族は何もしてくれなかつたんでしょうか？」

親が子を心配する。

普通の家庭で生活してきた叶は当然のように疑問を抱いたが撫子は憤りを抑えるために目を伏せた。

叶にはない、陸の親に対しての憎悪を。

「ご両親には虐待こそされなかつたようですが冷たく扱われていたようです。妹さん、半場海さんは普通に接しようとしていたと聞いていますが、周囲の人間が冷たい中で1人だけを信じると言うのは難しいでしょう。海さんとの関係もあまり良好とは言えなかつた

ようです。」

孤立無援という言葉が浮かんだ。

陸はずっと広く冷たい世界で1人生きてきたことを想像した。

(もし私のオリビンが同じように避けられる原因だったら…)

それを自分に当てはめようとしてみるが叶には想像すら出来ない。

温かな両親に大切に育てられ、心を許せる親友に囲まれて光の中で育った叶に闇に沈んで生きていた陸の境遇は理解できない。

叶はそれが悲しくて涙をこぼした。

「そして杏葉高校に入学した半場さんは入学式での事件を予知し、冤罪により1週間の停学処分を受けました。」

「1週間、ですか？陸君は1学期の間ずっと学校に来ませんでしたよ。」

叶の疑問に撫子の瞳に広がる悲しみの色が深まった。

一度言葉を紡ごうとして失敗し、飲み物で喉を潤した。

「半場さんが自宅謹慎になってしばらく後、…海さんがお亡くなりになりました。」

「ッ!？」

叶は口を押さえて驚きに目を見開く。

「何があつたのか詳しくは存じませんが、恐らくその死に半場さんが関わり、それが原因で不登校になられたのでしょう。それから登校されるまでインターネットの掲示板でInnocent Visionとして未来予知を書いていました。ヴァルキリーの美保さんがピエロという名で接触を図り、それが元で半場さんは再び登校してくるようになりました。」

「…花鳳先輩たちのお陰だったんですね。ありがとうございます。ちよつとずれた叶の感謝の言葉に撫子は曖昧に笑うだけ。

何しろその接触というのは味方にならなければ殺すという脅しだったのだから。

「後は叶もある程度ご存知の通り、半場さんは”Innocent Vision”を作り、ヴァルキリーと魔女との戦いを繰り広げ

ていくことになったのです。」

壮絶な陸の過去が語られた室内はすでに日が落ちていた。暗い室内にすんすんと鼻を嚙る音がする。

「ありがとうございます、ございました。話して貰えて、陸君の事を聞けて嬉しかったです。」

「構いません。…それに、まだ終わりではありませんよ。」

「え？でもそこから先は私が知ってることですよね？」

叶が意外そうに尋ねるのを撫子は目を合わせずに頷く。

「どのような戦いだったかをお話するには時間がありませんし、お話しするつもりもありませんから過去の話はこれで終わりです。

残ったのは今と、そして未来の話です。」

撫子は話すことを避けたい衝動に駆られたがその感情を抑え込んでまっすぐに顔を上げた。

これ話すことで叶がどんな反応を見せたとしても花鳳撫子の芯を揺らがせないよう決意を固める。

「半場さんがなぜここにいるのか、考えたことはありますか？」

「それは陸君が目覚まさないから入院しているんですよね？」

「そうです。しかし入院も無償ではありません。半場さんを蔑ろにしていたご両親がいつ目覚めるとも知れない、目覚めても関係を改善させるつもりのない彼の為に安くない入院費を払い続けると思いますが？」

酷く俗な話だ。

部屋の維持費や入院にかかる諸費用は突き詰めれば助けたいからこそ支払われる。

そして陸の両親にはその助けたいという気持ちが無かった。

叶も撫子が言わんとしていることを理解して目を見開いた。

「それじゃあ、…」

「はい。半場夫妻は半場さんを見捨てました。わたくしが今は後見人として半場さんの身柄を預かっている状態です。」

「そんな…」



叶は膝に目を落としてギョツと拳を握る。

これまで辛い過去を経験して、ほとんど誰にも知られることなく世界を救ってその代償で眠ってしまったのに、その間に両親に捨てられるなんて、あまりにも酷すぎた。

叶はまた涙を流す。

「わたくしは半場さんの親代わりとなり、彼が目覚めた暁には事実をお話しして花鳳に入っていたたくことを考えています。」

それは嘘だ。

撫子は陸の意思に任せるつもりでいる。

だが叶は”Innocent Vision”という敵対する組織のリーダーとして、そして陸が信頼する一人の女性として看過出来ない相手である。

撫子は自分が卑怯な振る舞いをしていることを自覚しつつ叶を陸から遠ざけるような言動を取っていた。

「……」

叶は俯いたまま黙っている。

撫子は判決の時を待つ心地で背筋を伸ばした。

「…ありがとうございます。」

叶から告げられたのは、感謝の言葉だった。

上げられた顔には一欠片の怒りも憎しみも浮かんではいない。

「なぜ、そんな言葉をわたくしに？」

叶はまだ目尻に涙を浮かべながらもクスリと笑う。

「花鳳先輩が陸君を助けていなければここには誰もいなくて、陸君はきっと消えていました。だから陸君を助けてくれた花鳳先輩に感謝しています。」

それが揶揄的な表現なのか叶の感じた何かなのかは分からないが撫子も言っている意味が理解できた。

撫子が助けなければ陸は皆の前から姿を消していた。

それは陸の Akashic Vision で定めた運命なのか、あるいは撫子が救いの手を差し伸べたことこそが仕組まれた事なのか、

それは分からない。

「それは確かにそうかもしれませんが、半场さんの将来はわたくしが握っているのですよ?」

叶はさつきよりもおかしそうにクスクスと笑う。

不快ではないが余裕を見せられて撫子としては面白くない。

「陸君がそれで素直に言うことを聞くとは思えません。陸君はとっても強い人ですから。」

叶には撫子の虚勢も嘘も通用しなかった。

見破られたわけではない。

ただ叶が陸という人間を正しく捉えていて惑わなかっただけ。

呆気にとられた撫子が反応を示せずにいると叶は立ち上がった。

「本当にありがとうございます。もう遅くなってきましたし帰ります。」

「家まで送らせましょう。」

撫子の申し出を叶は首を横に振って遠慮する。

「大丈夫です。さようなら。」

叶は会釈をして陸の病室から去っていった。

撫子はふうと大きなため息をついて額に手を当てる。

葵衣もかつて”Innocent Vision”をヴァルキリーに引き込む交渉のときに叶の素直さに負けたと言っていたことを思い出した。

「…さすがはセント、清らかな心の持ち主ですね。すみません、半场さん。」

陸の境遇を交渉の材料としようとしたことを謝罪し、撫子も病室を後にした。

## 第62話 気が付けば

その日、教室は異様な雰囲気を漂わせていた。数人の生徒が1つの机を囲み、他の生徒も遠巻きに事の推移を見守っている。

彼ら、特に机を取り囲んだ面々の形相は鬼気迫るものがあつた。

「さあ、出すもの出せば楽になれるわよ。」

その筆頭は久住裕子。

言動からして悪役だ。

「ふえ、何なの？」

そして目をギラギラさせた集団に囲まれた叶は涙目だった。

それはテストが迫つたある日の朝のホームルームで発生した。

「今回赤点が2つ以上の生徒には夏休み中の補習が強制となります。」

それは大半の生徒にとっては気を付けなまいとという程度の些事だが、成績の底辺を走る者たちにとっては死刑判決と言えた。

しかも今回は学期末試験で出題範囲が中間試験よりも広い。

一朝一夕の一夜漬けでどうにか出来るレベルではなかった。

彼らは探した。

テストの出題範囲を網羅し、テストの出そうな山を張れる優れた情報源を。

そして目をつけたのが叶だった。

「叶、私たちを助けると思ってノート貸して！」  
裕子は頭を下げる。

率先して裕子が動いたせいで他の生徒も叶に群がってきたので、裕子には良くも悪くもリーダーシップがあると言えた。

「えーと、こう言うのは自分の力でやらないと…」

「そんなテンプレートなお説教は八重花で聞き飽きたわ！」

「はう！」

正論だったか耳にたこができるほど聞いてきた裕子にはむしろ馬の耳に念仏だった。

「うーん。」

叶は尚も渋る。

裕子は目を潤ませて叶に詰め寄った。

「叶、私たち友達よね？」

「友達だよ。だから今のうちから勉強しておかないと来年大変だと思っ。」

グサッ

無数の矢印が空から飛来して赤点組に突き刺さった。

中にはダメージのあまり崩れ落ちた者もあり

「しっかりしろ、死ぬな！」

「俺の代わりに…お前は、テストで生きろよ。ガクッ。」

と小芝居して叶の同情を誘おうとする涙ぐましい努力も見られた。

尤も叶は見ていなかったが。

「それは…今回のテストを乗りきったらやるわよ！」

「それはどうかね？」

割って入ってきたのは中の上くらいの成績の真奈美だった。

裕子がムツと眉を寄せて真奈美を睨む。

「どつという意味よ？」

「裕子に関して言えばテストを乗りきれたら解放感で遊び回るだろうから、勉強どころか宿題も危ない状況になるのは毎年のことだからね。」

「うっ。」

裕子は苦しげに胸を押さえて呻く。

伊達に長年付き合いがある訳ではなく行動は読まれていた。リーダーである裕子の敗北に場の雰囲気も沈静化していく。

「ごめんね、裕子ちゃん。」

叶の謝罪に裕子はガクツと頭を垂れ、攻略本入手は失敗となった。チャイムが鳴り、皆が散り散りに去っていくなかで裕子はまだ瞳に炎を燃やしていた。

「絶対に諦めないわ。どんな手を使ったとしても。」

次の休み時間、お花を摘みに出た叶は教室への帰り道で廊下の柱の陰から手招きをする裕子を見掛けた。

「裕子ちゃん、どうかしたの？」

叶が近づいてくるのを見て裕子はニヤリと笑った。

「叶。実は私、凄くいいものを持ってるんだけど、見たい？」

裕子は右手に持った携帯を揺すって見せる。

「凄くいいものって何？」

叶は特に警戒した様子もなく尋ね、裕子は内心

(掛かった！)

と喜んだ。

一応携帯には何かの時のために隠し撮りしておいた陸の写真が納められている。

これを利用してノートと交換しようという腹積もりだ。

「半場くんの隠し撮り写真。」

正直に告げれば叶が写真欲しさに飛び付いてくる、そう考えていたが叶はむしろ悲しげだった。

(半場くんが寝たきりなのを思い出させちゃうから逆効果？)

自分の失策を悔やむ裕子は突然叶に手を握られて驚いた。

「…裕子ちゃん、盗撮は犯罪だよ。今からでも遅くないから自首し

「よう？」

そして叶の中では犯罪確定という大事に発展していた。

「ちよつと、叶！？違つたのよ？」

裕子は慌てて振りほどこうとするが特訓でパワーアップした叶からは逃れられない。

「私たち、友達だからね。」

叶は涙を浮かべて何度も頷いている。

本気で心配してくれているのが分かり裕子もグツと来るものがあったがハツと我に帰って叫んだ。

「だから違つたのよー！」

こうして作戦は失敗に終わり、誤解を解くのに次の休み時間まで掛かってしまった。

「駄目だわ。叶は意外と頑固だから簡単にはいかないみたい。」

一年くらい前の引つ込み思案な叶だったならあれだけ大勢に囲まれば怖がってノートを渡していそうなものだったが今ではすっかり逞しくなっていた。

親友としてはそれが喜ばしくもあり、今回に限って言えば疎ましい。

「おのれ半場くんめ。叶を変えちゃってくれちゃって。」

しかし陸に文句を言うのは筋違いだし、たとえ陸が原因だとしても変わった叶が元に戻るわけでもない。

「やっぱり1人じゃ難しいわね。ここは仲間、同志、魂の同胞を連れてくるしかないわ。」

裕子は休み時間になるや否や久美の席に向かう。

同じく底辺組の久美ならば一緒になって叶を説得してくれると考えたからだ。

「久……」

席に座っている久美に声をかけようとした裕子は片手を挙げたまま硬直した。

久美の机の上にはノートと教科書が広がっていて前の座席の生徒と勉強していたのだ。

「く、久美、さん？何を、なさつて、いらっしやいますの？」

片言で口調までおかしくなった裕子に声をかけられて久美はノートから顔を上げた。

「にははは、裕ちゃん。お勉強だよ。」

笑顔は今までのちよつとアホっぽい久美のままなのにその行動が今までと違う。

「どうして？」

今さらながら朝に叶の席に集まったとき久美の姿がなかったことに気が付いた裕子は恐る恐る尋ねる。

「にはは、塾に行かなくてもいいようにちゃんとお勉強しないとお母さんたちが心配しちゃうから。」

久美が塾で大変な目に会い、八重花たちがそれを救ったことは聞いていた。

久美はそれから少しずつ自分で勉強をするようになっていたのである。

両親と、優しい親友たちに迷惑をかけないために。

「にはは、それでなに？」

「あ、ううん。良いのよ。」

裕子は手を横に振りながら後ろに去っていく。

久美はそれを不思議そうに見ていたがまた勉強を再開した。

（駄目だわ、私。）

裕子はテスト前だというのに授業もろくに聞かずに頭を抱えて落ち込んでいた。

それは久住裕子の在り方について。

今を楽しく過ごせればいい。

それだけを軸に今まで生きてきたようなものだったが、いつの間にか周りに置いていかれているような気がしてきた。

叶は見違えるほどに内面が強くなったし、真奈美も足のハンデをものともせず学生生活をしている。

久美は勉強の大切さを知ったようだし、八重花もいろんな意味で変わった。

（八重花も叶と同じで1年前までは目立つような子じゃなかったのよね。）

あの策士ぶりは変わらないがそれは水面下で進行させていたし、どちらかと言えば裏で暗躍するような質の人間だったはずだ。

だが今は多少悪い意味でだが校内で知らない者はいないだろうと言えるくらいに知名度がある。

やはり八重花も変わっていた。  
（私だけ何にも変わってない？）

とにかく騒いで、テストの度に誰かにすがって、その場その場の楽しい方、楽な方へと生きてきた。

自分だけが立ち止まっていてみんなは歩いていく。

…気が付けば周りには誰もいなくて、1人取り残されている。

「ッ！」

ガタンと音を立てて立ち上がる。

そのまま座っていたら嫌な想像が加速していきそうだった。

「どうした、久住、居眠りか？」

「あ、ええと、あはは、そういうことにしといてください。」

裕子は苦笑いを浮かべて席に座り直した。

それでも気付いてしまった事実は拭えず、裕子の表情は冴えなかった。



「やっぱり裕子ちゃんにノートを貸してあげた方がいいかな？」  
昼休み、叶は裕子を食事に誘ったが落ち込んだ様子で断られた。  
今は”Innocent Vision”の面々と昼食を摂っているのだがやはり裕子の事が気にかかっていた。

「駄目よ。」

八重花は特に事情を聞くでもなく否定した。

厳しいが裕子のためを思つての発言だと分かっているので叶も不満げに箸を銜えるだけで反論はしない。

「それに裕子がテストのことで落ち込むとも思えないわ。きっと別の事よ。」

見てもいないのに鋭い八重花。

叶は納得いかない顔をして箸を進めていた。

「テスト勉強、確かに面倒だな。」

由良がコロツケサンドを咀嚼しながら顔をしかめる。

「でも由良先輩は去年も同じ授業受けてたんですよね？」

「まあな。ただ2学期入ってからほとんど何も聞いてないから余裕ぶってられるのも1学期だけだ。」

そうは言つても由良に悲壮感はない。

由良は別に頭が悪いわけではないのでやる気さえあれば勉強はそれほど苦ではなかった。

「持つ者に持たざる者の苦悩は分からない。またその逆も然り。ここにいるメンバーでは多分裕子の悩みを助けてあげることが出来ないわ。」

救いはないと八重花は切り捨てて食事に集中してしまった。

叶はムーツと難しい顔をする。

叶はなんとか裕子を救える手だてを必死に考えていた。

(やっぱり私が勉強を教えるしかないかな?)

かつて陸が皆を巻き込んで数学の勉強をしたときのように、今度はそれを叶がやろうと考えていた。

1人では辛いことも皆でやれば乗り越えられると叶は思うから。

食後、叶は計画を実行しようとして一足先に教室に向かっていた。

「ここにいたのか。」  
声をかけられたのはその時だった。

放課後を迎えた。

部活が休みになり、教室や図書室で勉強する者と帰ろうとする者に別れていた。

「私はここにおいても場違いなだけだし、帰ろう。」  
とことん自虐的になってしまった裕子は重い足取りで教室を後にした。

学校の喧騒が遠く、世界に自分だけが取り残されたような気分でのそのそと歩く。

(このままどっかに消えちゃおうかな?)  
そんなことまで考えていた裕子は昇降口に差し掛かりガシツ

「ッ!？」

突然手を掴まれて声にならない悲鳴を上げた。

ぼんやりとしていた意識が一発で覚めて振り返ると憤然とした芳賀雅人が裕子の手を掴んでいた。

「雅人くん？」

芳賀は何も答えず手を握ったまま昇降口から離れるように歩き出す。まだ昇降口に向かう学生が手を握って歩く2人を見てニヤニヤしたり嫌そうにしたりと反応を示すのを見て裕子は恥ずかしくなってきた。

「ちよつと大胆な誘い方ね。」

茶化してみるが雅人は無反応。

そのままどどん奥に向かつてついには人気のない空き教室にまで来てしまった。

何故か部屋の鍵が開いていて雅人と裕子は部屋に入る。

教室の中央の席に座らされた裕子は正面でムツとしたまま腕を組んでいる芳賀が何をしたいのか分からず困惑していた。

「人気のないこんな場所に連れ込んで何する気なの？ 雅人くん、やらしい。」

いつもならツツコミを入れてくれる雅人が無反応で裕子はちよつと泣きそうになった。

見られないように俯く。

「…やるぞ、裕子。」

「はい！？ さ、さっきのは冗談でこんなところで…」

裕子は真つ赤になりながら顔を上げ、芳賀が勉強道具を並べているのを見て固まった。

「どうして俺に相談しないんだよ？ 確かに俺は頭良くないし頼りないかもしれない。」

「そんなこと、思っていないわよ。」

それでも芳賀を頼らなかつたのはつまりはそう言うわけで、裕子の反論は弱い。

芳賀はドンと自分の胸を叩いた。

「だから俺と一緒にやろうぜ。同じくらいの頭ならきつと一緒に理解していけるからさ。」

「っ！」

裕子は芳賀の顔が輝いて見えて直視出来なかつた。

「ふんっ、私の本気を出せば雅人くんなんてすぐに置いてきぼりなんだから。」

照れ隠しに精一杯の強がりを書いて、2人は笑いあった。

その様子を窓の外から眺める6人の姿があつた。

「叶さんの御友人に災いありと出ていましたが、解決されたようですね。」

「芳賀君が頑張ったからです。やっぱり彼氏さんは凄いですね。」

「まあ、モブにしたらよくやった方ね。」

何だかんだで裕子を心配していた八重花もホッと安堵する。

由良は仲睦まじく勉強する2人を見て

「今は大人しく勉強やってるが、それが終わったらやるのか？」

「ぶっ！」

由良の下品な話題に八重花が噴いた。

叶と明夜はポケッ、真奈美と琴は顔を赤く

「由良、あんた馬鹿でしょ!？」

「クック、そういうヤエコそ耳年増だな。」

心優しき裕子の友人たちは姦しく去っていった。

### 第63話 風と太陽

『ガガ：こちらマロー。グリーン、応答してください。』

ディスプレイを光源とした暗い部屋にノイズの混じった声が響く。グリーンと呼ばれた人物は双方向通信の無線機がリンクしていることをチェックしてからディスプレイを確認する。

「こちらグリーン。異常はあった？」

『はい。時刻0231、オーを確認しました。』

接続時の一時的な電波ノイズも高性能なだけにもう消えていた。

まるで通信先にいるかのようなクリアな音質は

『オーツ！』

吼える異形の怪物の声を拾っていた。

「こちらでも確認したよ。」

グリーンが見ているのはディスプレイに映し出された壱葉周辺の地図だ。

マローを青いポインターとしたとき周囲3キロ圏内に3つの赤い点が表示される。

「北2キロに1つ、南西と東1キロ範囲内に1つずつだね。」

『こちらマロー。目視での確認と一致しました。』

これは調査団ごっこではなく衛星による監視システム『オブザーバー』の運用試験である。

その性能を調べるため深夜にオーが出現するという噂の実証を兼ねて海原姉妹は深夜に活動しているのだった。

ちなみにマロー、グリーンはそれぞれ葵と緑から取ったコードネームである。

超高精度のカメラを搭載した衛星の撮影した映像をリアルタイムで緑里の見ている画面に投影する装置で、理論上は地上を歩く蟻さえ識別できるスペックを誇る。

元々はただ、本来は一個人がどうにか出来る代物ではなく、花鳳と

言えど勝手に扱っていいわけがなかったがそこは葵衣がなんとかした。

相変わらずのスーパー使用人ぶりである。

今回葵衣が現場、緑里がオペレーターを務めているのは葵衣しかシステムを使えないと万が一の事態が発生したときに不具合が生じるためである。

「システムは良好。あとはオーとの戦闘データをどれくらい取れるかだけど、やれる？」

「その判断を下すのもオペレーターの采配ですよ、姉さん。」

ヴァルキリーにおいて本部オペレーターは索敵から被害状況把握、戦術指定までオールマイティーにこなせなければならない。

主な作戦指示は撫子のようなトップが出すがそれを踏まえた上で軍を動かすのはオペレーターの役割なのである。

「うん。…それじゃあ、こちらグリーン。マロー、敵勢戦力オーとの交戦記録を取るため接触して。」

「マロー了解。これより南西の個体との接触を図ります。オブザーバーの監視システムのチェックを密に。撤退指示のタイミングはお任せします。」

「うう、それはむしろオペレーターの台詞じゃないかな？」

的確な指示に緑里が情けない声を上げると葵衣は無線の向こうでクスツと笑った。

葵衣はエルバイトを手にゆっくりと南西のオーに向かっていた。

オブザーバーの観測を疑うわけではないが不測の事態に備えてエアコートを身に纏いゆっくりと近づいていく。

オーは屋根の上において遠くからでも見つけやすい。

住宅の陰に隠れながら接近していくが500メートルを残して真っ直ぐな道に出た。

(発見されるのを覚悟の上でこの道を行くか、あるいは大きく迂回するか。)

これまでのオーとヴァルキリーとの交戦経験からすれば飛び出していても勝利できると考えている。

だがそれとは別に武道を修練してきた葵衣はある種の危機感を抱いていた。

ちょうど良いので緑里に意見を聞こうとした葵衣は

ボガンツ

背にしていたコンクリートの壁が砕かれた音に素早く反応した。

エアコートの察知した強烈な空気の乱れから逃げるように横に飛んだため被害はなかった。

『葵衣!』

ものすごい音に緑里がコードネームを忘れて叫ぶ。

「問題ありません。今の攻撃を捕捉できましたか?」

今重要なのは葵衣の安否ではなくシステムが捉えられたかどうかだと葵衣本人が考えていた。

『葵衣が向かってるオーに動きはあったけどどんな攻撃だったのかは映ってないよ。』

「写っていない?」

それが視認できない攻撃、あるいは不可視のオーだと考えるのは早計だ。

葵衣は危険を承知で壊れたブロック塀から顔を覗かせ

「ッ!?!」

咄嗟に引いた。

バゴン

さっきと全く同じ攻撃が葵衣の顔のギリギリを抜けていき、強風を叩きつけられた。

「今のはどうです?」

『やっぱりだめ。解析感度を上げてみたけどオーが動いてから10フレームくらいで地面が爆発してる。何が起こってるのかまでは映

つていないよ。もしかしたら見えない敵が近くにいるのかもしれない。』

緑里も不可視の敵の可能性に気付いて注意を促したが葵衣は別の琴を考えていた。

（私が感じたあの風。あれは空気の層を物体が無理やり押し退けていく衝撃波。）

「姉さ…グリーン。敵の最大望遠画像を入手してください。目視での確認が確実ですが今頭を出せば首から上が吹き飛ばされかねません。」

冗談ではなく実際にブロック塀を一撃で砕く威力なら頭を吹き飛ばす威力がある。

『ちよつと待つて。…出た。なにこれ、腕の形が手じゃなくて…上からじゃよく分からないけど、筒っぽい感じ?』

音声だけで正確な情報を伝える能力は改善の余地ありと判断したが今回は今の情報で十分事足りた。

（筒、つまりは砲身ですね。やはりあれは弾丸でしたか。）

葵衣は感じた風と見えなかったという点、そしてオブザーバーでも観測できなかったことからそれを導き出した。

1フレームは1秒の1/30、0.035秒程度。

500メートルを15フレームだとすれば約秒速1キロ、1秒の半分で500メートル飛ぶ弾丸となる。

それより速い可能性もあるだけに

（人間にに対応できる速度ではありませんね。）

相手の力を認めつつも葵衣は現状を悲観していない。

「グラマリー・エアブーツ。」

渦を巻くようにエルバイトを小手先で回すと小さな竜巻が生み出された。

葵衣がその竜巻に足を踏み入れると、竜巻は葵衣な足を取り巻いた。ウインドロードの代用として編み出した高速移動用のグラマリーである。



瞬間移動と呼べるほどの速度はなく移動距離も長くはないが瞬発的な速度はウインドロードにも匹敵する。

「果たしてこれで超えられるでしょうか？音速の先にある世界を。」  
葵衣は風を踏み締めるように一歩を蹴り出した。

次の瞬間、弾丸のように跳ぶ。

ウインドロード同様速すぎるスピードは旋回を許さない。

塀の陰から飛び出した瞬間、葵衣の髪を漆黒の弾丸が掠めていった。

『…マロー…』

緑里の声が無線機越しに少し遅れて聞こえたが返事をする余裕はない。

眼前には向かいの家の塀があり、このまま進めば肉ミンチ確定である。

葵衣は滑るように移動しながら右足でもう一度地面を蹴った。

葵衣の足は加速して飛び蹴りのような体勢に変わる。

葵衣は滞空しながらも視線を500メートル先の家の屋根に向けた。左腕を砲身としたオーが一射目が外れたことに気付いて葵衣に照準を合わせようとしていた。

（弾丸だけでなく反応速度もありますね。）

葵衣はあくまで冷静に塀へと着地する。

風のクッションと屈伸で完全に勢いを相殺し、塀を足場として再びエアブーツで跳躍した。

塀は軋みの一つも上げることなく、直後に着弾した弾丸により破砕された。

エアブーツはルビナスのように足の力を強化するグラマリーではなく風で葵衣の動きを速めるもの。

だから塀自体は葵衣が蹴り飛ばしたのと変わらなかった。

葵衣は塀や電信柱、時には家の壁を足掛かりにしてジグザグに前進していく。

『葵衣…反応が…変…』

電波の通信速度が不安定なのは電波の飛来方向に近づいたり遠ざか

ったりを繰り返しているからだ。

その中で葵衣は緑里の放った単語を考える。

（反応が変。私に対してでないとしたら…エアコート！）

葵衣は懸念を証明するために電信柱に着地すると同時に広域にエアコートを展開した。

範囲を広げるほど効果は低下するが今はこれで十分だった。

葵衣が一瞬足を止めた瞬間、空気の壁を突き破る弾丸の飛来を感知した。

その数、3つ。

葵衣は電信柱は強く蹴って狭い路地に飛び込む。

一瞬遅れて電信柱の中段が粉々に砕けて崩れ落ちた。

引つ張られた電線が火花を放ち一瞬間を明るく照らし出す。

いつの間にか北と東にいたはずのオーが接近してきていた。

（初めの布陣で気付くべきでした。オーは初めから私を包囲するつもりでしたか。）

『葵衣、平気？』

「マローですよ、グリーン。」

こんな状況でも葵衣は律儀に訂正する。

『そんな事言ってる場合じゃないよ！囲まれてるよ。』

最初標的としてきたオーとの距離は200メートル程度まで詰めてきた。

接近すれば危険は増えるが1体の撃破はそれ以上に有益となる。

特に囲まれたとなれば一番近い敵を倒して突破口を開くのは定石と言えた。

「エアコート広域展開。防御を無視して知覚強化。」

不可視の風が広がり、まるで葵衣の触覚が増えたように感じた。

すべてのオーの動きが分かる。

それらが葵衣のいる物陰を吹き飛ばそうと照準を合わせていることが。

「エアブーツ。」

葵衣は路地に置いてあったプラスチック製のゴミ箱の蓋を手に取り、と真上へと飛び上がった。

葵衣が抜けた路地は射出された弾丸で無惨な姿へと成り果てた。だが葵衣の危機が去ったわけではない。

むしろ遮蔽物のない空中は格好的。

手にしたポリバケツの蓋は盾にもなりはしない。

3つの砲身が正確に葵衣を捉える。

逃しようのない空間攻撃にオーの紅色の目がニヤリと笑うように細まった。

バンツ

全力をもって撃ち出された弾丸が空気を叩く音、そして空中で無惨に散ったものが砕けた音がほぼ同時に聞こえた。

上空からプラスチック片が降ってくる。

その自由落下よりも速く、葵衣は一番近いオーに向かって急降下していた。

ポリバケツの蓋を足場としてエアブーツで前に跳んだのだ。

脚力強化ではないからこそ出来た回避方法を葵衣はそのまま攻撃へと転じた。

(砲撃型オーは弾速は速いですが連射性は低い。)

葵衣は相手の次弾発射よりも早く斬り伏せるために敢えてまっすぐにオーに向かえる空中に身を晒してカウンターを狙ったのだ。

オーは避けられたことに気付いてすぐに銃口の修正をしたが、葵衣はエルバイトを前に突き出して自らを1本の矢のようにしてオーを貫いた。

「オーッ！」

オーが断末魔の叫び声を上げて消滅する。

だが葵衣はすでに残り2体が発射体勢に入っていることをエアコートで知っていた。

そして避けられないことも。

(弾丸の進行方向に跳躍すればあるいは即死は免れる可能性もあり

ます。)  
傷を負う覚悟を持ちながら生き残るために葵衣は抗おうと足に力を込めた。

オーが足を固定して自らを砲台と成し、そして

陽光の輝きが2体のオーの背中に直撃した。

「オツ!?!」

「あれは!?!」

『この反応は!』

全員が驚く中

『こちらピンク。グリーン、マロー、応答なさい。』

双方向通信機に2人のよく聞き慣れた声が響いた。

「お嬢様!」

『撫子様!?!』

葵衣は目で、緑里はオブザーバーを使つて見た。

両手で錫杖アヴェンチュリン・クォーザイトを構えた花鳳撫子が悠然とオーの向こうに立っていた。

『オブザーバーの試験の話を聞いて見学するつもりでいたのだけれど、予想以上に大変な事になっているようね。助太刀するわ。』

「オー!」

新たな敵の出現に一体のオーが振り返つて撫子に銃口を向けた。

『撫子様!』

『目に見えない程に速い弾丸ね。ですが…』

オーの攻撃の直前、撫子はジュエルの中心を持って大きく回転させた。

ダンッ

空気を震わせる発砲が響き

『太陽の壁を突き破れは…しなかったようですね。』  
ジュエルが形成した光円の壁が衝突してきた弾丸を端から消滅させた。

『今度はこちらから行きます。サンスファイア!』

撫子が光の壁をジュエルで突くと無数の光の弾丸が一斉に前方へと飛び出した。

速度は劣るが圧倒的な数で迫る光球の壁に

「オー!」

オーは飲み込まれて消滅した。

「オ、オー。」

最後に残ったオーは両側を交互に見た。

片や速度で弾丸を回避する葵衣、片や弾丸を防ぐ光を放つ撫子。

どちらに背を向けても背中から攻撃される状況に

「オオーッ!!」

オーは絶叫すると右手も砲身に变化させた。

同時に両側へと砲口を向け

「エアブーツ!」

「ソーラーフレア!」

それよりも速く駆け込んだ葵衣に左腕を落とされ、右腕も撫子のレーザー光に焼かれて壊れた。

結果が解かれ、騒ぎを聞き付けて周囲の家の中から騒ぐ声が始めていた。

電信柱が折れて停電しているのだから騒ぎにもなる。

葵衣と撫子は合流すると見つかる前に素早くその場を離れた。

撫子が待たせていた車に乗り込んで葵衣は一息つくると葵衣は振り向いて撫子に頭を下げた。

「お手を煩わせてしまい申し訳ございません。しかしなぜコードネームがピンクなのですか?」

撫子は微笑む。

「撫子は英語でピンクと言っからよ。」

## 第64話 守るもののために 前編

叶は家でテスト勉強をしていた。

シャーペンシルの芯をカチカチと出していたらポトリと落ちてしまった。

「あー、芯換えないと。」

筆箱に手を伸ばし中身を漁っていくと底の方に芯の入ったケースがあった。

取り出して蓋を開け、逆さまにして…何も出てこないことに気が付く。

横から覗くと黒い芯が1本も入っていないかった。

「もう無くなってる。これがないと勉強できないよ。買いに行かなくちゃ。」

途中で切り上げたくなかったが他のペンもないので諦めて買いに出ることにした。

叶の家からコンビニと商店街の文房具屋は正反対に等距離くらいだった。

叶は家の前で立ち止まって迷う。

「商店街の方がいっぱいありそうだけど迷っちゃいそうだし他のお店にも目移りしちゃうそう。やっぱりコンビニに…」

「あ、叶、まだそこにいたの。悪いんだけど商店街に行くなら油買ってきてくれる？揚げ物にしようとしたら足りなかったの。」

「…うん。」

決意した直後の方向転換にやるせなさを感じながら叶は商店街に向かって歩き出した。

この時ちゃんと断っておくべきだったと、叶は運命の分岐点について後に語ることになる。

買い物はスーパーでサラダ油を、その後文房具屋でシャープペンシルの芯を買って終了した。

折角商店街まで出てきたのだから見ていこうという心の嘯きに打ち勝って家に向かっていく。

「揚げ物って言ってたけどエビフライかな？」

叶は好物のエビフライを思っただけにやんと笑う。

端から見ていると微笑ましいか、ちよつとアホの子っぽい。

そういう意味で叶は目立っていたと言える。

「あ！」

そんな声が聞こえてきて叶は意識を前に戻した。

進行方向には壱葉高校の制服を着た女子2人が立ち止まっていたが叶の知っている相手ではなかった。

驚いているとも怒ってるとも言える顔をしているので振り向いてみるが後ろに2人がそんな顔をしような人はいない。

「？」

叶は首を傾げながら歩を進めてそのまま2人の横を通りすぎようとして「ちよつと、何無視して行こうとしているのよ!？」

「え、私ですか？」

怒鳴るように呼び止められて改めて見てみるがやっぱり知らない人だった。

「人違いじゃないですか？」

叶がそう尋ねると呼び止めてきたショートヘアの少女の目がつり上がった。

「見間違っわけないでしょ!？あなた、…」

「麻子、ここでは。」

もう1人の髪がストレートに長くて大きめの眼鏡をかけている方の少女は冷静なようだったが叶を睨み付けるように見ている点は変わらない。



麻子と呼ばれた少女は苛烈な感情を無理やり押し込めて腰に手を当てた。

「ちょっと付き合いなさい。」

さすがに勉強したいから帰りたいと言える雰囲気ではなく叶は訳も分からないままついていくしかなかった。

夕方の人で賑わう商店街から少し裏に入ると途端に閑散とした様相に変わった。

だが前に行く2人はそこからさらに人が近づかないような場所を探すように歩き回り、結局寂れた公園に落ち着いた。

周囲は灌木が無造作に生い茂っていて視界も悪いしそれほど道が大きくないので車の通行もほとんどなく、人も歩いている様子はなかった。

人気がない場所まで連れてこられた叶はもう一度首を傾げる。

「それで、お2人はどちらさまでしょう？」

それを聞いてこの状況に持ち込んで優位に立っていると思っていた麻子の笑みが一瞬で消えた。

もう1人の少女も眼鏡を指で押し上げる仕草で不快感を示す。

「そう、そうよね。あなたは私たちなんか知らないでしょうよ。」

「だけど私たちは知ってる。だってわたしたちはジュエルだから。」

「あ、そうなんですか。」

正体の決定的な提示に対して叶の反応はあまりにも淡泊だった。

そうは言っても叶にとってジュエルはヴァルキリーの下部組織とは知っただけでも内情には詳しくないし直接戦闘したこともないので特に何も感じなかったのだから仕方がない。

だが麻子たちはそれを見てさらに気配の剣呑さを増す。

「何よ、その気のない反応は？もっと驚いて怖がりなさいよ。」

「ええと、ごめんなさい。」

叶の態度になけなしの理性で依り集めた堪忍袋の緒がささくれ立って千切れかけていく。

麻子が暴れだす前に相方が羽交い締めした。

「離しなさい、伊鞠。何か無茶苦茶腹が立つからぶん殴りたい！」  
「抑える…必要はない。」

伊鞠はそう言っつて麻子を離すと叶の前に歩み出て左手を前に突き出した。

麻子も並んで同じように左手を突き出す。

「よくも建川のジュエルをやってくれたわね。」

「ヴァルキリーの皆さんが相手をするまでもない。私たちが倒す。」

「ジュエル！」

橙色に近づいていく世界の色を朱色に染めて人の造りし魔剣が現世へと顕現した。

麻子は幅の広めの両刃剣、伊鞠は細身のサーベルだった。

「建川ジュエル…」

叶はその単語で特攻服姿を思い出してしまい顔を真っ赤にした。

琴が大興奮でデジカメラを撮りまくったことも叶の羞恥に拍車をかけていた。

突然顔を真っ赤にしながら身悶えし出した叶にさすがのジュエル2人も面食らった。

「…お2人ともあの時建川にいたんですか？もしそうだとしたら、残念ですが私はあなたたちを倒さなければなりません。」

叶は鬼気迫る様子で、その背中から凄まじいオーラが滲み出しているようにジュエルの2人は感じた。

「わたしたちは建川にはいなかった。でもそんな脅しには負けない。」

「Innocent Vision”のリーダー、覚悟！」

ジリジリと詰め寄ってくるジュエルに対して叶は恐れていなかった。  
(どうやったら戦わないで帰れるかな？)

そんなことすら考えていたがふと見上げた視線の先、屋根の上に漆黒の異形、オーが立っているのを見て叶は背筋を震わせた。

「ッー」

叶は直後反転して駆け出した。

「逃げるの!？」

「追いかける。」

麻子と伊鞠は叶の予想外の行動に呆気に取られたがすぐに気を持ち直して追跡を開始した。

叶はジュエルではなくオーに気配を配る。

(追いかけてくる。やっぱり狙いは私なのかな?)

この場で結界を張らない理由は不明だが今は逃げることだけを考える。

ジュエルを戦いに巻き込まないために。

「このっ、待ちなさい!」

「逃がさない。」

叶は必死に逃げるが身体強化されたジュエルを引き剥がすことはできなかった。

それでも人通りが多い場所に出ればジュエルを隠さなければならないためたただの鬼ごっこに変わる。

叶はうまく路地に入って2人の視界から隠れた。

このまま離れていってくれればあとはオーを何とかすればいい。

「あれ、かなちゃん？」

だがすぐに見つかってしまった。

尤も相手はジュエルではなく

「久美ちゃん。」

親友だったが。

叶はどうしたものかと悩み、思い付くともものすごく真剣な目で久美を見た。

「久美ちゃん、お願い。この荷物をうちに届けて。私はもう少し行かないといけないうところがあるの。」

「には、いいよ。」

さすがは親友、疑う様子もなく二つ返事で承して荷物を受け取った。

「あ、いた！」

「ごめんね。ちょっと急ぐからまたあとでね。」

路地に向かって話している久美が目立ったらしくすぐに叶は発見されてしまった。

急ぎ挨拶を終えて叶は再び駆け出す。

その後を追っていく2人のジュエルを見送った久美は

「にはは、鬼ごっこなんてかなちんも子供だね。」

とても朗らかに解釈して叶の家に向かっていった。

「オオーツ！」

天地を震わせる咆哮が響き黄昏の空が凍りつく。

”人”が消え去り人ならざる力を持つ者だけが取り残された。

「これは!？」

「オーの力。」

ジュエル2人も結界に取り込まれたが以前体験していたためすぐに落ちていてジュエルを構えた。

「ジュエル!」

「来て、オリビン。」

叶もオリビンを構えて警戒する。

それは正面から堂々と現れた。

右腕には体から生じた漆黒の刃。

左腕には砲身を備えた新種のオーだった。

「見たことない形。でも明夜ちゃんが言っていた射撃型に似てる。」  
右腕の剣がなければそのままだが叶は妙にその右腕が気になっていた。

「オーッ！」

10メートルほど離れたところで立ち止まったオーは左腕の砲身を叶に向けて叫んだ。

「オリビン！」

咄嗟に叶はオリビンを盾にする。

砲口から放たれた弾丸は一瞬にして叶に到達し、オリビンの放つ光の防壁に反発して明後日の方向へ飛んでいった。

これが普通の射撃型なら次撃発射のための隙をついて接近すれば相手は無防備になる。

だが

「来た！」

オーは射撃の余波で砲口から煙を噴く左腕を振るうとそのまま右腕を振りかざして接近してきた。

叶は相手から目をそらさず動きを見極めて刃を捌く。

受けるのではなく捌くのは意外だったのかオーは追撃せず一度距離を取った。

叶は呼吸を落ち着かせてオーに意識を集中させる。

（動きはこれまでのオーとあまり変わってない。左手の飛び道具に気を付ければなんとかなる。）

これまでの戦闘の経験は着実に叶の度胸へと繋がってきた。

攻撃を捌く技法は明夜から、未知の敵の能力を分析し、戦力差から行動を決定する判断力は八重花から得たものだ。

” Innocent Vision ”の皆が叶に力を与えていた。

「オーッ！」

オーが剣を体に巻き付けるように左に構えながら突撃してくる。

斬撃は叶から見て右下から来ることになる。

右手で握るオリビンをさらに右寄りに構え

「オオーッ！」

その開いた叶の左側に向けてオーが弾丸を放った。

「うっ！」

砲口が動いた直後に反応してオリビンを左へ寄せたが正面からぶつけるのには間に合わずオリビンを握る右腕に衝撃がガツンと伝わってきた。

それでもなんとかオリビンを取り落とさず、続けて振るわれる剣をなんとか防いだ。

反発力で両者共に後方へと弾き飛ばされて仕切り直しとなった。

「はあ、はあ。」

叶は乱れた息を懸命に落ち着かせる。

もともとシンボルには身体機能向上はない上に、強敵への緊張が叶の体力を奪っていく。

「強い。」

八重花や由良、明夜、真奈美なら簡単に倒すのだろうと思い、自分の無力を嘆く。

それでも自分が戦うしかないと心を奮い立たせて叶はオーへと対峙する。

「うわあ、化け物ね、どつちも。」

「確かに。」

ジュエルの2人はただ叶とオーの戦いを見ていることしか出来なかった。

そもそも戦いの次元が違う。

身体強化されたジュエルであってもオーの弾丸をかわせるわけがなく、左右どちらの攻撃が来るかを見切る目もない。

おそらくオーとぶつかった瞬間死ぬことになるだろうと伊鞠は背筋に冷たいものを感じて身を震わせた。

オーの能力が異常なら叶の力も十分に異常。

オーのような恐怖はないが絶対に攻撃を与えられそうにないという思いが浮かんだ。

事実あのオーの猛攻を受けて叶はまだ1つも傷を負っていない。

伊鞠たち2人がかりでも攻撃が通用するとは思えなかった。

「ここは大人しく戦闘終了まで待機していようかと考えていた伊鞠は「ねえ、今ってチャンスなんじゃない？」

麻子がニヤリと笑っているのを見て首を傾げた。

「わかんない？」 Innocent Vision”のリーダーはオーとの戦いで手一杯みただし今なら後ろから攻撃すれば倒せるんじゃない？さすがに後ろまでは守れないでしょ。」

確かに麻子の言う通り叶はオーに集中しているし、オーも叶だけを標的にしているようで2人の方を見ようもしない。

それはそれで眼中にないということだが麻子はその状況を利用しようと言うのだ。

「したたか。」

「私は勝つためなら何でもやるわよ。」

「Innocent Vision”のリーダーが倒れたら次はわたしたちかもしれない。」

オーが叶を倒すだけで満足するとは限らない。

むしろこの場にいる全員を殺さない限り結界を開けない可能性の方が高い。

「でもさ。どつちにしろこのままじゃどつちも倒せないんだし、それなら倒せそうな方をやっつけて一矢報いたいじゃない。」

意見は後ろ向きだがここで”Innocent Vision”のリーダーが倒れることはヴァルキリーにとって大きな利益となる。

それがヴァルキリーの礎になるならと伊鞠も覚悟を決めた。

「この命、ヴァルキリーの為に。」

「せめて派手に散ってあげるわよ。」

2人はジュエルをグツと握る。

その剣は震えていて2人は顔を見合わせて苦笑した。

死ぬのが怖くないわけがない。

それでもただ死ぬだけなのは我慢ならなかった。

「 Innocent Vision」のリーダー、覚悟！」



## 第65話 守るもののために 後編

叶がオーと睨み合いをしていると背後から

「Innocent Vision」リーダー、覚悟！」

そんな声が聞こえてきた。

振り返るまでもなく追い掛けてきていた2人だ。

（何で出てきちゃうの？）

タイミングとしては最悪だった。

これでさらに厳しい状況に追い込まれた。

オーが慈悲なんてものを持つわけもなく漆黒の砲口が火を吹いた。

「えい！」

オリビンを真正面からぶつけるとオリビンの光の向こうで黒い破片が砕けた。

「行くわよ！」

後ろから麻子がジュエルを振り上げながら迫っていた。

少女が握るには若干大きすぎる剣を高く掲げて全力の斬撃を放つ。

（目じゃなく、気配を読む。）

明夜の教えを思い出して麻子の動きを掴み、それを避けるように横へと動いた。

ジュエルの斬撃が空を切る。

「こつちを見ないで避けた!？」

叶は振り下ろされたジュエルに向かってオリビンを振るう。

オーと同様にジュエルも魔の力であるためオリビンに反発して麻子は派手に後ろに吹き飛んだ。

「きゃあ！」

「麻子。」

伊鞠が麻子の救出と叶への攻撃を迷っているうちに叶はオーと斬り合いを演じていた。

さっきまでの受けとは違う能動的な行動に出たことに伊鞠は疑問を

感じながらも大の字に倒れた麻子を起こす。

「何よ、あれ？後ろに目でもついているの？」

転がって擦りむいた以上の怪我はなく麻子は納得行かない様子だった。

「あれだけ声を出せば誰だって気付く。」

「それは私の主義に反するのよ。」

変なところにポリシーを持っている麻子から離れて伊鞠はジュエルを突きのに構えた。

狙うはオーとの乱戦を繰り広げる叶の背中。

麻子のように叫んだりはない。

暗殺は無言で気配を殺して行う。

「やあ！」

叶は短剣を攻撃に防御に取り回して戦っている。

「オー！」

オーも剣で応戦しながら砲を放つタイミングを狙っていた。

そのオーの視線が一瞬叶の後ろに外れたのを叶は見逃さなかった。

「っ！」

オーの放つ斬撃の軌道側面にオリビンをぶつけて強引に軌道をねじ曲げ、そこからさらに踏み込んで向けられた砲口にオリビンを突き立てた。

「オオッ！」

バンツ

出口を塞がれた弾丸は砲の内部で爆発して砲身にヒビを生み、叶も反動で弾き飛ばされた。

「きゃあ！」

ドン

「ぎゅむ。」

そこには背後から迫っていた伊鞠がいて、結果的に抱き止められる形になっていた。

「はあ、はあ…ごめんなさい。でもここには危ないですよ。」

謝罪と警告をした叶は麻子の時と同じようにオリビンをジュエルに  
触れさせて伊鞠を弾きとばす。

「あっ！」

「わっ！」

伊鞠も麻子に受け止められるように離されてしまった。

「何よ何よ！私らの相手なんかしてられないって言うの？」

「…。」

オーは紅色の目をいつそうキラキラさせて叶を睨み付けると右腕を  
掲げた。

「オオオーツ！」

まるで空間を震わせるような咆哮に叶やジュエルたちはたまらず耳  
を押さえた。

「何！？」

「うるさい。」

それに呼応して聞こえてきた甲高い音に叶は目を見張った。

オーの剣がまるで玻璃のように振動し始めていた。

振動剣が振り下ろされると触れた地面が弾けるように切り裂かれた。  
このオーにとっては砲も剣も優劣はなく、どちらも必殺の武器であ  
ると語っているようだった。

叶はオリビンをグッと握った。

「私は、負けない。」

だが志に反して状況は確実に悪化していた。

「くっっ！」

振動剣を受け止める度にオリビンが弾かれそうになり、その隙をつ  
くように放たれる砲を辛うじて防ぐ。

さらに叶の態度に反感を抱いたジュエルたちも背後から攻撃を仕掛  
けてくるので叶は気を張り続けていなければならなかった。

「ねえ。」

「何よ、伊鞠。次はあなたでしょ？」

「そうだけど。もしかして”Innocent Vision”のリーダー、わたしたちの方に攻撃が来ないようにしてない？」

叶はほとんど動かずに戦い続けていた。

だが麻子の背後からの一撃を避けるだけの技量があればオーの攻撃も受ける必要はないように伊鞠は感じていた。

まるで後ろにあるもの、ジュエルの2人を守るかのように。

「いや、そんなわけないでしょ？だって私らはジュエルで敵よ？」

「…うん。」

ただどジュエルを担う利己的な少女たちにセントの考えは理解できない。

だからこそ、叶は絶体絶命であり、それでも守るものがあるからこそ限界まで戦い続けていた。

腕や足からは血を流し、もう立っているのもやっとという状態でも叶はオーと対峙していた。

もはや握るだけで震える右手を左手で支えるようにしてオリビンを構える。

「絶対に止めてみせます。」

「オオーッ！」

オーが砲を放った。

ヒビが広がるのにも構わず叶とジュエルが同じ射線上になっていることを知っているからこそ最大出力で撃ち出した。

砲の一部が欠けた。

「きゃあー！」

だが強力な一撃は弱っていた叶には支えきれず地面に投げ出された。

背中から落ちた衝撃で霞む目が映し出したのは振動剣を振り被つて上から止めの一撃を打ち込もうとするオーの姿。

「あ……」

そして、その上空から急速に接近してくる黒い影だった。

ギャリン

金属をぶつけ合う金切り音が響くと同時にオーの体勢が大きく崩れた。

黒い影は無防備になったオーの側面を蹴り飛ばして地面に叩き落とした。

本当に一瞬の出来事にジュエルの2人は身動きすら出来なかった。ただ1つだけ思ったこと。

（悪魔が、現れた。）

それはまさに剣を手にした悪魔<sup>デーモン</sup>だった。

「デー、モン？」

叶はヨロヨロと起き上がり隣に立つ漆黒の異形を見た。

かつて見た久美の変容した姿と重なって一瞬久美かと考えたが右手に握る剣がその考えを否定した。

（魔剣？）

デーモンと同化しているように黒いがそこから感じる力は魔剣のものであった。

デーモンが振り向く。

朱色の瞳は間違いなくデーモンのものだがそこに憎悪や怒りの感情は見られず、むしろ慈しみ、懐かしむような感情さえ見て取れた。

「あなたは、誰？」

デーモンは答えない。

話せないことはないはずだから話したくないのか。

叶はデーモンに背を向けた。

「オーを願います。」

背中越しだったがデーモンが頷いてくれたように叶は感じた。直後背後から剣を打ち合う音が響き始めた。

叶はふつと微笑むとオリビンを胸に抱きしめるように握った。

「癒しの光。」

オリビンを中心に暖かな光が叶を包み込んでいく。

疲労は抜けきらないが傷は癒えていく。

光が収まる頃には目立った傷は消えていた。

「何よ！そんな力があるのにどうして使わなかったのよ？」

それを見ていた麻子が吠えてジュエルを振り回す。

光の障壁だけでなく魔法めいた治癒能力まで見せつけられたら嫌でも力の差を見せつけられる。

叶は調子を確認めるように手を握ったり開いたりして小さく微笑んだ。

「使うまでに時間がかかりますから。オーの前で使うのは怖かったです。」

麻子たちを下に見ている発言と取れるが反論するよりもオーとデーモンの苛烈さを見て啞然としてしまっただけではなかった。

叶はその戦いからジュエルたちを守るため、戦闘に戻る前に「こり」と笑い

「無事に出たかったら大人しくしててくださいね？」  
と言った。

叶にしてみれば言葉通りの意味だったがジュエルの2人には

「余計なことをしたら無事に帰れると思うなよ？」（イメージ）  
とドスの効いた脅しに聞こえて

「はい。」

素直に従うしかなかった。

デーモンとオーの戦いはまさに人外のものだった。

オーの振動剣にデーモンは力負けすることなく、むしろ押し返すがオーも崩れた体勢から砲を放ってデーモンの追撃を避け、両者退かない攻防が繰り広げられていた。

「オーッ！」

紅色の瞳がカツと見開かれ左腕の砲身が黒い闇に包まれる。めきめきと肉体を無理矢理作り替える気色悪い音を立てて闇の向こうの腕のシルエツトが変化していく。

「オオオーッ！」

闇が弾けた。

その中から現れたのは3つの砲身を持つ異形の左腕だった。ただしオーの左肩が不自然に盛り上がっていて無理矢理変形させたことが窺えた。

「オオオーッ！」

ドドドッ

3つの発砲音が空気を揺らし、弾丸がデーモンに殺到した。

ドッ

デーモンの体が不自然に震え、動かなくなった。

オーとジユエルたち、そして叶が生じた結果に固唾を飲む。

デーモンは

「……」

2つの弾丸を剣で切り裂き、もう1つを素手で受け止めていた。

「ば、化け物……」

麻子の怯えるような声が全員の色を表現していた。

人の目には見えない速度で放たれた3つの弾丸を正確に切り裂き掴むなど人の成せる所業ではない。

デーモンは弾丸を握り潰すと左手を見つめた。

ピシッと割れる音がしてデーモンの手のひらにヒビが入った。

ヒビからはわずかにだが黒い煙が溢れ出してきていた。

直後、デーモンが動いた。

剣を縦横無尽に振るってオーの振動剣を盾として利用させるだけの圧倒的な怒濤の攻撃。

一撃の重さが先ほどまでと違うのか打ち合う度にオーの体が揺れる。

「オオーッ！」

オーは再び砲身をデーモンに突き付けた。

ゼロ距離での射撃ならばもはや受け止める暇もない。

ドドドッ

だが、デーモンは砲身の中程を掴んで強引に発射方向をそらした。

弾丸はあさつての方向に飛んで地面を爆発させるだけ。

まさかの回避方法にさしものオーも硬直した。

その際にデーモンの剣が走り剣と一体化したオーの腕を両断した。

「オ、オーッ！」

オーは叫びながらデーモンの手を振り払って距離を取る。

そして今度は右手が闇に包まれ普段のオーの爪となった。

「きりがいいですね。」

気が付けばデーモンの隣に叶が並び立っていた。

後ろにいたジュエルたちは物陰に退避している。

デーモンが叶の真意を探るように目を向けた。

叶はそれに微笑みをもって答える。

「あなたは私を、そして琴お姉ちゃんを助けてくれた人です。いい

人：なのかは分かりませんが今度は私が助けます。左手の傷、見た

目より深いんですよね？」

デーモンはさっと手を引いて隠してしまっただがそれが何よりの証拠である。

その人間臭い仕草に叶はまた笑った。

穏やかな表情を引き締め、オリビンを構える。

デーモンも右手の剣を構えた。

「行きます。」

叶が直進するのに対してデーモンはオーを中心に回り始めた。



オーは単発で叶とデーモンに弾丸を放つが弾かれ、避けられた。叶はある程度の距離を保つたまま動かず、デーモンは徐々に回転半径を狭めていく。

オーは直感していた。

たとえ叶に3連バーストを放つても光の壁に防がれると。

だからデーモンが攻撃に転じる瞬間を待っていた。

そしてその瞬間が来た。

デーモンがオーの真後ろから斬りかかるのを察知して振り返ろうとし

「やあ！」

まさに同じタイミング、示し合わせたかのように叶もまたオリビンを手跟前へと踏み込んだ。

「ッ!？」

オーは一瞬どちらに砲身を向けるべきか迷った。

だがすでに左腕は後ろに向こうとしていて今からでは間に合わない。

そして何より砲は叶に通じないとデーモンは左手を後ろに振り、右手を叶に向けた。

ザシュ

ザクツ

その選択こそが敗因。

オリビンを突き立てられたオーは粉々になって崩れていく。

あの時砲を叶に向けていれば防ぐしかない叶は前には出られなかった。

オリビンに弾丸は効かないと思いつまめたことが勝因と言えた。

「オオオーッ！」

怨嗟の叫びを上げてオーが消滅する。

黄昏の空が揺らぎ、結界が消えようとしている。

デーモンは叶に背を向けて歩き出す。

「ありがとうございます。」

そんな言葉を背に受けて、デーモンはわずかに目を細めて何処へとも知れず去っていった。

麻子と伊鞠はとぼとぼと帰っていた。

「次元が違った。」

「あんなのと戦うの？」

すっかり戦う意思を折られていた。

「それに、教えられてたほど悪い人じゃない。」

「まあ、ね。」

結局最後まで叶からは攻撃を受けなかった。

2人は迷う。

本当に戦うべき相手は誰なのだろうか。

そして

「ただいま。」

叶はようやく家について安堵のため息を漏らした。

走り回ったり戦ったりで疲れたしお腹も空いていた。

「おかえり、かなっち。」

その食卓に何故か久美がいてエビフライを食べていた。

固まる叶に母の声がかかる。

「叶、お友達とおいかけて遊んでて久美ちゃんに買い物袋任

せたんだって？せっかくだから夕飯に誘っておいたわ。」

「にははは、エビフライおいしい。」

「あうう。」

エビフライの取り分が減って心の中で涙を流す叶であった。

## 第66話 闇からの警告

闇は永久の深遠。

もがいても這い出ることは叶わない。

闇に放り込まれた者はどうするか。

光に戻りたいと抗うだろう。

不安に負けまいと思うだろう。

だがそれらは消えていく。

抗うことも疲れるほどに何も無い闇は全ての感情を絶望へと変える。  
ならば生き残るためにはどうするか。

簡単なことだ。

闇の中で笑いながら受け入れればいい。

光を憎み、闇であることを誇ればいい。

”時坂飛鳥”はそうして生み出された。

飛鳥は電気についていない部屋の窓辺に立って外を眺めていた。

外から差し込む外灯の光すら彼女を不機嫌にさせる。

「あれがやられた？」

その表情の不機嫌さは決して外灯のせいばかりではない。

剣と砲を持つオーが叶に倒された事が驚きであり、不機嫌な理由だった。

「人のおもちやを勝手に壊すなんて、苛つくわ。」

新種のオーに叶を襲わせて殺そうとしたにしては随分と理不尽だが飛鳥がそんなことを気にするわけがない。

自分が中心に回らない世界など飛鳥にとっては何の興味もないのだから。

「…。」

「あら、いたの？」

いつの間にか暗い部屋の入り口に誰かが立っていた。

オーではないが暗くて人影の正体は分からない。

その人影は口を開かず、視線で飛鳥に何か言いたげだった。

飛鳥は舌打ちする。

「飛鳥は勝手にやるよ。指図は受けない。」

飛鳥の怒気で闇に沈んでいた触手が鎌首をもたげだした。

「…。」

人影はまた音もなく去っていった。

飛鳥はもう一度舌打ちすると触手を消し去った。

その顔が笑みに歪む。

「そう、飛鳥の好きにやらせてもらっわよ。せっかくのパーティー  
なんだから。」

飛鳥の視線の先、壁にかけられたカレンダーの26日は血で塗りたくったような赤に染まっていた。

いよいよテストが迫ってきて学内の雰囲気も引き締まってきた時分、由良は屋上にいた。

今はテスト対策の授業が中心で退屈なものもそうだが、真面目に授業を受けていてそれなりに頭が良いことを示したら教師陣が手のひらを返したように接してきて気持ち悪かったため逃げてきたのだ。

「やっぱ面倒くせえな。」

テストもそうだし教師の応対もそうだ。

昔から人の輪の中で生活することに息苦しさを感じることが多かった。

それでも大人しくしていたのは家族がいたからで、今ここにいるのは仲間がいるからだ。

「仲間、か。」

叶に八重花、真奈美、琴、そして明夜。

確かに皆仲間と呼べる存在だ。

だが本当の”Innocent Vision”の頃からの仲間は明夜しかない。

Innocent Visionの力を頼りに夜の町を駆け回って、ヴァルキリーという巨大な相手に正面から喧嘩をふっかけ、そして魔女との戦いを繰り広げた。

その中心となっていた陸も、ムードメーカーだった蘭も今はいない。由良はあのがむしやらだった頃を妙に懐かしく思っていた。

「まったく、蘭のやつどこ行きやがったんだ？」

蘭の消息はファブレとの戦いの後から全く分かっていない。

オーと関わりがあるように感じはしたが出てくる様子もなく、今ではオーの仕掛けたブラフの線を考えていた。

由良は目を閉じて日差し暑さとそよ風の心地よさに身を任せる。「別にお前が何者でも、俺たちは離れたりしないってのに。」  
風が止んだ。

照りつける太陽の下にいとコンクリート焼きになってしまっただった。

「夏場は居づらい場所だな。」

由良は不快そうに張り付いたシャツを掴みながら立ち上がった。かつては羽佐間由良の根城とすら呼ばれていた屋上にも今は由良の求めるものはない。

一度だけ振り返り何もなかったことを確認して由良は屋上を後にした。

良子は1人体育館でバレーボールを投げ上げてはスパイクを打っていた。

ズバン

流星の名を与えられた凄まじいスパイクがコートに叩きつけられ、ボールが弾んで転がっていく。

すでに床にはたくさんのボールが転がっていた。

良子は籠に手を伸ばし

「あれ？空だ。」

ようやく籠の中身が空なことに気が付いた。

ため息をついてタオルを手に床に座る。

「ふう、もうちょっと勘を取り戻しておかないとね。」

テスト勉強もせずにバレーをやっているのには訳があった。

夏休み中、8月に大学のスポーツ推薦のレセプションが執り行われるのだ。

学力に自信などあるわけもない良子はそれに合わせて調整を行っていた。

「あたしの人生の分かれ道だ。ここで通れなければ、就職かな？」

ははっと笑ってはいるがある意味崖っぷちなのは間違いないため良子は本気だった。

とは言え狭き門なので受かる保証はない。

「いや、落ちることは考えないようにしよう。それよりもサマーパーティーがね。」

大事な試験の前に怪我、最悪死ぬことになるかもしれない戦いがある。

乙女会現会長として私用を理由に休むわけには行かず、戦いを始めれば加減が出来るとは思えない。

端的に言えば人生の分かれ道は脆く崩れやすい吊り橋を渡ることだった。

力の加減を間違えれば簡単に谷底に転落するという綱渡り。

「ふう、あたしの人生、どうなるかね？」

他人事のように呟いて汗を拭きつつもその目は真剣に前だけを見ている。

「あ、良子お姉様！」

そんな声に振り向くとジュエルの綿貫紗香が体育館の入り口から顔を覗かせていた。

「どうした？入部希望ならいつでも受けるよ？」

「あはは、違いますよ。お姉様を探しに行ったらここだって教えてもらったんです。」

若干不満そうな顔を見る限り悠莉のところに行ったが美保に追い払われた、もしくは美保が良子を売って逃げたか。

(後で美保を問い詰めよう。)

心でそんなことを考えつつも面には出さないで慕ってくれる後輩を迎える。

「それで何か用かな？」

紗香は周囲に転がるバレーボールを見て

「お姉様はサマーパーティーに参加されるんですか？」

良子がさっきまで考えていたことを口にした。

「レセプションのお話を耳にしました。それは良子お姉様にとって将来を決める大切なものです。サマーパーティーに出ない方がいいと思います。」

「確かに、ね。でもあたしが出ない分はどうする？」

「それは…わ、わたしが頑張ります！」

ムンと拳を握って意気込む紗香の頭を良子は苦笑を浮かべながらワシワシと撫でる。

「わ、わわー！」

紗香は困っているような嬉しそうな微妙な表情でなすがままにされる。

「君の気持ちは嬉しいけど、だからこそあたしは戦わなければならぬ。Innocent Vision”もオーも簡単に行く相手じゃないから。」

紗香は真剣な目で良子を見る。

紗香はまだ”Innocent Vision”の力を知らない。

だからこそ悠莉と良子の強さに惹かれているのだと良子は考えてい

た。

（もしかしたら” Innocent Vision”の力を見たらお姉様も終わりかな？）

それを少し寂しく思い、もう一度撫でる。

「うー、わたし、ちゃんと戦えますよ？」

拗ねる紗香の頭をポンポン叩いて宥める。

「わかった。そうしたらあたしのところに割り当てられるように葵衣に行っておくよ。」

思わぬ言葉に紗香はポケットとし、だんだんその顔が喜色に染まる。

「はい！頑張ります！」

はしゃぐ紗香を優しく見つめながら

（これで守るものがもう一つ出来た。簡単には負けられないね。）  
静かに闘志をたぎらせていた。

琴は授業に出ず午後には太宮神社でお勤めをこなしていた。

両親は今日も他の神社に出張っていて琴と”太宮様”だけしかない。

そして”太宮様”は在って亡き存在であるため実質的には1人だった。

「この神社もいつまで栄えていられることでしょうか？」

両親に”太宮様”のト占は扱えない。

もしも琴が世継ぎを残さずにこの世を去ることになれば”太宮様”の力の系譜は途絶えることになってしまう。

両親は帰ってくる度にお見合い写真を大量に置いていくが琴は一度も開いたことなく両親の部屋に押し込んでいる。

琴は他人の恋愛事には興味はあるが自分に関しては興味がなかった。だが琴もお年頃。

生物学的に性長した以上多少は異性への興味もある。



「ふむ、陸さんを巡って叶さんと争うのも面白そうですね。」  
ただ、実に趣味が悪い上

「そうすれば叶さんの様々な表情が見られそうですね。」  
本質は叶中心だった。

琴は叶の困り顔を思い浮かべて微笑むと箒を動かす。

人があまり寄り付かない神社は綺麗なものだが毎日の掃き掃除にはそれなりに意味がある。

掃除で場を清め、御祓で穢れを払う。

琴は神に仕える巫女として正しく生きてきた。

そこに僅かな揺らぎが生じたのは昨年から今年に掛けての冬、直接的には叶が要因だが大本を辿れば最終的には陸に行き着く。

陸が Innocent Vision を使って入学式の暴動を察知し、叶を助けた上で停学処分になった。

揺らぎの根源はそこにあつた。

本来交わらなかつた縁が Innocent Vision で紡がれ、叶が表の世界から外れる”結果”を呼び込んだ。

「やはり Innocent Vision はこの世に在ってはならない因果を歪める力。いずれ歪んだ反動が揺り戻すことでしょう。」

それを被るのが陸さんなのか世界なのか。」

それがどちらにしる陸には被害が及びそうなので琴は溜飲を下げた。ここで陸だけが救われるような未来があれば今からひっぱたきに行くところだ。

「まったく、陸さんは本当に…あら？」

ふと思えば男に興味はないと言いながらも陸の事を考えているし文句も言っている。

琴の中で男というカテゴリーの中から陸は特別に抜け出していたようだった。

「本当に。あれは未来視だけでなく魅了の魔眼でも入っているのでしょうか？」

そうでなければ敵も味方も惹き付けられないと、益体もな

いことを考えて琴は苦笑する。

今の陸の力、運命を夢で改変させる究極の魔眼 Akashic Vision は人の心まで変える力があるとも考えられるのだから極論世界を手に入れることも容易い。

ヴァルキリーが恐れ、畏れながらも離れられないのはそれをどこかで気付いているからなのかもしれない。

「…。いけませんね。こうも静かで暇ですと下らないことばかり考えてしまいます。」

叶や” Innocent Vision ”と関わっていると時間など瞬く間に過ぎていく。

やはり琴は正しき巫女から外れて”人”になろうとしているようだった。

そんな暇な太宮神社の鳥居をくぐる気配に琴は振り向き、箒を取り落とした。

カランと竹箒の転がる音が参道に響く。

「あ、あなたは…。」

「やつほー、ほとんど会ったことはないけどお久しぶりでいいのかな？」

琴が驚くのも無理はない。

彼女はファブレとの決戦の後に姿を消したはずだった。

明夜や由良が行方を探していたのを知っている。

それが突然訪ねてくるなど琴にだって予測できなかった。

「江戸川、蘭さん。」

「うん！ランちゃんだよ、琴ちゃん。」

蘭は何も変わらない明るい笑みで手を上げて返事をした。

「はあ、お茶が美味しいねえ。」

蘭がお茶と羊羹で和んでいる。

琴は困惑したままおもてなだけではキツチリとこなしていた。

「どちらに行かれてたのですか？」

蘭は満面の笑みで一口大に切った羊羹を食べながら「と唸る。

「近くて遠い場所。今日も帰ってきたわけじゃないんだよ。」

「そうなのですか？しかし羊羹を食べるためではないのでしょうか？わざわざわたくしが早くから神社に1人でいる時間を狙って訪ねてこられたのですから。」

蘭は竹楊枝を銜えながら口の端をニツと吊り上げた。

「…へえ、さすがは琴ちゃん。その予言みたいな言葉はりつくんみたいだね。」

それは琴の言が真実である証。

ペロリと舌なめずりをした蘭が左手をテーブルの上に乗せた。

琴はいつでも動けるようにわずかに腰を浮かせて右手を軽く開いた。

「警戒しなくても今日は何もしないよ。」

そんな小さな動きさえも蘭は気付いていた。

琴はあからさまに警戒を強めるが蘭は気にした様子もない。

沈黙が2人を包み込み、それを破ったのは同一人物とは思えないほどに冷たい笑みを浮かべた蘭だった。

「これは警告だよ。”Innocent Vision”に関わるのは止めること。さもないと…琴ちゃんなら言わなくても分かるよね？」

声は何も変わっていないのに含まれる迫力に背筋が凍りつくような恐怖を感じて琴は声を出せなかった。

それでも手にフェルメールを顕現させて意思を強く保つ。

「それは…誰の言葉ですか？」

「フッ。」

蘭は冷笑を浮かべると立ち上がって社務所から出ていった。

琴は壁に力なく身を預けて床に座り込む。

その表情には苦悶が浮かんでいた。

「どうして、友達を捨てられまじょうか。」

## 第67話 パーティー準備

いよいよテストが始まった。

余裕ある者、抗う者、諦めた者、皆が夏休みという大事の前の決して小さくはない小事に挑んでいた。

手に汗握るのは氣候のせいかはたまた緊張のためか。

隣人のペンを走らせる音に焦りを感じ、時計の針が止まることを願うように顔を上げる。

だけど時計の針が止まることはなく、救済と判決の鐘は鳴る。

終わりの安堵が、終わった絶望が各々の生徒から漏れ出していく。

戦いはまだ始まったばかり。

学生という名の戦士は長く苦しい戦いに身を投じていく。

テスト1日目の昼休み、今日も屋上で昼食を摂っていた”Innocent Vision”の面々は屋上に続く重厚なドアが開く音を聞いて視線を向けた。

「テスト中だつて言うのに余裕そうだね。」

「Innocent Vision”の皆様は基本的に成績は優秀です。」

入ってきたのは等々力良子と海原葵衣だった。

突然の登場に由良、明夜、真奈美が警戒を示すが八重花がそれを手で制した。

「お2人もお昼ですか？」

叶は気負った様子もなく、むしろこの後に

「それならご一緒にどうですか？」

と続きそうな気軽さだったものだから”Innocent Vision”の仲間たちは別の意味で戦慄する。

同じような結論に達した良子は苦笑を浮かべていた。

「残念ながらご飯は別のところに用意されているからね。ここに来たのは別件だよ。」

「私たちをパーティーにでも招待して頂けるのかしら、等々力先輩？」

「八重花……。」

重要な用件を先んじて口にしたのが八重花だったので良子は複雑な顔をしたが過去の妄執は一応の決着を見ている。すぐに落ち着きを取り戻して頷いた。

「クリスマスに続いて今度はサマーパーティーだ。君たちには是非とも参加してもらいたいんだけど、どうだろうか？」

隣に控えていた葵衣が正式な招待状を八重花に渡す。

目の前で危険がないか確認し、中を開けると挨拶の文と日時、戦いの舞台となる会場が書いてあった。

「軍演習場？随分な場所ね？」

「クリスマスパーティーではゴルフ場でしたがその後の整備が大変でしたので。」

確かにそうだろうが被害の大半は撫子のコロナだったりジュエルの大軍が走り回ったりとヴァルキリー側の引き起こしたものだっただけで同情の余地はない。

「東條様の燃やした芝の修復に難航しました。」

「……そんな昔のことは忘れたわ。」

”Innocent Vision”が逃げた後、腹いせも兼ねてジエムと派手にやり合った自覚はあったので八重花は視線を外してはぐらかした。

「戦い、ですよ？招待されなくてもいいですか？」

身も蓋もない提案だが招待であるならそこには不参加という選択肢があつて然るべきだ。

良子は困惑気味に笑って葵衣に目を向けた。

「招待状は様式美だとお考えください。本日は日時の不都合をご確

認するためにお邪魔致しました。万が一ご参加されませんか…」

「されませんか？」

「当日召集したジュエルが各自のお宅へ訪問することになるかと考えられます。」

訪問という言葉を使っているが実際はそんな生易しい話ではない。

葵衣は参加しないなら家族や近所を巻き込んででも襲撃すると言っているのだ。

「それならおもてなしの準備をしないといけないですね。ジュエルの方って何人くらいいますか？」

だが叶には言葉の裏に隠された真実は伝わらない。

この場にいた全員が叶の対処に困っていた。

「100人は一度にお伺いするとお考えください。」

葵衣が冷静に頑張ってみる。

「モはや”Innocent Vision”のメンバーすら葵衣にエールを送っているほどだった。

「そんなにですか。うちに入りきりませんね。大変です。」

大変の意味が間違っているがとにかく叶も不参加による被害が大きいついという事実は理解した。

八重花が疲れたようなため息をついて話を引き継ぐ。

「初めから断るつもりはなかったけど。それで日程は7月26日、終業式の次の日ね。予定が悪い人は？」

全員が少し予定を思い出して考え込み、同時に首を横に振った。

「同じく予定のない私が言うことじゃないけど何もないの？」

「だって旅行に行くとしたらここにいる皆か裕子たちだしね。」

「うん。」

「俺も特にないな。」

真奈美、叶、由良が憐れむ八重花の意見に肯定する中、明夜の手がスツと上がった。

「行くところがある。」

「へえ、明夜が旅行なんて珍しいわね。どこ行くの？」

明夜は頷いて由良を指差した。

「由良の家。」

「俺んちか？」

「うん。あそこは涼しいから。」

由良の今住んでいる部屋は一年中室温を適温に保つ仕様とかで布団要らずの快適ルームなのである。

とにかく”Innocent Vision”の皆の予定が寂しいことになっていることを知って頂垂れた八重花は振り返って頷いた。「サマーパーティーの件、”Innocent Vision”は了解したわ。当然、たっぷりおもてなしして貰えるのよね？」

「ご希望とあらば。」

八重花と葵衣の間に見えない火花が散る。

だがここでやり合うようなことはしない。

せつかくの機会を設けたのだからパーティーで全力を出すと決意を高める。

用件が終わって葵衣は出口に向かうが良子は立ち止まって八重花を見ている。

それに気付いた八重花が振り返ろうとしていた足を止める。

「どうかしました？」

良子は笑っているのか哀しんでいるのかよく分からない顔で曖昧に頷いた。

「八重花は、ヴァルキリーにいたときよりずっと楽しそうだね。」  
ヴァルキリーにいた頃の八重花は由良たちを殺して陸を手に入れるために良子たちを利用しようとしていたので仲間意識など持っていなかった。

だが今の八重花は大切だと思える仲間を守るために戦っている。

太極の陰と陽のようなもの、今の八重花は間違はなく陽に当たる。

「楽しいですよ。」

「そうなんだ。よかった。」

何がよかったのか良子にもよく分からなくなり話を打ち切って振り

返る。

「私も、今の等々力先輩の方が好感が持てますよ。」

「…ありがとう。」

良子は笑みを浮かべたまま振り返ることなく屋上を後にした。

屋上に続く踊り場で壁に頭をつけてため息をつく。

「やっぱりがつつきすぎだったのかな。」

徐々に八重花とまともに話して褒められて良子は気分よく教室に戻り…テストで轟沈したのであった。

サマーパーティー日時決定の報は葵衣から各地区の管理者に伝わり、インストラクター、ジュエルと広まっていった。

いきなり1週間後に決戦だと言われても予定が入っていたり覚悟を決められない者もいたが葵衣からの連絡には参加の可否は問わないと記されていた。

だがジュエルは実力階位制の組織。

訓練の成長度と管理能力を買われて昇格するものもあるが、基本的には敵を倒す功績を挙げることで評価が下される。

散発的なオーへの対処で得点を稼いでいるジュエルもいるが今回は”Innocent Vision”との戦い、その首を取ればインストラクターどころか地区管理者、もしかしたらヴァルキリー直属部隊に配属もありえる。

このチャンスを逃すわけにはいかなかった。

全国のジュエルが静かに闘志を燃やす。

決戦は26日。

綿貫紗香もサマーパーティーの知らせを受けた。

ただ、それはメールではなく葵衣からの直接の言伝であった。



「良子様から所属変更願いが出され、受理しましたので作戦参加時は関東ジュエルではなく九州ジュエルの方に集合してください。良子様の指揮に入っていたいただきます。」

「はい、ありがとうございます！」

紗香は本当に嬉しそうに頭を下げた。

それを見る葵衣の目には少し心配の色が浮かんでいる。

「力量は杏葉ジュエルの中でも随一のあなたなら戦いに関しては問題ないでしょうが、他の所属ジュエルに出向して連携を取れますか？」

葵衣の教えはジュエルの集団戦闘にある。

良子の鍛えたジュエルも体育会系の流れを汲んでいて団結力がある部隊だ。

そこに紗香が入って動けるのかを心配していた。

「そうですね。…」

紗香は暫し悩み

「わたしは良子お姉様に従うだけです。」

結局何の迷いもなく言っただけだ。

「精進してください。」

「はい。頑張ります！失礼します。」

紗香が元氣よく去っていくのを見送ってヴァルハラに向かおうと振り返ると

「葵衣様。」

悠莉が軽く手を挙げて葵衣を呼んだ。

「悠莉様、どうかなさいましたか？」

悠莉は少し困ったように微笑みを浮かべてヴァルハラに足を向けたので葵衣も続く。

紅茶を用意して席につくと悠莉の表情はさらに困ったようなものになっていた。

「それで、どのようなご用件でしょうか？」

「…東北ジュエルから連絡がありましたか？」

それを聞いて葵衣は納得した。

悠莉がジュエルのグラマリーを発現させるために自らを敵としていることは聞いている。

つまり東北ジュエルがサマーパーティーに参加してもヴァルキリーの、悠莉の味方にはならないと言うことだ。

「岩手インストラクターには連絡が届いているはずですが全体としての返答は今日送信したばかりですのでまだではないでしょうか？」

悠莉は安堵とも落胆とも取れるため息を漏らして弱々しく微笑んだ。「そうですか。これはもう一度私が出向く必要がありますね？」

「確かに、そうかもしれません。」

ジュエルの参加の可否は問わないとは言っているがそれは一地域から数人抜けても問題ないというだけで基本的には大半が参加するという前提で作戦を立てている。

もしここで東北ジュエルが全員来ないとなると大幅な作戦変更が必要となってくる。

「大変な時期ですみませんがよろしくお願い致します。」

「大変な時期だからこそ憂いは断っておかなければなりません。」

そう強く返した悠莉は、やっぱり困り顔になる。

「しかしもしかしたら私の指示を聞かないジュエルばかりかもしれませんが、その時は上手く岩手さんを使って運用してください。」

自分で育てたジュエルに慕われないのはやはり辛いのかわずかに肩を落として悠莉はヴァルハラから去っていった。

「憎悪を増幅させたジュエルですか。」

葵衣はパソコンを開いて定期的に更新される各ジュエルクラブからの成果報告を見た。

他の地域のジュエルは徐々に数を増しつつ練度を高めていつているが、東北の仙台ジュエルだけは数の増加がほとんどない。

新規入会者が数日で他の支部へと異動、あるいは退会を希望してくるからである。

異動が受け入れられたジュエルは安堵のため息と共にこう呟くとい

う。

「あそこは人ではなく修羅のいる場所だ。」

「人員は確かに少ない。ですが報告されている数値は他を凌駕しています。」

ジュエルには一定のカリキュラムが課せられている。

仙台ジュエルはその課程を倍近い早さでこなしているのだ。

能力的には既にインストラクタークラスに到達しているものも多い。「集団戦闘には不向き。ですが個としては優秀、やはり別動隊として動かすべきでしょうか。」

しかしそれも参加しての話。

そこは悠莉に任せるしかなかった。

葵衣はパソコンの終了処理を眺めながら

「この労苦。はたして”Innocent Vision”に届くでしょうか？」

ポツリと不安を口にしていた。

「あ、葵衣。ここにいたんだ。」

帰り支度を済ませて席を立ったところで緑里がヴァルハラにやって来た。

「姉さん。試験はどうでしたか？」

開口一番葵衣はテストの出来を心配する。

それは緑里に花鳳に仕える者として相応しくあってほしいという願いからくる言動だったが緑里は戸に手をかけたまま後ろに下がりそのままドアを閉めようとした。

だがいつの間にかドアの前に移動していた葵衣の手によって差し止められた。

「ひい！」

「姉さん？どうして逃げようとするんですか？」

（それは葵衣が怖いオーラを出してるから！）

とは勇気が足りなくて言えない緑里は後退るがすぐに背が廊下の壁

にぶつかった。

「卒業後は花鳳の使用人になることが決まっているからこそ、妥協は許しません。これから明日のテストに向けて勉強しましょう。」  
近付いてくる葵衣がまるで鬼か修羅かと思える気迫を放っていて、緑里はすっかりすくんでしまった。

ガシツと掴まれた肩がミシリと音を立てた気がして声無き悲鳴をあげる。

「大丈夫です。姉さんはやればできる子です。」

（やらないと、殺られる！）

別に緑里の成績が悪いわけではない。

ただし葵衣と比べると惨めになるからあまり言いたくなかった。ただけなのだが今さら言える雰囲気ではない。

「…姉さんはいずれお嬢様のお付きになるのですから。」

葵衣の呟きは緑里には聞こえなかった。

## 第68話 嵐の前のさざなみ

そして一部波乱を含みながらも吉葉高校のテスト期間は終わりを迎えた。

「にはは、裕ちん、どうだった？」

「んー、まあまあかな。久美はどうなの？」

いつもならテスト終了と共に無駄に元気になる裕子が今回ばかりは大人しい。

「にははは、今回はちよつとできたよ。それでどっか遊びに行く？なので久美が誘ったわけだが裕子はすまなそうに、それでいて照れ笑いを浮かべながら手を合わせた。

「ごめん。約束があるの。」

裕子の視線が一瞬芳賀に向いて、すぐに逸らされる。

久美は当然ながらそんな視線には気付かず

「そっか。また今度ね。」

少し残念そうに手を振った。

それを見ていた叶と真奈美は

（裕子ちゃん、デートかな？）

（あれはデートだな。）

ちゃんと気付いていた。

戦闘をこなしているうちに相手の視線の先を自然と察する能力が備わっていたのだ。

久美と話し終えた裕子は席を立って教室を出ていき、少し遅れて芳賀も席を立った。

「芳賀君。」

叶はその芳賀に声をかけた。

「ん？作倉が俺に用なんて珍しいな？どうした？」

「うん。あのね……」

叶はちよつと恥ずかしそうに視線をそらし

「金子先生が言っただけどちゃんとひに…ンン!？」

「ほら、裕子が待つてるなら早く行かないと。」

「何でそれを…まあ、いいか。じゃあな。」

叶の口を塞いで真奈美が急かすと芳賀は驚いていたが小走りに出ていった。

それを見届けてから真奈美はため息をつきながら手を離れた。

「プハツ、酷いよ、真奈美ちゃん。」

「まったく。何を言うのかと思えば。」

「だって、まだ2人も学生だし。」

叶の言いたいことはよくわかるし叶の真面目さを考えればおかしな事ではない。

ただ、叶と保険医の接点が思い付かない。

「金子先生とどこでそんな話したの？」

「保険委員会の時に。」

「…なるほどね。」

陸が通っていた頃は保険医として気にかけていたため度々倒れたときに付き添っていた叶を知っていてもおかしくないし、保険委員なら接点としては十分だ。

真奈美はゴキリと指を鳴らす。

「うちの叶に余計なこと教えないように注意しておかないとね。」

そう呟いた真奈美はフラリと教室を出て行ってしまった。

「にはは、かなつち、まなちいは？」

「どこか行つちやつたね。」

2人して首をかしげて一緒に帰ることにした叶と久美は知らない。

「や、止めるんだ、お前たち。いや、むしろ止めてください。」

「教育者としての根性を焼き直してあげるわ。」

「まったく、ぶつ飛ばすか。」

「由良先輩、止めはあたしが。」

金子養護教諭の保健室には真奈美と話を聞いてかちこみに参加した

由良と八重花の姿があった。

叶を守る過保護な夜叉たちはゆっくりと輪を狭めていき

「うわあああああ!!!」

金子先生の悲鳴が人気の少なくなった校内に木霊したのであった。

悠莉はテストが終わるとすぐに東北に向かう電車に乗っていた。

サマーパーティーにジュエルが参加するよう打診するのが一番の目的だが同時に別の目的もある。

「さあ、私への負の感情を糧にジュエルの皆さんは熟れてきたでしょうか？」

突き刺さる視線を想像して悠莉は身を震わせるが表情はどこか嬉しそうだったりする。

決してジュエルの成長を喜んでの事ではなからうが。

「一応岩手さんに連絡を入れておきましょう。」

葵衣の方には出発前に確認したがまだ連絡はないとのことだった。

以前教わった携帯のメールアドレスにこれから行く旨を伝えるメールを送信した。

「これでは到着を…」

ピロロロロ

携帯を仕舞おうとした矢先に手の中で携帯が鳴った。

送信エラーかと思ったが送信者は間違いなく岩手だった。

「なんででしょう?」

悠莉はメールを開き

『すぐに帰ってください!』

何やら切羽詰まった感じの文面に目を丸くした。

「これは私を追い払いたいがために語気を荒らげている…ではないでしょうね。」

悠莉はスツと目を細め、口の端を釣り上げた口を手で隠した。

「どうやら、予想以上に大変な事になっているみたいですね。」  
言葉とは裏腹に悠莉は楽しそうに窓の外を流れる景色を眺めている。  
あと数時間で悠莉は仙台へと到着する。

その頃、

「あれ、美保？」

「こんにちは、良子先輩。」

美保は体育館を訪れていた。

そこでは今日から部活復帰した鋭気溢れる女子バレー部が元気に躍動している。

良子はレセプションへの準備も込みで相変わらず部の指導に当たっていた。

現部長に練習を任せて良子は美保のところに来て来た。

「美保1人なんて珍しいね。悠莉は？」

「別に悠莉とあたしはセットじゃありませんよ？」

不機嫌というか少し拗ねている感じの美保が可笑しくて良子はその頭に手を伸ばすがサツとかわされてしまった。

「子供扱いはノーサンキューですよ。」

「残念。」

別段残念そうでもなく良子は手を引っ込めた。

「それで、悠莉が1人でどっか行っちゃって暇だったからあたしんところに来たってことだね？」

「まあ、端的に言えばそうです。」

美保には他に友達いないのかなと思わなくもなかったがさすがに暴れられては敵わないので口には出さなかった。

以前なら尋ねていただろうから良子も成長したということだ。

「だけどこつちも見ての通り部活の指導とかあってね。悪いけど構ってあげられないよ。」

実際部活の方では練習をしながらも良子の帰還を望む目が向けられ



てきている。

「人を勝手に寂しがりやにしないで下さい！」

美保は叫ぶと体育館から飛び出していつてしまった。

良子は啞然としたまま頭をポリポリとかいてその後ろ姿を見送り

「やれやれ、気難しい年頃だな。」

同じくらしいの歳とは思えない発言を残して部活に戻っていった。

八重花は金子先生を肅清した後、由良たちと別れて家に帰っていた。部屋に着くなりすぐにパソコンを起動させる。

その間に制服を脱ぎ捨ててラフな格好に着替えた。

「今回のサマーパーティーはクリスマスパーティーとは違う点が多い。まずはジュエルの数ね。以前のジュエル部隊は精々壱葉と建川周辺の人員をかき集めただけ。それでも100人強の人間が集まった。なら全国から集めたらどれほどの数になることか、想像するだけで嫌になるわね。」

1000おや2000は下らない、最悪万に届く兵がヴァルキリーという組織にはいるのではないかと考えていた。

そうなると戦いは4対1000以上の絶望的な差になってくる。

如何にジュエルが弱いと言っても水滴がコンクリートに穴を穿つ可能性もある。

「それにもう一点。りくがいない。」

そして最大の問題はそれだった。

クリスマスパーティーの時ですえ4対100の圧倒的な戦いを前に陸は正面衝突を避け、主格である撫子を狙った。

それは未来視があつても正面からの戦いを避けなければならなかったということだ。

「さらに言えば江戸川蘭の幻術がないのも地味に痛いわ。」

あれは攻撃に逃走にと使い勝手がよいグラマリーが多かった。

八重花は椅子の背もたれに大きく身を仰け反らせる。

「状況はクリスマスパーティー以上に厳しいわね。」

だが八重花の顔はまだ悲観的に落ち込んだりはしていない。

付け入る隙がないわけではない。

八重花は再び体勢を戻す。

起動したパソコンは八重花の入力をわずかな静音ファンの回転音を鳴らしながら待っている。

八重花の手には万能検索ツール、プラチナ色のフラッシュメモリが握られていた。

「『エクセス』、起動。」

メモリを差し込んだ直後にデスクトップがサイバネティックに変化し、各種検索ツールが同時に立ち上がる。

ハードディスクやCPUへの負荷でカリカリと音を立てて八重花の愛機も戦闘状態に入った。

八重花は指のマッサージを入念に行いながら画面に目を向けた。

1つのウィンドウには少女たちが一定の動きで訓練している姿が映し出されている。

「先日潰されたのに熱心ね。」

そこは建川ジュエルのリアルタイム映像だった。

人数は減っているようにも見えるが音がなくても活気に満ちているのがよく分かる。

「こっちはとりあえずはいいわ。あの程度じゃ戦力は削れない。だけど”Innocent Vision”への恐怖は植え付けられたはず。本番でうまく作用してくれればいいわね。」

八重花は別のウィンドウに目をやる。

こちらは真っ黒い画面に英数字が並ぶ面白味のないものだが八重花はむしろ楽しみにニヤリと笑った。

「やるわよ、エクセス。ヴァルキリーの内情を丸裸にするのよ。」

プラチナのメモリもダイオードランプが応じるように点滅を開始した。

その頃、緑里はパソコンで『葵衣式姉さん養成プログラム』なる問題を解かされていた。

いつの間にかこんなものを作ったのか結構本格的で緑里が飽きないように工夫がされているため葵衣のスキルの高さとの差を考えつつも楽しんで勉強していた。

初めは右下に出ているアイコンが一瞬赤い警告を示した。

だがそれは一瞬で消え、勉強していた緑里は気付かなかった。

次にクリックした動作が遅くなった。

処理が時々重くなるのは別におかしくないと緑里は気にしなかった。

「それにしても、何で葵衣はボクの苦手な範囲まで完璧に知ってるんだろ？」

少なくとも緑里は葵衣に苦手なものなどないと考えている節があるせいで葵衣の得意分野や苦手分野を知らなかった。

「…もしかして、ボクって結構ひどいお姉ちゃん？」

ファブレとの戦いの中で和解した海原姉妹は目に見えて仲良くなったがまだまだ足りないようだった。

そんな事を考えていると間違えてマスコットのチビ葵衣ちゃんに怒られた。

「あはっ。」

簡単な絵ながらも葵衣っぼくてむしろ和んでしまった。

「後で聞いてみよう。苦手なものとか嫌いなもの。」

深く知っていくことはまだまだ遅くないはずだと前向きに考え問題に取り掛かるうとすると突然パソコンの画面が固まった。

「あれ、壊れた？」

とりあえずマウスをカチカチとクリックしてみるがやはり動かない。

「これが動かないと出来ないし、葵衣呼ば…」

カラカラと静かな音を立ててヴァルハラ扉が開いて葵衣が入って

きた。

それはもう見ていたんじゃないかってほどピンポイントなタイミングだった。

「終わりましたか？」

「…やっぱり埋められない溝を感じる。」

「？」

緑里は使用人スキルのレベルの違いに軽く絶望しながらもどん底までは落ち込まないで話題をパソコンに戻した。

「それがパソコンが止まっちゃって動かなくなっちゃって。」

「フリーズですか？」

葵衣は緑里の隣に立って画面を覗き込み、

「…姉さん、席が変わってください。」

表情を引き締めた。

緑里と席が変わるとすぐに電源ボタンを押すが

「応答なしですか。」

画面は消えない。

「葵衣、どうなってるのさ？」

「このパソコンは姉さんの養成プログラムで止まるような性能ではありません。何か別の、外部からのアクセスがあつたようです。」

葵衣は言いながらLANケーブルを引き抜き、電源を外してバッテリーまで取り外した。

エネルギー源を失ったパソコンは死んだように静かになった。

再び組み直してLANケーブルだけ繋がらないまま起動させると予期せぬエラーが発生しましたという警告が出た以外は特におかしな所は見つからなかった。

「葵衣、ボクが何かしちゃった？」

「いえ、今回の事は姉さんがボタンを押し間違えたくらいで発生するものではありません。」

葵衣はスキャンをかけてどこかに異常はないか入念に調べていく。

「それじゃあやっぱりウイルスってこと？」

「そう、なりますね。しかしこのパソコンはセキュリティも万全だったはずなのですが。」  
結局データスキャンとウイルススキャンを掛けてみても何も引っ掛からなかった。

ただ一点、葵衣が気付いたのはデスクトップに「y」というテキストファイルが作られていたこと。

だがそれも開いてみればエラーのログだった。  
詳しいと言ってもシステムの根幹を知るほどではないので強制終了のエラーとして判断するしかなかった。

こうして何事もなかったように緑里養成プログラムが再開された。

そして

「これで私も犯罪者の仲間入りね。」

八重花はいくつかの表計算ファイルを開いていた。

それは『ジュエル人口推移』などヴァルキリーの極秘ファイル。

「ここから勝てる策を練り上げる、参謀の腕の見せ所ね。」  
勝つために八重花はパソコンに没頭し始めた。

## 第69話 飴と鞭

乗った新幹線を途中で降りるわけにもいかず、何が起こっているのか興味を持ってしまった悠莉は仙台の地を踏んだ。

見た限り変わったところは何もない。

「前回から数カ月では変わりませんね。」

だがジュエルはこの数カ月で変わったのだろう。

でなければ岩手が警告を発する理由がない。

もしかしたら悠莉を凌駕するグラマリーを発現した者が出たとも限らない。

それでも悠莉の微笑みを消すには至らなかった。

「当然迎えはありませんね。」

駅前のタクシーを捕まえてWVe仙台店に向かう。

東北でもテストが終わったのか学生が多く歩いているのが見えた。

少なくともその中に以前訪れたときに見たジュエルはいない。

やがて仙台駅からそれほど離れていない大通りにタクシーは停車した。

悠莉は金を支払って車を降り、そのまま裏手ではなく正面から入った。

「いらっしやいませ。」

笑顔で応対する店員に微笑みを返し

「すみませんが岩手様をお呼びしていただけますか？」

岩手の客を装って声をかけた。

いかにもお嬢様な悠莉の仕草に店員は面喰らいながらもスタッフルームに戻り、数分後哀しげな顔をした岩手を連れて帰ってきた。

店員は会釈をして去っていく。

残された岩手は本当に残念そうな顔で

「やはり来てしまいましたか。」  
と呟いた。

「一応私は東北地区の担当です。職務放棄は良くないでしょう?」  
悠莉の言葉に岩手はますます困り顔になったが店員たちが気にしていたのでそのまま悠莉を奥に促した。  
店内経由で訓練所に続く道を歩きながら岩手は頭を下げた。  
「すみません。私の管理能力不足です。」  
「現状がわかっていない状況で謝罪をされましても困りますが、要は岩手さんが管理できないほどにジュエルが成長したということですね?」

「ええと、…はい。」

歯切れ悪く岩手が頷いたところで訓練所の扉の前に到着した。

「悠莉様、ジュエルをご用意ください。」

岩手は自らもジュエルを手に真剣な声で言った。

言われたようにサフェイロス・アルミナを顕現させて柄を握った悠莉が取っ手に指をかけて扉を開いた。

バンツ

その直後、薄く開いただけのドアの向こうから朱色の瞳がギョロリといくつも覗き、いくつもの刃が隙間から飛び出してきた。

悠莉は慌てた様子もなく、むしろあらかじめ用意していたようにコランダムの壁で防いだ。

完全な不意打ちとそれに対する悠莉の完璧な応対に岩手が絶句する。悠莉はそんな岩手を見て微笑むと種を明かした。

「扉を開ける前から背中がゾクゾクする殺気のようなものを感じていましたから。」

「下沢あ!」

ドアをこじ開けようとジュエルが獣のような咆哮をあげた。

クオーツのジュエルがグラマリーを使ったわけでもないのに空気がビリビリと震える。

「焦らなくても今開けますよ。コランダム。」

悠莉は壁を形成したままドアの間に新たにコランダムを生み出した。物理的な障壁として働くコランダムはドアを圧迫して左右に押し広げていく。

ドアが完全に開いたとき、青い半透明な壁を境界に悠莉とジュエルたちが睨み合う形となった。

ジュエルたちは檻に押し込められた獰猛な獣そのものだった。

「随分と荒れていますね。」

今も壁を怖そうと剣や斧、槌がガンガンとコランダムを揺らしている。

「悠莉様があまり来られないため感情のやり場に困っていたようでした。」

数カ月溜まった鬱憤が”人”を”獣”に変えた。

だが”化け物”になるためにはまだ何かが足りていない。

ピシリと壁の中央に亀裂が入る。

「悠莉様！」

警戒体勢に入る岩手に微笑みかけて悠莉は剣先で壊れかけた壁を突いた。

「弾けなさい。」

瞬間、青い壁は無数のつぶてへと砕けてその破片が訓練所内へと殺到していく。

前面に出てきていたジュエルは次々に悲鳴を上げながら倒れていき、ドアの前には死屍累々の惨状が広がった。

実際は死んではないが。

悠莉とそれに続く岩手はそこから堂々と足を踏み入れる。

倒れたのは8人。

まだ50近い数のジュエルが残っていて大きく囲むように悠莉を睨んでいた。

「お久しぶりです、皆さん。お元気そうで何よりです。」

この殺伐な状況において微笑みを浮かべたまま挨拶する悠莉にジュエルたちは警戒しながらも一応会釈する。



応答があることに満足して悠莉は頷いた。

「すでに岩手さんから連絡が行われていると思います。来る26日、ヴァルキリーと宿敵”Innocent Vision”の決戦、サマーパーティーが催されます。ヴァルキリーは皆さんのお力を借りたいと思うのですがいかがでしょうか？」

ジュエルたちは困惑した。

彼女らにとって下沢悠莉は高圧的でジュエルである自分達を見下し、力で服従させて奴隷のように扱う悪の権化のような存在だった。だから当然

「私の駒として働いて死ぬることを光栄に思いなさい。」  
と言われると考え、それに対する反骨心を育んできた。

だがここで悠莉にかけられたのは強制ではなく要望で、そこにはジュエルたちの意思を挟む余地があった。

敵として認識していた悠莉の姿がぼやけてしまい、ジュエルたちは焦っていた。

悠莉への認識を変えることはそのまま戦う意志さえも変えてしまいそうだったから。

「いつもみたいに参加しろって命令すればいいじゃない!？」

ジュエルの誰かが叫んだ。

その一言でまたジュエルたちは団結する。

それを見て悠莉は困ったように眉を下げた。

( 飴が遅すぎましたか。 )

八重花の方式に倣うなら厳しく当たりつつも時に優しく接すること  
で信頼を勝ち得、成長のための労苦を自分のために頑張らせる必要  
があった。

だが悠莉は飴と鞭、ヒール役として鞭で叩くことに快感を覚えてしま  
って飴を与えるのを忘れていた。

そのせいで本音で語っても穿った見方をされてしまったのだ。

「今回は訓練ではなく命に関わる戦いです。無理強いをするつもり  
はありませんよ。」

「ッ！騙されない。言うことを聞かせたいなら力で従わせなよ！」  
悠莉の心配も感情的なジュエルたちには届かない。  
だってここで悠莉の言葉を信じたら何を目標にすればいいかわからなくなる。

強くなる意味が止まってしまっただ。

「そうですね。」

悠莉の言葉にまた動揺が走る。

選択をジュエルに委ねながらも悠莉はサファイロス・アルミナを構えた。

「結局そうなるんじゃない！今日こそ勝つわよ！」

「おお！」

悠莉の態度に失望したジュエルたちが闘志を膨れ上がらせた。  
それを見て小さくほくそ笑む。

（見せてもらいますよ、皆さんの成長した力を。）  
内面の優しさを笑みには見せないで。

ガキンッ

金属音が響く。

ギンッ、キンッ

時に鈍く、時に甲高く、そして絶え間なく。

「やあーっ！」

ジュエルは一撃に全力を込めて悠莉の張ったコランダムの障壁に叩きつける。

ジュエルの一撃とは思えない威力の攻撃にコランダムは揺れ、ひび割れ、砕けていく。

だが悠莉は3枚のコランダムを巧みに操作することで一步も動くことなく数十人のジュエルを相手にしていた。

「まだまだあ！」

1人のジュエルが飛び上がり、仲間の肩を蹴って飛び上がった。

障壁は横方向に展開していて上は空いている。

その隙を狙って飛び込んだのだが

「ブレイク。」

悠莉は慌てることなく飛び込んでこようとしているジュエルの側のコランダムを弾けさせた。

つぶてによつて飛び上がったジュエルを叩き落とし、他のジュエルも巻き込んでいく。

だがこの技はある程度コランダムが衝撃を受けていないとできないため使い所が難しかった。

（確かに強く、速くなっていますね。紗香さんといひ勝負でしょうか。）

紗香は壱葉ジュエルの成長株、それが仙台ジュエルの標準だというのは他から見れば驚異的と言えた。

（しかし、やはり一押し。あと一押しが足りません。）

個々の能力、仲間ですら利用するという意味での集団戦闘能力は非常に高い水準で纏まっている。

だがやはり決め手が足りない。

グラマリーという戦況をひっくり返す力が。

（身体的な面と負の感情から来る精神的な条件はそろっているはず。それでもグラマリーは発現しない。そうなると、やはり足りないのは潜在的な魔力と呼ばれる力となりますか。）

八重花のジュエルだった茜もジエムに狙われる魔力の持ち主だった。そうなるともう魔力という不確かな力について深く研究しなければグラマリーの発現は見込めないことになる。

「行くわよ！」

（はたしてこの中に”君臨する者”の座に着くことが出来る方はいるのでしょうか？）

ジュエルでグラマリーを使う者をヴァルキリーではそう呼ぶことがある。

それは限りなくヴァルキリーに近く、ジュエルの頂点に座する者の

証。

ヴァルキリー直轄部隊の本来の姿。

（これだけの力がありながらまだ届かない。ソルシエールは本当に恐ろしいですね。）

悠莉は大きく体を捻って幅広い刀身のサフェイロス・アルミナを振り被る。

三面を壁で囲いながら攻撃体勢に入ろうとする悠莉を見て

「またあの爆発が来るわよ！」

ジュエルたちは一斉に距離を取ろうと動き出した。

「いい判断です。しかし…」

ブウン

空気を巻き込みながら振るわれたサフェイロス・アルミナは3枚の壁を砕くのではなく吸収した。

刀身に刻まれた文字が青白い輝きを放ち、悠莉はその刃を地面に突き立てた。

ゴゴゴゴ

まるで地震が起きたかのように訓練所が揺れ、足元から3枚の巨大なコランダムが悠莉を取り囲んでいたジュエルを閉じ込める檻のよう出現した。

だがその常識はずれのコランダムは天井にぶつかって大きくひしゃげており今にも弾けそうだった。

逃げようにも周囲を囲まれていて通れる隙間はない。

恐慌に陥りかけたジュエルは自分たちの中に悠莉がいることを思い出した。

「ここで爆発でもすればあなたもただではすまないわよ!？」

ジュエルの1人が恐怖からそんな言葉を叫んだ。

悠莉はクスリと笑い

「試してみましようか。グラマリー・ルチルインクルージョン。」

サフェイロス・アルミナの刀身に触れた。

ビキリと終末の音を響かせて亀裂が入り

バーン

三方向から中心に向けて無数のつぶてが一斉に弾けた。

「きゃー！」

「わー！」

空間全体を高速で飛来するコランダムを防ぐ術はなくジュエルたちは次々に倒れていく。

そしてその中の1人は見た。

悠莉が自分だけ新たにコランダムの囲いを作ってその中で微笑んでいる姿を。

3枚しか生み出せないコランダムだが弾けた瞬間にカウントは0となり自分の盾として新たに用いたのだ。

「勝てるわけ、ない……」

ルルインクルージョンが消滅したとき、立っていたのは悠莉と外側にいた岩手だけだった。

「えーん。あれだけ頑張ったのにー！」

「もう絶対勝てないよお！」

圧倒的に負けたジュエルたちは全員声を上げてワンワン泣き出した。今まで悠莉に勝つことだけを考えて訓練に励んできたのでその芯がポッキリと折れてしまったのだ。

岩手は宥めようとするが駄々っ子のようにいやいやするだけで話を聞こうともしない。

「悠莉様あ。」

「岩手さんまで泣きそうになってどうしますか。」

悠莉は困ったように笑うとパンパンと手を叩いた。

ジュエルたちは泣きながらも一応注目する。

「なぜあなたたちは力を求めたのですか？」

「それは、下沢…様に勝つため…です。」

「そうですね。しかしジュエルは本来ヴァルキリーに齒向かえないように設計されているんです。ご存じでしたか？」

「!?!」

岩手を除く全てのジュエルが絶句した。

確かにヴァルキリーに従うよう教育されてきたがジュエル自体がそのように作られていたことは知らなかった。

「それじゃあ今まで戦えたのは…悠莉様が許してくれたから？」

「やっぱり従うしかないのかな？」

ジュエルの中で悲観的なムードが広がっていく。

「それは違います。私はただあなた方に選択肢を与えたに過ぎません。私に従うという道もあったでしょうにあなた方は皆、私に挑み、戦う力を手に入れましたね。私は皆さんの成長を嬉しく思います。」

ジュエルの成長は悠莉の想像以上だった。  
グラマリーの発現が普通の訓練ではほとんど不可能だと分かったのも十分な収穫と言える。

悠莉は優しい笑みをジュエルに向け

「今までよく頑張りました。」

仙台ジュエルを指導して初めて労いの言葉をかけた。

それは反感を抱き、刃を向けさえしたジュエルたちが心から渴望していた言葉だった。

ジュエルたちが再び涙を流しながら悠莉の下に集まってきた。

「悠莉様！」

「私たち、強くなりたいです。」

泣きすがってくるジュエルたちにこれまでのような殺意はない。

そこにあるのはヴァルキリーという自分たちを統べる者に対する尊敬だった。

「その心、確かに受け取りました。必ずや私が皆さんを強くしてあげます。ですから、力を貸してください。」

頭を下げる悠莉にジュエルたちは恐縮しながらも満面の笑みを浮かべて

「はい！悠莉様のために！」

元気よく答えた。

こうして仙台ジュエルは団結し、ヴァルキリーは万全の準備をもってサマーパーティーを迎えようとしていた。

## 第70話 戦いの始まりに

そしてとうとうサマーパーティー当日となった。

昨日で1学期は終了し、学生特権の長期休みが始まった。

”Innocent Vision”の面々は動きやすい格好で集合したのだが…

「お前ら、学校の体操着はどうかと思うぞ？」

叶の家の前では体操着姿の叶と真奈美を由良が呆れた目で見ていた。

「でも動きやすい服装っていうとこれしかないです。」

「あたしもこれかソフト部のユニフォームですよ。」

「別に健全なスポーツをしにいく訳じゃないんだぞ？」

由良は戦いに赴く者の心得を説こうとするが

「そういう由良の格好もどうかと思うわ？」

八重花が横やりを入れた。

由良は自分の格好を見て

「そうか？」

と首をかしげた。

由良はへそが出てしまう丈のシャツにジーパンを羽織り、ボロいジーンズ姿であり、袖や胸元、太股の随所に革製のベルトが締めあつた。

運動の際に服の揺らぎを止めるためだが全身に革ベルトを巻いているように見えるのでパンク系のライブ参加者のようだった。

ちなみに八重花と明夜は学生服である。

「一応今日の名目はパーティーよ。ならやっぱり正装でしょ？ドレスなんて持っていないから制服が一番じゃないかしら？」

正しいようで何か間違っている気がしてならない理屈に叶、真奈美、由良は首を捻るが反論するほどの確固たる理屈があるわけではない。

「まだ時間もあるし着替えてきたらどう？少なくとも体操着で勝つても格好つかないわよ。」



想像してみれば確かに確かに運動会で勝利したクラスの凶みだった。

「それじゃあすぐに着替えてくるね。」

「あたしも。」

「俺は…」

由良は最後まで抵抗を見せたが

「由良お姉ちゃん。」 Innocent Vision ” 全員同じ格好した方がいいと思う。」

と叶に説得されて帰っていった。

「ふう。緊張感が足りないわね。」

着替えに帰ったメンバーを見送った八重花はため息を溢すのだった。

そして再び集まった” Innocent Vision ” は

「遅刻するよー！」

駅まで走っていた。

「着替えに時間がかかりすぎなのよ。」

「だってー！」

叶の家の前に集まっていたのになぜか一番早く家についたはずの叶が出てくるのが一番遅かった。

「リボンの位置が可愛くできなかったんだもん。」

「どうせ相手はリボンなんて見ないし戦ってる間にぐちゃぐちゃになるぞ。」

そう言う由良は第3ボタンまで開けていて当然リボンなんてしていない。

夏休みに入ったのに制服で慌てて走る集団に周囲は好奇の目を向けるが本人たちはそれどころではない。

「あと5分よ。」

「はあ、はあ。」

一番遅い叶に合わせて走っているがそれでも一度も立ち止まらないのだから全員体力はある。

やがて吉葉駅が見えてきた。

「ギリギリ間に合いそうだね。」

「切符売り場が混んでなければな。」

「急ぎ切符売り場で5人分の切符を買ってまた走る。」

「電車が来るまで1分を切っていた。」

「改札に向かって走る面々は」

「あ。」

「琴、お姉ちゃん。」

その脇に巫女装束の琴が立っているのに気付いた。

「だがのんびり話している暇はない。」

「両者は一瞬すれ違い」

「ピリリリリリ」

「待ってえ！」

「叶たちはギリギリで電車に飛び込んだ。」

「はあ、はあ、ふう。」

「さすがに、危なかったわね。」

「全員が息を乱しながらも安堵していた。」

「カナ。太宮院から何か渡されなかつたか？」

「え？あれ、ポケットに紙が入ってます！」

「全力で走り抜けた叶は気付かなかつたが交差する瞬間、琴が手紙を」

「放り込んでいたのだ。」

「来る時間が分かつていた様子といい手際の良さといひさすがは太宮」

「院の巫女だった。」

「このタイミングで渡してくる手紙となるとサマーパーティーの予」

「言ね。何が書いてあるのかしら？」

「八重花に促されて叶は綺麗に折り畳まれた手紙を開く。」

「絶望に沈むことなかれ」

「好機に慢心することなかれ」

「正しく敵を見極め」

「信ずる心無くさねば」

光の刃が魔を抜わん。」

それは普段”太宮様”の予言で見るものよりも幾分か読みやすい文  
体で書かれていた。

それでも叶にはチンプンカンプンだ。

「絶望に沈むことなかれ、好機に慢心することなかれ。相手の数や  
力に弱気になったり、逆にソルシエールの強さに傲るなつてことね。」

八重花はしつかり理解していて、それでも難しい顔をしていた。

「ただ、正しく敵を見極め信ずる心無くさねば光の刃が魔を抜わん、  
この部分がよく分からないわね。」

「正しく敵を見極めつてことは正しくない敵が現れるってことか？」

「それか分身の中の本体を見つけるとかですかね？」

「実はこの中に敵が……」

明夜が怖いことを言い出したのを聞き流して全員が八重花に目を向  
ける。

だが八重花は首を横に振った。

「これだけじゃわからないわよ。何が敵か、何を信じるのか。それ  
に光の刃も叶の力なのか別の誰かなのか。心に止めておくしか無い  
わ。」

建川駅に到着して人が出ていく。

決戦の地はさらに先だから叶たちは席に座った。

「それじゃあ絶望に挑むための作戦を伝えるわよ。」

電車内での作戦会議が始まった。

絶望的な戦力差を覆して”Innocent Vision”が勝  
つために。

上中野軍演習場。

旧陸軍演習場であり自衛隊の訓練にも使われるこの地が”Inno

cent Vision”とヴァルキリーの決戦場となる。ヴァルキリーをはじめジュエルは開始時刻の1時間以上前に集合していた。

ヴァルキリーは本陣となるスペースに昔ながらの陣を作り上げてそこから着々と準備を進めるジュエルを眺めていた。

「壮観だね。これで100万人くらい？」

良子が楽しそうに編隊を確認するジュエルの様子を見て声をあげた。普段は全体の指揮を取っている葵衣だが今回は基本的に本陣詰めで各部隊のモニターを行っていた。

「さすがにそこまでの人員は確保できておりません。ジュエリアクラブの会員がようやく10万人に届こうとしていますがジュエルクラブは総数で5000人強です。」

「随分と差があるね？ジュエルってそんなに少ないの？」

その計算だと20人に1人のジュエルということになる。妥当と言えば妥当だが少し少なく感じる。

何せ20人の大半は無欲ということになるからだ。

「いえ、ジュエリアクラブには海外会員の人数も含まれています。」

日本国内に限定すればジュエリアクラブは約5万人です。」

それなら10人に1人野心を持つ者がいる計算になる。

「それでも少ない気がするけどね。」

「仕方がありません。以前よりもジュエルに至る為の基準を高くしたのですから。」

撫子が紅茶を飲みながら弁解した。

以前はとにかく数を確保するために一瞬でも強い負の感情を持てばジュエルを手に入れることができたが、それだと強い兵に育たないことを知ったため全国展開したジュエリアには改良が加えられているのだ。

「5000人のジュエルですか。5人の”Innocent Vision”がどう立ち向かってくるか気になりますね。」

悠莉もお茶を口にしてくつろいでいる。

撫子、悠莉、葵衣の形成する雰囲気はとても戦場とは思えなかった。一方、美保は戦場を苛立たしげに見つめている。

「それで、今回ジュエルは後発って話ですけどどうということですか？」

美保が不満を持っているのはサマーパーティーの作戦だった。

大多数のジュエルによる波状攻撃で”Innocent Vision”を弱体化、分断し、その後ヴァルキリーが止めを刺すという常套戦術だった。

面白味はないが数の優位を最大限に活かすためには最も効果的な戦法である。

「ヴァルキリーが先陣を切り、万が一破られればジュエルの士気は低下します。また、ジュエルは”Innocent Vision”を倒すことで昇格出来ると考えています。ヴァルキリーが前線に出してしまうことでも士気の低下が懸念されます。」

「つまり今回の手柄はジュエルに譲るつもりでボクたちはここで高みの見物をしているってことだね？」

「要約すればそうです。」

葵衣の説明で概ね納得したヴァルキリーのメンバーだったがやはり美保は不満げなままだった。

「せっかく暴れられると思ってたのに、拍子抜けね。」

美保は椅子に深く背中を預けて紅茶を啜った。

ジュエルではないが完全にやる気が殺がれた様子である。

「しかしそれは相手が”Innocent Vision”のみに限ります。」

続く葵衣の言葉に緩みかけていた意識がピンと引き締まった。

撫子が無言のまま表情を固くして話を引き継ぐ。

「クリスマスパーティーの時と同様にオーが参入してくる可能性も十分にあり得ます。わたくしたちは不測の事態に臨機応変に対応できるように準備をしておきましょう。」

「そういうことなら仕方ないですね。」

美保もようやく納得して肩の力を抜いた。  
悠莉が腕時計に目をやる。  
約束の時、10時まであと少しだった。

時坂飛鳥は演習場を見下ろす山の上にいた。  
演習場の芝の緑や茶色い大地の上を朱色の輝きが動いている。

「結構な数が集まったね。こっちが用意した兵隊の2倍くらいかな？」

「こここのところ飛鳥が大人しかったのは兵隊の準備に忙しかったからだ。」

「ジュエルの半数、2500体の黒い異形はまだこの場には居らず静かなものだ。」

「とりあえずは”Innocent Vision”のお手並み拝見。ジュエルにあっさりやられるなら興味は無いしヴァルキリーを倒すくらいなら飛鳥が相手をしてあげてもいいレベルってことで。」

飛鳥に戦いの理念はない。  
ヴァルキリーが魔剣の力で世界を統治しようと望むように、”Innocent Vision”が特別な力を廃して人のまま正しい世界へと変わっていきけるようにしたいと願うように、戦う理由の根底にあるべきものが飛鳥にはない。  
あるのは殺戮を望む心。

「殺すことが目的であり、結果がどうなるかは問題ではない。」

「Innocent Vision」、ヴァルキリー。飛鳥を楽しませてくれるのはどっちかな？」

飛鳥は笑う。

「まだ動かず、殺すべき相手を見極めるために。」

「…行かれましたか。」

琴は走り去る電車を見送った。

共に行く、あるいは先回りをするという選択肢も存在していたが結局琴は助言をするに止めた。

”太宮様”の有り様として世界の変革に関与するわけにはいかない。だがもう一つ、琴の心に引つ掛かるものがあった。

それは人通りの多い駅前にはいた。

「ヤッホー、琴ちゃん。」

「江戸川さん。…お暇なのですか？」

琴は予想はしていたがあまり会いたくなかった人物の登場にがっかりしてちよつと辛辣な言葉を投げ掛けた。

すると蘭は頬を膨らませて不満を露にする。

「ランはこれでも忙しいんだよ。プンプン。」

「就職なさったのですか？」

魔女との決戦後行方不明と聞いていたため働いているのは少し意外だった。

蘭は満面の笑みで頷く。

「うん。りつくんところに永久就職…」

「はいはい。」

琴は話が終わる前に受け流した。

蘭は大層不満げだったが本当に忙しいのか食い下がって来なかった。

「警告通り”Innocent Vision”には参加しなかつ

たんだね。偉い偉い。」

「元よりわたくしの力は陸さん以上に戦闘には向かないものです。

足手まといになるようなことは致しません。」

言外に”Innocent Vision”との関わりを絶つ気がないことを含ませたが蘭は機嫌を悪くするようなことはなかった。

「大丈夫だよ。だってランが止めたかったのは琴ちゃんが今回の戦いに参加することだけだったから。」

「ッ!？」

琴は目を見開いて言葉を失った。

運命の流れを見る巫女である琴が気付かないうちにその分岐路を操作された。

琴は敵を睨み付けけるように鋭い視線を蘭に叩きつけるが、蘭は楽しそうに笑っているだけだ。

「江戸川さん、貴女は…貴女方はいったい何をするおつもりなのですか？」

敢えて言い直すと蘭の笑みが少しだけ強まった。

「ランはただ楽しいと思うことをするだけだよ。」

蘭はひよいと後ろに跳ぶと人混みの中に紛れた。

「叶ちゃんたちの無事を祈ってあげるといいよ。」

声はすれどもすでに蘭の姿は何処にもない。

琴はため息をついて歩き出した。

巫女装束の琴は人混みでは目立つはずなのだ。

それがさっきまでまるで見えていないように注目されていなかった。

(いったい何をするつもりです?)

琴は足を止めて空を見上げる。

ジリジリと肌を焼く日差しは琴の思考を妨げる。

この世界で起ころうとしていた変事を掴むことができない。

琴は目を伏せ、指を組んで祈る。

「どうぞ、無事に帰ってきてください、皆さん…叶さん…。」



## 第71話 先制攻撃

上野軍演習場。

普段はまず寄り付くこともない場所に壱葉高校の制服を身に纏った5人の少女がやって来た。

普段は監視がいて侵入を拒む門が開かれている。

「どうやらお待ちかねのようね。」

八重花が不敵に微笑む。

少なくとも戦力差に絶望している顔ではない。

「皆を守るために、戦う。」

普段物静か…というか何を考えているのか分からない不思議ちゃん  
の明夜も闘志を充足させている。

「どこまで行けるか分からないけど全力で戦おう、スピネル。」

今はまだ顕現していない半身の足に語りかけて真奈美はスポーツマンのように決意を新たにす。

「敵が誰だろうと俺の仲間を傷つける奴は許さない。」

まだ見ぬ敵に向かって殺意を向ける由良からは近くを飛んでいた力  
ラスさえも逃げていく。

万物に怖れられる稀有な存在だ。

本人は若干悲しげだが。

「戦わなくちゃいけないとしても、私はみんなを守りたい。だから  
オリビン、力を貸して。」

叶は胸の前で両手を組んで自らの力に願いを込めた。

その願いは”Innocent Vision”だけではない、ヴ  
アルキリーとジュエルをも救いたいという無謀にして純粋な思い。

「行くわよ！」

八重花の掛け声で”Innocent Vision”は決戦の地  
へと飛び込んだ。

「わあああああああああ!!!!!!」

世界を震わせそうなほどの大音響が人の口から生み出された。

それは数千のジュエルが奏でる歓喜にして狂気の叫び。

倒すべき敵を発見し、戦いの始まりを告げる笛の音となる。

号砲が放たれ

「戦闘開始い！」

昔の合戦の映像でも見ているかのように地響きを鳴らしながら武器を手にしたジュエルの大集団が前進を開始した。

スコン

「え？」

そのジュエルの最前衛集団の目の前に突然美しい無色透明な杭のようなもの突き立った。

最前列の足並みが緩めばその後ろから続く部隊も渋滞のように動きが鈍くなる。

「ちよつと、止まらないですよ！」

前に出ているのはより手柄を求める傾向の強い者たちだから早速仲間内で揉め始めた。

最前列のジュエルは水晶のような杭を気にしつつも”Innocent Vision”に向かって前進を再開した。

他のジュエルも戦場の真ん中に突き立った水晶を気にするが危機感  
は抱かない。

何故なら、彼女らはその正体を知らないからだ。

水晶の剣が震え出す。

剣の振動はそのまま大気をも震わせ、

「これって、まさか攻撃!？」

ようやくジュエルの一部が危機感を覚えた。

だがすでに水晶の剣、玻璃は敵部隊のど真ん中にある。

中心部で気付いたジュエルも仲間という名の壁に阻まれて逃げ出すことが出来ない。

そう、この時を玻璃は、由良は待っていたのだ。

「震える、超音振！」

由良のその声を聞いたジュエルも、まだ視認できただけの距離にいたジュエルも等しく空気の激震を感じると同時に墜ちた。

本陣の観測機器でジュエルの配置のマッピングを見ていた葵衣はわずかに目を細めた。

入り口からは程遠い本陣には空気の震えは届かなかったが

「先発部隊、協調性に難のあるジュエルを寄り集めた混成部隊120名が行動不能に陥りました。恐らくは羽佐間様の超音振と思われる。」

モニター上の被害規模と速効性から攻撃を割り出した。

「早っ！」

「ジュエルは何やってるんだよ？」

美保と緑里は不甲斐ないジュエルに憤るが

「超音振ですか。確かあれは手元を離れても使えていましたよね？」

「ああ、そうだね。まるで投げて使うのを前提にしたようなソルシエルだ。」

「なるほど。投げられたクリスタロスソルシエルだと気付かずに効果範囲内に入ってしまったというわけですか。以前よりも厄介な技になりましたね。」

「早急にクリスタロスの特徴をジュエルに伝達し警戒させましょう。」

他のメンバーはお茶をしながらも対抗策をすでに練り上げていた。

面白くなくて美保と緑里はお茶をズズツと飲む。

「開始数分で百人斬り、さすがはソルシエールといったところでしようか。ですが、まだこれからです。」

撫子はまだ遠く見えない戦場に立つ”Innocent Vision”へ不敵な笑みを向けた。

「戻れ、玻璃。」

由良が呼び寄せると玻璃はいつの間にかその手に戻っていた。肩に担ぐようにして視線を前に向ける。

「まずは八重花の計画通りだな。」

八重花も同じものを見ながら頷く。

「ええ、そうね。今のジュエルのは大半はソルシエールを見たことがない。だから玻璃を爆弾にすることが出来たわ。でも2度目はない欲を言えばもう少し削りたかったわね。」

100人を倒してもまだ全体としては50倍いるのだから微々たる損害でしかない。

だが”Innocent Vision”は誰か1人でも欠ければ致命的な損害となる。

作戦は慎重に進めなければならない。

「とりあえずヴァルキリーが動き出すまでは地道にジュエルの数を減らすわよ。深追いは禁止。グラマリーの使用も可能な限り抑えて力を温存するように。」

「了解。」

「ああ。」

八重花の言葉は由良と明夜に向けられていた。

真奈美はスピネルを装着しているものの叶と一緒に話を聞いているだけだった。

「みんな、気を付けて。」

「無理しないでね。」

見送られた3人は頷いて返事をする。各々のソルシエールを手に三方へと散っていった。

その後ろ姿を叶は心配そうに見つめていた。

大阪ジュエル部隊は軍演習場の西側から入り口である南に向かって進軍していた。

インストラクターであった神戸はジュエルの作戦外活動の件でまだ意識不明のまま拘留されているため今は都が隊長を務めていた。

「先走った部隊が早速やられたようやね。氣い引き締めてな。」

関西ジュエルはソルシエールの力を目の当たりにした者もいるため慎重な足取りで進んでいく。

その進行ルートに突然火線が走った。

「炎!？」

「都さん、あそこに!」

ジュエルの1人が指差した先には左目を朱に輝かせ右手に片刃の剣を握る八重花が立っていた。

赤い炎がジオードの刀身で燃えている。

「見た顔がいるってことは関西の方から来たジュエルみたいね。わざわざ遠くからご苦労様。」

労いの言葉とは裏腹に八重花の表情は嘲笑っているように口の端が歪んでいる。

「Innocent Vision」を倒せるならここまでの道の苦労なんてありませんよ。」

チャキジャキと都を先頭にジュエルが武器を構えていく。

その数はパツと見ただけでも100は下らない。

ジュエルの集団はさながら剣山のように無数の武器が突き出していた。

「さすがにこの数を相手にするのは多勢に無勢ね。」

そう呟くと八重花はサツと身を翻してジュエルたちに背中を向けたまま駆け出した。

「待ちい！」

まさかの敵前逃亡に慌てつつも先頭の集団から追いかけていく。

「あつツ！？」

集団の中程で突然走っていたジュエルたちが足に痛みを感じて動きを止めた。

見れば八重花が薙いだジオードの軌跡が今頃になって再び燃え立ち始めていた。

先を行くジュエルたちは八重花を逃すまいとしていて後ろを振り返りはしない。

「これは、罠ツ！？」

気付いた所ですでに遅く、視界から外れた先頭集団の向かった先でゴウ

巨大な火柱が吹き上がった。

中部地区愛知ジュエルのインストラクター 豊田は野心は小さく石橋を叩いて渡る人間だった。

「敵がどこから出てくるか分からないから皆注意して。」

過剰な警戒に他のジュエルたちは苦笑していた。

臆病だけど能力は高いという漫画のキャラみたいな人だが親しみやすい雰囲気から好かれやすい。

「っ！？」

ギギン

突如姿を現した明夜の二刀による攻撃を豊田が防いだと気付いて笑

みを消した。

「あなたは、” Innocent Vision ”の…。」  
「 柚木明夜。」

豊田は奇襲への対応で心臓の脈動がおかしいことを自覚しつつもう息を整えていた。

明夜は手と一体化したような刃を見て首を傾げる。

「防がれた？」

明夜の神速とも言える身のこなしと動きに一体化した斬撃は同じソ  
ーサリスであっても防ぐのは難しい。

それをジュエルである豊田が防いだのだ。

「驚いたようね？」

「豊田さんは気が弱くてちよつとした物音にでも過剰に反応するか  
ら目の端に捉えた瞬間に動けるのよ。」

「一度に10人の攻撃を一度に防いだこともあるんだから。」

「あの、ええと…」

豊田ではなくその下につくジュエルが妙に自慢げに語り出した。  
むしろ本人が困っている。

だが明夜はジュエルたちを見ていないしほとんど聞いていない。

「10人を防いだ。」

「あ、あれは、たまたま、です。」

豊田はジュエルを抱き締めて謙遜するがやっぱり明夜は聞いてない。  
チュイン

「っ!？」

明夜の姿がぶれた直後には咄嗟に右に動かした豊田のジュエルが金  
属を防いだ。

だが豊田の危機察知能力はかつてないほどに働いていた。

それはまるで複数の明夜が存在していて一斉に攻撃を仕掛けてきた  
ような錯覚。

「崩れた。」

「きゃあ!」

縦横無尽に走る刃にとつとつ豊田の動きにも限界が現れオニキスの一撃で弾き飛ばされた。

明らかに自分達とは違う高度な戦いに傍観していたジュエルたちも豊田が倒されてもう一度武器を強く握った。

明夜は構えを取り、指をクイツと動かしてかかってくるように挑発した。

「10人以上まとめてかかってきて。」

鹿児島ジュエルの大隅は女子にしては大柄で柔道家であるため腕を大きく広げた姿は熊のようだった。

「……」

その熊のような大隅が白目を向いて地面に仰向けに倒れている。

従っていたジュエルたちは非現実的な光景に口を利くことも動くことも忘れた。

不動の山のごときインストラクターが魔剣同士の純粹な力比べで押し切られたのだ。

ブンッ

「ヒッ！」

空気を切り裂く音に数人のジュエルが小さく悲鳴を上げた。

皆の視線が熊を倒した”化け物”に向けられる。

「どうした？薩摩のジュエルで威勢がいいのは1人だけか？」

肩に玻璃を担ぐようにして立つ由良はつまらなそうに目を細める。

あえて振動剣を使わずに力比べをしたのは薩摩武士の魂と正面からぶつかり合いたいと思ったからだだった。

だが薩摩生まれだとしても武士の時代はとうの昔に廃れた上に武士は男児の思想である。

それを女子であるジュエルに求めるのは酷と言えた。

誰も前に出ようとしないのを見て由良はチッと舌打ちした。



「骨のないやつらを相手にするほど暇じゃないんでな。一撃でぶっ飛ばすぞ。」

由良が玻璃を天に向けると玻璃が小刻みに震え始めた。やがてその振動は空気を震わせてジュエルにまで到達する。

「これが一瞬で先発部隊を行動不能にした超音振!？」  
もはやジュエルは空気が震えているのか自分が恐怖に震えているのか分からなくなっている。

左目を禍々しい朱色に輝かせて自分達を屠らんとする由良は正しく夜叉のようだった。

「う、うわああああ!」

1人のジュエルが恐怖に叫び声をあげながらも手にした武器を振り上げて踊りかかった。

「あたしは選ばれたんだ。だから、こんなところで終われないのよ!」

ジュエルなら誰しも思う特別だという認識が恐怖に囚われながらもジュエルを戦いへ突き動かした。

由良がニツと口の端を釣り上げて笑う。

「ちよつとは骨のあるやつもいたみたいだな。来いよ、俺を殺したいんだろ?」

「チエストオ!」

全身全霊を込めたジュエルの一撃。

由良と同じく左目を朱色に輝かせた未熟な戦士の一撃を

「おおおお!」

由良は馬鹿正直に真正面から迎え撃った。

大上段から振り下ろされる攻撃に対して地面を抉りながら斬り上げる。

ガギギギ

玻璃とジュエルがぶつかり合った瞬間甲高い金属音が響き渡った。

「くあつ!」

攻撃を仕掛けたジュエルは武器を弾き飛ばされて自身も地面に倒れ

た。

由良はすでにその行く末を見ていない。

視線の先には恐怖の中にも闘志を宿した無数の敵の姿がある。

「さあ、次はどいつだ？」

「ジュエル損耗率が10%を超過。」

戦況を逐次モニタリングしている葵衣が事務的に告げる。

まだ10%とはいえずでにクリスマスパルティーの時の人数を大きく上回る500人がやられたことになる。

戦っている姿が見えない分だけ余計に”Innocent Vision”の強さを過剰に認識している感があった。

「お嬢様、如何致しますか？」

「それでは次の作戦に移行します。各員に伝達を。」

戦いはまだ始まったばかり。

## 第72話 格が違う

一通り襲いかかってきたジュエルを片付けるとそれ以降はパタリと攻撃が止んだ。

由良は息を整えながら電話を取り出して八重花にかける。

戦闘中の可能性もあったが幸い数コールで繋がった。

『ジュエルの攻撃が止んだわね。』

「ああ。このまま進んでいいのか？」

『…。一度叶たちのところに戻りましょう。』

八重花がわずかに逡巡して後退を選択した。

ヴアルキリーとていつまでも手勢を無為に減らしていくことを良しとはしないだろうという判断からだ。

「分かった。とにかく…」

了解の返事をして撤退しようとした由良の頬を何かが掠めていった。咄嗟に首を横に振って回避したが頬に薄く線が入って血が滴る。

『どうかした？』

「悪い。戻るのはちよつと遅れそうだ。」

由良は返事を待たず携帯を切ると乱暴にポケットに押し込んだ。

頬を掠めたのはジュエルの刃だった。

乱暴に頬の血を拭いながら視線を向けるが起伏のある場所に隠れているのか姿は見えない。

（チツ、面倒な。）

由良は内心で悪態をついて周囲を警戒する。

別に死ぬ気で襲いかかってくる相手が怖いわけではない。

だが死を恐れずに突っ込んでくる相手は別だ。

ジュエルは玻璃とは違い手を離れた瞬間に所有者は一般人に戻る。

もし投擲した相手が見つかって由良が音震波を撃っていたならばば確実に大惨事になっていたはずだった。

（無謀にも程があるぞ。）

由良は体を正面に向けながらジリジリと後ろに下がる。  
やがて地面に突き立ったジュエルを見つけると

「返すぞ！」

思い切り体を引いて手にした武器を投擲した。

その瞬間、数十の刃が一斉に矢の雨のように向かってきた。

「馬鹿野郎どもが！」

由良は手にある武器、ジュエルを地面に投げ捨てる。

そのまま地面を殴り付けるようにしゃがみこみ

「吹っ飛ばせ、激震波！」

空中で武器の雨に向かっていく玻璃に向かって叫んだ。

「なっ！？」

見えない向こう側で悲鳴のような声が上がった直後、玻璃を中心に  
して空間の全方位に向けて振動波が放たれた。

空気の波は武器にぶつかり軌道を狂わせる。

激震の大气が消え去ればその真下には落下したジュエルが無造作に  
転がっていて、

「あわわ。」

少し窪んだ塹壕に身を隠していたジュエルたちが震えながら飛び出  
してきた。

手に力の象徴たるジュエルはなく、眼前には夜叉が怒りを露にして  
いる。

由良は拳を握りしめながらゆっくりと近付いていき、

「戦闘中に武器を手放すな！」

玻璃ではなく拳骨をぶちかました。

お前が言うな、なんて誰も言えない。

「ひー、ごめんなさい！」

「がーっ！」

怒り狂って拳を振り回す由良に怒られてジュエル部隊は戦意喪失し  
たのであった。

切迫した由良の声で電話が切れたことで八重花は状況を察した。

「由良の方はもう手が回ったようね。ジュエルを当て続けてきたのはこちらの戦力の分断が目的。明夜は…連絡しないと突っ込みそうね。」

八重花は携帯のアドレスから明夜を呼び出そうとし  
ザッザッザッ

平地の向こうから近付いてくる足音にその手を止めた。

見ると太陽光を浴びて輝く金属板が向こうからゆっくりと迫ってきていた。

「鉄板？…いや、制圧作戦用の防護シールドね。」

足並みを揃えて迫ってくるのは福井ジュエルだった。

「…。」

八重花はジオードに赤い炎を纏わせると横一線に薙いだ。

剣線に乗るように炎が盾の集団へと襲いかかるが

「やっぱり無駄のようね。」

盾は溶けずジュエルの侵攻も止まらない。

「構え！」

盾の向こうから声が響き盾と盾の隙間なら槍や剣のジュエルが突き出してきた。

八重花はフツと笑う。

「まさか現代においてファランクスを見ることになるとは思わなかったわ。」

ファランクス戦法、それは兵を列で配備し前陣が盾と槍を構えることで攻防一体を実現する密集陣形だった。

「相手の攻撃が通用しないことは先程分かったはずだ。あとはこちらから打って出るのみ。」

「はい！」

福井ジュエルのインストラクター越前が声高に自分たちの優位を叫

ぶと他のジュエルたちも一斉に返事を返した。

「まるで軍隊ね。」

実際今のジュエルはヴァルキリーを將軍としたれっきとした軍団となっていた。

部隊長であるインストラクターがジュエルの指示を出し、それを統括する地区管理者がおり、それをヴァルキリーが指揮する。

「そつだ。古来よりどんなに優れた剣豪も世を変える力は持ち合わせていなかった。強さとは数。我々の武力に対して1人の戦力でどこまで太刀打ちできるか？」

戦法も古風なら口調も古風な越前は盾の後ろにいたので八重花からは見えない。

盾の壁は徐々に八重花へと近付いてくる。

八重花は右手にジオードを握ったまま動かない。

「押し潰すのだ！」

ジュエルの波が八重花を飲み込まんと勢いを増し

「…そんな戦術ごときで私を倒せると思わないことね。」

八重花は冷たく言い放ちジオードを左側面に巻き込むように構えた。

「無駄だ！それが効かぬことは先刻…」

「はっ！」

八重花は越前の言葉を聞かずジオードを振るった。

だがその狙いは盾ではなく、ジュエルたちの進む足元の地面。

「きゃっ、熱っ！」

突然足元に火線が出現したため先頭のジュエルは足を止めた。

だが

「急に止まらないで！」

後ろはそれに咄嗟に対応できず前衛は倒れ、後続も陣形を崩していく。

たった一振りでも八重花はフランクスを打ち破った。

「ばかな!？」

越前は起き上がりながら驚愕する。

「フアランクスは前面には強いけど他の面には弱い性質を持つ陣形。なんなら次は周囲から炎をぶつけようかしら？」

地面に折り重なるように倒れたジュエルを八重花は手に紅蓮の炎を宿すジオードを振り上げて見下ろしていた。

ジュエルたちにはそれが憤怒の炎を背にした鬼のように見えた。

「くっ、”化け物”め。」

越前はジュエルを手に握りしめながら吐き捨てるように悪態をついた。

他のジュエルは体勢を立て直せていなかったり八重花への恐怖で動けずにいる。

「久々に聞いたわ。誉め言葉として受け取っておくわね。」

八重花は余裕の笑みで受け流すと刃を構えた。

越前の額や背筋から止めどなく汗が流れていく。

敗北を覚悟しながらも

「やああああ！」

越前は前に踏み込んでいった。

同時刻、八重花や由良から連絡の入らなかった明夜はひたすらに前進を続けていた。

とりあえず奥に進んで行けば問題ないと2つの刃を振るって敵を薙ぎ倒していく。

まっすぐに進んでいくと森林戦用に植林したとおぼしき木々が見えてきた。

「…。」

明夜は構わず踏み出して進んでいく。

天然の森とは違いある程度整然としているが見通しは悪い。

「こつという場所なら出てきそう。」

ガサリと葉擦れの音がした。

実は明夜が林に入っていくのを見たジュエル数部隊が木々に身を潜めて襲撃の機会を窺っていた。

明夜の言動はまるでジュエルの潜伏を知っているように聞こえてジュエルたちは動揺した。

（やつちやいましょう！）

（まだバレたと決まった訳じゃないわ。もう少し様子見を。）

小声で議論を交わしつつ明夜の様子に気を配る。

明夜はぼんやりと上を見上げて呟いた。

「おばけとか。」

ズルツ

明夜の天然ボケにジュエルがずっこけ、

「あ……」

「あ。」

潜伏があつさりとバレてしまった。

そうならばもう隠れている必要はないとぞろぞろと出てくるジュエルたち。

「まさかあんな方法で私らを誘き出すとは思わなかったわ。」

「さすがはヴァルキリーの宿敵”Innocent Vision

”と言ったところね。」

「？」

明夜の預かり知らぬところで勝手に評価されて小首を傾げる。

「だけど気付かないままでいた方が幸せだったんじゃないかな？」

先頭に立つジュエルが周囲を見回せば木の数に負けず劣らずジュエルが立って瞳を朱色に輝かせていた。

それを見て嫌らしく笑う。

「これだけの数を1人で相手にできる？」

すでに武器を構えたジュエルたちは木の隙間が見えなくなるほどに集まって明夜を取り囲んでいた。

いかに二刀を振るうとはいえ所詮は1人、一度にこれだけ多くの相手を出来るわけがないという考えがジュエルたちに余裕を生み出し



ていた。

それでも明夜は表情を変えずに右手を引き、左手を突き出して腰を落とす構えを取った。

「やってみないと分からない。」

「だったら試してみなさいよ！」

「たああああ！」

その言葉を合図に前衛にいたジュエルたちが全方位から一斉に斬りかかった。

四方八方から振り下ろされる攻撃に逃げ場などない。

たとえ二刀で防いだとしても精々2本、多くても4本が限度だろう。それならば残りの4本が無防備な明夜の命を絶つ。

誰もがそう考えていた。

ガギン

刃のぶつかり合う音が響き、ギチギチと拮抗を保つように微妙な力加減でジュエルの動きを拘束した。

だが8人のジュエルは動かない。

たとえ押さえられてもと考えていたはずなのに8人全員が動けなかった。

8本の魔剣が彼女らの中間点で組み合っていた。

「ぐつ。」

そして、その刃の足場の上に明夜は立っていた。

「当たらなければどうということはない。」

「どこかで、聞いたような台詞を！」

余裕を見せる明夜に激昂したジュエルが剣を振り上げるが明夜はその力を利用して高く跳躍した。

だが落ちれば下はジュエルの剣山の真上。

勝利を望む剣たちが今か今かと落下の時を待ち構えている。

一瞬明夜の姿が太陽と重なったあと重力に従いガシャンと音を立てて茂みの中に落下した。

「手柄、もらったわあ！」

「覚悟お！」

裂帛の気合いをもって無数のジュエルが落下地点に突き込まれた。今度こそ回避不能の武器の数にジュエルたちは勝利と手柄の笑みを浮かべ

「ぎゃあ！」

その背後で聞こえた悲鳴に背筋を凍りつかせた。

ゆっくりと振り返ると後続のジュエルの1人が泡を吹いて倒れていて周りのジュエルも怯えている。

だが明夜は茂みの中で串刺しのはずで

「…ねえ。どうして血が流れてこないのかしら？」

グツと刃を突き込んだジュエルの1人が手を震わせて呟いた。

確かに何かに刺さった感触はあったのにあれだけの攻撃を受けて血を流さない。

それはまさに”化け物”と言えるのではないか。

その間にも後方からは悲鳴が上がる。

茂みの中に明夜がいるのなら今後ろで猛威を振るっているのは誰なのか。

ジュエルの間に恐怖が満ちていく。

ガサリ

上と下。

木々と茂みなら音がした。

「!? 誰なのよ、出てきなさい！」

恐慌に陥りかけたジュエルが叫ぶと木と木の間を飛ぶ姿、そして茂みから立ち上がる姿が同時に確認され1人にして2つの朱色の瞳が妖しく煌めき

「「きゃあー！ー！！！」」

ジュエルの絶叫が林の中に木霊した。

広い軍演習場の入り口付近に叶と真奈美は居座っていた。

長期戦を見越したベースキャンプとして、そして万が一の事態に備えた退路の確保が目的である。

1キロ圏内で断続的に炎や空気の震えが確認できるのでとりあえずは順調に事が進んでいることが見て取れた。

「いいのかな？みんなが戦ってるのに私たちはここで立ってるだけだなんて。」

叶は申し訳なさそうな顔で八重花たちのいる戦場を見詰めている。みんなの命を危惧しないのは信じているからだ。

真奈美はふむとため息をついて叶と同じ先を見る。

「あの3人はあたしたちよりもずっと戦い慣れているから引き際は分かっているはず。とりあえずは八重花の作戦通り3人に任せよう。戦いはまだ始まったばかりなんだから。」

ソルシエールで強化されていても人間である以上体力の限界は存在する。

だからこそ八重花たちは防衛線ではなく全力で戦えるうちに前へと出たのだ。

多くの敵を倒す以上に”Innocent Vision”の活動できる領土を早急に確保するために。

「敵は来るのかな？」

叶は不安げに周囲を見回すが現状敵の姿は見当たらず静かなものだった。

「きつと来るよ。だから今はここで待っていよう。」

真奈美はスピネルで幾度も地面をついている。

落ち着いて見えてもやはり内心仲間を心配しているのである。

叶は真奈美の手を取って微笑みかける。

真奈美も表情を和らげて頷いた。

「みんなを信じて、それで戻ってきたら笑って迎えてあげようね。」

「ああ、そうだね。ただ、こっちが迎えられる状態ならだけど。」  
戦場の空気を感じて真奈美はまた表情を引き締める。

叶も奥の方から不穏な気配を感じ祈るよつに指を組んだ。

### 第73話 本当の魔剣の力

ヴァルキリーの駐屯する本部にはジュエルの状況が逐次伝わってくる。

ジュエルに持たせたセンサーで動きを常にモニタリングし、目撃情報から”Innocent Vision”の動きをマッピングしている。

「Innocent Vision”は西部より進行中。ソーサリス3人が北部、中部、南部から東部に向けてジュエルを排除しながら進撃。現在17%のジュエルが戦闘続行不能となっております。

「2時間で1000人に届きそうですね。さすがはソルシエール。」  
戦闘が開始されてからもうすぐ2時間。

2割の損害は予想を上回っているものの想定の範囲内である。

「葵衣。叶…作倉叶さんの動きはどうなってるかしら？」

撫子は呼び方をさりげなく修正したが怪しまれることはなかった。

ヴァルキリーにとってこの戦いで最大の重要人物は攻撃力の高いソーサリスではなく実は叶だった。

叶の持つ癒しの光は傷や体力を回復させる神秘の力。

それを許せば最悪ヴァルキリーは5対5000の戦いに敗北する可能性も出てくる。

それは言い換えれば叶さえ押さえればたとえソーサリスがどんなに強力でも敗北はないということだった。

「芦屋真奈美様同様前線には出てきておりません。恐らくはベースキャンプとして待機されていると思われます。」

本来ならこの戦いに衛星監視システム「オブザーバー」を運用する予定だったが話を通していた相手が人事異動で外れ、後任とは交渉の余地がなかったため葵衣たちは使えなくなってしまったのだ。

急遽決定となったため演習場にカメラやセンサーをつけることも出

来ず、監視がジュエルの目という不確かな情報源になってしまった。だから今ある手段を最大限に利用して”Innocent Vision”の動きを掴まなければならぬ。

悠莉は紅茶を飲みながら思案を巡らせ、納得したようにカップを置いた。

「早々にソーサリスの皆さんが前に出てきたのはジュエルによる包囲を警戒し、作倉叶さんの安全を確保するためということですね。」

「そう考えるのが妥当だと思われます。さすがにソーサリスの皆様も疲れを見せ始める頃、ジュエルには尾行しベースキャンの位置を特定させる予定です。」

クリスマスパーティーの時に”Innocent Vision”が行った本部攻めを今度はヴァルキリーがやるうというのである。

撫子、葵衣、悠莉がまるでゲームを楽しむように状勢を楽しんでいる中、緑里、美保、良子つまらなそうに戦闘が行われている西を見ている。

「いくら勝つためとはいえ、退屈。」

「それはあたしも同感だね。」

「ボクもだよ。」

3人は机にグテツとだらしなくだれていてヴァルキリーとしての品位が足りていない。

ただそこを指摘すると戦いに行かせると言われるため葵衣は敢えて注意しなかった。

「もう1000人もやられたんだし敵討ちに出てもいいと思うんですけど?」

美保は敵討ちなどと言っているが単純に戦いたいただけなのは見え見えだった。

「まだ1000人です。それに後衛に近づくほど強力なジュエルを配備しているのですからその部隊よりもヴァルキリーが先に行くのは如何ものでしょう?」

屁理屈を並べ立てたところで理に勝る葵衣を看破できるわけもない。

結局上に立つ者としての威厳を示せと言外に述べるだけで許可は下りない。

ふて腐れる好戦的な3人を微笑ましく見つめた撫子は西に目を向けてフツと笑う。

「今日のわたくしたちはジュエルが持ち帰る勝利の報を待ってれば良いのです。」

戦乙女の長はソルシエールの力を知りながらも勝利を信じて疑わない。

それだけの力を生み出したと自負しているから。

「ふう、ここも一段落ね。」

八重花はジオードの纏う炎を振って消すと周囲を見回した。

そこには倒れたり戦意を喪失したジュエルがあちこちに見られる。

だが戦意喪失者は元より倒れているジュエルも死んではいない。

「いつそ殺した方が楽なんだけどリーダーとりくの意向じゃ仕方ないわね。それに以前のような殺人衝動も弱まっている。無理に殺す必要もないわ。」

だがそれは誰も殺さないという叶の方針とは少し違う。

殺さないのではなく殺す必要がないだけ。

本気で歯向かってきたり怯えた振りをして襲いかかってくれば容赦なく殺す。

本質はやはり人を殺す魔剣でしかないのだから。

「少し前に出過ぎたわね。明夜と由良を呼び戻さないと面倒なことになりかねない。」

八重花は素早く携帯を操作してまず明夜に連絡を入れた。

数回コールすると

「八重花、何？」

いつもの平坦トーンで明夜が電話に出た。

とりあえず無事なことに安堵しつつさつさと本題に入る。

「一度戻るわよ。あんまり深入りしてないでしょうね？」

「……………バツチリ。」

とともうそくさい長い間があつたが八重花はあえて言及せず電話を切った。

重要なのは明夜が無事なことであつて、それが果たされているならたとえヴァルキリーを血祭りに挙げていようと一向に問題なかつた。続いて由良に繋ぐ。

「おう、ヤエ。そろそろ戻るか？」

「話が早くて助かるわ。それじゃあまた後で。」

こちらも用件を伝えるとすぐに電話を切った。

これはヴァルキリーが盗聴している可能性も考慮に入れているためである。

「さて、行きますか。」

もう襲つてくるジュエルがいないことを周囲を見回して確認した八重花は悠々とした足並みで西に向かっていった。

「ソーサリス3名が撤退を開始しました。」

その連絡はすぐにヴァルキリーの本部にも届いた。

「気付かれないように十分に距離を取った上で尾行を続け潜伏場所を割り出すのです。その後、別の部隊も加えて包囲し作倉叶さんを襲撃します。」

数では優位だったとはいえ一方的にやられていたヴァルキリーにやってきた初のチャンスを前に撫子は慎重でありながらも成功の意気込みを声に滲ませている。

特に叶はオリビンという聖なる鉄壁の守りを持っているが身体能力は一般人とそれほど違いはない。

戦闘に引きずり出し怒濤の大攻勢で攻めれば必ず隙を作り出せると



考えていた。

そこにだれている美保が手を挙げた。

「どうされました？」

「その尾行、バシてて逆に罠を張られてる可能性があると思うんですけど？」

いい気分浸っているときに言われて気持ちがいいものではないが内容は懸念の一つではあった。

「仰ることはわかります。ですが虎穴に入らずんば虎兇を得ず、本物である可能性がある以上行かなければなりません。」

「まあ、確かに。」

普段から罠だと思っけていても力でねじ伏せるまでと考えて突っ込んでいく美保や良子は納得、逆に悠莉と緑里は曖昧な笑みを浮かべていた。

「虎兇が得られるか、或いは虎の牙にかかるか。どちらでしょうね？」

撫子はどこか楽しげに呟いて紅茶を口にした。

尾行を続けていた山梨ジュエル部隊は西部入り口から少し北東へと進んだところにある壕に八重花たちが入っていくのを確認した。

「羽佐間由良、柚木明夜、東條八重花の3名が入っていくのを確認しました。ターゲットの作倉叶、それと芦屋真奈美が内部にいるかどうかは判断できませんね。」

山梨ジュエルのインストラクターあけぼし明星は確認事項を口にするのが癖である。

ただ仲間のジュエルたちはそれを聞いてやるべきことを認識できるのでジュエル内の意思疎通は早い。

「明星さん、突入ですか？」

倒すべき敵が休息のために壕へと逃げ込んだ。

それはジュエルにとって無防備な相手を襲撃する絶好の機会だった。明星は首を横に振る。

「他部隊が包囲網を完成させてから攻撃開始です。」

「せっかく私たちが突き止めたのに他のジュエルに横取りされるかもですか？」

「……………」

明星にジツと見られてジュエルは愛想笑いを浮かべる。

「…確かにここで襲撃することで他の部隊より先に攻撃を始められますね。でもそれは命令違反です。しかし…」

そしてもう一つ、明星は自身の葛藤も口に出して延々と悩む癖もあった。

しかもジュエルをやってるだけあって腹に一物持っており結構黒いことも考えているのだが…

「あー、明星さん。ここは素直に待つてましようね。」

「…そうですね。やはり違反はよくありません。」

こうして見るに見かねた仲間たちが正すので悪いことはしていない。何だかんだで可愛がられている隊長だった。

「それで明星さん。」 Innocent Vision のこと、どう思います？」

「どう、とはどういう意味ですか？」

明星が首を傾げるとジュエルの少女はここに来るまでに見てきた光景を思い出して小さく身を震わせた。

「ほら、これまでに1000人くらいのジュエルがやられてあちこちに倒れてたじゃないですか。」

「はい。」

「でも聞いた話だとまだ1人も死んでないって。それ、ジュエルを舐めてるのが殺す気がないのか、どっちだと思います？」

「……………」

明星は再び考え込む。

「Innocent Vision」が人殺しを躊躇っているの

であればそこに付け入る隙があります。だけどそれが偶然、あるいはそう信じ込ませる作戦だとしたらあまりにも危険になる。」  
「またも口に出して悩む明星だが今回はその葛藤は程なくして終了した。」

「不確定要素が多すぎるので信憑性は低いですね。それを過信するのは危険です。」

珍しく解が出たことで山梨ジュエルの方針は決定した。

「現状で包囲部隊到着まで待機。戦闘時は”Innocent vision”に最大限の注意を払って挑みます。」

「はい！」

戦いの意欲は十分に、しかし今はただ静かに戦いの時を待つ。

そしてそれから十数分、葵衣から包囲が完了したという知らせが来た。

『各部隊はこれより目的地点へと進撃を開始してください。』

ジュエルたちはゆっくりと輪を狭めていきながら地面に掘られた壕を目指していく。

ジュエルとは違い”Innocent vision”のソーサリスにはグラマリーの飛び道具が存在するため遠距離攻撃を警戒していたが接近していても攻撃を受けることはなかった。

壕の穴まで残り100メートル程度でジュエルの輪が完全に連結して包囲が完成した。

自然に二列、三列と厚みを得ながら輪が狭まっていく。

壕は砲撃などに対抗するために掘られた溝であるが最近は使われていないらしく埋め立てられていた。

”Innocent vision”が入ったのは残っていた穴の中。

もはや袋の鼠だった。

山梨、長野、新潟の甲信越ジュエルのインスタクターは目配せし合ってそれぞれに能力の高い部下を数人前に出した。

10人程度のジュエルが足音を殺して壕に近づき、武器を前にして穴に飛び込んでいった。

「……………」

外で待機しているジュエルはグツとジュエルを握り込んだまま中の反応を待っている。

遭遇すれば声を上げ、魔剣のぶつかり合う音が聞こえるはず。

だが見た限り壕がそんなに広そうには見えなかった。

「入った瞬間に無力化された？」

悲鳴を上げる間も無くとなれば何が待ち構えているか分かったものではない。

だが第2陣の突入を考慮し始めるよりも先に壕に入ったジュエルたちが出てきた。

「逃げて！」

必死の形相で恐怖をありありと浮かび上がらせて。

「状況の報告を。」

飛び出してきた部下を捕まえて明星が問い詰める。

錯乱状態に近いジュエルも落ち着いた明星を見て少し安定した。

「中は蜘蛛の巣みたいに穴が掘ってあって”Innocent Vision”はその何処かから逃げています。そしてその中に話に聞いた水晶みたいなソルシエルが刺さっていました。」

「蜘蛛の巣、ソルシエル、姿を消した”Innocent Vision”……」

明星がそれらから答えを導きだそうとし始めた直後

ゴゴゴゴゴゴ

突然足元から凄まじい震動が襲ってきた。

「きゃっ！」

「地震!？」

立っていられないほどの揺れにジュエルたちは地面に身を屈める。

だが揺れは収まるどころか激しくなりビシリと地面にヒビまで入った。

「こんなときに大地震なんて！」

「…他が揺れていない。」

明星はこれほどの揺れにも関わらず遠くに見える木々が静かなことに気が付いた。

「これが、グラマリー。」

明星はそれがグラマリーだと気付いたが時すでに遅し、八重花のジオードで掘られた地面はスカスカになっており、そこに玻璃の振動が発生したことで上に乗った100人を超すジュエルの重量を支えきれなくなったのだ。

ビシビシッ

地面に巨大な亀裂が幾つも走り地面が陥没する。

「きゃー！」

「わー！」

誰彼構わず飲み込んでいく。

「これが、本当の魔剣の力…。」

## 第74話 決戦を左右するもの

「完全に裏をかかれましたね。」  
補給を狙った奇襲は逆に罠を張られて一網打尽にされるという結果になった。

それでも撫子の笑みは崩れていない。

度重なる敗北の報でイライラを募らせていく美保には撫子の余裕がまるで理解できずにいた。

「また駄目でしたね。何を考えているんです？」

美保は剣呑さを隠さずに尋ねる。

撫子は動じた様子もなく頷いた。

「もちろん、勝つための策です。」

美保の言いたいことを理解しつつはぐらかすような言動に美保の苛立ちはさらに募る。

「しかし、このタイミングで作倉叶さんと合流しないととなると、”Innocent Vision”こそ何を考えているのか分かりませんね。」

美保の怒りを理解しながらも悠莉はそれには触れず本題を振った。

完全にへそを曲げた美保はそっぽを向いてしまったが正直、話し合いいにはほとんど影響はない。

「もしかして芦屋と作倉に戦わせるつもりがないとか？」

「5000人をたつた3人で潰す気ってこと？」

良子の意見を緑里は馬鹿馬鹿しいと鼻で笑うがすでに2割のジュエルがそのたつた3人に潰された現状を考えると笑ってもしられない。

「しかし現実的には不可能と断言できます。ジュエルからの報告でもソーサリスの全員に疲れの色が見えて来ているとのことですよ。」

序盤は確かに圧倒的だった。

だがそれも体力の続くうちだけ。

後方に待ち構えるジュエルは強く、そこに至るまでにソーサリスは

疲れ、傷を負う。

それが撫子の余裕の理由だった。

それ故に何としても叶を封じる必要があった。

「葵衣。手の空いている部隊をいくつか割いて西部の探索に向かわせなさい。恐らく芦屋真奈美さんが護衛についているでしょうが作倉叶さんの無力化を最優先任務とします。」

「了解致しました。部隊選定後、直ちに任務に当たらせてます。」

葵衣は部隊リストからすぐさま適合する部隊を選んで連絡を入れ始めた。

着実に”Innocent Vision”を追い詰めている感覚に満足げな撫子とは対称的に美保はいつまでもふて腐れていた。

その頃八重花たちは崩れた壕の中にいた。

効果範囲をひび割れである程度限定することで安全圏を確保したのだ。

今は座り込んで疲れを癒している。

「さすがに2時間戦い通しは辛いな。」

「でもまだまだこれからよ。ここで根を上げるようなら作戦は失敗ね。」

八重花も疲れを見せているのに口は辛辣。

由良はそれが鼓舞だと知りつつ表面上は怒りを表す。

「そういう八重花こそ息が上がってるな。ここから先は俺に任せて休んでたらどうだ？」

八重花も挑発だと知りつつ不機嫌になって由良を睨む。

「作戦を立てたのは私よ。だから最後まで見届ける義務があるわ。」

「義務か。堅苦しいな。」

バチバチと火花を散らす2人。

炎と振動で穴の中の温度が上がった。

その2人の間に又ツと明夜の手が伸びる。

「喧嘩は駄目。」

下らないと自覚しつつ引くに引けなくなっていた2人は顔を逸らしながらもあっさり引き下がった。

「それでこっからどうする？このままここに隠つてるとカナとマナの方に敵が行くかもしれないぞ？」

「まあ、そうでしょうね。由良の超音振はあと何回くらいいいけそう？」

由良は指折り数えて眉を潜める。

「撃つだけなら4回だがこの後も戦うことを考えると3回か2回に押さえないところだな。」

「ちよつと少ないわね。明夜のアフロディーテは？」

「何回でも平気。ただ使うと疲れる。」

結局のところ残りの体力次第であり、それが一番の問題だった。

だが1人として”Innocent Vision”だけが持つ神秘の業を口にはしない。

由良は膝に手を置いてグツと体を押し上げた。

「…さて、そろそろ行くか。」

「まだまだ先は長いわよ。」

「頑張る。」

ソーサリスたちは戦う意思を左目の朱色に宿して一時の安らぎの地を後にした。

「Innocent Vision”のソーサリス確認！」

八重花たちが見つからず、西部に進出しようとしていたジュエルの軍勢の前に3人の魔剣使いが姿を現した。

「ソーサリスが3人。近、中、遠距離全部に隙がない。」



明夜は近接戦闘能力が飛び抜けて高く、中距離では八重花の炎がその鎌首をもたげて猛威を振るい、遠距離でも由良の音震波や超音振が襲ってくる。

「1人でも厄介な”化け物”は集まるとさらに手に負えない存在だった。

「固まらないで！散開して包囲しつつ死角を狙うのよ！」

インストラクターからの確な指示を受けてジュエルが動く。

瞬く間に針の筵のように周囲に刃を配置した包囲網が完成した。

だがそれを見ても八重花たちは怯えることもなく不気味な薄ら笑いを浮かべている。

「ここはグラマリーなしで行ってみるか？」

「それはなかなか面白い提案ね。明夜はどう？」

「それなら私の勝ちは間違いない。」

明夜は少し誇らしげにブイサインをして見せる。

完全にジュエルを舐めている言動に周囲から殺気が立ち上るが八重花と由良もそれとは別に機嫌を悪くして目元口元をひくつかせた。

「それは聞き捨てならないな。」

「剣の数や速さだけで勝ったつもり？」

「うん。」

「バチバチと今度は3人で火花を散らせ始める”Innocent Vision”のソーサリス。」

当然ジュエルたちも倒される的役に甘んじることなど出来ない。

「馬鹿にされたまままで終われない！絶対殺す！」

戦場に2種類の殺気が膨れ上がり周囲の木に止まっていた鳥たちが逃げていく。

「攻撃……」

「……スタート！」

ジュエルが動き出すよりも早く手にソルシールを握ったゲームを

始めるべく飛び出した。

結論から言えば、ソーサリスは正真正銘の化け物である。

「誰よ！？グラマリーを使わないソーサリスはジュエルと同じなんて言ったのは！」

ジュエルの1人が悲鳴のような恨み言を呟いて座り込んだ。

その悲痛な叫びは今この場で戦うジュエル全員が感じていた。

同じ魔剣にカテゴライズされていながらソーサリスとジュエルの性能差はグラマリーを封じたからこそ歴然となった。

「おらおら、もっとかかってこいよ！」

由良は常時3人から同時に攻撃を受けていた。

玻璃は1本に対して相手は3本以上。

しかも1人に向かえばそれ以外は死角という条件だというのに由良はまるで後ろに目がついているかのようにジュエルの攻撃をかわし、逆に追い詰めていく。

今も背後から忍び寄った刺突を振り返りもせず避けていた。

「後ろに目でもあるの!？」

「さすがにそこまで化け物じゃないぜ！」

刺突を避けて無防備なジュエルを叩き伏せ、正面にいた2人を一振り倒し

「どんだん来いよ！」

由良は次の獲物を求めて前に進んでいく。

八重花は周囲を包囲するように展開したジュエルの間をまるで流れるように足を止めずに進んでいく。

当然ジュエルは立っているだけでなく斬りかかってくるが八重花は

それすらも流れの一部のように剣で受けるでもなく回避していた。

「何、あの動き！？もしかして見切りの達人！？」

「残念ながら一介の女子高生に会得できるほど生易しいスキルじゃないわね。」

そう言いつつも八重花はまるで全体の動きを知っているかのように淀みない足取りでジュエルの中を歩いていく。

「なんなのよ、こいつら！？」

由良と八重花の尋常ならざる行動にはもちろんタネがあった。

ソーサリスのグラマリーには由良は振動、八重花は炎というようにそれぞれ属性が存在する。

発動の起点はソルシエルとなるが本人もその力の一端を担っており、八重花のドルーズはまさに自身から炎を噴き出させている。

その応用で由良は空気の振動を、八重花は熱の動きを常人よりも鋭く関知できるのである。

それが死角からの攻撃への対応やジュエルの間をすり抜ける技に繋がっていた。

だが、そんな2人ですら目を見張る存在が向こうにいる。

「速すぎる！」

「そんな！？」

ジュエルたちの絶望の声の間を駆け抜ける風。

煌めく二刀はかまいたちのようにジュエルを斬り捌いていく。

その動きを捉えることは出来ず、ジュエルたちは駆け抜けた影を追いかけているようなものだった。

明夜は刃の風だった。

「遅い。止まって見える。」

「そんなに速く動かれたらこっちは動けないわよ！」

明夜は刃の腹でバツバツとジュエルを薙ぎ倒していく。

そのペースは明らかに由良や八重花よりも早い。

「くっ。やっぱり単純な剣での戦闘能力は明夜が圧倒的か。」

「だけどもすみす負けを認めるわけにはいかない。ペースあげるわ

よ。」

「そんな、ジュエルは…」

ジュエルたちに絶望を植え付けながら”Innocent Vision”のソーサリスはゲームに没頭していった。

多くのジュエルが恐怖に戦っている頃、インストラクター服部率いる和歌山ジュエル部隊は激戦を繰り広げている中央部を北から大きく迂回して西部に向かっていった。

「他の部隊がソーサリスを押さえている間に我々は作倉叶を確保する。こちらはソルシエルとは違うシンボルを使う。十分に注意するように。」

西部の入り口付近は木々も少なく平地なので見晴らしがよい。

隠れていなければ離れていても確認できるのだが

「……………」

服部はその平地に静かに佇む人影を見掛けた。

左足は美しき刃の義足、左腕に手甲を備えた”Innocent Vision”でも特異な聖剣を担う魔剣使い、芦屋真奈美は青く輝く瞳を閉ざして佇んでいる。

「目標ではないがあからさまに待っている以上接触しないわけにもいかない。」

ジュエルたちが平地を歩いていくと真奈美はゆっくりと瞳を開いた。青い左目がジュエルたちを見つめる。

「ようこそ。歓迎はしないけどね。」

「それは作倉叶を探させないと言うことか？」

「まあ、君たちの目的が叶だって言うのならそうなるね。」

真奈美はザツと義足の刃で地面を蹴る。

そこは鋭利な刃物でスパツと斬られたような亀裂になっていた。

「我々の目的は作倉叶の確保および無力化。その邪魔立てをすると

「いっなら排除させてもらおう。」

服部が小太刀のジュエルを逆手に構えると部下も一斉に構えを取った。

真奈美も二度三度ステップを踏んで足回りを確認する。

「久々の大きな戦いだ。頼むよ、スピネル。」

真奈美に応えるようにスピネルが光を放つ。

「攻撃開始！」

服部の号令でジュエルの一斉攻撃が開始された。

前と左右から同時に仕掛ける。

「その武器は右半身の守りが薄い。弱点をつかせてもらおうよ！」

左足にスピネルを持ち左腕に手甲を備えた真奈美は確かに右側の装備が皆無である。

左からの攻撃を手甲で受け、正面にスピネルで対抗するなら確かに防ぐ術はない。

「弱点かどうか、ちゃんと見るんだね。」

真奈美は迫るジュエルに対して左足を軽く後ろに引くと

「ハッ！」

防御ではなく斬蹴を打ち放った。

全身を使った回し蹴りはもはや面に対する攻撃であり三方から襲いかかったジュエルは慌ててジュエルで受け止めた。

「ぐっ、重い!?!」

だがスピネルはシンボルの力を継ぐセイバー、魔に対する優位性はジュエルが相手であろうと変わらない。

身体強化を弱体化されたジュエルには抗う力はなく弾き飛ばされた。

「後ろ、取ったわ！」

その時すでに別のジュエルが完全な死角となる背後に飛び込んでいた。

蹴り技で体勢が崩れた真奈美に凶刃が迫り、

ガギッ

「え……」

地面に付いた瞬間にジュエルに向かうように跳ね上がったスピネルのあり得ない軌道の斬撃に阻まれた。

真奈美は駒のように身を回転させており、まるでスピネルの動きに真奈美が合わせたようだった。

そして刃がぶつかれば魔剣相手ならば真奈美が力負けする事はない。「くうっ！」

数瞬で4人のジュエルが弾かれ真奈美はその中央で息を乱すことなく立っている。

由良たちソーサリスの圧倒的な攻撃力による恐怖とは違う、次元の異なる得体のしれなさが真奈美のスピネルにはあるようにジュエルには感じられた。

「スピネルは魔の力に反応する。ちょっと応用すれば自動迎撃も出来るんだよ。」

真奈美はあっさりとさっきの不可解な軌道の斬撃の謎を口にした。だがそれはあの軌道に耐えられる柔軟性と体幹の絶妙なバランス感覚がなければ到底制御できるものではない。

「あたしは戦いたくはない。今からでも帰ってくれるなら後を追ったりはしないよ。」

真奈美には殺意がない。

服部はグッと唇を引き締めて小太刀のジュエルを握り締めた。

「化け物の偽善者め。」

## 第75話 動き出した者

「芦屋真奈美様の参戦を確認、現在和歌山ジュエルとの交戦中です。」

「遂に聖剣を1つ引きずり出しましたね。」

葵衣の報告を受けて撫子が微笑む。

着実に”Innocent Vision”の力を引き出し、弱らせ、ヴァルキリーの勝利へと近付いている実感があつた。

だがまだ真の笑みを浮かべるには遠い。

すでに3割のジュエルが倒され、”Innocent Vision”のリーダーでありこの戦いの鍵である叶の姿を確認していない。戦況を見れば優位であるとはいえまだ油断は出来なかつた。

「でもスピネルが相手じゃジュエルも分が悪いんじゃないかな？元々”Innocent Vision”のリーダーを探すための部隊な訳だし、そっちに支障はない？」

良子がそう呟いた瞬間、カシャンとテーブルの上に美保のカップが落ちた。

本人はそれに気付いていないほどに手を震わせながら驚愕の表情を浮かべている。

「良子先輩が大局を見た発言をしてる!？」

「等々力先輩、今朝何か悪いものを食べましたか？」

悠莉も本気で心配そうな顔をして尋ねた。

「まったく、失礼な後輩だよ。そう思わない？」

精神的に割と大人な良子は怒ったりしないがやはり気分がいいものではなく首を巡らせて同意を求めた。

サッ

「…」

サッ

「…」

スッ

「…」

なぜか先輩＆同年年の2人が目を合わせようとしない。

良子はポリポリと頬を掻いてため息をついた。

「…みんながどう考えているかよく分かったよ。」

「今更ですね。」

悠莉が然り気無く追い討ちをかけるから良子はすっかりいじけて黙ってしまった。

「コホン。」

撫子は微妙な空気を払拭するため咳払いをする。

目配せをすれば葵衣は何も言われずとも頷く。

「すでに別動隊が西部区画への調査に向かっており、和歌山ジューエルへの救援部隊も動いております。」

ピピッ

そこに突然連絡が入る。

「こちらヴァルキリー本部。…はい、…そうですね。」

通信を終えた葵衣の表情はわずかに暗くなっていた。

ヴァルキリーの間に不安が広がる。

「何かあったの？」

「先程の西部侵攻部隊が倒れました。柚木様のアフロディーテが襲撃してきたとの事です。」

明夜と同等の力を持つ命なき甲冑。

明夜がクリスマスパークティで明かしたグラマリーは単純な数の増加以上の戦果をあげて承知している。

「こちらの行動が読まれている、さすがは八重花さんと言うべきでしょうね。」

撫子は知将の姿を思い浮かべて賛辞を送る。

だがヴァルキリーとしてその程度で揺らぐほど矮小な組織ではない。

「Innocent Vision」のソーサリスへの攻撃を強化。迎撃の隙を与えず西部への侵攻も同時に行いなさい。」



たとえ力は弱くても数の戦力がある。

戦術を有効に扱えば1の力しか持たないジュエル10人でも10以上の力は出せるのである。

そして

「そろそろ”Innocent Vision”の抵抗も目に余るようですね。ヴァルキリー、動きましょか。」

これまでのジュエルはランプで言う数札。

ジャックやクイーン、キングの絵札はまだ温存されている。

意見を聞くまでもなく撫子の目は3人に向く。

「良子さん、美保さん、緑里。」

「待つてました。」

「さすがにイライラしてた分暴れるわよ。」

「”Innocent Vision”。今度こそ潰すよ。」

3人は立ち上がるとソーサリスの戦う中央部へと向かっていった。

それを見送った葵衣は3人が完全に見えなくなつてから尋ねる。

「宜しいのですか？ヴァルキリーはオーの襲撃に備えるとお考えだったのでは？」

葵衣の疑問に撫子は頷く。

「ええ。しかしオーは出現の兆しを見せていない。それに”Innocent Vision”を先に無力化することは結果的にオーを全力で迎え撃てるということ。ソーサリス、ジュエリスト、セイントが分断されている今こそが絶好の好機。」

パーティー開始前は”Innocent Vision”とオーの脅威は五分五分だった。

だが実際に戦つてソーサリスの実力、無補給で2000人を打倒する底知れなさを知り、優先順位を変えたのだ。

今撫子にとって”Innocent Vision”は最優先で倒さなければならぬ敵となつていた。

それがたとえ陸の帰る場所を奪うことになるとしても、自らの信念を貫くと撫子は決めていた。

悠莉は紅茶のお代わりを自分で用意して一口飲む。

確かにヴァルキリーの参入によって戦局は大きく動く。

だがそれは勝利と同義ではない。

「勝てるのでしょうか、魔女の造り上げたソルシエールに？」

少なくともこれまでにソーサリスにジュエルが勝った実績はなかった。

2000人の兵を費やしても1人として重傷を負わせることが出来ていない。

ヴァルキリーのジュエルだからと言って勝てる保証はなかった。

撫子は脇に置いておいた無色の八面体の宝石を手を取った。

それはジュエルのコア、”人”を”魔剣使い”へと変える人造の神秘。

撫子はそれを日に翳した。

変化する光の加減を撫子はジツと見つめる。

まるでその向こうに見えるべき未来があるかのように。

「勝たなければならない、越えなければならないのです。ジュエルが世界を統べる力となるためには。」

勝つための秘策はすでに戦いに赴いた3人の手の内にある。

撫子と悠莉は今はまだその結果を待つことしか出来なかった。

由良、八重花、明夜はひっきりなしにやってくるジュエルを相手にしていた。

一度西側に抜けようとした隊をアフロディーテで倒したがその後さらにジュエルが猛攻を仕掛けてきたため今はそんな余裕もない。

ほとんど槍袵のように刃の壁が四方から迫ってくるような状況だった。

「くっ、奴らどんどんあっちに向かってるぞ。」

「とはいえ、こっちもそれどころじゃないのよね。」

「バーゲンセール。」

ジュエルは目を血走らせて八重花たちを殺そうとしている。勝てば褒章や高い地位が与えられるのだから当然だ。

大半は欲望にまみれた武器を振るっている。

それは明夜の言うように自らの求める商品を手に入れるために他者を押し退けるバーゲンセールそのものだった。

傍目から見ても暑苦しいその商品にされてはたまらない。

ひっきりなしに手ではなく武器を伸ばしてくるので当然休む暇もない。

由良は戦いながら玻璃の振動を大きくさせていく。

「ここらで一発やっておかないとヤバくないか？」

「私たちまで戦闘不能にするつもり？それに無駄撃ちは駄目よ。」

明らかに追い詰められているというのに無駄撃ちと言ってジュエルの神経を逆撫でする。

超音振を恐れて腰が引けていたジュエルたちが再び怒涛のように押し寄せてきた。

「じゃあどうすんだ!？」

「こつ、するのよ!とぐる巻け、アーデントレッド!」

八重花がジオードで大きく弧を描くように振ると赤い火線は消滅せずソーサリス3人を囲むように巨大な螺旋を描く火柱となった。

「きゃあ!」

「熱っ!」

炎の結界に阻まれてジュエルの侵攻が停止する。

由良は玻璃を肩に担いでへっつと笑った。

「見世物パンダの気分だな。」

尤も観客が子供で、殺気立っていないければだが。

「猛獣注意。」

餌である”Innocent Vision”に襲い掛かろうと機会を窺う様はむしろジュエルの方が檻に入れられた獣のよう。

だが小さな檻に入っている者こそが本物の獣だ。

「炭になりたくないならさっさと消えなさい！由良、手伝って。」  
八重花が掲げたジオードに由良が玻璃を触れさせる。

微細な振動に揺れるジオードに連動して炎の蛇の揺らぎが大きくな  
っていく。

それに連れて形状が炎の螺旋から炎の柱へと変わっていく。

「ちよつ、冗談じゃないわよ!?」

最前にいたジュエルの髪が触れてたんぱく質の焼けた臭いが出ると  
ジュエルは一気にパニックに陥った。

「早く行きなさいよ！」

「無茶言わないで！」

「邪魔よ！」

死を恐れる少女たちは生き残るために少しでも遠くへ逃げようと他  
人を押し退ける。

そこに仲間を気遣う様子はない。

「無様ね。」

八重花は逃げ惑うジュエルを冷笑を浮かべて見つめた。

「ここで仲間と団結する姿勢でも見せれば少しは見直したものだ  
けど…来世で出直しなさい！」

八重花の声で炎の壁が膨らむ。

それは瞬く間に臨界を迎える不安定な爆弾そのものだった。

「熱波！」

炎の球体が爆発して熱の波動を全周に放ち

「きゃー！」

ジュエルたちの悲鳴が大気を震わせた。

ギンツ

ガキン

爆熱が弾けた頃、真奈美は和歌山ジュエル部隊と戦っていた。

短刀のジュエルを手に1人の力ではなくスピードで集団の力を用いて戦う姿は現代の忍者のようですらあった。

「まさか。」

だが声を出したのは仕掛けたジュエルの方だった。

「セイバーはこれだけの同時攻撃を一度に捌けるのか!？」

叶のシンボル・オリビンが広域の防御を持つことは知っていた。

だが真奈美はそれとはまた別の方法でジュエルの攻撃を防いでいた。

「行くよ、スピネル!」

真奈美は向かってくるジュエルの刃に対して防御ではなく攻撃で応戦していた。

後出しであろうと強制的に魔剣の攻撃を弱体化させるスピネルの力はジュエルの戦術を悉く力づくで押し伏せていく。

周囲からの時間差攻撃も真奈美の変則的な蹴り技ですべて撃ち落とされた。

服部は部下に待機を命じて真奈美を観察する。

眼帯の左目が青く輝きながら服部を見ていた。

「回し蹴りの直後に同じ軌道の後ろ回し蹴りなんて人間業じゃない。」

「魔剣使いの技を常識に当てはめると大変だよ?」

真奈美はいい感じに体が温まったのかトントンと軽くステップを踏む。

その姿はボクサーのようだった。

「聖なる力を持っているというのにずいぶんと野蛮な戦い方をする。」

聖剣の優位性を傘にきたごり押しの戦い方を服部はずいぶんと乱暴に感じていた。

「あたしもそう思ってたよ。だからこそスピネルを綺麗に使おうと考えていた。」

そう言っただけがみこんでスピネルを撫でる。

「でも、この子はあたしが望んで現れたあたしの分身なんだ。そし

てあたしはヴァルキリーのお嬢様たちみたいな綺麗な動きよりもソフトボールみたいに泥だらけになった戦う方が性に合ってるんだ。」

スピネルが真奈美に応えるように刀身を輝かせる。

その光はこれまでよりもずっと力強い。真奈美は立ち上がりわずかに腰を落として構えを取るとジュエル全員を前にグツと表情を引き締めた。

「今は戦い方も試行錯誤中なんだ。せつかくだから付き合ってもらうよ。」

「図々しい申し出だ。」

服部がジュエルを横に振るうと再び部下たちが新しい陣形を形成した。

「だがこちらにも実戦訓練に飢えていた。死んでも恨まないなら相手になる。」

「いいね、友達になれそうだ。」

フツと真奈美は笑い

「馬鹿を言うな。我らは敵だ。」

服部もまた口の端をわずかに釣り上げ

「掛かれ！」

「「おお！」」

「来い！」

血生臭くも爽やかな戦いが再開された。

「つまらない。」

時坂飛鳥は怒号と地響き、そして振動波や炎の飛び交う戦場をあくびを噛み殺しながら眺めていた。

「ヴァルキリーは数で押し潰そうとするだけ。」 Innocent Vision” はそれを倒すだけ。全然面白くない。」

飛鳥はもつと血で血を洗う大乱戦の中に飛び込んでいって両者を殺

そうと機会を待っていたが、現状ヴァルキリーと”Innocent Vision”の戦いはチエスを打つような心理戦の様相を呈していた。

「それに”Innocent Vision”は全然ジュエルを殺してない。」

それも飛鳥が不満な原因だった。

命のやり取りをしているというのに殺さないでいるということは全力ではないのと同義。

手抜きの出来試合など見ていて面白くもなんともない。

「あー、つまんない。」

不満の声に呼応して飛鳥の周囲がざわめき出す。

咲いていた小さな花が強力な圧力を掛けられたように押し潰された。飛鳥はそれを楽しげに見つめる。

「そうね。あんな奴らが飛鳥を楽しませることなんて出来るわけがないんだから。だったら飛鳥が楽しくしてあげればいいじゃない。」  
ざわざわと飛鳥の周囲がさらにざわめく。

戦場では炎の爆発が消え去り、新たな戦いが起ころうとしていた。それを見て飛鳥の目が笑みに細められる。

「へえ、こっちは少しは面白くなりそう。でも、飛鳥がもっと面白くするって決めたのよ。」

飛鳥はゆっくりと丘を降り始める。

眼下では戦いが始まるうとしていた。

「とりあえず、かくれんぼしてる子を引きずり出そうかな。」

## 第76話 ジュエルの秘策

ゴオオオオ

爆炎が周囲の全てを吹き飛ばした爆心地。

「はあ、はあ。」

「つたく、無茶すぎだ。」

” Innocent Vision ” だけがその戦場に立っていた。周囲に倒れているジュエルは気を失っているのか死んでいるのか、あるいは死んだふりをしているのか。

「はあ、超音振はヴァルキリーにも有効な手札よ。ふう、温存しておかないとまずいわ。」

話しているせいでまだ息が整わない八重花。

頭脳派の八重花には由良や明夜ほどの体力はない。

その差が徐々に表れ始めていた。

「大分疲れてきたみたいね。これならうちらが出てくる必要もなかったかしら？」

土煙の向こうから掛けられた聞き覚えのある声に八重花たちは一斉に目を向ける。

朱色の輝きが3つ近づいてきていた。

土埃が風に流され、その向こうからヴァルキリーの神峰美保、等々力良子、海原緑里が姿を現した。

由良が然り気無く八重花を庇うように前に出る。

「随分と早かったな。てつきりヴァルキリーはジュエルのおこぼれを横取りするために待ってるんだと思ってたぜ。」

あからさまな挑発だが生憎暇すぎて出てきた我慢の足りない3人はあっさり引つ掛かって眉を釣り上げた。

この中には冷静に判断を下す抑止力となり得る人材がいなかった。

「へえ、ジュエルにずたぼろにされてる割に元氣じゃない。」

「ずたぼろ？まだ一発も傷を受けちゃいないぞ。目まで腐ったか？」



ブチブチと美保の堪忍袋の緒が千切れ、青筋が浮かぶ。

「あんまり美保を虐めないでくれるかな？」

「ガルルル。」

良子が猛獣を宥めるようにドウドウと押さえつけながら由良に苦笑を向ける。

「飼い主ならしっかり手綱を握つとけよ。」

「うーん。どつちかと言えば飼い主は悠莉だよ。」

「人を家畜扱いするな！」

ギヤーギヤーと騒ぐ美保を由良と良子が距離を置いて弄る。

「良子、いつまで遊んでるんだよ？」

緑里が苛立った様子で声をかけた。

（もう少し粘りたかったが、仕方ねえか。）

由良は少しでも多く八重花の体力回復の時間を稼ぐつもりだったがさすがに3人いると上手く誘導できなかった。

荒れた美保は理性を取り戻し不機嫌さ5割増しで由良を睨み付ける。「本当に殺されたいみたいね。だったら望み通り八つ裂きにしてあげるわよ！スマラグド・ベリロス！」

美保が呼ぶと朱色の瞳が光り左手に翠色の細身剣スマラグド・ベリロスが現れた。

「ラトナラジュ・アルミナ。」

「ベリル・ベリロス、この手に！」

良子と緑里もそれぞれのジュエルを手を取った。

放たれる気配はやはりジュエリアクラブのものとは比べ物にならないくらいに強大だった。

「相変わらず作戦を無視して独断専行しているようね？」

「作戦なんて聞かなかつた東條八重花に言われる筋合いはないわよ！」

とうとう臨界を突破した美保はスマラグド・ベリロスを大きく振りかぶりながら八重花に斬りかかった。

八重花も体に巻き付けるように後ろに引き絞り

「はっ！」

真っ向から斬り結んだ。

ギリギリとつばぜり合いを始める2人。

「まったく、美保は。早速始めちゃったよ。」

「そういうお前も随分とやる気じゃないかよ。」

良子は呆れを含んだ呟きを漏らしていたが由良は戦いを見て良子の闘志が膨れ上がるのを感じた。

良子はニツと口を釣り上げて頬をかく。

「強い相手を見ると体が疼くのはスポーツマンの性かな？」

由良は首を横に振って玻璃を突きで構えた。

「違うな。そいつは：戦士の本能だ。俺と同じな。」

そしてもう一組のペアは

「うわあ、一番嫌な相手に当たっちゃったよ。」

緑里が明夜を見て露骨に嫌そうな顔をした。

明夜は小首を傾げる。

「嫌なら戦わなければいい。」

ある意味正論でありこの場では無意味な言葉を緑里は笑い飛ばしてベリル・ベリロス強く握った。

「そういうわけにもいかないよ。それにクリスマスパーティーの雪辱を晴らす絶好の機会を不意にするわけにもいかないから。」

「わかった。」

明夜は緑里の戦う意志を確認すると両の刃を交差させて腰を落とす。

「その戦う理由を相手に求めるの、ちょっと嫌だな。」

明夜の戦いはまるで防衛戦のように攻撃されるから迎撃すると言っているようだった。

そして防衛戦は中に守るべきものがあるのに対し明夜にはそれが感じられないことが緑里の不快に思う要因だった。

明夜は動じることにも侮辱に憤慨することもない。

「私は戦う気はない。必要なのは”Innocent Vision”を護ること。その邪魔をするなら、斬る。」

ただ静かに、そして確固たる意志を変わらぬ表情に宿して明夜は地面を蹴った。

「美保様、良子様、姉さんがソーサリスとの戦闘に突入しました。

これを機にジュエル部隊を西方へと進撃、芦屋真奈美様の無力化と作倉叶様の搜索に当たらせませす。」

葵衣が現状報告と作戦進行を口にする。

双方向通信器の向こうからは戦闘で巻き起こる破壊音や獣のような叫びが聞こえている。

「いよいよですね。わたくしたち”人だった者”が造り上げた力が魔女の神秘を打ち崩すことができるのか、これはヴァルキリーの未来を決定する重要な戦いです。」

撫子が用意したソルシエールに対抗する策が通用するならば”Innocent Vision”との戦い方が大きく変化してくる。だがこれでもソーサリスに届かないのであればジュエルがソルシエールを超えるのは非常に困難になってくる。

紅茶のカップを握る撫子の手には何時もよりも力が込められていた。悠莉は1人固唾を飲んで結果を待つわけでも直接戦いに赴いたわけでもない立ち位置にあって手持ち無沙汰だった。

何気無く視線を遠くに向けると一瞬北側の丘に黒い何か動いたように見えた。

「あれは……」

だがそれも瞬きをした次の瞬間には消えていた。

「どうかされましたか、悠莉様？」

「……いえ、何でもありません。」

悠莉は口にするのを躊躇った。

それがオーならすぐにも撫子と葵衣に指示を仰いで対処に当たる所だが悠莉が見掛けたのは人のように見えたのだ。

（こんな軍の演習場に人がいるのでしょうか？ もしくは熊でも見間違えましたかね？）

それはそれで問題で、悠莉はクスリと笑いながらも心の何処かが晴れない気分でした。

「行きなさい、レイズハート！」

翠色の光が八重花の左右と後ろ、そして前方からは美保が迫る。

「その程度で私を倒せると思ってるの？」

八重花は刃を後ろに引く際に地面をジオードで撫で付けた。

刃の触れた大地が燃え上がり八重花の背後に炎の壁が発生、レイズハートを飲み込んでいく。

「なっ!？」

驚愕する美保に対し八重花は前だけに意識を向けて炎を纏ったジオードを全力で振るった。

ガギイン

刃と刃がぶつかり合い拮抗する。

だが

「熱いわよ！」

刃から放たれる熱が美保を攻め立てる。

つばぜり合いですら八重花は攻撃としていた。

「レ、レイズハート！」

美保は苦し紛れにレイズハートを生み出して八重花に襲いかからせた。

「厄介な技ね。」

顔を歪ませた八重花は美保を押し返すとそのまま炎を噴出して光の刃を撃ち落とした。

美保はギリツと奥歯を噛んで八重花を睨む。

「厄介なのはどっちよ！髪の手がちょっと燃えちゃったじゃない！」

「無駄毛処理よ。」

「無駄って言うな！」

美保の怒りに呼応してレイズハートが飛び交うが八重花は難なく捌いていく。

「やっぱりその程度の数では私を止めることは出来ないわ。そろそろ終わらせてもらおうよ。」

「っ！舐めるんじゃないわよ！」

ジオードの赤い炎が立ち上り巨大な刃となって美保に襲いかかった。

「はっ、はっ、ふん！」

良子はブンブンとハルバードを振り回して由良に斬りかかる。

斧に当たる部分が主武装であるため大振りで軌道は読みやすいものの遠心力と良子の膂力で放たれる斬撃は岩をも砕きかねない破壊力を宿している。

「怖い攻撃だな。ぶつかったら一発で骨が砕けそうだ。」  
ブウン

空気を圧縮した鈍器のような攻撃に由良は肌でその危険性を認識している。

それが分かっている由良は受けることはせず回避に専念していた。

「当たらないね。でも逃げ回ってるだけであたしを倒せるかな？」

無限大（ ）を描く軌道の斬撃を放つ良子は攻めている実感から強

気に出た。

シュッ

笑みを浮かべていた良子の頬を何かが掠めていった。

笑顔のまま冷や汗をかく良子の前では射程範囲外で玻璃をライフルのように構えた由良がいる。

「お前は刃の付いたコマだな。近づけば大変だが、さて、遠距離からの攻撃ならどうだ？」

今度は由良が勝ち誇る番だった。

ソルシエール・ラトナラジユならばバラスという射撃能力があったがラトナラジユ・アルミナにはそれが無い。

さらにルビヌスによる能力強化でも由良を捉えられなかったことから良子の攻撃が当たることはないという理に沿った結論を導き出した。

良子はラトナラジユ・アルミナを両手で握ってわずかに上体を前に傾けた。

「だったら、近づいて斬るまでだ！」

良子は地面を踏み抜くように力を込めて飛び出した。

明夜は2つの刃をまるで重さを感じさせない動きで鋭く振り回す。

だがその一撃は重く緑里はベリル・ベリロスで受ける度に体勢が揺らぎそうになっていた。

「相変わらず、”化け物”が。式！」

絶え間なく続く斬撃の嵐に緑里もただ曝されているわけではない。

振り上げられた左手の刃の横っ面に人形の式符が追突して斬撃の軌道を逸らした。

だが明夜はその斜めにずれた剣を横へと転じ、回転しつつ右手の刃で緑里を攻撃した。

「っ！？」

体勢を崩した筈なのにまるで初めから決めていたような動きを見せつけられて緑里の方が硬直してしまった。

咄嗟にベリル・ベリロスで防ぎつつ式に背中を引つ張らせて急速離脱したため直撃は免れたが危ないところだった。

明夜はヒュンヒュンと刃を振り回すとまた交差させる構えを取った。緑里は2つの式を侍らせて明夜を睨み付ける。

「弱ってきてる筈なのに、接近戦が滅茶苦茶強い。」

「ありがとう。」

「褒めてない！」

「？」

微妙に本気が冗談か判別できない明夜を相手に精神的な疲労も感じつつ緑里は攻め方を考えて…

「アタック。」

いる暇もなくまた明夜が突っ込んだ。

もっと式を活用すべきだが数が減るのを警戒しているのか防御や緑里の援護に使われている。

「それじゃあ私は倒せない。」

明夜は一気に勝負を決めるために両手の刃を振り上げた。

その時、美保が、良子が、緑里が、ニヤリと笑みを浮かべ

「コランダム！」

「エアブーツ！」

「レイズハート！」

あり得ない名を叫んだ。

だが、“Innocent Vision”のソーサリスたちはそれ以上にあり得ない物を見た。

八重花は美保を守る青き障壁を。

由良は風のように加速する良子を。  
明夜は完全な死角からの2つの斬撃を。

「まさか!?!」

炎の太刀が防がれた八重花が驚愕し

「馬鹿な!?!」

バックステップで距離を取ろうとしていた由良が踏鞴を踏み

「...」

二刀を振り上げた体勢の背中に向かってくる翠色の刃を明夜がかわ  
そうと体を捻り

「喰らいなさい、スターインクルージョン!」

「これがあたしの全力だあ!」

「式光乱舞!」

ヴァルキリーのジュエルたちの最大の一撃が”Innocent  
Vision”のソーサリスに襲いかかった。

「ジュエル部隊、応答願います。現在ヴァルキリーのメンバーの参  
戦により我が方が優勢です。ですが相手はソーサリスであり油断は  
出来ません。この隙に作倉叶様を発見し確保します。各員尽力をお  
願います。応答願います、ジュ...」  
バキンッ

通信機から聞こえてくる声が機械ごと踏み砕かれて黙りこむ。  
その足元には人が倒れている。

さらにはその隣にも、その周囲にも、その一帯にも人が倒れていた。  
大地は赤く染まり、鉄の臭いが蔓延していた。

その異常な世界に”人”はいない。  
立っているのは闇の異形オー。



数多くの闇が戦場に乱立し咆哮を上げている。

その中心に立つのも人の姿をした人ならざる者。

「やっぱりジュエルじゃ面白くもなんともない。」

「あ……くあ……」

飛鳥の目の前ではジュエルの1人が空中に吊り上げられていた。

不自然に浮かび上がった少女は恐怖を張り付け苦悶の表情を浮かべている。

ギチギチと圧迫が強まり骨が軋む。

「アアッ……」

「はっは！いいよ！」

バキン

何かが碎ける音がして獲物はだらりとぶら下がるだけになってしまった。

「もう壊れちゃった。」

飛鳥の顔が不快に歪む。

だがすぐに嗜虐的な笑みに変わった。

その視線は西に向いている。

「早く出てこないと全部殺しちゃうよ、セイント。」

## 第77話 デュアルジュエル

粉塵と血飛沫が戦場に飛ぶ。

脇腹を押さえながらしゃがみ込んでいた由良は顔をしかめながら振り返った。

「何だ、今の力は？」

ルビヌスの全力とはまた違う、まるで空気抵抗を取り払ったかのような加速。

発動時に叫んだ名前には聞き覚えがなかったがその技は知っていた。  
「ウインドロード、それは海原妹の技じゃないか？ジュエルは他のグラマリーまで使えるようになったってのか？」

問い詰める由良を余裕の笑みを浮かべた良子が見下ろして口を開いた。

光と式の縦横無尽の舞が明夜に殺到した。

「うっ！」

さすがの明夜も突然の全方位攻撃には対応できず防御した。

皮膚を切り裂き肌を焼く乱舞を耐えた明夜はたったの一発で傷だらけになっていた。

刀剣で防御していた頭を覗かせて緑里を見る。

その目には微かに動揺が見えた。

「どうかな、ボクの式光乱舞は？式よりも使い勝手は悪いけど数に制限がないのはいいね。」

緑里は上機嫌に話しながら腰に手を回した。

「うわっ！」

光の怒濤に襲われた八重花は地面に倒れた。

これまでに蓄積していたダメージもあり力が入らず起き上がれない。美保はその背中を靴の裏で踏みつけた。

「ぐっつ！」

「いい様ね、東條八重花。あんたもうちらを裏切らなければもっと強い力を手に入れられたって言うのに。」

緑里は嗜虐的な笑みを顔に張り付けてグリグリと足を踏み込む。

その度に呻く八重花の反応に悠莉の嗜好を理解しかけるほどだった。美保は太股に巻き付けたホルスターに手を伸ばした。

美保、良子、緑里、3人の左手には脇差し程の長さの刀身を持つもう1本のジュエルが握られていた。

「デュアルジュエルシステム。」

撫子は葵衣から戦況を聞いてホッと一息つく。紅茶のカップに口をつけてそう言った。

右手で紅茶のカップを持ちながら左手はソーサーではなく膝の上に乗せた短剣を握っていた。

色は真紅、ラトナラジュのジュエルである。

「単独の能力ではソルシエルの性能に劣るジュエルで勝利するため、グラマリー発現を目的としたセカンドジュエルを所持できるようにプログラムを組み換えた新しい力ですか。」

これまでのジュエルは発現するグラマリーに合わせて個別にチューニングが施されていた。

だがデュアルジュエルシステムはこれまでに蓄積したジュエルによるグラマリー発現を解析し、それらに適合する能力をジュエルに付与することで、複数のグラマリーを同時に扱えるようにするものだ。

った。

「ソルシエールのグラマリーは確かに強力無比です。しかしそれは巨大なキャノン砲のように取り回しが難しく個人の資質によって能力が大きく左右されるものでした。しかしジュエルは汎用性を重視した多くの者が手にする力。足りない力はグラマリーの数で補えばいいのです。」

それが撫子の用意したジュエルの秘策だった。

そしてデュアルジュエルの力は十分以上の成果を見せた。

「デュアルコアの正常作動を確認。異常動作の徴候は見受けられません。」

葵衣が別のモニターに映し出されたパラメーターを見て常にジュエルの動きをチェックしている。

状況は万全。

だが葵衣には一つ懸念があった。

それはデュアルジュエルとは別のこと。

（西部に向かった複数のジュエル部隊との連絡が途絶したまま。芦屋真奈美様、あるいは作倉叶様に襲撃されたのでしょうか？）

考えを巡らせつつも自らが納得できないでいる。

発見すれば戦闘に入るよりも先に連絡が入るはずであり、叶や真奈美が全員を問答無用で倒すという暴挙に出るとも信じがたかったからだ。

（いったい何が？第三勢力：オーが現れたのでしょうか？）

疑問はすぐに可能性へと繋がる。

だがまだそれを撫子に告げるには調査が足りないと判断したため

「葵衣？」

「何でもありません。」

黙り込んだのを心配する撫子には何も言わずに首を横に振り

『西部にオー出現の可能性あり。至急調査せよ。』

村山率いる葵衣直下の部隊にメールでの指令を出すに止めた。

その可能性が否定されることを願いながら。

デュアルジュエルを手に入れたヴァルキリーは優位に戦闘を進めていた。

「どうしたのよ、もっと反撃してきなさいよ？」

美保は青い障壁の裏に身を隠しながらレイズハートを操作して八重花を攻撃する。

本家よりはサイズが小さいので壁というよりは盾であるが鉄壁ぶりは健在で八重花のジオードの刃も炎も通さない。

「悠莉の力がこれほど厄介だとは思わなかったわ。」

八重花は悔しげに呟く。

疲れで威力が落ちてきているとはいえジュエルでありながらソルシエールの攻撃を防ぐグラマリーは感嘆せずにはいられなかった。

そしてこの言葉は美保の神経を逆撫でするためではなく本心だった。先程は驚きでスターインクルージョンを避けられなかったが冷静に対処すれば5つに満たない光の刃を捌くのは難しくはない。

それよりも攻撃が通用しないことの方が問題だった。

「悠莉じゃない、あたしの力！」

だが図らずもその言葉で美保は激昂した。

レイズハートの鋭さが増し、背後から3つと美保が放った2つの光刃が八重花を襲う。

ゴウ

だがそのすべてをジオードの炎が消滅させた。

八重花は口に嘲笑を張り付けて剣を構える。

「人の技を借りて粹がるなんて滑稽ね。」

「あたしを馬鹿にするなあ！」

美保は怒りに任せてスマラグド・ベリロスとショートサフェイロスを振り回す。

青の障壁と翠の光刃が溢れても八重花は余裕を崩さなかった。

「ただやり方はわかったわ。そろそろ反撃させてもらうわよ。」  
「消える！」

吼えるように美保が両手を振り上げて迫ってくるのを八重花は腰を落として迎え撃つ。

「はあああつ！」

長い鉾槍の柄の下端を両手で握った良子は一瞬で由良の眼前に滑り込むように現れると大振りして地面に向けて叩きつけた。

その間にいる由良は叩き潰されまいと全力で横に飛ぶ。

紅色の光を宿した斧が大地に激突し蜘蛛の巣のように亀裂が発生し、衝撃の余波で地面が爆発した。

「無茶苦茶なパワーだな！」

由良は飛来する瓦礫を玻璃で叩き落とす。

距離を取ったところで今の良子には無関係だ。

それでも僅かでも予備動作が見える距離を保つことで由良はラトナラジュ・アルミナの直撃を免れていた。

良子は自身も瓦礫に曝されて傷つきながらも楽しげな表情だった。

「このスピードは病み付きになりそうだよ。本当に風になった気分だ。」

スプリンターではない良子でも早く走りたいという願いはいつも抱いている。

その夢が擬似的に叶えられて純粹に喜んでいた。

「別にこっちに害がなけりゃ好きなだけ走ってる。」

逆に由良は迷惑そうに眉を寄せるが良子は意に介さない…というより気付かない。

「Innocent Vision」を倒したらゆっくり、じゃないな、速く走らせてもらうよ。」

一応やるべきことは見失っていないので再び良子がラトナラジュ・

アルミナを握り締めた。

腰にはショートセレストライトがホルスターで固定してある。

(とりあえずあれをなんとかするしかねえか。)

頭を捻ったところで結局のところ打開策はそれしか思い浮かばなかった。

スペリオルグラマリーXtailでも使えれば真正面から向かっていくこともできるが本調子ではない玻璃では使えず、それ以前に由良の体が持たない。

まだ終わりの見えない戦いで無茶をするわけにはいかなかった。

ならば良子が力を増した起点を叩くしかない。

「倒させてもらうよ、羽佐間由良！」

「猪野郎に俺を止められるか？」

由良が玻璃を構える正面から良子が力強く大地を蹴って飛び出した。

「行け、式、光刃！」

緑里の操作によって式符と翠の光が明夜の周囲を飛び回る。

童子や白鶴の複雑な操作をソルシエールで行ってきた緑里は美保以上にレイズハートの操作が上手く式と連携した攻撃を組み上げていた。

「式は旋回。光刃、攻撃！」

戦術を口に出しているがそれで見切れるほど式光の動きは単純ではなく明夜ですら足止めされるほどだった。

小太刀サイズのショートスマラグドを逆手に握り右手のベリル・ベリロスで式光を操作する。

緑里は堂に入った戦闘スタイルを確立していた。

3つ2組、光と式符が明夜の周囲から離れず隙を見て襲撃する。

全方位に絶えず警戒を続けさせることで敵を肉体だけでなく精神的にも追い詰めていく。

だから

「なんで当たらないんだよ、柚木明夜!？」

その絶対包囲の中でなおも避け続ける明夜は異常だった。刃を押さえようとするとする式符を小手先で捌き、襲い来る光刃を叩き落とし、死角からの攻撃すら回避する。

明夜はまるで一步分しかない空間の中で踊るように止まることなく動き続ける。

光と紙吹雪が織り成す剣の舞いに緑里は一瞬見惚れかけブンブン

頭を左右に振って気を入れ直した。

「式符の数を減らしたくないから攻撃が光の方に集中してる。だからこつちにだけ注意していればいい。」

「っ!？」

明夜は避けながら緑里の指示のパターンまで読んでいた。

確かに緑里は出せる数は3つだが無尽蔵に生み出せるレイズハートを攻撃の主体にしていた。

だが攻撃されている最中にそれを見破るのは至難の技のはずだ。

明夜はそれをやつてのけた。

「…お前は、何者なんだ?」

緑里は以前から感じていた明夜の異質をここに来てより強く感じるようになっていた。

それはInnocent Visionを使う陸を前にしたような不気味さ。

魔剣を手にした緑里をして明夜の存在が”化け物”のように感じられた。

シャキン

明夜の二刀が一振りで6つの光と式符を切り落とした。

緑里が明夜に恐れを抱いて操作を甘くしたほんの一瞬の出来事だった。

明夜はブンと両手を振り下ろして緑里を見る。



その感情を映さない瞳が緑里をまた脅えさせた。

「私は、柚木明夜。ナウなヤングのレディ。」

「今時の女の子はナウなヤングなんて言わない！」

思わずツツコミを入れてしまった緑里に対して明夜は首を傾げるのだった。

葵衣の命で調査に出た吉葉ジュエルは激戦を繰り広げるソーサリスとデュアルジュエルのヴァルキリーの戦いを遠く横目に西部を目指していた。

「凄すぎ。」

「あれがデュアルジュエルの力。そしてあれがソルシエールの力。」  
誰もがその力に魅入られてしまう。

それほどまでにジュエルたちとは次元の違う戦いだっただ。

それを悔しく思う者もあれば追いかける意思を諦める者もある。

「今は調査が先決です。皆、オーの襲撃も懸念されるので警戒を。」  
村山の声でざわめきが収まり吉葉ジュエル部隊は西部へと続く平地に向かう。

そこは地で大地が赤く染まった地獄だった。

鉄の臭いが大気に満ち、大地を埋め尽くすように肉が転がっている。  
そこには死が溢れていた。

「うっ。」

血の気が引いた顔で呆然とその光景を見ていたジュエルの1人が口を押さえて走り去っていく。

それを皮切りにジュエルたちはその場から逃げ出していく。  
だが村山は止められない。

（ここは、地獄なのか？）

村山自身が1秒でも早く逃げ出したかったからだ。

「ぎゃああ！」

その背後から聞こえた突然の悲鳴に慌てて振り向くとそこには黒い水晶のような剣を血で真つ赤に染め、頬についた血を嬉々として舐めとる”化け物”が立っていた。

”化け物”は吉葉ジュエル部隊を見回して不機嫌そうに目を細める。

「また外れ。このままじゃ全員殺すまで出てこないかな？」

”化け物”は何でもないことのように殺すと言った。

さつきまで人だった物は胸に大きな穴が空いて肉に成り果てた。

その未来が、死が目の前に存在している。

「あ、…あ…」

誰もが恐怖に震えて動けない。

口を開いた瞬間に殺されそうな張り詰めた空気に呼吸さえも殺しているのを助けなど呼べるはずもない。

”化け物”は黒い水晶剣を杖のように地面について身を預けた。

「まあ、このまま殺していけばそのうち出てくるかな？それじゃあ、死んで。」

”化け物”が残忍な笑みを浮かべた瞬間、村山の目の前で何の前触れもなくジュエルの頭が飛んだ。

まるで人形の首をもいだような手軽さで。

噴き上がる血の雨にジュエル全員が戦意を、生きる希望を失った。

”化け物”がゆっくりと村山の首筋に切っ先を突きつけた。

「バイバイ。恨むなら”Innocent Vision”を恨んでね。」

朱色の左目が開かれ

ガキン

刃は村山を貫くことなく逸れていた。

「え？」

村山の目の前には若草色に輝く眩き短剣が見えた。

飛鳥が愉悦の笑みを、村山が茫然とした視線を出所に向ける。

「よつやく出てきた。正義の味方。」  
そこには表情を固くした作倉叶がいた。

## 第78話 三つ巴の大戦

村山は呆然と見ていることしか出来なかった。

呼吸をするだけで命が削られていく感覚が暖かな光に包まれた途端に消失していた。

村山を庇うように立ったのはヴァルキリーの救援ではない。

（作倉、叶）

ヴァルキリーが探していたこの戦いの鍵を握る人物、叶だった。

「…。」

叶は首を巡らせて村山の無事を確認するとわずかに微笑みを浮かべたがすぐに表情を険しくさせて前を向いた。

「どうしてこんな酷いことを。」

叶は周囲を見回す。

無数の亡骸が地面に倒れ伏している。

試したことはないが叶のシンボル・オリビンを用いても死んだ者は甦らない。

セイントは神の力を宿すからこそ摂理を超えた力は振るえないのである。

悲しげに目を伏せる叶とは対称的に”化け物”、時坂飛鳥はクツクツとおかしそうに笑った。

「あー、可哀想に。誰かさんがいつまでもかくれんぼしてるから誘き出すための生け贄になっちゃって。やっぱり強いキャラクターを召喚するには相応しい代償がいるんだね。」

「そんなことのために…酷い。」

人の命をゲーム感覚で扱う飛鳥を見て叶は首を横に振った。

飛鳥はそれまでの楽しげな表情が一変して不愉快そうに変わった。

その途端に空気がざわめき出した。

「こんなことになってるっていうのに怒りがないなんて、やっぱりセイントっておかしいんじゃない?」

叶は被害にあつたジュエルを悲しみ、残忍な行いをした飛鳥を憐れみこそすれ燃えるような怒りを宿しはしなかつた。

飛鳥はそれが気に食わない。

怒りに我を忘れた叶と戦うためにジュエルを惨殺してきたのだから。「怒っています。ですが、それ以上に悲しいです。この人たちを救つてあげられなかつたことが。」

叶はオリビンを逆手に握つて腰をわずかに落とす。

それはもう逃げ隠れる意志がないことを示していた。

「ようやく面白そうな戦いが出来そうね。でもその前に…オーツ！」まるで咆哮のように大声で飛鳥が名を呼ぶと大地や木の陰から紅色の目をした黒い異形が湧いて出てきた。

それは叶たちの周囲に止まらず遠くにも出現しているのが見えた。軍演習場が闇色に埋め尽くされていく。

「さあ、殺戮パーティーの開演だよ！」

光と炎の戦場に、

大気が震える激闘に、

光舞い人舞う舞台に、

そして戦いを見守る戦乙女のお茶会にも、人型の闇が姿を現した。

「「オー!?!」」

「葵衣！」

「残存するジュエル部隊は至急本部へと退却。オーを迎撃します。」  
オーの出現を察知していた葵衣は撫子の指示を受けると即座にジュエル各部隊に指令を出した。

まだ力あるジュエル部隊が多く残っているとはいえ散発的な戦闘をさせるよりも集団戦闘をさせるべきだと考えたためだ。

各所からすぐさま返事が来る。

そんな中

「こちら福岡ジュエル部隊。綿貫紗香さんが等々力様の援護に向かうと飛び出していきました。」

紗香の独断専行の報が入る。

「搜索しますか？」

「必要ありません。ただちに本部に集合してください。」

葵衣にとっても紗香は目をかけているジュエルだが1人のために多数を危険に晒すわけにはいかないので切り捨てた。

（もしもここで倒れるようならばヴァルキリーと共に戦うことは出来ないでしょう。）

単独行動をするならば良子や美保のように力を示すしかない。

だから葵衣は一瞬だけ紗香を心配するとその存在を意識から消し去った。

「お嬢様。各地でジュエルとオーの戦闘が開始されました。本部到着予測は最短で5分です。」

「そう。」

撫子がゆっくりと立ち上がると悠莉、葵衣も席を立った。

周囲を見回せばあちこちからオーが本部に近づいてきていた。

「ならば、少なくとも5分間はこの数をわたくしたち3人で退けるしかありませんね。」

「花鳳様、退けるだけでいいですか？」

悠莉がクスクスと笑いながら尋ねる。

撫子もクスリと笑みを溢し悠莉と葵衣を見た。

2人とも頷いて応じる。

「ならば言い換えましょう。オーを駆逐し、集うジュエルの道を開きましよう。」

排除の意思を示したヴァルキリーにオーが吠える。

多重奏の雄叫びを前にしても3人のヴァルキリーは表情を変えるところはない。

「Innocent Vision」と戦うことに比べればオーは恐れるほどではないですね。サファイロス・アルミナ。」

悠莉は左手に顕現した幅広の両刃剣を両手で構えてオーを見据える。

「オーの介入は想定内です。これを機に”Innocent Vision”を切り崩す突破口を見つけます。」

葵衣は今回の戦いのために新造したセレストایت・サルファを右手で握り感触を確かめた。

「ここがこの戦いの大きなターニングポイントです。ジュエルの力、そしてオーの力を利用して”Innocent Vision”を倒しましょう。」

太陽の錫杖アヴェンチュリン・クォーザイトを高々と天へと掲げた撫子は

「攻撃開始！」

サンスフィアの閃光を戦いの狼煙として撃ち放った。

「オーッッ！！」

オーの大軍を前に悠莉は微笑みを浮かべるとサファイロス・アルミナを地面に突き立てた。

攻撃手段を自ら封じた悠莉に2体のオーが襲いかかる。

「せっかちですね。」

悠莉は追い払うかのように左手を横に振るうが当然オーは向かってくる。

鋭い爪を振り上げたオーは

ヒュヒュン

飛来した2つの青い宝石によって弾き飛ばされた。

気が付けば悠莉の左手には短剣が握られており、宝石は悠莉を守る

ように控えるように斜め後ろについた。

「行きなさい、コランダムコア。」

緑里の式のように物質であるコランダムの宝石は主の言葉を受けて不規則な軌道で飛翔してオーを弾き飛ばしていく。

その間を抜けてくるオーもいたが

「コランダム。」

その攻撃が通じる前に青き障壁に阻まれ、無防備な背中をコアに貫かれた。

それでもオーの数は一向に減じない。

「どうしましょう?」

悠莉は困ったように眉根を下げて数秒、何か思い付いたようにポンと手のひらを打った。

コアは悠莉が口に出す必要もなく飛んでいき敵中で静止する。

それは悠莉を最後の一点とした巨大な正三角形だった。

魔の三角地帯の内側にあるオーはパリパリと空間が軋む音を聞いた。悠莉はゆっくりとした動作でサフェイロス・アルミナを引き抜き天に掲げた。

「さあ、お行きなさい。コランダム!」

そのグラマリーの名を発した瞬間、サフェイロス・アルミナと2つのコランダムコアが共鳴し青い光の壁を生み出した。

その壁が内側へと収縮していく。

「オーッ!」

オーたちは壁に攻撃を仕掛けるが高い硬度を持つコランダムは砕けず、最後には宝石となって転がった。

戦場の中心に三角形の無人の空間が生まれる。

「はあ、久し振りですね。内部の操作までは出来ないようですが。」  
悠莉はソルシエルを失って以来の絶望していく者の姿を見て恍惚とした表情を浮かべた。

その目が集まってくるオーに向けられる。

「精神の苦痛を味わいたい方はいませんか?」



フフフと底冷えのする笑みを浮かべながら悠莉はゆっくりと前に歩み出していった。

「はっ！」

葵衣はセレスタイト・サルファを使って次々にオーを狩っていた。エルバイトで得られたデータを用以て造られたためエアブーツやエアコートも使用可能でありグラマリーの効率が向上していた。

（左後ろ。）

エアコートで知覚を広げた葵衣は振り向かなくても敵の位置を察知する。

紙一重で爪をかわしながら隙の出来た胴体を両断する。

葵衣は一对多数の状況でも一騎当千の力を存分に示していた。

しかし敵は1000を超えそうなほどに多く1体ずつ倒す葵衣の周囲では数が減っているようには見えない。

まだまだ余力は十分にあるもののこのままではソーサリスに仕掛けた物量作戦と同じことを受けるはめになる。

葵衣は足を止めると左手を胸に当てて瞳を閉じた。

「お嬢様、そのお力をお借り致します。」

開いた左の瞳が朱色に強く輝きを放ち、左手に末端に球のついた杖が現れた。

ショートアヴェンチュリン、葵衣のデュアルジュエルである。

葵衣が意識を込めると球体が太陽の輝きを宿す。

「エアブーツ。」

葵衣が前傾姿勢で大地を蹴った瞬間オーの間を風が吹き抜けた。

「!?!」

標的を見失ったオーが周囲を見回すと地面に蹲る葵衣の姿を見つけた。

その背中に向けて襲いかかろうとしたオーの体が太陽の橙色に包ま

れる。

浮かび上がったのは交差した2本の光の線。

上空から見ればそれは巨大な十字架を象っていた。

葵衣は立ち上がり左手に握ったショートアヴェンチュリンを振る。

「ソーラークルセイド。」

その言葉を引き金に光の十字架が一気に膨れ上がり内包した光の粒子が四方八方に打ち出された。

光の十字架の側にいたものは勿論のこと、そこから派生する円形の空間全てがまるで太陽になったような眩い輝きに包まれた。

光が消え去った後に残ったのは土煙とその奥に輝く朱色の輝きだけだった。

撫子はアヴェンチュリン・クォーザイトを手にその下端に取り付けた刃を見た。

皆が口々に意外だと言ったデュアルジュエルはショートラトナラジュユだった。

もともと両手で扱うアヴェンチュリン・クォーザイトのために持たなくても扱えるように手を加えたのだ。

杖と槍の特性を兼ね備えたジュエルを撫子はしっかりと両手で握る。

「わたくしは接近戦闘を得意とするわけではない。」

それは自分が一番よく知っている。

なればこそ身体能力の向上が見込めるラトナラジュを選んだように思えるが、そうではなかった。

「わたくしは言わば正しき魔女の姿を受け継ぐ者。ならば力ではなく術を強化すべきです。」

そう言った自己満足の域に近い思いでラトナラジュを選択したのだ。

「一方向に力を押し出すグラマリーがラトナラジュだと言うのならば。」

撫子は両手でアヴェンチュリン・クォーザイトを構えて杖の切っ先をオーの群れに向けた。

力を込めると太陽の意匠が輝きを放ち出す。

「サンライズ！」

撫子がそう叫んだ瞬間、アヴェンチュリンの先端から小型のサンスフィアの弾丸がまるでマシンガンのように高速で撃ち出された。

ガガガガガ

ダダダダダ

そんな発砲音が聞こえてきそうなほど射出の度に閃光を放ち弾丸が飛び出す。

わずか秒に満たない時間で真正面に立っていたオーが蜂の巣のように盛大に風穴を開けられて消滅していった。

光を放ち終えたアヴェンチュリン・クォーザイトの先からは煙が立ち上りますますマシンガンだった。

「射出速度と指向性の向上。やはりルビナスの特性はアヴェンチュリンのグラマリーとの相性が良いですね。」

撫子がデュアルジュエルに求めたのは弱点の補填ではなく利点の強化だった。

素早く動けるようになるのではなくそもそも動かないでも戦えるように強くなるという選択は最良の選択と言えた。

秒に数十の光弾を放つサンライズの一斉掃射は扇状の空間の敵を喰い破って消滅させた。

オーは初めて鉄砲が戦場で投入されたのを見た武士のように恐れを見せた。

だが一つ武士とは違うのは

「オーッ！」

オーの中にも砲を持つものがあるという点。

腕に砲身を持つオーはすでに撫子に照準を合わせて弾丸を放とうとしていた。

撫子は声に気付きアヴェンチュリン・クォーザイトを向けながら振

り返ろうとするが遅い。

漆黒の弾丸が秒速数百メートルの速さで

バンッ

と轟音を響かせながら放たれ

バシユ

アヴェンチュリンの通過した光の帯に阻まれて消失した。

「その攻撃は確かに黙視できないほどの速度です。しかしそれゆえに狙いは点でしかない。面で防ぎさえすれば脅威に感じる必要もありません。」

理屈では間違っていないがあれほどのエネルギーを相殺する力のあ  
る壁を咄嗟に生み出すのは容易ではない。

それを成し得てしまうのが花鳳撫子であった。

本部を強襲したオーはたった3人の圧倒的な力に押し返されてたじろいでいた。

「やああああ！」  
ズバッ

その背後から合流してきたジュエル部隊が現れて攻勢に加わった。

あちこちからジュエルとオーの戦う声が聞こえ始める。

これでヴァルキリーはオーを挟撃した形となり一気に有利になった。  
撫子が本部のもつとも高い台の上に立ってアヴェンチュリン・クオ  
ーザイトを掲げた。

太陽の意匠が光り輝く。

「さあ、ジュエルの戦士たち。今こそ手に入れたその力を存分に振  
るう時です。オーなどという化け物に世界を滅ぼさせてはなりません。  
必ずや勝利し、世界を恒久平和へと導くのです。」

「「おー！」」

## 第79話 ジョーカー

本部周辺のヴァルキリーやジュエルは突如現れたオーを迎え撃てばそれでいい。

だが”Innocent Vision”と戦っていた者たちはそうはいかない。

「オーも”Innocent Vision”もどっちも死になさいよ！」

美保は目に入ったものは全て敵だとも言うように問答無用でレイズハートを放っていた。

オーが翠の光に切り裂かれ、あるいは爆散する。だがその中に八重花の姿はない。

「どこに行った、東條八重花ア！」  
美保の怒りで激しく飛び交うレイズハートが周囲のオーを次々に駆逐していく。

八重花はそれをオーの大群の隙間を縫うように駆け抜けながら見ていた。

「せいぜい私の影を追いかけていなさい。」

当然オーは八重花も攻撃してくるがさっきまでの美保との戦闘に比べれば力も守りも速さも全てにおいて低く炎を出すまでもなく斬り伏せていく。

「…いよいよ動き出したわね。」

八重花は表情を引き締めるとオーに紛れて美保から離れていった。

「うわ、オーがいつぱいだ。」

「感心してる場合か？」

由良と良子は互いに警戒し合いながらも意識は周囲のオーへと向け

ていた。

「俺は別に超音振でまとめてぶっ飛ばすでもいいんだが、どうする？」

由良はある程度答えを予測しながら肩に玻璃を担いで尋ねた。

案の定良子は苦笑いを浮かべながら首を横に振る。

「ここで撃たれたら気絶してる間にオーに殺されるから勘弁してほしいね。それで条件は？」

勿論由良にしてみればどちらでもいいのだから面倒な方を選択するにはそれなりの条件が必要だった。

その辺りは部活動の掟に近いので良子でも分かる。

理解を示す良子に由良は口の端を釣り上げた。

「俺はここから離脱する。一応邪魔な奴は片っ端からぶっ飛ばしていくがここは任せるぞ。あと後ろから襲ってくるな。」

「意外と良心的な条件だ。君を逃がすと文句は言われるけど、まあ、生きて戻れるだけマシかな。」

良子は由良に背を向けたままラトナラジュ・アルミナを握って戦闘体勢に入った。

由良も玻璃で突きの構えを取る。

「普通に戦ってオーに殺される心配はしないのか？」

「これでも死ねない理由ってのががあるからね。そう簡単に殺されてはあげないよ。」

もう交わす言葉はない。

由良は仲間と合流するために、良子は生き残るために

「激震波！」

「ルビヌス！」

2人は互いに別方向に向かって駆け出していった。

ギン、ギンッ

「たあああ！」

オーが出現しても緑里の殺意は明夜にだけ向けられていた。むしろ溢れ返ったオーに気付いていないようにすら見える。

「オー！」

オーとしても無視されるのは納得行かないらしく明夜との間に割って入る。

「邪魔！」

しかしその直後光と式符と刃の三重奏でバラバラに分解されてしまった。

緑里の鬼気迫る様子にオーもたじろいでいる。

「撫子様の本当の敵はオーじゃない。インヴィなんだ。だからインヴィを思い出させる”Innocent Vision”は絶対に潰す。」

たとえそこに半場陸がいなくてもその理念を引き継ぐ者たちの姿は陸の存在をちらつかせる。

緑里はそれが、その幻覚が撫子を揺らがせるのが許せなかった。

「それに柚木明夜。君は、危険だ。」

明夜は振り返りもせず左の刃でオーを消滅させながら首を傾げた。

「私は普通の女の子。」

「どこの世界に魔剣を振り回す普通の女の子がいるっていうのさ。」それは緑里にも当然当てはまるわけだがとにかく明夜が普通というのが納得いかずに反論した。

明夜は両手を広げてクルクルとコマのように回って近づいてきたオーを倒していく。

目が回りそうな攻撃に緑里の方が気持ち悪くなった。

「そんな奴等相手にしないでボクと勝負しろ。」くるくる

明夜は聞いていないのか回転量を上げる。

やがてそれは竜巻のようになり中心にいる明夜が見えなくなるほどの刃の渦となった。

「オーツ！」

近づいたオーが問答無用で両断されていく。

「レイズハート！」

緑里は刃のない頭部目掛けて光刃を放ったがバシッと弾かれただけで止まりはしなかった。

「いい加減止まれ！」

緑里は式を飛ばすと頭と足に貼り付けて逆回転に全力で動かした。猛烈な風に式符が弾き飛ばされるが粘り強く押し返しているとようやく回転が弱まっていき、最後には停止した。

「……」

「……」

そこにいたのは左目を朱に光らせ右手に刃を持つ女性型西洋甲冑、オニキスのグラマリー・アフロディーテだった。

呆然とする緑里の前で貼り付いた式符を剥がしたアフロディーテはペコリとお辞儀をすると走り去ってしまった。

その後ろ姿が遠くなってからようやく逃げられたのだと気付いた緑里は

「脱出手品かー！？」

戦場の真ん中で絶叫するのだった。

「オー！」

「きゃあああ！」

ジュエルにオーが襲い掛かる。

オーの戦闘能力はジュエル1人よりも強いいため同数以上の襲撃を受けると致命的だった。

生存への本能かジュエルは手放さなかったものの完全に体勢は崩れて地面に倒れ込み、オーがその上から爪を振り下ろそうとしていた。  
「いやー！」



オーの瞳が殺害の愉悦に歪む。

黒光りする爪が高々と掲げられ

「はっ！」

スピネルの飛び回し蹴りによる光の軌跡がその腕を撥ね飛ばした。

真奈美はスタツと器用に地面に右足で着地するとジュエルを守るように着地した。

「大丈夫か？」

「え、ええ。」

ジュエルは戸惑いつつも立ち上がってジュエルを構える。

気が付けば自然と真奈美の周囲にジュエルが集まっていた。

服部が真奈美に背を向けたままジュエルをオーに向ける。

「部下を助けてくれたことには感謝する。」

「別にいいよ。少なくともあたしにジュエルと戦うつもりはないからね。」

「。。。」

確かに真奈美は応戦はしていたが致命傷になる攻撃は放たなかった。それはそれでジュエルのプライドを傷つけてはいたが力の差は歴然としていたので怒りよりも悔しさが勝っていた。

「あたしは仲間たちと合流したいんだけど、君たちは？」

真奈美は迫ってきたオーにスピネルのミドルキックを叩き込んで胴体を両断した。

服部たちも1体のオーに対して2、3人で応対することで凌いでいる。

「こちらも帰投命令が入った。どうにかして本部まで戻らなければ。」

とは言えオーはどこから沸いてきたのか見渡す限りに存在している。ジュエルの1部隊で乗りきれるような状況ではなかった。

「。。。」

ジュエルの誰もが言葉に出さず視線を真奈美へと向ける。

この状況を打開し仲間と合流するには真奈美の力が必要だと認識し

ていた。

だが真奈美はついさつきまで戦っていた”Innocent Vision”の敵、危うくなつたからといって簡単に助けを求めるのもきまりが悪かった。

（さて、どう誘導すれば協力を取り付けられるか？）

服部は頭の中でいかに代償を少なく真奈美に協力させるかをシミュレーションする。

最悪自分を犠牲に部下を助けようと考える辺りに部隊長としての資質が垣間見える。

だから

「あたしの目的地はもう少し西だから、とりあえず真ん中辺りまで連れていけばいいかな？」

何の条件も出す前から協力を申し出た真奈美にジュエルたちは”化け物”でも見たように仰天した。

「どうかした？」

真奈美は右足で体を支えて左足の膝の曲げ伸ばしで向かってくるオーを打ち倒していく。

それは旧代のゲームの蹴りボタン連打のようだった。

（スパルンX!?)

これを知っていた服部はきつとゲーマーか女子高生ではないのだろう。

真奈美の攻撃でオーが距離を置いた隙に和歌山ジュエル部隊は真奈美の後ろに展開する。

攻撃のためではなく足並みを揃えるために。

「他の仲間と合流できるなら贅沢など言わん。一時だが我らの命、預けるぞ。」

「心得た。行くよ！」

束の間の共闘を実現した混成部隊は青と朱の輝きを瞳に宿しながら一条の光の矢のように戦場を駆け抜けていった。

ヴァルキリーのトランプに見立てた戦力の分布、それで言えばジョーカーである時坂飛鳥はその身から立ち上る黒い憎悪を不可視の触手に変えて立っていた。

ただ1人、セイントである叶にはそれが見えているのだがその負の感情が凝集された集合体を見るだけで気分が悪くなっていた。

「食らいなよ！」

触手の一本が唸りをあげ地面をこそぎ取りながら叶に真横から迫る。長大な鞭のようにしなる触手に対し叶はオリビンで真っ向から迎え撃った。

触手とオリビンから生じた光がぶつかり合って弾ける。

「うっ！」

直撃しては凌ぎきれない一撃を力の流れを読んで弾くのではなく受け流す。

琴から教わり明夜から学んだ護身術は確実に生きていた。

「見えるわ弾くわ、本当に嫌な奴ね、あんた。」

飛鳥の向けてくる悪意の一つ一つが心に突き刺さる。

それはさながら精神攻撃のように叶を攻め立てる。

それでも叶が立ち向かっていけるのはここで逃げ出せば無関係なジユエルが飛鳥やオーの餌食となってしまうからだだった。

「ほらほら、防御だけじゃ飛鳥は倒せないよ？」

「負け、ません。」

叶は一步も動かずに触手をいなし続ける。

叶の後ろには逃げ場を失った吉葉ジユエルがいた。

「応戦しなさい。でないとなあたままで……」

村山は叶に声をかけるが叶は聞こえないのか聞く気がないのか動かない。

村山はクツと悔しそうに俯いて自分の手元を見た。

魔剣は存在しているがここではあまりにも無力だ。

このままではジュエルを守るために削られて叶まで共倒れになるのを待つしかない。

(誰か、救いを彼女に。)

村山はジュエルでありながらそのジュエルを守るために戦う”Innocent Vision”のリーダーの為に祈った。

「これで…」

飛鳥が手を高々と振り上げて巨大な触手を寄り合わせて極太に作り上げる。

「死になさいよ！」

それが叶を押し潰さんと真っ直ぐ振り下ろされた。

叶が良ければ村山たちジュエルは圧殺されるから叶は受けるしかない。

だがそれは滝の上から降ってくる岩石を受け止めようとするように無謀な行為だった。

巨大な触手がしなりながら空気を震わせ

「吹き飛ばしなさい、ジオード！」

「ぶっ飛べ、音震波！」

叶の真後ろから飛んできた炎と振動波で軌道を反らされた。ズウン

触手が地面に激突して地震のような衝撃を生み出した。

「八重花ちゃん、由良お姉ちゃん！」

叶がパツと笑みを浮かべて振り返るとここまで全力で駆けてきたのが荒い息をしながらソルシエールを突き出す八重花と由良の姿があった。

「私もいる。」

「明夜ちゃん！」

さらに明夜も合流して一気に”Innocent Vision”の戦力が集中した。

「真奈美がまだね。とはいえのんびり待たせてはくれなさそうよ。」  
八重花の声に視線を前に向けるとギリギリと歯を噛み締める飛鳥の

姿があった。

「せつかく面白くなりそうなところだったのに、よくも邪魔をしてくれたわね。」

「悪趣味もここまでくれば感心させられるわ。人を押し潰して神様ごっこがしたいなら自分のところのオーを使いなさいよ。」

八重花が挑発して飛鳥はまた怒りに震えるがふと何かに気付いて一転不敵な笑みを浮かべた。

「何よ、ボロボロじゃない。そんなんじゃ飛鳥が遊んであげたらすぐに壊れちゃうじゃない。」

確かに八重花たちソーサリスは隠しきれないほどの疲労が表れていた。

これではまともに戦えないと村山も思った。

八重花たちは無言になり

「はあ。」

そして呆れたようなため息をついた。

由良に至ってはやれやれのジェスチャー付きだ。

そこで村山も思い出す。

なぜ自分達が西を目指していたのかを。

「何のためにこっちの秘密兵器を温存してたと思っているのよ。叶！」

それは”Innocent Vision”のリーダーにしてセイントの叶。

彼女こそが戦局をひっくり返す大いなる力

「癒しの光！」

ゲームでいう回復魔法を扱えるのだから。

現実で瞬時の疲労回復は絶大な意味を持つ。

ソーサリスたちの傷がふさがり、疲れが消えていく。

不機嫌そうに顔を歪める飛鳥の前に全快した”Innocent

V i s i o n” が立った。

「ここからが本番よ。覚悟しなさい。」

それを聞いて村山は気付いた。

” Innocent V i s i o n” にとって今回のヴァルキリーとのサマーパーティーは前座でしかなかったということ。

そして、” Innocent V i s i o n” がそれほどまでに時坂飛鳥というたった1人の少女を警戒していることを。

村山は無力感に苛まれながら瞳に戦いを映すべく顔を上げた。

## 第80話 闇の腕

「いいよ。それならメインディッシュから先に食べてあげる!」  
飛鳥が明確な敵意を放った瞬間に飛鳥から滲み出す闇が触手となり周囲に溢れた。

「ッ!」

叶は悲鳴をあげそうになる口をつぐんだ。  
飛鳥の触手はそれほどまでに禍々しい力を放っていたのだ。

「叶、私たちには時坂の力は見えないから目の役目頼むわよ。」  
「う、うん。」

先ほどは叶が動かなかったことと飛鳥が大振りの仕草を取っていたため軌道が読めたが相変わらず叶以外の誰にも飛鳥の放つ闇の触手を見ることができなかった。

見えない攻撃に対処するのは至難の業なので叶の指示が必要不可欠だった。

「さあ、飛鳥の”Innocent Vision”殺戮ゲームの始まりだよ!」

飛鳥の左目がカツと光を放ち3本の触手が地面を打ったのを皮切りに最悪の敵との戦闘は始まった。

「叶を中心に密集陣形!左右と前で攻撃に備えるわよ!」

八重花は素早く指示を出すと叶に駆け寄り左側についた。

「いきなり攻め込むわけにもいかねえか。」

由良も悔しげに舌打ちしながらも指示通りに集まって右側へ。

「何か、モヤモヤする。」

明夜は飛鳥の放つ触手を感じるのか眉を潜めて叶の前に立った。

「あははは!いきなり亀みたいに殻に閉じ籠るんだ?意気地無し!」

嘲笑しながら闇の触手が振るわれる。

「八重花ちゃん、正面から来るよ！」

「了解。ジオード！」

八重花はジオードに炎を纏わせて構えを取る。

風すらも感じられない触手は猛烈な勢いで八重花に迫り

「今だよ！」

「はあ！」

叶の掛け声と同時に振り下ろされた炎刃が真つ二つに切り裂いた。

” Innocent Vision ” の脇を先を失った触手が通過していく。

軽自動車ほどの直径を持つ触手が特急電車のような速度で至近距離を掠めていったのに叶以外その攻撃への危機感がまるでない。

見えないし風も巻き起こらないが直撃すれば一撃で命を奪う攻撃に叶は改めて飛鳥の能力に恐怖を抱いた。

「どんどんいくよ！」

八重花に触手を斬られてもまだ飛鳥の余裕の態度は揺るがない。

左手を横に振り、右手を上にと2本の触手がその動きに合わせるように鎌首をもたげた。

「前と右から来ます！」

「了解。」

「おう！」

直ぐ様明夜と由良が対応して見えない攻撃を打ち払っていく。

「これならいけるかも。」

叶の顔に僅かながら余裕が見えた。

いかに不気味な触手とはいえ” Innocent Vision ” の仲間たちがいれば敵ではないという信頼と自信が叶を勇気づける。

だが、その触手の根本で飛鳥は口を釣り上げて笑っていた。



” Innocent Vision ” と飛鳥が戦闘を開始した頃、  
ようやく逃げ出せた村山たち吉葉ジュエルは木の間に身を隠してい  
た。

さっきまでの絶望的な力に怯えたジュエルたちはオーに立ち向かう  
心を完全に折られていた。

村山は辛うじて平気だが1人ではオーには勝てないので結果的に逃  
げるしかない。

そして集まったジュエルたちは今後について額を突きつけて話して  
いた。

「すぐにこんな場所から逃げ出そうよ！」

” Innocent Vision ” や飛鳥の力を目の当たりにし  
たジュエルが名誉も何もかもを諦めて逃げることを提案する。

「それよりもヴァルキリーに連絡して助けに来てもらいましょう！」  
もう少し冷静なジュエルは助かるためにヴァルキリーの力を借りる  
ことを提案する。

同じジュエルとは思えないほどの戦闘力を持つヴァルキリーへの信  
頼は崇拜に近い。

あの” 化け物 ” 同士の戦いにも介入し勝利を手にとできると考えてい  
た。

「……」

だが村山は複雑な顔をしていた。

それは以前吉葉ジュエルを指導しているときに葵衣が口にした言葉。

『ソルシエールは、” Innocent Vision ” は本当の  
怪物です。』

その意味を村山は肌で直に感じた。

ヴァルキリーをして” 化け物 ” と言わしめる戦いに参戦させること  
を躊躇ってしまう。

「……とにかく現状を報告します。各自すぐに動ける準備をして。」

すっかり及び腰のジュエルを仲間が叱咤激励する中、壊れた通信機  
の代わりに葵衣の携帯に直接連絡する。

『こちら葵衣でございます。』

一瞬留守番電話に繋がったかと思っただが

『トラブルのようですが何かありましたか？』

実は本人だった。

口調が無駄に丁寧なので実に分かりづらい。

「こちら壱葉ジュエルです。” Innocent Vision ”  
の作倉叶およびソーサリスを発見しましたが現在彼女らは未知の敵  
と戦闘中です。指示をお願いします。」

電話の向こうからも戦闘の音がひっきりなしに聞こえてきておりど  
こも大変な状況だと理解し、救援が絶望的であることにわずかに安  
堵した。

『未知の敵とはオー、もしくはオーの変種でしょうか？』

村山は飛鳥を思い出し、そのイメージにすら恐怖を覚えた。

「詳しくは分かりませんが人のようでした。ジュエルやソルシエー  
ルは見えませんでした。オーとは違うもののように思えました。」

『…。』

ここに来てオーとは違う存在が現れたことに葵衣は混乱しているよ  
うだった。

葵衣が無言になると向こう側の戦闘がより如実に伝わってくる。

オーの咆哮、爆音、笑い声。

微妙におかしな声も聞こえた気がしたが激戦であることは間違いな  
い。

『…確認が必要です。座標をお願いします。ヴァルキリーを向か  
わせます。あなた方は中央のジュエル部隊に合流してください。』  
結局村山の思惑とは逆にあの地獄へヴァルキリーを送り出すことにな  
ってしまったが反論できない。

「…わかりました。」

叶たちの戦っている座標を伝えると壱葉ジュエル部隊は中央に向か  
って歩き出した。

”化け物”の戦場に新たな火種を放り込んで。

「右と左と前！」

叶が切羽詰まった声を出す。

もはや敬語で指示を出すほどの余裕がなくなっていてただ迫る脅威を追い払うために声を張り上げる。

その脅威の根元は高笑いを上げながら見えざる触手を扱っていた。

「ほらほら、まだレベル3よ。ここからレベル4ね。」

そう言った瞬間、飛鳥の扱う触手が4本になった。

「!?!」

叶にしか見えないからこの恐怖は叶にしか分からない。

そしてレベル3までは1人1本でどうにか出来ていたものがついに1つ足りなくなつたのだ。

次の攻撃を凌げるか不安で叶が冷や汗を流す。

叶の様子の変化に気付いて八重花がわずかに後ろに下がって叶に近づいた。

「どうかしたの？」

「黒い腕が4本に増えたよ。」

叶はあれを黒い腕と呼ぶ。

八重花は険しい表情になつて飛鳥を睨み付けた。

嘲笑を浮かべて攻撃する前に叶の精神を削ろうとしている。

(私や由良なら4本でも見えさえすれば対処できる。だけど今の目は叶しかいない。想像以上に厄介ね。)

「行くわよ!!」

飛鳥が手を振り上げると腕の動きとは違い触手は両側から2本ずつ動いた。

「両側から2本だよ!!」

叶の指示を受けた瞬間左に駆け出しながら八重花は叫んだ。

「明夜!!」

「了解。」

明夜の短くも正確な返答と同時に八重花の隣にはアフロディーテが並んでいた。

由良と明夜、八重花とアフロディーテで4本の触手を打ち払う。

「はあ、はあ。」

「レベル4までは行けるみたいね。」

時坂飛鳥の余裕はまだまだ崩れない。

美保と良子は走っていた。

「待ちなさい、芦屋真奈美！」

それはジュエルを中央に送り届けた真奈美を見つけたから。

真奈美はそれに気付いていながら叶を助けるために全力で駆ける。

（叶の力は…あつちか。）

セイントの力に引かれるのかスピネルが叶の居場所を教えてくれる。

だがこのまま美保たちを連れていくのは危険だった。

身を捻って背後から飛んできたレイズハートを避ける。

「また避けられた!？」

その場合美保はそれほど問題ではない。

巻こうと思えばなんとかなる。

だがさつきから静かに追いかけてきている良子は違う。

本気になればルビヌスで真奈美より速く走れるため逃げ切るのは難しかった。

（それでも仲間を危険に晒すわけには行かない。）

真奈美は振り返って応戦しようと足に力を入れ

「うわっ!？」

「何!？」

… ようとした瞬間、美保たちの足元の地面が突然陥没した。

由良と八重花が作った地盤沈下の余波だった。

「チャンス！」

「待ちなさい、待ってって言ってるのよ！」

その好機に真奈美は脱兎の如く逃げ出した。

「レベル4 終わり。」

「はあ… はあ…。」

4本の触手による攻撃が一段落した瞬間叶は緊張の糸が切れて倒れかけた。

「叶！」

「大、丈夫、だよ。」

その言葉には力がなく全然大丈夫ではなかった。

絶えず緊張を強いられる状況で叶の精神が参ってしまった。

これは癒しの光では治せない。

「まあ、よく頑張った方じゃない？ただのセイントにしては。」

飛鳥はヒラヒラと手を振りながらバカにした声をかける。

実は細い触手に指示を出しているのだが叶は気付かない。

そのまま音もなく鏃のように先を尖らせた触手が叶の眉間に向けて放たれた。

（バイバイ、弱いセイント。）

決死の一撃は誰にも気付かれずに飛び

「何となくスターダストスピナ！」

空から飛来した真奈美のスピネルに阻まれた。

「真奈美？」

「なんだか凄い嫌な感じがしたからとりあえず攻撃しちゃったよ。」

触手は真奈美にも見えてはいないが異質な力の分ソーサリスよりも感知していた。

真奈美の登場に飛鳥の表情がようやく歪んだ。

「紛い物が邪魔しに来た。」

「君の邪魔を出来たなら上出来かな。」

真奈美は叶を守るように前に立つ。

これで”Innocent Vision”は完全集結だ。

「くくく。」

それでも飛鳥はおかしそうに笑い出した。

「やっとそろったわね、薄のろ。これでようやく…」

飛鳥は左手を天に掲げる。

「全力を出せるわ。」

カツと左目が朱色の光を放つと掌を中心に闇が凝り、血と闇を混ぜた何かが塔のように突き立った。

それは玻璃によく似た形であり、透明な玻璃とは正反対の闇の色をした魔剣だった。

”Innocent Vision”が戦慄する目の前で不完全だった触手がその力を増して顕現した。

「ソルシエール・モーション。そしてグラマリーモルガナの力、レベル10まで耐えられるかな？」

絶望の戦いが始まった。

実体化したモルガナの威力はこれまでとは桁違いでソーサリスの攻撃を全力でぶつけなければならなかった。

そしてレベル5を終えたとき、”Innocent Vision”は限界まで追い詰められていた。

「はあ、はあ。」

叶の癒しの光を使っても体力と気力の回復が追い付かない。

「よく頑張ったって褒めてあげる。」

だが飛鳥は無傷で余力を残していた。

飛び込んできたヴァルキリーの美保と良子は一撃で排除された。

「特別サービス、レベル10よ！」

「ッ!!」

もう叶の目を頼る必要はない。

だからこそその異形の触手の怒濤に絶望した。

全員が地面に倒れ伏す。

「まだ生きてるんだ。ゴキブリみたい。」

飛鳥は嘲り、モルガナをスツと叶の上に移動させた。

「ゴキブリは潰さないかね。プチツと。」

蠅叩きや丸めた新聞紙のように巨大な触手を振り上げる。

あんなものが直撃されれば間違いなく虫と同じ末路を辿ることになる。

「カナ…」

「起き、なさい、叶！」

「うっ…」

由良と八重花の呼び掛けで意識を取り戻したがもう何もかもが遅い。

「さようなら、無力な聖人さん。」

必殺の一撃が振り下ろされた。

「カナッ！」

由良の音震波では弾けない。

「叶!!」

八重花のドルーズでは焼き尽くせない。

「叶。」

明夜の速度でも間に合わない。

「逃げるー！」  
真奈美からは遠すぎた。

「陸、君…」

叶は自らの命を奪う悪夢を前に、最後にもう一度会いたかった人の名を呼んで瞳を閉じた。

圧力と暴風が迫る。

誰かの叫びが聞こえた気がした。  
そして

目蓋を焼く閃光が閉ざした瞳の裏にまで届いた。

「何が…？」

叶はゆっくりと目を開ける。

もうもうと煙を上げるモルガナは中程から千切れていた。

だがそんなもの、戦場にいる誰も気にしていない。

全ての視線が叶の前に注がれる。

そこには人が立っていた。

否、”人”ではあり得ない。

飛鳥に対する左目は朱色に輝き、その右手には美しき剣を担っている。

「そんな、バカな？」

由良の咳きは全員の声。

その手に握られていたのは刀身が乱反射する光を放つだけの装飾の少ない剣。

存在しないはずの王者の剣。

そして、消えたはずのソーサリス。

叶があり得ないはずのその名を呼んだ。



「海ちゃん…?」

## 第81話 もう1枚のジョーカー

面識のないはずの叶は何故かその雰囲気、気配を知っているように感じていた。

振り返った顔を見た由良たちは改めて驚く。

それは正しくファブレの遣いとして”Innocent Visi on”の前に現れ、戦い、そして最後にはファブレの手で消滅したはずの陸の妹、半場海だった。

「大丈夫だった？」

海は全員の驚きの視線に気付きながらも自然な笑みを浮かべて叶に語りかけた。

「え？…あ、はい。」

一方の叶は混乱の極みにある。

会ったこともない海をなぜ認識できたのかとか魔女ファブレの使っていたアダマスは何故持っているのかとかどうして助けてくれたのかとか、疑問は頭の中に溢れるほどに浮かぶのにその1つとして口から出ていかない。

そしてようやく出てきた一言は

「ありがとうございます。」

助けてくれたことに対するお礼だった。

海は一瞬キョトンとしたあと

「あはっ。」

とても嬉しそうに笑った。

「その、ソルシエルは。」

怒りと憎しみと驚愕が入り交じった声に振り返ると飛鳥が信じられないものを見たような顔をしていた。

対する海はジッと飛鳥を見ていたが最後には首を傾げた。

「初めまして、だよな？」

「飛鳥も会ったことはないよ。だけどその剣は知ってる。アダマス、

魔女ファブレの持っていたという危険なソルシエール。」

飛鳥が忌々しげにファブレの名を口にすると海は苦笑を浮かべてその手に握るソルシエールを撫でた。

「確かに唯一無二の王者の剣だから知ってるよね。でも残念。」

海は苦笑を口許に張り付けたまま、冷たすぎる目を飛鳥に向けた。

「ッ!？」

「情報収集不足だね。アダマスの本当の所有者が誰なのかを知らないなんてね。」

海が無造作にアダマスを差し向けると刀身が光を放ち始めた。

「モルガ…」

シユン

「…ナ。」

ズウン

飛鳥の言葉よりも早く光がその頭上を通過した。

忠実なる闇の触手モルガナは飛鳥の声に従って動き出し、その根本からずるりと落ちて消えた。

海はゆっくりと飛鳥に向かって歩きながらアダマスの刀身を撫でる。

「相変わらず抜群の切れ味だね。まあ、実際は切ってるのとは少し違うけど。」

アダマスのグラマリー・ブリリアントは対象を消滅させる力。

それはグラマリーであろうと例外ではない。

防げるのは叶のオリビンや蘭のオブシディアンのグラマリー・アイギス。

それ以外は当たらないことだけなのだから最強の名は伊達ではない。

「許、さない…」

飛鳥がポツリと呟くと千切れたモルガナがピクリと震えた。

「飛鳥をバカにする奴は絶対に許さない！」

激昂する飛鳥の左目が強い輝きを放つとモルガナが脱皮するようにその根本から勢いよく生え変わった。

「すごい回復力、いや、再生力だね。」

どこか飄々とした雰囲気を保ちながらも海はアダマスを握り直した。  
「そんなソルシエルはいらない。飛鳥が最強なのよ！」

巨大な触手から闇が吹き出し、やがてその姿を隠していく。

「グラマリー・ハイドラ。これで死んじやいなよ！」

不可視の触手が蠢く。

「あの、海さん……」

叶には相変わらず見えているので助言をしようとしたらその前に  
つこりと微笑まれてしまった。

「大丈夫だよ、叶ちゃん。私は強いんだから。」

「強いのは飛鳥だあ！」

高ぶる殺気に世界が震え始める。

サマーパーティーの終盤、隠された2枚のジョーカー、光と闇の魔  
剣使いの戦いが始まった。

海に押しやられて皆と合流した叶は呆然とその戦闘を見つめていた。

そしてそれは”Innocent Vision”の仲間、そして  
それだけに止まらずジュエルやヴァルキリーも同様だった。

ドオン

不可視の触手が縦横無尽に暴れまわり大地を揺らし、  
シン

目映い輝きが物体を消滅させていく。

瞬く間に大地は陥没し、穴を穿ち、存在するものすべてを薙ぎ払う。

「桁違いだな、これは……」

由良がポツリと言葉を漏らした。

今手にしているソルシエルが本調子ではないことは分かっていた。  
それでも、たとえ本調子に戻ったとしても目の前で繰り広げられる  
戦いに参戦できる自信はなかった。

「これがソルシエルの戦い。」

八重花も言葉を失ったように戦いを見ていた。

飛鳥はモルガナにハイドラを使うことで不可視の触手を振るっている。

叶には見えているようだが他の誰にも見えていない。

それは当然海も含まれるが当の海はまるで見えているかのようにブリリアントカッターでモルガナを両断しているらしく傷を負った様子はなかった。

「どうして当たらないの!？」

モルガナは既にレベル10、10本の触手が海を襲っている。

それだけでも十分な脅威だというのにさらにハイドラで不可視化することでかわせる者のない攻撃のはずだった。

だが海は的確にモルガナの軌道を読み、回避や迎撃を行い、合間に反撃まで撃ってくる。

ブリリアントで斬られた触手は再生までに多少時間がかかるためいっしょにモルガナは3本まで減っていた。

7本目の触手を光を纏わせたアダマスで切り落とした海はおかしそうに笑う。

「見えなくてもあなたの視線の動きやこれが放つ殺気が場所を教えてくださいから。」

実際には由良たちは真横を通りすぎても姿を隠したモルガナには気付けなかった。

条件が同じなら海にも見えていないはずだ。

だが、海の自信に満ちた言動はまるで未来を知っているかのように、そう、まるでInnocent Visionを使った陸のようだった。

「そんなことがあるわけない!モルガナは、飛鳥は最強なんだ!」  
飛鳥は陸を知らない。だが海の見せる”人”を超えた力に脅えを自

覚し、その思いがさらに怒りを生み出す。

モルガナが瞬時に再生し一斉に海に襲いかかった。

「あっ！」

叶の悲鳴にも似た声が響き

ドウ

その声を掻き消すように極大の光が蠢く触手を飲み込んだ。

「ああ……」

一瞬にして10本すべてのモルガナを失った飛鳥はペタンと地面に座り込んだ。

「だから言ったでしょ？ そんなにわかりやすい攻撃、当たらないって。」

海はなんでもないことのように言って飛鳥に背を向けた。

振り向いた先には叶たち”Innocent Vision”がいて、そのすぐ近くにはヴァルキリーが集まってにらみ合いをしていた。

「あっちの方が面白そう。」

海は一触即発の両陣営を目に止めて微笑むとスキップでもするような足取りでそちらに近づいていった。

ジュエルを指揮し、オーの猛攻を凌いでいたヴァルキリーだったが、尽きることのないオーの軍勢に徐々に押され始めたため起死回生の策として元凶の打破が提案された。

「オーに元凶が存在するとは報告は受けましたが、まさかあの方ですか？」

「……そのようでございます。 壱葉高校2年2組時坂飛鳥様とお見受けします。」

到着した撫子は地面に倒れた美保たちよりも戦場で戦う二人のソーサリスに目を奪われた。

葵衣はもう1人、葵衣に恐怖を植え付けた半場海の存在に驚愕を隠しきれずにいたがヴァルキリーの他のメンバーは海とは初対面なので気付かなかった。

「……」  
悠莉だけは何か気付いたように海をじつと見ていたが。

「あ、”Innocent Vision”！」  
緑里が少し離れたところで観戦している”Innocent Vision”に気付いて指差した。

乙女としての作法としては疑問ありだが気付かせるには最適だった。  
”Innocent Vision”の意識が戦闘からヴァルキリーに向けられた。

「美保様、良子様。」

葵衣は軽く体を揺すりながら2人に呼び掛けた。

飛鳥についての情報を聞かなければならないかにデュアルジューエルのヴァルキリーとはいえソーサリス相手では数を頼みにしたいからだ。

「いつつ……」

「なによ……」

2人とも気だるそうに身を起こして葵衣を見、騒がしい戦場を見て現状を思い出した。

「あいつ！」

「美保さん、落ち着いてください。」

「へぶつ!?!」

飛び出していこうとした美保をコランダムで強制的に止める悠莉。恨めしげな視線を送ってくる美保の視線を指先で誘導すれば近づいてくる”Innocent Vision”が見えた。

美保の口がニヤリと笑い鼻から血が流れた。

「こつちはこつちで決着をつけようって訳ね。」

「美保。鼻血拭かないとカッコ悪いよ。」

美保はうるさいですと叫んで血を拭った。

「…」

「…」

” Innocent Vision ” とヴァルキリーは互いに警戒しながら睨み合っていた。

元々は両者の決戦だったはずだがいつの間にか第三勢力であるオーの軍勢が参戦し、さらには半場海が乱入してきたことで戦闘の趣旨が変わりつつあった。

現にジュエルはオーの迎撃に当たっていて” Innocent Vision ” のところには1人も来ていない。

「このままではクリスマスパーティの二の舞ですね。ですが逃がしはしませんよ。」

撫子がアヴェンチュリン・クォーザイトを構えるとヴァルキリーが大きく広がる布陣を取った。

「あ、そうか。今のうちに逃げられたんだ。」

叶は今気付いたとばかりにポンと手を叩いた。

臆病な癖に変なところで律儀な叶である。

「デュアルジュエルを6人相手に5人で戦えるかしら？」

美保はすでに追い詰めた顔でスマラグド・ベリロスの刀身を手で弄ぶ。

「いけないことはないけど、面倒ね。」

八重花としては飛鳥の本格参入の時点で撤退を考えていたが海まで出てきてはヴァルキリーに構っている場合ではない。

こんな誰が敵で味方もわからない大混戦の中にいるのは危険すぎる。

しかしデュアルジュエルの力は確かに厄介でそれが六人いるとなると厳しいのは事実。

「…由良、いざとなればここにいる全員超音振で吹き飛ばしなさい。」



「ああ、了解だ。」  
八重花も由良も真剣顔真剣声でやり取りするからヴァルキリーはひきつった笑みを浮かべて一步後退った。

” Innocent Vision ”のメンバーは揺るがない。

勝つためには、生きるためには何が必要なかを分かっているから。

「超音振を使わせる前に倒せばいいのよ！レイズハート！」

「ボクの分も追加！」

速攻で6つの翠の光刃が飛ぶ。

それは吸い込まれるように” Innocent Vision ”に向かい

ドウ

横切った乱反射する光に飲み込まれて消滅した。

改めて確認する必要もない。

光が消えたとき、海はヴァルキリーと向かい合う形で立っていた。

「わたくしたちと敵対すると言うのですか？半場海さん？」

「まあ、お兄ちゃんの作った” Innocent Vision ”

だし、それに…」

海はそこから先を言葉にはせず半分振り返って叶を見た。

「？」

当然叶に海の視線の真意を理解することはできなかったが悪意は感じなかった。

「だから半場海は” Innocent Vision ”にお世話になるので、よろしく。」

ピツと敬礼してウインクする海に全員が呆気にとられる。

その緊張感の無さはやがて怒りを生む。

「ちよつとバカにし過ぎだよ。ルビヌス！」

良子は紅色の光を纏って海に襲い掛かる。

海はアダマスを良子に向けようとして

「ッ！」

咄嗟に地面を蹴って横に跳んだ。

「甘いよ、このエアブーツを使ったルビヌスからは…」

「危ない、良子お姉様！」

良子が海を追って方向転換しようとした瞬間、聞き覚えのある声に一瞬体が硬直した。

そして良子の鼻先を横切る長槍のジュエル。

それは

ガギン

「ジュエルが飛鳥の邪魔をするな！」

自らをグラマリー・ハイドラで隠していた飛鳥に弾かれて地に落ちた。

だがそれにより飛鳥の存在は露呈した。

すでに良子はエアブーツで高速の領域に入りハルバードを振り被っていた。

飛鳥が気付いたときには既に懐に入り込んだ良子が攻撃体勢に入っていた。

「オーの親玉、覚悟！」

「わああああ！」

飛鳥はモーリオンを盾に回したが良子の強力な一撃は防御ごと飛鳥を弾き飛ばした。

猛烈な勢いで飛んでいった飛鳥は迫っていたオーの軍勢の中に突っ込んでその一部をなぎ倒していく。

フルスイングの余韻でその光景を見届けた良子は振り返りながら紗香に笑いかけた。

「助かったよ、紗香。」

「いえ、良子お姉様のご無事でよかったです。」

紗香は弾かれた槍を回収しながら恥ずかしそうにはにかんだ。

だがその目がすぐに険しくなり”Innocent Vision”に向けられる。

「ヴァルキリーの、お姉様方の敵”Innocent Visio

n”。

紗香は初めて本当の”Innocent Vision”と対峙した。

正直叶以外から放たれる圧倒的な気配に足がすくみそうになる。

それでも紗香は目を逸らそうとはしなかった。

いつか悠莉や良子と肩を並べられるようになるために。

## 第82話 戦いの終焉

海は飛鳥が飛んでいった方角を見るとクスリと笑った。

「さて、邪魔な人が飛んでいつちやっただけど、どうしようね？」

「君…さっきのはわざとか？」

ハイドラを気配で見破る海ならばさっきの攻撃も避けるだけでなく反撃できたはず。

それをわざと避けることで良子と飛鳥をぶつからせた。

どちらか、あるいは双方が倒れることを期待して。

「…。」

海は何も言わない。

言わないが口許に張り付いた笑みが肯定しているようにも見えた。

「それが本当ならインヴィみたいじゃないか！」

緑里が戦慄したような声を上げた。

相手の動きを読み、自分の思い通りに行動させる。

それは未来視を使う陸の戦い方に良く似ていた。

海は何も答えずに”Innocent Vision”を守るような立ち位置にいる。

ヴァルキリーは海の持つ力の底知れなさに不気味な恐怖を感じていた。

尤も守られる側にいる”Innocent Vision”も現状に戸惑いを見せていた。

海が”Innocent Vision”に入るといふ発言を素直に受け取れることなど簡単には出来ない。

「Innocent Visionなのか？」

「違うでしょうね。りくも全てを未来視で見ていたわけじゃなくその場を切り抜ける策を状況に合わせて練っていたのだから。」

仲間として戦った機会は少ない八重花だが敵側から見たからこそ「確定した未来へと向かう行動」と「不確定な未来を目指す行動」の

違いを見抜いていた。

そして八重花が海の動きから感じたのは後者だった。

「そもそもアダマスを持っていくんだからアダマスのソーサリスでしょ？」

八重花はわざと呆れたように言うが全員が承服しかねていた。

魔女フアブレは一時的にはいえInnocent Visionとアダマスと同時に扱っていた。

そして、もし目の前の彼女が本当にその双方を扱えるのだとしたら、それは半場海ではなく消滅したはずの魔女フアブレなのではないかという懸念。

「叶、どうする？あたしはリーダーに従うよ。」

「リーダー。」

「あう、ええと…」

こんな時ばかりリーダー扱いされて困惑する叶だが実はそれほど警戒していない。

( やっぱり海さんの雰囲気、ずっとそばにいてくれたみたいを感じる。 )

海の墓に行ったときもそうだが壱葉にいたときも海が近くにいるように感じるがあったと今日直に会ったことで思い出した。

つまりは、それがどんな思惑だったとしても、叶の行動を見てきた上で”Innocent Vision”に参加することを決めたということだと叶は思った。

突発的に、あるいは蘭のように面白そうだからという理由ではないように思えた。

「ちゃんと話してみよう。決めるのはそれからでも遅くないよ。」

「さすが叶ちゃん。」

叶の決意を聞いた海は首を半分だけ振り向かせてクスリと笑った。

馬鹿にした笑いではなく、理解されたことを喜ぶような笑み。

「…確かに、オーとジュエルの大軍とヴァルキリーを抜けていくのにこれほど頼もしい戦力はないわね。とりあえず信じさせてもらう」

わよ。」

八重花はジオードを手に海と並び立つ。

「お兄ちゃんの名にかけて。」

「最高の誓いね。」

八重花は海への警戒を解いた。

八重花にとつて陸の名はそれほどまでに大きい。

「サマーパーティーが終わったら聞きたいことが山ほどある。逃げるのも死ぬのも許さねえぞ？」

由良は玻璃を肩に担ぎながら睨み付けるが海は意味深な笑みで受け流す。

「心配してくれるんだ？」

「バツ！？そんなんじゃない！」

陸の妹ということでも多少そういう感情があったことを見抜かれた由良は顔を赤くして叫ぶ。

そんなやり取りも陸を想起させた。

「久しぶり、でいいのかな？前は敵同士だったけど今日は背中を任せるよ。」

「光荣だね。前でも後ろでもオツケーだよ。」

軽く手を上げる真奈美に海は爆弾発言を返す。

この台詞で顔を赤らめた八重花と由良は耳年増である。

「…海。」

「…さすがは明夜だね。」

明夜はただ並んでその名を呼んだだけ。

だというのに海は少しだけ困ったような顔をした。

「…そう。」

明夜は目を伏せ、いつもと変わらない無感情な瞳で前を見た。

誰にもその裏にある感情の動きはわからない。

そして最後に叶がオリビンを手に前に出た。

「Innocent Vision」に入るなら無闇に人殺しをしたら駄目ですよ。」

「ええと、これはソルシエールで、特にアダマスは手加減が難し…」  
「駄目ですよ？」

叶は笑顔でもう一度言う。

その笑顔の奥にある凄みに海は言葉を詰まらせた。

「…善処するね。」

「はい。私、海さんを信じてますから。」

海は叶の信頼という重圧に苦笑を浮かべた。

八重花、由良、真奈美、明夜、海、そして叶がそれぞれの力の象徴を構えてヴァルキリーに相對する。

「叶ちゃん、指示は？」

海の楽しいな声に叶は笑顔で応え

「パーティーから逃げちゃいましょう。」

盛大に後ろ向きな作戦を口にした。

「なっ！」

「えっ!？」

ヴァルキリーが驚いたときにはすでに”Innocent Vision”は蜘蛛の子を散らすように逃げ出していた。

惚れ惚れするほどに潔い撤退に撫子は感心していた。

「まさか集団であることを捨てて各個に逃走するとは、なんと奇抜な。」

「撫子様、感心してる場合じゃないですよ！すぐに追いかけてみましょう！」

「そ、そうね。追いますよ、皆さん。葵衣はジュエルの手が空いていそうなら道を塞ぐように伝えなさい。」

「西部へはほとんどジュエルは展開していませんが、伝えます。」

葵衣は走りながらも通信機で連絡を入れて指示を出し始めた。

相変わらずどんな状況でも有能な使用人だ。

その横では”RGB”が逃げ出した”Innocent Vision”を眺めていた。

「誰を追うかな？」

「私の足ですと作倉叶さん辺りでしょうか？」

「全員絶対逃がさない！」

ヴァルキリーは特に示し合わせたわけでもないがバラバラに追いかけていった。

「羽佐間由良ア！」

「いい加減しつこいなお前も！」

美保は迷うことなく由良を追いかけた。

”Innocent Vision”は嫌いだがその中でも数々の辛酸を舐めさせられてきた由良と明夜は宿敵扱いになってきた。

「逃げるより追いかける方が速い！レイズ……」

だが翠の光刃が空を駆けるよりも早く

「寝てる、超音振！」

「ひ、卑怯よー！」

空間が激震して美保はあっさり意識を手放した。

「逃がすわけには参りません。」

葵衣にエアブーツであっさりと前に回り込まれた八重花は意外そうに目を見開いた。

「意外ね。ここは等々力先輩がくると思いましたよ。」

「そのように想定されていると考えると私が参りました。」

葵衣は淡々と答えてジュエルを構える。

良子の単純な思考を相手にする方が楽だと考えていた八重花は当て



が外れてムツとした。

ポリポリとつまらなそうに頬を搔いてため息まで溢す。

「それほどまでに残念ですか？」

「ええ。だって……」

不意に、八重花の姿がまるでテレビの画像が乱れたように揺らいだ。

「あなたはあまり驚いてくれないでしょ？」

グラマリー・ファントム。

熱による空間の密度の違いによる屈折面の形成、つまりは蜃気楼による幻影だ。

すでに八重花の姿はここにはない。

「……」

「ほら、やっぱり驚かない。」

「これでも十分に驚いています。」

「そう、ならよかつたわ。」

八重花は手をヒラヒラと振ると幻影はグラマリーの名前が示すように幽霊の如く消えた。

「逃がさないって！式、道を塞いで！」

真奈美を視界に捉えた緑里は人型の式符を投げた。

走るよりも速い式符は真奈美の進行方向でピタリと停止する。

そのまま押し戻すように迫ってくる紙に対して真奈美は一切速度を落とさず右足で地面を蹴って飛び上がった。

そのまま全身のバネを使った大回転の回し蹴りを放った。

「ローリングソバット！」

空間ごと切り裂いたような鋭い斬撃に式符はヒラヒラと地面に落ちる。

「荒っぽいな！しかもセイバーで斬られたら完全に力を失ったよ。」  
式は有限であるため触れるだけで無効化させられるスピネルは天敵

だった。

「人選間違えた！」

今更悔やんでも仕方がなくレイズハートで狙撃するがそれすらもアクロバットな蹴り技で打ち落とされ、結局逃げられたのだった。

「リベンジ、させてもらおうよ。」

「しつこいね。」

エアロルビヌスの速度であつという間に追いついた良子は海の前に立った。

「良子お姉様、助太刀します。」

勇猛なのか無謀なのか紗香も参戦して挟撃の形になっていた。

さすがの海も困った様子を見せる。

「紗香、無理はしないように。これはあたしの獲物だよ。」

「はい！」

実に従順な「妹」の存在に笑みが溢れる。

いかに紗香が物怖じしないとはいえ相手はソーサリスの中でも特に危険なアダマスの担い手。

無茶をさせるわけにはいかなかった。

注意を自分に向けさせつつ紗香の槍で牽制し追い詰めていこうと考えていた。

「うーん。」

だが海は良子を見ていない。

紗香も見えていない。

ただ難しい顔で唸っている。

「どうかした？」

「言っても分からないと思うけど…」

海は本当に困った様子で

「殺さないように手加減するのってどうすれば出来るかな？」

ニヤリと口の端をつり上げた。

途端に溢れ出す絡み付くような気配に

「ヒッ！！」

「っ……」

ジュエルの紗香だけでなくヴァルキリーの良子までもが気圧された。

（これは、とんでももないのに突っかつちやつたかな？）

良子は冷や汗を背中に流してラトナラジュ・アルミナを強く握る。

略奪者は輝く剣を手にゆっくりと歩み出した。

「折角だから手加減の練習に付き合ってもらおうよ。」

そして明夜は唯一身体強化の働かないセントの叶を抱えるようにして走っていた。

「お待ちなさい。」

「これは予想外でした。」

それを追い掛けるのはヴァルキリーのお嬢様方、花鳳撫子と下沢悠莉。

悠莉は本気で追い掛ける気もなかったために叶を標的にしたのだが撫子が一緒ではさすがに大っぴらに手を抜けない。

だがそれ以上に手を抜けない理由がある。

「待ーちーなーさーい！」

背後から周囲を破壊しながら迫るモーリオンのソーサリス時坂飛鳥の存在があった。

実質的には撫子と悠莉もその猛威から逃げているようなものだった。

「後ろからあんなものが迫っている」 Innocent Vision も止まれませんね。仕方がありません。悠莉さん、先にあなたを止めましょう。」

「止めている間に逃げられると思います。後顧の憂いを断つにはそちらの方が重要ですね。お付き合いします。」

ヴァルキリーの2人は足を止めると飛鳥と戦うために振り返った。  
叶は後ろ向きに抱えられていたため2人が立ち止まったのを見ていた。

「撫子さんと下沢さんが追いかけてこなくなったよ。」

「多分”Innocent Vision”より時坂飛鳥の排除を優先した。」

飛鳥をオーの主格と判断してその撃破を優先したのはヴァルキリーの長としては正しい。

叶は不安げに顔の見えない明夜に尋ねる。

「でも撫子さんと下沢さんで…ジユエルでアレを倒せるの？」

「無理。」

明夜は即答だった。

確かにデュアルジユエル化で飛躍的に戦闘能力は向上したヴァルキリーだが、一撃の威力の弱さを手数でカバーしているため純粋な威力の求められる怪獣退治には不向きだった。

「それじゃあすぐに戻って助けないと！」

叶はじたばたと暴れるが腰をガツチリと掴まれていてどうにもならない。

「降ろして明夜ちゃん。」

「駄目。叶が行ってもどうにもならない。」

「あ…」

叶の動きが萎む。

叶はヴァルキリー以上に怪獣退治には向かない。

今味方のいない状況で行つても的になるだけだ。

「でも…」

叶はグッとオリビンを握る。

「助けないと、撫子さんたちが殺されちゃうよ。」

「…」

明夜は”人”を守る側の存在だ。

だがヴァルキリーは敵である。

敵の命まで救いたいと願う叶の心を明夜は本質的には理解できていない。

だが、それを尊いと感じた。

明夜は足を止めて叶を降ろす。

「明夜ちゃん。」

叶は嬉しそうに微笑むが明夜は出口を指差した。

「叶はこのまま逃げる。」

「え？でも…」

戸惑う叶に背を向けながら明夜はオニキスを顕現させた。

「時坂飛鳥は、私が止める。」

その言葉には普段の明夜にはない決意のようなものが感じられた。

「やっぱり私も行くよ！」

叶はすがり付くが明夜は振り返らないまま首を横に振って叶を押し返した。

「10の魔女が動き出したかもしれない。叶は必要。」

「明夜ちゃん！」

明夜は叶の制止にも振り返ることなく、戦闘が開始された方角へと駆けて行った。

「明夜ちゃん…死なないで。」

叶は両手を組んで祈ると明夜の意味を無駄にしないために背を向けて駆けだした。

### 第83話 パーティの後片付けに

” Innocent Vision” とヴァルキリー・ジュエルの命運を掛けたサマーパーティーはオー率いる時坂飛鳥の介入によって決着がつかないまま終結を迎えた。

「こんな決着は納得行きません。すぐにでも総攻撃のご命令を！」  
ジュエルとしての能力が高くヴァルキリー近くに配備されたジュエルたちからはすぐにでも再戦をと望む声もあった。

だが、

「分かつてはいたけど、” Innocent Vision” のグラマリーは凄すぎるし、オーは怖い。」

「今は…疲れたから戦いたくないです。」

それ以上にソーサリスやオーを恐れて気弱になっているジュエルが多かった。

またオーによって命を失ったジュエルへの対応をするためにヴァルキリーは一時休戦という形に落ち着いた。

「命が失われるのは、悲しいものね。」

撫子は” WVe主催のシークレットイベントでの事故で亡くなった” 女性たちの遺族との話を終えて自室に戻ると深いため息をついて椅子に深く腰かけた。

その後ろに立った葵衣は撫子の髪を整えていく。

「本日はご苦労様でした。」

葵衣は丁寧な髪を鋤いて手入れを施していく。

「ですが…やはりお嬢様はお変わりになられました。」

「そう、かしら？」

撫子は気持ち良さそうに目を細めながら邪魔にならない程度に首をかしげる。

「はい。失礼を承知で申し上げさせていただきますと、ソルシエールを手になさっていた頃のお嬢様は…いえ、違いますね。」

葵衣は自分の意見を口に出しながらもそれを自分で否定した。

普段は尋ねれば的確な答えを返す葵衣には珍しい反応に撫子が振り返ろうとした…

「半場様をお慕いし始めるまでのお嬢様は人の命を軽んじられていらつしやるようにお見受けしておりました。ですが今はジュエルの命にすら心を痛められています。」

それよりも僅かに早く葵衣が理由を口にした。

グギッ

「ッ!？」

驚きのあまり首を捻ったまま飛び上がり掛けた撫子は変な風に首が曲がって声にならない悲鳴を上げて悶絶した。

「?どうなさいましたか、お嬢様?」

「あ、葵衣…今なんと?」

撫子は恐る恐る自分が聞いたとんでもない言葉が幻聴であることを願いつつ尋ねた。

「はい。お嬢様はジュエルの命にすら…」

「いえ、その前の…」

葵衣は撫子の聞きたいことが分からず瞳に不思議そうな感情を映しながらも主の求めに応えてその前の台詞を諳じる。

「半場様をお慕いし始めるまでの…」

「それよ!」

だが言い終わる前に撫子がお嬢様らしからぬ声を上げた。

椅子の上に膝立ちになって葵衣の肩を掴む撫子の顔は林檎もかくやと言うほどに赤い。

「わ、わた、わたくしが半場さんをす、好いているというのですか!？」

しかも冷静沈着な撫子らしくない狼狽ぶり。

普段とはあまりにもかけ離れた姿に普通の相手は戸惑つところだ。だが葵衣は普通ではない。

冷静沈着なスーパ―使用人だ。

「そのように御見受けしております。それに加え、お嬢様が好まれる男性に求める素養：お嬢様の理想を理解された上で清濁合わせ呑む広い懐を持つ度量と事象を広く見通せる判断力をお持ちの方は世界広しと言つても数人とおりません。」

「それは！…否定はしませんか。」

撫子自身、自分が難しい性格であることは理解していた。

将来も見合いをして家に有益な結婚相手を迎えるのだと考えていた。そこに少女が夢想する恋愛は存在しない。

…はずだった。

「い、いったいどこからそんな推察をしたのかしら？」

自覚していない心の動きを知られて撫子も動揺している。

出来るだけ論理的に否定する材料を探す。

「半場様をご両親から保護されたことです。その上お暇が出来るとお見舞いに行かれてしていると聞き及んでおります。」

撫子はうぐつと乙女らしからぬ声をグツと飲み込んで平静を装う。

「それはいずれ目覚めた半場さんに恩を着せ、ヴァルキリーへの勧誘をしやすいするためです。」

「ヴァルキリーとしてその判断は如何なものかと思いますが、もう一つの理由は今お嬢様が仰いました。」

撫子は自分の発言を振り返るがヴァルキリーのためという流れでおかしな所はなかった。

「いつからか、お嬢様は半場様のことを『インヴィ』ではなく『半場さん』とお呼びになるようになったら良かったです。それは半場様をヴァルキリーの敵としてではなく一人の男性と認識するようになったためであると浅慮致します。」

「…！？」

撫子はぐうの音も出なかった。

むしろ無自覚で呼び方を変えていたため言われて初めて気が付いたほどだった。

「ま、まあ、わたくしの考えはいいのです。」



わざとらしくコホンとため息をついて撫子は話題をそらす。

勿論万能使用人である葵衣は主の心の機微まで察して追求したりはしない。

「しかし、葵衣とこのような話をしたことはなかったわね。長年一緒にいるというのに。」

「はい。」

そこで撫子の目がいたずらに細められる。

「葵衣は浮いた話はないのかしら？」

さっきの反撃に葵衣にも恥ずかしい思いをしてもらおうという魂胆だ。

意外と子供っぽい撫子である。

「ありません。」

だが葵衣は照れるでも隠すでもなく即答した。

よくよく考えれば幼少の砌からずっと一緒だったのだから何かあれば気付かないわけがない。

「それでも理想の相手くらいはいるでしょう？」

「理想の相手、でございますか。」

葵衣は考えるように顎に手を添える。

自分の事は言えないが全く男に興味を持たない葵衣がどんな相手も理想としているのか楽しみだった。

たっぷり考えた葵衣は真面目な顔で頷いた。

「気高い思想をお持ちで、人を率いる器があり、困難に立ち向かっていく度胸がある方でしょうか。」

「随分と大人物が好みなのね。…？」

その特徴に何となく覚えがあるような気がして首を傾げる撫子を葵衣は僅かに微笑みを浮かべて見ていた。

結局乙女チック談義には花が咲かなかった撫子と葵衣はお茶を飲みながら現状整理をすることにした。

「ふう。こうして葵衣の淹れた紅茶をゆっくり戴けるのは有り難いわ。尤も本当ならば勝利の美酒だったと考えると少々納得できないけれど。」

「ありがとうございます。」

紅茶を飲んで一息ついた撫子が遠くを見詰める。

「証拠の隠滅は万全？」

「可能な限り処置を施しました。しかし軍演習場のあまりの惨状に担当者の方に言われたことがあります。」

「何かしら？」

葵衣はほんのわずかに口の端に苦笑を乗せた。

「一体どんな兵器を造り上げればこれほどの破壊が起こせるのか検討もつかない。花鳳が軍事産業にまで力を入れているのなら是非とも一枚噛ませてもらいたいものだ、と。」

それを聞いて撫子も苦笑せざるを得なかった。

花鳳の新兵器とは言い得て妙だ。

人の姿をしていながらも武器は任意に取り出すことが出来、人の数倍の力と超常の力を振るうことの出来る兵士。

それが量産されれば驚異の軍隊となるだろう。

何しろ見た目は一般人と何一つ変わらないのだから暗殺にこれほど適した人材はいない。

実際ヴァルキリーの犯した殺人はそのすべてが未判明のままだ。

「噛ませるわけにもいきませんから先方には適当に誤魔化しておいで。」

「了解致しました。」

葵衣の適当がどれほどのものか興味を持った撫子だが本題とは離れるので尋ねるのを止めた。

「ジュエルの被害はどうなったの？」

「はい。サマーパーティーに参加したジュエルがヴァルキリーを含めまして総勢4983人。内死亡が判明したジュエルが24名で行方不明が8名です。負傷者は全体の8割前後、4000人程度です。」

が、実際に重傷を負ったジュエルのほぼ全てがオーによる襲撃を受けたものに限られます。」

わずかに遠回しな葵衣の報告に撫子が眉を寄せる。葵衣に対して怒っているわけではない。

葵衣が意図的にぼかした内容を推察してのことだ。

「つまり”Innocent Vision”による攻撃で死亡および重傷を負った者はいなかった、そういうことね。」

葵衣は言葉には出さず重々しく頷いた。

撫子はふうとため息を溢して紅茶を口に含む。

「それは、まあ、叶がリーダーを務める”Innocent Vision”ならば理解できる話ですが、手加減されたというのは些か不愉快ですね。」

「…。」

撫子が不満げに呟くのを聞いていた葵衣がジッと主を見詰める。

「どうかして?」

その視線に気付いた撫子が尋ねると葵衣は暫く逡巡を見せたがやがて口を開いた。

「意図があつてのことか図りかねますが、”Innocent Vision”のリーダーを叶と親しげに呼ぶのは如何なものでしょう?」

「そ、そうね。」

撫子は内心の驚きを極力抑え込んで返事をした。

病室での一件で名前で呼ぶようになったとはいえ、あれは”花鳳撫子”としてであつて”ヴァルキリーの長”としてではない。

だから叶と話したことは葵衣にも伝えていない。

(気を付けないといけないわね。)

このような気の緩みが戦場で起これば自分だけではなく他のメンバーにも危険が及ぶ。

撫子は気を引き締めた。

「それで、あのオーを操っていた方の情報は得られた?」

「はい。時坂飛鳥、壱葉高校2年2組在席です。成績は平均以上を維持しておりこれまでに生活態度での指導を受けた経歴はありません。」

葵衣は資料も見ずにスラスラと飛鳥の情報を上げていく。相変わらずのスーパー使用人だ。

撫子は驚いたようにその報告を聞いた。

「あれだけ歪んだ力を持っていて問題行為は無しというのは少し意外ね。」

「そうでしょうか？美保様も高校では大人しく品行方正です。」

「ああ、なるほど。」

美保を例に出しただけでとても納得する撫子。

まあ、美保に関しては全面的に自業自得なので仕方がない。

「ようやくオーの尻尾を掴んだというのに今は夏休みで遭遇する機会が少ないとは残念ね。」

「それも想定の内だったのでしょう。報告されている住所を調査致しましたが人が住んでいる形跡は発見されなかったとの報告が上がってきています。」

「…ふう。」

撫子は椅子に深く腰かけてため息を漏らした。

今回のサマーパーティーも蓋を開けてみればクリスマスパーティーと同じで第三者の介入で”Innocent Vision”とは決着がつかなかった。

そんな星の下に生まれたのかと嘆きはするが、それは以前ほど重くはない。

ジュエルはまだ十分に人員を残しているしこれからもさらに増えていく。

ヴァルキリー・ジュエルの立て直しはすぐにも可能だった。

だから撫子は”ヴァルキリーの長”としての悩みを終え、”花鳳撫子”個人としての疑問を葵衣に投げ掛ける。

「それで、あれは見つかりましたか？」

主語を排除した会話。

それでも何を指すか知る葵衣はわずかに声のトーンを落として答えた。

「…いいえ。発見されたという報告はありません。」

「そう…。」

本来これは喜ぶべきことだ。

だが撫子は素直に諸手を挙げて浮かれる気分にはなれなかった。

それは撫子と悠莉が救われてしまったから。

悠莉もまた気にしているはず。

撫子は瞳を閉じてその時を思い出す。

それはサマーパーティーの幕引きのことだった。

「きゃっ!!」

コランダムが砕け悠莉が弾き飛ばされる。

「悠莉さん!!」

駆け寄るうにも圧倒的な威力で襲い来る攻撃を防ぐので精一杯の状態。

「これは、本当に”化け物”ですね。」

「飛鳥の邪魔をするなあ!」

十の触手が一斉に迫りくる。

「デュアル・ルビヌス!」

アヴェンチュリンが紅色の輝きを宿して触手を受け止める。

ドン、ドンッ

「ぐっ、っ…!」

だがぶつかる度に撫子の体が地面にめり込んでいく。

どんなに強化しようと触手の一撃は人の押さえきれぬレベルではなかった。

アヴェンチュリンを握る手が衝撃で痺れてきた。

「もう……」

「花鳳様！」

起き上がった悠莉が咄嗟に撫子の前にコランダムを展開する。

バリッ

だがその障壁は3本のモルガナの同時攻撃により一撃で砕け散った。  
撫子に触手の鉄槌が迫り

ザンッ

死神の鎌を二刀が切り落とす。

撫子はその背中を呆然と見つめながらその名を口にする。

「柚木、明夜さん……？」

なぜ明夜がここにいるのか、なぜ自分を助けるのかわからない。

「私が相手をする。今のうちに逃げて。」

明夜は振り返ることもなく臆する事もなくジュエルをして”化け物

”としか思えない時坂飛鳥へと向かっていく。

この時撫子と悠莉は逃げ出すことしか出来なかった。

振り返らずに走った2人の背後で一際大きな振動が響いた。

そしてその日を境に、柚木明夜が消息を絶った。

## 第84話 いない者たち

ダンッ

壁が抜けそうなほどに力強く壁を叩く音がした。

「もう1週間だぞ！なんで見つからねえ！？」

由良は鬼気迫る表情で吐き捨てた。

別に誰に当たっているわけでもなく、むしろ自分の無力さに怒りを覚えていた。

尤もその怒鳴り声を間近で聞く人間は怒られているようにしか感じないわけだが。

「落ち着きなさい、由良。叶と真奈美が借金取りに追い詰められた女の子みたいな脅え方をしてるわよ。」

八重花が微妙な言い回しの例えを出して窘める。

見れば叶と真奈美は身を寄せ合って震えていた。

借金取りというか機嫌の悪い父親に脅える娘のようだ。

だが熱くなっている人間に冷静な指摘は時に逆効果となる。

由良は睨みをそのまま八重花に向けた。

「落ち着けるか！むしろなんで落ち着いていられるか俺には分からねえよ！」

サマーパーティーから1週間、世の学生は夏を謳歌する長期休暇に入っている。

だが1週間前、パーティー会場から逃げ出した”Innocent

Vision”の仲間の中に明夜の姿はなかった。

「あの軍演習場には入れない。携帯は通じない。家の場所を知らない。1週間待ったが連絡1つない。この状況でどう落ち着けてんだ！？」

由良はもう一度壁を殴り付ける。

家全体が揺れたように感じてパラパラと天井から埃が落ちてくる。

「もう1週間なんだからいい加減落ち着きなさい。家は私が調査し

ているしヴァルキリーから情報を聞き出せないか手を打っているところよ。」

八重花は真正面から由良を見返す。

どちらも明夜を心配していて由良は気を揉み、八重花は全力で捜索している。

由良もそれを理解はしているがやはり納得は出来ず、睨みあうような重い沈黙が場に満ちる。

「ごめんなさい。私が明夜ちゃんを止めなかったから。」

叶はほとんど泣き顔寸前で謝罪した。

真奈美が抱き締めてポンポンとあやす。

「叶のせいじゃないよ。」

叶に謝られると由良としては非常にバツが悪くなり乱暴に咳払いをして座り直した。

「よかったです。危うくこの社務所が倒壊するところでした。」

琴はホツとため息をついて胸を撫で下ろす。

ここは太宮神社の社務所、”Innocent Vision”の頻繁に集う場所だ。

ソーサリスの身体強化がどれほどのものかわからないがそのまま殴られ続ければ柱の1本や2本折られていただろう。

琴はお茶を淹れ直すために席を立った。

微妙な雰囲気により良は視線を逸らしながら頬をかく。

「…悪い。」

「誰も悪くないわ。」

八重花は素っ気なく、優しさのある返事をする。

ただ友を心配していただけの少女たちが悪いはずがなかった。

悪いのは”Innocent Vision”に喧嘩を吹っ掛けたきたヴァルキリーであり介入してきた時坂飛鳥だ。

「見付かかっていないと言えばここのところオーを見かけないね？」

真奈美が叶を離しながらそんな疑問を口にした。

明夜同様サマーパーティーから全くオーの出現が確認されていないか



った。

「オーの皆さんも夏休みなのかな？」

「ぶっ！」

「くくっ、そりゃ面白いな。」

叶がぼやんとナチュラルにボケると場は一気に和やかになった。

「先程までのピリピリした感じが無くなりました。さすがは叶さんです。」

そこに琴は絶妙なタイミングで戻ってきた。

まるで言うか絶対聞いていたとしか思えない。

「というか嫌な雰囲気から逃げるためにお茶汲みに出たとしか思えない。」

せつかく和やかな雰囲気になったので八重花はそこにつっこむことはしなかったが。

「？」

だが当の本人の叶だけは自覚無しで首を傾げていた。

「オーを操っていたのが時坂飛鳥だとすれば理想的には明夜が彼女を倒してオーは消滅したってとこね。」

八重花は敢えて”理想的には”を付けた。

それはまだ楽観視していないということ。

明夜を見つけ、その口から戦いの結末を聞くまで八重花は安易な結果を受け入れない。

「叶さん。何はともあれサマーパーティーは終わったようですが今後の”Innocent Vision”の活動はどうなっているのですか？」

琴が世間話のように切り出した内容に全員の視線が叶に向かう。

「ええと、明夜ちゃんを探するのは当然として…」

それについては誰も依存はない。

問題はそこから先。

ヴァルキリーとの決着を改めてつけるのか、あるいは戦いを避けるのか。

オーに關しても同じことが言える。

全員それぞれに思うことはあるがリーダーである叶の意見に耳を傾けた。

叶は一生懸命悩んだ末に顔をあげた。

「夏休みです。」

社務所の空気が停滞した。

誰もがその意味を反芻して吟味するが何度演算しようと得られる解は同じになる。

「それはもちろん今は夏休みだけどそれがどうかした？」

真奈美が尋ねると全員が一斉に頷いた。

一糸乱れぬ動きに叶は圧倒されつつも答える。

「ヴァルキリーの人たちだって今は夏休みです。オーもいつ出てくるかもわかりません。だからヴァルキリーやオーが動き出すまで”

Innocent Vision”は何もしません。」

それが何の解決にもならず問題の先送り、あるいは事態の悪化を招く可能性があることは理解していた。

「…ふっ、それもいいかもな。」

「そうね。」

「そう言えば夏休みなんだね。」

「だけど体も心も疲れた今、”Innocent Vision”に必要なのは休養だった。」

叶はそれを自覚して…いるわけがないので無自覚なまま全員を思いやり「夏休み」にした。

完全にはりつめた雰囲気が消し飛び

「あははは。」

誰からともなく笑い声が上がった。

やっぱり自分の偉業を理解していない叶はキョトンとしている。

「クスクス、やはり叶さんは叶さんですね。」

「ははっ、まっただ。太宮院、悪いがお茶をもう一杯くれ。」

「はい、ただいま。ですが皆さんは名前でわたくしは名字なのは何故なのでしょう？」

少し不満を口にしながら琴が出ていくと3人の視線が由良に向いた。「それでなんでなんです？」

「実は名前で呼ぶのが恥ずかしいほど意識してるとかかしら？」

「え、そうだったんですか？」

女3人姦し娘は当人をほっぽりだして騒いでいる。

由良は疲れたようにため息をついて頭を掻いた。

「お前らは後輩だし戦ってる仲間だろ？ だけど太宮院は元同級生だしそんなに接点が無かった。だからだ。」

すっかり忘れられているみたいだが由良は魔女ファブレと”Innocent Vision”の戦いに出席日数を犠牲にしたため留年している。

つまり元々は同級生だった。

そして不良をやっていてあまり学校に顔を出さなかったのだから接点はなかった。

理由としては妥当なものだった。

だが話題に乗った乙女たちがその程度の正論で引き下がりはない。「ですけどもう仲間ですし。」

「お友達ですし。」

「今後”Innocent Vision”と”太宮様”との関係を良好にするためにも名前で呼ぶべきね。」

八重花だけ打算的だが期待の隠った3対6つの目に由良はたじろぐ。

「楽しそうですね。なんのお話ですか？」

琴がお茶をお盆に乗せて戻ってきた。

3人の視線が由良を急かす。

「どうぞ。」

琴は由良の前に湯呑みを置いた。

由良はそっぽを向きながら湯呑みに手を伸ばし

「ああ、悪いな…コト。」

ボソリと礼を言った。

琴はクスクスと優しく笑いながら

「どう致しまして。由良お姉ちゃん。」

「なっ!?!」

「わぁ!」

爆弾を投下した。

由良は顔を赤くして絶句。

叶たちも予想の上を行く反応に驚いているのか喜んでいいのか判断つかない悲鳴をあげた。

騒ぎの張本人である琴は袴の袖で口許を隠して微笑む。

「冗談です。同い年ですし仲良くしましょね、由良さん。」

「…今の冗談でお前の株がかなり下がったがな。」

由良はジト目で琴を見るが本人は涼しげに受け流す。

「株など少しの出来事で大きく変動するものです。」

陸ほどではないが先見の力によって株の変動を予測できる琴が言つと妙に説得力があつた。

「まったく、食えない奴だ。」

「ふふふ。」

何にせよ年長組の関係も収まるところに収まってホッと一息。

…となるとここで由良がまた怖い顔をした。

和やかムードを一瞬で引き締めるのだからさすがは泣く子ももつと泣かせる羽佐間由良である。

「で、サマーパーティーでうちに入るって言っていた新参者は今日も来ないわけか?」

新参者、半場海の姿はこの社務所にはない。

尤も叶ですら信じていいのか疑問を抱いているからこの場においてものんびりお茶を飲めるとは限らないが。

それでも由良や八重花が海を気にするのは情報を聞き出すためだ。

「戦場で別れたきり見てないね。」

「あのタイミングで出てきた時点で”Innocent Visi

on”とヴァルキリーの戦いだけじゃなくオーの動きまで掴んでいたと見るべきよ。多分私たちより多くの情報を持っているわ。”  
“そういう事情から” Innocent Vision”としては警戒をしつつもコンタクトを取りたい訳だが、真奈美が言った通り戦場でバラバラに逃げ出したあと一度も姿を現していなかった。

「全員揃って夢を見てた…わけじゃないよね？」

叶が自信なさげに口にする。

確かにサマーパーティー終盤は勢力図がごちゃごちゃしていて混乱していた。

極限状態で幻を見たのでは、ということだった。

「面白い考えだけど見たのは私たちだけじゃないし時坂飛鳥を退ける力も持っていた。あれが幻覚だったとは考えにくいわね。」

「それにアダマスの復活なんて悪夢以外の何物でもねえしな。」

八重花も由良も頭ごなしに否定はしないがやはり現実的な意見ではない。

「でも半場の妹はあたしたちの目の前で煙になってファブレに変わった。あれで生きてたらもうイリュージョンだと思うけどね。」

真奈美は逆に叶に近い意見だった。

そしてそれは八重花や由良も疑問を感じている点だった。

「消滅した半場海、そして叶が砕いたはずのアダマス。その復活は本当に起こったのか。その場合は誰がそんな事をできたのか。ホント、謎だらけね。」

八重花が呆れたように呟く。

結局海の行動目的どころかその存在事態が不明では調べようがなかった。

どうすることもできず良案も浮かばない” Innocent Vision”の面々は黙り込んでしまう。

琴もお茶を囁いているだけで何も言わない。

ピロロロリンッ

「あれ、メール？」

そんな沈黙を軽快な電子音が破った。

由良や八重花、真奈美、琴は沈黙が訪れたときに鳴り出した携帯に何者かの意味を垣間見た気がして視線を交わらせると叶に注目した。「登録してないアドレスだけど誰かな？」

叶は携帯を操作して受信したメールを開く。

「え？」

叶がメールを開いた直後に硬直した。

全員が慌てて近づいて携帯の画面を覗き込んだ。

□

件名：叶ちゃんへ

本文：親愛なる”Innocent Vision”のリーダー叶ちゃん、こんにちは。

この間は会えて嬉しかったよ。

だけどごめんなさい。

私は今夏休みを取っているの。

だから新学期が始まるくらいまで帰れないと思うからまた今度ね。

休みだからってクレーラーの効いた部屋に引きこもらないで遊んで、

お勉強と宿題も忘れないように。

また会える日を楽しみにしてるよ。

半場海

□

画面には顔文字や絵文字込みで実に可愛いメール本文が表示されていた。

「……。」

由良が

「……。」

八重花が

「……。」

真奈美が

「……………」

叶でさえフリーズした。

「可愛いメールですね。是非お会いしたです。」  
少々蚊帳の外にいるからこそ琴は冷静だった。

「「な（に・んだ）これえー!?!」」

” Innocent Vision ” の素頓狂な叫びが神社の静謐な空気を震わせた。

「何が夏休みだ！あいつ学校通ってないだろうが！」  
由良は怒鳴っているがツツコミはしっかりしていた。

「破天荒なところは本当に半場みたいだね。」

真奈美も呆れたように笑った。

「どう考えても私たちの行動を見ているとしか思えないわね。」  
八重花は仕切りに首を捻って近くに海の気配がないか探った。

「やはり面白い方そうですね。お会いできないのが残念です。」

琴は繁々と携帯を見つめている。

そして叶は

「海さんも夏休みなんだ。それなら一緒に遊べれば良かったのに。」  
やっぱり少しずれていた。

海のメールが巻き起こした騒動はしばらく” Innocent Vision ” の中で荒れに荒れ、八重花が逆探知しようとしてたり近くにはいないか探しに出たりと慌ただしく、ようやく落ち着いたときにはカラスが鳴く夕暮れ時になっていた。

全員がぐったりする中で琴がパンパンと手を叩いた。

「そろそろお開きにしましょう。夕飯を食べていかれるのであればおもてなしはしますが手伝っていただきますよ?」

皆には怖い笑みを向けつつ叶にだけ優しく微笑みかける高等テクニクで話す琴。

「あ、そうですね。それじゃあそろそろお暇しましょうか。」  
だが良い子の叶は琴の言葉の真意を理解しないまま帰宅の準備を始めてしまった。

「あ、ええと…」

今さら叶だけ残っていくように言えるわけもなく戸惑っている間に帰り支度は終わってしまった。

「それじゃあ琴お姉ちゃん、ごちそうさまでした。」

ちよつとひきつった笑みで見送る琴の肩を由良が叩いて帰っていく。哀愁漂う背中で沈む夕日を見送る琴を残して皆は去り、”Innocent Vision”は夏休みに突入した。



## 第85話 ある夏の日

各組織の、そして各個人の思惑が入り乱れながらも決着を迎えないまま乙女たちは学生の焦がれる長期休暇夏休みに入っていた。

とある日、八重花は手に近場で買ったケーキを持って高級住宅街を歩いていた。

目的の家は八重花の家の2倍の敷地はありそうな豪邸と呼ぶに相応しい住宅だった。

セキュリティも施されていて塀の上に監視カメラがある。

尤も八重花はそれが偽装だとすぐに見抜いたが。

インターホンを押すと数秒で繋がった。

「東條八重花です。」

インターホンはすぐに切れ、代わりに門が自動で開きだした。

そしてドアが開く音がして中からこの家に相応しいお嬢様が出てきた。

「お待ちしていました、八重花さん。」

下沢悠莉、ここは彼女の実家である。

結局八重花がリスクを減らしてヴァルキリーの情報を得るために選んだ手段は悠莉だった。

「さすがはお嬢様ね。これお土産よ。」

悠莉はケーキの箱を受け取って微笑む。

「ありがとうございます。暑い中立ち話でもなんですから上がってください。」

「聞きたいことを答えてくれさえすればそんなに時間はかからないわよ?」

八重花は腕を組んだまま動かず窺うように片目で悠莉を見た。

「嫌ですよ。今は夏休み、たっぷり時間があふりますからゆっくり

りとお話ししましょう?」

悠莉は常と変わらない綺麗な笑みを浮かべたまま八重花の手を取る。両者に腹の探り合いはあってもそこに敵意は含まれていない。そんな会話もこの2人にとっては戯れのようなもの。

他の者に見つかれば双方とも立場を危うくすることを自覚しつつそれを楽しんでいる節があった。

「それじゃあお言葉に甘えてゆっくりさせてもらっわよ。」

「はい。たっぷりおもてなしさせて頂きますね。」

2人は普通の友人のように家に入ってしまった。

ここはとある国立の体育館。

ズパンと物凄い音がしてボールが地面に打ち放たれた。

その場にいた全員がその圧倒的なスピードとパワーに驚愕する中

「さすがは良子先輩!」

「頑張れ、良子お姉様!」

元気な声援が響いた。

今日は大学のスポーツ推薦のためのレセプションの日。

本来は観客お断りなのだが美保と紗香は強引についできて無理矢理応援席に居着いていた。

それを笑い、妬む者もいたが

「ハア!」

良子は拳や武器ではなくバレーボールの実力だけで相手をねじ伏せてきた。

もちろんジュエルの力など使っていない。

ライバルの中にはジュエルもいてその力を使おうとする者もいたが良子は気にしなかった。

ズパンと再びボールがコートに突き刺さる。

長身と高い跳躍から繰り出されるスパイクはレシーバー諸とも吹き

飛ばすほどの威力だった。

「キヤー！良子お姉様、素敵！」

応援席で騒ぐ紗香に軽く笑いかけて良子は汗をきらびかせながら持ち場に戻る。

その表情は生き生きとしていた。

真奈美と久美は吉葉図書館にいた。

「ごめんね、まなちい。」

久美の前には沢山のノートと教科書が置いてある。

その隣に座る真奈美の前にもそれはあった。

つまりは夏を謳歌する学生たち最大の障害、夏休みの宿題である。

「いや、別に構わないよ。あたしもやらなきゃならないんだし。：

それにしたって、くく。」

真奈美は堪えきれなくなって小さく笑った。

「どしたの？」

久美が首を傾げると真奈美は目を向けてもう一度笑う。

「ああ、ごめん。まさか久美から宿題をやるうって誘われる日が来るとは思っていなかったから。」

「にははは、そうだね。」

久美は怒らず、むしろ同意して笑う。

数カ月前までは絶対にあり得ないはずだったから。

「それにしても久美は本当に変わったね。」

「にはは、そうかな？」

口を動かしながらも2人はそれぞれに宿題を進めていく。

会話に没頭することなくやるべきことをこなす。

それも以前の久美では考えられなかった。

この分なら今年は予定よりもずっと早く宿題が終わりそうだと真奈美はまた笑う。

「ノルマこなしたらアイス食べに行こうか。」  
「にははは、アイス好き。」  
でもやっぱり変わらない笑顔も久美らしかった。

「…ん。」

由良はベッドの上で身動きした。  
布団をかけずタンクトップにショーツというラフな格好で眠っている。

年中空調で室温管理している部屋なので気候の急激な変化で体調を崩すようなことはまずない。

だが由良は寝苦しそうに枕を抱き締めた。

「陸…蘭…明夜…」

いまだ眠りの中に意識を置く由良の口から3人の名前が漏れ、頬を一筋の涙が伝った。

「ッ！」

涙の感触か、はたまた飛び起きるほどの夢を見たのか由良はいきなり目を開いて上体を起こした。

「はあ…はあ…ふう。」

肩で息をしていたが落ち着いてきて呼吸も安定してきた。

「あ…最悪だ。」

由良は乱暴に目元を腕で擦って涙の痕を消す。

「…”Innocent Vision”で残ったのは俺だけか。」  
自嘲するように呟いてもう一度ベッドに倒れ込む。

かつてこの部屋で、このベッドで共に寝た仲間たちは今はもう由良の近くに居ない。

陸は目を覚まさず、蘭と明夜は行方不明。

発足当時のメンバーは由良を残すだけになってしまった。

「弱くなつたな、俺は。」

由良は瞳を閉ざす。

今度こそ幸せだったと今になって思う” Innocent Vision”の夢を見られるようにと願いながら。

緑里は身をメイド服に包んで花鳳の家で使用人業務に勤しんでいた。まだ学生の身とはいえ海原の家系である以上家に居るならば仕事を手伝うのは当然の事だった。

今は仕えるべき撫子も優秀な妹である葵衣も屋敷を留守にしているのでやっているのは一般的な家事である。

葵衣ほどではないが緑里も十分なスキルを持っている。

しかも

「

坦々と作業をこなす完璧な葵衣と違って緑里はたまに失敗しながらもめげずに楽しそうに仕事をするため同僚たちからの受けは良かった。

「相変わらず緑里ちゃんのメイド服姿は可愛いね。」

「!?!」

二十代後半で若くして花鳳の侍女長を務める中之島恵里佳がうっとりとした目で緑里を見て呟く。

正確に言えばお尻のあたり、揺れるスカートを凝視している。

緑里は慌ててスカートを押さえて振り返り恵里佳を睨み付けた。

「どこ見てるんですか!?!」

一応目上の相手なので敬語だが唸りながら上目遣いで睨む様は威嚇する犬のようだ。

「あ、ちよつとごめんなさい。鼻血が…」

そんな可愛らしい睨み付けに興奮した恵里佳が慌てて鼻を隠した。

こんなでも葵衣以上のスキルを持つスーパーメイドなのである。

「だいたい…ボクが可愛いわけないよ。」

葵衣や緑里、撫子にとって姉のような存在なので2人で話すときは敬語じゃなくなる。

恵里佳がそれを許したからだ。

「えー？葵衣ちゃん可愛いでしょ？」

「うん。」

「だったら双子の緑里ちゃんも可愛いよ。ねー、私のお嫁さんに来ない？」

恵里佳は緑里が大層お気に入りらしく暇があればよく構っている。

尤も緑里のリアクションを楽しんでいる節もあるが。

「ボクに構うなあ！」

「フフフ。」

緑里は今日も仕事をしながら恵里佳に構われてしまった。

トントンカンテン

普段は物静かな太宮神社の境内に賑やかさがあつた。

季節は夏。

夏祭りの季節。

正月と祭りの時は太宮神社も人で溢れる。

今はその為の準備で露店の設営や出し物の用意が進められている。

「ご苦労様です。」

琴は留守にしがちな両親の代わりに神社側の責任者として動いていた。

町内会長とは茶飲み友達のようなものだった。

初老の町内会長は琴に気付くと相好を崩して会釈した。

「おお、琴ちゃんこんにちは。煩くてすまんね。」

「いえ、普段寂しい神社ですので活気があるのは良いことです。」

琴は落ち着いた雰囲気から静けさを好む風に見られやすいが意外と賑やかなのも嫌いではない。

” Innocent Vision ”のメンバーのやり取りも楽しんでるのである。

鉄パイプで作られた骨組みにテントを張った露店が参道沿いに増えていく。

「例年よりも活気付いていますね。」

場所柄毎年祭りを見ている琴だったが今年は露店の数かなり多いのが目止まった。

「ああ、そうだね。今年は大きなスポンサーがついてくれたお陰で店を出しやすくなったからね。」

琴は嬉しそうに笑う町内会長とは反対に眉を寄せた。

”太宮様”に関わる企業や上役がお礼として出資してくれることはまああるが祭りのスポンサーとは珍しい。

琴は未来視ではない直感で嫌な予感がした。

どういうことなのか尋ねようとする直前

「あ、これはこれは…」

と町内会長は腰を低くして揉み手しながら鳥居の方に歩いていってしまった。

実にわかりやすい媚びへつらい方だ。

そんな怪しい行動を見せられれば必然的に琴もそちらに目を向ける形となり

「こんにちは、町内会長様。」

優雅にお辞儀をするスーツ姿の花鳳撫子を見た。

町内会長の媚びへつらう動きからも出資者が誰なのか理解して琴は小さくため息をつく。

撫子はしつこく挨拶してくる町内会長をやり込めると琴の方にやって来た。

「お久しぶりですね。」

「そうですね。」

悪戯が成功して微笑む撫子と不意討ちで面白くない琴。

尤も琴が不機嫌な理由はそれだけではないが。

「存外嬉しいのですね。またこの太宮神社の鳥居を潜る覚悟がおりとは。」

「本日はわたくし個人ではなく花鳳として参りましたから。」  
見えない火花が両者の間に走る。

厳密には琴が撫子を毛嫌いしている感じだ。

不満げな琴に対して撫子は気難しい妹に呆れる姉みたいな顔をした。

「良いお祭りにしましょうね。」

撫子は学生ではなく社会人として祭りの成功を願って右手を差し出す。

それが琴に取り入ろうという魂胆だと分かっているも町内会長の手前、手を払うわけにもいかなかった。

「…よろしくお願いします。」

「はい。こちらこそ。」

やはり日常においては撫子の方が一枚上手だった。

葵衣は再びサマーパーティーのあった軍演習場に来ていた。

軍関係者としてはあまり部外者を立ち入られたくない場所だが管理責任者が葵衣にゲーム感覚の戦略シミュレーションで完膚なきまでに叩きのめされたため、戦術の講義を条件に黙認した。

その戦術家の葵衣にしても今回のサマーパーティーの結末は完全に想定外だった。

手札の数と相対的な戦力比から”Innocent Vision”がヴァルキリーの元に辿り着ける可能性は皆無だった。

それが時坂飛鳥と半場海というダブルジョーカーの登場で決戦の場がオーとの乱戦に突入、結果として”Innocent Vision”の逃亡を許すことになった。

（ ） ”Innocent Vision”とオーの結託…はないでしよう。）



葵衣は戦いの最後に消息を絶った飛鳥と明夜を探す手がかりを求めてやってきた。  
だがすでに日数が経っているため整備されていて痕跡は残されていない。

あるいは土の中に身を隠していてそろそろ出てくるなど荒唐無稽な事も考慮した何かがある様子はない。

（双方消滅したというのが理想ですが、亡骸がないことを考えると柚木様はオーに拉致されたと考えるのが妥当でしょうか。）

最後にもう一度見て回ったが何も見つからず、” Innocent Vision ”には酷な結論を胸に戦場を後にした。

叶は陸の病室にお見舞いに来た。

「こんにちは、陸君。」

陸は相変わらず何も答えない。

その事実慣れてしまったことを少し悲しく思いながらベッドサイドに移動すると花瓶に差してあるマーガレットに気が付いた。

それは以前にもあった。

「やっぱり海さんだったんだ。」

叶は他の誰よりも海が存在を受け入れていた。

それは不思議と海を感じを知っているような気がする、そして陸にとって海が生きていることが良いことだからだ。

「陸君、もう知ってるかもしれないけど海さんが生きていらっしやっただんですよ?」

叶は戦場で海に助けられたこと、アダマスを持っていたことなどを話す。

一通り話したところで叶は考え込むように沈黙した。

「…海さんが本物なのか分かりません。でも信じたいじゃないですか。海さんが生きていて、それで陸君が目覚ませばみんな幸せで

す。」

叶だって疑っていないわけではない。

だがそれ以上に海の存在を信じたいと願っていた。

誰かが死ぬことなんて、それで誰かが悲しむことなんて叶は望んでいない。

「もう夏ですね。陸君が早く目を覚ましてくれないと今年の夏も一緒に遊べません。あ、でも水着とか可愛くないから夏に遊びに行くのは……」

叶は悲しげに俯いたり慌てたりと忙しい。

それでもやはり陸は目覚めない。

「陸君はどんな夢を見てるのかな？せめて幸せな夢ならいいな。」  
そこに自分の姿もあると……と考えてまたボンと顔を赤くして頭を振る。

叶は立ち上がってそつと陸の頭を撫でた。

「帰りを待つ人が増えましたよ。だから早く目を覚ましてくださいね。」

気のせいかな幻覚か、叶には陸が微笑んだような気がした。

## 第86話 ある別の決戦

夏休みも中盤に差し掛かったある暑い夜、宿題をこなしていた叶の携帯が鳴った。

液晶には『裕子ちゃん』と表示されている。

「もしもし？」

『あ、叶。ごめんね、こんな時間に。』

電話に出るといつものものはっちゃけた元気に欠けた、どこか真剣味の帯びた裕子の声が聞こえてきた。

「ううん、それは大丈夫だけど…」

『でも、ほら、寂しい夜を半場くんを想いながら慰めてるタイミン  
グとかだと悪いでしょ？』

「し、してないよ、そんなこと！」

真面目かと思いきや直球のセクハラ発言についつい叶も声を荒らげてしまう。

だが裕子は至極真面目だった。

真面目にセクハラだった。

『そう、よかった。』

「ふう。裕子ちゃんはもう。」

叶も裕子のそういった性格も理解はしているが対処できるかどうかは別問題だ。

「…」

『あはは。』

すぐに何か言ってくると思ったが裕子はぎこちない笑いをするだけだった。

長年の付き合いだけに裕子の様子がおかしいのはすぐにわかった。

「裕子ちゃん？」

『あ、うん、大丈夫、モトマシタイ無問題。』

（何で中国語？）

思わず叶がツツコミそうになるほどの挙動不審ぶり。

いよいよ問い質そうかと叶が心構えをすると

『ごめん、叶！明後日のお祭りには遊びに行かないで！』

それより先に電話の向こうから裕子の叫びが聞こえた。

聞こえたが

「？」

意味がよく分からなかった。

太宮神社の夏祭りは2日間行われる。

さらには秋にもう一度太宮祭という”太宮様”を祀るための小さな祭りもあり、以前陸が着物の少女たちを侍らせて琴の悪印象を買ったのは太宮祭の方である。

裕子はその夏祭りに来るなど言っていた。

「今年のお祭りに行かないでってこと？」

『そうじゃなくて、その、1日目は避けてほしいっていうか。』

裕子がしどろもどろになっているが叶はなんのことが分からない。別に2日間祭りに行く必要はないから

「2日目はいいんだよね？それならいいよ。」

理由はわからなくても裕子が真剣なので快諾した。

『さすが叶！八重花とは違って良い子だよお！』

返事を聞いた裕子が感動していた。

その後しばらく話していたが結局理由は聞き出せず電話を終えた。

叶は使い終わった携帯を見ながら首をかしげる。

「何だったんだろ？」

それに答えるように携帯がもう一度鳴った。

今度はメールで差出人は琴だった。

『お話がありますので都合が宜しければ明日に太宮神社までお越しただければ幸いです。』

口調は大分落ち着いてきたが書く文はいまだ公式文書のような琴である。

叶は了解の旨を伝えると途中だった宿題を再開するのだった。

翌日、叶が太宮神社を訪れると祭りの準備で慌ただしかった。

叶は初老の男性と話している琴を見つけた。

声をかけようか考えているうちに琴の方が気付いてやって来た。

「おはようございます、叶さん。お呼び立てしてすみません。」

「おはようございます。大丈夫ですよ。それにしてももうほとんど準備できてるんですね。」

叶が周囲を見回せばいつもの簡素な参道が色とりどりの露店で飾られていた。

試し焼きをしているのか昼御飯なのか分からないが焼きそばを焼く良い匂いがしてくる。

「今年は特に皆さん頑張っていました。」

実際はちよくちよく様子見に立ち寄る撫子に良いところを見せようと若い男たちが張り切ったからだ。

浅ましいと思いつつも面には出さず琴は叶を見て微笑む…というかやさぐれかけた心を和ませる。

「お話というのはその夏祭りについてです。」

夏祭りと聞いて昨晚掛かってきた裕子からの電話を思い出した。

「今年の夏祭りは不本意ながらスポンサーの力で例年よりも混雑することが予定されます。」

不本意ながらと強調したり、スポンサーと口にするときに琴の表情が険しくなったのを叶は不思議に思ったが琴は語るつもりは無いようでそのまま話は続く。

「神社側はそれほど仕事はありませんし町内会からも人を回して戴けるとの事でしたがやはりわたくし1人では心細くもあります。」

叶には途中から何を言われるのか分かっていった。

「ですので、宜しければわたくしと一緒に巫女の仕事を手伝ってはいただけませんか？」

何故なら琴の目が叶に巫女装束を着せたいと怪しく輝いていたからだ。

叶は悪寒に近いものを背筋に感じつつ裕子のお願いを思い出した。

「ごめんなさい、琴お姉ちゃん。実は裕子ちゃんが…」

叶は昨晚の電話の内容を聞かせた。

自分なりに纏めて話してみてもやっぱり裕子のお願いは要領を得ない。

「ふふふ、なるほど。そういうことですか。」

しかし琴は叶から又聞きしただけで裕子の事情を察した。

「わかつたんですか？」

「ええ。ですが馬に蹴られるのは勘弁ですので内緒です。」

「？」

よく分からなかったがその約束がある以上1日目はいけない。

2日目からでいいかと尋ねようとした叶は

「ふふふ。」

とてつもない笑顔の琴を見てビクウつと震えた。

「良いではないですか、叶さん。」

「でも、裕子ちゃんとの約束が…」

「久住さんは遊びに行かないでと言われたのです。叶さんはお仕事

で来るのですから何の問題もありませんよ。」

「それって屁理屈なんじゃ…」

「いいえ、違いますよ。」

何と繕おうと裕子との約束が反故になるのだが叶は琴には強く出られない。

叶の迷いを見た琴は口の端をわずかにつり上げながら叶の肩に手を置いた。

「姉と友人のどちらが大切か、話し合いませんか？」

「あの、えと、ああああ…」

ガツシリと手を掴まれたままズルズルと社務所に引つ張られていく叶。

その後、とても美味しいお茶と和菓子の力によって即席アルバイトが決定されたのであった。

そして祭り当日がやって来た。

花鳳グループ、WVeもただ単に琴へちよっかいを出すために祭りのスポンサーになったわけではない。

数ある露店の所々にWVeが手を回した露店商がいてジュエリア関連商品を販売。

さらには子供向けのオモチャの指輪やアクセサリーにもジュエリアを使いその浸透率の向上を目論んでいた。

さらにさらに、祭り限定のジュエリアの話題を流すことで若い女性を祭りに呼び寄せたことで太宮神社の夏祭りはかつてないスケールの来場者が訪れていた。

そんな人でごった返す神社の鳥居から少し離れた場所で芳賀は立っていた。

別に町内会の要請で人員整理をしているわけではない。

デートの待ち合わせだ。

楽しみにし過ぎて待ち合わせ時間の15分も前に到着した芳賀は溢れ返る人の数に呆気に取られていた。

「初詣よりすごいな。」

だが芳賀はそんな人混みよりも住宅街に続く道の方を気にしていた。そろそろ予定の時間。

だが待ち人が時間にルーズなのはよく分かっているのでじっくり待つつもりでいた。

ドンッ

前にはばかり視線を向けていたせいで後ろからぶつかられてしまった。

「あ、すみませ……」

振り返って謝ろうとした芳賀はそのまま固まった。

「…ど、どうだ。」

そこには浴衣姿で目一杯おめかしをした裕子が恥ずかしそうに笑っていた。

芳賀の顔が一気に真っ赤に染まり慌ててそっぽを向いた。

心臓を押さえて深呼吸を繰り返す。

（ヤ、ヤバい。）

声にならないくらい芳賀の琴線にクリティカルヒットだった。

危うく人目を気にせず襲いかかるレベルに危なかった。

「雅人くん。変じゃない、かな？」

自信なさげな裕子の声に芳賀は首と両手を総動員して否定する。

「全然平気。スツゴいいい！」

「それなら、よかった。」

「ッ！」

はにかむ裕子に芳賀陥落。

そっと腕をからめられると右腕と右足が同時に出るくらいぎこちなかった。

「変な雅人くん。」

（うおー、俺は幸せだー！）

芳賀は有頂天に到達していた。

ちなみにそんなラブな2人を物陰から見守る親友たちがいた。

「うわぁ、裕子綺麗だな。」

「にやはは、ラブラブー。」

「やっぱり恋は女を変えるのね。」

この3人は琴同様に電話の内容で事情を察していて八重花に至っては鎌をかけて弄ったほど。

叶との電話の時に裕子が泣いて感動していたのはそのせいだ。

「でも隠れて何をする気なの？」



真奈美としては裕子と芳賀の関係を少し離れて温かく見守ろうという考えなのだが久美と八重花はなぜか関わりたがる。今回も八重花の召集で集まった次第。

叶がないのは電話をかけたときに気づいていなかったこととすでにバイトが決まっていたからだ。

「あのモブが裕子可愛さに襲うかも知れないわ。私たちは裕子を守る盾なのよ。」

「にははは、なのだ。」

「いや、2人は付き合ってるんだし別に襲っても良いんじゃないかな？」

真奈美はそれとなく擁護してみるが2人は割と真面目に裕子親衛隊みたいな立ち位置で無駄な闘志を燃やしていた。

「裕子親友隊、出陣よ。」

「にははは、おー。」

「やれやれ、過保護だなあ。」

真奈美は呆れつつも帰るとは言わず「裕子ちゃん親友隊」は雑踏に消えていく2人を追っていった。

芳賀と裕子は人しか見えない参道で身を寄せ合って前に進んでいた。

「こりや見た目以上にすごいな。何か聞いた話だとWVeがスポンサーでここだけの限定品の販売があるらしいぞ？裕子、WVeのアクセサリー好きだろ？」

芳賀としてはせっかくのデートなので裕子に喜んでもらおうと提案したのだが

「う、うん。」

どうにも裕子の反応は芳しくなかった。

むしろWVeの露店から離れるように芳賀の腕に抱きついている。密着度や感触的に芳賀としては文句などないのだが裕子が楽しんで

いなければ意味がないとあまり良くはない頭を捻る。

芳賀は一途で尽くす男なのだ。

「それじゃあ何か欲しいものはないか？せつかくの祭りだ。さすがに屋台のもの全部ってのは厳しいが何でも好きなもん買ってやるぞ。何が欲しいんだ？」

芳賀は寄り添って隣を歩く裕子に微笑みかける。

「ツツッ！」

裕子はボンと顔を真つ赤にすると芳賀を避けるように俯いてしまった。

（何かよく分からないけど、裕子がむちゃくちゃ可愛い！）  
普段のぐいぐい引つ張るタイプとはまるっきり正反対と言える守ってあげたくなるような女の子の裕子に芳賀はメロメロだった。

「…が欲しい。」

ポソリと裕子が何かを呟いたが雑踏が騒がしくて聞き取れなかった。

「ん？何が欲しいって？」

芳賀が顔を近づけると裕子はまたリングオみたいに顔を赤くして口ごもった。

仲睦まじく寄り添う芳賀と裕子の姿を叶は本殿近くで仕事をしている葉が見ていた。

（そういうことだったんだ。裕子ちゃん、可愛い。）

「写真1枚いいですか!？」

「すみません、混んでいますのでご遠慮ください。」

約束を破った罪悪感もあるし巫女目当てのカメラ小僧にお断りを入れるのに忙しいため2人の邪魔をしないようにしようと心に誓う叶。

「お疲れさまです、叶さん。」

「琴お姉ちゃんもお疲れさまです。占い、好評ですね。」

元は吉葉高校の生徒が興味本位で琴に占いを願い出たのが始まりだったがそれがいつの間にかWVe露店並みに賑わっていた。

現在は整理券を配ったことで沈静化しているがまだしばらく客足が遠のく様子はない。

「少し休憩を取りました。それよりも叶さん、久住裕子さんを見掛けませんでしたか？」

「疲れたようなため息をついた琴は急に真面目な声になって裕子の名を出した。」

「見ましたけど、どうしました？」

「琴の様子の変化に叶もわずかに表情を固くする。」

「さきほど少し久住裕子さんを占って見たのですが小さな災厄に見舞われるとの役が出ました。」

「災厄って……」

「叶は魔道が降りた吉葉の光景を思い出して戦慄する。」

「叶の表情から察した琴は首を横に振る。」

「いえ、せいぜい転ぶとか変な人間に絡まれるとかです。しかしこれは”太宮様”のト占、まだ確定していない未来です。助けてあげてはいかがですか？」

「そう言っつて琴は戻っていった。」

「叶はグツと拳を握って頷くと胸元から携帯を取り出した。」

「ほのかに色っぽい仕草に男性客が見惚れていた。」

「叶は気にせずアドレスを開いてコールする。」

「八重花ちゃん、いるんだよね？」

「…変なところで鋭いわね。どうしたの？」

「琴お姉ちゃんから聞いたの。裕子ちゃんを守るよ。」

「…オーケー、ママ。」

「余計な情報はいららない。」

「その一言で十分だった。」

「雑踏の端からチカツとライトが光り、叶が目を向けると八重花、久美、真奈美が親指を立てていた。」

「今宵の祭りの真の主演、それは裕子ちゃん親友隊だったに違いない。」

射的のゴルフが暴発して裕子に迫れば

「おっと手が滑ったよ。」

真奈美の投げたダーツの矢がゴルフを撃ち落とすし、

「おうおう、何いちゃついでんだあ？」

酔っ払いのオツチャンが芳賀たちに絡もうとすれば

「にやはは、あー、転んだあ！」

「ごぶぶっ！」

久美の人間ロケットがオツチャンの脇腹に突き刺さり、

「あー、僕のわたあめが！」

「うわ、やべっ！」

子供が手放したわたあめとぶざけていた高校生が放り投げてしまったフランクフルトは

「あー、ガスが盛れたわ。」

ゴウッ

八重花の一瞬の火炎放射で炭にまでした。

「八重花ちゃん、やりすぎだよ。」

それを見守っていた叶は苦笑を浮かべ、それでも裕子を守れたことに優しい笑みを浮かべるのだった。

そして互いに意識しまくっている芳賀と裕子はそんな周囲の事態になど全く気付いていなかった。

こうして裏で何があったのか知る由もなく平和にお祭りデートを過ごした芳賀と裕子。

裕子ちゃん親友隊の面々は当初の目的を忘れて守り切れたことに安堵して帰っていった。

芳賀は抱きつかれてない方の手で水ヨーヨーを弄っている。

結局最後まで裕子はどこかきこちなかった。

芳賀はやっぱり楽しくなかったのかなと落ち込んで

「雅人くん！」

「はい！？」

突然叫び声のように呼ばれて慌てて振り向いた。

バシヤツ

「きゃっ！」

急な移動で跳ねた水風船が裕子に当たって運悪く破裂し、水を被ってしまった。

「大丈夫か、裕子……」

慌ててかかった水を拭こうとした芳賀は動けなくなった。

水で濡れた髪、わずかに透ける浴衣、ギョツと自分を抱きしめる裕子の仕草。

そのすべてに心奪われて目が離せなくなった。

「欲しいもの、言っただけじゃなかったね。」

裕子はいつもみたいに笑うとゆっくりと手を解いて芳賀の正面に立った。

そのまま芳賀に抱きつく。

「雅人くんが、欲しい。」

「ッ！？」

芳賀は心臓が止まりそうになった。

ぴったりと抱きついた裕子が耳まで真っ赤にしているのが見えた。

それほど決意をもって告げられた願い。

芳賀はしっかりと裕子を抱きしめた。

「……行くぞ、裕子。」

「うん。」

2人は寄り添ったまま芳賀の家の方へと去っていった。

## 第87話 夏の終わり

結局夏休みの間、一度もオーが出現した気配はなく、ヴァルキリーも大きな動きは見せないまま夏休み最終日を迎えていた。

「叶え、宿題終わらないよ！助けて！」

「もう、あれだけ忠告したのに遊んでるからだよ。これから由良お姉ちゃんとこに行かないといけないから。」

「そんな、叶……」

叶の親友の中で宿題が終わっていないのは裕子だけで叶や真奈美、八重花はもちろん久美もしっかり終わらせていた。

人間変われば変わるものである。

そういうわけで今年はみんな裕子には敵しかった。

決して芳賀とラブラブ全開でウザくなつたとかではない。

そして叶は方便ではなく由良のマンションに向かっていた。

夏休みの間は情報収集はしつつもリーダーの言った通り「夏休み」を取っていた”Innocent Vision”だが明日からは

新学期。

現状の整理と今後の予定を話し合うために”Innocent Vision”で由良のマンションに集合しようとしていた。

一般的に高級マンションと呼ばれる建物の高層階に上がってインターホンを押すと

「おう、カナか。」

タンクトップにショート姿の由良が出迎えた。

「由良お姉ちゃん！そんな格好で出ちゃダメ！」

叶はすぐに由良を室内に押しやってドアを閉めた。

いくら上層階で覗きの危険が低いとはいえ近隣には男性も住んでいるだろうから油断してはいけない。

たとえば由良が強かろうと女の子なのだから。

「いいですか？由良お姉ちゃんは美人さんなんですから気を付けな

いとダメです。」

「だがな…」

「ダメです!」

ムンと譲らない態度を示す叶に何だかんだで甘い由良は降参を示すように手を上げた。

「分かったよ、着替えてくる。」

由良は寝室の方に面倒くさそうに頭を掻きながら入っていった。

叶はリビングに足を踏み入れる。

「なっ!？」

そこは脱ぎ散らかした服や読み終えた雑誌、食べ終わったカップ麺の容器などが散乱する場所だった。

ゴールデン・ウィークに真奈美たちの手で掃除が行われたのだが数カ月でモデルルームからごみ溜めに逆戻りだった。

「カナ、こんなんでいいか？」

カッターシャツとジーンズの格好でリビングにやって来た由良は叶からただならぬオーラがにじみ出しているのを見て後退った。

「お邪魔するわよ。」

「由良先輩の部屋は久し振りだな。」

八重花と真奈美が玄関から入ってきたのを背中に聞いて由良が逃げ出そうとした瞬間

「Innocent Vision」は、まずお掃除をします!

叶が”Innocent Vision”リーダーの権限を発動した。

前からはやる気というか使命感に燃える叶。

後ろからは冷たい八重花と真奈美の視線。

由良は板挟みになってガツクリと肩を落とすのだった。

それから2時間後

「……」

由良は呆然と妙に広く感じる部屋の真ん中に立っていた。

秋と呼ぶにはまだ暑いものの心地よい風が吹くベランダには洗濯物やベッドのシーツがはためいている。

床はまるで磨きあげられた鏡のようにピカピカに輝くフローリングで部屋全体の色まで明るくなったように思えた。

そしてお湯を沸かすかレンジを使うくらいしか利用しなかったキッチンからは掃除の労働で生じた空腹を刺激するいい匂いが漂っていた。

「由良お姉ちゃん。もう少しでご飯できますからもう少し頑張ってください。」

叶はどこからか引つ張り出してきたエプロンをつけて料理をしている。

それは唯一”Innocent Vision”の潜伏生活でなかった光景であり、由良が無自覚に望んでいた光景だった。

「あ、ああ……」

由良は言われるがままに溜まりに溜まったゴミを出しに行く。

従順になった由良の背中を見送った八重花は

「やはり男を落とすには家事スキルかしら。」

と真剣な様子で呟いていた。

作戦会議前に叶が作った昼食で腹ごしらえをした。

食事を終えた由良は静かに立ち上がり叶の前に移動するとその両手を包み込んだ。

「カナ、陸から乗り換えて嫁に来ないか？絶対に不自由はさせない。」

「



「えええ！？」

そしてまさかのプロポーズだった。

「あわわ、ええと！」

叶は目一杯動揺しながら助けを求めるべく八重花と真奈美に救援の視線を送った。

「恋愛は自由だと思うよ。」

「お幸せに。…これでライバルが2人減るわ。」

真奈美は割と普通に、八重花はとても腹黒くあったがどちらも止めようとはしてくれなかった。

「なに、女同士の方がいろいろ気楽らしいぞ。」

由良が熱っぽい瞳で叶に近づいていく。

未曾有のピンチに叶は青ざめ

「助けてー！」

悲鳴をあげるのだった。

「はっはっは。冗談だ。」

「うっ。」

由良は豪快に笑うが叶は一瞬本気で貞操の危機を感じた。

実際テーブルの四面にそれぞれ座っている中で由良と叶は対面で、つまり左右を真奈美と八重花で塞いでいた。

「いつまでも遊んでないで話し合いを始めるわよ。」

八重花は荷物からノートパソコンを取り出して設置しながら2人をたしなめる。

「遊んでないよお。」

叶が泣きそうな声で抗議するが八重花は聞く耳持たない。

パソコンが立ち上がるまでの時間さえ煩わしい様子で指でトントンとテーブルを叩いている。

「真奈美、明日からは学校だけど気を付けることは何？」

起動まで退屈なのか八重花は何気無い様子で尋ねた。

「宿題を忘れないこと。」

「…。」

八重花は”Innocent Vision”としての心構えを問うたつもりだったが言葉不足であったため文句を言えなかった。

確かに宿題を忘れない事は学生としては重要なことだ。

どこかの親友の1人はこのままでは忘れる以前の状況なのだが、それと同列になってしまう恐ろしい愚行だ。

「学校にはヴァルキリーやジュエルがたくさんいる。サマーパーティーで恨みを買っている可能性があるから気を付けるよ。」

八重花が説明するよりも先に由良が真奈美に注意した。

「なるほど。」

「さすがは由良ね。頭の中が戦闘民族だわ。」

「…褒めてるか、それ？」

由良としては怒鳴りたいところだったが真奈美も八重花もしつかりと頷くから氣勢を削がれてしまった。

「そう。明日から私たちが行くのはヴァルキリーの支配する魔窟と言っても過言ではないわ。授業を受けていけば消ゴムカスが飛んできて、居眠りをしていけば長い定規の反動を利用して叩かれて、体育の授業ではバレーボールやバスケットボールの集中砲火を受ける。」

「

「いやあああ！」

叶が頭を抱えてブルブルと震える。

「…なんてことは人目があるからなと思うけど出来るだけ1人になら無いように気を付けて。」

「や、八重花ちゃん！」

八重花はどう考えても叶の反応で遊んでいるようにしか見えなかった。

しかし八重花の言ったことは事実である。

杏葉高校に多くのジュエルが潜んでいるとはいえ同時にジュエルとは関係ない人も多い。

ソルシエルやジュエルの秘匿を考えれば普通は攻撃できない。逆に言えば人気のない場所に引き込まればいつでも戦闘が起こりうるのである。

「クラスを考えると俺と八重花、叶と真奈美がそれぞれ一緒に行動するのがいいか。」

「臨機応変にですけどね。」

四六時中一緒にいられるわけでもないが1人にならないと意識することは大事だ。

「ジュエルとの戦闘になった場合は無理に戦わず人目につくところまで逃げるのよ。」

周囲は敵だらけ。

足を止めて戦うと相手の増援を招いたり挟撃される危険性がある。校庭や校門前への移動は人目の確保や逃走ルートへの拡大が期待できる。

八重花はそれをパソコン画像を使って逃走経路まで示しながら説明した。

「わー、すごい分かりやすいね。」

「本当に。八重花のパソコン技能はすごいね。」

「無駄なところに凝ってる感はあるけどな。」

校内地図を立体表示してビットキャラを自分たちに見立てて移動させ、その経路を矢印で追っていく映像は明らかに八重花の遊びだ。

だが全員感心したり呆れながらも八重花の作ったデータを食い入るように見つめている。

覚えなければ命が危なくなる以上必死にもなるからだ。

「だんだん逃げ方が奇抜になっていくね。」

最初は出口に向かうための普通の経路だったがそれらが潰されていた場合を想定した経路になると窓からの脱出方法などになっていた。

最後の方になると以前ソルシエル復活計画で使ったロープを使ったラペリングによるアクロバティックな脱出まで想定されていた。

「しょうがないじゃない。相手は人海戦術で道を塞いでくるわ。そうなるも裏をかくしかないもの。まあ…」

八重花はフツと声を漏らすと画面を最後までスクロールさせた。

そこには

『最終手段：強行突破』

とでかかど書かれていた。

「最後はこれしかないけどね。」

「なんなら最初でもいいんじゃないか？」

由良は拳を鳴らして物騒なことを言う。

「確かにあたしたちみたいな少人数が大人数を相手にするなら包囲される前に正面突破する方が早いかもしれないですね。」

真奈美ももう一度経路図を見ながら由良に賛同した。

さすがに数十に渡るバリエーションの逃走経路全てを塞がれることはないはずだが方が一を考えれば先手必勝の方が優位に事を進められそうに思えた。

「悪くはないけど、出来れば戦いの火種は向こうに起こさせたいのよ。」

八重花は指先にジオードの火を灯す。

赤い光がその火を見つめる少女たちの顔を照らし出した。

「こちらから攻撃を仕掛けるとヴァルキリーに総攻撃を決断させる要因になる。逆にこっちが手を出さなければ向こうは何か企んでいるのではないかと警戒して動きづらくなるのよ。冬にりくたちが学校に戻ってきた時のようにね。」

八重花はグツと拳を握り込んで火を消した。

叶と真奈美は頷いて八重花の考えを受け入れたが由良は腕組みをして難しい顔をしていた。

「そううまく行くか？あの頃はジェムもいたからヴァルキリーの目もそっちに向いていたが今回は俺たちが標的になる。作戦を練る隙を与えるだけじゃないのか？」

八重花は分かっているというように頷いた。

「オーが姿を消した以上狙われるのは私たち”Innocent Vision”」。それは仕方がないわ。けどどちらもヴァルキリー対策だけをすればいいのよ。いつ出てくるかわからない相手よりはやりやすいとは思わない?」

「…確かにな。」

由良も納得したらしく腕を解いた。

だがその表情はまだ険しいままだった。

「ヴァルキリーの方は明日以降の動きで対応を考えればいい。オーも消えたのかどうかもわからないから動き待ちだ。で、明夜の行方と半場海の事はどうなってる?」

明夜の名前を出すと全員の雰囲気はずかしく重くなった。

「私、毎日電話をかけてみてたんですけどやっぱり繋がりませんでした。」

「あたしは知り合いに明夜を見掛けなかったか、見たら連絡をくれるように言っておいたけど誰からも連絡はなかったよ。」

「俺も顔馴染みに探してもらったがどこにもいなかった。」

やはりみんな明夜を心配しているいる動いていた。

それでもやはり明夜の痕跡は何一つ見つかっていない。

「私もヴァルキリーの情報を探ってみたけど明夜と時坂飛鳥を探しているみたいだったけど発見されていないみたいよ。」

「ヴァルキリーの情報なんてどうやって手に入れてるんだ?」

「ふふ、蛇の道は蛇よ。」

由良の疑問を八重花は受け流した。

悠莉と会っていたという情報の漏洩は双方にとって不利点でしかないから。

「八重花ちゃん、犯罪はよくないよ?」

叶が本気で心配そうにしていた。

「さすがにこの歳で警察のお世話にはなりたくないわよ。」

『エクセス』はかなり黒寄りのグレーだが八重花は平然と白を切った。

「それはそうと半場海の方は全く連絡なしよ。みんなは？」  
真奈美、由良が首を横に振る中、叶が控え目に手を上げた。  
「あの、実は今日の朝、メールがあつたの。」  
携帯を操作して受信メールを開く。  
全員がテーブルの上に置かれた携帯を覗き込んだ。

「  
叶ちゃんへ。」

夏休み楽しかったね。

私は海に行ったり浴衣を着て夏祭りに行ったり花火を見たりたくさん遊んだよ。

明日から学校だね。

また会えるのを楽しみにしてるよ。

半場海

「

「俺たちが気を揉んでたつて言うのに随分と楽しそうだな？」

由良がプルプルと怒りに肩を震わせる。

八重花もどちらかと言えば不機嫌そうだった。

「写真が添付してあるね？」

真奈美が画面を動かして写真を表示させる。

それは燦々と輝く太陽の下で海をバックに水着姿ではしゃぐ海の写真だった。

「…本当に楽しそうだな？」

由良の左目がうつすらと朱色を帯びていく。

「ゆ、由良お姉ちゃん。ほら、夏休みの過ごし方は自由だから。」

苦しいフォローだったが叶が怯えているのを見て由良は怒りを抑えた。

八重花と真奈美はホツとしつつ改めて画面を見る。

「でも本当に楽しそうね。友達と遊びにでも行ったのかしら？」

「でも死んだはずの人間と遊びに行くような友達がいるのかな？」  
「でもこの写真は撮られるためのポーズじゃないから誰かが海さんの携帯で撮ったんだよね？」  
写真一つでも謎ばかりの半場海。  
” Innocent Vision ” は心構えを新たに明日を迎えようとしていた。

## 第88話 海の日

新学期を迎えた朝はまだ夏の暑さが残る快晴だった。

休み明けで眠そうな生徒や真っ黒に日に焼けた生徒など休み前とわずかに違いを見せる通学路を”Innocent Vision”やヴァルキリー、ジュエルのメンバーが学生として登校していく。互いにその姿を見掛けることはあっても学生溢れる通学路で仕掛けることもなく学校へと向かう。

「おつはよー、叶。」

叶が教室に入るなり裕子が元気よく声をかけた。

「おはよう裕子ちゃん。今年は元気だね。毎年宿題をギリギリまでやっていて疲れてたのに。」

「言うようになったわね、あんた。ふふふ、だけどあたしは今までとは違うのよ。」

「じゃあ一人で終わらせたんだ。すごいね。」

昨日電話が掛かってきたときは泣いていたがその後頑張ったのだからと叶は素直に感心する。

だが裕子は照れたように視線を外した。

「まあ、1人じゃなかったんだけど、ね。」

「そうなの？」

さすがに叶もその相手が芳賀なのはすぐに理解したが照れる理由はわからなかった。

裕子は照れ隠しのように腰に手を当てて胸を張った。

「そして悟ったのよ。人間、諦めが肝心だって。」

「そこは悟っちゃ駄目だよ！」

叶は親友を墮落の道から救うべく揺らす裕子はハッハッハと笑いながらなすがままになっていた。

結局終わっていない宿題を叶が貸し

「芳賀君！」



「お、おはよう、作倉。いきなりどうした？」

登校早々芳賀は叶のお説教を受ける羽目になった。

芳賀と裕子はアイコンタクトを交わして互いに頬を赤くし

「聞いてますか？」

「もちろん聞いているぞ、作倉大先生。」

芳賀は始業式まで怒られた。

「みんな、席について。」

チャイムと共に担任が教室に入ってくると生徒たちは慌てて席に戻った。

だがいつもよりも教室が騒がしい。

「静かに。もうすぐ始業式ですがその前に皆さんのクラスに新しい友達が加わります。」

オオーとざわめきが歓声に変わる。

特に何も言っていないのに男子の期待の目はギラギラと入り口に向けられていた。

叶はなんとなく裕子に目を向けたが裕子も驚いているようだった。

情報通の裕子にしては珍しい。

「それじゃあ入ってきなさい。」

「はい。」

よく通る澄んだ声が廊下から聞こえた。

その声に男子が色めき立つ。

すらりとした足が教室に踏み出され、ふわりとスカートが揺れる。

セミロングの髪をさらりと靡かせて一人の少女が教壇に立った。

若干名違う意味を持ちながら全員が静まり返る。

「今日からお世話になる飯場海はなばつみです。よろしくお願いします。」

担任が黒板に『飯場海』と書いた。

(飯場…)

(海、さん?)

真奈美と叶が困惑する。

2人の前に現れたのはどう見てもき葉高校の制服に身を包んだ半場海だった。

体育館での始業式。

多くの学生は面倒くさがりだらけているのに対して”Innocent Vision”やヴァルキリー、ジュエルの一部は緊張感を纏っていた。

(なんで叶のクラスに半場海が?)

(どうやって入学しやがったんだ?)

2年1組の八重花と由良。

(アイツ、絶対に殺す。)

(あらあら、大変なことになってきましたね。)

2年2組の美保と悠莉。

(インヴィの妹か。)

(”Innocent Vision”といい飯場海といい平気で登校してきて馬鹿にして。)

(お嬢様にお知らせしなければ。)

3年の良子、緑里、葵衣。

それぞれの思惑が渦巻く体育館。

その渦中にある飯場海は

「ふああー、あふ。」

暢気に欠伸していた。

結局誰もがろくに話を聞かないまま始業式が終わりぞろぞろと教室

に戻っていく一同。

叶も教室に戻る流れに乗っていると

「ちよつとごめんね。」

と背後から声が聞こえてきて

「叶ちゃん。」

後ろから海が抱きつかれた。

「きゃー!?!」

叶は突然のことに混乱して暴れるが海は粘着生物みたいに張り付いて剥がれない。

海の手が動いて叶の胸に行く。

「むむ、もう少し無いかと思ってたけどこれは…」

「や、やめてえ。」

乙女のスキンシップに男子は顔を赤くしながら興味津々に目と耳に意識を集中させる。

「こら、男子!」

裕子がそれを一喝した。

そそくさと逃げ出していく男子諸君。

「まったく、困った奴らだ。」

芳賀は腕を組んで呆れ顔をしながらそれを見送っていたが

「雅人くん?」

「いただだ、耳が千切れる。」

額に青筋を浮かべた裕子に耳を引っ張られて行ってしまった。

「…行っちゃったね。」

「はい。」

騒ぎの当事者が置いてきぼりになって目をぱちくりさせていた。

叶は海の魔の手から抜け出してムーと恥ずかしそうに上目遣いで睨む。

「海さん?」

「ああ、そんな可愛らしく睨まないで。女の子同士のスキンシップだよ?」

海は叶の反応を楽しそうに笑いながら手をワキワキさせる。  
「っ！」

叶は戦闘時を思わせる集中力で海の動きを警戒する。  
ジリジリと距離を詰めようとする海と同じだけ逃げる叶。

「なかなかやるね。」

暫しのにらみ合いの後、海は襲撃の構えを解いた。

叶がまだ警戒する横を通り抜け

「まだまだ後で時間はいっぱいあるしね。」

その際にそう言い残して去っていった。

「うっ。」

叶は寒気を感じながら教室に戻っていった。

叶が遅れて教室に戻ると海はクラスメイトに囲まれていた。

「ねえねえ、飯場さん。前の学校はどこだったの？」

「新麗学院だよ。」

「新麗ってあのお嬢様学校？飯場さんてお嬢様？」

「まさか。うちの親が淑女になれって無理矢理に。それが嫌で逃げ出してきたの。」

あはははと海が笑うとクラスメイトも笑った。

あっという間に打ち解けている。

叶はその光景を見ながら真奈美のところに向かった。

「すごい人気だね。」

「人当たりは良さそうだからね。半場と違って。」

確かに陸は極力人との関わりを避けようとしているオーラを発していた。

裕子や八重花がそれを無視してちよっかいを出したから打ち解けたが、それがなければ芳賀くらいしか友達がいなかっただろう。

「そっぴや半場って奴がいたな。でも字が違うか。でも顔が何とな

く似てるような…?」

男子の1人が核心に迫る疑問を無自覚に口にした。

「私に似た美男子がいたの?是非会ってみたいな。」

「それ自分で言うかな?」

海はそれをまったく動揺せず受け流す。

これで半場陸と飯場海の相関を勘繰る者はいなくなった。

「はい、席に戻って。」

担任が戻ってきて雑談はお開きになった。

叶も席に着こうと移動すると海と目が合った。

海は笑顔で叶に手を振る。

叶は恥ずかしくて小さく振り返すと海はとても嬉しそうに笑っていた。

始業式は午前中で終わったので学生たちは午後からフリーだった。

こう言うときは裕子が

「カラオケ行くぞー!」

と遊びに誘ってくる場所だった。

「ごめん。先に帰るね。」

裕子はそそくさと教室から出て行ってしまった。

さらに芳賀も友人の誘いを断って帰っていった。

「なるほどね。」

真奈美が訳知り顔で2人が出ていったドアを見て頷いた。

「裕子ちゃん帰っちゃったけどどうしようか?」

「叶ちゃん!」

真奈美に予定を尋ねていた叶は突然横から飛び付かれた。

海が叶の胸に顔を埋めて幸せそうな顔をしている。

途端に叶の顔が真っ赤に染まった。

「な、何か用事なの!?」

叶は海を引き剥がそうとするが全然離れず顔をスリスリと動かす。

「あ、くすぐつたいよ。」

叶の声にわずかに色が混じる。

男子たちは生唾をぐくりと飲み込んだ。

「はい、男子諸君。大人しく退室しないと女子に嫌われるよ。」

真奈美が叶を庇うように立つとクラスに残っていた女子が男子に冷たい目を向けた。

「ハッ、失礼致しますです！」

ここで悪い噂が立つことは学校内の悪評に直結、つまりはモテなくなる瞬間に理解した男子は軍隊よろしく淀みない歩みで早々に退室していった。

「飯場さん、やりすぎると男子の目の毒だから気を付けてあげてね。」

女子校のノリを知るクラスメイトが忠告だけして皆何事もなかったように帰っていく。

あっという間に叶と海、真奈美だけになっていた。

「久美まで帰っちゃったのか。一緒に遊びに行こうと思ったのに。」

「もしかして邪魔しちゃった？」

海が叶に抱きついたまま申し訳なさそうな顔をした。

「何も言わなかったから多分用事があったんだと思います。それで

海さんは私に用だったんじゃないんですか？」

叶はもう抱きつかれるのは諦めて抵抗しなくなっていた。

海は抱き心地の良い角度を探しながら背中に回って叶の肩口から顔を出す。

「叶ちゃんに学校を案内してもらおうと思って。」

確かに海はすっかりクラスに溶け込んでいるとはいえ転入生には違いない。

むしろ他に案内を申し出るクラスメイトがいなかったことの方が叶にとっては驚きだった。

「ちゃんと誘われたけど叶ちゃんにお願いするからって断ったの。」

叶の顔に出ていたのか、それとも心を読んだのかタイミングよく海が叶の疑問に答えた。

「そうですか。でも裕子ちゃんじゃなくてなんで私ですか？」

クラス委員長は男子だから頼みづらいかもしれないが副委員長は裕子だから頼みやすい部類の人物だ。

既に帰ってしまった後で言うのもなんだが適任には違いない。

「もう、叶ちゃんのいけず。折角叶ちゃんと仲良くなれるチャンスを不意にするわけないよ。それに久住さんは朝からそわそわしていてそれどころじゃなさそうだったしね。」

海は叶の頬をつつきながら顔を寄せる。

構図的には背後に百合の花が咲きそうだった。

真奈美はむしろ自分でも気付かなかった裕子のわずかな変化を鋭敏に察知した海の感覚に驚いていた。

「まあ、新入生みたいなのは事実だし案内してあげたら、叶？」

「わーい。真奈美ちゃん話が分かるね。」

叶を抱いたまま喜ぶ海。

もはやされるがままの叶は不安げに真奈美を見た。

「えっと、真奈美ちゃんは？」

「あたしもちよつと用事があったね。」

そう言っつてポンと義足を叩く。

今でも真奈美は定期的に通院している。

すっかり元気で真奈美本人も普通に生活しているから忘れられがちだが大怪我から日常復帰してまだ半年しか経っていない。

なので足及び左目の経過観察は続いていた。

「あ、そうだったね。お大事に。」

「さすが真奈美ちゃん。空気読んでる！」

海が実に嬉しそうに親指を立てた。

真奈美は帰り支度を終えてドアに向かい、ドアに手をついたところで一度足を止めて振り返った。

「それはどうも。だけど、もしも叶に何かあったらその時はただじやおかないよ？」

真奈美は去り際に鋭い視線を海に向けて帰っていった。

「ちよつと震えちゃったよ。」

言葉とは裏腹に海の瞳にはわずかな朱色が差していた。

「海さん？あのおときも言いましたけど」 Innocent Vision ”は無用な争いは駄目ですよ。」

叶が注意すると海はきよとんとし

「んー、叶ちゃん、可愛いなあ！」

ギューツと強く抱き締めた。

「離してください、海さん！」

叶の悲鳴が誰もいなくなつた教室に響き渡つた。

「…」

学校案内を始めた叶と海を遠くから見守る者たちがいた。

” Innocent Vision ” の八重花と由良である。

「マナは帰つたか。そうなると少なくともすぐにカナに危険が及ぶ可能性は低そうだな。」

本当に海が危険な人物だと感じれば真奈美は医者への予定をキャンセルしてでも叶についていたはずだ。

「どうかしらね？2人きりになつた今からが本当の姿かもしれないわよ？」

八重花も由良も、” Innocent Vision ” やヴァルキリーの誰も海の本来の姿を知らない。

知っているのはアダマスを操るソーサリスとしての一面だけだ。

”人”としての海を知っているのは陸や両親や昔の友人だろうがその辺りの伝がない以上、己の目で見極めるしかない。

「…、それにしても…」



八重花は前に目をやる。

本来なら並行に立って見えるはずの背中

「叶ちゃん。」

「もう、海さんは。」

人あるいは入のシルエットになっていた。

あるいはトカ。

「何であんなに叶になつてゐるのかしら？」

4組の騒動を耳に挟んだ限りでは最初から叶にべったりだったらしい。

だから転入生だが叶とは知り合いだったという話まで聞こえてきていた。

「さあな。少なくとも俺は女同士でベタベタする感覚がわからん。」

由良は美形なので悪い噂が無くてもう少し表情を穏やかにすれば『お姉様』と呼ばれる立場にいたかもしれない。

だが本人はまったくその気はない。

「私は少しは分かるけど、でもやっぱりベタベタするならりに決まっているわ。」

「そうだな。」

「…。」

「…。」

バチバチと静かに火花を散らす恋敵。

2人は不敵な笑みを浮かべあいながら叶たちを静かに尾行し始めた。

## 第89話 追跡ゲーム

叶と海が学校案内を始めた頃、ヴァルキリーはヴァルハラに集合していた。

厳肅な空気の張り詰める部屋で乙女会会長である等々力良子が口を開いた。

「今日みんなに集まってもらったのは他でもない……」  
葵衣、緑里、悠莉、美保。

4人の視線が良子に集まる。

良子は一度頷いてから

「大学のスポーツ推薦のレセプションに合格しました！」  
諸手を上げて満面の笑みで報告した。

だがヴァルキリーの面々は無反応。

むしろ冷たい視線を良子に向けている。

「うっ、いいじゃないか、少しくらい喜んでくれたって。」

誰からも祝いの言葉が出ないため上がっていた腕がすっかり萎れてしまった。

「良子先輩、状況をわきまえてくださいよ。」

「美保に空気読めとか言われた！」

「なんでそこで驚くんですか!？」

ギヤアギヤアと騒ぐ美保と意気消沈してノリの悪い良子。

残る3人は止めもせず紅茶を飲んでいた。

厳肅な空気なんてまやかして残暑のせいでヴァルキリーも結構グダグダだった。

「美保さんも等々力先輩も落ち着いてください。お祝いは改めてしますがまずは案件の処理が先です。」

「わかったよ。」

悠莉に諭されて塩振った青菜から立ち直った良子は両頬をパンと叩いて気合いを入れ直した。

「どうも半場海が学校に転入してきたみたいだね。」

「飯場海という名義で新麗学院からの転入生となっている模様です。」

「半場海って新麗に通ってたんだ？なんかムカつく。」

葵衣が調査した情報を読み上げると緑里が不満げな声を漏らした。

それというのも撫子が父から社会勉強のために壱葉高校に入ること  
を命令されなければ新麗学院に進学していたはずだった。

そうなれば葵衣と緑里も当然新麗に入学し、半場陸とは無縁の人生  
を送っていたに違いなかった。

尤もその時撫子が今のように大きく躍進するようになっていたかは  
分からないが。

「その似非お嬢様は作倉叶に随分とお熱らしいわね？女子校のノリ  
なのかしら？」

美保もつまらなそうに紅茶を口にした。

美保も女子校のノリは理解できない側である。

「女子校は楽しいですよ、結構人間関係がドロドロしているそうで  
ふふふ。」

悠莉が黒い笑いを漏らす。

皆、悠莉の反応に引き気味だった。

さすがに全員から距離を取られて悠莉は笑つのをやめると居住まい  
を正した。

「コホン、今は飯場海さんの事です。作倉叶さんと親しい理由とし  
て考えられるのは2つ。1つは”Innocent Vision  
”の仲間として夏休みを使って友好を深めた。もう1つは”Inn  
ocent Vision”のリーダーである彼女とお近づきにな  
ろうとしているという事です。」

悠莉の意見は要約すればすでに仲間なのかまだ仲間とは認められて  
いないかになる。

「サマーパーティーであれだけド派手に”Innocent Vi  
sion”に入るって言ったんだからもうとっくに仲良くなってる

んじゃない？」

「良子や緑里、美保は海は”Innocent Vision”でありヴァルキリーの敵というスタンスを確信していた。だが葵衣と悠莉は違う意見を持っていた。」

「伝え聞いた限りで”Innocent Vision”の飯場海様への対応は警戒が強く見られたようです。作倉様のみ接触しているという点もこの仮説を裏付ける証拠と言えます。」

海は”Innocent Vision”の仲間にはなっていない。だがそれを聞いた美保は面倒そうに目を細めた。

「それで仮に飯場海が”Innocent Vision”の仲間じゃなかったとしてヴァルキリーに引き込むつもりですか？また江戸川蘭や東條八重花みたいになるのが目に見えてますよ？」

「蘭は態度からしてヴァルキリーに協力的ではなかったし、八重花は初めからりくを手に入れると公言してヴァルキリーを利用していた。その2人はあつさり」と”Innocent Vision”に寝返って幾度となくヴァルキリーを苦しめた。

飯場海にしても”Innocent Vision”に入ると大勢の前で言っており意思表示は明らか。

無理矢理引き込んでもちよつとの心変わりですり抜けるのは目に見えていた。

「確かにアダマスの戦力は貴重だけどあれを背中から撃たれると思うと…ぶるぶる。」

「サマーパーティーの終わりに海の手加減に付き合わされた良子はあの時の恐ろしさを思い出して身震いした。」

「撫子様のヴァルキリーに裏切り者はいららないよ。」

「緑里も信頼できない相手はいらないと首を横に振る。これまでの経験からすれば美保たちの意見は尤もだった。新たにメンバーを加えるならジュエルから探した方が断然安心感がある。」

「撫子様の御意向もお尋ねしますが皆さんのご意見は参考にさせて

いただきます。」

乙女会の長は良子でもヴァルキリーの長は撫子であるためその意向が尊重される。

「ここはお嬢様からの連絡を待ち……」  
ブウウ

マナーモードにしてあった葵衣の携帯が鳴る。

まさか連絡を取る前に撫子から来たのかと皆が密かに期待していたが「はい、…了解。引き続き監視を続けてください。」

口調から別人だと分かりガツカリした。

「葵衣、誰から？」

「学内に残っていたジュエルからでした。作倉叶様および飯場海様の両名が現在学内を散策中という報告です。」

「転入生に学校案内ね。2人だけ？」

その話題に食いついたのは美保だった。

「詳細な報告は受けていませんがお二人が歩いているのを確認したという内容でした。」

美保は面白いことを見つけた顔をして何度も頷く。

「ふーん。つまり作倉叶と飯場海を一緒にしても平気だって”Innocent Vision”の連中は考えてる、そういう信用があるってことよね？」

「なるほど。これで飯場海は”Innocent Vision”の仲間確定だ。」

良子も納得した様子で頷く。

美保はそれでさらに気を良くしたようで勢いよく椅子から立ち上がって拳を握りしめた。

「敵は殺す。ちようど無防備な獲物が狩場に残ってるのよ？校内には人も少ないはずだし今が絶好のタイミングよ。」

美保は自分の考えの正当性を疑うことなく酔いしれていた。

良子も難しい顔をしながらも立ち上がる。

「セイントと最強のソーサリスのコンビって言うのは凶悪だけど個

別に戦える機会を逃すのはもったいないしね。」  
緑里も手を上げながら立ち上がる。

「学校に来たことを後悔させてあげるよ。」  
さらに：立ち上がる者はいない。

すっかり行動派ヴァルキリー三人衆としてパターン化してきた。  
美保が不満げに座っている悠莉を見下ろす。

「最近ノリが悪いわね？」

「ふふ、女はいろいろと大変なんですよ。」

追求を悠莉は笑顔でかわす。

「女」の「いろいろ」を想像した美保はあっさりと納得した。

「なるほどね。分かるわ。」

「ふふふ、ご冗談を。」

「あたしも女よ！」

戦闘への参加のノリが悪くても美保との掛け合いは絶好調だった。

「葵衣先輩、学校に残ってるジュエルの連絡先を教えてください。」

「こちらに。」

いつの間に印刷したのかジュエルのリストが手渡された。

「さすがにどこにいるかまでは把握していませんがご自由にお使い  
ください。」

そして3人にはさらに双方向通信のインカムが配られた。

インカムを装着した3人は楽しそうに調子確かめている。

「テレビでやってる追跡ゲームみたいだね。相手の位置が分かるレ  
ーダーがないのが残念だけど。」

「そちらはジュエルをご活用下さい。」

情報を集めて部下を指揮して敵を追い詰めて倒す狩猟ゲーム。

「さあ、行くわよ！」

そのゲームが美保の掛け声と共に開始された。

「現在ターゲットは2階特別教室を移動中です。」

「了解。引き続きよろしく。」

美保たちはジユエル全員に連絡をとって全員の現在地を確認。内、校内にいた4人を目として動向を探っていた。

「どうやら下から順番に上っていつてるみたいだね。」

「まあ、案内としてはそれが妥当だからね。」

3人は生徒手帳に載っている学校の見取り図を覗き込みながら追い込む作戦を考えていた。

「こうしてみると学校って追い込みづらい形してますね。」

壱葉高校の校舎はY字型で一見端の方に追い込みやすく見える。

だが実際には階段があるため何処にでも逃げられる構造をしていた。

「そうなるって追い詰められるのは……ここだね。」

緑里が校舎の中央を指で指し示す。

4階は屋上になっているため階段は一ヶ所しかなく屋上にまで追い詰めれば逃げ場はなかった。

「だけど問題はどうかやって屋上に行かせるか。」

学校案内で屋上に向かってくれるのが一番手っ取り早いがあそこには何もなかったため

「この上が屋上です。」

で終わる可能性もある。

なんとかして屋上に追い詰める必要があった。

「ジユエルを動かすのはどうです？ 逃走ルートを限定すれば屋上に逃げるんじゃないですか？」

美保が階段や廊下を指差しながら提案するが良子と緑里は首を横に捻る。

「戦う力がない相手からそれで追い詰められるだろうけど相手はジユエルより強いんだ。下手をしたら階段で突破されて外に逃げられるかもしれない。」

外はゲームオーバーを意味する。

逃がさないよう、かつ気付かれないよう誘導する策をああだこうだ

言い合っが打開策は何も浮かばない。

『ターゲット3階に移動。』

そうこうしているうちに叶たちは3階に上がってしまった。

このままでは案内を終えて2人は帰ってしまう。

「あー、もう！こうなったら力づくで屋上に追い込んでやるわ！」

結局考えることを放棄したヴァルキリー突撃乙女たちは叶たちを追って駆け出し

『ターゲット、屋上へ向かいました。』

その報告を聞いてずっこけた。

「ここが屋上です。” Innocent Vision ”のみんなでお弁当を食べたりもしますよ。」

「叶ちゃんの手作り弁当か。楽しみ。」

叶と海は案内の終わりに屋上に来た。

始業式だし夏の暑さが残っているためか他には誰もいない。

屋上という隔絶された空間はどこか異世界を思わせる。

「2人きりだね？」

「そ、そうですね。」

ただの確認の言葉のはずなのに叶の背筋に悪寒が走った。

よく見ると海との距離がゆっくりと狭まってきている。

「海さん、どうかしました？」

未知の恐怖を抱きつつ尋ねると海はニコリと笑った。

「叶ちゃん、私をお姉様って呼びたくない？」

「同い年ですよ？」

叶はその意味を理解できない。

だが海は別に構わないとばかりに距離を詰める。

知らないなら教え込めばいいのだから。



「大丈夫。すぐに海お姉様って呼びたくなるようになるからね。」  
息も荒く近づいてくる海に怯えて叶は後退るがすぐに柵に行き当たってしまった。  
叶の貞操の危機。

「はーっはっはっは！」

そこに聞こえてきたのは正義の前口上ではなく悪の幹部の高笑いのような声。

「何もしなくても屋上に来るなんて天はあたしらに味方したね。」  
屋上の重いドアを勢いよく開け放ったのはヴァルキリーの3人。

「Innocent Vision」の作倉叶、飯場海。覚悟しろ！」

ジュエルを手に三銃士のように武器を掲げて叫んだ。

叶は驚きと恐怖をない交ぜにした表情を浮かべている。  
だがその視線の先はヴァルキリーではなかった。

ズウン

「!?!」

重力が倍加したようなプレッシャーが空間を支配した。

意思とは無関係に体が震え、カチカチと歯の根がぶつかり合っていた。  
美保たちは声も出せず発生源を見る。

そこに、修羅がいた。

「色んなのに監視されていて、屋上に来てようやく解放されたのに。」

海、そして意外に叶も八重花たちやジュエルの監視に気付いていた。  
その八重花たちもとりあえず海が悪さをしないと認めて帰っていったためようやく海が野望を実現させようとしていたところだった。  
それを邪魔したのが美保たちヴァルキリー。

海の怒りが爆発するのも無理なかった。

「あわわわ……」

「さ、作倉叶！このままだとこちらが殺されるのよ、なんとかしなさいよ！」

あまりの恐怖に叶にまで懇願する始末。

確かに今の鬼気迫る海の様子なら一瞬で殺しかねない気配を放っていた。

「コオオオ」

目は朱色に爛々と輝き手に握る得物は金棒の如く。

それはもはや鬼だった。

叶は海と美保たちを交互に見て

「わかりました。」

そう答えて頷いた。

この時3人には叶が神の遣い、天使に見えた。

叶はニコリと笑い

「本当に危ないときにはちゃんと助けますから。」

そう付け加えた。

「え？」

美保たちが安堵のため息のまま固まる。

その言葉を理解する前に

「ウガアア！」

鬼が解き放たれた。

「ぎゃああああ！」

人とは思えない凶暴な叫び声に3人は悲鳴を上げて抱き合った。

ジュエルを持つ戦乙女たちも鬼の前ではただの乙女だった。

## 第90話 Phantom Pain

結局、屋上での戦闘というか一方的な乱闘は適当なところで叶が止めに入って被害者は出なかった。

約3人、心に傷を負ったような気もするが死者も器物破損もない。去り際に

「今度私の邪魔をしたらその時は…消すからね。」

消滅のグラマリーを持つアダマスのソーサリスである海が言うと冗談ではすまされない消すという言葉を残して屋上を後にした。

流れで一緒に帰ることになった叶だったが海は案内をしていたときの元気がまるでなくなっていた。

「さっきの戦いで疲れましたか？」

叶は心配になつて尋ねるが海は余計に落ち込んでしまった。

「叶ちゃん。私、変な子だよな？」

「そうですね。」

ズーン

即答された海は光の差さない深海に沈んでいくように落ち込んでいく。

海だけに。

「あ、変な意味じゃなくてですね。私の周りにはいなかったタイプなので。」

スキンシップは裕子を過激にした感じだが、みんなの中心にいるのに何処か掴み所のない性格は会ったことのないタイプだった。

「あ、違いますね。クスッ。」

叶は何かに気が付いたらしくおかしそうに笑った。

叶の笑顔に海のテンションがだいぶ浮上してきた。

実にわかりやすいというか現金というか。

「何がおかしいの？」

「海さんのここにいるのに違う何かを見ているような不思議な感覚、

よく考えてみると陸君と同じだなんて。やっぱり兄妹なんですね。」「陸を陸たらしめていたのは Innocent Vision だけではない。」

その生い立ちもまた半場陸を作り上げる要因の1つだった。それに触れていた海もまた影響を受けていてもおかしくない。

「お兄ちゃんと…同じ。」

海は頬に両手を添えてポーツとその言葉を受け入れた。

「一緒に陸君の作った”Innocent Vision”を守りましようね。」

「うん。」

海は素直に頷いて叶の手を取った。

改めて仲間として握手のようだが叶を見る目は熱のこもった視線だった。

「海さん？」

「叶ちゃん…。」

2人は見つめ合い、海がゆっくりと近付き

スコン

「痛っ!？」

突然海が頭を仰け反らせて小さく悲鳴をあげた。

カラカラと音を立てて転がったのはおみくじの棒だった。

「琴お姉ちゃん。」

見るといつの間にかすぐ近くに琴が立っていた。

琴は海から叶を守るように背中の方へと回す。

「天下の往来で何をうらやまし…破廉恥な。」

若干本音が漏れたが幸い誰も気付いていなかった。

海は額を押さえながら恨みがましい目で琴を見た。

「酷いよ、太宮神社の巫女さん。痕が残ったら損害賠償請求するよ?」

「どなたか存じませんが、わたくしをご存じですか?」

琴の気配がわずかに鋭くなる。

ファブレとの最終決戦、サマーパーティーと琴は戦場には赴いていないので海とは面識がない。

見ず知らずの相手に知られているとなれば警戒もする。それが叶の近くにいたとなればなおさらだ。

「これでも私、地元民だから太宮神社のお祭りには毎年のように行っている。そこで見かけたことがあるよ。」

「そういうことでしたか。」

琴が知られている理由を知って緊張を緩めた。

叶も張り詰めた雰囲気や和らいで胸を撫で下ろす。

「琴お姉ちゃんは初めてですね。こちら飯場海さんです。」

「因みに名字は偽名だよ。本当は半分の半に場所の場ね。」

「っ!?!?半場、海…!」

だが名前を聞いた瞬間にさつき以上の緊張感が場に漂った。

琴は海を値踏みするように見、海は余裕の表情を浮かべたまま何も言わず、叶はおろおろと成り行きを見守る。

「あなたが…あの未来視Innocent Visionと言いつつ実は魅惑の魔眼で敵から味方から端から虜にしていく天然ジゴロである陸さんの妹さん…ですか。確かに顔立ちに面影がありますね。」

「あはは、その半場陸の妹さんだよ。」

兄の酷い言われ様を海は否定しなかった。

「えと、陸君は…あつ。」

叶は必死に弁護の言葉を考えるが、割と的を射ていることに気付いて何も言えなくなった。

半場陸への認識という点において共感を得た琴はようやく海を敵視するのを止めた。

「飯場海さん。”Innocent Vision”に参加されるそうですね。」

「そうだね。これで叶ちゃんと一緒にいる口実ゲットだよ。」  
ピクッ

琴の目尻が痙攣した。

「ふふふ。飯場海さん。今後とも仲良くしましょうか？」

「あはは。お兄ちゃんを悪く言う人とは仲良く出来ないけどね。」

ピクッピクッ

「ふふふふ。」

「あははは。」

和みかけていた雰囲気がいつの間にか人生最大の仇敵と相對したような肌を差す臨場へと変わっていた。

「ひーん、みんな仲良くしないとダメですよー！」

板挟みにあつた葉が泣き言を漏らし、新学期早々から目立つ一行だった。

平日の病院で真奈美は担当医に定期検診を受けていた。

「少し背が伸びたみたいだね。バランスを調整しよう。」

「お願いします。」

真奈美の担当医である永井はまだ若いながらも誠実で医者としての腕もあるため人気があつた。

手際良く真奈美の義足を外して高さを調整している。

全然気にならなかつたが實際調整されるとバランスがわずかに狂っていたのを実感した。

「他にはおかしなところはないかな？幻肢痛、無くなった足が痛んだりは？」

「特にありません。むしろ時々自分が義足だつて事を忘れますから。」

永井はそれを冗談だと思つたらしくおかしそうに笑つた。

だが真奈美は本当に義足であることを忘れることがある。

それはスピネルがもう1つの足として真奈美を支えるときにこの義足もどういう原理かスピネルに取り込まれるようになったからだ。

おかげで急な脱着から解放され、自分の足のように錯覚してしまう要因となっていた。

「眼帯の方はどうしようか？ご両親ともご相談しないといけないけど義眼という選択肢もあるよ。」

今後生きていくに当たり義足、眼帯の姿では第一印象が悪い。

それはまだ小さな社会でしかない吉葉高校の中だけでも十分に知った。

たとえどんなに優れた人間であっても第一印象で与えるイメージは客観的な人物の質を限定してしまうものだ。

「義眼にして、あたしの左目は見えるようになるんでしょうか？」

真奈美が尋ねると永井は言いづらそうに視線をさ迷わせた。

真奈美としては今さら見えるようになるなんて思っていないし潰れた左目は弱かった自分への戒めとすら考えているくらいなので何を聞かされても驚きはしない。

だが医師からすれば患者の希望を叶えられないことがつらいのだろう。

永井は自分の無力を悔やむように膝の上で拳を握っていた。

「左目が眼球破裂を起こしたから。残念ながら視力の回復は見込めない。」

「そうですか。それなら眼帯よりも義眼の方がいいですね。両親と相談してみます。」

真奈美があっさりと受け入れると永井はキョトンとしていたがすぐに気を持ち直してカタログを持ってきた。

「うわ、こうなってるんだ。ちょっと気持ち悪いな。」

真奈美は恐いもの見たさにカタログを捲って義眼のラインナップを眺めている。

その姿はファッション誌を捲っている女子高生と相違なく楽しそうで、とても自分が使う義眼を選んでいるようには見えない。

「…君は強いね。」

永井はそんな真奈美を見て慈しむように呟いた。

真奈美が不思議そうに顔を上げると永井は慌てて首を横に振った。

「すまない、気を悪くしたかな？」

「いえ、全然平気ですけど。」

永井はホツと胸を撫で下ろすと裏からコーヒーを2つ持ってきて1つを真奈美に渡した。

「あ、ありがとうございます。」

まさか診察に来てコーヒーを貰えるとは思っていなかった真奈美は驚きながら受け取る。

「僕は職業柄多くの患者を見てきたよ。大病を患ったり怪我をして二度と治らないと知った人の絶望や悲しみの顔は何度見たって慣れるものじゃない。」

永井は本当に悲しげにコーヒーに口をつけた。

顔が歪んだのは自分の無力さを思っただけか？

他人の痛みを自分のもののように感じ、それを改善してあげたいと思う態度こそが永井の信頼される由縁と言えた。

真奈美も做って一口飲む。

とりあえずコーヒーは濃くて苦かった。

「僕が今担当している患者さんで一番の重傷は間違いなく君だ。なのに君はどうしてそんなにも前向きでいられるのか、どうしても僕にはわからない。よかったら教えてくれないかな？」

口調は優しいが目は真剣で少しでも躊躇いを見せると土下座しそうな気迫を感じた。

そこまで熱心な担当医を持ったことを嬉しく思いつつ真奈美はコーヒーをもう一口飲んだ。

「あたしだってこの足を無くしたときは悲しくて悔しくて、どんなことをしても治しなかったですよ。」

そう言っただけで真奈美は小さく苦笑する。

本当にどんなことでも、それこそ医者には話せない科学とは対を成す魔法の領域にまですがって無骨な足を手に入れた。

「その頃を振り返るとあたしは焦っていたんです。ずっと仲良く一



緒だった親友たちともう並んで歩けなくなることが、置いて行かれてしまうことが堪らなく怖かった。」

「……。」

永井は真剣な顔で真奈美の言葉を聞いている。

少し照れ臭く思いながらも語り始めた口は止まらない。

「それで無理をしようとしたとき、親友たちとは別の大切な友達が必死に止めてくれたんです。たとえ足が無くても親友たちはあたしを見捨てたりしない。無理をしてその友情を壊すなつて。」

実際はもつと激しく、真奈美は本気で陸を殺そうとしていた。

新たな足・アルミナの力を使って。

それでも真奈美の邪な思いは通じなかった。

不器用すぎる優しい魔眼に止められて。

「それであたしは目が覚めたんです。あたしの友達はみんないい子たちで、あたしが無理をすれば余計な心配をかけるだけだつて。よく考えれば分かったはずなのに。」

真奈美はそれを左目を代償にして理解した。

今の真奈美は友人たちの優しさで立っている。

だからもう負の衝動に突き動かされる事はあり得ない。

友を否定する行動を取ったとき、失った左目が真奈美を苛んで二度と立ち上がれなくなるのだから。

「だからあたしは友人たちと一緒に居られればそれがどんな姿であつても構わないんです。本当に大切なものが何なのか、教わりましたから。」

「それは、なんだい？」

永井の声が震えている。

真奈美はカップに残ったコーヒーを飲み終えて微笑んだ。

「人への感謝を忘れないこと。」

それが今の真奈美の根幹。

友から授かった力を友と弱き者たちを救うために振るう。

これが一度は魔剣に魅入られながらも聖剣を担うことができた真奈

美の心の裡であつた。

「ふう、ちよつと恥ずかしい話をしちゃいましたね？あ……」

真奈美が照れ笑いを浮かべながら永井を見ると彼は泣いていた。

「……」

真奈美は慌てない。

少なくとも悲しくて泣いているわけではないのは表情を見ればわかる。

大の大人の男が涙を流す姿を茶化すほど真奈美は不粹ではない。

ポケットからハンカチを取り出して差し出した。

「ごめん、みつともないところを見せたね。」

永井はハンカチを受け取って恥ずかしそうに目許を拭う。

「みつともないとは思いません。男の人が泣くほど感動する話だったかはわかりませんが。」

真奈美は首を横に振って優しく微笑んだ。

「ッ！」

永井が突然顔を背けた。

真奈美が不思議そうに見ていると数回咳払いして誤魔化した。

「話をさせてすまなかつたね。人への感謝を忘れないことが。君の心はきつと天使のように清らかなんだね。」

「はは、おだてても何も出ませんよ？それでは今日もありがとうございませした。義眼の件は両親と話し合ってみます。」

真奈美は丁寧にお辞儀をすると診察室を退室していった。

永井はドアが閉まるのを見届けてから目元に手を当てて椅子に深く腰かけた。

「ふう……」

真奈美の話を聞いたことには何も後悔はない。

真奈美は友人へではなく人への感謝と言った。

それは友人たちに限らず親、恐らくは永井自身も含めた言葉。

医者をやっていて良かったと再認識させられた。

だから永井が困っているのはその事ではなく

(慈愛に満ちた天使の微笑み…)

患者であり高校生である真奈美の穏やかな笑みに見惚れてしまったことだ。

「先生、芦屋真奈美さんどうでした？」

突然裏から看護師に声をかけられて永井はビクツと驚いた。

「ツ！？とつ、とつてもいい子だったよ？」

そして普段ならしない勘違いで病状ではなく自分の気持ちを口走っていた。

看護師の驚いた顔が徐々にニンマリと笑みに変わっていく。

「永井先生が、そうなんですか。くふ。」

「ま、待ってくれ。別に僕はそういう意味で…」

必死に弁解しようとしているが顔を真っ赤にしていては説得力などなしのつぶてだ。

だが看護師にとつてもその反応は少々予想外。

本当に何かのキツカケで見惚れていたのをからかったつもりだったのだが

(もしかして、本気なのかしら?)

永井先生の反応からそう思えた。

「…わかりました。」

了承の返事を貰ってホッとため息をつく。

看護師は神妙に頭を下げたまま小さく笑っていた。

(これはここでつつくよりも経過観察をした方が面白そうなもの。)

永井先生がブルツと身震いをした。

「どうかしましたか、先生？」

「いや…？」

「それよりも次の患者さんがお待ちです。」

「ああ、わかった。」

永井先生は医者顔に戻って診察を再開した。

## 第91話 人気者はつらいよ

始業式が金曜日だったため翌週の月曜からさっそく授業だった。休み明けでいまいち気合いが入っていない生徒が多い中

「　　」

海は楽しみに板書された問題を解いていく。

問題を眺めたときに手を止めた以外はスラスラと詰まることなく答えを書いていった。

「正解。良くできました。」

答え合わせをした先生の言葉を聞いて海は叶にブイサインを向ける。叶も小さく手を振り返した。

海の活躍は数学だけには止まらなかった。

「ペラペラ」

英語をペラペラと話し

「しつとり」

国語の朗読を情感たっぷり読み上げ

「行くよー！」

体育のバスケでは圧倒的な戦果を示した。

「あの新型は化け物か!？」

と誰かが言ったとか言わないとか。

ともかく容姿も整っており勉強が出来てスポーツも得意だという汎用人型の飯場海の知名度は鰻登りだった。

「おい、聞いたかよ、2年の転入生の話。」

「ああ。すごい子が来たらしいな。」

「新麗学院ってただのお嬢様学校じゃなかったんだね。」

「あの子が特別なんじゃない?」

噂は午前中で広まって休み時間の度に教室に覗きに来る生徒が増え  
ていた。

海はそれに気付いていながらも叶にベツタリで相手にする様子はな  
い。

裕子と久美、真奈美がその光景を少し離れたところから見ていた。

「飯場さん、凄い人気だね。同じような名字の半場くんとはえらい  
違い。」

「にははは、りくりくは嫌われてたもんね。」

「原因は裕子と八重花だけだね。」

裕子はハハハと笑って誤魔化した。

真奈美も追求するつもりはなく心配そうな視線を叶に向けた。

「あの子が近くにいると叶も視線に晒されることになるけど大丈夫  
かな？」

少なくとも現状は外の視線を気にしながらも海と自然に話している。  
昔の叶なら不特定多数の視線を向けられただけで萎縮して裕子たち  
の後ろに隠れていただろうからずいぶんと成長したと言える。

「叶は大丈夫そうとはいえ、問題はあつちだね。」

裕子がドアの外の生徒を見る。

興味本意で覗きに来ている生徒がほとんどだろうが中には海に憧れ  
を抱く女子や手に入りたいと望む男子がいるはず。

そんな相手にとっていつも近くにいる叶は邪魔者でしかない。

叶に危害が加わる可能性があった。

「にはは、かなつちが苛められないようにしないと。」

「そうね。私たちがなんとかしてあげないとね。」

実際には叶は心だけでなく力もついた。

だが一般人を相手に戦うとも思えない。

振るわれない力はないものと同じ。

「あたしたちで守らないとね。」

真奈美は今は義足となつている足を見て呟く。

それは裕子たちとはまた違う決意も孕んでいた。

昼休み

「叶ちゃん、ご飯にしよう。」

海は相も変わらず叶と一緒にだった。

明らかに時間を追うごとに視線の数は増えてきていた。

それでも叶は変わらない。

一般人に手を上げるわけにもいかないし何より本物の殺気に比べれば可愛いものだと思うからだ。

「いいですけど今日は屋上ですよ？」 Innocent Visi on”の集まりで。」

最後は小声で告げると海も頷くだけでその単語を繰り返したりはしなかった。

2人とも弁当だったので購買に行く真奈美と一度別れて屋上へと向かう。

「飯場さん。」

教室を出るとすぐに海がクラスメイトの朝倉に声をかけられた。

2年4組の女子派閥で裕子と対立するグループのリーダー的存在だ。

「よろしければ昼食を一緒にしませんか？」

朝倉はまるで叶に気付いていないように海を誘う。

裕子に関するものは何でも否定から入るほどの毛嫌いぶりのため裕子の腰巾着に見える叶にも悪感情を持っていた。

そんな事情を知らない海は叶を無視する存在に対して不信感を持っていた。

「私は叶ちゃんたちと食べるつもりだから。ごめんね？」

断られると思っていなかったらしくひどく驚いた朝倉はようやく海の隣に立つ叶に目を向け、睨み付けた。

「あら、いたのね？ 気付かなかったわ。いつもみたいに久住裕子の後ろにいればいいのに。」

「ははは。」

叶は笑って受けるだけだった。

それが処世術だと知りつつも海の中の反感は強まっていく。

「久住裕子のグループは騒がしいだけの野蛮な集まり、飯場さんのような方がいるべき場所ではありませんわ。」

海は叶に目線を送る。

叶もわずかに疲れたように小さく頷いた。

この朝倉はこういう人間なのだ。

自分に与する者、従う者を是としそれ以外を非とする排他的な思考の持ち主だった。

めでたくも朝倉に選ばれた海はニコニコとした笑みを浮かべたまま  
一歩朝倉の方へ近づいた。

それを海が受け入れたと当然のように思う朝倉は強気に微笑み、  
反対に海の浮かべた笑顔に寒気を感じた叶は慌てて止めに入ろうと動  
いた。

だが叶が到着するよりも早く海の手がぶれ  
ガシツ

「廊下の真ん中で何やってんだ、お前ら？」

その手が朝倉に届く前に由良が掴んで止めた。

海と朝倉が突然の乱入に驚き、叶は大事にならず安堵のため息を漏  
らした。

「な、なんですか、いきなり？」

朝倉はようやく邪魔が入ったのだと理解して金切り声をあげるが

「あん？」

由良が面倒くさそうに振り返ると

「は、羽佐間由良、さん!？」

由良だと気付いていきなり怯え始めた。

それを見て由良がさらに不機嫌そうな顔になる。

「由良お姉ちゃん。」

「おう、カナ。飯に誘いに来たんだが何の騒ぎだ、これ？」

周囲には海と朝倉のやり取りを見ていた野次馬が沢山いた。彼らも海を誘おうとしていたのか由良が視線を向けるとあからさまに視線をそらした。

「海さんは人気者なんですよ。」

「ふーん。まあ、こいつには俺から用があるんだ。借りていくぞ？」

由良が海の首根っこを掴んで周囲を見回す。

誰一人として由良に齒向かう者はいなかった。

「ふん。行くぞ。」

由良はつまらなそうに鼻を鳴らすとズンズンと歩き出す。

道の先にいた生徒は直ちに脇に寄り道を作る。

叶と海はそれに続いて人の輪から抜け出した。

「あはは、助かったよ、ありがとう。由良お姉ちゃん。」

「別におまえのためじゃない、と言うかお前はお姉ちゃんって呼ぶな。」

「ふーん、それなら『お義姉ちゃん』がいいかな？」

文字にしないとわからないニュアンスに由良がピクリと反応した。

「何の話ですか？」

「なんでもないぞ、カナ！」

叶は理解できないまま一行は屋上への階段を登っていった。

「…屈辱よ。作倉叶…」

朝倉はその後ろ姿が見えなくなるまでギリギリと拳を握りしめていた。

叶、真奈美、由良、八重花、そして海の5人は屋上に集まり

「…暑いね。」

「尋常じゃないくらいにね。」

なぜか我慢大会の様相でお弁当を食べていた。



海はしきりに隣に座る叶の弁当を狙っているが反対側に座る真奈美がちゃっかりガードしている。

右手の箸で勝負するため真奈美の位置からの方が動きやすいのだ。

「くっ、なんて鉄壁な。」

「弁当が減れば叶が悲しむからね。」

2人が熾烈な戦いを繰り広げている中

「カナの唐揚げ美味そうだな。1つくれ。」

「いいですよ。」

由良は普通に叶にあって食べさせてもらっていた。

それを見た海が箸を取り落として頂垂れる。

「なんて羨ましい。これが信頼の差なんだね。」

「いや、普通にちようだいって言えば叶はくれるよ。」

今度は落ち込んだ海を宥めたりと真奈美もなかなか忙しい。

そして今まで黙々と食事を摂りながら面々の様子を観察していた八重花は深いため息と共に箸を置いた。

「はあ。話し合うつもりだったけど必要なさそうね？」

「Innocent Vision」の初会合だよ。何の話？」

元気を取り戻しノリノリの海を見て八重花はこれ見よがしにもう一度ため息。

「あなたのことに関心してるでしょう、飯場海？」

海はきよとんとし、

「ああ。」

得心した様子でポンと手を打った。

「確かにどこの馬の骨とも、それ以前にちゃんと人間かも分からないような相手を易々と受け入れてくれる訳がないよね？」

「…」

今までのやり取りですっかり忘れていた事実 半場海はすでに死んでおりデーモンとして一度甦りそしてファブレに取り込まれて消滅した 海自身が皆に思い出させた。

一気に暑さを忘れるくらいの緊迫感が屋上に満ちるが海本人は叶た

ちの反応をどこか楽しみにするようになっている。

「それで、その答えは教えてもらえるのかしら？」

八重花が一番聞きづらい部分をピンポイントに尋ねた。

「それは…」

「それは？」

叶、真奈美、由良、八重花。

全員が身を乗り出して答えを聞き逃すまいとする。

海の口がゆっくりと開いた。

「内緒だよね、やっぱり。」

ズルッ

4人が一斉に地面に折り重なるように崩れ落ちた。

予想されていた答えとはいえ実際にやられると肩透かしである。

「だってそれって初対面の人間に性感帯はどこって聞くくらいのことでしょ？」

「例えがおかしいぞ！」

「叶は聞いてちゃ駄目。」

「？」

海は真顔で講釈し、由良がツッコミで吠え、真奈美は叶の耳を塞ぎ、

叶は不思議そうな顔でされるがまま。

八重花は不機嫌そうに弁当を食べるのを再開した。

「まあ、期待はしていなかったわ。」

「だよね。だって私の言葉をどれほど信頼するかなんて本人次第だもん。」

海がフツと真面目な顔で視線を空に向けた。

「あのファブレすらも出し抜いた”裏切り者”の江戸川蘭はその行動によって”Innocent Vision”での信頼を勝ち得た。」

海の言葉は真実だ。

共に生活し、共に戦った中で見せた蘭の行動があったからこそ最後の最後にファブレを裏切った蘭を迷いもなく仲間だと受け入れるこ

とができた。

「つまり私も”Innocent Vision”で信頼されるためには行動で示し続けなければならぬこと。口先だけならいくらでもなんとかなるでしょ、東條八重花さん？」

あえて八重花に尋ねたのは八重花が口先でヴァルキリーに入ったよ  
うなものだと言っているようだった。

「…確かにその通りね。」

八重花はどちらとも取れる肯定をして箸を口に運んだ。

「それじゃあ海さんは”Innocent Vision”の一員  
ということが良いですね？」

一応リーダーらしく叶が賛否を問うが誰からも否定の声は上がら  
ない。

「それじゃあ海さん、今日から正式に”Innocent Vis  
ion”の仲間です。一緒に頑張りましょうね。」

そう言っ葉が拍手をすると遅れてメンバーもパチパチと手を叩い  
た。

「ありがとう、頑張るね。でもその前に…」

海は不機嫌そうな顔になるとビシツと叶に指を突き付けた。

「な、何ですか？」

「それ！仲間とはすなわち友達以上の関係！」

海はいきり立って叫ぶ。

「そうなのか？」

「さあ、どうかしら？戦友という意味での仲間は必ずしも友情とは  
結び付かない気もするけど。」

由良と八重花は半信半疑というかぶっちゃけ興味がなさそうに傍観  
しながら好き勝手に意見を口に出していた。

「外野、うるさいよ！とにかく、友人を超える関係なのに「海さん  
で「敬語」なんてナンセンスだよ！待遇の改善を要求する！」

海が両手を振り上げて不満を露にした。

「ええと、それじゃあ…海様、本日は暑う御座いますね？」

「そうですね、叶様…って違うよー！」

叶は天然仕様だが海はノリツツコミだ。

「あーもー可愛いな、叶ちゃんは！」

海は声を張り上げてるのどこかにやけている。

「なんで怒られながら褒められてるのかな？」

「この姿を見ていると優等生だっというのが凄く嘘っぽいね。」

どう見ても今の海は駄々をこねる子供のようだ。

今にも地面に倒れ込んでジタバタしそうなほどだった。

「やだー、こんなのやだー！」

というかとうとう本当に地面に寝転んで駄々をこね始めた。

正直海から得ていたイメージから大きく外れた行動に全員が面食らっている。

「ふう、仕方がないわね。」

さつきからやたらとため息の多い八重花が重い腰を上げた。

「八重花ちゃん、海さんを止めるにはどうしたらいいの!？」

叶は本気で尋ねている。

本気で海を心配しているのだ。

それが分かった八重花は躊躇うことを止めた。

たとえそれを教えることで決定的な変化が起こると分かっている、

八重花は叶の意思を尊重しようとした。

それが”Innocent Vision”のリーダーのためにできることなら。

「いいわ。叶の覚悟、見せてみなさい。」

八重花は叶の耳元に口を近づけると

「  
ポソリと魔法の言葉を伝えた。

叶は呆然としていたが意を決して海の側に行く。

「うー、何、叶ちゃん？」

海は不満げな顔をしたまま上目遣いで近づいてきた叶を見上げる。

叶は一度大きく深呼吸をして

「海ちゃん、わがまま言っちゃダメだよ？」  
笑顔を浮かべて友達と話すように注意した。

「……」  
海がその優しい響きを聞いて、表情をパーツと華やかなものに変えた。

「叶ちゃん！」

「もう、海ちゃんは。」

「えへへ。」

海は叶に抱きつく嬉しそうに笑うのだった。  
それを見届けた八重花は背を向けて笑う。

「ミッシヨンコンプリート。」

「いや、そこまで大層なことしてないだろ。」

## 第92話 海原葵衣の弱点

海が正式に”Innocent Vision”に加わって数日、  
学内：というか叶の周辺の状況は悪化の一途を辿っていた。

「海ちゃんを見に来る生徒、減らないね？」

「見世物パンダの気分だね。」

海は言うほど気にしている様子はない。

胆力があるというべきか、あるいは他者を見下しているのか。

その中に質の異なる視線が混ざっている。

1つは嫉妬よりも強い敵意を向けてくるジュエル。

手は出してこないが友好度が増したことには気付いているようで常に誰かしらから監視されているような状態だった。

「普通の生徒もそうだけどジュエルは確かに鬱陶しいよ。でもそれ以上に厄介なのがね。」

「そうだね。」

そしてもう1つ別種の視線がある。

それはある種の愛情すら感じる熱のこもった目。

海と一緒にいることで俄に人気を得始めた叶と海の美少女ツーショットを熱心に観察する追っかけのような男子の視線だった。

「海ちゃん、こっち向いて。」

「叶たん。」

俗にオタク系と呼ばれるキモい男子に呼ばれて海と叶は同時に身震いした。

如何に敵意や殺意には慣れてきてしまったとはいえ歪んだ愛情表現には恐怖を覚える乙女たちだった。

飯場海の人気は乙女会にも影響を与えていた。

「飯場さんはちよつと淑女とは違つけど凄く魅力的よね。」

世の流行がセレブからナチュラルな女の子に変わったことも手伝つて乙女会の中でもセレブ派とナチュラル派に二分化しつつあった。そしてナチュラル派の会員たちは是非とも海にその極意を伝授してもらいたいと海の勧誘を乙女会に依頼してきていた。

「うーん、困つたね。」

放課後、乙女会会長である等々力良子はヴァルハラテーブルについて唸っていた。

ヴァルハラでの基本的な活動はヴァルキリーとしての会議だが乙女会の部室という名目も存在するため今は乙女会だ。

「飯場海様の勧誘の件ですか？」

葵衣が温くなつた紅茶を淹れ代えて良子の前に置いた。

それくらいの間良子は唸っていたのだ。

「そつだよ。何も知らない乙女会の会員たちからすれば今回の要望は当然だよね。」

”Innocent Vision”やソーサリスというしがらみを排除して飯場海を評価すれば容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群なのに気取つたところのない女の子であり大変魅力的である。

乙女会としてだけなら迎え入れるのは当然とすら思えた。

「ですが”Innocent Vision”である飯場海様を乙女会の会員としてお迎えするのは危険です。」

「そうなんだよね。」

海を乙女会の主要メンバーに招くと言うことは彼女をヴァルハラに入れることになる。

八重花のように名前の上だけでもヴァルキリーに参加しているならまだしも今回の海は完全に”Innocent Vision”所属のソーサリスだ。

引き込んで中から崩される訳にはいかなかった。

「いくつか案は考えてあります。1つは外部会員としてヴァルハラには招かず乙女会に参加していただく方法です。」

「でもそれってかなり傲慢じゃないかな？」

なにせヴァルハラには招き入れませんが乙女会として振る舞ってくださいと言っているようなものである。

何の見返りもなくやってくれるのは本物の善人くらいだろう。

「そうでしょう。それ相応の見返りを用意しなければ承諾を得るのは難しいと考えられます。」

「要求がお金とか情報とかいろいろありそうだけどただ乙女会に入るためにそこまでするのね。他に案はない？」

ヴァルキリーとしては別に海を入れないわけではない。

だが会員たちの期待を裏切るのもまた沽券に関わる事態になる。故に良子たちはこの難問に挑んでいるのである。

「代案としては乙女会の集会所をヴァルハラ以外に設定するという方法があります。」

「それ、あんまり意味ないよね？」

「はい。」

ヴァルキリーが海に警戒しているのは集合したときに暴れられること。

乙女会の幹部構成員がヴァルキリーと同じである以上どこに集まろうと違いはなかった。

「その際、飯場海様にはお一人だけテレビ電話によるテレビ会議として参加していただくどうか。」

「なんか正体を隠した悪の総帥みたいになりそうだ。」

葵衣の案も良いものはなく結局方針は定められていない。

「遅くなりました。」

2人が無言で考えていると悠莉がヴァルハラに入ってきた。

緑里は使用人としての仕事で屋敷に帰っており、美保も私用で来られないと連絡を受けているので今日のヴァルキリーはこれで全員だった。

葵衣はすぐさま立ち上がり紅茶の用意を始めた。

「お疲れさまです、等々力先輩。今日は何をされていたんですか？」



「ああ、実は…」

良子は乙女会からの要望や葵衣からの案を話して聞かせた。

悠莉は葵衣が淹れた紅茶を優雅に飲みながら時折相づちを入れて話を聞いていく。

「…ってわけでどうしたらいいか手詰まりなんだ。」

「悠莉様、何か良案はございませんか？」

良子と葵衣が視線を送る。

悠莉はゆっくりとカップを置くのと頬に手を当てて困ったように眉を寄せた。

「いけません、葵衣様。あなたが等々力先輩と同列で悩んでいるのはかなり問題ですよ。」

「ッ!？」

「悠莉ー？それはどういう意味かなあ？」

真正面から馬鹿にされてさすがの良子も青筋を浮かべるが葵衣は青天の霹靂とばかりに驚愕していた。

目や態度は口以上に雄弁に良子に対する認識を語っていた。

「…いいさ。どうせあたしはスポーツしか出来ないヴァルキリーの異端児さ。」

すっかりいじけてしまった良子を見て悠莉は微笑んだが会話の相手はあくまで葵衣。

さっさと見捨てて話を進める。

「お二人は不鮮明な人物像や強力なソルシエールによって飯場海さんを危険視しすぎです。」

「しかし、万が一にも皆様を危険に曝すわけには参りません。そのためには過剰に過ぎる警戒も致し方ないとご理解いただけませんか？」

葵衣にも確固ある思考の軸がある。

そこから導いた手段は今回海との交渉に対する良案を出せなかったがその本質を揺らがせることは出来ない。

悠莉はニコリと微笑んで紅茶を口にする。

「葵衣様のお考えも理解しています。しかし昨年からある程度分かっていたことなのですが葵衣様の作戦は常に理詰め柔軟性に欠けるきらいがあるようですね。花鳳様はそれをご理解した上で作戦の修正をされていたようでしたが。」

「……」

確かに葵衣は撫子自身からも同じような忠告を受けていた。

『葵衣の作戦は完璧よ。ただしすべての駒がその完璧に役割を演じることが前提となっているのね。不測の事態に対する手も考慮されているみたいだけれども本当の予測不能な事態に陥ったときに人は果たして指示通りに動けるかしら？』

そう言つて撫子は完璧すぎる計画に”人間的な余地”を加えた。

結局その時は撫子の言う不測の事態が発生し撫子の”余地”のお陰で辛うじて成功を収めた。

「…私は、成長していませんね。」

葵衣は珍しく小さくため息をついて紅茶を飲んだ。

常の無表情から少しだけ弱気の感情を覗かせた葵衣は悠莉に向かって頭を下げた。

「悠莉様。私はどうすればよかったですでしょうか？ご教授をお願いしたく思います。」

「そこまで改まれるのも困ってしまいますが。それでは簡単に。」

悠莉は一度そこで言葉を区切り葵衣と良子の2人を見た。

固唾を飲んで答えを待つ葵衣に微笑み解答を告げる。

「直接ご本人に尋ねればいいじゃありませんか？」

葵衣と悠莉、それに続く良子は2年4組の教室を目指していた。

「やはり私1人で行きます。悠莉様や良子様を危険に陥らせてはヴアルキリーの管理を任せてくださったお嬢様の名折れ。」

葵衣は頑なに悠莉たちの同行を断つたが

「心配要りません。」

悠莉は聞く耳持たず

「あたしもどうなるか乙女会の会長として見ておかないとね。」

良子も野次馬根性丸出しでついてきた。

「しかし悠莉様。何を根拠に大丈夫だと仰っているのですか？」

葵衣はまだ不満らしく論理的な解説を求め始めた。

悠莉はフツと微笑みを浮かべて葵衣を見た。

「簡単なことです。私たちが相手にしているのは言語の通じない野生の獣ではなく、特殊な力を持ったただけの人だということですよ。」

「はい。」

葵衣は首を縦に振って頷いた。

だがその言葉の真意を掴めていないのか真剣な目で悠莉を見ていた。

悠莉がわずかに頬を赤らめてもじもじし始めた。

悠莉の悪い癖は最近鳴りを潜めていたが消えてはいなかった。

コホンと咳払いをして悠莉は姿勢を正す。

「つまりですね。飯場海さんは壱葉高校で学生として生活している

以上ヴァルキリーと接触した瞬間に暴れるようなことはありません。

「

ヴァルキリーにしる”Innocent Vision”にしる魔

剣・聖剣の存在は一般人に秘匿するようにしている。

それは人前では戦うことではないということだ。

「それに彼女は”Innocent Vision”に所属している

のですよ？あの作倉叶さんがリーダーなのですから無益な戦いを

許可するとも思えません。」

こうして聞くと確かに飯場海の危険性は大きく減少したと思えてくる。

それでも悠莉の言葉はあくまで可能性の問題であって人目がない場所では攻撃してくるかもしれない。

少しでも危険因子が存在するならば葵衣としては悠莉たちを連れて

いくのは躊躇われた。

「心配していただけるのは嬉しいですが、私たちは葵衣様に過度の心配をされるほど弱くはありませんよ。」

悠莉は葵衣の心情を読み取ったようにフォローを入れた。

「そうだね。前の時は不覚を取ったけど今度戦ったときはあたしらが勝つ。」

良子も話に付いてきていないなりに葵衣を励ました。

「等々力先輩、何度も言っていますが今日は戦闘ではなく交渉ですよ？暴れないで下さいね？」

「あたしは猛獣か！？」

良子と悠莉のやり取りを見ていてようやく葵衣は自分が想像している以上に気負っていることに気が付いた。

撫子から任されたヴァルキリーの業務、ジュエルの管理育成、乙女会への指示と要請への対処と学内だけでもこれだけの仕事を受け持つており、いつしかそれらの情報を混同させてしまっていた。

確かに”Innocent Vision”の”ソーサリス”として敵対した飯場海は”ヴァルキリー”にとって脅威であり”ジュエル”をいとも容易く退ける化け物である。

しかしこれから出向く用件は”乙女会”のもの。  
血生臭い戦闘とは関係ない淑女の中の淑女を育成するための集いでしかない。

ならば相手は”Innocent Vision”でも”ソーサリス”でもなく今学生たちに慕われている”飯場海”でしかないのだから恐れる必要はない。

ようやく葵衣はそう納得することができた。

それにもしもの事が起こった時、任務とは相反するが悠莉たちがいてくれることは心強かった。

「確かに”Innocent Vision”はヴァルキリーの敵ですが、時にはその人を信じてもいいと思うんです。」

悠莉はそう言って一歩前に出た。

放課後を迎えてそれなりに時間が経っているが監視のジュエルから帰宅したという報告は受けていないので2年4組の教室に訪ねた。中からは女の子たちの声がする。

そこで2年生の悠莉が先に声をかけようとドアを開いた。

「すみません。こちらに飯場海さんはいらっしやいますか？」

結果的に海は教室で海を慕うナチユラル派の生徒と談笑していた。

「叶ちゃんに他の子も相手してあげないと可哀想だつて怒られちゃった。」

とのこと。

女子生徒たちは乙女会が来たことで潔く去っていった。

そして葵衣は海に乙女会への参加を要請した。

そこにはヴァルキリーとしての要求は何一つ提示しなかった。

それには海だけでなく良子、そして焚き付けた悠莉すらも驚いていた。

結局

「私は乙女会には入らないよ。私はただ自分が出れることをして今の私になつてただだから。だからさっきの子達も含めて他のみんなにはこう伝えてもらえるかな？」

海は一呼吸おいて告げた。

「自分の好きなことを生きているうちに精一杯やること。」

3人はヴァルハラに戻ってきた。

結果を見れば拍子抜けするほどあっさりと終わってしまい何事も無かった。

「結局あたしらの悩みは無駄だったみたいだね。」

「そのようです。飯場様は初めから乙女会に入会されるつもりが無いようでした。」

良子と葵衣は席について肩を落とす。

無駄に気を張っていたせいかわれてしまっていた。

「今日はお開きにしましょうか。」

悠莉はそう言くとさっさと帰ってしまった。

それを見送る2人は不思議そうにする。

悠莉はピッピッと携帯を操作してメールを打っていた。

「八重花さんへ…」

### 第93話 ジュエルの暴走

葵衣が学校で乙女会について悩んでいた頃、緑里は花鳳の屋敷にいた。

葵衣が不調になったときに各種業務が滞らないようにするため緑里にも補佐役としての仕事を任せるようになっていた。

「撫子様あ。これはさすがに無理です。」

緑里の机には山と積まれた書類がある。

「仕事終えて部屋に戻った緑里はそれを見て慌てて撫子に連絡を取ったという状況だった。」

『緑里、わたくしは仕事ですよ。それに葵衣がこなしていた量より多くは出さないように指示してあるわ。だから頑張りなさい。』

「…はい。」

撫子に激励されてはやるしかないと思えば緑里は気合を入れ直すが目の前に鎮座する山を見ると怖じ気づいてしまう。

「葵衣はこれ以上の仕事を、しかもヴァルキリーとか他の仕事もやりながら終わらせてたんだ。」

本来なら尊敬し追い付くために頑張ろうと思気込むものだが

「ボクの妹は忍者か宇宙人じゃなかるうか？」

あまりのスペックの違い、それこそシングルコアとクアドコアのハイパースレッディングぐらいの圧倒的な性能差に気付いてしまった緑里は姉妹という現実すら疑い出していた。

しかしどんなことを考えていても手を動かさなければ山は減らず、むしろ後日持ち越しで増える可能性が高い。

「よし、やるぞ！」

緑里はようやく机の前に座ってペンを手に…

コンコンッ

やる気メーターが上向きになった瞬間を見計らったようなタイミングでドアがノックされて緑里はペンを取り落とした。

「はい、どなたですか？」

声をかけながら仕方なくドアへと向かう。

使用人の誰かだとは思うが礼節として客人は招き入れるものだと教えられてきたため面倒でも自分でドアを開けに行く。

「頑張ってる、緑里ちゃ……」  
バタン

「……。あは、ちょっと書類の山を見るのが嫌なあまり幻覚を見ちゃったみたいだな。」

コンコンコンッ

「入ってます。」

コンコンコンッ

「ただいま留守にしております。」

コンコンコンコンコンッコンッコンッ

「うがー、いい加減にしてよ！」

適当に流そうとしていたのだがいつまでもノックを繰り返し、よく聞くと三三七拍子だったりしたため緑里の方が先に我慢の限界を迎えてドアを開けた。

そこには侍女長の中之島恵里佳が何事も無かったようにニコニコと笑っていた。

「もう、駄目でしょ緑里ちゃん。お部屋に訪ねてきたお客様を閉め出すようなことをしては。」

「仕事を邪魔しに来た侍女長は客じゃないもん！」

拗ねたように叫ぶ緑里にも恵里佳は動じない。

「お邪魔をするつもりはないわよ。ただ、執事服姿の緑里ちゃんを目に焼き付けておきたくて。」

緑里は普段の屋敷の仕事の時はメイド服を着ていることが多いのだが、執務補佐の時は気を引き締める意味と葵衣にあやかるため執事服を着用していた。

葵衣よりも感情が顔に出ていることと口調が少年みたいなため緑里の執事姿は葵衣以上に男装の麗人のようであった。



だが麗しき人はビシリと額に青筋を浮かべていた。

「あ、あらあ？」

恵里佳も笑顔に一筋冷や汗を垂らす。

今日の緑里はノリが悪いというか本気で不機嫌だった。

「…ボクがせつかくこれから頑張ろうとしたのに…してたのにい…」

グツと唇を噛み締めた表情が俯いて隠れ、体が小刻みに震え始めた。

「み、緑里ちゃん？」

まさか泣かれるとは思ってなかったので恵里佳は冷静なようで

（あああー！？どうしましょー！？）

と大いに焦っていた。

打開策を求めて視線を室内に向ければ目立つのはやはり机の上に山と積まれた書類だった。

「緑里ちゃん、実は私はその姿を見に来たんじゃなくてお仕事を手伝いに来たのよ。」

名案が浮かんだとばかりに胸を張って告げる恵里佳だったが緑里は「……」

ものすつごい疑わしげなジト目をしていた。

「…ははは」

恵里佳の額を冷や汗が滝のように流れ、笑顔がヒクヒクとひきつっている。

嫌な感じの沈黙が恵里佳世界時間的には永遠に近いほどに続き、カチカチと時計の針の音ばかりが耳についた。

「…ふう、しょうがないから許してあげる。だから泣きそうな顔しないでよ。ボクが悪いみたいじゃない。」

その世界の終わりは想像よりもずっと優しい緑里の声で訪れた。

「緑里ちゃん！」

恵里佳はあまりの感動に緑里に抱きついた。

緑里はずっと姉のように思っていた人がいつの間にか自分より背が低くて…みたいな少年のような感傷を抱きつつ恵里佳を離す。

「それじゃあさっさと始めよう。このままじゃ終わらないから。」

「そうね。緑里ちゃんのためメイドパワーを解放します！」

メイドパワーとは何か尋ねようと思った緑里だったが拳を握る恵里佳から闘志が滲み出しているように見えたので何も聞かなかった。

本当にメイドパワーがあっても反応に困るから。

「よっし、やるぞ！」

「緑里ちゃん、頑張つて！」

恵里佳の応援も得て緑里は再びペンを…

ドンドンッ

「……」

「……」

その手がノックの音で止まった。

だが叩き方が妙に慌ただしくて緑里と恵里佳は顔を見合わせるとすぐにドアに向かった。

ドアを開けた先には黒服の男が立っていた。

使用人ではない。

花鳳の家の中でも特に撫子に忠義を持つヴァルキリーの暗部だった。

それを見て緑里の雰囲気が一気に張り詰めたものに变化した。

恵里佳はヴァルキリーとは関わりはないものの何かをしているのは察しているため気を使って距離を取った。

緑里は会釈をすると廊下に出る。

「どうかした？」

「それが…拘束直後から意識不明だったジュエル・神戸が暴れ出しました。」

緑里は暗部の運転する車で現場に向かっていた。

「大阪で命令違反をした神戸が意識不明でこっちの病院に収容されたのは聞いてたけど、何で暴走？」

「わかりません。突然瞳を赤く輝かせて手当たり次第暴れ始めたもので。」

「それならすぐに連絡入れないと。」

ジュエルの暴走となれば一般人や暗部だけでは対処は難しい。

「携帯に連絡はしましたが通話中でした。ジュエルに関する内容でしたのでお屋敷にかけるのも問題ではないかと思ひまして。」

だが暗部の対応も問題点はない。

悪いのは緑里が仕事の多さを嘆くためにタイミング悪く撫子に電話をかけたことだ。

「くう！とにかく、急いで！」

「はい！」

ここで責任を追求しても事態は好転しないため解決のために車は公道を駆けていった。

到着した病院は表向き平常通りに見えた。

「隔離病棟に入れておいたのが幸いしたみたいだね。ボクが行くから万が一の時には退避指示を出してね。」

「はい、鎮圧の報だけお待ちしております。」

それ以外は聞く気はないという暗部の信頼に

「そう、ありがと。」

緑里は微笑んで車から出た。

執事服の少女が駆ける姿を患者たちは不思議そうに見ているがそこに危機感はない。

「何事もなく終わらせる。」

隔離病棟が見えてきた。

見た目は他の建物と同じはずなのに待ち構えている事態のせいかな気味な印象があった。

「ベリル・ベリロス！」

ジュエルを顕現させながら病棟に飛び込んだ緑里は

「ガアアアア！」

獣のような雄叫びと飛来する待ち合い室の長椅子に出迎えられた。

「！！！」

緑里はジュエルを長椅子に向けて振るった。

魔剣は合金製の椅子を真つ二つに分断する。

ガランゴンツと周囲を巻き込んで地面に落ちた椅子の音が響く。

椅子の飛んできた方角には誰もいなかった。

「いない？」

そこで気を抜くほど緑里も戦いの素人ではない。

直ぐ様その場を飛び退くと一瞬遅れて背後から襲撃を受けた。

距離を取った分対応に時間を使うことができた。

「行け、式！」

襲撃者に向けて不規則な軌道で式符が飛ぶ。

一般人では対処できる速さではなく、ジュエルでも変則的な動きを

目で追うだけで撃墜は難しい緑里のグラマリー！。

ガシッ

「フウウウウ。」

それを襲撃者、神戸はジュエルを握っていない左手で掴み取った。

そのまま力を込めてクシャクシャになった式を地面に投げ捨てる。

「何が原因かは分からないけど確かにこれは暴走だね。」

緑里の目の前にいるのは本当にかつてジュエルだったのかと疑って

しまう”化け物”だった。

ジュエルの身体強化を限界まで引き出したのか筋骨が明らかに膨ら

んでいる。

瞳は左だけじゃなく右まで怪しげな輝きを放っていた。

「これが…ジュエル？」

緑里は警戒を強めながらも信じられずにいた。

目の前にいるのはどちらかといえばかつてのジェムに近い。

ジュエルの力を引き出しているヴァルキリーは誰一人としておかし

くなつたことはない。

ジュエルに悪い意味での変身能力があるとは思えなかった。

「ガアアアア！」

「まずはこれを先に止めなきゃ調べようがないね。」

両の目を赤く輝かせた神戸はジュエルを振りかぶりながら床を蹴つた。

「速い！？」

一瞬消えたように見えるほどの速度で瞬く間に距離が詰まったため式を使う間もなくベリル・ベリロスで応戦する。

ギギン

2本の魔剣がぶつかり合い鏝迫り合いになる。

「アアアアア！」

「こいつ、何てパワーなの！？」

パワータイプではないとはいえ緑里は神戸に力で押し負けそうになっていた。

靴底で床を踏ん張るがズツ、ズツと後ろに滑ってしまふ。

「今だよ、式！」

押されながらも緑里が叫ぶと神戸に握り潰された式がクシャクシャのまま弾丸のように神戸の足に激突した。

「ゴアアアア！」

体勢が崩れた瞬間に緑里はジュエルをぶつけ合わせる力を利用して距離を取った。

神戸は追撃せず転がった式符をジュエルで滅多刺しにしていた。

（パワーもスピードも普通のジュエルとは桁違いだ。これは…）

緑里がその力の正体を考察するよりも先に神戸が動いた。

「グオオオオオ！」

天に掲げたジュエルからパチ、パチツと空気が爆ぜるような音が響く。

それは瞬く間に数を増して大きくなりバリバリと輝きを放つ電光の剣となった。

「エルバイトのグラマリー！」

「オオオオオ！」

再び神戸が跳躍しさつきと同じように突進してきた。ガギンと鏝迫り合いになるのも同じ。

だが違うのはジュエルがグラマリーを纏っていること。

「ッ、くっ！」

緑里はすぐに力づくで神戸を離した。

ブリツとした痺れを感じたのだ。

ジュエルで受ける度に体が痙攣する感覚を受ける。

緑里が警戒して距離を取ろうとした矢先、神戸はジュエルの切っ先を緑里に向けた。

まだ距離がある。

それでも構えたその意味は…

「オオオオオ！」

エルバイトの刀身から空走る稲妻のような電雷が放たれた。

「うわっ！」

緑里は咄嗟に持ち前のスピードで回避するが瓦礫に躓いて転んでしまった。

それを逃す神戸ではなくエルバイトの刃が緑里に向けられ

「グオオオオ！」

極大の雷撃が待ち合い室を閃光に染め上げた。

神戸は低く唸りながら崩れた瓦礫の向こうを見ていた。

バチッ

金属が帯電したのか瓦礫とは違う場所で放電が起こった。

「ッ！」

神戸がそちらに意識を向けた瞬間、瓦礫が四方八方に弾け飛ぶ。

緑里は無傷だった。

瓦礫の1つにはショートスマラグドが突き刺さっていて放電を続け

ている。

ショートスマラグドを避雷針にして直撃を免れていたのだ。緑里はショートスマラグドを拾いながら神戸に駆け寄る。

だが神戸のグラマリーの方が発動が速い。刀身に電気が走り

「デュアルグラマリー・光式籠女！」

それよりもさらに早く光刃と式が飛び出して高速回転を始めた。放たれた電光は回転力で弾かれて霧散する。

神戸は上に飛び上がろうと足に力を込めるが

「ッ!?」

回転力が生み出す吸気の流れが体を地面に縛り付ける。

かごめは発動前に抜け出さなければ回避困難なグラマリーであった。

「籠の中の鳥は、絶対に逃がさない！」

式と光刃の回転力が増していき、さながら光の輪のようになった。

「グウウガアアアア！」

神戸は吠えるが体を拘束されたように動けない。

緑里はベリル・ベリロスとショートスマラグドを交差させ、左目の朱色を強く輝かせて叫んだ。

「駆ける！式光円舞！」

光の輪が一度膨らみ一気に神戸を締め上げるように収縮した。

式符と光刃の二種類の斬撃が神戸の体の周りを縦横無尽に駆け回る。

「ガアアアア！」

最後に爆発したように光輪が消えると神戸もドサリと地面に倒れた。

「殺しはしないよ。聞かなきゃならないことがいっぱいあるからね。」

「

緑里は携帯で暗部や葵衣に連絡を入れる。

さらにはこの後病院側とも話し合わなければならない。

緑里が憂鬱になりながら電話をしている後ろで神戸の手からころり

と闇のよつに黒く紅色の斑点がある石が転がり落ち砕けて消滅した。



## 第94話 歪んだ愛の行方

ジュエルでの騒動も”Innocent Vision”には関係のない話であり、今日も叶たちは様々な視線を向けられながら普通の学生として生活していた。

「休み時間に来る人も減ってきたね？」

つい先日まではドアから溢れんばかりの生徒が押し掛けてきていたが今はちらほらと見掛ける程度である。

これは海が乙女会に入らないと宣言したこと、そして海を慕う少女たちに乙女会から有り難い御言葉を伝えてもらったため少女たちが訪ねてこなくなったのが大きな要因である。

今その少女たちは自分の好きなことに一生懸命励んでいることだろう。

女子の覗く人数が大幅に減り、他の理由で見に来ていた主に男子の姿は目立ってしまふ。

そうになると人目を気にする思春期男子は近づかなくなり、結果として人の波は引いていったというわけだった。

海はそれを理解していながら首をかしげる。

「何でだろうね？」

別にそんなメカニズムには興味はない。

叶との時間を邪魔されなければ視線などいくら向けられたところで関係ないしそれが男だろうと女だろうと関係ない。

ただ叶が視線に疲れを見せていたことを考えると減ってよかったと思う海であった。

「よかったけど……」

「……そうだね。」

「叶たん。」

「海様。」

周囲の目を気にしない歪んだ愛情の持ち主たちは相変わらず残って

いた。

「「はあ。」」

声をかけるのも怖いのでそのままにしているがそろそろ疲れてきた2人だった。

「意外だね。」

そんな2人の会話に入ってきた真奈美は海に向けて言う。

「ん、何が？」

「あの手の相手に対する対処。飯場は嫌なものは実力行使で排除するタイプだと思ってたからさ。」

グラマリーで消滅させるとまでは言わないが多少強行手段を使って力でねじ伏せて近づかないように脅すくらいはすると真奈美は思っていた。

「あはは、やだなあ、真奈美ちゃん。」

海はおかしそうに笑う。

「あんなの触らなくてもちよつと他の男子に涙を見せながら助けを求めれば数日後にはいなくできるよ。」

「発言が黒いな。」

だが海の手段は最も実現可能性が高い方法である。

今からでもそれを実行すれば数日と言わず明日にはあの男子たちは姿を見せなくなるだろう。

そうなるとやはり海が排除を行わずに放置している理由は分からない。

「それでどうして？」

真奈美がもう一度尋ねると海は苦笑を浮かべて隣の叶に視線を向けた。

叶が代わりに答える。

「直接何かをされた訳じゃないから何もしないの。もしも何かされたらその時はどうするか考えるよ。」

誰も傷つけないという叶らしい意見だった。

少なくとも視線を不快だと感じた時点で何かされたと普通の人は考

えるというのに。

「そういうことなら今はいいか。何かあったらいつでも手伝つよ。」

「うん。ありがとう、真奈美ちゃん。」

「うん！ありがとうお、真奈美ちゃん！」

「……………」

叶の真似をしてぶりっ子っぽく返事をした海を真奈美はとても冷たい目で見た。

海の顔が見る見る赤くなっていく。

「なんか反応してよー！」

「あははっ。」

叶と海の周りは今日も騒がしかった。

「ううん、それは由々しき事態ね。」

一応叶の意見に納得していた真奈美だったがやはり問題がある気がして裕子と久美に相談した。

話の内容を聞いた裕子は腕組みして難しい顔をしたままそう呟いた。裕子としても叶の意見と自分が同じことをされたらどう対処するかの間で揺れていた。

「にはあ、男子は怖い。」

久美は塾の件で大変な目にあつたせいかな叶たち以上に脅えている。

「うーん、叶は優しいから傷つけたくないっていうのは分かるんだけど、何かされてからじゃ遅いんだよね。」

「そうだね。」

真奈美や裕子が心配しているのはそこだった。

歪んだ男子たちのする何かが叶を傷つける可能性がある以上やらせるわけにはいかない。

裕子はグッと拳を握り締めて立ち上がった。

「守るためには時として拳を振り上げ戦いに赴かなければならない

のだ！」

「だー。」

拳を本当に振り上げる裕子に続いて久美も拳を突き上げた。

「だーっ！」

さらにもう一声。

「あたしじゃないよ？」

真奈美が首を振り全員の視線が真奈美の後ろに向く。

そこには拳を天に向けた海が立っていた。

「言ってることが違うみたいだけど？」

真奈美が尋ねると海は照れたように笑ったあとスツと目を細めた。

「あはは。…叶ちゃんの手前同調してたけど私としてはやられる前にやる方がいいと思ってる。だからこの話、一枚噛ませてもらうよ？」

言っていることは物騒だが叶のことを考えての行動なので真奈美は反論しなかった。

「飯場さんが加わってくれと心強いね。」

「それは全力で協力するよ。私のため、何より叶ちゃんのために！」

裕子と海はニツと笑い合つと腕を絡ませた。

かっこいい絵面だが女の子は普通あんまりやらない。

「ふっふっふ。」

「あっはっは。」

最強タッグは作戦遂行を考えて悪どい顔で笑っていた。

次の休み時間、裕子と海は1組に向かっていた。

「こっそり顔写真は撮ったけど、どこの誰かも分からないんじゃないか攻めようがないわ。ここは参謀の知識を借りるしかないわね。」

そもそも裕子と海はそれぞれ

「ちよっと人目につかない校舎裏に呼び出してねじ伏せた後に説得

する。」

「人目がないうちに倒して校舎裏に埋める。」

と直接行動案しか出さなかったため知恵を借りに行くよう真奈美に強く勧められたのだった。

というか海の家は既に犯罪だ。

真奈美が良識ある人物でとてもよかった。

「やつほー。八重花いる？」

1組に到着すると裕子は教室に元気な声を響かせた。

迷惑そうな顔もちらほら見受けられるが全般的には苦笑止まりである。

ちなみに苦笑の方に八重花もいる。

「裕子は淑女レベルが足りないわね。」

「いいよ。私はナチュラル派だから。」

こんなやり取りはいつものこと。

だがそこに日常とは違う海の姿を見た八重花は楽しげに目を細めた。

そして水面下で作戦が進行していることを誰にも悟られることなく放課後を迎えた。

「叶ちゃん、今日の予定は？」

「今日は琴お姉ちゃんに呼ばれて太宮神社に行ってくるよ。なんだが最近私を呼ぶ時の琴お姉ちゃんが妙に必死に見えるんだけどどうしたのかな？」

「なんだろうね？」

海はその理由を知っている…というか自分が原因なのを自覚しつつしらばつくれる。

正直琴の件はどうでもよいが叶が昇降口に向かうのは作戦上好都合だった。

「もう帰るんだ？それなら私も帰ろつと。」

「別にいいけど他の子達ともちゃんと仲良くしないとダメだよ？」  
叶はすっかり者の気質の影響が仲良くなると少々お姉さんぶる傾向がある。

今も小さい子を叱るお母さんみたいに真剣な表情で人差し指を振っていた。

(叶ちゃん、可愛い…。)

思わず抱き着きたくなる可愛さだったが今後の作戦行動のために涙を飲んで自重する。

「昇降口まで一緒に行こうよ。」

「うん。でも本当に仲良くしないと…」

2人は並んで教室から出ていく。

普段は放課後も教室に残っていることが多いため男子たちが教室に近づいてきていたが帰ろうとしている2人を見つけて進路を昇降口に変更した。

「第一段階成功ね。」

「出来ればあたしとしてはこの段階で失敗してほしかったよ。」

何の躊躇もなく付いていった男子たちへの落胆の溜め息をつく真奈美の隣で裕子と八重花はやる気だった。

「あれがりくと生物学上同じ種類の生物だと考えると消し炭にしてしまいたくなるわ。」

「にやはは、やえちん過激。」

「ちなみに対象が八重花で相手が半場くんだったときは？」

「…体が火照るわ。」

無茶苦茶自分勝手なことを言う八重花は廊下を曲がって見えなくなつたターゲットを追い始めた。

「さすが八重花だわ。」

裕子が妙な感心の仕方をしながら続き真奈美と久美も後に続いた。

「あ、いけない。今日出た宿題のプリント忘れてきた。」

昇降口近くまで来たところで海が焦った様子で声をあげた。

「え？あの宿題明日までだよ？」

「結構問題数あったよね？家でやらないと厳しいかな？」

足を止めて悩む海は教室に戻ろうとするため叶は別れの挨拶をしよ  
うと手を上げようとした。

ガシッ

「あれ？」

その手が掴まれる。

「叶ちゃん、教室に戻ろう。」

「あれ？」

そして叶が言う前に海は手を引いて踵を返した。

後をつけていた男子たちは慌てて隠れる。

周囲から見ればかなり怪しい光景だった。

叶と海はそれには気付かず通りすぎていった。

「強引だよ、海ちゃん。」

「1人にしないでえ。」

じゃれ合いながら2人が階段を昇っていく。

段差を昇る度にスカートがヒラヒラと揺れた。

男の性なのか他の男子も通りすぎた叶たちを目で追っており、後を

つける男子たちは微妙に鼻息が荒かった。

「ほらほら、用事があるなら早くしないと。」

「わーん、海ちゃんのせいなのに！」

3階に上がると海は手を繋いだまま駆け出した。

叶もつんのめりながら走り出すが少しだけ海の方が速くてバランス  
を崩しかけていた。

「海ちゃん、ちょっと待って…。」

「ん、なに？」

いつぱいいつぱいの叶の願いを海は正しく聞き届けた。

慣性を無視したかのような急制動で

「待った。」

「え？」

だが車も叶も急には止まれない。  
握っていた手がスポツと抜けると支えを失った前傾姿勢の叶を支えるものは何もなく

ドテッ

「むぎゆうー！」

叶は前のめりに転倒した。

受け身も取れずヘッドスライディングを失敗したみたいな格好でお尻をつき出して倒れている。

「あの、叶ちゃん、大丈夫？すごい声が出てたけど。」

海も予想以上に盛大な大転倒に冷や汗を流しながら声をかけた。

打ち所が悪ければこれだけで死んでしまうこともある。

「うー、痛い。」

だが叶は丈夫な子だった。

鼻の頭を擦りながらのそりと起き上がる。

「あははー、ごめんね。教室で痛い痛い飛んでけしてあげるから。」

「

「そんな子供じゃないもん。」

拗ねる叶を海が宥めつつ教室に入ってドアを閉めた。

「それで、どこをぶつけたの？」

「ええと、鼻と胸と膝。」

「ふふ。」

「（ゾクッ！）」

「まずは鼻だね。ちょっと赤くなってるような気もするけど平気だね。」

「トナカイみたいにならない？」

「あはは、大丈夫。なっても可愛いよ。」

「それ、ならないって言っただけじゃないよね！？」



「はいはい。次は胸ね。それじゃあちよつと前開けて…」  
「絶対ダメ！」

「えー、女同士だしいいじゃない？」

「こんな所じゃ…恥ずかしいよ。」

「ふむ、それなら叶ちゃんちのベッドで胸は診察してあげよう。」

「しないからね!？」

「むー。それじゃあ胸は保留にして膝、と。ちよつと擦りむいてるかな？」

「ひゃ!？な、撫でないですよ。」

………

教室内で百合色のパラダイスが展開されているのを男子たちは聞き耳を立てていた。

「もう我慢ならない。少しだけなら…」

その中の1人がドアを開けようとする。

同志は止めようとしたが男は制止を振り切って取っ手に手をかけ

「そこまでよ。」

八重花たちが止めた。

八重花たちに絶対零度の視線で睨まれて男子たちは怯えながらも平静を装おうとしていた。

「僕たちはただ2人を見ていただけだよ。」

男たちが同意する。

「叶たちの後をつけ回して、ね。」

「!?!?…何のことかな？」

男たちは目をそらしてはぐらかす。

「昇降口で折り返した2人から隠れるときの怪しい動き。私たちがけじゃなくたくさん見られてるわよ？」

あれだけ目立つ場所での動きだっただけに下校途中の多くの生徒たちも目撃していた。

言い逃れのできない状況に追い込むと男たちは顔を歪ませた。

「ぐっ。僕たちじゃどうせ2人とは釣り合わない。だからせめて遠くから見つめて思うくらいいいじゃないか。2人はアイドルみたいなものなんだから。」

「そうね。でもあなたが言った通り2人はアイドルみたいなもの、<sup>アイドル</sup>偶像として思われることを仕事としている人とは違うわ。あなたたちがやっているのは普通の女の子をつけ回して辱しめるただの変態行為よ。」

「そ、それはさすがに言い過ぎだ！」

怒る男子たちだったがそれを封じるように突き出された携帯に言葉を詰まらせる。

「階段で下から覗こうとした奴が2人。」

「……！」

携帯のカメラにはその2人の画像が映っている。

「さらに転んだ叶を後ろから写真に撮っていた君の写真だ。」

「解像度を最大にして撮ったからちゃんと見れば携帯がカメラモードだったかわかるはずよ。」

決定的な証拠を突き付けられて男子たちが魂の抜けたようになる。

「女は怖いものよ。今後も続けるようなら学校にいらなくなるかもしれないから気をつけなさい。」

崩れ落ちる男たちを冷たく見離して八重花たちは去っていった。

「それじゃあ海ちゃん、急ぐから。」

「ばいばい。」

治療が終わった叶は琴との約束があるため廊下を駆けていく。

「叶たん…ガクッ。」

男子は手を伸ばすが叶には気づいてすらもらえず、手を落として真  
っ白に燃え尽きた。

## 第95話 喪失

ここは壱葉のジュエル訓練所。

サマーパーティーを超えても残ったメンバーと新規にジュエルとなった人々で活気に満ちており訓練にも身が入っていた。

その訓練所の隅で

「さあ、吐きなさい、神戸。今なら首チヨンパの所を特別に生爪剥がす位に軽くしてあげるわよ。」

「ひい！それ全然軽くないですよ！」

縛られて地面に正座させられた神戸と2本の角を見え隠れさせながら眼鏡の奥の瞳を燃えたぎらす神峰美保がいた。

大阪での作戦無視と病院での暴走に対する尋問を美保が買って出たのだ。

(どういうことかしら?)

美保は神戸を責めているうちに疑問を抱いた。

てつきりヴァルキリーへの不満を爆発させて暴走したのだと想っていたためもつと反抗的な態度を取るかと考えていた。

だが神戸の態度は怯えている分余計に従順だがそれを差し引いても以前の神戸と何も変わらなかった。

少なくとも謀反を企てるような人間ではない。

(つまらないわね。)

自分の部下が異常ではないかもしれないと考えた感想がこれである。この2人の心を第三者が比較すれば間違いなく美保の方が異常だと映るだろう。

美保はつまらなそうに椅子に腰かけると足を組んだ。

「で、二度も暴走なんて馬鹿な真似した理由はなんなのよ？」

過度の興味を失ってしまえば残るのはヴァルキリーとジュエルの上下関係。

美保は上司として神戸に問い質す。

本質がどうであれ暴走したという事実は変わらない。

そこは問い質して然るべきだ。

「……」

だがそれを聞いた瞬間、神戸が押し黙った。

「どうしたのよ？」

美保は手がかりを掴んで口の端をつり上げる。

穴さえ見つかればそこを重点的につつけばボロが出るのだから簡単なものだ。

「私……」

神戸は何か不安なのか自分を抱き締めていたがやがて美保を見上げながらゆっくりと口を開いた。

「私、その修学旅行と病院で暴走したという日の事をまるで記憶に無いんです。」

「は？」

だがつついた先にあつたのは空洞だった。

美保は不機嫌さを増して神戸を睨む。

「記憶喪失なんてベタな言い訳してるんじゃないわよ。寝過ぎてボケたんじゃないの？」

よほどの善人でない限り神戸の言い分を鵜呑みにするような人間はおらず、罪を逃れるための方便だと思うに決まっている。

美保も当然そのつもりで強く問い質すつもりだった。

「寝過ぎて……？ どういうことですか？ 今日には7月3日じゃないんですか？」

だが驚愕の事実を耳にした様子の神戸の反応は美保にとっても予想外だった。

「何言ってるのよ？ 今はもう9月よ？」

「9……月……？」

神戸は愕然と美保が当然のように告げた日時を繰り返した。

抱き締めた体が震えてカチカチと歯の根がぶつかる音がした。

「そんなはずない。だって私は昨日の作戦で失敗したりベンジをつ

て言うジューエルのみんなを止めようとして…あれ…そのあと…」

神戸はブツブツと独り言を呟きながら震えている。

神戸の鬼気迫る様相に美保も冗談や嘘だと笑い飛ばせる雰囲気ではないことを悟った。

「つまり修学旅行での暴走から今日までの2ヶ月、その間の記憶がまるでないってこと？」

「は、はい。と言いますか、私の中ではそんな長い時間が経った感覚が…ないです。」

美保は意気消沈した神戸を見ながら小さく舌打ちする。

（こんなことなら葵衣先輩か悠莉に任せれば良かったわね。）

ただ尋問して事情を吐かせればいいと思ったため引き受けたが想像以上に面倒な事になっていた。

別に頭が悪いわけではない美保だが自分のため以外の事で頭を悩ませるのは嫌いだった。

「神峰様。」

「ん、何よ？」

さすがに自分の記憶すらあやふやで情緒が不安定な神戸を責めるわけにもいかずどうしたものかと悩んでいた美保に壱葉ジューエルインストラクターの村山が声をかけた。

「お話は窺いました。葵衣様にご連絡したところ改めて病院での検査をするべきと。」

「ふう、わかつたわよ。」

美保はつまらなそうにため息をつくと神戸に背を向けて出口に向かって歩き出した。

「美保、さん…。」

神戸が不安げに手を伸ばすが美保は立ち止まることも振り向くこともない。

「くっ…っ…。」

「今はゆっくりと休んでください。」

村山がぎこちなく慰めるが神戸は俯いたまま泣き続けた。

地位も名誉も、そしてすぎるべきヴァルキリーすらも失って。

見守る変態男子から解放された叶は急ぎ太宮神社へと向かっていた。騒ぎに巻き込まれてしまったせいで琴との約束の時間を大幅に過ぎてしまっていた。

（琴お姉ちゃん、拗ねてるかな？）

叶も最近琴の生態をある程度分かってきて子供っぽいところがあることに気が付いた。

ただ、拗ねるだけでもそれなりに厄介なのだがそれを宥めるために琴の薦める服を着て見せなければならぬのはいろいろと恥ずかしいので叶はそれを避けるべく走っているのだ。

「はあ、はあ。もう、少し。」

太宮神社が見えるところまで走ってきた叶は鳥居の脇に黒塗りの外車が停まっているのに気が付いた。

（何処かで見ることがあるような？）

高級車を目にする機会はそう多くはないのだが走っていて脳に酸素が足りていないのかうまく思い出せない。

考えているうちに車の脇を通過した叶はそのまま鳥居の前で呼吸を整えると端を歩いて神社の境内に入った。

果たして琴は社務所ではなく本殿の前にいた。

ただし1人ではない。

その人物を見て叶はようやく車をどこで見たのかを思い出した。

「撫子さん。」

境内には難しい顔をした琴とスーツ姿の花鳳撫子の姿があった。

叶の声に2人が気付いて振り返った。

「あら、叶。お久しぶりでいいのかしら？」

撫子は笑顔で小首を傾げる。

サマーパーティー以来なので久しぶりだが戦いの後の顔合わせなの

で叶は警戒を強めていた。

「お、お久しぶりです。」

グツと拳を握って必死に睨んでいる姿は仔猫が必死に威嚇しようとしているように見えて撫子は内心破顔する。

隣の琴に至っては若干鼻息が荒い。

撫子はコホンと咳払いをして叶に微笑みかけた。

「叶が望むならこの場でサマーパーティーの決着をつけるのも吝かでは無いけれど、どうします?」

その言葉は叶の意思を尊重する、つまりは撫子が自発的に戦う意思はないという意味に聞こえた。

「私は戦いたくはないです。撫子さんが戦うつもりがないのなら。」  
もちろん撫子の話をすべて信じきって安心するほど叶も能天気ではない。むしろ状況ではなくなってきたため、いつでもオリビンを顕現させられるようにしつつ警戒を緩めた。

もちろん撫子は気付いているが苦笑を浮かべるだけだった。

「折角ですから叶にも聞いてもらった方がいいでしょう。」

「叶…、撫子さん…ですか。」

琴はむしる叶と撫子の呼称を訝ってジト目になっていた。

撫子も言われてから葵衣に注意されていたことを思い出した。

「陸君のお見舞いに行ったときにお会いしまして。その時に名前でも呼ばせてもらうようになりました。」

叶だけは別に気にした様子もなくありのままの事実を琴に説明した。  
「困ったものです。叶さんは陸さんとは別の意味で天然のジゴロさんですね。」

「そうですね。」

「え?え?何の事ですか?」

先輩2人が共通認識を持ってしみじみと頷くのを叶は慌てて尋ねるが微笑まれるばかりだった。

「お話というのは太宮院さんをわたくしたちヴァルキリーのアドバイザーとしてお招きしたいというものです。」



撫子の発言に叶はきよとんとし、琴は渋面を浮かべた。

「搦め手、搦め手と来ておいてここで正攻法とは、本当に遅いですぬ。」

嫌味たっぷり棘たっぷりの口撃も撫子は笑みで受け流す。

「もちろん無償とは言いません。まずはこの寂れた太宮神社を日本有数の著名な神社にしましょう。」

「大きなお世話です。」

実質的な家主を目の前にして寂れたはひどい。

確かに事実ではあるが。

「そもそも太宮神社の噂を不用意に広めれば当然”太宮様”の話も広まりヴァルキリーに割く時間がなくなります。」

ヴァルキリーの仲間にするために太宮神社を盛り上げたのにそのせいで琴が忙しくなって暇がなくなつては本末転倒である。

だが撫子は首を横に振った。

「ですので”太宮様”の依頼の管理をわたくしたちが行います。」

「…。その儲けの一部を得ようかと？」

「否定はしません。プロデュースするにも資金は必要ですから。」

話がどんどん臭くなつてきたのを感じて琴は顔をしかめながら叶に目を向ける。

商業交渉のためよく分からないらしく呆然としていた。

撫子としては琴に破格の待遇を与えて迎えることを示すことで叶を納得させようとしている。

なんとか話の流れを引き戻さなければと琴は思案し始めた。

「ですが太宮神社は現状でも十分に維持できています。無為に規模を拡大させることはわたくしの望むところではありません。」

琴は真正面から撫子の示す利益を否定した。

これで太宮神社発展を理由にするのは難しくなるはずだと挑戦的な目を撫子に向けた。

だが、それを見た撫子の目がニヤリと細められ琴はゾツとした。

「そうですね。ならばもう一つ報酬をお付けしましょう。」

何をつけられても首を縦に振るつもりのない琴だが背筋を走る悪寒は刻一刻と強まっていく。

そして、悪魔の口が開いた。

「太宮院さんが協力を約束していただけるのならば、我々ヴァルキリーは吉葉高校を中立区と定め一切の戦闘行為を禁止致しましょう。」

「!?!」

琴はようやく叶をこの場に置いた理由を理解した。

現在の”Innocent Vision”にとって学校が危険地帯なのは考えるまでもないことだ。

だが”人”としては学生である以上、卒業までの期間を通わなければならぬ。

撫子は叶たちの学内での安全を対価とした脅迫を琴に迫ったのである。

自分の事ならば自力で何とかしようとする琴も懇意にしている叶を盾に取られてしまうと言葉が出ない。

今叶の首には撫子の見えざるジュエルが突きつけられた状態にあった。

（卑怯な取引ですね。学内と限定しているということは戦いを止めるつもりはないということ。さらに時が経てばジュエルの力は増し”Innocent Vision”の脅威となる。ですが学内で常にヴァルキリーの攻撃を警戒しては叶さんはストレスで参ってしまうかもしれない。）  
考えれば考えるほど叶のために条件を飲むのが正しいように思えてくる。

琴が揺れているのを見た撫子は叶に声をかけた。

「叶はどうかしら？決して悪い条件ではないと思うのだけれど？」

叶には良いところしか教えていない。

ならばその多大な利益を見てすぐに肯定するだろうと撫子は考えていた。

「…」

だが叶は悩む素振りを見せていた。

撫子の示した条件の裏に隠された穴に気が付いたのかと撫子と琴は違う意味で驚く。

「私は琴お姉ちゃんがいいと思う方でいいと思います。」

叶らしい相手を思いやる言葉。

そんな叶だからこそ琴は叶を守るための苦渋の選択をしなければならぬ。

「では…」

撫子が琴が折れたのを確認して手を差し伸べる。

琴は俯いたままゆっくりと手を伸ばし

「でも、琴お姉ちゃんはそれで幸せになれますか？」

叶の言葉でピタリと手を止めた。

琴も撫子も驚いた様子で叶を見る。

叶は笑っていた。

「もしも琴お姉ちゃんがその話を受けて幸せになれると思うなら私たちの事は気にしないでいいですよ。攻撃されないに越したことは無いですけど、たとえ学内で襲われることになったとしても”Innocent Vision”の皆は強いですから。」

叶は全然出ない力瘤を見せる。

「でも、もしもそれが私たちを守るために仕方なく受けて琴お姉ちゃんが不幸になるなら…」

ザーツ

風も無かった境内の木々が突然揺れて葉擦れの音を響かせた。

それは徐々に大きくなり世界を音で埋め尽くしていく。

（これは、セイントの力？）

（神域に在ることで叶さんの力が膨れ上がったのですか？）

驚きの表情を浮かべる撫子に向けて叶は真剣な表情で告げた。

「もしも泣くようなことがあれば…」 Innocent Vision “は戦ってでも琴お姉ちゃんを取り戻しに行きます。」

それは撫子が提示した脅迫の材料を叶自身が否定したことと同義だった。

予想外の展開に動けない撫子の視界の端で琴が離れ叶の側に行くのが見えた。

「…あくまで未来視をヴァルキリーに渡す気はないと？」

撫子が戦意を瞳に宿して問う。

「違います。琴お姉ちゃんだからですよ。」

「それはなぜ？」

「友達、ですから。」

友達。

それはとても曖昧な言葉。

時にそれは非常に脆い仮初めの繋がりとなるが、時にそれは家族をも超える固い絆ともなる。

決して社会的ではない叶が築くのはいつも家族のような暖かな絆だった。

琴はその輪の中に自分が存在することを神に感謝する。

「申し訳ありませんがその御誘いはなかったことにお願ひします。」

「後悔、しても構いませんね？」

いよいよ撫子は左目を朱色に染めていくが琴はちらりと叶を見て穏やかな笑みを浮かべた。

「後悔など出来ようはずもありませんよ。叶さんがわたくしを友と呼んでくださる限り、それに勝る誉などありはしませんから。」

## 第96話 パシリ

翌朝、ヴァルキリーの面々は美保から神戸の状態、葵衣から撫子の再三に渡る勧誘にも琴が動かなかったことを聞かされた。

「全く訳が分からないわよ。葵衣先輩、ジュエルは本当に危なくな  
いんですか？」

美保が不満げに葵衣に尋ねる。

今使っているスマラグド・ベリロスも同じように記憶が飛ぶような暴走をされては敵わないからだ。

だがそもそも暴走という事例が発現したのも神戸が最初なのだから葵衣にだって安全かどうかなど判るうはずがない。

「ジュエルがまだまだ不明瞭な魔法のアイテムである以上安全は保証  
できかねます。しかし1万近いジュエルがいる中で暴走したのがた  
だ1人だと考えれば確率は非常に低いと考えられます。」

「それに戦ったボクから言わせてもらうとあれは暴走っていうより  
もほとんどデーモンとかオーみたいだったよ。ジュエルを使ってあ  
あなるなんて思えないよ。」

唯一交戦した経験のある緑里の言葉に皆考え込むように押し黙った。  
特にデーモンやオーのようだったという言葉が波乱を呼んでいた。

ある者はジュエルの中にデーモンを呼び起こす因子が存在するの  
はないかと不安を覚えた。

ジュエルはソルシエルを解析して生み出した魔剣であるためその  
因子を引き継いでいる可能性もある。

（あたしはあんな”化け物”になるなんてごめんよ！）

かつて人から変じて化け物に成り果てたジェムを見てきた美保は自  
分が同じ末路を辿ることを必死に拒絶した。

またある者はジュエルではなく外部からの何らかの介入によって暴  
走と呼ぶ現象が発生したのだと推察した。

（”Innocent Vision”にそのような力の使い方が

出来る方はいませんしオーのようだったということはやはり…)

悠莉は表面上は微笑みを浮かべて優雅にお茶を口にしつつ頭の中ではオーがどのように神戸を暴走させたのか検討していた。

そしてある者は…

(太宮院様はヴァルキリーへの協力を断られた。未来視は有用ですが本格的に”Innocent Vision”に助力をされるとヴァルキリーも対策を講じなければなりません。最終的には太宮院様の排除も視野に入れてお嬢様と話し合わなければ。)

(ジュエルが使えないグラマリーを暴走した神戸が使ってた。うまく利用してグラマリーだけ使えるようにならないかな?)

(今日も部活に顔を出そうかな?)

結構自分勝手に別の事を考えていた。

特に良子は一応ヴァルキリーのリーダーのポジションにあるというのにこれである。

撫子やヘレナのような叱ってくれる人がいないため緊張感が足りていないのだ。

「もう今日は解散でいいんじゃない?」

しかも帰りたいことを言い出す始末。

良子フリーダムである。

「お待ちください。ヴァルキリーの皆様にはジュエルの再編成に伴い今一度担当地区のジュエルクラブに赴いていただきたいのです。」  
「良子の意見をやんわりと断固拒否しつつ葵衣は別の事案を提示する。ジュエルの暴走という不確定要素への不安に頭を悩ませていたヴァルキリーの面々は現実的な問題に目を向けることで再び真面目になった。」

策士葵衣ここにあり。

「あ、そう言えば綿貫紗香。あの子サマーパーティーの時あたしのジュエル扱いだっただけですけど今も続いているの?」

「はい。しかしその場合、彼女の所属が九州になっているためこの度の再編成でこちらに戻そうと考えています。」

別に所属外のジュエルが訓練に参加しても構わないのだが、ただでさえ紗香は突出した戦闘センスを持つがゆえにジュエル内で孤立していた。

所属の違いで余計にやっかまれるのは目をかけている葵衣としても好ましくないゆえの措置だった。

「んー、それちよつとタンマ。」

良子がなにやら唸りながら手をつき出して待ったをかけた。

全員が何事かと興味を示して良子に目を向けると当人はパンと手を叩いて笑顔で頭を上げた。

「決めた。紗香はあたしが直接鍛える。」

良子の突然の宣言に誰もがその過程を理解できず賛同も拒否も出来なかった。

良子は1人名案とばかりに笑っている。

「等々力先輩。私たちにも分かりやすく原稿用紙2枚に書いて提出してください。」

「読書感想文？あれ苦手なんだよね。」

悠莉の真面目とも冗談とも取れる言葉に良子は目をぱちくりとさせるがすぐに書くことを放棄する。

「サマーパーティーの最後にジュエルなりに頑張ってたじゃん。あんな化け物たちに挑んでいく勇気をあたしは気に入った。だからあたしが鍛えてあげたくなった。」

あんなというのは時坂飛鳥と飯場海のことだ。

デュアルジュエルを持つヴァルキリーですら恐怖を覚えた相手に向かっていける心は訓練だけではなかなか身に付かない資質と言える。良子がどうかたと視線を葵衣に向けた。

葵衣としてはせっかくの芽を摘んでしまいかねない懸念はあったがジュエルにいたからと言って開花する訳でもないので否定の意見を口に出すのは止めた。

「ご本人が了承されるならば構いません。」

「それなら今度見掛けたときに……」

「その必要はありません、良子お姉様！」  
バンと勢いよくヴァルハラ扉が開きドアのところに件の紗香が立っていた。

ドアの開け方は淑女として問題ありだが招き入れられていないため入り口で立ち止まっているのは中途半端に礼儀正しかった。

「ああ、紗香、ちょうどいいところに来たね。」

「それはもうお姉様方をお慕いしていますから。」

「いや、絶対部屋の前に張り付いて聞き耳立てただけよね？」

紗香といがみ合っている美保が悪態をつくが喜色満面の紗香はもちろん誰一人聞いちゃいない。

ヴァルキリーの面々にとつて部屋の前に紗香がいることなど百も承知だったのだから。

何しろ部屋に入る前から張り付いていて挨拶してきていた。

そして紗香も気付かれていることに気付いていながら小芝居でじゃれているのである。

「でも良子お姉様？ジュエルの所属的には紗香はどうなるんですか？」

ヴァルキリーに直接鍛えてもらえるなどと知れば紗香はこれまでの比ではない嫉妬や怒り、妬みといった負の感情を他のジュエルたちから向けられることになる。

それで怖じ気づく紗香ではないがただの一ジュエルには越権行為である感が否めないという考えもあった。

「うーん、どうしようか？なんなら親衛隊にでもしちゃうかな？」

後半はヴァルキリーのメンバーに向けて問う。

親衛隊、正式名称ワルクューレはヴァルキリーの直属部隊であり、ジュエルにしてジュエルを統べる存在という位置付けにある役職だ。一応当初の予定ではグラマリーを発現したジュエルと定めている。

良子の視線はそこに紗香を置いてもいいかと問うものだった。

良子の視線を受けた面々の反応は鈍かった。

考えているというかどうかでもよいと思っている節が緑里辺りには見



られ、歩くヴァルキリーの規約たる葵衣ですら明確な意志を示さない。

美保だけは手で×を作っていたが華麗に無視する。

美保の目が嫌がらせの色をしていたからだ。

「駄目です。」

だが真つ先にその声を上げたのはヴァルキリーではなく紗香本人だった。

全員が目を丸くする中で紗香は

「親衛隊は本当にヴァルキリーの力になれるジュエルがなるべきです。わたしもいつかは親衛隊になりたいですけど今はまだその力はありません。だから、親衛隊は駄目です。」

すっかりとした意志を示す紗香に美保を除く全員が見守るような優しい目をした。

美保もつまらなそうに目を逸らすだけで反論はしない。

「それじゃあ紗香は今日からあたしのパシリだ！」

話がまとまったところで良子が声だかに宣言するとまた微妙な空気になった。

「あはは、それは面白いですね。」

美保は手を叩いて笑うが紗香の決意を聞いた後ではさすがに笑えない。

「良子、もう少し何か…」

「わあ、パシリってドラマの中だけじゃなくて本当にいるんですね？」

だが緑里の提案を打ち消すように声をあげた紗香はむしろパシリに興味津々の様子だった。

見た目はどちらかと言えば文系少女だが体育会系のノリを理解できるらしい。

あるいはお姉様への愛か。

「ご本人が納得されているのであれば問題ありません。」  
対応に困っていた悠莉と緑里も葵衣が認めたことで疑問を胸に押し

込めた。

「パシリ、小間使いですか。私も誰かお願いしてみましようか？」

「いいのかな？」

「いいんだよ。紗香はパシリ決定！」

「はい！」

この瞬間、紗香はジュエルからパシリになった。

「紗香さんのこれは昇進ですか？」

「…。」

悠莉の疑問は葵衣が答えられないくらい微妙だった。

「早速今から特訓だ！」

「はい！」

そしてある意味主従関係を築いた2人はテンション高いままにヴァルハラから飛び出していつてしまった。

遠征の話し合いは完全に放棄というか忘れているようだった。

むしろ気付いていて逃げたんじゃないかという素早さで去っていく2人を見送った葵衣は

「……ふう。」

人前で珍しくため息をついた。

「あら、葵衣様が変わらずため息をってしまうくらい等々力先輩がアレだということですか。」

悠莉がふふふと微笑みながら毒を吐く。

「いや、悠莉。さすがにアレは…酷い…よ？」

緑里は一応弁護しようとしたが思い起こされる過去の所業と言動に言葉は尻すばみになり終いには疑問系になった。

「良子先輩はアレですけど楽しいからいいじゃない。」

良子に近い感性を持つ美保はおかしそうに笑っている。

相手が紗香でなければ一緒に飛び出していったかもしれない。

「…会議を始めましょう。」

（今までの事をなかつたことにした！？）

葵衣の予想外の反応に驚く面々を尻目に葵衣は新しくお茶を用意す

る。

今度はさつきより1人分少ない分量で。

撫子は陸のお見舞いに訪れていた。

目が覚めれば連絡が入るから眠ったままだと分かっているものの部屋に入る前に身だしなみを整えるのは淑女の礼儀。

トントン

「失礼します。」

ノックも礼儀。

返事がないと分かっているにもかかわらず扉を叩いて中に入った撫子は

「今入ってるよ。」

返事があったことに飛び上がらばかりに驚いた。

その声が陸のものならば喜ぶが明らかに女の声だったので撫子は警戒しながら進んでいく。

どこか聞き覚えのある声に心音が高まっていくなかを感じながら足を踏み出した先、そこには

「やつほー、お久しぶりだね、撫子ちゃん。」

「江戸川：蘭：さん？」

お見舞い用の椅子に腰かけて座る蘭の姿があった。買ってきた花が地面に落ちてカサリと音を立てる。

撫子の心音はどんどん激しさを増すのに背筋は氷を入れられたように冷えていく。

（なぜ江戸川さんがここに？）

普通に理解すれば陸のお見舞いだらう。

だが蘭はまるでこの部屋の主として撫子を待っていたかのように振る舞った。

事実隣に寝ている陸を見ようとしてもしない。

それが違和感として撫子に疑念を抱かせる。

（オーの使う幻覚？）

幻覚使いが蘭だけだともオーがサマーパーティーで消滅したともそこまで楽観視していない撫子はオーの活動再開の標的として幻覚による精神攻撃を仕掛けてきたのかとも考えた。

警戒して壁に背を寄せて死角を減らす。

蘭はそれを見て苦笑を浮かべた。

「せっかくの再会なのに撫子ちゃん冷たいなあ。」

「江戸川さんには幾度となく騙されてきましたので、嫌でも警戒してしまいますよ。」

それこそ今にもアヴェンチュリン・クォーザイトを抜きかねない緊迫感を放つ撫子を前にしても蘭はただ笑みを浮かべるだけ椅子に座ったまま立ち上がることもない。

その笑みが逆に撫子を不安へと追い込んでいく。

（今は参加していないとはいえ江戸川さんは”Innocent Vision”のソーサリス。ここで倒してしまうことがヴァルキリーの未来に繋がるはず。）

決意をすれば後は力を求めるだけ。

左目に朱色の力が宿り左手を基点にあり得ないはずの武器が世界に存在を現し始める。

撫子は左手を握り

「りつくんの御前だよ。控えおろー。」

冗談みたいに軽い声の命令に体を支配された。

「あ…」

否、立っている感覚すら疑わなければならぬほど撫子の世界は歪んでしまっていたのだ。

立っている地面が平らなのかも手にジュエルを握っているのかも不明瞭な歪な空間で撫子は身を屈めて少しでも揺らぎを減らそうとす

る。

「これは…一体…」

病室にいたはずの撫子はいつの間にか上も下も左も右も前も後ろも視界全てが鏡に覆われた空間にいた。

鏡に映る像はどれも歪んでいて1つとして正しい景色を見せない。

その世界の中心で蘭だけは惑わされず逆に異質に映った。

撫子が右目を押さえながら睨む。

蘭はそんな視線など意に介した様子もなくにっこりと笑いながら人差し指を立てた。

「撫子ちゃんに耳寄りな情報だよ。」

## 第97話 裏切り者の暗躍

撫子は内側に鏡が張られたミラーボールの中のような無限の空間の中で蹲りながら顔をあげた。

視線の先には行方不明だったはずの江戸川蘭が椅子に座る格好で浮かんでいる。

（いえ、恐らくはあそこに椅子があるのでしょね？）

この空間が幻覚であり本当は病室にいることは理解している。

頭では理解しているはずなのに同時にこの空間こそが現実だと認識させられており撫子は混乱していた。

まるで2つの動作を同時にやるうとして脳が混乱するように。

「撫子ちゃん、これはランの作った幻覚だよ。」

「わかっていきます。そしてそれを聞いたとしても認識を正すことが出来ないことも。」

撫子が顔をわずかにしかめながら答えると蘭の笑みが強まった。

「ゲシュタルト・グローブ。オブシディアンの幻覚を乱反射させて多重にかけてるんだよ。それでもまだここが病室だと、幻覚の中にいるんだとわかってるなんてさすがはヴァルキリーのリーダーだよ。」

パチパチと褒めるように手を叩く蘭だが撫子にとってはそれがとても耳障りに聞こえた。

撫子は顔をしかめて目を押さえる。

「お世辞は結構です。それよりもわたくしに耳寄りな情報とはなんですか？」

刻一刻と正しいはずの認識が書き換えられていく恐怖を押し留めながら強気に尋ねる。

早くしなければ気が触れてしまいそうだった。

「素直に褒めてるんだけどね。」

蘭はそう口にしながらピョンと飛び上がるように席を立った。

撫子から見れば何もないはずの場所を浮かんでいるように見える。  
蘭は撫子の目の前まで来ると見上げる撫子に向けて少女のような笑顔を浮かべた。

「琴ちゃんを”Innocent Vision”に渡さないとしておきの作戦を教えてあげる。」

「!」

撫子は認識に抗うことも一瞬忘れて驚愕した。

つい先日琴にヴァルキリーへの協力を断られたばかりである。

それを助けたのが”Innocent Vision”の叶なので琴が彼女らに協力するのは時間の問題と言えた。

「Innocent Vision”がりつくんほどじゃないけど琴ちゃんの未来視を使うようになったら、撫子ちゃんたちも困るよね？」

「そう、ですね。」

反論の余地はない。

未来を知ると知らないのでは格段に戦略の有効度が変わってくる。八重花辺りが未来を知れば戦力差を大きくひっくり返すそんな作戦を展開するかもしれない。

その危険性は計り知れないと言えた。

「だったら、琴ちゃんが叶ちゃんのものになっちゃう前に奪っちゃえばいいんだよ。」

「奪、う…」

少女のような笑顔のまま蘭はクスリと大人っぽい笑い声を漏らす。

細められた瞳の奥の冷たい光に惚けた撫子は気付かない。

「撫子ちゃんには、ヴァルキリーには琴ちゃんなんかには負けないジュエルって力があるんだから。取られる前に取っちゃえ。」

撫子は顔を俯かせた。

蘭はその姿をじっと見つめる。

「…ククッ。」

暫くすると俯いた撫子の口から押し殺した声が漏れた。

それは笑い。

顔をあげた撫子の左目は強く朱色に輝いていた。

「そうです。ヴァルキリーは力ある組織。従わないなら屈服させるまで。それでもなお従わないなら排除すれば良いのです。」

陸や叶との出会いで忘れかけていたヴァルキリーの原初の理念。

力による支配を思い出した撫子は声を殺すこともなく笑う。

「ふふふ、ありがとうございます、江戸川さん。あなたのお陰ですつきりした気持ちになりました。」

気が付けば2人は陸の病室に戻っていた。

蘭はベッドに腰かけて撫子を見ている。

撫子はその視線をわずかに横へと向けて陸を見た。

ここに来たときに考えていたような愚痴を漏らそうという意識はもう存在しておらず、撫子の頭の中には陸をどうにかして手に入れられないかという算段が展開していた。

「撫子ちゃん、聞いてる？」

蘭に呼ばれて撫子は初めて気付いたが動揺は顔には現れない。

「なんででしょうか？」

蘭は左手のオブシディアンの鏡面を撫子に向けた。

漆黒の空間には撫子の姿だけがくつきりと浮かび上がっていた。

それはまるでその世界に閉じ込められていると錯覚してしまうように。

ゴクリと唾を飲み込むのすら困難で呼吸に息苦しさを覚えた撫子はその鏡の上にある蘭の顔を見た。

そこには同じ顔であり全く異なる氷の微笑があった。

「りっくんに変なことをしたら、怒っちゃっうよ？」

「ッ！！」

撫子は本気で心臓が止まった気がした。

取り戻した黒い衝動が萎縮して小さくなるのを感じた。

背筋に熱を感じないほどの悪寒を覚えながらどうにか悲鳴を上げずに済んだ。



「当然、ですよ。」

「そっか、それならいいんだけどね。」

蘭はにっこりと笑顔で頷いた。

「わたくしは作戦を練らなければなりませんから失礼します。」

撫子は用件が終わると直ぐ様帰ろうとした。

理由は本当のことだがそれ以上に蘭の前にいられなかった。

「うん、それじゃあ頑張つてね。」

蘭が素直に見送ったのを幸いに撫子は早々に病室を後にした。

ボタン

背後でドアが閉まる音を聞いた直後撫子は膝を折って崩れ落ちた。

心臓に手を当てればいまだにバクバクと激しく脈打っている。

(あの感覚は、間違いありません。幻惑のソーサリス、江戸川蘭。

彼女がなぜ今になって？そしてなぜ太宮院さん？)

悪寒で冷えたことで冷静になった頭で考えるが再び部屋に入る勇気

はなく疑問は胸にしまい込んだ。

「力ずくとは少々エレガントさに欠けますが、ヴァルキリーにはや

はり未来視の力が必要なのです。」

暗くなつた廊下を朱色に照らしながら撫子は帰っていった。

「これは？」

琴は撫子が江戸川蘭という名の悪魔から信託を受けた日の夜、”太

宮様”の神託を受けた。

それはデーモンの介入によって琴自身の未来が開けて以来初めて琴

自身に関する占いだつた。

”太宮様”の認めた未来の道を読む琴の表情は難解なパズルを前に

したように難しい。

「これは”太宮様”のお茶目なのか危機なのか判断しかねますね。」

何度読み返しても真意は掴めない。

『さらわれる おこるはだれぞわからず』

普通に考えれば琴もしくは誰かが拐われて何が起こるかは誰にも分からないという意味で合っているはず。

だが”太宮様”の占いは未来の分岐を見るとはいえ何が起こるか分からないというのほは些か妙である。

どんな道筋であれ起こる事象の一部は見えているはずなのだから。

「しかしこれを『皿割れる、怒るのは誰か分からない』と読んでしまつては有り難みがありませんね。」

琴はため息を溢して神託から目を上げた。

ここまで抽象的というか内容の分からないのも初めての事だった。

しかし琴にそれほど驚きはない。

「原因は、やはりあれでしょう。」  
もう一度ため息を溢す。

悩んでも詮無いことなので予言の紙を手に琴は最奥の間を後にした。暗い廊下も幼少の頃から歩いている琴には恐れるべきものではない。そもそも幽霊の類いですら浄化できる巫女が夜の闇を怖がる道理はない。

「真に恐ろしきは怪にあらず、人なり。」

見えないお化けより腹の底で何を考えているか分からない人間の方がよほど恐ろしい。

そんなことを考えながら居間に向かう。

ふと居間からテレビの音が聞こえてきた。

「消し忘れてしょうか？」

消したはずなのにと首を捻りながら居間の戸を開けた琴は

「あ、琴ちゃん。今日日本で展示してる外国の凄く有名な皿、あれが割れたら大変なことになりそうだよな？」

そこで怪よりも恐ろしい人を見た。

蘭は太宮院家の居間でお茶菓子を食べながらテレビを見ていた。

「…何をなさっているのです？」

琴は疑問とそれ以上の怒りを声に滲ませるが、由良を正面からおち

よくれる毛の生えた心臓を持つ蘭には通用しない。

バリツと煎餅をかじって言葉を探すように天井を仰ぎ見た。

「琴ちゃんに会いに来たら”太宮様”のところに行っちゃってたから待たせてもらってたんだよ。」

ニコニコ顔で蘭は胸を張る。

会いに来たことを拒否するつもりはないが勝手に上がり込んで勝手に煎餅を食べるのは普通とは言い難い。

まあ、自由気ままな蘭らしいといえばらしいのだが。

「ふう、それではこんな夜分にどのようなご用ですか？」

琴は諦めたように座ってお茶の用意を始めた。

「琴ちゃん、ランのもお願いね。」

「わかってます。」

お茶葉や急須、ポットなどはすべて備えてあるのでこの場でお茶を淹れる。

薄緑色のお茶を差し出すと蘭は煎餅をバリバリ食べてズズズとお茶で流し込んだ。

食べ方は子供っぽい

「ふい〜。」

和んでいる姿はどこかおばあちゃんっぽい。

だが琴は蘭を愛でたりしない。

警戒を解いたりもせずむしろ警戒を強めている。

「最近ランを見るとみんな睨んできて怖いよ。」

「ご自身の胸に手を当てて考えてはどうですか？」

「ん〜？」

蘭は自分の胸に手を当てて、揉んでみる。

だが残念なことに慎ましい手触りしかない。

「うっ、琴ちゃんがランをいじめる。」

「勝手に曲解して落ち込まないで下さい。」

「むー、てい〜！」

蘭は頬を膨らませると琴に、正確に言えば琴の胸に飛びかかった。

だが接触するよりも早く琴が身を翻して避ける。

「わわっ！」

ビタンと畳に盛大に転倒する蘭。

胸部のクツションがないのでほとんど体の前面を強か打ち付けた形だ。

そのまま動かなくなる。

「因果応報、安らかに眠ってください。」

「ランは死んでない…」

スチャ

「よ…」

起き上がるうとした蘭は背中に突きつけられたフェルメールの矢に気付いて動きを止めた。

すでに引き絞られた矢は琴が手を放せば打ち出されて確実に蘭を貫く。

「そろそろ本題に入ってはいかがです？それともこの体勢のまま茶番を続けますか？」

ギリと弓を引く音が響く。

琴は右目を青く輝かせながら無表情とすら言える様子で蘭を見下ろしていた。

「せっかちなね、琴ちゃん。」

蘭は畳に伸びた格好のまま起き上がるうとはしない。

だというのに琴は自分の背中に刃を突きつけられたような気分になった。

「何を焦ってるの？」

「焦ってなどいません。」

言葉とは裏腹に琴の手はわずかに震えて矢をつがえる指が揺れる。

もちろん琴は本気で射つつもりはないがこのままでは誤射で蘭を貫いてしまいかねない。

「さあ。」

知らず声に緊張感が含まれていく。

だが琴とは対称的に蘭は力を抜いて畳に寝そべる。

「畳っていい匂いだね。落ち着くよ。」

「この状況で落ち着いていられますか？」

「相手が射たないって分かっているなら怖くないでしょ？」

見透かされていた。

それでも琴は意地を通して蘭に矢を向け続ける。

「射たないとは言い切れません。あなたの目的がたくしを害するものならば自衛のためにこの矢を放つことも厭いません。」

そう、蘭が敵ならば戦う覚悟もある。

だが琴にはかつて”Innocent Vision”のメンバーだった蘭が今の”Innocent Vision”にとっても仲間なのか判断できなかった。

琴はじつと蘭の答えを待つ。

テレビの音がひどく耳障りな沈黙の果て、蘭がクスリと笑った。

「警告したはずだよ。」Innocent Vision”に関わるならどうなるかって。それでも琴ちゃんはやちゃんと仲良くなつて”Innocent Vision”を友達だと思った。それはもう仲間と同じだよな？」

琴の背筋が凍る。

追い詰めているはずの相手に精神的に追い詰められていく。

「だから、お仕置きが必要だね。」

蘭が確かに笑ったと思つた瞬間、廊下を走る足音が聞こえてきた。

琴は蘭に弓を引いたまま困惑する。

「なぜ聖域の力の中でジュエルが…」

「なんでだろうね？もしかしたら神様も間違えちゃったのかな？」

その呟きの返事は足元から聞こえた。

琴は蘭とヴァルキリーを交互に見やりクツと奥歯を噛む。

（まさか江戸川さんがヴァルキリーに協力するとは予想外でした。

以前のように警告を与えに来た振りをして、その実ヴァルキリーを誘い込むための細工と時間稼ぎをされるとは。）

それはまっすぐに琴たちのいる居間に迫りその戸が勢いよく開かれた。

そこにはデュアルジュエルで完全武装した6人のヴァルキリーが立っていた。

「太宮院琴さん。その身柄を頂戴させていただきます。」  
矢を向けた先で倒れていた蘭は霞のように消えてしまった。

ヴァルキリーは蘭がいたことなど気付いた様子もなく朱色の瞳を琴に向けていた。

琴は抗わずに連行される。

連れていかれながら

（いったい何を考えているのです、江戸川さん？）

問うても蘭の姿はすでにない。

（叶さん…）

連れ出された琴が思うのは叶が無理をしないかということだった。

## 第98話 消えた巫女

休日を挟んだ月曜日、叶たちは普通に学生生活を送っていた。

「あー、今日からまた学校ね。」

「あれ？裕子ちゃん、前はまた月曜になるとみんなとお話できなくて喜んでなかったっけ？」

憂鬱そうな裕子に叶が疑問を投げ掛ける。

「そ、そんなこと言ったっけ？」

「うん。」

すると裕子は挙動不審になった。

叶はその理由に至っていないようだが真奈美や久美、海はしつかりと答えを理解していた。

「どついう心境の変化があったんだらうね？」

「にははは、なんだらうね？」

「ぜひ具体的に聞きたいな。」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべる友人3人の追撃に裕子の顔が赤くなっていく。

「言えるわけな…な、何でもないわよ！ちょっと大人になったってだけよ。」

むきになって反論する裕子だが平時でさえ口論で勝てるかわからない海がいて裕子をよく知る親友2人を相手に逃れられるわけがない。

「へえ、大人になったんだ？」

「っ！？」

海のツツコミに裕子の赤レベルアップ。

「裕子、大人になるってどついうことか説明してくれないかな？」

「っ！！！」

羞恥効果でさらにアップ。

「にははは、説明要求。」

「っ！！！」

特に意味はないが久美の追撃で赤マックスに到達。

頭と顔から煙とか火を吹きそうになっている。

「みんな、裕子ちゃんをいじめちゃダメだよ。」

「全然苛めてないよ。」

真奈美が素敵な笑顔で即答するがさすがに裕子の状況を見て信じるほど叶もお馬鹿ではない。

「芳賀君、裕子ちゃんを助けてあげないと。」

「お、俺か!？」

ここで叶の空気読めない天然スキル発動、話題の渦中の人その2の強制乱入に海たちの瞳がキラリと光った。

芳賀は一応抵抗しようとしたが

「最近幸せそうな芳賀氏の近況を聞かせてもらおうか?」

ととても黒いオーラを背中に纏った笑顔を浮かべた男子勢に捕獲されてしまった。

陸の件で傷心していた芳賀や裕子にはあまりちよっかいは出されな  
いでいたが最近は何容範囲を超えてきていたらしい。

芳賀と裕子は教卓の前に祭り上げられる。

「雅人くん。」

「裕子。」

身を寄せ合って熱のこもった様子で名前を呼び合う2人にクラスメイトはパパラッチであり芸能レポーターとなる。

「馴れ初めは?」

「どこに惹かれましたか?」

「最近したデートは?」

やいのやいのと取り囲んで質問攻めをするクラスメイトに芳賀と裕子は本気で泣きそうになりながらホームルームを迎えるまで弄られ続けた。

そしてその会話の中でようやく裕子の言葉の意味を理解した叶は

「裕子ちゃん、幸せそうでよかった。」

どこまでも善人だった。



八重花は自分の座席で携帯を操作していた。

多機能端末携帯を先日購入したため機能理解も兼ねて暇潰しに色々弄っているのである。

（エクセスほどではないけどどこでも検索を使えるのは有り難いわね。出来ればもう少し通信速度が上がってくれとありがたいけれど。）

家の超がつく高性能パソコンと比べるとやはり一つ一つが遅く、その僅かな間が微妙なストレスとなつて堆積していく。トントンと意味もなく机に置いた右手の指で机を叩く。不機嫌そうな八重花をクラスメイトは避けていく。

由良は今席を外していて明夜もいないため八重花に進言できるものがないのである。

（自宅のパソコンを常時稼働させてエクセスで情報を収集しつつサーバーにアップしてこの端末で随時確認する方が効率的かしら？）専門知識がなければわからないような設定にまで踏み込むことも視野に入れて八重花は多機能携帯の性能を見極めていく。

多重処理による負荷やツールの使い勝手といった細部の検討まで一通り終えたところでちょうどチャイムが鳴った。

ボタンと多機能携帯を閉じてしまう。

（これでリアルタイムに探索ができる。検索範囲内に映ればすぐさま対応できるわ。まったく、さつさと帰ってきなさいよね、明夜。）八重花が多機能端末携帯を買った理由の一つは明夜の行方を探す効率を上げるためだった。

友のために安くない買い物をする仲間思いの八重花であるが

「ヤエ、何一人で難しい顔したりにやけたりしてるんだ？不気味がられてるぞ？」

「…。」

その優しさは他人には気付いてもらえなかった。

昼休み、叶は裕子、久美、真奈美、そして海の5人で昼食を摂るために学食に向かっていた。

「裕子、今日は芳賀と一緒にじゃなくていいの？」

朝の続きと言うわけではないが最近芳賀と裕子はセットでいることが多いだけに違う行動を取ると気になってしまう。

裕子はあははと照れ笑いを浮かべて手と首を横に振った。

「さすがに朝にあれだけ弄られたら昼と一緒にご飯なんて無理よ。ちゃんとお弁当渡してあるから。」

「なるほど。」

さすがに理解ある親友たちなので

「ケツ、ラブラブかよ。」

などとやさぐれたりはいしない。

というか陸や八重花を含めて暖かく見守ってきたのだから仲良い事は喜びすらあった。

「わぁ、愛妻弁当だね。」

「ブツ！」

無自覚な言葉の暴力その2が炸裂。

きつと今ごろ弁当を食べている芳賀も同じようにやっかまれていることだろう。

「叶、もう堪忍して。」

すっかり打ちのめされた裕子は叶にすがり付き

「？」

当人はなんの事か分からず首をかしげるのだった。

「それじゃあ叶と飯場さんは席取りお願いね。」

「任せて。私と叶ちゃんの力で何人たりとも寄せ付けないから。」

叶と真奈美にしてみればちょっと笑えない冗談だが裕子と久美は当然事情を知らないため笑った。

席を探しながら叶は小声で海に話しかける。

「食堂で暴れちゃダメだよ？」

「あはは。さすがにそんなことしないよ。∴やるときはエレガントに跡形も残さないから。」

ニヤリと口の端を吊り上げる海に叶は身を震わせる。

「そういうのはダメ。」

メツとお姉さんぶって注意する叶に海はキュンとなった。

このまま抱きつこうとして

「あ、その席が空いてるよ。」

出鼻を挫くタイミングで叶が席を見つけた。

(うー、恐るべしセイントの危機回避能力。)

そんなものがあるのか不明だが自分の行動を叶の危機だと自覚している分、海は質が悪い。

せめてもの抵抗に隣の席を陣取ったが不思議そうな顔をされただけで拒絶はされなかった。

「それにしても…」

海は軽く周囲を見回してため息を溢す。

叶も同じように周りを見て苦笑いした。

「随分と露骨な監視だね。」

食堂にいる女子の数割、少なくとも十数人が叶たちを睨み付けるような視線を送ってきていた。

その中にはヴァルキリーの等々力良子とバレー部の部員もいたが、こちらは良子の指導の賜物か警戒しているのは分かるが不躰な敵意は含まれていなかった。

「睨んでくるのは上に目をかけてもらえない下っ端なんだ。」

海がわざとらしく口に出すと周囲からの視線が強くなった。

さすがにそうなると他の生徒も何事かと気にし出す。

結果としてジユエルは海たちを睨んでいられなくなった。

「お待たせ。ちょっと騒がしかったみたいだけど何かあった？」

全てが終わった後に昼御飯を調達してきた裕子たちが席についた。

真奈美は今もいくつか向けられている視線に気付いたようだったがそれを裕子たちに教える必要はない。

「乙女会の会長さんがあそこにいるからじゃないかな？」

叶の機転を利かせた言い訳に裕子たちの視線が良子に向く。

確かに良子は叶たちとは別の意味で熱い視線を集めていた。

「等々力先輩だね。もう3年も後半なのにまだバレー部と一緒にいるなんて本当にバレーボールが好きなんだ。」

「にははは、部員さんの方が等々力先輩を好きなのかもよ？」

ゲフンゲフンといくつか咳き込む音が聞こえてきた。

「そんなことより早く食べないと昼休み終わっちゃうよ。」

真奈美が適当なところで話を中断させ

「いただきます。」

叶たちは普通に食事を始めるのだった。

食事を終えて歓談し教室に戻る途中、海が叶に抱きついた。

「今日の放課後建川に遊びに行こうよ？叶ちゃんとデートしたいな。」

「

臆面もなくデートという言葉を使うので周囲の生徒がギョツとして

叶と海を見た。

叶は恥ずかしくなっつてうつ向きながらも申し訳なさそうな顔をした。

「今日は琴お姉ちゃんと約束があるから、ごめんね。また今度ね。」

「うー、また今度、絶対だよ？」

「うん、また今度ね。」

叶はぐずる海を優しくあやす。

デート発言で見ていた生徒たちは認識を”禁断の関係”から”仲の良い姉妹のようなもの”に変え、安心したような残念なような様子で笑った。

海の頭を猫みたいに撫でながら

(そう言えば琴お姉ちゃんと会ってないな。)  
と考えていた。

それはまだ現実を知らない無知だった頃、今日が何の問題もなく平和に終わるものと信じていた時の事。

放課後、叶は太宮神社に足を運んでいた。

先日は撫子が居たため真面目な話になり、その後もゆっくりする気分ではなかったため撫子が帰った後すぐに解散したのである。

今日はそのお詫びとしてお呼ばれされているというわけだった。

「先週した約束だけど琴お姉ちゃんが忘れてることはないよね？」  
当日になっても何も言っていない琴を少し不審に思いながらも叶は特に深く考えず歩を進める。

琴が神出鬼没なのはいつもの琴なので気にしないという信頼の裏返しだ。

だが琴は要件を理由に叶に会いに行く、むしろそれが目的になっているため来ないという時点で異常なのである。

太宮神社は今日も閑散としていて人の気配がなかった。

「琴お姉ちゃん？」

叶は社務所を覗いてみたが鍵がかかったままだった。

「？」

社務所にいなければ境内で掃除をしていることが多いので回ってみたら琴はおるか猫の子一匹居やしない。

「おかしいな？お買い物かな？」

それでも叶の考えは日常の延長線上に沿っていて危機感はない。もう少し待っていればと思っっている。

「あれ？」

ふと太宮神社の本殿の方で特徴的な巫女装束が見えた気がした。

「琴お姉ちゃん？」

廊下を曲がる寸前だったので顔は見えなかったが太宮神社にいる巫女は琴しかない。

叶は本殿に上がって追いかける。

「あ、いた。琴お姉ちゃん。」

巫女は叶が見ると廊下の角を曲がろうとしていた。

声をかけても聞こえないのか立ち止まらない。

とにかく追いかけていった叶は最後に巫女が居間に入っていくのを見た。

「琴お姉ちゃん、いますか？」

一応ノックしてみるが返事はない。

「失礼します。」

襖を開けるとそこには誰もいなかった。

湯飲みが2つテーブルの上にあるが時間が経ってすっかり茶色くなっている。

「琴お姉ちゃん、いないんですか？」

何度呼んでみても隣の部屋を覗いてみても琴だと思っていた巫女の姿はない。

そもそも琴なら叶を見つけたら逃げるところか寄ってくるはずである。

さんざん追いかけてみた後のことだがそれは不自然だった。

「でもそれならさつき見たのは……」

琴でないならあれは誰だったのか。

琴の母親が帰ってきたとは聞かされていないし、いるなら声をかければ出てくるはずだ。

「もしかして……幽霊？」

突然部屋の空気が冷たくなった気がした。

カサッ

「きゃあ！」

突然の音に思わず悲鳴を上げた叶だったがよく見ると足に紙が当た

った音だった。

「驚いた。…あれ、これって”太宮様”の占い？」

叶は折り畳まれた和紙を手にとって広げてみる。

以前陸に会うために書いてもらった緻密な予定表とは違い簡潔な文だった。

『さらわれる おこるはだれぞわからず』

「ふふつ。お皿が割れて誰かが怒るのかな？」

叶はその文面を素直に読み解いて笑った。

「琴お姉ちゃんが書いたのかな？でもこの文字は”太宮様”が書いたみたい。」

一度笑った叶だがよく見ているうちに違和感を覚えた。

”太宮様”の占いが皿の割れるどうでもいい内容を示すだろうか。そしてこれが誰に当てられた占いなのかと。

「ここにあるってことは琴お姉ちゃんの占いだよね？それがさらわれる…お皿が割れる占いな訳がないから…拐われる？」

その認識に到達した瞬間、今日一日過ごしているの琴に関する違和感の正体に気が付いた。

いつも見守ってくれている気配がなかった。

「琴お姉ちゃんが拐われた？誰に？」

人を疑うのが苦手な叶だが今回は疑わないわけにはいかない。

先日交渉が決裂したときに見せた撫子の顔。

「大変！」

ようやく事態の大きさに気付いて声を上げるのだった。

## 第99話 捜索隊

琴が拐われた事実を知った叶はすぐさま八重花に電話をした。

『何、どうしたの?』

「八重花ちゃん大変だよ琴お姉ちゃんがなくて巫女さんが歩いていたらそこが居間で占いが拐われて…」

多分に動揺している叶は一生懸命説明しようとするが八重花には全く伝わっていない。

(叶の動転の仕方は異常ね。太宮神社に言ったけど先輩はいなくて探していたら居間で占いを見つけてそこに拐われると書いてあった、と言ったところかしら?なるほど確かに一大事ね。)

だが八重花は話を聞いただけで事件を解決する安楽椅子の探偵のように叶から伝わった断片的な情報だけで真実にたどり着いてしまった。

八重花の洞察眼恐るべし。

『了解したわ。緊急召集をかけるから叶は深呼吸でもしてなさい。』

「わ、わかった。すー、はー、…」

叶が深呼吸を始めるとすぐに電話は切れた。

「何かあった?」

八重花は真奈美と帰宅中だった。

一応叶から電話だったことは伝えたが電話の最中に声色に真剣味が増したのを感じ取ったらしく真奈美は表情を引き締めていた。

八重花はフツと笑いながら逆方向に歩き出す。

制服のスカートが翻る。

「太宮院の巫女さんが誘拐される事件が発生したわ。私たちは捜査員を集めて至急現場に急行する。」



「！ラジャー！」

真奈美は敬礼するとすぐに携帯を取り出して海に連絡を入れた。八重花も由良の応答を待っている。

（犯人は…まあ、分かっている。問題はこちらがどう対処するべきかというところね。）

『ヤエか？』

「そつよ、私は八重花。」

「プツ！」

由良の声が大きいので漏れ聞こえていた真奈美は八重花の応対に思わず吹き出した。

太宮神社の本殿から居間に到着した八重花たちが見たのは

「すー…、はぁー…！」

いまだに深呼吸を繰り返す叶の姿だった。

急いで来たとはいえ、かれこれ20分くらいは経っている。

現に深呼吸を繰り返している叶はぐったりしていた。

「はい、ストップ。」

「すー…、…！」

八重花の声に深呼吸をやめた叶だが息を吸ったまま停止していた。

徐々に息苦しさから赤くなっていく叶。

真奈美は止めようとするが他3人が面白がったりときめいたりして真奈美を引き止めた。

すぐに呼吸を思い出すかと思って見ていた面々だが叶の顔が赤から紫に変わった辺りで叶が予想以上にアホの子…ではなく動転していたと気付いて慌てて止めに入った。

「はふー、死んじゃうところだった。」

「おのれ、ヴァルキリーめ。叶ちゃんをこんなに苦しめるなんて許せない。」

海はニヤニヤしながら拳を握り締める。

かなり無茶苦茶な責任転嫁だがあながち間違っではない。

まだ話し合ってもいないのにヴァルキリーが犯人だと考えているようだった。

しかし話し合うまでもなく現状で琴を狙うのはヴァルキリーしかあり得ないからだ。

「しかし未来視を手に入れるためとはいえ誘拐とは随分と早まったな。あのコトが誘拐犯に素直に従うとは思えんが。」

「太宮院の巫女さんはずっと叶にご執心だもの。いつ”Innocent Vision”に入ると言い出すかもわからない状況なら取られる前に奪ってしまえと考えるもおおかしくないわ。ただ、何のきっかけもなく強行策に踏みきったのは確かに妙ね。」

由良と八重花は誘拐現場である居間を見回しながら犯人と考えられるヴァルキリーの行動を考えるが、普段の慎重で用意周到な作戦とは違い突発的で力任せな行動はヴァルキリーらしくないと思った。

「オーだと思うか？」

「確かに力押しという意味ではあり得るけど、オーと仮定したら被害が小さすぎるわ。」

湯飲みが2つ、しかし琴がオーにお茶を振る舞うわけがない。

オーが大拳して押しかけてきたのならもっと太宮神社自体に損害が出ていなければおかしい。

そうなればやはり顔見知りの犯行と考えるのが妥当である。

「どうしよう、八重花ちゃん!？」

叶が泣きそうな顔で八重花にすがり付いた。

海が指を銜えて切なそうな目をしていたが八重花は無視して叶の頭を優しく撫でる。

「大丈夫よ。犯人も目的も分かっているし、何より相手が太宮院の巫女さんを傷つける事はないわ。奪われたなら奪い返せばいいのよ。」

実際にそこまで楽観できるとも八重花は思っていない。

殺しはしないだろうが精神的に追い詰めて協力を承諾させる事くらいは八重花だってやる。

向こうには悠莉がいるのだからコランダムが無くてもそれ以上の追い詰め方をする可能性は十分に考えられた。

(だから時間は掛けられない。)

どんなに強靱な精神力を持っていたとしても長期間精神的苦痛に晒されれば折れる。

いつ拐われたのか分からない以上急ぐ必要があった。

八重花は叶を離すとすぐにポケットから端末携帯を起動、そこから自宅のパソコンにアクセスする。

「『エクセス』 起動確認。さあ、暴くわよ。」

八重花は小さい端末の画面をくるくる変化させてものすごいスピードでキーを操作していく。

端から見ていると何をやっているのか分からないが、八重花の表情に徐々に笑みが点っていくのはわかった。

「ふふふ、甘いわ、ちよろいわ。この程度なの、ヴァルキリー？」

八重花はセキュリティを掻い潜り防壁を突破して情報を曝していく。

「八重花、恐ろしい子。」

「いろんな意味でな。個人情報保護とかどうなってるんだ？」

電脳の悪魔と化した八重花は止まらない。

ヴァルキリー、というか花鳳家所有のとある郊外の別荘が昨晚から通電したという使用履歴と本来は守るために監視するはずの防犯カメラの映像から1時間足らずでヴァルキリーの潜伏場所を割り出した。

「ふう、やっぱり端末だとこんなものね。スペックが足りないし画面も小さいわ。ん？どうかした？」

八重花が顔をあげると”Innocent Vision”の面々はずいぶんと距離を置いたところで固まっていた。

「ヤエ、犯罪に手を染めるなよ？」

すでに今の検索自体が発覚すればお縄につく手段だが由良はもつと

どでかい事をやらかすんじゃないかと不安を覚えた。

対して八重花は目をぱちくりさせざるばかり。

「…ふつ、何を今さら。」

「!?!?」

自嘲とも嘲笑ともつかない笑みでの一言に”Innocent vision”のメンバーは抱き合いながら一斉に後退った。

「冗談よ。さすがにこんなことで危ない橋は渡らないわよ。」

一瞬の幻だったのか八重花はおかしそうに手を横に振った。

4人は顔を見合わせて恐る恐る八重花に近づく。

「まったく。そんなに私が信じられないから…プライベートを公開するわよ?」

「!?!?!?」

一気に温度を失った八重花の言葉に4人は壁にすがり付いて震え出した。

情報世界においても弱者は弱肉強食の掟で屠られる宿命にあるのだ。「もちろん私が悪いことしてないって、信じてくれるわよね?」

八重花の質問に追い詰められた獲物たちはただただ首を縦に振ることしかできなかつた。

「うっ、まさか本当の敵が味方にいたなんて。」

海がゲンナリしながら呟くがさすがに八重花ものんびりしていられる状況ではないので話を先に進める。

「ヴァルキリーが巫女さんを誘拐した裏付けは取れたわ。正直この情報を警察に持ち込んで社会的にヴァルキリーを追い詰めることもできるけど…」

八重花が視線を叶に向ける。

視線を向けられた叶はすぐに首を横に振った。

「そんなことよりも一刻も早く琴お姉ちゃんを助けてあげないと。」

搦め手を知らない叶はただ琴を助けることだけを願う。

「俺も落とし前の代償はこの手でつけないと気が済まない質だ。」  
由良は獰猛な戦士として、友を拐われた報いを直接受けさせると告げる。

「まあ、誘拐は犯罪だけど八重花のやり口でチャラだから決着は内輪でつけるのが妥当かな？」

真奈美はこんなときでも真面目な裁量を考える。

「正直あの巫女さんがいない方が叶ちゃんと一緒にいられるんだけど…」

そこまで言って叶を見ると案の定泣きそうに瞳を潤ませて海を見ていた。

「叶ちゃんが泣きそうなのでさっさと助けるのがいいと思う。」

叶の態度であっさりと思いを伝える海だった。

「そういうと思っていたわ。一応家のパソコンにデータを保存しておくとして…」

ピツピツと端末を弄って数秒で八重花は顔を上げる。

相変わらず他のメンバーでは何をやったかも理解できていない。

「早速襲撃を仕掛けるわよ。こっちの行動を読まれるとは思わないけど場所を移されたりしたら面倒なことになる。」

「うん。待っててね、琴お姉ちゃん。」

救出を誓い、叶たちは太宮神社を出発していった。

「はあ、はあ…んっ…」

薄暗い部屋の中に息づかいが響く。

部屋の中央には天井から吊るされたロープに手首を縛られた琴が立たされている。

足にもベルトをしていて糞虫のようだ。

「ぶっ、くっ…」

琴の口から悩ましげな声が漏れるがそれを懸命に押さえ込もうとしている。

額や頬、はだけて露出した首筋には珠のような汗が浮かんでいた。しきりに体を振るが拘束は解けず手首のロープが食い込むばかり。

「んん！」

ビクンと琴の体が跳ね上がった。

背筋が反り返り痙攣したように体が震える。

「はあ、はあ。」

琴は脱力した様子で手首に付加が掛かるのを承知でぶら下がるように体重を預けた。

ガチャ

薄暗い部屋に微かな光が差し込んできた。

相手の顔は逆光で見辛いが見間違っわけもない。

「下沢：悠莉、さん。噂に聞き及んでいた以上のお方ですね。」

「ふふふ、褒め言葉として受け取らせていただきます。」

悠莉は楽しげに笑うとパチンと部屋の電気をつけた。

琴は部屋の真ん中で手首を吊るされた格好だったがそれ以外に袖や襟元、袴の下などから細いケーブルが伸びていた。

そのケーブルは机の上の箱に繋がっている。

その箱には微振動マッサーと記されていた。

「確かに、くっ、くすぐりは拷問にあるでしょうが。ひゃあ！これは：斬新です。」

これ自体はなんの変哲もないマッサー器具だがそれが太ももやふくらはぎ、脇腹や二の腕など弱いところに張られておりランダムな振動を不定期に送る設定になっているため琴は不意打ちでのくすぐりにさらされ続けていたのだった。

「本当でしたら凌辱のような辱しめを与えたいところなのですが、さすがにやりすぎだと皆さんに止められてしまいました。」

とても残念そうに眉根を下げる悠莉だが琴は笑えない。

「止められなければ、やるつもりだったのですか？」

拉致監禁までしたヴァルキリーが躊躇う手段に内心恐怖を感じながら平静を装って尋ねる。

悠莉はとても輝かしい笑顔で頷いた。

「乙女の華を散らし、女性としての尊厳を踏みにじり、あらゆる苦痛と快楽を体感させ、二度と立ち直れない心の傷を作り出す。ああ、想像しただけで震えが止まりません。」

尤も悠莉の震えは歓喜の方であるが。

琴は悠莉の心に宿る深遠の闇に恐怖を覚える。

（これほどの狂気を内に秘めながら普通に生活を送れるなど、それこそが異常です。）

悠莉の嗜虐は一步間違えば通りすがりの人間を斬り殺しかねないほどに歪んでいる。

それでありながら悠莉の闇は決して表には出てこない。

余程強い自制の精神力があるか、あるいは元から狂気として歪んでいるか。

「っ!?!?」

琴が意識を逸らした隙に悠莉は琴の背後に回って縛られて動けない体を抱き締めた。

手が体をまさぐるように動き回る。

「あ、や、わたくし、そういった趣味は…」

「作倉叶さんに歪んだ愛をお持ちの方の発言とは思えませんね。」

「あれは…愛玩している、っ、だけです。」

悠莉の手がいよいよ危ない場所にまで近づいてきた。

（叶さんにもまだ触られたことがないのに…）

叶が触る状況になったら相当ヤバいのだが…それは置いておいて。だが貞操の危機は直前で止まった。

「ありました。」

袖の下から手を差し入れて悠莉が取り出したのはICレコーダーだった。

「…。」

「怖い顔をしないで下さい。花鳳様にとって危ういデータを消去できたらすぐにお返しします。」

変態的な言動や行動で琴を惑わしつつ本命はあくまで実務的な証拠の隠滅。

（やはりこの方は…歪んでいます。）

証拠を取られたことよりも悠莉の存在にこそ琴は危機を感じた。

「…仕方ありません。ですが中身には他の顧客の方のデータも入っています。すみませんがこの場で作業をしていただけますか？」  
だというのに琴は悠莉を引き留めるように言った。

（危険ですが、この方の心の在り方は興味深いですね。）  
捕まった状況だというのに存外余裕そうな琴だった。

悠莉は少し考えるように頬に指を当てていたが

「分かりました。その代わり協力してくださいね。」  
と椅子に座った。

ICレコーダー内のフォルダの一つを開いて再生すると琴とどこかの社長の声が聞こえてきた。

「それよりももう少し前で…」

「ポチッ。」

何の脈絡もなく突然悠莉がマッサージ器のスイッチを押した。

「ひゃあ！なんですか!？」

あまりにも予想外の行動に声を抑えることも出来ず可愛らしい悲鳴を上げた。

協力しているのに弄られてはたまらないと講義するが

「あー、素敵です。」

悠莉は頬を染めてうつとりとしていた。

（うつ、選択を誤ったかもしれません。）

だが今更後には引けない。

琴は悠莉との会話を長引かせるべく気を引き締めるのだった。

「ポチッ。」



「きゅああ!?!」

## 第100話 追う者追われる者

「そろそろ太宮院さんも疲弊してきたでしょうか？」

撫子たちヴァルキリーは琴を誘拐してほぼ1日、郊外の別荘で過ごしていた。

本当なら連れてきた直後から徹底的に痛め付けてヴァルキリーへの協力を誓わせるつもりだったのだが

「やはり精神的苦痛を与えて心を折ってからの方が良いですよ。」と精神攻撃のプロの悠莉が進言したためそちらは完全に悠莉に任せていた。

「悠莉の拷問なんて見たくないわ。」

何度もコランダムに放り込まれた経験のある美保は頭を抱えて蹲った。

「さすがにあの道具一式を使うとか言い出した時には止めたけど、巫女さん大丈夫かな？」

良子はげんなりした様子で部屋の角に置かれた段ボール箱を見た。

モザイク処理してほしい大人の玩具と称されるアイテム群に皆それなりに興味はあるが手に取る勇氣はない。

「悠莉様が最終的に要望されましたのは微振動マッサー器具ですので問題ないと…思わないことも、ないです。」

「普段はつきり言う葵衣が言葉を濁した！」

緑里が突っ込むほど葵衣は大っぴらに目をそらしている。

特に振動で共通するせいで否定しきれないのだ。

悠莉の嗜好は誰にも理解されない。

「もうすぐ1日経ちます。さすがに太宮院さんとして心根が折れた頃合いでしょう。ヴァルキリーへの協力の交渉を始めることに…」  
ピリリリリ

撫子が立ち上がるうとした矢先に葵衣の携帯が鳴り出した。

「どうしましたか？…そうですね。直ちに迎撃に向かいます。監視

を継続してください。…無闇に手を出せば怪我ではすみません。監視です。」

葵衣の平淡な声に宿る真剣さにヴァルキリーの面々も緊張感を持って静まり返る。

ピツと終話を押した葵衣は全員を見回して口を開いた。

「この別荘に近づく人影あり。青が2つに朱が3つ。」

「Innocent Vision」！なぜこの別荘が…こんなにも早く？」

「それは不明です。すでに私有地にまで侵入を許しており”Innocent Vision”がここを目指し、太宮院様を奪還しようとしているのは明白です。」

秘密裏に行動して迅速にこの別荘に退避したため目撃情報などほとんど皆無であったはずなのになぜ見つかったのかヴァルキリーには分からない。

「まさか太宮院の未来視で？」

真つ先に考えるのはそこだった。

未来視ならば連れ去られる場所を知ることなど造作もない。

だが問題がある。

「撫子様。それならば自分が拐われるのを避けるのではないでしょうか？」

「それに捕まえに行ったときにすごい驚いてたからね。もし拐われて監禁場所まで分かっているなら驚かないんじゃないかな？」

緑里や良子の言うつように本当に未来視なら誘拐という行為自体を防げたはずなのだ。

それが抵抗もなく即座に捕まった。

（まさか…太宮様”は太宮院さんではない？そんなはずは…）

八重花の『エクセス』の情報検索能力を知らない撫子はこの誘拐の目的の根底すら疑い始めていたが頭を振ってその可能性を無理矢理否定する。

（太宮院さんが”太宮様”の力、未来視を有していることは間違い

ありません。」

「理由は何である」と Innocent Vision”がこの別荘に向かっている事実は変わりません。必ず勝利し、未来視とその他の魔剣全てをヴァルキリーに迎合します。」

「Innocent Vision”を迎合ですか。随分と大変そうな野望ですね。」

良子が苦笑しながらラトナラジュ・アルミナを手にする。

「魔剣と聖剣の迎合を果たしたとき、ヴァルキリーは世界の頂点に立つのです。」

撫子もアヴェンチュリン・クォーザイトを顕現させて夢を語る。

緑里、美保、葵衣もジュエルを手に”Innocent Vision”が迫る暗い森を睨み付けた。

「花鳳先輩。迎合するにしてもここで撃退されるような弱い魔剣使はいはいらないですよね？」

美保は獰猛な笑みを浮かべて問う。

「そうですね。力無き者はわたくしたちの作り上げる世界に必要なありません。」

撫子は美保の思惑を知りながら敢えて枷を外した。

美保がニヤリと笑って夜闇の森に飛び出していく。

「わたくしたちも出ましよう。悠莉さん、太宮院さんの警護をお願いします。」

「分かりました。」

部屋の奥から返事が聞こえたので撫子たちも後を追うように迎撃に赴くのだった。

”Innocent Vision”は別荘に続く整備された道ではなくその周囲を覆う森の中を進んでいた。

そのため森への侵入を許すことになったわけだが、むしろこの暗い

森の中” Innocent Vision” を見つけた黒服たちを  
褒めるべきだ。

それほどまでに夜の森は人の姿を闇へと溶かしてしまう。  
闇の中で微かに輝く朱色と青の光が不気味だった。

「…。」

忍者の如く誰一人として言葉を発することなく森を駆ける。

「レイズハート！」

「サンスファイア！」

その闇がカツと眩い光に照らされてその中にあるものをひけらかした。

「ッ！」

突然の閃光だったが” Innocent Vision” は察知していたかのように木の陰に飛び込んで身を隠した。

一瞬世界を照らし出した輝きもすぐにまた闇に飲み込まれた。

「アポイントメントは無かったと思いましたが何かご用ですか、  
” Innocent Vision” の皆さん？」

撫子は闇の中をゆっくりと歩く。

手にしたアヴェンチュリン・クォーザイトからは淡い光が漏れていて撫子の周囲を照らしていた。

だがそれは敵に相手の所在を教えているようなものだった。

コン、ガサッ

物音がした直後わずかに草が揺れた。

撫子は足を止めてスタンスを広く取り、周囲を警戒する。

コン、ガサガサッ

今度は別の生い茂る草が揺れた。

「隠れていないで出てきてはいかがですか？」

呼び掛けるが返事はない。

その草むらに向けてアヴェンチュリン・クォーザイトが突き付けられた。

「出てこなければ撃ちますよ？3、2、1…。」

カウントダウンしても草むらからは誰も出てくる気配がない。

撫子は明かりを生み出すため草むらに向けてサンスフィアを撃ち放とうとした。

ダンッ

まさに発射するタイミングで下ではなく木の上の枝が激しく振動してガサガサッと揺れ、そこから人影が飛び出してきた。

撫子は慌てて顔を上げるが発射体勢に入っていて対応が間に合わない。

一瞬で人影は撫子に迫り

「ようやく姿を現しましたね？」

撫子は笑っていた。

「獲物発見！行け、レイズハート！」

そこに翠色の光が一斉に押し寄せてきた。

空中にあった人影、レイズハートの光に照らされたのは真奈美だった。

真奈美は撫子に向けていた左足の刃を引くとそのまま光の渦に突っ込んだ。

「まさか、そのまま突き抜けるのですか！？」

撫子が驚きの声を上げて後ろに下がる。

予想では飛び込んできた相手がそのまま防御するか不意打ちで直撃して足を止め、そこに美保と撫子の攻撃を叩き込む流れになっていた。

だが真奈美の速度は減るところが増していた。

「レイズハートの力をなめるんじゃないわよ！」

翠色の光の波に真奈美が突っ込む。

いかに5つしか生み出せないジュエルのレイズハートであっても一度にぶつければソルシエールの一撃すら凌ぐ威力を誇る。

それを正面から加速をつけてぶつかるなどトラックに正面からぶつかっていくくらいの愚行。

「一人目、撃……」

シャキキン

勝利の声をあげようと口を開いた美保の目の前で翠色の光が縦一文字に切り裂かれた。

「はぁ!?!」

確認するまでもない。

真奈美のスピネルがああ状況でレイズハートを切り裂いたのだ。

魔剣の上位に存在する聖剣だからこそ出来た芸当と言えた。

「セイバー、やはり強い!」

アヴェンチュリン・クォーザイトが赤い光を纏う。

「デュアルグラマリー、ルビナス!」

撫子自身をも包み込んだ燃えるようなルビナスの赤。

撫子はアヴェンチュリン・クォーザイトをグツと握ると正面から真奈美に向かって振るった。

真奈美も空中で切り上げていた足をさらに引き上げて力を溜めていた。

「ガンマスピナー!」

赤に染まった錫杖と光を纏った刃がガギンと凄まじい音を立ててぶつかり合った。

「くう、スピネルでも通らない!」

「ルビナスの力を見くびらないことです。」

セイバーとジユエルを触れさせたまま撫子は周囲にサンズフィアを生み出す。

「これなら避けられないでしょう!」

至近距離でサンズフィアを一斉に真奈美に向けて放つ。

「危ないな!」

真奈美は右足を大きく下に蹴り出すとアヴェンチュリンを踏み台にして大きく飛び退いた。

「なっ!?!」

驚きの声をあげたのは撫子である。

あの至近距離での必中のはずの一撃を真奈美はかわした。

さらに飛び退いたまま木々の枝の中に紛れ

「この！」

美保がレイズハートを追撃で放ったが真奈美には当たらず再び光が消えた。

「はあ、はあ。花鳳先輩。」

美保が撫子の背中を守るようにスマラグド・ベリロスを構えた。本来は撫子を囮とした波状攻撃で早々に1人倒すつもりでいた。

「まさか芦屋真奈美さん1人に2人が足止めされるとは。他の”Innocent Vision”の方の潜伏も考えられますね。」

「あー、さつさと出てきて勝負しなさいよ！」

「よー、よー、よ…」

美保の叫びは夜の森の静寂に微かに木霊するだけで誰も出てきはない。

撫子と美保はいつまた襲撃があるか分からない緊張の中で身を固くするのであった。

撫子たちの戦いが静の状態に入ったとすれば緑里と葵衣の方は激動に突入したと言えた。

「全てを焼き尽くしなさい、ジオード！」

八重花は森の中だというのに全力で魔剣の生み出す火炎を振り回し「見えないなら一帯全部ぶっ飛ばすぞ、玻璃！」

由良は木々をへし折らんばかりの衝撃波を適当にばら蒔いていた。

「わー、式、鎮火！鎮火！」

「音震波を打ち消します、エアスラスト。」

それに対する海原姉妹は正直戦闘どころではなかった。放置すれば山火事になり別荘が焼けるか通報されて人が集まってくる。

どちらにしても極秘裏に動いていた撫子たちにとっては大問題だっ



た。

もちろん八重花と由良はそれを理解した上で容赦なく周囲に被害を与える攻撃を仕掛けているのだから質が悪い。

「ボクたちが相手なんだから周りを燃やすな！」

せつせと式を操って火を消しながら緑里が八重花に文句を言った。2人とも覚悟とか食らえとか言いつつ実際は周囲にはかり攻撃していたのだからバレバレだ。

「姉さん、それは…」

葵衣が何か言うより先に八重花がニヤリと口の端をつり上げた。

隣にいる由良とも目配せしあつて怪しい雰囲気を見せ始めた。

「ヴァルキリーを相手に勝負を挑まれたなら仕方がないわね。全力で相手になるわ。」

ゴオオ

天に掲げたジオードの刀身から赤い炎が立ち上った。

「自分と戦えと言った心意気は買ってやる。だから手加減なしだ！」  
由良も狂暴な笑みを浮かべて玻璃を横に薙いだ。

ギギギギと悲鳴のような振動音が木々に反響して響き渡る。

振動は空気の波を呼び、それは風となつて八重花の炎を猛り上がらせた。

「えっと…どうしよう。」

挑発したはいいが、いざ対面してみると真っ向勝負を挑むこと自体が無謀だと思い知らされた。

デュアルジュエルで式と光刃を生み出してもそのどちらも飲み込まれてしまいそうだ。

「良子、助けて！」

恥も外聞も捨てて緑里は近くで戦っている良子に助けを求めた。

「助けてほしいのはこっちだよ！」

良子は走っていた。

ルビナスの強化とエアブーツの複合によって生じる速度は魔剣使いの中でも最速と言っても過言ではない。

その良子が走れば逃げ切れぬものなどない。

…はずだった。

「残念、トラップ発動。ダイヤモンド。」

良子が地面を踏んだ瞬間、足元に光の円が浮かび上がり良子が片足で着地した体勢のまま静止した。

一時的に時間を消滅させるグラマリー・ダイヤモンドを設置型の罠として海が扱っているのだ。

ダイヤモンドは5秒で効果を失うように設定してある。

海はゆっくりと歩いて近づいていく。

だが効果が切れた瞬間、良子はまた風のように走り去っていく。

この繰り返しだった。

とてもじゃないが美保の救援に行けるような状況ではなくむしる誰かに海を止めてほしかった。

「来るなー！」

「そう言われると追いかけたくなるよね。さあ、次だよ。」

海は笑みを浮かべながらアダマスを手を天に向け

「む。」

突然明後日の方向を睨んだ。

笑みの張り付いていた海の顔が歪む。

「この力は…」

「みんなならしないな。せつかくランが琴ちゃんを連れてくるのを手伝ってあげたのに。それじゃあもう少しサービスしてあげようかな？」

蘭は別荘の屋根の上で不満げに腰かけていた。

その顔が面白そうに笑うと左手に顕現させたオブシディアンを掲げ

「イッツショータイム！」

イマジンショータイムを発動させた。

## 第101話 怪しの森の戦い

シューーン

光とも音とも違う何かが一瞬駆け抜けていった。

その直後、別荘の森にいた”Innocent Vision”やヴァルキリーはその異変に気が付いた。

「なんだ、空が!?!」

「空だけじゃないわ。森も…!」

由良と八重花は驚きのあまり攻撃の手を止めてしまうほどだった。

由良が見上げた空にはあり得ないはずのオーロラがいくつもかかり、八重花が見た地上では立っているだけだったはずの木々が動き出した。

「ヴァルキリー。気象変化や生物兵器まで開発するなんて本当に世界を征服するつもりなのね。」

「訂正をお願い致します。ヴァルキリーの理念は世界征服ではなく世界の恒久平和です。」

八重花たちが呆けているうちに鎮火が終わったのか葵衣と緑里が立ち塞がった。

葵衣はこれが自分たちの成果でないことをわかっていたが動揺させるため何も言わなかった。

「何これ!?!うわっ、木が勝手に動いてる!?!」

…尤も緑里の反応を見てしまつと葵衣のブラフなどまったく意味をなさないのである。

「海原姉のあの様子だと別荘の攻撃みたいだな。」

「まったく、千客万来ね。」

「その台詞はこちらに相応しいと思われます。」

「フツ、確かにそうね。」

ここは花鳳の別荘で迎え入れる側がヴァルキリーなのだから葵衣が正しい。

「こらー、暢気に雑談するな！」

1人慌てていた緑里がベリル・ベリロスを振り回して叫ぶ。確かにどちらものんびりしている場合ではない。

「それもそうね。なら、今度こそ燃やすわよ、ジオード！」

ほとんど不意打ち気味にジオードの刀身から赤い炎を緑里たちに向けて放った。

範囲攻撃である炎を咄嗟に回避できるわけもなく

「デュ、デュアルジュエルで受ける！」

緑里は身を固めて防御の姿勢を取った。

眼前に迫る炎の渦。

だがその間に割り込む姿があった。

「なっ!?!」

「木!?!」

それは周囲で蠢いていた森の木だった。

飛び込んできた木は炎に身を曝し

ボウツ

一気に燃え上がった。

ピヨピヨンと跳ね回る姿は火だるまになった人のようで不気味だ。

「予想外の事態ですがこのままではどちらにしる森が燃えてしまいます。姉さん、鎮火を。」

「あ、うん。」

緑里が式を指に挟んで投げつけようとした時、突然空のオーロラから虹色の光が放たれて燃え盛る木を包み込んだ。

光は木を捕らえると徐々に空へと引き上げていく。

「トラクタービーム?無駄にハイテクね。」

「ハイテクと言うよりは超科学の領域ではないかと。」

八重花も葵衣も呆然と空に引き上げられた木を見つめる。

盛大に燃えた木は炭になり粉々になって最後は散っていった。

「おい、オーロラ。その力で”Innocent Vision”を捕まえてよ。」

緑里が空に向かって手を振りながら叫ぶ。

他力本願で情けない限りだが誰にも原理の分からない力なのだから拘束できれば抜け出すのは難しい。

そうなれば攻撃するも逃げるも自由というわけだ。

シーン

だが待つていても一向に怪光線は降ってこない。

「どうやら動作条件は決まっているみたいね。」

八重花もわずかに安堵を滲ませながらジオードを構え直した。

「仕方がない。でも木が盾になってくれて火が燃え広がる心配がないなら本気で相手が出来るよ。」

大小のジュエルを構えて緑里は笑う。

(そういうことね。)

(そういうことか。)

(そういうことですか。)

緑里以外はこの現象の条件が大まかに理解できた。

つまり緑里が言った通り何者かが”Innocent Visio n”とヴァルキリーの戦いから余計な要素を排除しようとしているということ。

(こんな訳の分からない現象が現実とは思えない。まさか…)

八重花はそれを成す何者かを推察しようとしたが

「ほらほら、行くよ！式、光刃、やっちゃえ！」

緑里の攻撃で思考を断たれた。

「由良は凄い方の海原をお願い。」

「わかった。」

「凄い方ってなんだー!？」

由良は構わず凄い方の海原に向かって斬り込んでいく。

歯噛みして唸る緑里を見て八重花はフツと笑ってジオードから炎を出した。

「木が盾に入るならその全てを灰に変えるまで。最後まで付き合ってもらおうよ。」

撫子たちの周りでも突然空がオーロラで明るくなり木々がざわめき出した。

「いったい何が起こったのでしょうか？」

「花鳳先輩、あれを！」

美保が指差した先を見ると周囲の木の枝が指のように動き一点を示した。

そこは真奈美が逃げ込んだ木だった。

美保がニヤリと笑う。

「行きなさい、レイズハート！」

翠の光刃が一斉に示された場所へ叩き込まれる。

「うわわっ！」

ガサガサと木の中から悲鳴が聞こえて葉擦れの音が移動する。

だが真奈美の位置は周りの木が教えてくれているため行動が丸分かりだった。

「はは、これは面白いですね。」

「この現象が何なのかは分かりませんが、わたくしたちに有利に働いていることに違いありません。」

撫子は美保ほど過信するつもりはなかったが利用できるものは利用するのも上に立つ者の重要な資質と割りきった。

「さあ、かくれんぼはおしまいのようですよ。」

サンスフィアとレイズハートが真奈美のいる場所を狙う。

奇襲はもはや奇襲にならず、隠密も場所が筒抜けでは意味を成さない。

このまま潜んでいても的になるだけだ。

ザンッ

一瞬木の中で光が走った。

ガサア

それに遅れる形で枝の1本が根本から切り落とされて地面に落ちた。  
シユン、シユパン  
ガサガサ、ガサア

次々に枝を落とされ木が苦しむように蠢く。

「何やってんのよ!」

美保が痺れを切らしてレイズハートを叩き込んだ。

だが今度は驚きの声も上がらない。

周囲の木々は真奈美のいる木を忙しなく指差して示している。

「枝を落として木の中で動ける空間を作ったのですね。ですがわた  
くしが裏側に回れば…」

枝を落としたとなれば裏からは丸見えになっているのだから狙いや  
すくなる。

美保に砲撃を任せて木を迂回しようとした撫子は

「デルタ、スピナ!」

木の上から縦回転による遠心力を加えた光の斬撃を受けた。

咄嗟にルビヌスを起動したものの駆けながらでは十分な力が入らず

「きゃあ!」

セイバーの魔剣弱体化との相乗で弾き飛ばされた。

「花鳳先輩!この!」

「おっと!」

さらに追撃しようとした真奈美の攻撃を美保がコランダムで防ぐ。

真奈美は深追いはせず再び別の木の中に飛び込んだ。

撫子は身を起こしながら木々が指差す先を睨む。

「わたくしだけを標的とした一撃離脱戦法。お一人で多人数を相手  
にするのによく考えられた作戦です。」

「誉めてどうするんですか!」

美保は不満げに声を荒らげるが撫子の表情にはむしる余裕の笑みが  
浮かんでいた。

「ですが、ヴァルキリーの2人を1人で押さえ込めるといふ傲りは  
許せませんね。」



世界の空が変容し、森が怪異に化けた時、良子は…

「もういやだー！」

相変わらず全力で逃げていた。

「なんであたしばかり君の相手なんだよー！？」

サマーパーティーの撤退戦でも良子は海と戦い、逃げられた。

普段の良子なら雪辱戦と燃えるところだが、海は次元の違う”化け物”だと分かってしまったので命をチップに大博打を掛けたりは出来なかった。

海はその後を歩きながら邪魔をしようとする木を一刀両断していく。海が歩いた後には木の死骸とも言うべき無惨な姿が残されるだけだった。

「んー。特に理由はないけど、強いて言うならその打てば響くリアクションが気に入ったからかな？」

ヒュンと良子の顔の間近をブリリアントが飛んでいき正面の木々を穿つ。

良子はサツと血の気が引いた。

「それなら明日から、今日から、今からキャラ替えするからついてくるなよー！」

そのリアクションこそが海の楽しむ理由になっていることに気付かない良子はひたすら逃げる。

「少しは攻撃してこないと放っておいてお姫様が囚われたお城に乗り込むよ？」

チート存在で真正面から1人で乗り込んでいっても琴を助けるであろう海だが、目的が琴の救出のためとてもモチベーションが低い。もしも拐われたのが叶だったなら良子と遊ぶことなどなく敵をすべて斬り伏せてとくに助けに向かっている。

「それは問題だけど死ぬわけにはいかないからやだ！ジユって消え

るのやだー！」

駄々っ子のように叫びながら良子は走り

「はい、トラップゾーン。」

時間を止められた。

走れば追い付くこともできるがそれでは面白くないため歩みはあくまでもゆっくりだ。

「追いかけてこもいいけど、ね。」

海はスツと笑みを消して空を睨んだ。

浮かぶはずのないオーロラが揺らめく空は綺麗を通り越して不気味にすら見えた。

迫ってきた木を真一文字に両断する。

「広域の結界に徘徊するクリーチャーの操作：違うね、そう見せるだけの限りなく現実に近い幻覚かな？」

誰もが木が動き回るわけないと知りながらもそれを否定できず利用すらしている。

そう認識させられていると言えた。

「こんなことできるソーサリスは私が知る限り一人で、そっちを相手にした方が面白そうだけど…今は追いかけてここに集中していればいいかな。」

海が考え事をしているうちに拘束は解けて良子はすでに見えないほど先に逃げてしまっている。

海はアダマスを手を空に向けて光を撃ち放つ。

それは上空で破裂すると良子の進行方向の地面に落ちた。

「ディアマンテ、セットアップ。」

声も届かない距離でも消滅の光は地面に溶け込むと発動の時を待ちながら周囲と同化する。

見えずとも術式の設置を確認した海は狩人の顔でアダマスの刀身を撫でた。

「タイムアップまで逃げ切れるかな？」

真奈美、八重花、由良、海が森に突入し激戦を繰り広げている時、  
叶は

「あつう。」

黒服に捕まっていた。

正確に言えば森の入り口近くで待機しているように言われていた叶  
だったが、たまたま近くにいた変質者に襲われかけ、それを黒服の  
1人に保護されたのである。

「怖かったです。」

セイントとはいえ普通の女の子、変質者が怖くないわけがない。

黒服が監視という命令を無視して助けたのも人としての良心からだ  
った。

それでも叶がいるから”Innocent Vision”が襲撃  
してきたと報告したのも彼なので実は複雑な心境だったりする。

「それにしても、花鳳さんの家の森って凄いですね。」

叶が森を見ながら感心したように呟く。

まるで行く手を阻むように木々が蠢き、空にはオーロラが浮かんで  
いる。

黒服は見ないようにしていた現実を改めて直視させられて目眩がし  
た。

撫子の信頼を得てソルシエルやらジュエルやら非常識な力を知っ  
たとはいえ、極域に近くもない空にオーロラが浮かぶ天変地異や木  
が生き物のように歩き回る光景は理解の範疇を大きく逸脱していた。  
なんなら叶に頼んでつねって貰おうかと思ったほどだ。

…決して可愛い女の子に苛められて喜ぶ嗜好という意味ではなく。

「…やっぱり、普通じゃないですよね？」

明らかに普通じゃない光景を疑問系で聞いてくる辺りに叶の非日常  
度が垣間見える。

思わず黒服が首肯すると

「そうですね。」  
と立ち上がった。

任務は監視だが黒服としては撫子の計画を邪魔する者をこの先に行かせるわけにはいかない。

叶は見た限りでは変質者の存在に怯える普通の女の子だ。

様々な戦闘訓練を積んできた黒服ならば一捻りだと。

さすがにそこまで手荒なことをするつもりはないが忠告して引き留めるのが正しい職務だろうと声をかけようとした

「オリビン！」

その瞬間、目の前に立っていた普通の女の子は消え、神々しさすら感じるセントが現れた。

男はサングラスの奥の瞳をその存在に魅入られて動けなくなる。

「すみません、通らせてもらいます。」

それは黒服に言ったのか、それとも道を塞ぐ木々に言ったのか。

叶は手にしたオリビンを前に突き出すとゆっくりと歩き出した。

だが黒服は思った。

あんな短剣で群れ成す木々を斬り伏せていくのは不可能だと。

何度か目にした由良の玻璃や良子のラトナラジュでなら分かるがあんな短剣で、あんな女の子がと笑いすら浮かんでいた。

無理だと諦めたところを改めて保護すればいいと思った。

だが、そんな人の考え得る常識を叶は軽く凌駕した。

叶がオリビンを前に一歩歩くごとに木の群れが後退った。

叶が一步を踏み出す度に木は一步下がる。

だが集まった木々はすぐに下がれなくなる。

そうすると今度は横に避け始めた。

その光景はまるで森という名の海を切り裂いて進んでいるかのようだった。

単純な力の強さではない。

もっと大きな力の質の違いを目にしたような気がした。

黒服はその光景に見とれるとともに少女の姿をした何かに畏怖を抱いた。

「何が起こってるのか分からないけど、行かなきゃいけない気がする。待ってて、琴お姉ちゃん。」

優しき姫であるべき叶は琴のために剣を手に取り、戦いの場へと飛び込んでいくのであった。

## 第102話 囚われの太宮院様

ギヤギヤギヤギヤ

ものすごい音を響かせて玻璃とセレスタイト・サルファがぶつかり合う。

振動はセレスタイト・サルファを伝わって葵衣自身を揺さぶり腕の力を削いでいく。

「振動剣による攻撃力の低下、超音振による意識の略奪。クリスタロスは相手の力を奪う能力に長けていますね。」

葵衣はすぐさまつばぜり合いから脱して中距離を維持する。

近づきすぎれば再び剣が迫り、離れると音震波が襲ってくる。

葵衣が戦うには中距離しかなかった。

周囲にデュアルジュエルによって発動したサンスファイアを展開しつつジュエルを正眼で構える。

「バッドステータスを与える魔法使いつてわけか？なるほどな。」

由良は初めて気付いたようにクツと笑う。

初期の”Innocent Vision”はアタツカーの明夜、キャスターの由良、ディフェンダーの蘭に参謀の陸という布陣だった。

それが最盛期にはアタツカーに真奈美、キャスターに八重花、ヒーラーに叶とパーティーとして最適なバランスを誇っていた。

今の”Innocent Vision”は真奈美と海のアタツカーと由良・八重花のキャスターが2人ずつと叶のヒーラー1人の攻撃重視型。

「俺たちが攻勢に出たらジュエルを2本装備したくらいでヴァルキリーに止められるか？」

由良が玻璃を天に向けて掲げる。

振動で生み出された波が重なり大きくなっていく。

それは由良を中心とした竜巻となりつつあった。

「止められるかではありません。止めなければならぬのです。」  
短い言葉に思いを凝縮して葵衣もセレストライト・サルファに風を幾重にも纏わせていく。

「吹っ飛べ、激震波！」

「デュアルグラマリー・サンブラスト。」

暴風に対して風と日の剣が真っ向から衝突し周囲を薙ぎ払う衝撃波を生み出した。

「くっ、暴れすぎよ、由良。」

八重花は左腕で飛んでくる砂埃を防ぎながら顔をしかめる。

由良たちの戦いの余波が近くにいた八重花にも襲ってきたのだ。

「隙あり！式！」

八重花が視線を逸らしたタイミングで緑里が式を放つが暴風に煽られて飛んでいってしまった。

「ああっ!?!」

「紙の式をこの状況で使うなんてダメね。ここは物質ではない光刃が正解よ。」

八重花がジオードを大上段に構える。

燃える炎が風を受けて瞬く間に大きくなっていく。

風は火を消すこともあるが上手く使えば火を炎にまで猛り上がらせもする。

緑里の周囲にはすでに多くの木々が灰になって虚空を風に乗って舞っており地に足をつけている木はまばらだった。

「木をまるごと飲み込む炎の津波、防ぎきれるかしら？」

「え、あれ、なんで木が逃げてんの？」

八重花の本気に種の存亡の危機を感じたのか木は緑里を守るどころか道を開けた。

木の防御を当てにしていた緑里は周囲を見回すが木は視線をそらす

ように幹を捻っている。

ジオードが生み出す炎が剣に巻き付いて荒れ狂う。

気流の乱れで髪をためかせながら八重花は笑う。

「グラマリー・アーデントレット！」

「わあー！」

赤き情熱の炎が大爆発を引き起こした。

ドーン

「何事です！？」

「炎…東條八重花ね。」

ギリと歯を剥き出しにして奇立ちを露にする美保はその目を目の前の木に向けた。

「こつちはこつちでウザりたいし。さつさと殺されなさいよ。」

すでに迎合ではなく殺す気満々だが撫子は訂正しない。  
戦って改めて”Innocent Vision”が御しがたい力を持つ組織だと分かってしまったからだ。

撫子はルビヌスを纏うアヴェンチュリン・クォーザイトを握りしめると木の下まで移動し

「はっ！」

幹をおもいつきり叩いた。

ドオン

局所的に直下型地震を受けたように激しく揺れる木から真奈美がコロんと落ちてきた。

「カブトムシの取り方みたいですね。覚悟！」

「覚悟しないよ。」

真奈美は落つこちてきた割には冷静に美保の斬撃を避けて飛び退く。

「木の上に潜んでも今のように落としてあげましょう。まだかくれんぼを続けますか？」



真奈美が撫子1人を標的にしていたように、撫子は攻撃を美保に任せて自身は真奈美の動きを封じることにしたのだ。

攻撃する対象に攻撃を妨害されては美保への対応が難しくなる。

「ふう、さすがに1人だと厳しいかな。」

そう呟きながらも真奈美の瞳に弱気は宿っていない。

追い詰めたはずの相手がまだ余裕を見せていることに撫子は警戒し、美保は憤る。

「さっさと諦めてやられなさいよ！」

美保がレイズハートを放つたのと同時に真奈美は地面ギリギリを滑るように駆けてレイズハートの下を潜り抜けた。

そのまま美保に迫るが

「それで避けたつもり？甘いわよ！」

美保がスマラグド・ベリロスを大きく振り回すとまっすぐ飛んでいったレイズハートは縦に旋回し真奈美の背中に向かう進路を取った。

真奈美が攻撃を仕掛けるよりも先にレイズハートが到達する。

「喰らいなさい！」

グンツ

美保の視線の先にいた真奈美がさらに体勢を低くし、地面に手をついた。

「今さら止まったって…！」

「止まらない、よ！」

掛け声と共にスピネルが光を放ち、倒立する要領でレイズハートを切り裂いた。

「は!？」

美保の目の前にはスカートが盛大に捲れてスパッツが見えているだけ。

その上から迫っていた翠の光は礫となって消え去った。

「まだです、美保さん！」

撫子の声にはつと意識を戻す。

真奈美の光も勢いも衰えてはいない。

倒れ込む勢いに腕での反動を足した光の斬撃が放たれる。

「ガンマスピナー！」

「ぐう！」

咄嗟にスマラグド・ベリロスで防御したが魔剣の身体能力強化が弱まって押し返せない。

「美保さん！」

撫子は無防備な真奈美の胴体にアヴェンチュリン・クォーザイトを振り降ろした。

「おおお！」

「うわあ！」

だが真奈美はハンドスプリングのように腕の力で上体を浮かせるであろうことかスピネルを支点に体を跳ね上げた。

美保を蹴り落とす踏み台にして撫子の一撃をかわす。

「避けたというのですか!？」

撫子は避けたことを驚いているが、本当に驚くべきはここから。何故なら、真奈美の攻撃はまだ終わっていない。

上体を跳ねあげた反動で真奈美は風車のようにくるくると回る。スピネルの光が増し回転する光の輪を生み出した。

「!美保さん、まだ来ます！」

撫子が防御し、蹴り倒れていた美保が慌てて横に転がった直後

「デルタスピナー！」

三日月状の斬撃が発生した。

「ぐうっ、ああ！」

錫杖で受け止めた撫子は防御の姿勢のまま近くの木に背中をぶつけるまで弾き飛ばされ、美保が避けたギリギリのところまで地面に斬撃の傷痕が残された。

ビリビリと痺れるように痛む手でジュエルを手にする撫子の側に美保が慌てて駆け寄って2人して真奈美を睨む。

着地してしゃがんでいた真奈美はゆっくりと立ち上がり右手で汗を拭った。

ヴァルキリー2人に恐怖を植え付けた相手は一勝負した後みたいな爽やかさだった。

「やっぱりあたしはこういう戦い方が合ってるみたいだね。だったらかくれんぼは終わりでいいかな？」

「花鳳先輩？」

「…早まったかもしれませんね。」

ようやく真奈美を木の上から引きずり落としたはいいが早速後悔し始めていた撫子たちであった。

「あちこちで戦ってる。今のうちに琴お姉ちゃんを助けよう。」

叶は別荘に向かって急いでいた。

さつき良子みたいな彫像の前を通りすぎたがあれがなんだったのかは分からない。

森を逃走中に叶を見つけて駆け寄ったが例のごとくダイヤモンドで停止させられていたなどと叶が知るわけもない。

ちなみに駆け寄った理由が海から助けてほしいという情けない理由だということももちろん知らない。

「ヴァルキリーの別荘だからそれぞれの像があるのかも。お金持ちだもんね。」

間違った金持ち観で納得しつつ森を進んでいくと明かりのついた建物が見えてきた。

「あれかな？」

叶は一応周囲を見回して誰もいないことを確認しながら堂々と正面玄関に立つ。

コンコン

「誰もいない…ですよね？」

しかもノックまでしてドアを開ける。

これで返事があったらどうするつもりだったのか、幸い返事はなか

ったので中に入った。

慌てて飛び出したためヴァルキリーメンバーの飲みかけのお茶の力ツプがテーブルの上に置いてある。

「琴お姉ちゃん、どこですか？」

どこに人が潜んでいるかもしれないので小さめに呼び掛けるがそれでは当然琴にも聞こえない。

それほど広くない建物なので広間の他は奥に寝室に当たる数室があるだけのようだった。

「…あ…」

その奥の部屋から微かに声が聞こえてきた。

「琴お姉ちゃん？」

返事をしてくれたのかと呼び掛けるが返事はない。

だが耳を澄ませると話し声のようなものが聞こえた気がした。

「こつち？」

違う人の可能性もあったが叶は奥へ足を伸ばす。

近づくことにはつきりと聞こえてきたがドアが閉じているせいでくぐもってはいはつきりとは聞こえない。

「もうだめ、です…」

部屋の前に到着するとはつきりと琴の声が聞こえた。

追い詰められた声に琴が限界に近いのだと知った叶は慌ててドアに手をかけた。

「琴お姉ちゃん！」

バンツ

勢いよくドアを開けた先には

「え？」

天井から吊るされたまま巫女装束を着崩した琴と

「あら？」

その琴を後ろから抱きすくめて顔を寄せている悠莉がいた。

「はわあ……」

叶はそこにヴァルキリーの悠莉がいることなど完全にブツ飛んでいて顔を真っ赤にしたまま慌てて顔を手で覆った。

指の隙間から見ても琴は頬が上気していて色っぽく、悠莉は女王様みたいに嗜虐的な笑みを浮かべている。

それはどう見ても同性愛者のそれだった。

「叶さ……」

「琴お姉ちゃん……。お幸せに。」

パタン

叶はペコリと頭を下げるとドアを閉めた。

歪んでいるとは思っけど愛し合う2人を邪魔することなど叶には出来ない。

「あー！待ってください、叶さーん！」

なんだか本気で泣きそうな声で呼んでいる気がするが今さらピンク色をしていそうな部屋に入る気は起こらなかった。

叶はドアに背を預けたまま胸に手を当てて気を落ち着けていた。

ガチャ

すると部屋の中からドアが開いて悠莉が出てきた。

「わっ！」

ようやくヴァルキリーを前にしているのだと思いつて身を引き締めるが悠莉は穏やかな笑みを浮かべたまままだ。

だが敵だと分かっけていても聞かなければならなかった。

「あの、琴お姉ちゃんはいいんですか？」

悠莉はキョトンとしたあとクスクスと笑った。

「助けに来た作倉叶さんがそれを言っけては太宮院琴さんが泣いてしまえますよ？」

「は、はあ。」

叶はよく分かっけていないので悠莉はまたおかしそうにしていた。

ある意味盛大に精神的なトドメとなって今ならば琴を簡単に陥落さ

せられそうだったがさすがにそのまでアンフェアにもなれないらしい。

「そうですね。あなたがそうだからこそ……。ふふ、お迎えに来られたようですがヴァルキリーの一員として未来視を持つ太宮院琴さんを連れ戻されるわけにはいきません。」

悠莉の左目が朱色に輝き、その手にサファイロス・アルミナが現れる。

「来て、オリビン！」

叶もすぐにオリビンを顕現させ右目が青く輝きを放つ。

薄暗い廊下で朱色と青色の瞳が見つめ合う。

「花鳳様の別荘を壊すわけにもいきません。外に出ましようか。」

「はい。」

琴を心配しながらも叶は頷いた。

悠莉は先んじて外に向かつて歩き背後からの攻撃をする意志がないことを示す。

「ここでいいですか？」

「はい。あんまり琴お姉ちゃんから離れるのも心配ですから。」

別荘の前に出た2人は距離を置いて対峙した。

まだ森のあちこちから戦闘の生み出す音が響いている。

「あまり戦闘向きではない私たちの戦いとは、面白いですね。」

片や回復能力を持つシンボル、片や障壁を作り上げる防御型のジユエル。

デュアルジユエルとして式を持っているがこちらもコランダムの補助に用いているので緑里のような攻撃用ではない。

武器で殴り合うタイプではないのでどのように戦うかどちらも判断できなかった。

「私が勝つたら琴お姉ちゃんは返してもらいます。」

「それは構いませんが、ここから助け出しても森にいるヴァルキリーの妨害は止められませんか？」

悠莉はさりげなく言葉で相手を追い詰める術を持つ。

戦いがここで終わりではないと知ればどうしても力を温存するようになり、結果として悠莉と戦う力は弱まる。

ほぼ無意識の行動を誘導する悠莉の話術だった。

叶の体が緊張したのが分かる。

叶は表情の変化も素直なので分かりやすいが相手のわずかな変化から相手の感情を読み取る技術も悠莉は持っていた。

恐怖を悟られまいとしている相手にその恐怖心を指摘した時に見せる驚愕や絶望を見たいがために会得した一種の読心術だ。

実に歪んだ乙女である。

「……」

叶は悠莉から目を逸らさないながらも戸惑いが見て取れた。

ゴウツ

ドーン

遠くで竜巻が発生して木々を舞い上げ、炎が大爆発した。

かなり遠いというのに折れた太い枝が叶のすぐ近くに落ちてきた。

悠莉ですらヒヤリとする落下物に対して

(笑っている?)

叶は怯えではなく笑みを見せていた。

怯えを越えた壊れた笑みではない。

悠莉はその感情の変化を知らない。

叶は落ちてきた木に手を触れるとまっすぐに悠莉を見た。

そこに緊張や怯えはない。

「 Innocent Vision」のみんなが抑えてくれます。

だから私は下沢さんに絶対に勝って琴お姉ちゃんを助けます。」

戦闘向きでない叶は強い決意を示してオリビンを構えた。

## 第103話 聖なる光

叶は右手に握ったオリビンを逆手に握ってわずかに腰を落とした。悠莉は太股にくくりつけてあるショートベルルに手を触れて2つの青い宝石を待機させると片手を刀身に添えてサフェイロス・アルミナを構えた。

「デュアルグラマリー・コランダム・コア。」

コランダムの宝石が悠莉の指示を受けて叶に向かって飛び出した。弾丸のように飛来するコアを叶は体捌きだけでかわした。

身体強化はされていないはずなので避けたのは叶の動体視力の賜物と言える。

「すう…。」

叶は呼吸を整えて構えを取り直す。

叶は後の先、あるいは完全に防御することで相手を疲弊させる戦法を得意とするため接近してこない相手は苦手であった。

「よく避けました…と言いたいところですがまだですよ？」

「!?!」

叶が半身で振り返って後ろに目を向けるとコアは悠莉を含めて三角形の頂点を形成するように滞空していた。

「これで封じさせてもらいます。コランダム…」

3枚の巨大な障壁で動きを封じるコランダムを発動しようとした悠莉だったが

「えーい！」

それよりも早く叶が迷いなくオリビンをコアの1つに投げつけた。スピネルより強力な魔剣優位性を持つシンボル・オリビンはコアに触れた瞬間にその存在を打ち砕いた。

起点の1つを失ったことで障壁は生成せず、叶はすぐにオリビンを拾い上げて距離を取る。

流れるような一連の脱出劇を悠莉は当事者だというのに観客のよう



に見つめてしまっていた。

「お見事です。まさかここまで簡単にコランダムを破られるとは思いませんでした。」

思わず拍手してしまうほどだが、悠莉が太股に手を持っていくとまた別のコアが空中に出現した。

「オリビンが教えてくれました。」

それが謙遜か本当かはシンボルを持たない者たちには分からず、ただ面倒な能力があると認識するしかない。

「仕切り直しですか。しかし、このまま続けても同じ攻防の繰り返しで体力勝負になりそうですね。」

叶はまず自分からは攻撃しない。

そして悠莉もコアを使つての拘束が攻撃の主体となる。

攻撃をしてくる相手ならコランダムの破砕によるダメージも与えられるが叶では望めない。

「そうですね。止めてくれますか？」

「そういうわけにもいきませんよ。ですから……」

悠莉がサフェイロス・アルミナを掲げると刀身に刻まれた紋様が青い光を放ちコアの前に盾のような障壁を作り出した。

「コア、体当たりです。」

「ええっ!？」

まさかのコランダムによる肉弾戦。

叶は動きとオリビンでの受け流しで攻撃をかわすがすぐに旋回して戻ってくる。

「えい！」

タイミングを見極めてコアをオリビンで攻撃するとヒビが入るが

「ブレイク。」

消滅間際にコランダム・コアと障壁が爆砕した。

「きゃあ！」

至近距離での破裂で葉を小片がつぶてのように襲い掛かる。

一つ一つは大した威力ではないがダメージには違いなかった。

避けても延々と追い掛けてきて、攻撃すると至近距離で爆発する。回避でも攻撃でも叶の体力は削られていく。

「この攻撃は他の皆さんですと威力が小さすぎて有効ではないのですが、作倉叶さんには有効のようですね。」

ソーサリスやジュエルなら身体能力が強化されているため防御力も向上しているが、セイントである叶は生身なので石を投げつけられたような攻撃でも痛い。

「うう。い、癒しの光。」

叶はコアの突撃を避けた瞬間に癒しの光を放った。

傷と体力が回復していく。

一瞬光を浴びたコアが止まったように見えたがすぐにまた旋回してきた。

回復した叶はそれをかわしていく。

「…そうでした。オリビンの本質は回復能力でしたね。」  
威力が低いということは回復が容易だということ。

悠莉は本当に体力勝負になると覚悟した。

だが叶はコアを避けながら別の事を考えていた。

（さつき癒しの光であるコアが止まった。もしかしたら止められるかもしれない。）

叶は接近してくるコアを見据え

「癒しの光。」

再び癒しの光を発動した。

回復を実感しながらコアを見ると確かに空中で動きを止めていた。

「やった。」

だが光が弱まっていくと震えるように動き出した飛んできた。

（やっぱりダメ。）

ヒュンヒュンと飛んでくるコアを避けながら叶は考える。

（前にオーも癒しの光で止まったけどやっぱり一瞬だけだった。きつと癒しのオマケなんだ。）

真奈美のスピネルを見れば分かるように光には魔を払う力があるが、

癒しの光の場合、力の大半は癒しに回されている。

「うっ！」

考え事をしながら避け続けられるほど叶は器用ではないのでコアが顔の横スレスレを横切った。

「さすがに動きの精度は落ちてきたようですね。ふふふ、頑張ってくださいね。」

悠莉は少しずつ弱っていく獲物を観察するつもりらしかった。

叶にはそれが好都合だった。

頭の中、胸の内であやふやな形をしている力をもう少しで導けそうな予感がしていた。

（癒したいんじゃない。私は…）

叶は考える。

壊したいとは少し違う。

海みたいにすべてを消したいわけじゃない。

叶がしたいこと、それは

（守りたい。自分を、琴お姉ちゃんを、みんなを！）

キイン

オリビンが眩い輝きを放つ。

「何ですか、この光は？」

それは優しい癒しの光とは違う力強い輝き。

叶は前方から迫る2つのコアにオリビンを向けて頭に浮かんだその名を叫んだ。

「聖なる光！」

オリビンから発した光は周囲一帯を目を開けていられないほどの輝きで埋め尽くした。

「攻撃…では無いようですね。」

ようやく弱まってきた光に悠莉が目を開いていくと地面に効力が切れたコランダム・コアが転がっていた。

そのままコアは端から光となって消えていく。

「グラマリーの無効化能力。」

おそらくこの光が完全に消えるまでは一切のグラマリーを使用できないだろうと判断して別荘に向かう。

戦場に叶がない理由など一つしかない。

バンとドアを開けると予想通り琴を捕らえていたロープは切られて部屋はもぬけの殻だった。

「意外と度胸がお有りですね。あの状況で迷わず逃げるなんて。」悠莉は瞳を閉じて意識を集中する。

聖なる光はもう完全に消失しているようだった。

コランダムコアを生み出し、開いたドアから外へと放つ。

「まだ逃がしませんよ。コア最大有効範囲へ移動。グラマリー、コランダム・レギオン。」

コランダム・ウォールをさらに巨大な領域で発生させるデュアルジユエルを用いた悠莉の最大のグラマリー。

一辺1キロにも及ぶ魔の大三角形に入ったものを逃がさない。

どこに誰がいてなにがあるかも手に取るように分かる。

だから

「いました。…これは！」

見つけた葉の反応がさつきよりも強い力を秘めていることに気が付いて驚愕の声を上げた。

（さきほどの一撃は試し撃ち。真の威力はさらに上だと言うのですか？）

葉のいる地点から凄まじい速度でコランダムが解除されていき

ビキィ

聖なる光は蘭の生み出したイマジンショータイムすらも打ち砕いた。

その瞬間、別荘を中心とした森一帯が一斉に光に包まれた。

そこに存在した炎を、風を、聖なるものではない光を、すべての魔の力を打ち消す。

それは魔の力から全てを守るように。

「この光は…叶？」

唯一聖剣に類する真奈美のスピネルだけは力を失わなかったがそれ以外の全てのグラマリーが消滅し、空にかかっていたオーロラ、地を徘徊していた木々が元の姿に戻っていく。

「入り口にいたはずの叶の力が森の中から？行ってみよう！」

真奈美は顔を覆って身を固めている撫子と美保の間を抜けるように光の発生地帯へと向かった。

「待ちなさいよ！」

美保がその背中にレイズハートを叩き込もうとしたが

「何で出ないのよ!？」

翠の光は出なかった。

美保が叫んでいる間に真奈美は森の奥に消えていた。

「ジオードが落ちた。あの光は叶ね。」

「カナのやつ、とんでもない力を使えるようになったな。」

グラマリーが一気に消え去ったため戦いは膠着状態で由良たちは海原姉妹と睨み合っていた。

力が戻ったらすぐにも戦いを再開しそうな闘志を見せている。

「…叶が太宮院の巫女さんを助けたのならここに長居する必要はないわよね？」

八重花が真実にたどり着いた。

八重花たちは誰かが琴を助け出せば目的は達せられる。

それが叶というのは予想外だったが終わったのなら戦う理由はない。

「太宮院様もお2人も逃がすわけには参りません。」

だがヴァルキリーには戦う理由がある。

琴の再確保やソーサリス達の迎合をするためには勝たなければなら  
ない。

葵衣はセレスタイト・サルファアでの攻撃を諦めて拳での戦いを挑ん  
だ。

武術百般の葵衣なら2人を抑え込むのも造作のない行為。

特にグラマリーのない今の八重花たちはただの少女である。

だがこれは武術ではなく戦い。

八重花は向かってくる葵衣にポケットから取り出したものを投げつ  
けた。

咄嗟に葵衣は払い落とそうと手刀を振るった。

だが葵衣の手で叩かれた瞬間、それは赤い粉塵を撒き散らした。

「ゲホ、ゲホッ！唐辛子、爆弾ですか！」

唐辛子の主成分カプサイシンは目や呼吸器に入ると痛みを伴う刺激  
を与える。

八重花はカプサイシンの粉末が入った煙玉を投げたのだ。

「目が痛い！喉が痛い！」

「こら、ヤエ、てめえ！」

約1名味方も被害を受けたようだったがその隙に八重花は由良の手  
を引いて戦線を離脱していった。

光が弱まっていく中で叶と琴は森の中を走っていた。

聖なる光の副次効果で明るくなっているので走るのは楽だった。

「琴お姉ちゃん、大丈夫ですか？」

「ええ、叶さんが助けに来てくれただけで元気になりました。」

実は別荘の前で癒しの光を使ったときに中にいた琴も回復していたのだが叶に会えたから回復したという演出のため秘密にした。

「それと、決して！まったく！全然！下沢悠莉さんとは関係も持っていないですよ。理解していただけましたか？」

「は、はい。…。」

口でははいと言っているが頭の中にはあの時見た禁断の関係の図が背後に薔薇とか百合とかを配置して美化度120%で浮かび上がっていた。

もちろん詳しくはないがあの光景を見る限り間違いなく悠莉が攻めで琴が受けた。

叶の内心がまったく信じていないことに気付いた琴は涙を流しながら手を握る。

「本当に、ホントーに違いますからね、ね？」

「わかりました。琴お姉ちゃんを信じます。」

本気で泣きついてきたので頭を撫でながら理解したことにしたが

(やっぱりあれは…)

信じきれていなかった。

「叶！やっぱり叶が助けたんだ。」

「あ、真奈美ちゃん！」

真奈美が駆け寄ると叶はパツと表情を明るくした。

琴は密かにやっぱりさっきの事でちよつと距離を置かれたんじゃ？と思ったが尋ねて肯定されると立ち直れなくなりそうだったのでやめた。

「皆揃ってる？」

「あー、まだ目が痛え。」

そこに八重花と目を細めて怖さ2割増しの由良もやって来る。

由良を見た叶がビビって小さく悲鳴を上げた。

別に示し合わせたわけでもないのに上手く合流できる辺りに”Innocent Vision”の結束とか運の良さとかが感じられ

る。

やはりセイントがいるだけに神様に愛されているのかもしれない。

「あ、海ちゃんとまだ会ってないよ？」

「あれは大丈夫よ。1人で敵地に放り込んで敵を全滅させて帰ってくるわ。」

「まるで生きた戦略兵器だね。」

真奈美の相づちに叶は納得が行かなそうな顔をしていたが

「まずは太宮院の巫女さんを安全な場所まで連れていくのが最優先よ。それでも帰ってこないようなら迎えに戻ればいいわ。」

「うん。」

八重花の説得に頷いた。

「真奈美は先頭でその後を叶と巫女さん、殿は由良、お願いね。」

「唐辛子がました上に仕事を押し付けやがって。覚えてるよ。」

”Innocent Vision”はヴァルキリーの襲撃を警戒しながら森を進んだが光が消えるまでに襲撃はなく、

「やつほー、上手くいったみたいだね。」

海は森の出口で合流できた。

「私たちが大変な目にあっている間に逃げてるなんていい御身分ね？」

「いや、ちょっと乙女的にお花を摘みに……」

「まあ、何でもいいわ。さっさとずらかるわよ。」

「イエッサー。」

琴を救出した”Innocent Vision”の面々は早足で逃げていった。

別荘の広間に集まったヴァルキリーは体力と気持ち両方の疲れでぐったりしていた。

葵衣と緑里は唐辛子を流すために仲良く一緒のシャワータイムであ



る。

「Innocent Vision」にしてやられました。太宮院さんを逃したのは痛いですね。」

これですますヴァルキリーの弱味を握られたことになる。そのうち本気で社会的に報復されそうな気すらしていた。

悠莉はシャワー前に葵衣が淹れた紅茶を1人だけ暢気に飲んでいる。

「悠莉、あんただって逃がした責任はあるんだから反省しなさいよ。」

「

美保に反省しろと言われて目を見開いた悠莉はコホンと咳払いした。

「問題ありませんよ。少なくとも花鳳様に対する脅迫の音声は消去

しましたしヴァルキリーへの脅迫も行わないと約束を取り付けまし

た。」

寝耳に水の情報に沈黙が訪れ

ガタン

「よ、よかったあ。」

ちょうどシャワーから戻ってきた緑里が安堵で膝崩れになった。

ヴァルキリーの面々も不安要素が減ってほっとした表情になっていた。

た。

「これで余計な心配をせずに事を進められそうですね。今回の作戦も無駄にはならなかったということでしょう。」

撫子のまとめの言葉に全員は大きく頷いて椅子にもたれかかった。

悠莉も同調しながら窓の外に目を向ける。

（太宮院琴さんに叶さん大好きと白状させることができました。弱味を握ったことになるんでしょうか？）

目的と手段が逆な気がしていた悠莉だったがしっかりおいしいネタを確保していた。

（それにしても、あの現象はイマジンショータイム。なぜ蘭様が介入してきたんでしょう？）

そして悠莉にとっては1つの謎が残されたままだった。

## 第104話 ここにいる理由

蘭は壱葉を見渡せる建物の屋上の縁に腰かけていた。

フーフーと火傷したように左手に息を吹き掛けている。

「もう、叶ちゃん、意外と強引なんだから。」

叶の放った聖なる光によって解除された反動で左手に装着していたオブシディアンが弾かれてその時に打ったのである。

それでも蘭は不満げに突き出していた口を笑みに変えて壱葉を見下ろす。

プラプラと足を揺らしながら見る景色はまるで宝石箱のよう。

人の営みによって生み出された光を見つめる蘭の顔は慈愛に満ちていた。

蘭が背もたれにしているフェンスに誰かが寄りかかった。

蘭は表情を変えることも振り返ることもない。

人影がぼそりと呟いた。

「ん？手？全然平気だよ。可愛い後輩の成長が見られてランは嬉しいよ。」

蘭は正面を向いたまま、同じ笑顔のまま。

ヒューと冷たい風が吹き付けて蘭の二房の髪を揺らす。

「撫子ちゃんたちにはもつと頑張ってもらわないとね。やっぱりセイントにジュエリストにソーサリスのいる”Innocent Vision”が相手じゃデュアルジュエル6人でも厳しいみたいだね。今度はジュエルも混ぜてあげようっかな？」

蘭は独り言のように会話する。

まるで遊びの予定を組むように次なる”Innocent Vision”とヴァルキリーの戦いの計画を練っている。

それは実に楽しそうに。

かつて信頼で繋がれた仲間が命をかけて戦う舞台を笑顔で作り上げていく様を他者が見れば異常だと言うだろう。

だが蘭は計画する。

人影がまた何かを呟いた。

蘭の目が細まり笑みの質が冷たく変わる。

「あつちはいいの。君子危うきに近寄らず、だよ。放っておいても勝手に動くもん。とりあえずは今回の事件の解決編をやりに行つてくるよ。」

今の会話で人影は理解したらしく蘭の背後にあつた気配が消えた。振り返つてもやはりそこには誰もいなかった。

蘭は立ち上がりピヨンと柵に飛び乗る。

平行棒の上に立つように両手を広げてバランスを取りながら歩き出した。

「一歩一歩が危うい道行き、それを”Innocent Visio n”の未来に見立てて口の端を曲げる。」

「さあ、奈落に墜ちずに最後まで歩けるかな？」

まるで予言のような蘭の言葉は秋の夜風に流れて消えていった。

琴は叶たちに送られて太宮神社に帰ってきた。

ICレコーダーは悠莉に取られてしまったまま置いてきてしまったが状況は概ね最善と言えるほどで誘拐劇は終わりを迎えた。

すでに深夜に差し掛かるうという時間なので叶や真奈美、八重花は大慌てで帰っていった。

きつと今頃遅くなったことを親に怒られているだろう。

独り暮らしの由良や私生活が不明な海はのんびりと帰っていったが琴は皆が帰るまで何度も頭を下げた。

いくら感謝しても足りない。

あのまま助けが来なければ悠莉の攻め苦に耐えきれず協力を約束していたことだろう。

口約束だから適当な占いをするという方法もあるが、ジュエルの力

で従わされた可能性もあるため叶たちが助けに来てくれて本当によかったと心から思っている。

「何時の世も不老不死や未来視の力を持つ者は狙われる宿命にあるということでしょうか？」

琴は決して未来視が良いものだとは思っていない。

代々引き継がれてきた”太宮様”を嫌悪こそしないもののこの力を疎ましく思うこともあった。

（誰かのためには使えない未来視。本当に陸さんは妬ましいですね。）

大局の流れを見極める”太宮様”の卜占と自らの望む未来を見るこ  
とが出来る Innocent Vision では有用性に大きな差がある。

”太宮様”の力は特定の誰かではなく世界を導くための標でしかない。

「ヴァルキリーもト占が陸さんの Innocent Vision とは根本的に違うものだ和理解してくだされば良いのですが。」

都合3日留守にしまった神社だが特に騒動になつた形跡もない  
もともと人がそれほど参拝にやってこないいで社務所が開いてい  
なくても問題なかった。

「……。」  
それでいいのかと自問しつつ居間に向かうと何故か明かりがついて  
いてテレビの音が聞こえてきた。

両親が戻るといふ連絡は受けていない。

嫌な予感がして慌てて居間の襖を開けると

「あ、琴ちゃんおかえりー。」

テレビを見ながら煎餅を頬張り、自分で淹れたお茶を飲む蘭の姿が  
あった。

その姿はちょうど先日の焼き回しのようだった。

琴は失態を繰り返すまいと後ろを振り返って周囲を警戒した。だがいくら待っても人が乗り込んでくる様子はない。

「今日は撫子ちゃんたちはいないよ。さすがに捕まえた次の日に逃げられてその日にまた捕まえに来る元気はないと思うよ？」

それが本当だという保証はないが

（目の前の方と違いヴァルキリーの長はそこまで破天荒ではありませんから大丈夫でしょう。）

蘭ではなく撫子の人柄を基準に納得した。

「むー、なんかランを馬鹿にした？」

「そんなことはありません。」

一言も口に出してないのに馬鹿にされたことを気付く蘭もそうだが、息を吐くように嘘をついて誤魔化せる琴もいろいろおかしい。

自分の家なのにいつまでも立っているのも決まりが悪いので琴は腰を下ろすとお茶葉を入れ換えて自分の分を淹れ始めた。

「あ、琴ちゃん。ランにもお願い。」

「ご自分で淹れたのではないですか？」

現に蘭の前には先日用意した湯飲みがありまだ湯気を立てていた。

あの時から残っていて熱いわけがないので蘭が自分で淹れたはずだ。

「だって蘭が淹れたお茶苦いんだもん。」

ベーツと舌を出して苦そうな顔をする蘭を見てため息をついた琴はやっぱり自分の分しか淹れない。

「もつたいないので飲み終わったら淹れてあげます。」

「えー！？琴ちゃん酷い！」

ガンとシヨックを受けた蘭は湯飲みをじっと見るがそれだけではお茶は減らない。

お子様舌には苦いのかもしれないが物を無駄にしてはいけないという教えが染み付いている琴は甘やかさない。

「…ふう、酷いのはどちらですか？」

「琴ちゃん。」

即答されて琴の額に青筋が浮かぶ。

「わたくしを謀りヴァルキリーの誘拐を助長した…いえ、ヴァルキリーを唆して誘拐させた犯人は酷くないと？」

捕まっただけで考えだしたのはなぜヴァルキリーが押し入りという強引な手段を講じてきたのかということだった。

美保や良子はともかく撫子は理想を元にして行動を決める理詰めの人間。

さらに花鳳の者であるため行動にエレガントさを求めたりもする。そうなるにあの誘拐劇は撫子が組んだものではない。

撫子を誘導できる人物、そして別荘で展開した幻覚の空間を作り出せる人物となれば1人しかいない。

琴が鋭い視線でじつと睨んでいると蘭はキョトンとしていた。

(間違いないはずです。)

蘭の反応に冤罪の不安が頭をよぎるが自分の考えを信じて視線を逸らさずにいた。

蘭は視線をそらして俯き、肩を震わせた。

「…ふっふっふ、バレてしまったか。」

蘭は湯飲みをずずいと琴の方に押し退けて姿勢を正した。

それでもいんな意味で小さい蘭は座高も低いので正座した琴から見下ろされる形になっており威厳が足りない。

蘭は別の意味で肩を震わせると無言で立ち上がった。

「…ふっふっふ、バレて…」

「そこはもういいです。」

クスリとも笑わない琴の冷たい反応にべそをかいた蘭だったが、ぐしぐしと目元を拭って胸の前で両拳をグッと握りしめた。

「蘭は強い子元気な子。」

何故か自己暗示までかけてから強気な表情で改めて琴を見下ろした。「そう。蘭がすべての黒幕だよ。蘭の忠告を無視した琴ちゃんにお仕置きをして、上手く行けばヴァルキリーに匿わすようって計画だったのに…撫子ちゃんたち不甲斐ないぞー！」

自分が犯人だと自白しつつも作戦の失敗を部下のせいにする悪の組

織のダメ幹部の図。

だが琴は後半聞いてない。

「…ええ、それはもうお仕置きでしたよ。かつてないほどの辱しめを受けましたよ。あれが出回ったらわたくしは恥ずかしさで死ぬますよ。」

俯いて壊れた笑いを口から漏らし始めた琴の様子の変化にはさすがの蘭も慌ててオロオロした。

「え！？ええと、大丈夫だよ。」

「江戸川さん…」

「琴ちゃんが叶ちゃんが大好きで、コスプレさせて際どい写真を取るのが最近の密かな趣味だったことくらいしか蘭は知らないから。」  
チーン

琴が畳みに突っ伏して真っ白けになっていた。

蘭としては本気で慰めようとしていたのだが見事に逆効果…というかトドメだった。

「わたくしの人生は終わりました。江戸川さんに知られたとなれば地球の裏側まで知れ渡っていることでしょう。…もうだめぽ。」

いろんな意味で駄目になった琴の失礼な発言に蘭は腰に手を当てて頬を膨らませた。

「むう、ホントーに失礼だな。りっくんから人の秘密はきつちりと覚えておいていざというときの交渉材料に使うものだって教えてもらったから言わないよ。」

琴は言わないという言葉を頼りに廃人から復活した。

たった数分でカラカラになった喉を潤すために目の前にあった湯飲みからお茶を飲み

「苦っ！」

乙女にあるまじき感じでブーツと盛大に吹き出した。

蘭も同じような反応をしたのか浮かんでいるのは同類を憐れむような苦笑いだ。

「ねー、だから苦いって言ったでしょ？」

さすがにお茶の渋味とは別物の苦味に達した飲み物を飲むのも飲ませるのも無理だと判断した琴はお茶を捨ててくると新しく淹れ直して蘭の前に置いた。

「わーい、ありがとう琴ちゃん。」

自分もさつき淹れたお茶を飲んで一息つく。

「捕まっていたときより疲れます。そもそも陸さんも大概いい性格してますね。」

陸が人の中で生活していくために身に付けた処世術の1つだが内容は一歩間違えなくてもほとんど脅迫だ。

今回はその教えのお陰で助かった面はあるが将来的な脅威は去っていない。

「お仕置きはとりあえずおしまい。だけどこんな目にあってもまだ琴ちゃんは”Innocent Vision”に関わり続ける？」突然掛けられた声は今までのおちゃらけたものとも冷酷なものとも違う、どこか悲しげにすら聞こえるものだった。

真意を語らない蘭の気持ちなど知ることが出来ない琴はあくまで質問の内容を考える。

だが答えは決まっていた。

たとえその先にどんな未来が待ち受けていようとも。

「太宮様”の卜占はどちらにしろどこかの誰かが大きく得をするような未来を見られないものです。ならばわたくしがどこに属していようと”太宮様”は中立です。それならわたくしは”Innocent Vision”と、叶さんの友宜を大切にします。」

琴は様々な人に出会い様々な思惑に触れることでようやく理解した。太宮様”は確かに人の輪から外れた場所で世界の趨勢を見守る存在だ。

しかし琴自身がその位置にいる必要はないと、人としての喜びや楽しみを当たり前前に受け止めていいのだと。

「…そっか。」

琴の答えを聞いた蘭は薄く微笑んだ。



それが何故だか泣いているように見えたのだが、やっぱり琴にはそれが何を思っていることなのかわからない。

蘭はお茶を飲み干すと湯飲みを置いて襖に手をかけた。

「琴ちゃんの気持ちが決まったならもう何も言わない。最後まで太宮院琴の人生を謳歌するのがいいよ。」

「…ありがとうございます。」

それは祝福のようであり、決別の言葉のようだった。スツと静かに襖が開かれる。

あれだけ騒がしかった蘭が静かに部屋の外に足を踏み出した。

この戸が閉じれば琴と蘭の道は完全に交わらなくなる、そんな予感がした。

不意に琴は叶と陸の顔を思い出した。

2人とも仲間を大切にし、誰1人として欠けることをよしとしない優しい心の持ち主。

琴はため息とも笑いともわからない吐息を漏らした。

テレビの雑音でほとんど聞こえない襖の閉じる音が聞こえた。閉じかけた戸に背を向けたまま口を開く。

「権謀術中を巡らすためでないのなら、またお茶を飲みに来るくらいは構いませんよ。」

「…！」

蘭の手が止まった。

琴は振り返り驚いた表情を浮かべている蘭に微笑む。

「あなたは陸さんの仲間でご友人。陸さんは叶さんの友人。ならば叶さんの友人であるわたくしとあなたもまた友人であるとは思いませんか？人の輪はこうして広がっていくのでしょうか？」

「あ…」

蘭もまた生まれの特殊さから長らく友と呼べる存在がいなかった。

” Innocent Vision ” に出会うまでは。

使命のために自分を抑制していたよく似た境遇の2人。

写し身の片側から差し伸べられた手に蘭の頬を一筋の涙が伝った。

「琴ちゃんは寂しんぼだね。たまに遊びに来てあげるよ。」  
蘭は涙を流しながら襖を閉める。  
閉じる間際に琴が見たのは笑顔の蘭の姿だった。

## 第105話 決定する流れ

昨晩は夜遊びをこつてりと怒られ、くたくたになってぐっすりと眠った叶は翌日

「ううああ、体が痛い。」

筋肉痛になっていた。

癒しの光で傷や体力は回復したが筋肉痛までは治らなかつたらしく歩き方がぎこちない。

こういう日は大人しく席に座っていようと思いつつ学校に向かう。

「かーなえ！」

バシッ

「~~~~ッ!!」

突然背中を叩かれて声にならない悲鳴を上げた。

叶を一撃で撃沈させた猛者である裕子はプルプルと体を震わせて蹲る叶を見てやつちやっただという顔をした。

「叶、大丈夫？」

「うう、この世界に優しい神様はいないんだ。」

いつだか誰かが言っていた言葉を呟く叶だった。

気を取り直して裕子と一緒に学校へ向かう。

最近は”Innocent Vision”でいろいろあったり裕子も芳賀と一緒にが多かったのであまり一緒に登校する機会はなかった。

「あ、そうだ。クラス委員長からたまたま聞いたんだけどね。」

「副委員長がたまたま聞くのは問題だと思うよ。」

裕子は叶のツッコミを華麗にスルーした。

「もうすぐ文化祭で何やるか決めるんだって。叶は何がしたい？」

「文化祭……」

文化祭の時期は叶にとって複雑な思いがある。

陸は文化祭の前日にアルミナを手に入れた真奈美と戦い左目と共にジユエルを破壊していなくなった。

それを目撃した叶は一時期、陸を本気で憎んだほどだった。

「あー、そういえば真奈美が目をやっちゃったのもその頃だったね。まったく、犯人は捕まってるの？」

叶の表情から考えていることを理解した裕子は叶の代わりとばかりに怒る。

叶は今も眠っている犯人を教えるわけにもいかないから曖昧に首を傾げるだけだ。

「今年は楽しくなるよ。いや、楽しくしないと。」

感傷的な気分になったところを元気づけてくれる親友に感謝しつつ「何がいいかな？」

「水着の女体盛りとか？」

「そんなのやだよ！」

2人は内容を考えながら教室に向かった。

ヴァルキリーは毎朝のようにヴァルハラに集まる。

メールでの連絡は傍受される可能性があることもあるがそれ以上に毎日のように顔を合わせることで結束を高めていた。

たとえば前日に大敗を喫してもメンバーは律儀に集まった。

「あー、無駄に雲一つない青空だとムカつきますよね。」

美保が世界に対して悪態をついた。不機嫌な理由は当然昨晚の”Innocent Vision”による琴奪還である。

不機嫌のとばつちに会いたくない緑里や良子は葵衣のお茶を黙々と飲んでいた。

「空が眩しく感じるの寝不足だからじゃないですか？美保さんの

事ですから” Innocent Vision” にしてやられたのが悔しくて一晩中文句を言っていたんでしょう？」

だというのに悠莉はズバズバと危険言語で切り込んでいく。

「言っただわよ！あんたに電話したけど出なかったのよ！」

「ストレスと寝不足は体によくありませんから。」

「あたしは悠莉のストレスか!？」

美保は一言ごとに白熱し悠莉は普段通り微笑みを浮かべて切り返す。

「美保を爆発させることなく怒らせ続けるなんて悠莉くらいしか出来ないよね。」

「ボクには絶対無理。」

美保の苛立ちを理解できる良子と緑里は悠莉に弄られる美保に同情しながらやっぱりお茶を飲み続けていた。

美保が力尽きるまで続くのかと思われた会話に葵衣が割って入った。

「悠莉様、美保様。よろしいでしょうか？」

「構いませんよ。」

すぐに悠莉は何事もなかったかのように会話を切り上げた。

行き場をなくした美保が頭をガリガリしながらドカツと頬杖をついたのを見て葵衣は頷く。

「お嬢様が今後のヴァルキリーの方針についてお話があると仰っております。」

そう告げると本来は黒板が設置されている場所を隠していたカーテンを開いた。

「え、テレビなんて付いてたっけ？」

そこには黒板と同サイズの大画面薄型液晶テレビが植え付けてあった。

スイッチを入れると画面が揺らぎスーツ姿の撫子が映し出された。

『おはようございます、皆さん。昨晩はお疲れさまでした。』

テレビ会議形式に興味が沸いたのか美保も不機嫌さを和らげた。

ウェブカメラによるリアルタイム映像とはいえ撫子が視線を動かしてもカメラの映像は動かないのだが全員の顔を見るように見回した。

『今後のヴァルキリーの活動ですが、まず第一に各地のジュエルの勢力拡大を目指します。サマーパーティーで失われた以上の戦力を作り上げヴァルキリー全体の戦力を安定させます。皆さんにはまた各地に飛んでいただくことになりますがよろしく願います。』  
サマーパーティーが終わって一月以上の時を置いたのはジュエルたちの心と体を休め再び立ち上がる十分な時間を与えるためだった。一時期は”Innocent Vision”やオーへの恐怖でジュエルクラブを退会した者たちもこの期間に再びジュエルとして帰ってきており戦力の低下は最終的には20%以下だった。

「それよりも”Innocent Vision”と巫女はどうするんです？」

今の美保の関心は使えない部下よりも宿敵にあった。

琴をもう一度誘拐するなら次はもっと上手くやれる自信があるし、協力を誓わせるために痛め付ける役をやるのもいいかと思っている。撫子は画面の向こうから美保を見ると一度目を伏せ、一呼吸置いてから顔を上げた。

『太宮院さんの件ですが、しばらくの間ヴァルキリーは干渉しないことにします。』

撫子の意外な提案に全員が動きを止めた。

「それは未来視の確保を諦めるということですか？」

撫子の発言の意図を汲み取れば悠莉の言うように琴を手に入れるのを断念し未来視を諦めると言っているように聞こえた。

撫子は画面の向こうで首を横に振った。

『未来視を諦めてはいません。しかし太宮院さんの勧誘は後回しにするべきだと考えたのです。』

「と言いますと？」

悠莉の合いの手に撫子は頷いて説明する。

『太宮院さんは”Innocent Vision”と親しい間柄です。今回のように誘拐・監禁のような手段を用いたとしても彼女は協力を承諾してはいただけないでしょうし、”Innocent

V i s i o n”も助けにやって来てしまいます。」

「はい。どのような手段であろうと太宮院様が本当の意味で納得されない限り”Innocent V i s i o n”の妨害は避けられないと考えられます。」

琴が叶を特に親しい友人としており”Innocent V i s i o n”と懇意にしていることは疑う余地はないため葵衣が同意した。たとえ本当に何らかの心変わりがあつて琴がヴァルキリーに協力をすると言つたとしても”Innocent V i s i o n”は動くだろう。

それはヴァルキリーの活動にとつて妨害でしかない。

『ですから順序を変えます。まず”Innocent V i s i o n”の問題を解決した後に太宮院さんを説得します。』

前提条件を考えればひどく単純で合理的な意見だつた。琴が何をしようと”Innocent V i s i o n”が介入してくるなら先に”Innocent V i s i o n”をどうにかしてしまえばいい。

そこで良子が手を挙げる。

「その問題の解決は説得と力づく、どつちなんです？」

『それは…』

撫子は即答を避けた。

あるいは撫子自身その答えをもっていないとも言えた。

「撫子様は説得を諦めてないつてことですか？」

緑里が違つたら申し訳ないとばかりに恐る恐る尋ねると撫子は困つたよふな笑みを浮かべた。

『確かに”Innocent V i s i o n”を引き込むことを諦めたわけではありません。特に作倉叶さんのセイントとしての力。彼女を引き込むことが出来ればヴァルキリーは神の力すら従える存在となります。』

「ただ説得でも脅迫でも今までだつて成功してないんですから上手く行くわけないですよ。」

みんな美保が脅迫じゃない説得をしたことなんかあったかなと疑問を抱いたが藪をつつくほど無粋ではない。

そして美保の意見は撫子も考えていたことだ。

『Innocent Vision』の力は強力です。そしてそれは確実に増してきていると考えられます。ジュエルの力で手につけられない”化け物”に戻ってしまう前に説得するためには武力による鎮圧も辞さない心積もりです。』

ヴァルハラに集うヴァルキリーの全員が撫子の示した決意を受けて気を引き締める。

それはサマーパーティーの再来、”Innocent Vision”対ジュエルの総力戦が再び開かれる可能性を示唆していた。

『わたくしは仕事がありますのでこれで失礼させていただきます。』

「お嬢様、ありがとうございます。」

画面がブラックアウトし葵衣がカーテンを閉めて席に着くと良子が難しい顔をしながら口を開いた。

「Innocent Vision」と戦うのは別に問題ないと思う。でも飯場海は危なすぎる。多分本気になれば1人でジュエルを全滅させられるよ。」

サマーパーティー、そして昨日の戦いで海の恐ろしさを知る良子からの提案はテンションが上がってきた美保や緑里に水を差した。

「よく良子先輩は生きてますね？」

「あつちは遊んでるからね。だから本気になられたら危ないんだよ。」

良子とて一流の魔剣使いだ。

その良子を手放しに危険だという存在、ファブレの使った王者の剣アダマスの担い手。

「しかし現実問題として飯場様を止める手だてはありますか？現在も調査は続けていますがいまだに住所すら不明です。」

「あれ？偽名とはいえインヴィの妹なんだから同じ家じゃないの？」  
確かに海は謎の存在だが素性という意味に限れば明夜や蘭よりもよ



ほどはつきりしている。

調べればすぐに分かりそうなものだが葵衣は否定した。

「ご実家に戻られた様子はありません。そもそも飯場様は本来お亡くなりになっていられるのですから帰っては余計な混乱を招くだけです。帰宅の際に尾行させているのですが気付かれていますようでもいつも見失うと報告を受けています。」

叶の魔を払う光に力を取り戻しつつあるソルシエルとセイバー、さらに海の魔剣、それがヴァルキリーの倒すべき相手。

超えるべき壁は途方もなく高く見える。

悠莉は困ったようにため息を漏らした。

「前途多難ですね。」

「まっただくだね。まあ、文化祭も近いし戦いの時期は慎重に考えた方がいいね。」

良子がそうまとめたところでチャイムがなり朝の集会はお開きとなった。

「かつなえちゃん！」

「きゃあああ！」

叶が教室に入るなりいきなり海が抱きついてきた。

人前で抱きつかれるのも問題だが今日に限って言えば筋肉痛のダメージの問題の方が大きかった。

海が抱きついてスリスリ顔を擦り付ける度に叶はピクピク体を痙攣させ苦悶の喘ぎを漏らす。

「ああん、叶ちゃん、そんなに気持ち良さそうにして。」

「ちが、んっ…は…」

痛みだらうと何だらうと当事者以外からしたらユリユリでエロエロに見えなくもない。

雑談していた男子たちはすっかり黙り込んで観察していた。

「海ちゃ…んっ、止め…」

「はあ、はあ、叶ちゃんの声、いいわあ。歯止め利かなくなりそう。」

いつもと違う叶の反応に海も段々息を荒らげてきた。ただ抱き締めていた腕が撫でるように動き回り、叶がピクリと反応を示す度に海のボルテージが上がっていく。

「あー、もう我慢できない！叶ちゃん、保健室に行…」

「ギャア！」

ハアハアと危ない呼吸を漏らしながら叶を連れ去ろうとした海は脳天直撃の幹竹割りチョップを不意打ちで食らってベチツと床に倒れた。

「やりすぎだよ。」

手刀を振り下ろした真奈美は小さく嘆息するとふらついた叶を支えた。

「真奈美、ちゃん。」

息を荒くしてクテツと体の力を抜いた叶の力のない呟きは

(うわあ、これは確かに可愛いかも。)

と至極ノーマルな真奈美すら揺さぶるほどだった。

「大丈夫だった、叶？」

「うん…ありがとう。」

安心したように微笑んだ叶は真奈美の胸に抱きつくように身を寄せ、真奈美も抱いた片腕で叶の頭を撫でた。

「きゃー、芦屋さん、かつこいい！」

「王子様とお姫様みたい！」

黄色い歓声にぎよっとして振り返ると悶々としていた男子とは対称的に興奮した様子の女子たちが詰め寄ってきていた。

「今年の文化祭は芦屋さんと作倉さんを主役にした演劇にしよう！」話し合いの前から物凄い勢いで決定しつつある出し物に危機感を覚えた真奈美が慌てて口を挟む。

「さすがに女同士の演劇だと脚本とか今からじゃ間に合わないんじゃないかな？」

「あの、大丈夫です。わたし、そういう話の脚本、あります。」

文学部の森本美里が控え目ながらしつかりと答えた。

いったいいつ使う脚本なのか気になったがそれを問い質す前に裕子が教卓の前に立った。

「今年のうちのクラスの出し物は演劇で文句ないかー!？」

「おー!」

こうして半ば勢いで2年4組の出し物は演劇に決定したのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5556o/>

---

Akashic Vision

2011年11月2日11時04分発行